

接続表現とノダの統括機能に基づく文章・談話の展開的構造

—大学学部留学生のための講義の理解と新書の読解—

2014年7月

早稲田大学大学院日本語教育研究科

宮澤 太聡

第1章 本研究の目的と課題.....	3
1.1. 本研究の目的.....	3
1.2. 本研究の課題.....	7
1.3. 本論文の構成.....	9
第2章 先行研究における本研究の位置づけ.....	10
2.1. 日本語教育の初級教科書におけるノダの取り扱い.....	10
2.2. 文法論におけるノダの先行研究の検討.....	21
2.3. 文章・談話論におけるノダの先行研究の検討.....	38
第3章 本研究の対象と方法.....	57
3.1. 分析資料.....	57
3.2. 分析の観点：ノダの統括機能.....	59
第4章 ノダの「統括機能」による新書の文章の「文段」の展開的構造.....	66
4.1. 新書の文章に現れるノダの表現形式と統括機能の関係.....	66
4.2. ノダと接続表現の共起関係から見た文脈展開の特徴.....	92
4.3. ノダと置換可能な文末表現形式ワケダとの文脈展開方法の比較.....	133
4.4. 新書の文章に現れるノダの文脈展開の特徴のまとめ.....	140
第5章 ノダの「統括機能」による講義の談話の「話段」の展開的構造.....	142
5.1. 講義の談話に現れるノダの表現形式と統括機能の関係.....	142
5.2. ノダと接続表現の共起関係から見た文脈展開の特徴.....	178

5.3. 講義の談話に現れるノダの文脈展開の特徴のまとめ	193
第6章 文章と談話における接続表現とノダによる展開的構造の比較	195
6.1. 新書の文章と講義の談話における「ノダ」の表現形式による異同	195
6.2. 接続表現との共起の比較	205
6.3. 新書の文章のノダと講義の談話のノダの相違点	211
第7章 接続表現とノダの統括機能に基づいた新書と講義の理解方法	214
7.1. 目的と課題	214
7.2. ノダの統括機能と文章・談話の理解の関係	215
7.3. 講義 G を用いたノダの統括機能の学習方法	226
第8章 結論と今後の課題	255
8.1. 本研究の構成と各章の概要	255
8.2. 本研究の結論	267
8.3. 本研究の意義と今後の課題	271

第1章 本研究の目的と課題

1.1. 本研究の目的

1.1.1. 本研究の問題設定

「～のだ。」、「～のである。」、「～んだ。」、「～んである。」のように、「の」（話し言葉では「ん」となる）を含む文末と節末の複合辞である「ノダ」（以下、「ノダ」と省略する）については、これまで様々な研究がなされているが、多くはノダの本質や中心的意味を明らかにしようとするものであった。ところが、過度に抽象化された記述が、実際の運用と乖離してしまうことがあり、日本語教育で扱う際には、必ずしも有効だとはいえないという問題がある。

実際のコミュニケーションにおけるノダの機能を明らかにしようとする先行研究に、「つまり、～んです。」「したがって、～んです。」のように、ノダが先行文をまとめるために用いられるという文章・談話レベルでの機能に着目したものがある¹。この分析は、文章・談話の要点がわかるという点で、日本語学習者の読解・聴解教育にも応用可能なものだと考えられる。

しかし、あらゆるノダが、要点を表す文のマーカールとなっていないわけではない。例えば、初級で学習する「私は、野球が好きなんです。今度、一緒に試合を見に行きませんか。」のような、「前置き」のノダは、相手を誘うことが目的で、「野球が好き」であることは、その付属的な情報といえる。「私は、野球が好きです。今度、一緒に試合を見に行きませんか。」のように、ノダがないと、勧誘の「前置き」として理解することが難しくなることから、ノダが付属的な情報のマーカールとなっていることが確認できる。

このように、ある種のノダが重要な情報のマーカールとなり、ある種のノダは付属的な情報のマーカールとなっているという、対照的な2種のマーカールが混在するノダは、そのままでは、文章・談話の理解に応用することはできない。先行研究では十分に検討されていない、文章・談話における大小様々の話題のまとまりを把握するためのマーカールとしてのノダの機能を実証的に研究することは、文章・談話の全体的構造の把握が困難だとされる日本語学習者の読解力や聴解力を向上させる方法の提案につながるのではないかと考えられ

¹ 霜崎（1981）、永野（1986）、奥田（1990）等の先行研究を参照。

る。

1.1.2. 「まとまり」を捉えるための言語形式の指導の必要性

1.1.2.1. 日本語学習者の文章・談話の問題点における課題

本研究が対象とする大学学部留学生は、日本語のレベルがたとえ上級であっても、文章・談話の構造の把握が比較的困難であることが指摘されている。例は、佐久間研究代表者（1997）の大学学部の日本語母語話者と日本語学習者を対象とした要約文調査で用いられた文章である。

(1) 「日本人はそんなに駄目か」

牧野 昇（三菱総合研究所会長）

I ①500字提言を依頼され、一緒に送られてきた見本誌を読んで、これは大変だと見が縮む思いになった。

II ②日本人に対して、何かの教訓をたれるとか、叱りつける内容でないといけないように思ったからだ。③日本人は声が大きいぞとか、新幹線の中のワゴン販売はけしからんとかのお叱りである。④どうも、私のことを言っているように思う a のだ。⑤私は、一人では静か（当たり前だ）だが、大勢になると声高でしゃべる。⑥新幹線の中では、ビールを呑んだり、弁当はまだかなどと生唾をのむ。

III ⑦或るコラムで、何か日本人を叱る文章を書こうと思い、「日本人はブランド志向だ。記者の中でも、ルイビトンの鞆をもった連中が多すぎる」と書いて溜飲を下げたら、その原稿を清書した秘書が「会長、先日ヨーロッパに行った時に、ダンヒルのネクタイを十本買ってきましたね。」⑧ぎゃふんとした経験がある。

IV ⑨いつも不思議に思うことだが、日本人はそんなにダメ人間揃いな b のだろうか。⑩しかし日本経済や社会が安定に動いている c のである。⑪おそらく、お互い同士が叱正し合うという独得の仕組みが、安定化に一つの貢献をしている d のかもしれない。

（佐久間研究代表者 1997：資 2 下線は筆者が付す。）

例(1)の論説文は、佐久間編著（1989:195）などで、すでに構造分析がされており、文①が文②～⑧をまとめ、文⑨が文⑩～⑪をまとめ、最終的に文⑨～⑪が文①～⑧をまとめるということが、様々な言語形態的指標に基づいて分析されている。ここでは、ノダに注目

して、この構造を検討する。例(1)の論説文はノダが4例使用されており、Ⅲ.終了部の第Ⅳ段落にノダが3文連続で用いられているが、すべてが同じ機能ではない。文⑨の「ダメ人間揃いなのだろうか。」のノダは、先行する文①～⑧全体に対して、「しかし」と切り返して、反語的表現の「のだろうか。」によって、文章全体の結論を述べている。文⑩の「しかし」は、反語による「日本人はダメ人間ではない」に対する逆接であるが、先行文に対しては、「～のである。」によって、結論の「根拠」を表している。最後の文⑪も同様である。また、文④の文末述部の「～思うのだ。」も、第1段落の文①「～身が縮む思いになった。」ことの原因を述べている点で、③④のノダと似ている。①の「～のである。」が付された内容は、少々唐突で、「どうして？」という疑問を抱かせるため、後続文⑩にその「原因・理由」を述べることを予測させる機能を担っている。①のノダは、先行文にも後続文にも機能しているという点で、③④のノダとは異なる。例(1)のノダの機能に関しては、第7章で後述するが、日本語学習者の要約文は、日本語母語話者に比べ、例(1)の文章の構造を捉えきれないことがわかる。読解指導において、例えば、改行段落ごとに内容をまとめるといったことが行われるが、そのまとまりがどのように成立しているかについては、意味内容が中心で、形態的な指標を取り上げて論じることは少ないと思われる。また、改行段落を理解の単位とすることが妥当であるかは、①のような段落内部にあって、強いまとまりを表すものもあるため、検討の余地がある。ノダの文章・談話の話題をまとめる機能を理解することによって、ノダを手がかりに、文章の構造を捉えることが可能になると考えられる。

1.1.2.2. 文章と談話の話題のまとまりの「言語形態的指標」としてのノダ

本研究は、「まとまり」にかかわる「言語形態的な指標」として、複合辞のノダを主として扱う。「のだ・のである・のです」等の丁寧・非丁寧の文体差、「のだ・んだ」等の書きことばと話しことばの文体の差、「のではない・のだろうか」など否定や推量の活用、さらに、「のか・のだよ・のだね・のだよね」等の終助詞の付加があり、その表現形式は、多岐に渡る。野田(1997:104-143)は、否定・質問文のノダ(応答文のノダにも言及)を取り上げ、ノダによる平叙文と区別して論じ、田野村(1990:54-89)は、「のか・のだろうか・のではない」と、言語形式から、さらに細かく分類している。

ところが、文末叙述表現ノダについて、これまで、書きことばの「のだ」と話しことば

「んだ」との異同は、詳しく論じられることはなかった²。例えば、野田 (1997:27) は、「話しことばと書きことばの差」として、「んです」と「のです」とを区別しているが、「基本的には同じ機能をもって」いるとし、その異同を特に論じることはない。³(角田 2004:70-71) にも、同様の記述がある。) また、近年の日本語教科書においても、会話教材の用例において、「～んです。」ではなく、「～のです。」を練習するものもある⁴。

このように、書きことば「のだ」と話しことば「んだ」は、文体の差、あるいは、媒体の差として説明されるのみで、その異同については、詳しく触れられることはほとんどないといってよい。しかし、ノダは、「まとまり」の言語形態的指標として見た場合、話しことばと書きことばとでは、その機能にある種の傾向があることがわかる。特に、話しことばにおけるノダには、新たな話題の前提を述べることで、後続文へと話題を展開するという特徴がみられる。

(2) 村上春樹の短編小説についての解説

469 で、まー、それはちょっと長編で、なかなか手がつけられないので、えっと、「納屋を焼く」をちょっと見てみたいと思います。

470 7のところの引用を見ていただきたいんですが。【前提】

471 で、「納屋を焼く」という短編はですね、あの、やはり「ぼく」という語り手兼主人公が出てくるんですが、「ぼく」が、まー、あの、ある、何ですか、カップルと知り合いになってるんですね。【前提】

472 男性と女性なわけです。

473 で、その女の子のほうが、まー、先に「ぼく」の友達だったんだけど、彼氏ができたっていうんで、紹介されるわけなんですね。【前提】

(講義 D1)

文 470 のノダは、新たな話題「納屋を焼く」の解説の開始を予告するという点で「前提」となっている。続く文 471 と文 473 のノダは、「んですね」という形で、添加型の接続表現「で」をともない、「納屋を焼く」の解説の理解のために必要な「前提 (背景説明)」を重

² 後述の野村 (1995,2000) は、談話におけるノダの特徴を明らかにすることで、既存の文章におけるノダの特徴との異同の可能性を示唆している。

³ 角田 (2004:70-71) も、ノダ、ンダの違いが見つかっていないとしている。

⁴ 東京外国語大学 (2009)

ねて提示している。このような話しことばの「んですね」は、書きことば「のですね」を用いても、「前置き」として解釈することはできない。これは、書きことばの「のだ」と話しことばの「んだ」とを同一に扱うことができないことを示した一例であるが、この例からも、ノダがどのような表現形式で、どのような箇所に出現し、どのような形態的指標と共起することで、文章・談話のまとまりにどのように関与するのかを明らかにすることが重要であることが示されている。文末叙述表現ノダは例(2)のように、接続表現や指示表現など、他の言語形態的指標と共起することで、「まとまり」の成立に多様に関与することから、文章・談話における言語形態的指標に基づいた「まとまり」の理解・表現の能力の伸長に適したものとといえる。

ノダは、学習者の習得が困難な文法事項として取り上げられることが多く、学習者の作文におけるノダの誤用を取り扱ったもの（小金丸 1990、Lee 2001）や、対話における発話のノダの誤用を扱ったもの（塚原 1998、近藤 2006、若生 2010）がある。作文、対話においても、ノダの誤用には、「脱落」が多いという傾向があるという。

また、塚原（1998）は、母語（中国語と韓国語）の違いによるノダの使用に関する意識調査を行っており、韓国語母語話者のほうが「ンデス」の使用意識が高いことを明らかにし、ケースの報告⁵ではあるが、韓国語母語話者のノダの使用率が高いことを指摘している。若生（2010）は、韓国人日本語学習者へのインタビューから、ノダの使用がやや過度となっていることを指摘しており、これを「ます」形から「です」形への「丁寧体」の統一の観点から論じている。

このように、ノダは、様々な観点から、学習者の習得が困難な文法事項として取り上げられているが、本研究は、特に、文章・談話論における「まとまり」の成立との関係からノダを論じるものである。

1.2. 本研究の課題

文章・談話を「話題のまとまり」を把握しながら理解するためには、「話題のまとまり」

⁵ 日本語学習歴にばらつきのある韓国語母語話者、中国語母語話者それぞれ5名を対象としている。詳しくは、塚原（1998:72-73）参照。

を形成させる「言語形態的指標」に基づいた分析が不可欠である。そこで、本研究では、文末形式ノダを主な分析対象として、ノダが文章・談話の「まとまり」の成立にどのように関与するのかを明らかにするために、以下の3点の検討課題を設定した。

課題1 「接続表現+ノダ」という言語形態的指標による「話題のまとまり」にはどのようなものがあるか。

文章・談話論において、文と文章の中間にどのような単位を設定するかに関する様々な議論がある（佐久間 1986）。大きくは、改行一字下げを基準としない市川（1978）の「文段」、改行一字下げを絶対的な基準とする永野（1986）の「段落」である。佐久間（1986,2003,2010）は、「文段」における「相対的統括」の概念を提唱して、文章の「文段」、談話の「話段」を統合した「段（文段・話段の総称）」が多重的な統括関係を成していることを指摘している。本研究における「中間的な単位」の概念を規定した上で、ノダの「話題のまとまり」に関わる機能を分析する必要がある。

課題2 「接続表現～ノダ」の文型が、新書の文章における「文段」の多重構造にどのように関わるのか。

大学学部留学生が読解する必要のある学術的専門書の入門となる新書の文章を分析対象として、機能分類別の複合辞のノダが、新書の文章の「文段」にいかに関わるのかを分析する。

課題3 「接続表現+～ノダ」の文型が、講義の談話における「話段」の多重構造にどのように関わるのか。

新書の文章とともに、大学学部留学生が理解する必要のある講義の談話を分析対象として、機能分類別のノダが講義の談話の「話題のまとまり」にいかに関わるのかを分析する。

本研究では、大学学部留学生の新書の文章と講義の談話の展開的構造を把握しながら、理解する方法を提案するために、「話題のまとまり」に関わる種々のノダの機能を「接続表現+ノダ」という形態的指標とともに明らかにする。

1.3. 本論文の構成

本研究は、3部構成である。第1部は序論で第1章から第3章までである。第1章で本研究の目的を挙げ、課題を3点提示し、第2章で先行研究をまとめることで、複合辞のノダを統括機能によって分類することの意義を述べ、第3章で、本研究の分析対象と分析方法を示し、大学学部留学生が触れる機会が多い新書の文章と講義の談話を分析対象とし、それらの話題のまとまりの成立にノダの統括機能がどのように関わるのかを、文章・談話論の「段」を用いて分析する。第2部は本論で第3章から第7章までである。第4章で新書の文章、第5章で講義の談話を対象に、ノダの各種の統括機能を明らかにするためにノダの表現形式の分析と、共起する各種の接続表現の分析を行い、「接続表現+ノダ」の文型（以下、「ノダの文型」と称す）を明らかにする。そして、それらのノダの文型が、新書の文章と講義の談話の「段」の展開的構造を把握するために有効であることを、それぞれの分析資料の「段」の統括にどのように関わっているかを分析することで明らかにする。第6章は、新書の文章と講義の談話におけるノダの文型による統括機能の比較を行い、新書の文章と講義の談話とでは、ノダの統括機能別の出現傾向の比較を行う。第7章は、第4章から第6章まで分析結果を踏まえて、新書の文章と講義の談話を、「段」を把握しながら理解する方法を提案する。第3部は結論で、第8章で、各章の概要を示し、第1章に示した3点の課題に対する結論をまとめ、今後の課題を提示する。以下に、目次を示す。

第1章 本研究の目的と課題

第2章 先行研究における本研究の位置づけ

第3章 本研究の対象と方法

第4章 ノダの「統括機能」による新書の文章の「文段」の文脈展開方法

第5章 ノダの「統括機能」による講義の談話の「話段」の文脈展開方法

第6章 新書の文章と講義の談話における接続表現とノダによる展開的構造の比較

第7章 言語形態的指標に基づいた日本語教育の読解・作文指導の方法

第8章 結論と今後の課題

第2章 先行研究における本研究の位置づけ

本章では、第1節で、日本語教育の初級教科書と指導用参考書等を概観し、ノダがどのように導入されているかを調査し、学習項目としての困難点を探る。

第2節では、狭義の文法論的なノダの先行研究を概観し、特に、文章・談話のまとまりを意識した記述の少なさを指摘する。また、日本語学的な文法論では、すべての表現形式を抽象化し、ノダというものがあるという前提で、その中心的意義を明らかにしようとしており、これは、日本語教育で段階的にさまざまな表現形式に基づいた用法を学んでいくのとは、逆のアプローチともいえる。このノダの抽象化は、学習者にとって、必要な情報なのか、また、過度に抽象化することによって、逆に弊害が生じることはないかという問題にも触れる。

第3節では、文章・談話論におけるノダの先行研究を概観し、主に、ノダの「統括機能」の記述の不備を論じる。ノダが文章・談話レベルで大小さまざまな話題をまとめるというためには、文章・談話の「まとまり」の単位について検討する必要がある。文章・談話のまとまりについて、本研究の立場を明らかにしたうえで、文章論におけるノダの先行研究の検討を行う。

2.1. 日本語教育の初級教科書におけるノダの取り扱い

2.1.1. 初級教科書におけるノダの提示の問題点

初級段階で扱うノダの用法は、大きく次の3種類である⁶。

- ①多くの導入で用いられる「疑問詞+んですか。」と、その応答文「～んです。」
- ②相手の発話（肯・否疑問や勧誘）の応答の後に「理由等を補足」する「～んです。」
- ③行動・情報要求の「前置き」としての「～んですが、」

①の「～んです。」と②の「～んです。」は、基本的に同じ用いられ方だと考えていいので、文法項目としてノダに一括される①～③は、それぞれの表現形式と用法とが一対一対応となっており、学習者にとっても、わかりやすいと思われる。

ところが、応用の会話練習になると、導入された①～③のノダとは異なる表現形式が用いられ、しかも、その新たな表現形式の説明はない。問題なのは、その後の課の学習項目にも「～んですよ。」「～んですね。」や「～んでしょう。」などの新たなノダの表現形式が

⁶『直説法で教える日本語』（2009年刊）は、初級段階で、「～ではありません。」を文型として提示する。

提示されていないことである。その場合は、教科書以外の文法書や参考書を参照しなければならない。このように、初級教科書でのノダは、基本的な用法のみの指導に終始し、新たな文型の習得は、応用練習や実際の会話等で用いられた際に、その都度確認されるというように、十分に整理されていないのが現状である⁷。

現実的なコミュニケーションの面からは、「疑問詞+～んですか。」「～んです。」「～んですが、」以外のノダの表現形式の特徴も捉えていくことが求められるはずである。ここでは、特に、学習する表現形式と実際のコミュニケーション（会話練習）での表現形式との間に乖離があることの問題点を検討する。

2.1.1.1. 「疑問詞+んですか。」とその応答文の導入

『日本語教育ハンドブック』（1990:470）では、ノダは、「説明的・説得的な断定を表す」と定義し、教科書での扱いについて、次のように指摘する。

「どうして…んですか。」「どうしたんですか。」など疑問詞と共に用いる用法は、「のだ」の意味・用法を最も端的に示すものであろう。この文型でまず指導する教科書が多いのうなずける。

近年の『日本語初級②大地』（2009）や、『直説法で教える日本語』（2009）においても、「疑問詞+んですか。」で、ノダが導入されており、上記の記述の流れに大きな変化は見られない。しかし、その解答については、教科書によって、違いが見られる。

教科書は、近年のノダの導入の傾向を押さえることを目的に、『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』『しんにほんごのきそⅡ』『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE Ⅱ』『初級日本語げんき』『日本語初級②大地』『直説法で教える日本語』を採り上げる。

全体的に共通しているのは、(3)のように、「どうして、…んですか？」と「どうしたんですか？」に対しては、「…んです。」で答えるという点である。

(3) どうして 会社を やめるんですか。

……父の 仕事を 手伝うんです。

⁷ 『日本語初級②大地』で、ノダの導入前（「～んですが、」の導入は27課）の23課の練習2-4に、「～んですが。」が、使用されている例がある。

(『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』p.5 下線部は筆者による。以下同様)

このノダは、原因・理由を表すカラダに置換可能⁸なものであり、ノダが必須であるため、学習者の混乱も少ないと思われる。それに対し、他の疑問詞とノダが共起した疑問文に対する応答文は、教科書によって異なる。『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』、『日本語初級②大地』は、(4)のように、例文や練習において、ノダを用いずに応答することを徹底している。

(4) A: いつ国へ帰るんですか。

B: 夏休みです。／夏休みに帰ります。

(『日本語初級②大地』 p.26)

確かに、事実として情報を提示するだけであれば、(4)のBのように応答するだろう。しかし、Bを「夏休みに帰るんです。(以下、「B」と称する。)」に変えても、特に問題は生じない。現に、『初級日本語げんき』、『しんにほんごのきそⅡ』、『JAPANESE FOR BUSY PEOPLEⅡ』、『直説法で教える日本語』は、次のように、「どうして」「なぜ」以外の「疑問詞+んですか。」の応答文にノダを用いて導入している。

(5) 社員 : 大きい荷物ですね。旅行ですか。

ビジー : ええ。(うれしそうな表情で)

社員 : いいですね。どこに行くんですか。(関心をもった表情で)

ビジー : インドに行くんです。(うれしそうな表情で)

(『JAPANESE FOR BUSY PEOPLEⅡ 教師用指導書』 p.101)

おそらく、このように応答文にノダを用いる背景には、日本語の文法規則からは、(5)のように、ノダを用いた表現での応答が「自然」であると考えられるからだと思われる。野田(1997:134-136)は、応答文における「スコープのノダ」について言及している。まず、「スコープのノダ」について、簡単に触れておく。

(6) A「あたし、悲しいから泣いたんじゃないのよ。」

⁸ ノダとカラダの異同については、田野村(1990:36-40)に詳しい。

B*「あかし、悲しくて泣かなかったのよ。」

(野田 1997:32 一部抜粋)

(6)のAとBとでは、意味が異なる。Aであれば、実際に泣いており、その理由が「悲しいから」ではないという意味で、Bは、実際には泣いていないことになる。スコープとは、「の」による名詞化の範囲と解釈することができ、その中にフォーカスを定めることになる。説明を加えると、以下のようになる。

(6a) [悲しいから泣いた] んじゃない

([]は、スコープの範囲を示し、網掛部 は、フォーカスを示す。)

そうすると、(4)の応答文は、「夏休み」がフォーカスであるため、B'のように、ノダを用いるほうが自然だといえる。野田(1997:136)は、応答文では、フォーカスがわかりやすいので、スコープのノダが免除されると指摘しているが、「疑問詞+んですか。」の応答文は、「～んです。」を基本としていることがわかる。このように、文法研究からの演繹的な思考法は、『しんにほんごのきそⅡ』の教師用指導書にも影響を及ぼしている。

『しんにほんごのきそⅡ』は、例文や練習では、応答文にノダを用いることを避けているように思われるが、教師用指導書(p.7)には、以下のような記述がある。

【板書】

どこへ 行く んですか。

どのくらい 勉強した

[普通形]+んです

(板書の解説中略)

このあと、QAの練習をするが、その際、単に事実を答える場合は「～んです」を用いて答えないように指導する。

板書のように、「疑問詞+んですか。」については、基本的に「～んです。」で答えるようになっており、ノダを用いない(4)のようなものは、例外として扱われている。上記のような文法研究からの演繹的な思考法は、『直説法で教える日本語』において、より色濃く反映

されている。次の例は、『直説法で教える日本語』(p.291)で、「のです」の句型導入として用いられる例である。

(7) T : S3さんはS2さんがどこでその服を買ったか知りたいと思っています。

S3 : S2さん、どこでその服を買ったのですか。

S2 : (新宿のデパート) で買ったのです。

(7)は、「疑問詞+のですか。」に対して、「～のです。」と応答することを導入としており、日本語学的な抽象的な文法規則に基づいていることがうかがわれる。この事実は、会話練習であるにもかかわらず、「んです。」ではなく、実際の会話では、ほとんど用いられない「のです。」で導入していることから裏付けられるだろう。

上記のように、「疑問詞+んですか (のですか)。」に対する応答文には、ノダを用いない(4)で導入する教科書と、ノダを用いる(5)(7)で導入する教科書があることがわかる。ノダを用いた場合、「疑問詞+んですか。」は、「～んです。」で応答するという文法規則を提示するだけでよいので、学習者の負担は少なく済む。それにもかかわらず、(4)のように、わざわざノダを用いない応答文で導入する教科書があるのはなぜか。

理由の一つのとして考えられるのは、応答文にノダを用いることで起こる、コミュニケーション上の障害を避けるためである。例えば、次の例は、ノダを用いることで、単に事実を伝える以上の含みを持たせてしまうことになり、場合によっては、相手の感情を害する危険性がある。

(8) (Bが描いた絵を見て)

A : 上手ですね。何日ぐらいかかったんですか。

B : ? 2日かかったんです。 / ?? 2日なんです。

Bのように、ノダを用いた応答は、ともすれば、「自慢」や「大変さ」が相手に伝わってしまう可能性があり、相手に与える印象がよいとは言えない。特に、フォーカス部のみで応答する場合(「2日なんです。」)は、スコープのノダとして理解できないため、ノダによるニュアンスは、より強調されることになる。このように、ノダの導入において、「疑問詞+んですか。」に対するノダを用いない応答文のメリットは、相手の気分を害する誤解を避

けられることだと言える。

教科書の中にも、大きく、日本語学における抽象化された文法に基づき、その応用として会話を導入しようとするものと、学習者の習得段階や実際の運用場面での円滑化を優先して導入しようとするものがあることを確認した。

日本語学における研究の蓄積は、日本語教育学に資するところが大きいと考えられるが、逆に、弊害となるところもある。(7)のような、実際の会話の運用から乖離している「のですか。」による導入などもその一例といえよう。

2.1.1.2. 応答の「補足」の導入

肯否疑問や、勧誘の応答に、ノダを用いて理由などを補足情報として提示する場合がある。この用法を扱っているのは、『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』『初級日本語げんき』『しんにほんごのきそⅡ』『JAPANESE FOR BUSY PEOPLEⅡ』『日本語初級②大地』である。次の(9)は、2.1.1.1 で取り上げた「疑問詞+んですか？」の応答文としての「～んです。」と関連づけて導入しており、わかりやすい。

(9) T 「きのうの晩テレビを見ましたか。」

S 「いいえ、見ませんでした。」

T 「どうして見なかったんですか。」

S 「時間がなかったんです。」

Sの答え二つを結合して

「いいえ、見ませんでした。時間がなかったんです。」を導く。

(『しんにほんごのきそⅡ』教師用指導書 p.8)

(9)のように、T「どうして～んですか。」「どうしたんですか。」等の疑問文を想定し、それに応答するというかたちで「～んです。」を用いることを理解させることで、単に、「理由の補足」としてではなく、2.1.1.1 との関連性にも気付くことができるだろう。また、疑問文を想定できるようになると、次の(10)の「～んです。」の理解も可能になる。

(10) A : すてきな時計ですね。

B : 日本で買ったんです。

A：高かったですか。

B：いいえ。・・・

(『初級日本語げんき』教師用指導書 p.61)

(10)は、最初のAの会話「すてきな時計ですね。」の後に「どうしたんですか。」を想定することで、「日本で買ったんです。」が使えるということになる。「どうしたんですか。」を想定するのはBなので、ここに、「Aが知りたいと思っているだろう」というニュアンスが生じると考えられる。

2.1.1.3. 行動・情報要求の「前置き」の導入

相手に何かを依頼する際、その前置きとして「～んですが、」を用いて、コミュニケーションを円滑にするということがある。このノダの用法を扱っているのは、『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』『しんにほんごのきそⅡ』『JAPANESE FOR BUSY PEOPLEⅡ』『日本語初級②大地』の4冊である。中でも、『JAPANESE FOR BUSY PEOPLEⅡ』は、「前置き」のみを述べる「言いさし」のかたちを用いている。(11)は、「依頼」まで述べるかたち、(12)は、「前置き」のみを述べるかたちである。

(11) 来週

出張する
出張な

んですが、いいホテルを教えてください。
(『日本語初級②大地』 p.26)

(12) (ホテルのフロントで)「この近くの地図がほしいんですが」
(『JAPANESE FOR BUSY PEOPLEⅡ』教師用指導書 p.99)

(12)のような「言いさし」のかたちは、後続の依頼内容を想定する必要があるため、より、難易度が高いと言えるが、「～んですが、」という表現形式が、「前置き」を表すということであれば、同じノダとして扱われる2.1.1.1の「疑問詞+んですか。」や、応答文の「～んです。」とは、表現形式が異なるため、学習者の混乱は少ないと考えられる。

ところが、会話練習になると、「前置き」の機能と「～んですが、」とが、一対一対応していない例が用いられる。発展的・応用という観点では必要かもしれないが、これでは、学習者が混乱してしまう可能性もある。次の(13)は、「～ですよ。」という表現形式で、「前

置き」の例、(14)は、「～んですが、」という表現形式で、「前置き」の機能を果たしていない例である。

(13) A：何を聞いているんですか。

B：マドンナの曲です。

A：ぼくもマドンナが好きなんですよ。それ聞いたら、ぼくにも貸してください。

B：ええ、いいですよ。

(『しんにほんごのきそⅡ』教師用指導書 p.11)

(14) 田中：病院へ行きましたか。

スミス：いいえ。寝たら直ると思ったんですが、なかなか治りません。

(『日本語初級②大地』 p.25)

(13)の「僕もマドンナが好きなんですよ。」は、「僕もマドンナが好きです。」と言っても、コミュニケーション上の問題は生じない。ここで「～ですよ。」を用いたのは、「僕もマドンナが好き」という情報を強調するためではない。むしろ、そのあとに続く、依頼を遂行するための「前置き」とするためなのである。このように、「～んですが、」の表現形式で「前置き」を導入しておきながら、会話では、「～ですよ。」で練習させるというのは、あまり効率的だとは言えず、学習者も混乱してしまうだろう。また、「～ですよ。」と「～んですが、」とでは、同じように「前置き」の機能を果たすとしても、完全に置き換えが可能というわけではないが、その使い分けを論じた研究も管見の限り見当たらない。また、そこまで複雑な使い分けを初級で求める必要があるのかも疑問である。

次の(14)は、「～んですが、」の「が」が、「逆接」として用いられている例である。主節も、「依頼」ではなく、従属節も、未来のことを表しているわけではないので、この場合の「～んですが、」は、(11)で学習した「前置き」とは異なることがわかる。(14)のような「～んですが、」は、2.1.1.2の「理由の補足」の一種だと考えられるが、「～んです。」と「～んですが、」とでは、用いられ方が異なる。(14)の「～んですが、」を「～んです。」に置き換えた例である。

(14a) 田中：病院へ行きましたか。

スミス：いいえ。寝たら直ると思ったんです。でも、なかなか治りません。

(『日本語初級②大地』 p.25 一部改変)

(14a)は、(14)と比較すると、病院へ行かなかった理由の正当性を強く主張しているように受け取られてしまう危険性がある。「～んですが、」という従属節のかたちにする事で、また、逆接の「が」によって、主張を弱めていると考えられる。このような「～んですが、」は、(14b)のように「～んですが。」と「言いさし」としても用いることができる。

(14b) 田中：病院へ行きましたか。

スミス：いいえ。寝たら直ると思ったんですが……。

特に、「～と思ったんですが、」のように「思考動詞+たんですが、」は、ある種の「言い訳」を表すことになり、例(14)は、一つの「文型」のように表すことができるだろう。このように、「～んですが、」というノダの表現形式のみならず、動詞の種類や時制などの他の要素との共起関係を考慮に入れて、分析しなければ、(11)と(14)との違いを説明することはできないことがわかる。

(14)の「～んですが、」を学んだ学習者は、後の課で、学習項目として挙げられていない次の(15)のような「～んですが、」が用いられた会話文を学習することになる。相手の発話に応答した後に、「～んですが、」を用いて、情報を補足しているという点で、一見、(14)と同じ用法に思われるかもしれないが、(15)の「～んですが、」は、補足する情報が、論理的に逆になっている。

(15) 木村：キムさん、あしたから旅行ですね。

キム：はい、それで新しいカメラを買ったんですが、調子が悪くて修理中なんです。
旅行のとき使おうと思ってかったのに……。

(『日本語初級②大地』 p.103)

これは、「～んですが、」が、「理由の補足」ではなく、相手の発話に対して、そこから導かれる「帰結」を表しており、「旅行に行く」→「新しいカメラを買った」というゆるやかな因果関係が接続表現「それで」を用いることで成立している。このようなノダは、初級

段階で学習項目として学ぶことはなく、会話練習に突然用いられるため、学習者は混乱する可能性が高い。しかも、「～んですが、」という逆接の「が」を伴った複雑な形で用いられており、その説明は難しい。

以上、2.1.1.1～2.1.1.3まで、日本語初級教科書のノダの導入は、概念が把握しやすく、さらに、表現形式として特徴のあるものが選ばれていることを確認した。初級段階でのノダの習得を考えると、このような典型的なものを学ぶことは有効だろう。しかし、学習項目で挙げられた表現形式と対応する用法を学ぶだけでは、教科書の応用「会話」に説明なしに現れる新たな表現形式や、学習した表現形式が他の用法になる例を理解することは困難である。次の記述のように、習得段階に合わせたノダの表現形式の学習項目の提出を放棄したかのような記述では、学習者が混乱するのは当然であろう。

話し手の意図やさまざまな感情（「関心」「喜び」「驚き」「非難」等）が言外に込められます。このような幅広い使い方を学習者がすぐに完全に理解するのは困難です。

この課では、「～んです」の使い方を、わかりやすい例で学習者に理解させます。導入や練習をするとき、ふつうはことばで説明されない部分を学習者によく説明します。そして、これから学習者がまわりの日本人が「～んです」をどう使っているか観察していけるように指導します。

（『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE II』教師用指導書 p.99）

特に、下線で示した箇所は、ノダの様々な表現形式、意味・用法を提示することの放棄を宣言しているようなものである。仮に、学習者の意識化によって、教室外での習得を期待するにしても、様々な場面で出合ったノダについて、学習者に質問されたとき、教師は、納得のいく説明ができるだろうか。次のように、表現形式や他の言語形式を考慮しないノダの抽象的な意味のみを説明したところで、学習者の混乱が解消されるとは思えない。

んだ

強調・説明

その場の状況、相手に聞かれたこと、自分が言ったことを説明する時に使う。特に原因や理由を説明する時によく使われる。

（『自然に使える文末表現』 p.111）

まさに、「説明」という用語で説明されているが、ノダ全体に対して、上記のような抽象的な意味を示しても、学習者が適切にノダを用いることには直接つながらない。むしろ、説明したいという気持ちがあれば、ノダを用いてよいという誤解につながる恐れがある。

(16) (クラスで遠足に行った帰り際「今日は楽しかったですか。」の問いかけに)

「先生、今日はとても楽しかったんです！ さようなら」

(『実践にほんご指導見なおし本【語彙と文法指導編】』 p.231 step3-1 の誤用の例文)

『実践にほんご指導見なおし本【語彙と文法指導編】』は、(16)を誤用の例としており、その根拠を、ノダは「通常ではない特殊な事情や理由を説明する時に使われる」(p.233)ことに求めている。この解説にも問題があるが、ノダの授業での扱いについての記述を取り上げる。

【～んです】は過剰に使用しすぎるとなんだか耳について押し付けがましいような気もしてしまいます。これらを守るためにも、授業ではただ単に「ここで使ってはいけません」ではなく、日本人がこれを聞くとどんなニュアンスとして感じるかということを伝えていくとよいでしょう。

(『実践にほんご指導見なおし本【語彙と文法指導編】』 p.233)

下線部は、ノダによるコミュニケーション上の誤解を避けるためにも、必要な情報であるが、二重下線部の「これ」とは、具体的に何を指すのか。「～んです」の表現形式すべてに言えることなのか、すべての状況において、同一のニュアンスを与えるのか、といったことには触れられていない。結局、上記の記述も、抽象化されたもので、実際の運用に直接役立つものとは言えない。以上、初級教科書でのノダの問題点をまとめると次の2点になる。

1. 日本語学的な抽象化されたノダの概念から、個々の用法を説明しようとしており、実際のコミュニケーションに現れる表現形式が十分考慮されているとは言い難い。
2. 応用の会話練習で用いられる表現が、学習した内容と乖離しており、それを補う情報が不足している。

これらのノダの問題を解決するためには、実際の用例をもとに、「疑問詞+んですか。」「んです。」「んですが、」のみならず、その他の表現形式ごとの特徴的な意味・用法を記述していく必要があると考えられる。

2.2. 文法論におけるノダの先行研究の検討

本節では、「文章・談話論」におけるノダの先行研究と対比的に扱うことを目的として、「文法論」と表現しているが、ノダに関しては、「文章・談話論」と「文法論」との境界がはっきりと線引きできるものではない。ここでは、「文章・談話全体」、あるいは「段」を分析の単位として用いず、ノダ文とそれに対応する任意の文（群）との関係を主に論じたものを「文法論」の先行研究として扱う。

ノダについては、すでに、先行研究において、様々な機能や言語現象の記述がなされており、そのすべてを取り上げることは困難である。ここでは、本研究にもっともかかわると思われる「関連・関係づけ」説と、「知識・状況の共有」説、「強調」説を取り上げ、再検討する。

2.2.1. 「関連・関係づけ」説の検討

山口（1975, 2010）は、先行詞とノダ文（「のだ」の文）の関係を広範に捉えており、文章論的な記述も見られるので、詳しく見ていく。山口（2010:34 初出 1975）の特徴は、構文論的にノダ文を以下の4タイプに分類し、その特徴を、「 $\times\times$ トイウコトハ $\bigcirc\bigcirc$ トイウコトダ。」という内容を表す文であるという点で共通している」としている。

- I 外で音がするのは雨が降っているのだ。
- II 外で音がする。あれは雨が降っているのだ。
- III 外で音がする。（あれは）雨が降っているのだ。
- IV 外で音がする。（そのことは）（やっぱり）雨は降っているのだ。

山口（2010）は、「 $\times\times$ トイウコトハ $\bigcirc\bigcirc$ トイウコトダ。」の関係から、接続表現との共起関係に基づく文脈の展開や、機能領域、先行文（先行詞）の種類について言及している。

III、IVの文の場合に、「結局、要するに、つまり、一言で言えば、換言すれば、言い

かえれば、簡単に言えば、手っ取り早く言えば」などの語句が冠せられることがしばしばある。「のだ」の文が、ある事態（現象）について、それが結局どういうことであるかを表現するものであるとすれば、これは当然の現象であった。 (p.23)

この記述は、接続表現との共起関係についての言及であり、「統括機能」という言葉こそ使用していないが、第2節で取り上げた永野（1986:326）のノダの機能と重なる指摘をしていることがわかる。

さらに、「結局、要するに、…」などが同一の文中で「のだ」と呼応するのではなく、いくつもの句点を飛び越えて「のだ」と呼応する形が生じてきている。(p.24)」と、ノダの機能領域に関する記述も見られる。

同様に、ノダの機能範囲に関わる記述として、「『のだ』の文に後行する文の中に先行詞がある場合 (p.47)」を指摘している。

(17) 郵便が来たのです。草の中や、土べいの上や、庭のベンチの上など、いたるところに、小さな少女がうずくまって、手紙を熱心に読んでいます。

(ケストナー、高橋健二訳「二人のロッセ」、山口 2010:47 例 (31) 再掲)

さらに、山口（2010）は、「前置き」のひとつである話題提示のノダについても、言及しているが、その説明は、少々強引な印象を受ける。

(18) あの人なんですが、どう考えても人間だという気がしないんですよ。

(尾崎士郎「人生劇場 夢現篇」、山口 (2010:61) 例 (61) 再掲)

この例(18)に対して、山口は以下の説明をしている。

例えば W に関する話をする場合に、「W のことなんです」のように切り出す用法があるが、これも、「(次に取り上げるのは) W のことというわけだが」というような意味合いの前置きの用法であろう。最近は、「W なんです」のように、「こと」を略して言う言い方も生まれてきているようである。 (p.55)

例(18)のような「W なのですが」は、先行詞との関係において選択されたのではなく、むしろ、主節との関係において選択されたと考えるべきであろう。これは、すでに「提題表現」として機能しており、主節部分「どう考えても人間だという気がしないんですよ」が、それに対応する「叙述表現」となっていると捉えるべきである。山口の説明では、(18)に類似した、次の(19)のような「節」に「なのですが」が付されるものの先行詞を見出すことは困難であろう。

(19)

199 あと、短編と長編の関係っていう重要な問題があるのですが、これは、あとで本格的にお話ししたいと思います。

(講義 C1)

文 199 は、「あと」という添加型の接続表現によって、新たな小話段を開始しているが、「短編と長編の関係っていう重要な問題がある」に対する先行詞は、先行文脈や状況の中に見出すことはできず、「(次に取り上げるのは)、短編と長編の関係っていう重要な問題があるのですが、」ということとはできないだろう。これは、先行詞と関係なく「短編と長編の関係っていう重要な問題がある」ということを話題として取り上げることを「前提」としたノダと捉えるほうが自然であろう。

以上のように、山口 (1975, 2010) は、「××トイウコトハ○○トイウコトダ。」という構文論的にさまざまなノダ文を分析している点で、大変示唆に富むものであるが、すべてのノダに対して、「××トイウコトハ」という先行詞を認めるとしたところに問題があると考えられる。

奥田 (1990) は、ノダ文を捉える際の「××トイウコトハ○○トイウコトダ。」という関係を引き継ぎ、《説明》(「○○トイウコトダ」部に相当する)《説明され》(「××トイウコトハ」部に相当する)の関係でノダを捉えようとしている。《説明》《説明され》の関係を、豊富な用例を用いて、非常に詳細に分類しており、大変参考になるが、《説明》《説明され》で捉えきれないノダの存在に対しては、《強調》の機能を認める立場を採る。《強調》に関しては、2.2.3 節で扱うが、《説明》と《強調》といった異なる機能を認めていながら、その関連についての記述が不十分であることから、ノダの中心的な機能を《説明》とするこ

ろに問題があるといえる⁹。

松岡 (1987, 1993) は、「ある事柄 P とある事柄 Q との間に話し手の何らかの関係を認め、そしてそれを話し手の責任において主張する時に用いられる」としており、先行詞に相当する P を想定している点では、山口 (1975, 2010) と共通する。そして、ノダ文が「原因・理由」「帰結」¹⁰の両方を表すことについて、ある事柄 P とある事柄 Q のどちらかが言語化されない率がより高いという事実から¹¹分析をし、日本語学習者への提示方法を示している。

(20) (少し前に出かけて、また戻ってきた A と、うちに残っていた B とのやりとり)

B 「あれ、どうしたんですか」

(P, Q のうち、Q がない)

もし学習者にパラフレーズして教えるとするれば、

「どういうことがあって、もどってきた」 のですか。

P Q

A 「お金を忘れたんです」

(P, Q のうち、Q がない)

「お金を忘れたので、もどってきた」 のです。

B 「あ、それで、もどってきたのですか」

(P, Q のうち、P がない)

「お金を忘れたので、もどってきた」 のですか。

(中略)

①P を知って、P, Q の関係を確認・主張する。→ [(P), Q] のだ

②Q を知って、P, Q の関係を確認・主張する。→ [P, (Q)] のだ

③P, Q の関係確認が話し手の中で未分化、ないしは融合している

→ [—, Q] のだ

⁹ 「説明」がノダの機能の一面を捉えたものでしかないという批判は、堀口 (1985)、松岡 (1987, 1993)、田野村 (1990)、国広 (1992)、名嶋 (2007) 等でもなされている。

¹⁰ 奥田 (1990) 《ひきだし的》と《つけたし的》の議論も参照。

¹¹ 寺村 (1984) にも同様の記述がある。

(松岡 1987:16)

この省略を含んだ議論は、ノダの「関連・関係づけ」の中でも、特に、第2節の文章論的な分析と関わる点である。松岡(1987)では、特に指摘はされていないが、以下の例は、松岡(1987)の分析では、説明できないものである。

(21) 「ねえ、給料は上がるのかしら？」

「さあ。何しろ倒産しかかっているんだ。無理じゃないかな。」

P

Q

(赤川次郎『女社長に乾杯！(上)』p.69 野田(1997:182)例(63)再掲)

この(21)のような例は、「Pノダ, Q」という関係であり、「Pノダ」は、Qの省略を前提としないということである。この例(21)が、当然の帰結である後件Qを省略することで、(20)の②のノダとなることも裏付けとなる。

(22) 「ねえ、給料は上がるのかしら？」

「さあ。何しろ倒産しかかっているんだ。」

(例(20)再掲：一部改変)

(20)の②と(22)は、ともに、「[P, (Q)]のだ」で、因果関係が認められるという点で共通しているが、(20)の②は、Q部分を復元すると不自然になる。

?(23) A 「あれ、どうしたんですか。」

B 「お金を忘れたんです。もどってきました。」

?(23)が不自然なのは、PとQの関係というよりも、Q部分が、先行する疑問に対する回答となっているかどうかという点に求められる。?(23)「どうしたんですか。」に対する直接の回答は、P部分「お金を忘れた」であるのに対し、(21)「ねえ、給料は上がるのかしら？」に対する直接の回答は、Q部分「無理じゃないかな。」である。つまり、Qが省略されるかどうかは、PとQの関係だけで決まるのではないということである。

以上のように、松岡（1987, 1993）において、「Qノダ」だけではなく、「Pノダ」の存在を認め、学習者に分かりやすい形で提示したことの功績は大きい。しかし、「Pノダ」の存在を、Qの省略に見出している点が問題であるといえる。これは、ノダをPとQという2事態間の関係でとらえようとしたところに問題があると考えられる。これは、「ノダカラ」の論理に関わるが、詳細は、2.4.5節で扱う。

また、関連性理論からノダの分析したものに近藤（2002）、名嶋（2007）がある。これらの研究は、ノダの本質に「聞き手」の要素を導入したという点で共通している。例えば、名嶋（2007:83）は、ノダの機能（仮説）を以下のように定義している。

ノダは、ある命題を「聞き手側から見た解釈として」「意図的に、かつ、意図明示的に」「聞き手に対して提示する」。

この仮説は、名嶋（2003）の学習者の作文（論説文）を通してノダを分析する際にも用いられているが、ノダと文章の展開を論じているとはいえない点で、本研究とは異なると考えられる。近藤（2002¹²）は、霜崎（1981）をテキストの結束性表示説として挙げているが、この先行研究から、以下の疑問を提示し、「会話」を対象にノダを分析している。

読み手が「ノダ」を手がかりにテキスト上に結束性を読み取るプロセスとは、聞き手が「ノダ」文によって導入される発話から談話の結束性を理解するプロセスと同質のものか。 (p.228)

さらに、聞き手を必要とするノダの意味・用法を「原因・理由の説明」「前置き」「告白」「言い換え」「気づき」「決意」「命令」に整理し、分析することで、ノダの手続き的意味を以下のように定義している。

会話に「Pノダ」という形式の発話が導入された場合は、次の処理手続きをとれ。

- a. 先行文脈に $P \Rightarrow Q$ あるいは $P \rightleftharpoons Q$ の接続関係が成り立つような命題 Q を検索し、それに関連させて命題 P を文脈化せよ（ただし、 $P \Rightarrow Q$ は「機会誘因関係」、 $P \rightleftharpoons Q$ は「連鎖関係」を意味する。）

¹² 関連性理論の立場からノダを論じているという点では、名嶋（2007）に近いと考えられる。

b.a が不成立の場合、次の①か②に従って処理せよ。

①先行文脈に関連命題が検索できない場合は、談話の話題設定を命題 P の情報に基づいてリセットせよ。

②先行文脈に命題 P が検索された場合は、同義反復として次のように処理せよ。

ア. 命題 P が話し手と共有の情報でない場合：先行文脈を修正せよ。

イ. 命題 P が話し手と共有の情報である場合：先行文脈を強化せよ。

(pp.244-245)

上記のように、ノダが聞き手の発話解釈過程を制約するという点で、「会話」におけるほとんどのノダが処理可能になると考えられる。ただし、a.処理が不成立の場合、なぜ、b.の処理に移行するのかは述べられていない。

さらに、次のような談話のノダは、a.b.の手続き的な意味では処理できない。

(24)

331 それからー、「ていうか」が、あの一、不愉快に感じられる理由の二つ目ですけどもー、(3)「ていうか」が、理由を、あの一、言い直しを表す言葉なのに、言い直す言葉がない時にも用いられるということである、ということですよ。

332 で、あの一、たとえば、それは、8番とか9番ですね↑。

333 話題の導入に使うんですね↑。

334 「っていうかー、今日だるくない↑。」

335 「ていうか、今日すごく寒いよね↑。」

336 「何が『っていうか』なんだー。」

337 言い換えられる言葉がないのに、なんでいきなり「ていうか」が出てくるか。

338 この気持ち悪さ。

339 これが、「ていうか」が、あの一、不愉快に感じられる二つ目の要因ですよ。

(講義 A)

文 333 のノダ文は、文 331 の「言い直しを表す言葉なのに、言い直す言葉がない時にも用いられるということである」を P とした場合の P となる。その関係は Hobbs (1985) の接続関係では「連鎖関係 (=)」となるため、a.の処理を行うことになる。しかし、この文

333 は、後続する文 334 以降の新たな「話題提示」にもなっている。これは、b.①の処理が行われたことを意味するが、b.の処理が行われる条件は、a.の不成立であった。(24)は、a.の処理が行われたにもかかわらず、さらに、b.①相当の処理をすることになる点で、矛盾が生じている。

上記のような問題は、「関連・関係づけ」説において共通する問題であり、ノダの機能を「PとQの単一の関係を表す」としたところに問題があると考えられる¹³。これは、文章論における統括の多重構造の観点を持ちこまなければ、解決できない問題だと考えられる。

ノダの「関連・関係づけ」説は、聞き手に解釈を委ねることにより、PとQとの間に、さまざまな関係性が生じることを詳細に記述している点で、「接続(つながり)」論的であるといえるが、本研究が提案する「統括機能」の記述とは異なっていると考えられる。

2.2.2. 「知識・状況の共有」説の検討

菊池(2000:29)は、「関連・関係づけ」について、以下のように定義している。

①話手と聞き手が、ある知識・状況を共有していて、②それに関することで、話手・聞き手のうち一方だけが知っている付加的な情報があるという場合に、その一方だけが知っている付加的な情報を他方に提示するときの言い方が「のだ(んです)」(その提示を求めるときの言い方が「のか(んですか)」)である。

ここでは、「話手・聞き手がある知識・状況を共有していること」、「一方だけが知っている付加的な情報を提示する」という条件が加えられる。石黒(2003:21)は、ノダの中核的機能を以下のように定義する。

「のだ」の中核的機能は、話し手、聞き手いずれか一方の、既存の不十分な認識が発話時に充足されることを示すことにある。

¹³ 石黒(2003:22)には、以下のように、ノダの機能の重複について述べている。

「のだ」のテキスト的機能に関連して、少し述べておきたい。すでに述べたように、完結感が感じられるものについては前提機能を持たず、完結感が感じられないものにかぎって前提機能が働くこと述べたが、実際には見方によっては完結感が感じられ、見方によっては前提機能が働くというような例が、まれにはあるが、観察される。

菊池（2000）と異なり、石黒（2003）は、「不十分な認識が発話時に充足されることを示す」と「不十分な認識」を条件として明示している。

菊池（2000）も、石黒（2003）も、話し手と聞き手の「認識・知識の差」があることを指摘している。これは、ノダが用いられない場合の説明にも役立つ記述である。以下の例(25)は、上記の先行研究の記述により理解することができる。

(25)

243 あの一、「朝顔」と「釣瓶とられて」っていうのがあれば、さっきの「野茨」よりは、わかる人多いでしょ↑。

244 これ知ってる人、どんぐらいいる↑。

245 聞いたことあるよっていう人は。

246 (2)あれ↑。

247 でも、こんなかな。

248 あの一、加賀千代女っていう人がいるんですね。

249 加賀ですから、石川県か。

250 そこの千代さんですよ。

(講義 B)

文 243 で、「朝顔」「釣瓶とられて」の引用元を知っているかを受講者に問い、文 247 で、予想よりも少ないことがわかり、文 248 のノダによって、「既存の不十分な認識」が「充足される」ことになる。もし、文 243 の引用元を受講者全員が知っていたとしたら、「一方だけが知っている付加的な情報を提示する」という条件に抵触し、ノダを用いることはできなくなるだろう。

ところが、ノダが「一方だけが知り得る付加的な情報」のみを提示するかといえば、そうとは言いきれない。たとえば、次の例(26)は、先行文にすでに示されており、お互いが完全に共有している情報であるにもかかわらず、ノダが使用されている。

(26)

1444 もっとも、「分かち合い」の「大きな政府」であるヨーロッパ諸国は、消費税の負

担が重いことは事実である。

- 1445 逆に「分かち合い」の「小さな政府」であるアメリカは、消費税つまり消費型付加価値税を導入すらしていない。
- 1446 アメリカは所得税と法人税を中心とした租税制度が確立されている。
- 1447 図 5 - 4 で所得階層別の租税負担をみれば、所得税と法人税のウェイトが圧倒的なアメリカは、累進的租税負担となっている。
- 1448 ところが、スウェーデンをみれば、逆進的租税負担構造となっている。
- 1449 消費型付加価値税の税率が二五%で、所得税も地方税として比例税率で課税されているからである。
- 1450 アメリカとスウェーデンと租税負担構造を比較して指摘しなければならない点は、すべての所得階層において、スウェーデンのほうが租税負担が高いということである。
- 1451 つまり、「大きな政府」であれば逆進的で、「小さな政府」であれば累進的にならざるをえないのである。
- 1452 「分かち合い」で生きていく社会であれば、貧しい国民も負担し合う。
- 1453 租税さえ支払えば、無償の公共サービスで生活を営むことができる。
- 1454 つまり、「分かち合い」で生きていくことができるからである。
- 1455 政府が秩序維持機能しか担わず、自己責任で生きていく社会を目指すのであれば、秩序維持機能の負担は富める者が負担する。
- 1456 それだからこそアメリカは、所得税・法人税中心の租税制度となっているのである。

(『「分かち合い」の経済学』)

文 1456 の _____ 部は、先行文 1446 にすでに提示された内容を反復しており、筆者はもとより、読者にとっても既知の情報である。しかし、これでは、ノダ文の「一方だけが知り得る付加的な情報」と矛盾する。

このように、「一方だけが知り得る付加的な情報」は、特定のノダに関しては、有効な記述といえるが、全てのノダに対応しているわけではない。第 3 章でノダの分類を詳述するが、ここでは、統括機能によるノダの分類によって、「一方だけが知り得る付加的な情報」がノダの使用の条件となるかどうかが決まるとしておく。

2.2.3. 「強調」説の検討

近藤（2002:227）は、ノダの先行研究を、大きく3つの視点にわかれるとし、3つ目の視点を「③談話の結束性に関連するもの」とし、霜崎（1981）を挙げている。この問題点として、「テキスト上の論理的結束性を論じているが、会話において「ノダ」が果たす機能については言及がない。」（p.228）としている。確かに、霜崎（1981）と同系統の永野（1986:348）においては、基本的にはノダの「統括機能」を認めながら、その特徴が見られないノダを「説明・強調」と分析し、その詳細については、言及がないという問題がある。

田野村（1990:40-41）は、ノダに「押し付けがましい印象を与えたり、人に教え聞かせるような調子を感じさせたりしやすいこと」を指摘し、その原因を「既定性」「披歴性」といったノダの特性によるものであるとしている。さらに、

ノダの多用は、好意的に受け止めれば、話し手の知識の深さ、悪く考えれば、熟知や精通を装ったり、問答無用で信用を強制したり、自分が知的に優位であることを誇示したり、権威の影をちらつかせたりしようとする話し手の姿勢を感じさせることが多い。（p.41）

このことから、「教え聞かせようとする姿勢や、自分だけが知り得る立場にあることを相手に印象付けようとする意図」のある「法話・説教・童話・講話・広告」などで、ノダの多用が見られることを指摘している。

一方、奥田（1990）は、ノダにおける「強調」について、以下のように説明する。

強調するということで、テキストにさしだされる、いくつかの出来事のうちの、ひとつの重大さが主張されるのだが、この強調がはなし手の選択であるとしても、それがはなし手の主観によって決定されるわけではないだろう。はなし手の強調をもとめる根拠が場面のなかに存在していなければならない。たとい「のだ」をつかうことで、強調に言語的な表現があたえられるとしても、強調することの根拠が客観的に存在していなければ、強調は成立せず、よみ手につたわっていかない。へたな作家がやたらに「のだ」をつかって、りきんでみせるが、ひとりよがりにおわってしまう。したがって、強調される出来事の重大さとはなにか、テキストのなかにあきらかにする必要

がある。

(pp.206-207)

ここでは、ノダの「強調」が、適切な場面で使用されないと、ひとりよがりの「押し付け」の印象を与えることを指摘しており、その連続性に言及している¹⁴。では、「強調することの根拠が客観的に存在している」場合とは、どのような場合であろうか。奥田（1990）は、以下のように説明する。

「のだ」をともなう文が、《説明》ではなく、《強調》の表現としてはたらいているとすれば、あたらしい場面のきっかけをなすような出来事をさしだしているにちがいないのである。「のだ」をともなう文は、ひとつの段落¹⁵のなかで、記述の展開過程における《まがりかど》を信号する役目をひきうけている。このような「のだ」をともなう文の機能は、《場面きりかえ的な機能》とよんでおこう。 (p.207)

ノダによる「強調」は、《場面きりかえ的な機能》であるとし、さらに説明を加える。

この《場面きりかえ的な機能》は、《場面とじ的な機能》でもあるし、《場面おこし的な機能》でもあるだろう。ただし、《意見の文》の、段落をとじるという、結論的な機能とはことなる。記述的な段落においても、いちばんおしまいの、出来事を記述している文が、しばしば「のだ」をともなっている事実につづかる。おそらく、《場面とじ的な機能》の「のだ」なのだろう。 (p.208)

第2節で指摘したことであるが、ノダによる《場面きりかえ的な機能》に、《場面とじ的な機能》と《場面おこし的な機能》を認めており、その一方が働くことにも言及している。また、記述的な段落の最後の文に現れるノダの機能が意見文の段落をとじるという「結論的な機能」とは異なることを指摘している。

本研究も、基本的には、奥田（1990）の指摘を支持する立場であるが、この「結論的な

¹⁴ 名嶋（2007:96）は、ノダに「抗弁」「嫌味」といったニュアンスが生じることの原因を「文脈の改変」に求めている。名嶋（2007）は、ノダ自体に文脈を改変する機能があるとするのに対し、奥田（1990）は、そこまで積極的な機能はないとしている点が異なる。野田（1997:71）も、奥田（1990）と同様の見解を示している。

¹⁵ 奥田（1990:215）は、自らの研究を永野（1986）の流れのうえにあるとしており、その分析単位も「段落」としている点で、本研究の分析単位とは異なる分析といえる。

機能」と「場面とじ的な機能」とを分けて考える必要はないと考える。第2節においても述べたが、具体例や根拠を並べたあと、結論を述べることで「段」を統括するという段の展開的構造と、ノダが「段」を統括するということとは、別個に扱う必要がある。意見文の場合は、結論によって「段」をしめくくることが多く、そのことが、「段」の機能領域を示すノダの出現と重なったと考えるべきであろう。また、奥田（1990）では、はっきりとは明言されていないが、すべてのノダには、ある種の「強調（理解の強要）」があると考えられる¹⁶。

文章・談話の展開という観点からは、少なくとも、「強調」には、「対人めあて」と「文章・談話の展開的構造めあて」の2種に大別されると考えられる。相手がすでに知っている情報を、あえてノダをともなって提示することで、ノダが提示する文の情報以上のものを伝えようとするのが「対人めあて」であり、相手が知らない（と予想される）新たな情報を、ノダをともなって提示することで、すでに既定のものとして伝えようとするのが「文章・談話の展開的構造めあて」である。「文章・談話の展開的構造めあて」のノダは、今回分析対象とした新書の文章や講義の談話等、長い文章・談話の意味的なまとまりのはじまりに現れる傾向があり、談話の展開的構造を捉える際のマーカーとなる。この分類は、名嶋（2007:218-258）の「念押し」と「一方的提示」の分類に類似する。名嶋（2007）は、関連性理論の立場から、以下のように分類する。

「一方的提示のノダ文」と「念押しのノダ文」とは「念押しのノダ」が「聞き手の文脈想定と一致・類似する命題の真」を「念押し」するのに対し、「一方的提示のノダ」は聞き手にある想定を初めて登録させるというべきものであり、何らかの「念押し」を行うものではない、という点において異なる特徴を持つ、という点である。

（名嶋 2007:232）

そして、談話における話題の切り替え時に「一方的提示のノダ」が用いられることを指摘し、次のように議論を展開する。

書き言葉においても同様のことが言える。段落の切り替えが行われ、その段落の初発

¹⁶ これは、おそらくノダの名詞化による「既定性」（三上（1953） 田野村（1990） 国広（1992）等）が大きく関係していると思われる。

において、前段落の内容を受けていない形でノダ文が用いられると「一方的提示のノダ」になりやすい。次のような場合である。

(71) (パーティー会場で森原を見つけ、近寄ってきた澄江に)

森原：いらしてたんですか

澄江：ひとみちゃんから森原さんが参加するって聞いていたので…。

それより困っているの。

と、会員たちのひとりをこなす。 —以下省略— (恋と)

(名嶋 2007:245)

そして、聞き手は、ノダで提示された文を「解釈」することができないため、解釈に至るための疑問を述べることになる。名嶋 (2007) で挙げられている例文は、全てこのタイプである。

以上、名嶋 (2007) の議論を本研究と関連する部分を中心に端的にまとめた。より実証的な研究を目指す本研究とは立場が異なるが、類似している点も多い。しかし、類似しているからこそ、その違いをはっきりさせておく必要がある。

名嶋(2007)のいう「書き言葉」と「段落」は、特に定義されることなく使用されているが、本研究にとっては、非常に重要な観点であるため、ここで、その違いについて触れておきたい。

まず、名嶋 (2007) が「書き言葉」として提示した例は、シナリオの会話文である。本研究では、これを「書き言葉」としては扱わない。その理由は、シナリオが、音声による媒介を前提としたものだからである。本研究における「書き言葉」は、「文字を媒介とし、文章による伝達を目的とした、不特定多数に向けた公的」な文体であるとする。そのため、シナリオ自体が文字を媒介としたものであっても、「書き言葉」とはしない。

次に、「段落」についてであるが、これは、2.4.7 で、詳しく触れるが、改行をマーカーとした「段落」は、必ずしも意味的な内容のまとまりを表すわけではない。分析においては、他のマーカーである接続表現等との共起から話題の開始を分析しているため、名嶋 (2007) のいう「段落」は、改行段落とは異なるだろうが、その定義がないため、あいまいである。2.4 で詳述するが、本研究では、改行一字下げを「段落」として絶対視するのではなく、形態的指標に支えられた相対的な意味的なまとまりを文章・談話の構成単位とする。

また、名嶋（2007:254-255）は、「一方的提示のノダ」が「前置きのノダ」と連続していると述べており、「前置きのノダ」に近づくノダを「背景」と表現しているが、これは、文脈の展開的統括の観点からも重要な指摘で、本研究のノダの分類の基準とも重なるものである。しかし、分類の範囲は同一ではない。名嶋（2007）は、後続発話の発語内行為を遂行するための付加情報の性格で「一方的提示」と「前置き」を分類しているが、それだけでは不十分である。次の例(27)のように、発語内行為の遂行だけではなく、当該の「段」の理解に必要な背景を述べるために「一方的提示のノダ」が使用される。

(27)

- 1181 この桜井監督のケースと似たケースとして、私は東京都のある中学校長からこんな話を聞いた。
- 1182 その校長先生の専門教科は英語なのだが、その先生がはじめて英語を習った中学の英語の教師が変わっていた。
- 1183 元来国語の教師だったのだが、終戦直後のため英語教師が足りないので、英語がまったくできないのに科目を担当していたというのである。
- 1184 英語ができないのに英語の授業を任されたその教師は、一体どのような教え方をしたのだろうか。

（『「できる人」はどこがちがうのか』）

例(27)の文 1182「その校長先生の専門教科は英語なのだが、」、文 1183「元来国語の教師だったのだが、」は、それぞれ主文は発語内行為を遂行するものではないが、それぞれの情報を背景化し、既定のものとして提示している。後続する情報を理解するために必要な背景的な情報であるため、このようなノダも、本研究では「前置き」のノダとする。

この(27)の「のだが」を名嶋（2007）の議論に沿って考えると、後続発話（厳密には「発話」ではないが、便宜上、このように記す。）は、発語内行為を遂行するものでもなく、また、ノダ節は、その根拠・理由となっているわけでもない、「前置き」とは言えない。そうすると、「一方的提示のノダ」であると考えられるが、(27)の「のだが」が付された節は、「話題の具体的な内容」でも「その話題の当該談話の話題としての位置付け」でもない。次の例(28)のようなノダが「一方的提示のノダ」であることを考えると、同一のものとして扱うことはできない。

(28)

(昔の友人が出ているビデオを二人で見ている)

浜中「...」

たみ「...私ね...この町、出ようと思ってんの」

浜中「え?...」

たみ「...」

浜中「どうして...」

たみ「...私も、...向こうへ行こうかと思ってね...」

(夜曲)

(名嶋 2007:244 例 69 を使用)

たみの「...私ね...この町、出ようと思ってんの」という発話は、新たな話題の開始となっているが、聞き手に「なぜ?」という疑問を抱かせるものである。例(28)のようにノダを付して唐突に「解釈」として提示することで、相手に何らかの疑問を生じさせることが「一方的提示のノダ」であることから、相手に疑問を抱かせる余地を与えず、すでに定まったものとして背景化する例(27)の「のだが」は、これとは明らかに異なるものである。名嶋(2007)では、(27)のようなノダは取り上げられておらず、おそらく、「一方的提示」に分類されると思われるが、本研究では(27)と(28)の違いは、ノダの分類に関わる非常に重要なものである。

2.2.4. 文法論的なノダの先行研究の問題点

第2節で掲げた「文法論におけるノダの先行研究」は、主に、文と文とのつながり、すなわち、「接続」に関わるものであった。これらの先行研究の多くは、第2節で検討したノダの「統括機能」を考慮せずに論じられている傾向がある。

例えば、例(29)は書きことば「のだ」、(30)は話しことば「んだ」であるが、確かに、「接続(つながり)」の観点からみると、いずれも先行する事態に対して、ノダを伴い、筆者(話者)の見解を述べるという関係である。

(29)

1516 市場で少ない所得しか稼ぐことのできない者は、社会に貢献する努力を怠るだけ

者であると、新自由主義者は考える。

1517 市場に介入して、そうした怠け者を救済しているからこそ、経済が活性化しない。

1518 市場に介入せずに、自由放任にすれば、努力する者が報われる社会となる。

1519 努力する者が報われる社会こそが、公正で効率的な社会なのだ。

(『「分かち合い」の経済学』)

(30)

15 それから、あの、テストの結果をすごく気にしてる人が結構いました。

16 で、平均点はどれぐらいとか、何か受験時代を思い出してるんでしょうかね。

17 えーと、ちゃんと出してません。

18 んー、だから、まー、20点台前半ぐらいかなというふうに思います。

19 まー、前期は前期で、もう、どうせ決着がついてるんですから、えー、後期がんばって下さい。

(講義 E1)

しかし、「統括(まとめ)」の観点から考察すると、(30)の文 16 は、文 15「テストの平均点を気にしている人がいる」という存在文で取り上げられた話題に対する見解を挿入しているだけであるのに対し、(29)の文 1519 は、文 1516~1518 で述べられた新自由主義者の主張を筆者の見解によって統括していることがわかる。いずれも、ノダによって、先行文に対する「見解」であることが示されるため、「接続」の観点からは、同一のものとして扱われるが、「統括」の観点を導入すると、(29)(30)は、異なる機能を発揮していることが明らかになる。

また、(29)(30)は、2.2.2 で検討した「知識・状況の共有」説の観点からも、異なる分類であると考えられる。「一方だけが知っている付加的な情報を提示する」(菊池 2000) という範囲をどこまで認めるかにもよるが、例(29)の文 1519 のノダは、先行文 1516~1518 の情報を「換言」しているということから、読み手にも十分に予測が可能であり、すでに共有された情報を述べているという点で、例(26)に近いといえる。つまり、文 1519 のノダによって提出される情報は、「一方だけが知っている付加的な情報」とは言いがたいということである。

それに対して、例(30)のノダは、「換言」とはいえ、聞き手に予測の材料¹⁷を与えず、まさに話し手の「一方だけが知っている付加的な情報を提示」している。これは、ノダを統括機能の観点から分類するに当たって、重要な概念となる。第3節での先行研究の検討から得られる問題点は、以下の3点にまとめられる。

- ① ノダの機能を「接続関係」（主に「関連・関係付け」）のみで論じており、「統括機能」についての言及がないため、ノダの文章・談話レベルでの記述が不足している。
- ② ノダの機能を、先行文との「関連・関係付け」を基本としているため、先行文・後続文の両方に「関連・関係付け」の機能を発揮しているノダへの言及がほとんど見られない。
- ③ ノダと「段落」との関係については、「場面きりかえ的な機能」として論じているのみで、「段落」と「段落」との統括関係を論じるものではない。また、「改行段落」という、いわば線条的な形式を単位とした分析では、ノダの統括機能の多重性を論じることは困難である。

2.3. 文章・談話論におけるノダの先行研究の検討

霜崎（1981）や永野（1986）に代表されるように、ノダは、文章・談話論において、先行文（群）をまとめる統括の機能があるとされてきた。本研究も、ノダに統括の機能を認めるが、その機能が多様であることを主張するものである。まずは、文章・談話論の統括に関わる基本的な分析単位を概観し、その後、ノダの統括機能を検討する。

2.3.1. 文章・談話論における文末叙述表現の「統括」

本研究の「統括機能」は、永野（1986）を発展的に継承した佐久間（1992,2003,2010）に基本的には従うものである。しかし、実際のノダの統括機能の分析には、先行研究の記述は十分とはいえない。本節では、先行研究で明らかにされたことと、これから明らかにする必要があることを示すことで、文章論における本研究の位置付けを明確にする。

¹⁷ 山口（1975）の「先行詞」や、田野村（1990）の「背後の事情 α 」に通じるが、たとえば、山口（1975）の「～トイウコトハ、～トイウコトダ」への置き換えは、例(29)(30)のどちらも可能であり、これらを区別することはできない。

2.3.1.1. 「段」の定義

これまで文と文章との間に中間的な単位を認める研究が多く提出されている。ここでは、いくつかの選択肢がある中で、「段」（佐久間 1992, 2003, 2010）を選択した根拠について触れることにする。

まず、文章の「段」である「文段」について、市川（1978:126）は、以下のように定義している。

特に「文段」という用語を用いて、「文段とは、一般的に、文章の内部の文集合（もしくは一文）が、内容上のまとまりとして、相対的に他と区分される部分である。」というように規定することができる。「文段」は、改行によってではなく、前後の文集合（もしくは一文）が、内容上なんらかの距離と連関を持つことによって区分されることになるのである。

この「文段」は、永野（1986:94-101）等が分析単位として推奨する「改行段落」に、恣意的な面があることを問題視するものである。佐久間（2010:45-46）は、「段」について、以下のように定義している。

談話の「話段」と文章の「文段」の総称であるが、伝達目的や情報内容の違いから生じる、大小様々な話題¹⁸をまとめる「統括機能」¹⁹を本質とする言語単位である。「段」は、種々の「言語形態的指標」を伴い、その話題の主な内容を端的に表す「中心文」（「統括文」と、文章・談話の全体を統括する「主題文」の統括機能が及ぶ範囲に含まれる複数のまとまりを意味する。

つまり、「中心文」（統括文）を「段」の成立の必須要件としている²⁰。また、段の構成要素についても、以下のように定義している。

¹⁸ 「文の『提題表現』と『叙述表現』の統括機能により認定される意味的・形態的な表現」（佐久間 2010:113）とされている。

¹⁹ 「統括機能」については、次節で詳細に取り上げる。

²⁰ これに対して、市川（1978:127）は、「段落の内部に中心文が認められることがある。」と述べるのみで、文段成立の必須要件とはみなしていない。但し、これは、「中心文」を認める範囲の問題かもしれない。市川（1978）は、「要約的中心文」「結論的中心文」を挙げているが、これらは、佐久間（1995）の中心文のうち「結論文」の一部に該当するのみである。

「段」の構成要素は、「文」よりも、むしろ、1対の「提題表現」と「叙述表現」からなる「題一述関係」に基づく、話題の統括機能を有する「情報単位」であり、いわゆる「節」に相当する成分と考えるほうがよいだろう。(佐久間 2003:93)

市川(1978)は、一文を最小単位としているのに対し、佐久間(2003)は、「節」を最小単位としている点が異なる。この議論は、塚原(1966:1-2)の「段落」と一致するものと考えられる。塚原(1966)は、「段」という名称こそ使用していないが、市川(1978)や佐久間(1987,2003等)の改行一字下げによる「段落」批判と、永野(1986)の「段落」推奨という対立を解きほぐす議論を展開していると考えられるので、ここで、引用する。

塚原(1966:1-2)は、「節」を「段落」と称し、それらが連合して「段落連合」となることを指摘している。さらに、「段落」を「修辭的段落」(改行一字下げの「段落」相当)と「論理的段落」(「文段」相当)に分類し、それぞれが独立した論理で働いていることを指摘している。

論理的段落は、構造の論理に基礎づけられ、修辭的段落は、表現の論理に基礎づけられると規定してよかろう。したがって、論理的段落と修辭的段落との異同は、構造の論理と表現の論理の異同であるといつてよい。(p.3)

ただし、これらが独自の論理で働いているとしても、修辭的段落と論理的段落との関係は対等ではない。

修辭的段落の妥当性は、究極において、それを基礎づける表現の論理にあるのではない。その根底に存在するはずの構造の論理にあるのである。だから、修辭的段落は、論理的段落として再編成することが可能であり、かつ、再編成された論理的段落が、確実な論理に基礎づけられていると、確証されることによって、その妥当性を客観的に獲得しうる。すなわち、それが、いわゆる、筋の通った文章、まとまった文章、論理的な文章、明晰な文章などを成立させる原因となる。(p.3)

上記のように、論理的段落の優位を指摘しており、修辭的段落が、論理的段落から完全に

自由になることはできないことを指摘している。

さて、永野（1986:100-101）は、段落に「筆者の段落」「文章の段落」「読者の段落」の3つの段落があることを指摘し、「改行段落」を「文章の段落」、「文段」を「読者の段落」とみなした。そして、「文章の段落」である改行段落を分析観点として妥当性のあるものだと主張するのであるが、ここにすでに問題がある。上記の塚原（1966）の分析より、改行段落は、「筆者の段落」でしかなく、「文段」（論理的段落）こそが「文章の段落」なのである。つまり、「改行段落は、「形式」段落ではなく、書き手の段落（修辭的段落）である」ということ、そして、「改行段落（修辭的段落）と「文段」（論理的段落）は別個の論理で成り立っており、両者の一致に必然性はなく、偶然の結果にすぎない」ということである。

このことから、例えば、永野（1986:98）の「段落には内容のまとまりというものは全く認められないのであろうか。」といった「文段」批判や、市川（1978:126）の「教科書などの文章では、段落における、内容上・形式上の二要素が合致している場合が多いので、一般には、とくに「文段」の概念を必要としない」といった議論は、無意味なものになることが理解されよう。

以上、文章・談話の中間的単位として、「改行段落」と「段」とを比較し、「段」を分析単位とすることの妥当性を明らかにした。本研究は、基本的には、佐久間（2003, 2010）の「段」の定義に従う。まとめると、以下の4点となる。

- ① 「段」の構成要素の最小単位は「節」である。
- ② 「段」は、文章の内部の節集合が、何らかの形態的指標を伴った内容上のまとまりとして、相対的に他と区分される部分である。
- ③ 「段」は、その段の中心文（統括文）の統括の機能領域によって成立する。
- ④ 「段」は、統括の機能領域により、「多重構造」（佐久間 2010:47）を成す。

2.3.1.2. 「段」の成立にかかわる「中心文」「統括機能」の定義

市川（1978:157）は、文章の構成を「統括」の観点から2類5種ⁱⁱⁱに分類し、「統括機能」について、以下のように述べる。

ここに「統括」というのは、なんらかの意味で、文章の内容を支配し、または、文章の内容に関与することによって、文章全体をくくりまとめる機能をいう。文章中の

ある部分が統括機能をもつことによって、その文章全体は、二段または三段に大きくまとめられる。

市川（1978）のいう「統括機能」は、文章全体の構成にかかわる機能であることがわかる。しかし、この記述は、文・段落の配列、接続のあり方から実例を分析する際の文・段落相互の関係の記述と矛盾しているように感じられる。実例を扱う際には、段落を統合して、(大) 段落が成立することを述べているので、段落同士を統括する原理（おそらく「統括機能」に相当するもの）が必要なはずだが、その記述はない。「統括機能」という用語が用いられているのは、この pp.157-158 のみであることから、この概念が、全体の議論の中にはっきりと位置付けられてないという印象を受ける。

それとは対照的に、文の接続にも統括を認めたのが永野（1986）²¹である。永野（1986:327-328）は、「統括」の原則を以下のようにまとめている。

(一) 位置による統括（接続関係における統括）

- (1) 展開型・反対型・累加型…末尾統括
- (2) 同格型・補足型……………冒頭統括
- (3) 対比型・転換型……………零記号統括

(二) 文法的特徴をもつ言語形式による統括（連鎖関係による統括）

- (1) 主語の連鎖の観点から見いだされる統括
 - (i) 現象文による統括……………末尾統括
 - (ii) 判断文による統括……………冒頭統括・末尾統括・冒頭末尾統括
 - (iii) 述語文による統括……………冒頭統括・末尾統括
- (2) 陳述の連鎖の観点から見いだされる統括
 - (i) 陳述部の重層構造における統括…叙述辞は述定辞に、述定辞は、伝達辞に統括される
 - (ii) 陳述部の同位の層における統括…
 - 歴史的現在、過去形によって統括される
 - “の”を含む辞はそれ以外の辞を統括する
 - (iii) 零記号の辞によって統括されるものがある

²¹ 市川（1978）の索引で「統括」に触れられている箇所は、上記の pp.157-158 以外には、永野（1969）の引用のみである。

上記の分類は、「原則」であり、実際には、例外も見られることを指摘している。特に、本研究は、(2) (ii) 「“の” を含む辞はそれ以外の辞を統括する」部の詳述を目指すものである。詳細は、2.3.2 で検討する。

永野 (1986) は、文・段落・文章という単位の「重層構造」を、「位置」とさまざまな「言語形式」の統括の観点から描き出そうとした点が評価されるが、文と文章の間の中間的単位として「段落」を用いた点には、疑問が残る²²。

一方、佐久間 (2003:95) は、2.4.1 の「段」を文章の単位とし、「統括」と「統括機能」について、以下のように定義する。

統括とは、文章・談話の基本的な構造と機能の原理である。統括機能とは、複数の文や発話の集合体が大小のまとまりを作り上げる働きにほかならず、話題の相対的なまとまりの度合いを有することを、その本質とするものである。

相対的な統括力によって、「段」が成立し、それが相互に関連しあって「連段」をなし、最終的に「文章・談話」に至るという「相対的統括」が明確に示されている。また、佐久間 (2010:17) は、「段」について、以下のように定義する。

「段」とは、複数の形態的指標を有する「中心文」と「中心発話」の統括機能により成立する、複数の話題のまとまりからなる多重構造を本質とする文章・談話の成分である。

上記の記述から、「段」は、中心文の統括領域であり、「段」の多重構造は、中心文の相対的な統括力によって成立するとみることができる。中心文について、佐久間編著 (2010) は、以下のようにまとめている。

「中心文」≡「パラグラフ(paragraph)」の「トピック・センテンス(topic sentence)」
文と文章・談話の中間に位置する「段」の中核となる文であり、同一の

²² 佐久間 (2003:94) も、「段落」を「文章の成分」とする場合、その統括の有無を客観的に認定する基準が問題になると指摘している。

話題を表す他の文集合をまとめる「統括機能」を有する「統括文」として、新たに規定された文章論の概念である。(p.47)

その上で、佐久間編著(2010)は、佐久間(1995)の全4類17種を一部修正し、全7類16種にしている²³。以下に、その分類を示す。

中心文の段統括機能の分類(7類16種)

- ① 話題文(段で主に取り上げる事実や問題について述べる文)
〈a.話題提示〉〈b.課題導入〉〈c.情報出典〉〈d.場面設定〉〈e.意図提示〉
- ② 結論文(段で取り上げた話題に対する見解や要望などを述べる文)
〈f.結論表明〉〈g.問題提起〉〈h.提案要望〉
〈i.意見主張〉(〈i-1.見解表明〉〈i-2.概念規定〉〈i-3.用例解説〉)
〈j.評価批評〉〈k.解答説明〉
- ③ 概要文(文章や段で述べる内容全体の要約や引用の文)
〈l.概略要約〉〈m.主題引用〉
- ④ 前提設定(段の前後や中間で前置きの役割を果たす文)
- ⑤ 補足追加(段の前後や中間で後付けの役割を果たす文)
- ⑥ 承前起後(段の前後や中間で話題移行の役割を果たす文)
- ⑦ 展開予告(段の前後や中間で展開予告の役割を果たす文)

②結論文〈i.意見主張〉は、講義の談話分析に合わせて、(〈i-1.見解表明〉〈i-2.概念規定〉〈i-3.用例解説〉)に下位分類されているが、この分類は、講義の談話のみならず、今回、分析対象とした新書の文章にも適応可能な分類である。これらの分類は、意味内容に加え、出現位置、文の種類や、特定の言語形式によって認定されるという点に特徴がある。

本研究で扱うノダについては、②結論文〈k.解答説明〉の中心文の言語形式として、「～ハ」という提題表現の判断文、コ系の指示表現、「つまり」「だから」等の接続表現とともに挙げられている。たしかに、ノダは、②結論文の形態的指標だといえるだろうが、それだけではなく、①～⑦の全ての中心文の形態的指標になりうる。全ての分類にノダが用いられているのであれば、それは、分類の基準として機能していないのではないかといわれ

²³ 修正の詳細は、佐久間編著(2010:85)参照。

るかもしれない。しかし、それぞれの中心文に用いられるノダは、表現形式の特徴、共起する接続表現の特徴があり、中心文の分類が特定できる。本研究は、多様なノダの統括機能を、表現形式・出現位置・他の形態的指標（主に接続表現）との共起といった条件から分類し、文章の展開的構造を捉えるための手がかりとする方法を検討することを目的とする。

本研究では、ノダと共起する接続表現の接続類型から、ノダの統括機能の分類を行う。分類に際しては、市川（1978）の3種8類の接続関係の基本的類型に従う。

順接型・逆接型＝論理的結合関係—二つの事柄を論理的に結びつけて述べる関係。
添加型・対比型・転換型＝多角的連続関係—二つ（以上）の事柄を別々に述べる関係。
同列型・補足型・連鎖型＝拡充的合成関係—一つの事柄に関して拡充して述べる関係。

市川（1978:93）

佐久間（1990:58）は、永野説を検討し、自身の接続類型における統括関係を論じており、ノダの統括機能を分類する際の手がかりとして用いる接続表現の統括機能は、これに従う。

Aの3類型は、特に問題はなく、永野説と一致する統括方式になる。

A①順接型——尾括式 ②逆接型——尾括式 ③添加型——零括式・尾括式

Bの接続類型については、さらに検討の余地がある。下線を引いた類型は新たに付け加えたものだが、実例によって考えてみよう。

B④対比型——零括式・尾括式 ⑤同列型——頭括式・尾括式・零括式

⑥補足型——頭括式・尾括式 ⑦転換型——頭括式・中括式・尾括式・零括式

⑧連鎖型——尾括式・頭括式・零括式

2.3.2. 永野（1986）のノダの統括機能の再検討

本節では、文章論において、ノダに「統括機能」があることを指摘した永野（1986:326）の記述に対して、先行研究と実例を用いて批判的に検討することで、その問題点を明らかにする。

永野（1986:326）は、ノダについて、以下のように記述し、「統括機能」を認めている。

実際の文章としては、「のだ」「のである」などの辞を持つ文が、段落の結尾に置かれることによってその段落を統括し、また、文章の最後尾に置かれることによってその文章全体を統括する—これが、一つの典型として認められるのである。

もちろん“の”を含む辞は、段落や文章の結尾にのみ置かれるわけではなく、途中に位置することも多いし、他の“の”を含む辞と相呼応して統括をより強く発揮する場合も少なからずある。“の”を含む辞は、文章の統括の観点に立つ場合、最も重要なものと考えらるべきである。

本研究も、基本的には、ノダに「統括機能」を認める立場をとるが、この記述だけでは、ノダの「統括機能」の記述としては、不十分だと考えられる。本節は、永野（1986:326）のノダの「統括機能」の記述の問題点として、以下の3点を検討する。

- ① 出現位置とその統括の機能領域について
- ② 相対的な統括力について
- ③ 統括の機能領域の単位について

2.3.2.1. ノダの出現位置と機能領域の検討

永野（1986:326）は、「実際の文章としては、「のだ」「のである」などの辞を持つ文が、段落の結尾に置かれることによってその段落を統括すると述べている。例えば、霜崎（1981）も、「パラグラフ」の結尾に「ノdeal」が多いという同様の指摘をしている。

奥田（1990:206-208）は、主に、《説明》《説明され》の関係からノダを捉えようとしているが、《説明》の観点では分析できないものについて、《強調》の機能を認め、《場面きりかえ的な機能》があると指摘している。その細分類である《場面とじ的な機能》とは、ある場面の終了を表す機能である。この記述は、文章のまとまりを論じる「統括論」よりも、文章のつながりを論じる「接続論」に寄与する記述であると考えられる。

これらの一連の研究は、「段」の締めくくりにノダが現れるという現象を指摘している点では同一と見なすことができるが、永野（1986）は、ノダを単なるマーカーとしての機能だけでなく、「段落」をまとめあげる積極的な機能、すなわち、「統括機能」を認めている

という点で、他の先行研究と異なる。

ここで押さえておく必要があるのは、ノダに統括機能があるからといって、ノダが付された当該文が、必ずしも、中心文になるとは限らないということである。以下に例を示す。

(31)

665 対偶はつねに正しい論法である。

666 たとえば、「自然数 x と y との積 $x \cdot y$ が奇数ならば x 、 y はともに奇数である」を説明するのに、まず結論の「 x 、 y はともに奇数である」を否定して、「 x と y のいずれかが偶数である」と仮定する。

667 そうすると、その積 $x \cdot y$ は偶数になるので、積 $x \cdot y$ は奇数であるという仮定に反する。

668 したがって x 、 y のいずれかが、偶数であるという仮定は成り立たない。

669 つまり、 x 、 y はともに奇数であるということになる。

670 この議論は数学のように明確な理論体系をもつ世界では使えるが、自然科学やその他の、体系のはっきりしない分野では使うことはできない。

671 たとえば、「物体が落下すれば重力が存在する」ということを主張するために、「重力がなければ物体は落下しない」ことを見せたとしても、「物体は磁力によっても落下することがある」ので、証明にはならないのである。

672 7 **さまざまな説明による信頼性の向上**

(『「わかる」とは何か』)

(31)は、文 665～669 まで、具体例を挙げながら、対偶が常に正しい論法であることが述べられる。文 670 から、対偶が自然科学や体系のはっきりしない分野には使えないことが述べられる。文 671 は「たとえば」という接続表現をとまない、文 670 の内容を具体的に述べる関係である。ノダが使用されているが、文 670 と文 671 との接続関係が同列型であることから、文 670 が統括力のある中心文であることがわかる。つまり、文 671 のように、ノダが使用されているからといって、ノダが付された文が中心文になるわけではないのである。段の中心的内容を段の終了部で述べることと、ノダが段の終了部に現れることとは、別の事象として考える方がよいだろう。ノダは、あくまでも、段の統括する範囲を指定するものとして捉えるべきである。当然、中心文と一致することが多いが、(31)のように、段

のまとまりの範囲を表すだけの場合もある。

このように見ると、霜崎（1981）や奥田（1990）のように、現象として、段の終了にノダが現れるというように、ノダを「段」の終了を表すマーカーとして捉えるほうがよいと考えられるかもしれないが、本研究は、永野（1986）の指摘するように、ノダに「統括機能」を認める立場を採る。(31)のような問題は、ノダを、先行文（群）をまとめるという単一の機能で分析しているところに原因があると考えられる。このことは、次に指摘する「段の開始に現れる」ノダを説明することができないという問題につながる。

野村（2000:154）は、永野（1986）の指摘を「言語現象の記述としては正しい」としながらも、「ノダがパラグラフの最初にも最後にも位置しうるのであれば、この本質をテキストのなかの位置ではなく、「のだ」の文が近傍の複数の文とのあいだに関係性を導入する、という点にもとめる必要がある。」と指摘している。

(32) ①もともと交換輸血というのは、非常に重症な黄疸の治療法なのである。②たとえば母親がRh血液型がマイナスで、胎児がプラスだと、重症な黄疸になることがある。

(山内逸郎『新生児』 野村（2000:151-152）例(93)再掲)

(32)は、①で、「交換輸血」の話題が提示され、概略的に「非常に重症な黄疸の治療法」であることが述べられる。この文①は、佐久間（1995）の中心文の「概略文」と考えることができる。文②は、接続表現「たとえば」をともない、文①に対する具体例を述べている。文①と文②の関係は、①が文②を統括するという関係である。①のノダは、後続文を統括するということになり、先述の永野（1986）の「段落の結尾に置かれ」という出現位置と統括の機能領域（先行か後続か）に関しての記述と矛盾する。以上のように、ノダに統括機能を認める場合、先行文（群）をまとめるだけではなく、後続文（群）をまとめる場合もあることを確認した。

2.3.2.2. ノダの相対的な統括力の検討

2.3.2.1 では、ノダの「統括機能」（永野 1986）の機能領域の記述に問題があることを指摘した。次に、ノダは、常に「統括」機能を発揮するのかという疑問について、先行研究をもとに検討する。

野田（1997:170-175）は、従属節のノダを取り上げ、聞き手の知識の有無がノダの使用

条件であることを論じている。その中の一つであるいわゆる「前置き」のノダは、菊池(2000)や石黒(2003)などでも、ノダの中心的な機能からは外して論じられてきた。文法的にみると、判断のもととなる事態を想定できないという点で、他のノダの機能とは異なる。しかし、この「前置き」のノダの一部は、野田(1997)の指摘する対人的機能のみならず、文章・談話の統括論にも、重要な意味を持つものである。

(33) 永尾「部長、キタスポーツの件なんですが、明日には契約を済ませまして、来月には全て納品する予定です。」

(柴門ふみ・坂元裕二『東京ラブストーリー』 野田(1997:173) 例(23) 再掲)

この(33)の「ノダガ」は、いわゆる「前置き」のノダと呼ばれるものであるが、新たに「キタスポーツの件」という話題を取り上げている。つまり、新たな話題を開始するためにノダが使用されているということである。これは、従属節の例であるが、例えば、石黒(2003:23-24)の例は、「ノダガ」の複文を、区切って単文にしても問題がないことを指摘している。

(34) 元日に初日の出を見に江ノ島に行ったんだけど、ものすごい数の人が出て、びっくりしちゃった。 (石黒(2003:23) 例(43) 再掲)

(35) 元日に初日の出を見に江ノ島に行ったんだ。ものすごい数の人が出て、びっくりしちゃった。 (石黒(2003:24) 例(44) 再掲)

例(34)は、新たに「元日に初日の出を見に江ノ島に行った」ことを話題として提示する「前置き」のノダガであるが、例(35)のように、文を区切ってノダとしても、「話題提示」の機能は失われていないことがわかる。実例でも確認しておく。

(36)

33 で、あの、言い換えの時に、あの、強く疑問に思うことは、ま、話し言葉一の場合は別として、書き言葉っていうのは、あとから推敲するんですよね↑。

34 推敲、つまり、あとから、書き言葉の場合、見て直すことができる。

35 それなのに、なぜ言い換えの表現が残るかですよね↑。

ま、話し言葉の場合であれば、その、自分の言ったことがあんまりよくないことかな
一とか、相手に理解してもらえないかなと思って、言い換えるってことはあると思う
36 んですけども、書き言葉の場合は、一番理解してもらいやすそうな言葉、一番自分の
気持ちを素直につく、伝えられる言葉というのを、考えれば選ぶことができるのに、
でも、わざわざ二つの表現を通して示す。

37 どうして推敲段階で削れるはずのそういう表現を複数そのまま表現するのか、という
のが一つの疑問です。

(講義 A)

文 33 は、「で」という転換型の接続表現をともなうて、提題表現「言い換えの時に、あ
の、強く疑問に思うことは」によって新たな話題を提示し、さらに提題表現「書き言葉つ
ていうのは」によって、より限定的な話題を開始する。この「書き言葉つていうのは」と
いう提題表現に対応するのが、ノダをともなうた叙述表現「あとから推敲するんですよね↑」
である。文 34 は、「つまり」という同列型の接続表現をともなうて、文 33 の「推敲」と
いう語句を「見て直すことができる」と換言している。文 35 は、「それなのに」という逆
接の接続表現をともない、「なぜ言い換えの表現が残るかですよね↑。」と前提に対する意
外な帰結に疑問を提示している。ここで、文 33 の大きな提題表現である「言い換えの時に
強く疑問に思うことは」の叙述表現が満たされることになる。

文 36 は、話し言葉と書き言葉を対比させながら、「書き言葉の場合は」という提題表現
に対して、「一番理解してもらいやすそうな言葉、一番自分の気持ちを素直につく、伝え
られる言葉というのを、考えれば選ぶことができるのに、でも、わざわざ二つの表現を通
して示す」と段 33～35 の疑問をより詳細に叙述している。文 37 「どうして推敲段階で削
れるはずのそういう表現を複数そのまま表現するのか、というのが一つの疑問です」は、
文 36 に対して、順接型の接続関係であると同時に、文 35 を中心文とした文 33～35 と同列
型の接続関係となり、文 33～37 を統括し、「話題提示」の段を成立させる。

この段 33～37 の中心文（統括文）は、文 37 であり、文 33 のノダ文ではない。このノダ
は、例(35)同様、「話題提示」の機能を果たしていると考えられる。

このように、ノダに「話題提示」の機能を認めている先行研究には、奥田（1990:208）
の《場面おこし的な機能》などがあるが、野村（1995:67）は、「本研究で対象とした日常
会話では、『のだ』発話が話題のまとまりを開始する機能をになう率がたかい。」と指摘

している。さらに、「以上のことは、書き言葉と話し言葉とで『のだ』発話の分布が異なることを予測させるものである。」とも述べており、(34)(35)が話し言葉であることとも強い関連を感じさせる記述である。これは、本研究の課題でもあるので、ここでは、詳しく触れない。

先述の永野（1986）の「ノダは、段落の結尾に置かれることによってその段落を統括」するとした。先の例(33)(34)(35)(36)の分析で明らかになったように、これらのノダは話題提示のノダであり、(32)のように段の概略を述べる中心文のような統括力の強いものではない。だし、ノダを取り除くことで、後続文への文脈の統括力が弱まることが確認されることから、ノダが何らかの「統括機能」を発揮していることは予想できる。

(37)

33a で、あの、言い換えの時に、あの、強く疑問に思うことは、ま、話し言葉一の場合は別として、書き言葉っていうのは、あとから推敲しますよね↑。

34 推敲、つまり、あとから、書き言葉の場合、見て直すことができる。

35 それなのに、なぜ言い換えの表現が残るかですよね↑。

(例(36)改変)

例(37)の文 33a は、聞き手に対して「書き言葉っていうのは、あとから推敲しますよね↑」と「推敲する」ことを単純に確認する文となる。当然、この確認が前提となり、話題提示となることも考えられるが、例(36)は、「推敲するんですよね↑」と、ノダ文を用いることで、「推敲するかどうか」を確認するのではなく、「推敲するということを確認したということはどういうことか」を意味することになるため、後続文へ文脈が展開していく力が例(37)と比較して、相対的に強いといえる。

次に、従属節のノダカラの用例を検討する。野田（1997:182）は、従属節の「ノダカラ」と接近する「ノダ」の存在を指摘している。

(38) 「ねえ、給料は上がるのかしら？」

「さあ。何しろ倒産しかかっているんだ。無理じゃないかな」

(赤川次郎『女社長に乾杯！(上)』p.69 野田（1997:182）例（63）再掲）

(39) 「よかろう。ここまで来たのだ。とことんまで追って見たまえ。課長の僕が説いてみ

る。」 (松本清張『点と線』p.139 野田 (1997:182) 例 (64) 再掲)

これらの例(38)(39)は、「ノダ」を「ノダカラ」に置き換えることが可能である。

(40) 「ねえ、給料は上がるのかしら？」

「さあ。何しろ倒産しかかっているんだから、無理じゃないかな」

(赤川次郎『女社長に乾杯！(上)』p.69 野田 (1997:182) 例 (65) 再掲)

(41) 「よかろう。ここまで来たのだから、とことんまで追って見たまえ。課長の僕が説いてみる。」 (例(39)一部改変)

この点から、例(38)(39)のノダについて、野田 (1997:182) は、「後続の文に従属した特殊なものだ」としている。それに対して、田野村 (1990:108) や、石黒 (2003:21) は、接続表現「以上」の論理を持ち込んで説明することで、特別なものではないとする立場を採っている。本研究もこれらのノダは、特殊なものとして扱う必要はないと考える。これらのノダは、多様なノダの機能の一側面が強調されたにすぎない。以下の例(42)は、野田 (1997) が基本的な機能として認める先行文に対する「関係づけ」の機能を有しながら、「ノダカラ」に機能も持ち合わせているノダが用いられている。

(42)

617 では、どこでその並行性が成立しなくなるかといえ、それを形式化された推論形式の世界で理論的に知ることは不可能である。

618 一方の世界で成立していることが他方の世界で成立しているはずだということについて、いちいちその成立を確認するという作業が必要であり、成立していない事象を確認したことによってはじめて、並行性がこれについては成り立っていないということにならざるをえない。

619 異なったものの比較でなくても、理論的立場からの結論はかならず事実として確認するという作業をとまわねば、それを信じることはできないのである。

620 そういった意味でも、理論から導かれる結論は、あくまでも存在の可能性が高いもの

であるということにとどまらざるをえない。

- 621 あらゆる自然科学において、実験によって事実を確かめるという作業がなされる理由はそこにある。

(『「わかる」とは何か』)

文 617 は、「どこでその並行性が成立しなくなるか」という話題を取り上げて、「それを形式化された推論形式の世界で理論的に知ることは不可能である」と概略している。文 618 は、文 617 を詳述しており、文 617 に統括されるという関係である。文 619 は、文 617～618 を根拠として、「異なったものの比較でなくても、理論的立場からの結論はかならず事実として確認するという作業をともなわねば、それを信じることはできない」という結論を述べる順接型の接続関係である。このノダは、先述の永野（1986:326）の記述を満たすもので、野田（1997）においても、「関係づけ」のノダということになり、特別なものではない。ところが、文 619 の後続文である文 620 は、文 617～619 を根拠に、「理論から導かれる結論は、あくまでも存在の可能性が高いものであるということにとどまらざるをえない」と結論付けているのである。この文 619 と 620 の関係は、例(38)(39)と同様のノダカラに相当するノダであり、野田（1997）が特殊とみなしたものである。試みに文 619 と 620 を「ノダカラ」でつないでみる。

(43)

- 619a 異なったものの比較でなくても、理論的立場からの結論はかならず事実として確認するという作業をともなわねば、それを信じることはできないのであるから、そういった意味でも、理論から導かれる結論は、あくまでも存在の可能性が高いものであるということにとどまらざるをえない。

(例(42)一部改変)

例(43)のように、ノダをノダカラに置き換えたとしても、文脈の大きな変化がないことが確認できる。つまり、後続文との関係を従属節に関わるものにおいてのみ観察したこと、「先行文をまとめながら、後続文の根拠となる」というノダの統括機能の「多重性」を無

視したところに野田（1997）の問題があると考えられる。石黒（2003:22）は、例(42)のような例を用いて「「のだ」のテキスト的な機能」について言及しており、このような例が「まれ」であるとしているが、実際に新書の文章を分析すると、決して「まれ」とはいえないことがわかる。

2.3.2.3. ノダの統括機能領域の単位の検討

2.1 では、ノダの機能領域について、その方向が前方であるか、後方であるかを検討した。ここでは、永野（1986:326）が指摘した統括機能の単位である「段落」について検討する。

これまで、文を超えた単位という点で共通していることが重要であったため、特別、「段」「段落」「パラグラフ」について区別することはなかったが、ここでは、永野（1986:326）の「段落」と本研究が扱う分析単位である「段」との違いについて触れる必要がある。次の例(44)は、段落だけでなく、小見出しをまたいで「段」が成立する例である。

(44)

629 いわゆる「生得観念」の批判

630 医師であったロックの手腕は、ひろく信頼されていたといわれる。

(中略：631～633)

634 なお胎内にある子どもも、おそらく「欠如や不安」を感じ、また「飢えと暖かさの観念」をもつことだろう。

635 その意味で、人間は誕生してくるその以前に「いくらかの観念」を受容すると想定することは、理にかなっている。

636 とはいえ、そうした観念は、論者たちのいう「生得観念」とはおおよそ距たっているのであって、たとえばしばしば生得的な原理として挙げられる「存在するものは存在する」、「おなじものが、存在すると同時に存在しないことは不可能である」といった命題を、また、その根底にあるだろう「ひとしさ」といった観念を、子どもが胎内からたずさえて世界へと生まれでてくるとは思われない（第二巻第九章五節以下）。

637 たとえばまた、子どもは七まで数えることができるようになり、ひとしさという観念を獲得してはじめて、三足す四が、七とひとしいことを知る。

638 子どもが「 $3+4=7$ 」という命題が真理であることを知るための「根拠と手段」は、「小枝とさくらんぼはおなじものではなどことを知るさいのそれとおなじなのであ

る（第一卷第二章十六節）。

- 639 デカルトが物体の属性と考えた延長についてはどうか。
- 640 ロックは『知性論』初版の公刊後、モリヌークスからの来信で、興味ぶかい問題を知る（一六九三年三月二日づけ書簡）。
- 641 生まれつき視覚をもたない人間でも触覚によって立方体と球体の区別を知っているけれども、当人が開眼手術によって視覚を獲得したとき、当初そのふたつを見わけることができるだろうか、という設問である（いわゆる「モリヌークス問題」。本書、第5章、第7章をも参照）。
- 642 ロックの答えは、否である。
- 643 そのひとは「手を不均等なしかたで圧迫する立方体の尖角が、目には立方体の尖った角としてあらわれる」という経験を経ていないからである（第二卷第九章八節）。
- 644 「球がひとつの面によって限界づけられていること」（本書、七頁）は、デカルトがそう考えたようには、万人の直観の対象ではなく、すべての人間が共有する本有的な観念でもない。
- 645 **経験にこそ、いっさいの知の基礎がある**
- 646 むしろこう想定すべきではないだろうか。
- 647 人間のこころはいつてみれば白紙の状態で生まれてくる。
- 648 いっさいは経験によって獲得されるのである。
- 649 じっさい、ロックはとりあえず、そう主張する。
- 650 よく知られている一節を引用しておこう（『知性論』第二卷第一章二節）。

（『西洋哲学史 近代から現代へ』）

文 639 で、新たな話題「デカルトが物体の属性と考えた延長についてはどうか」が提示され、文 640～641 で、文 639 で提示された話題の具体例「モリヌークス問題」が挙げられる。文 642 でロックの解答を端的に表し、文 643 でロックによる解答の根拠を補足する。文 644 は、筆者による補足であるが、否定を述べるのみで、それに代わる論を提出するには至っていない。ここで、「いわゆる生得観念の批判」という見出しは終了する。そして、新たに文相当 645 「経験にこそ、いっさいの知の基礎がある」という見出しが開始される。この見出しの開始の文 646 が「むしろ」という対比型の接続表現によって、文 644 で否定された論の代わりが「こう」という後方指示の指示表現をともなって提示される。文 647

～648は、「こう」の指示内容であるが、文648のノダの統括の機能領域は、文646～648まででは終わらない。この「いっさいは経験によって獲得されるのである。」は、文639～641における課題の解答642「否である」に対して起こる「なぜ」という疑問に解答するというかたちで、文639～648を統括するのである。さらに、先行の見出し「いわゆる生得観念の批判」全体を統括している「結論文」の中心文である。

このようにノダによる統括機能を分析すると、ノダは、段落の途中(文648)で、統括機能を発揮し、その機能領域は、「段落」はおろか、見出しを超える(文629～648)ことがわかる。永野(1986:326)のいう「段落」を統括の単位としてしまうと、このようなノダの統括の多重機能は分析できない。ここに、分析単位を「段落」としてしまうことの弊害と、「段」を分析単位とすることの意義が見出せるだろう。

2.3.2.4. 永野(1986)のノダの「統括機能」の問題点

本節では、永野(1986:326)によるノダの「統括機能」における「実際の文章としては、「のだ」「のである」などの辞を持つ文が、段落の結尾に置かれることによってその段落を統括し、」という記述を、先行研究と実際の用例をもとに、批判的に検討してきた。2.3において明らかになった問題点は、大きく、以下の3点にまとめられる。

① ノダは、段の開始に現れ、後続文(群)を統括することがある。(例(32)参照)

ノダが「段」の開始部に現れ、後続文(群)を統括する現象についての言及がない。

② ノダは、常に近傍の文(群)を「統括」するわけではない(例(35)(36)参照)

いわゆる「前置き」の一つである「話題提示」のノダは、相対的に統括力が弱く、後続文にさらに統括力の強い中心文を求めるという「被統括機能」(積極的に統括されようとする機能)が発揮されることがあるが、この現象に対する言及がない。

③ ノダの統括機能の領域は、「段落」を単位としているわけではない。(例(44)参照)

「段落」の途中のノダが、「段落」を超えて複数の文集合を統括し、「段」を成立させることがあるが、この現象について言及がない。

以上のように、永野(1986:326)の記述の最大の問題は、ノダによる「統括機能」を、「段落の結尾に置かれることによってその段落を統括」するという「段落」を単位とした単一の機能として捉えてしまったところにあるといえる。

第3章 本研究の対象と方法

本研究は、文章・談話の展開的構造を捉えながら読解する方法を検討するものである。その端緒として、本研究は、論理的な文章・談話の中で、文末・節末表現ノダがどのように「段」（情報の相対的なまとまり）の展開的構造を成立に関わるのかを明らかにすることを目的とする。

3.1. 分析資料

本研究で扱う新書の文章と講義の談話は、複雑な情報を効率よく伝達する「説明文」のジャンルに属するという点で共通する。客観性の高い「説明文」の中で、ノダがどのように文脈展開に寄与しているのかを考察する。

分析する資料は、新書の文章 6 編、講義の談話 4 編である。まず、新書の文章の詳細を示す。また、それぞれの（ ）内に示す。

- ①伊達宗行 (2010) 『極限の科学—低温・高圧・強磁場の物理』 (以下, 『極限』)
- ②桜井邦朋 (2007) 『宇宙物理学入門—宇宙の誕生と進化の謎を解き明かす』 (以下, 『宇宙』)
- ③神野直彦 (2010) 『「分かち合い」の経済学』 (以下, 『「分かち合い」』)
- ④熊野純彦 (2006) 『西洋哲学史 近代から現代へ』 (以下, 『西洋』)
- ⑤長尾真 (2001) 『「わかる」とは何か』 (以下, 『「わかる」』)
- ⑥齋藤孝 (2001) 『「できる人」はどこがちがうのか』 (以下, 『「できる人」』)

「新書」と言っても、その内容は、多岐にわたる。本研究は、アカデミック・ジャパニーズに寄与することを目的としており、専門分野の入門的な内容であること、執筆者が大学教員であることを基準とする。また、講義の談話との差を明確にするために、より文章表現らしさのあるダ・デアル体で書かれたものを扱う。①②は理科系、③④は人文系の専門分野の入門的な文章、⑤⑥は人文系の専門分野を一般的に解説した文章である。

講義 4 資料²⁴については、講義 A, B は、調査のために約 60 分に短縮したもの、C1, E1 は、約 90 分の談話資料である。それぞれの講義の概要を以下にまとめる。講義 A, B は、

²⁴基盤研究 (c) 「学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発」研究代表者西條美紀教授の資料の一部の使用許可を研究分担者の佐久間まゆみ教授からいただいた。

佐久間編著 (2010:25) の概要を引用した。

- ①講義 A: 接続詞による「言い換え」の技法についてまず、「リダンダンシア」を例に定義して、次に、書き言葉の言い換えの特徴として、接続詞「すなわち」「つまり」「要するに」の用法を述べる。さらに、話し言葉の「言い換え」について、接続詞「ていうか」の用法を説明し、最後に講義内容の要点をまとめて、次回の講義の予告をする。
- ②講義 B: 「多重」の技法について、まず、「SUNOMO (スノモ)」を例に定義して、次に、親父ギャグや駄洒落、さらに、文学作品における「引用」の技法として、「金言使用・隠引法・暗示引用・明示引用」の例を説明し、「引用の多重」の技法をまとめる。また、井上作品の「パロディの多重」の例を説明して、技法をまとめ、最後に、次回の講義の予告をする。
- ③講義 C1: 村上春樹の特に短編小説について、「出来事を核」としていること解説し、ナラトロジーの手法を用いて、「土の中の彼女の小さな犬」を分析する。さらに、「納屋を焼く」を分析し、語り口が饒舌であるという村上春樹の短編小説の構造の特徴を明らかにし、最後に講義の要点をまとめ、質問を受け付け、次回の講義の予告をする。
- ④講義 E1: 日本語の「人称代名詞」について、学生のリアクションペーパーの訂正を通して定義し、その特徴を3点挙げ、まとめる。さらに、「人称代名詞」と、親族関係・身分関係を表す「呼称」との関連を述べる。最後に、講義の展開をまとめ、講義中予告していた問題をリアクションペーパーにまとめるよう学生に指示し、講義を終了する。

【表 1】講義の談話資料の概要

	講義 A	講義 B	講義 C1	講義 E1
講義者の年代	30 代	30 代	40 代	50 代
性別	男性	女性	男性	男性
分野	文章表現論	文章表現論	現代文学	日本語学
教材	プリント	プリント	プリント	プリント
教具	板書	板書	PowerPoint	教科書

(佐久間編著 2010:20 再掲)

本研究は、新書の文章 6 編、講義の談話 4 編に現れる全てのノダを分析対象とする。それぞれの資料の文数とノダの出現数を表にまとめる。

【表 2】新書の文章の総文数に対する文末のノダの割合

①『極限の科学』	237 [67]	8.30%	2854	100.00%
②『宇宙物理学入門』	71 [11]	6.40%	1118	100.00%
③『「分かち合い」の経済学』	180 [7]	9.00%	2010	100.00%
④『西洋哲学史 近代から現代へ』	234 [22]	6.40%	3639	100.00%
⑤『「わかる」とは何か』	117 [17]	7.40%	1589	100.00%
⑥『「できる人」はどこがちがうのか』 58	125 [29]	4.60%	2719	100.00%
合計	964 [153]	6.90%	13929	100.00%

【表 3】 講義の談話の総文数に対する文末のノダの割合

講義の談話	ノダ		総文数	
	数	割合	数	割合
①講義A	46 [64]	11.00%	419	100.00%
②講義B	111 [81]	23.40%	474	100.00%
③講義C1	145 [109]	23.50%	617	100.00%
④講義E1	105 [52]	17.90%	587	100.00%
合計	407 [306]	19.40%	2097	100.00%

([] 内の数字は、節末に現れるノダの出現数を表す。)

文末のノダの出現率は、新書の文章 (6.90%) に対して、講義の談話 (19.40%) のほうが多い。また、資料ごとにノダの出現傾向にも異同がある。新書の文章は、⑥『「できるひと」は、どこがちがうのか』(4.60%)、講義の談話には、①「講義A」(11.00%) が、他の資料と比べて、出現率が少ないことがわかる。これは、ノダの使用には、必須の場合だけでなく、任意の場合があること、また、ノダと互換性のある他の表現形式があることなどから、表現の選択に個人差が見られるためだと考えられる。詳細は、それぞれ第4章 (新書の文章)、第5章 (講義の談話) で述べることにし、ここでは、資料の全体を概観するに留める。

3.2. 分析の観点：ノダの統括機能

本研究は、ノダを「段」の成立にかかわる「統括機能」の観点から分類する。ノダの統括機能は、「統括力」と「統括の方向」とを合わせた機能とし、文内部の要素を統括する、あるいは他の要素に統括されることで、文を成立させるだけでなく、段、連段を成立にかかわるものである。

3.2.1. ノダの統括機能Ⅰ「統括力」

複合辞のノダは、他の言語形態的指標、出現位置、そして、ノダが付される文の意味内容によって、その統括する範囲、また、「統括・被統括の相対的な力関係」(佐久間 2003:95) が異なる。以下に示す(45)は、比較的統括力の強いノダの例、(46)は統括力の弱いノダの例である。

(45)

- 281 三角形を書いて分度器をあてて、三つの角の角度を測ってみよう。
- 282 それぞれの角度を厳密に測って合計して、ちょうど一八〇度になるだろうか。
- 283 厳密に測れば測るほど一八〇度からわずかにずれた値となるにちがいない。
- 284 さまざまな異なった形の三角形を書いて測ってみても同じである。
- 285 このように実際の三角形を調べてみると、内角の和はつねにほんとうに一八〇度になっているわけではない。
- 286 したがって、実験から「三角形の内角の和は二直角である」という結論はほとんど出すことができない。
- 287 つまり、これは実証的に証明することができないことなのである。 [1. 換言]
(『わかる』)

これは、「接続表現」の統括機能の目立つ文段である。文 285 の接続表現「このように」で、事実をまとめるが、文末叙述表現「ワケデハナイ」と、否定形により、後続に情報を求めようとするため、「段」としての統括は相対的に弱い。文 286 も、接続表現「したがって」で、結論を述べるかたちで、接続表現としての統括力は強いが、文末が「ナイ」と否定形となっており、相対的に統括力が低くなる。文 287 は、先行文 286 の内容を言い換えることで説明している²⁵という点では、文 285 に近いが、統括力の強い接続表現「つまり」、そして、前方照応の指示表現「これ」が提題化されることに加え、統括力の強い文末叙述表現ノダを伴うことによって、文 286 を言い換えるだけでなく、文 281～286 を統括する統括力の強い文となっており、文 281～287 の「文段」を成立させている²⁶。

例(45a)のように、ノダを取り除くと、文 286 と文 287 との換言の関係を表すのみとなり、(45)よりも、「文段」としてのまとまりが希薄になることから、ノダによって、「文段」としての統括力が高まっていることが確認できる。

(45a)

- 281 三角形を書いて分度器をあてて、三つの角の角度を測ってみよう。
- 282 それぞれの角度を厳密に測って合計して、ちょうど一八〇度になるだろうか。

²⁵ 山口 (1975) が指摘する「～ということは、～ということだ」という「換言」と重なる。

²⁶ 霜崎 (1981) や永野 (1986) が、「段落」の終わりに「ノダ」が多く現れることを指摘している。

- 283 厳密に測れば測るほど一八〇度からわずかにずれた値となるにちがいない。
- 284 さまざまの異なった形の三角形を書いて測ってみても同じである。
- 285 このように実際の三角形を調べてみると、内角の和はつねにほんとうに一八〇度になっているわけではない。
- 286 したがって、実験から「三角形の内角の和は二直角である」という結論はほとんど出すことができない。
- 287 つまり、これは実証的に証明することができないことである。 (例(49)一部改変)
(『わかる』)

(46)は、統括力が相対的に弱く、他の文に統括されることが多いノダの例である。

(46) 純粋科学や地震・環境問題などの研究内容が複雑でむずかしいことの解説

- 99 科学技術者は、こういう問題について研究をし、専門分野の学術雑誌に研究結果を報告する。
- 100 これが彼らの仕事である。
- 101 研究すべき課題は山積しているので、学術論文を書けば、すぐつぎの研究にとりかかり、学術論文の内容をやさしく誰にでもわかるように解説するようなことはほとんどしない。
- 102 そのような時間はないし、またやさしく書くということは、科学技術者にとってじつはひじょうにむずかしい仕事なのである。 [6.原因・理由]
- 103 そこで、科学技術の内容を一般の人たちにわかるように解説することを専門とする科学技術ジャーナリストが登場することになる。 ③
(『わかる』)

文 102 は、ノダによって、文 101 の事実に対して、理由を補足している。そのため、文 101 に統括される関係となっている。但し、文 101 は、事実の叙述であり、統括力が強い文とは言えず、実際に、文 101 は、文 103 の話題提示を提出するための前提情報となり、統括力は相対的に弱いことがわかる。文 103 が、文 99～102 を統括し、文段 99～103 を成立させているが、その成立に、文 102 のノダは、直接かかわっていないところが、例(45)と異なる。文 102 のノダが文段の成立に直接かかわっていないことは、文 102 を取り除い

たとしても、文脈が損なわれることがないことから確認できる。文 103「そこで」は、ある「問題」に対する「解決」を与えるという関係を表しているが、「科学技術の内容を一般の人たちにわかるように解説することを専門とする科学技術ジャーナリストが登場することになる」という「解決」と直接かかわる「問題」は、文 102「(省略) 科学技術者にとってじつはひじょうにむずかしい仕事だ」ということではなく、文 101「(省略) 学術論文の内容をやさしく誰にでもわかるように解説するようなことはほとんどしない」ということである。

また、(46a)の文 102 のノダを取り除くと、文 101 との接続関係を捉えることが難しくなることから、ノダが、先行文に統括されようとする力を発揮していることがわかる。

(46a)

101 研究すべき課題は山積しているので、学術論文を書けば、すぐつぎの研究にとりかかり、学術論文の内容をやさしく誰にでもわかるように解説するようなことはほとんどしない。

102 そのような時間はないし、またやさしく書くということは、科学技術者にとってじつはひじょうにむずかしい仕事である。(例(50)一部改変)

以上のように、文末叙述表現ノダは、接続表現や指示表現といった、他の言語形態的指標との共起関係や、出現位置、そして、ノダが付される文の意味内容によって、その統括力が異なることがわかる。

3.2.2. ノダの統括機能Ⅱ「統括の方向」

「統括の方向²⁷」とは、文末表現が、先行する文(群)との間に統括機能を発揮するのか、後続する文(群)との間に統括機能を発揮するのか、または、前方・後方の両方向に統括機能を発揮するのかといった統括の機能領域のことである。

例えば、例(45)(46)は、統括力の差こそあれ、いずれも、ノダが付された文と先行文(群)との間で、統括機能がはたらいているという点で、統括の方向は、「前方」となる。それに対して、次の(47)は、「後方」への統括機能を発揮する例である。

²⁷ 佐久間(2003)では、「前方・後方」に加え、「内的・外的」という観点を導入して分析している。

(47) 「話し言葉の言い換え」の話題の開始

- 201 (8)で、話し言葉における言い換えというのは、基本的に、言い換えというよりも、「言い直し」、と思われることのほうが多いんですね↑。〔4. 概略〕
- 202 で、あの一、言い換えにも二通りあると思うんですね↑。〔4. 概略〕
- 203 一つは、二通りの表現を、もうすでに準備していて、一つの事柄に対する二通りの表現がすでに、頭の中に存在していて、それを並べる。
- 204 つまり、準備された言い換えと、それから、もう一つは、一つの言葉を口に出してみ、で、口に出すと、相手の反応も見えますし、また、自分の耳でも聞きますよね↑。
- 205 で、耳による印象っていうのもありますよね↑。
- 206 「あつ、それで、あつ、この言葉、相手の表情が曇ったから、まずい、言い換えよう。」とか、「ちょっと今の言葉、心なかったから、言い換えなきゃいけないな。」とか一、まあ、それとか、「今の表現も一、まあ悪くはないけれども、もっといい表現を、今、思いついたんだ一。」とか、ありますよね↑。
- 207 その時に、まあ、上書きというか、上に重ねるようにして、言い換える、というのが、話し言葉の言い換えの特徴。
- 208 つまり、まあ、話し言葉における言い換えというのは、言い直しである。
- 209 即興的な言い換えである、というふうに言えます。

(講義 A)

文 201 は、「話し言葉の言い換え」について、転換の接続表現「で」をともない、やや唐突に概略的なまとめを述べている。そのため、文 204 「それから」以降、文 207 までで、文 201 の理解に必要な情報を補足している。その意味で、文 201 のノダは、後続文 (群) を統括する「後方」の統括機能を発揮しているといえる。文 201～207 で構成される話段は、文 208～209 「つまり」をともない、文 201 と同様の内容をさらに詳しく反復することで、より高次元の「話段」に統括される²⁸。文 202 も、同様に、ノダが転換の接続表現「で」をともない、新たな話題「二通りの言い換え」を開始している。その詳細は、後続文 203、204、207 で述べられることになる。そのため、文 202 のノダも「後方」に統括機能を発揮して

²⁸ 「～というふうに言えます」は、ノダのように統括力の強い表現であると考えられるが、本研究の論旨とは異なるため、ここではこれ以上扱わない。

いるといえる²⁹。

先述の「統括力」と同様に、ノダの「統括の方向」は、接続表現や指示表現といった、他の言語形態的指標との共起関係や、出現位置、そして、ノダが付される文の意味内容によって、決定することがわかる。

また、第2章の先行研究でも取り上げた(24)のように、ノダが前方にも後方にも統括機能を発揮する例がある。ここで再掲する。

(48)

331 それから一、「ていうか」が、あの一、不愉快に感じられる理由の二つ目ですけれども一、(3)「ていうか」が、理由を、あの一、言い直しを表す言葉なのに、言い直す言葉がない時にも用いられるということである、ということです。

332 で、あの一、たとえば、それは、8番とか9番ですね↑。

333 話題の導入に使うんですね↑。 [1. 換言] [4. 概略]

334 「っていうか一、今日だるくない↑。」

335 「ていうか、今日すごく寒いよね↑。」

336 「何が『っていうか』なんだ一。」

337 言い換えられる言葉がないのに、なんでいきなり「ていうか」が出てくるか。

338 この気持ち悪さ。

339 これが、「ていうか」が、あの一、不愉快に感じられる二つ目の要因です。

(講義 A)

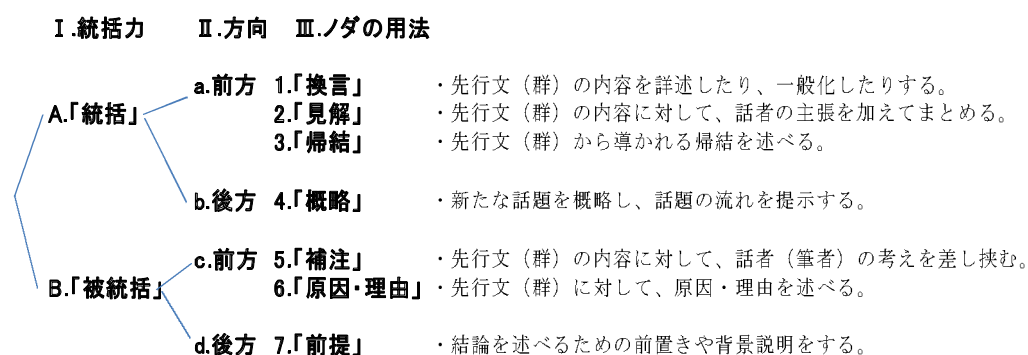
文 333 のノダは、文 331 の「言い直しを表す言葉なのに、言い直す言葉がない時にも用いられるということである」ということがどういうことなのかを、具体的に換言するかたちで説明するという点では、統括の方向は「前方」となる。しかし、この文 333 の「話題の導入に使う」というのは、ノダを用いて結論を端的に述べており、後続文 334～336 で、実際の用例を用いることで、説明を補足している。そのため、統括の方向は「後方」にもなる。このように、「前方」「後方」の両方に統括機能を発揮することも、ノダの特徴の

²⁹ 「同じ」とはいえ、文 201 は、後続文の内容を端的にまとめているのに対し、文 202 は、「二つある」ことしか示されておらず、後続文 203、204、207 の情報がなければ、その「二つ」が何であるかがわからないという点が異なっている。

一つであるといえる。

3.2.3. ノダの「統括機能」による「用法」のまとめ

以上、ノダを「Ⅰ.統括力」「Ⅱ.統括の方向」という2つの観点から分析すると、以下の【図1】のように分類できる。【図1】は、新書の文章と講義の談話の分析から得られた結果であるが、理解のしやすさを考慮して、ここに示す。



※「7.前提」は、ノダの形式により「8.前提(課題)」と「9.前提(話題)」に細分される。詳細は、第4章と第5章で扱う。

【図1】 統括機能によるノダの分類

第4章 ノダの「統括機能」による新書の文章の「文段」の展開的構造

初級で学ぶノダは、主に会話文のノダであり、菊池（2000:29）では、以下のように説明する。

「①話手と聞手とが、ある知識・状況を共有していて、②それに関することで、話手・聞手のうち一方だけが知っている付加的な情報があるという場合に、その一方だけが知っている付加的な情報を他方に提示するときの言い方が「のだ（んです）」（その提示を求めるときの言い方が「のか（んですか）」）である。（下線は筆者による。）

この説明は、話し言葉におけるノダの説明としては説得力のあるものであるが、「新書」の文章のように、不特定多数が読むことを想定した書き言葉におけるノダの説明としては、必ずしも、有効だとは言えない。そのため、「共有知識」とは異なる基準でのノダの分類が必要になる。本章では、「新書」の文章6編を分析対象として、説明的な文章に現れるノダがどのように用いられているのかを、「文段の統括機能」の観点から明らかにすることを目的とする。

4.1. 新書の文章に現れるノダの表現形式と統括機能の関係

新書の文章のノダは、「のだ」「のである」だけでなく、「のではないか」「のだろう」「のだった」などのさまざまな表現形式で現れる。また、ノダの前接要素も、名詞、動詞、形容詞の終止形に限らず、受身形、使役形、否定形、疑問形など、さまざまである。まず、ノダの前接要素を分析し、次に、ノダの表現形式との相関関係を分析することで、最終的に、ノダの表現形式と統括機能の関連を明らかにすることを目指す。

4.1.1. 新書の文章におけるノダの前接要素

4.1.1.1. ノダの前接要素の全数調査結果

本項では、まず、ノダがどのような述語に後接するのかを分析する。次の【表4】は、

大きく、述語のタイプを「名詞」「形容詞」「動詞」に分類し、それぞれの用例数を示したものである。

【表 4】 資料別のノダの前接要素

前接要素 資料	名詞	動詞	形容詞	合計
①「極限」	39 (12.8%)	262 (86.2%)	3 (1.0%)	304 (100.0%)
②「宇宙」	13 (15.9%)	69 (84.1%)	0 (0.0%)	82 (100.0%)
③「分かち」	41 (21.9%)	143 (76.5%)	3 (1.6%)	187 (100.0%)
④「西洋」	99 (38.7%)	157 (61.3%)	0 (0.0%)	256 (100.0%)
⑤「わかる」	16 (11.9%)	112 (83.6%)	6 (4.5%)	134 (100.0%)
⑥「できる」	39 (25.3%)	113 (73.4%)	2 (1.3%)	154 (100.0%)
合計	247 (22.1%)	856 (76.6%)	14 (1.3%)	1,117 (100.0%)

【表 4】は、まず、名詞とナ形容詞（形容動詞）との区別は行っていない。その理由は、まず、名詞とナ形容詞との判別が困難な例があること、そして、接続のし方については、名詞もナ形容詞も相違ないことが挙げられる。例えば、次の(49)の「不平等」は、名詞ともナ形容詞とも考えられる。

- (49) 財政が所得再分配した後の所得分配をみると、最もジニ係数の高いアメリカが最も
不平等なのである。 (『「分かち合い」』)

本研究では、ダが二重に表現されている「ナノダ」のかたちで現れるという共通点を重視し、同一に扱う。また、次の(50)のような形式名詞を伴う述部にノダが用いられた場合も「名詞」相当として扱う。

- (50) 見える、っていうのは、ぼくは、わかるっていうことなんだけどね。
 (『「できる人」』)

(50)は、形式名詞「こと」自体に実質的な意味があるわけではないが、述語動詞「わかる」だけでは、文が成立せず、全体を名詞化するために「トイウコトダ」が用いられている。この「トイウコトダ」の「ダ」部分がノダのかたちになっていると考えられることか

ら、ノダの直前の形式名詞「コト」を前接要素とする。

【表 4】によると、資料ごとに多少のばらつきはみられるが、全体的な傾向としては、「動詞」の使用が最も多く（約 60～85%）、次いで「名詞」（約 10～40%）となり、「形容詞」は 5%を下回っている。「形容詞」が極端に少ないのは、分析資料が、新書の文章という説明的で客観的な内容の文章だからであろう。

新書の文章で用いられるノダの前節要素の「動詞」の中で、最も多く用いられるのは、「なる」（66 例 7.8%）、次いで、「ある」（19 例 2.3%）である。その他の動詞は、それぞれ、1～4 回の頻度で、その傾向を見出すことは難しい。ノダと高頻度で共起する動詞「なる」と「ある」は、ノダと共起することで、それぞれ、特徴的な統括機能を発揮し、文段の成立に関与する。以下、それぞれの動詞と共起するノダの統括機能を詳しく見ていく。

4.1.1.2. 前接要素「なる」と共起するノダの統括機能

抽象度の高い動詞がノダと共起する頻度も高くなることは予想される事態だが、特に「なる」については、その他の動詞と比較しても、非常に高頻度で共起していることがわかる。ここでは、本動詞を前接要素として認定しているため、次の(51)のような補助動詞的な「なる」は含まない。

- (51) 身体の軸から水平に伸ばした腕の指先までの距離は、腕を垂直上方にもってくることによってほとんどゼロになるので、回転の速さが目にもとまらないほど速くなるのである。
〔『宇宙』〕

これは、形容詞「速い」を動詞化したものなので、前接要素は「速くなる」という動詞とする。前接要素が「なる」の例は、次のようなものである。

- (52) すなわち使用価値は、交換価値の能動的な担い手としては交換手段となるのである。
〔『西洋』〕

「交換手段」に助詞「と」が付され、「なる」が実質的意味を有し、本動詞として機能していることから、動詞「なる」とする。動詞「なる」は、ノダと共起したとき、「帰結」を再提示する機能を発揮する。例(53)の文 2494 のノダは、「そして」という接続表現、「最後

に」という副詞を伴い、文 2482 から始まる「今の天文学が告げるそのシナリオ」の話題を「帰結」として統括する。

(53)

2478 **白色矮星の生い立ち**

2479 その発見は劇的だったが、白色矮星は例外的な星ではない。

2480 質量が太陽前後の星が老化した姿なのだ。

2481 当然、我が太陽もたどるべき未来の星である。

2482 今の天文学が告げるそのシナリオを迫ってみよう。

2483 スターダストをかき集めて約九〇億年前に誕生した我が太陽は今その一生のなかばにいる。

2484 安定に燃えつづけているそのエネルギー源は水素の核融合だ。

2485 それがあと五〇億年もすると燃えつきて中心部には燃えかすのヘリウムがたまり、これは燃えにくいので熱源はその外殻の領域に移る。

2486 中心部は冷えて重力収縮して高密度化するが、外側は逆に膨脹し、半径が極端に大きくなる。

2487 赤色巨星と呼ばれるもので、オリオン座の一等星ベテルギウスが今その状態にあるという。

2488 この巨星の半径は木星の公転軌道程度もあるというから、地球などは丸呑みされてしまう事になる。

2489 といっても五〇億年も先の事だ。

2490 当分は何の心配もない。

2491 赤色巨星といっても外側は密度が薄く、次第に中心からの引力をはなれて物質をまわりにまき散らす。

2492 一方中心部は重力収縮がつづき、核反応はヘリウムが炭素、そして酸素を作り出す。

2493 そしてその高温プラズマ中で電子はニュートリノを作り出し、それが容易に系外に逃げ出すのでエネルギーが持ち去られ、冷却が進む。

2494 そして最後に外殻をはぎ取られた白色矮星となるのである。

2495 その質量は〇・六 M_{\odot} くらい、ここで M_{\odot} とは現在の太陽の質量を表す記号であ

る。

『宇宙』

この文 2482～2494 の文段は、文 2480 「質量が太陽前後の星が老化した姿なのだ。」という「4.概略」のノダによって述べられた結論に対する補足情報の文段である。「老化した」という抽象的な情報を、文 2482～2494 の文段で太陽を例に詳述しており、文 2494 の「そして最後に外殻をはぎ取られた白色矮星となるのである。」という「なるのである。」によって、「老化した」が詳述による反復によって終了したことを表すことになる。しかし、ノダを取り除くと、先行文との関連性を見出す必要性を感じることはなくなる。

(53a)

2478 白色矮星の生い立ち

2479 その発見は劇的だったが、白色矮星は例外的な星ではない。

2480 質量が太陽前後の星が老化した姿なのだ。

〔11 文省略〕

2492 一方中心部は重力収縮がつづき、核反応はヘリウムが炭素、そして酸素を作り出す。

2493 そしてその高温プラズマ中で電子はニュートリノを作り出し、それが容易に系外に逃げ出すのでエネルギーが持ち去られ、冷却が進む。

2494 そして最後に外殻をはぎ取られた白色矮星となる。

(53a)は、文 2494 のノダによる前方統括機能が発揮されないので、単なる「事実の提示」となり、例(53)と比べ、文 2480 との関係が強く意識されることはない。このことから、動詞「なる」＋ノダは、「帰結の再提示」として機能することがわかる。(53)は、「なる」に接続する助詞が「と」であったが、次の(54)のように、「に」が用いられることもある。が、「と」の場合との相違は見られない。

(54)

1793 大量生産・大量消費を実現した工業社会の最大の制約条件は、環境である。

1794 経済とは自然を変換させることにほかならない。

- 1795 大量生産・大量消費とは自然資源多消費型産業が形成されているということを意味する。
- 1796 このまま大量生産・大量消費をつづけていけば、自然が持続可能ではないことに誰もが気づき始めている。
- 1797 「量」を「質」に置き換えることは、人間と自然との最適な質量変換を追求することをも意味しているのである。
- 1798 もちろん、自然に存在する物量に対して、追加する知識量を飛躍的に増加させれば、当然のことながら自然に存在する物量の使用は、飛躍的に節約される。
- 1799 いうまでもなく「量」が「質」に置き換えられれば、耐久性は向上する。
- 1800 使い易くなるばかりか、修理も容易となって、使用期間は長期化するからである。
- 1801 そればかりではなく、大量生産・大量消費のもとでは生産の場と、生活の場、すなわち消費の場が離れているために、膨大な無駄が生じる。
- 1802 ところが、情報は生産の場と、消費の場を急激に近づける。
- 1803 つまり、あたかも注文方式のように、需要のあるもののみ限定して供給することができ、多様な需要に対応して、無駄のない多様な生産が可能になるのである。
- 1804 **知識社会の産業構造**

(『「分かち合い」』)

文 1797 のノダは、先行文 1793～1796 に対して、「帰結」を表すと同時に、後続文に補足情報を要求する「概略」として機能している。文 1798 は、「もちろん」と補足型の接続表現を用いることで、補足情報の文段が開始する。この 1797～1798 の文段は、さらに、具体的な「耐久性の向上」の文段 1799～1800 と、「情報による無駄の排除」の文段 1801～1803 で構成される。文 1803 の動詞「なる」＋ノダは、同列型の接続表現「つまり」をとともなうことで、一義的には、1802 を「換言」しているが、同時に、文 1798 「もちろん、自然に存在する物量に対して、追加する知識量を飛躍的に増加させれば、当然のことながら自然に存在する物量の使用は、飛躍的に節約される。」を、具体的に「換言」していることから、ノダによる多重的統括が実現している。また、一つ目の具体例の文段 1799～1800 には、ノダが用いられず、具体例の 1801～1803 の文段のおわりである文 1803 にノダが付されていることも、補足情報の「具体例」の文段を統括する機能の裏付けとなっている。

このように、動詞「なる」＋ノダは、先行文の概略的な情報を補足する文段のおわりの

反復された文に用いることで、先行文の概略的な情報との関連性を強く意識させる用法があることが明らかになった。

しかし、すべての動詞「なる」＋ノダが、「帰結の再提示による補足情報の文段の統括」を表すわけではない。次の(55)のように、ノダの「原因・理由」の用法によって、補足情報の「文段」を統括する場合も見られる。

(55)

19 1 社会と科学技術

20 1 クローン技術に対する心配

21 一九九七年二月二三日付のイギリスの新聞『オブザーバー』は、クローン羊の誕生を報じ、世界を興奮の渦にまきこんだ。

22 動物は一般に有性生殖、すなわち精子と卵子との結合によって、遺伝子の一部を交換しあって新しい遺伝子をつくり、子どもをつくっていく。

23 ところが、クローンと称されるものは、そのような過程なしに同じ遺伝的資質をもった子どもが生まれることであり、いわばまったく同一の分身をつくることになるのである。

24 この事件に対する社会の反応はさまざまだった。

(『「わかる」』)

文 21 は、「世界を興奮の渦にまきこんだ。」という事実を提示し、文 22～23 で、「なぜ、世界を興奮の渦にまきこんだのか。」の理由が述べられる。文 23 の動詞「なる」＋ノダによって、文 22 とともに、文 21 の情報を補足する「文段」が成立する。(53)や(54)と異なるのは、動詞「なる」＋ノダの文が、先行文の反復ではなく、「原因・理由」となっている点である。このような相違は見られるが、動詞「なる」＋ノダが、先行文の補足の文段のおわりに現れ、文段を統括するという点は一貫しているといえる。

4.1.1.3. 前接要素「ある」と共起するノダの統括機能

次に、ノダと共起する前接要素で特徴的なのは、動詞「ある」(19 例 2.3%) である。動詞「ある」は、佐久間 (1994:101) では、中心文の話題文の指標として挙げられており、本分析においても、それを支持する結果となっている。動詞「ある」とノダが共起した場

合、当該文の情報が、後続文の情報を理解するための「前提」としての機能を発揮することが多い。次の(56)は、文 2280「結晶構造をそのままにして磁気だけ引越しができるはずがない。」という見解に読者を納得させるための「前提」情報を文 2279 で動詞「ある」＋ノダを伴って提示している例である。

(56)

- 2276 ところが口琶自画（町は希土類のデイスプロシウム）という金属で、磁場をかけると a、c 軸が入れ換わる、という奇妙な事の起きることが発見された。
- 2277 正確に言うと、結晶構造はそのままとし、その上に載っている磁気構造のみが入れ換わるというべきである。
- 2278 たとえて言うなら、二軒長屋で、家それ自体の構造はそのまま、右と左の家族が引越して入れ換わったようなものである。
- 2279 磁気にせよ、電気にせよ、所定の結晶構造を反映して磁気構造、電気構造があるのである。
- 2280 結晶構造をそのままにして磁気だけ引越しができるはずがない。

（『極限』）

文 2279「磁気にせよ、電気にせよ、所定の結晶構造を反映して磁気構造、電気構造がある」という情報は、先行文では、全く触れられておらず、ここで初めて与えられる情報である。これは、「～のだから、」に通じる従属節的なノダの使用であると考えることができる。次の(56a)のように、文 2279 と文 2280 を合わせても、違和感なく文意を理解できる。

(56a)

- 2278 たとえて言うなら、二軒長屋で、家それ自体の構造はそのまま、右と左の家族が引越して入れ換わったようなものである。
- 2279 磁気にせよ、電気にせよ、所定の結晶構造を反映して磁気構造、電気構造があるのだから、結晶構造をそのままにして磁気だけ引越しができるはずがない。

（『極限』一部改編）

文 2279 のように、ノダを用いることにより、「磁気にせよ、電気にせよ、所定の結晶構

造を反映して磁気構造、電気構造がある」という情報が、すでに既定であるように示されることになり、その真偽については、不問として、「結晶構造をそのままにして磁気だけ引越しができるはずがない。」の前提情報として提示されることになる。そのため、ノダがなければ、文 2279 が文 2280 へと統括されることが明示されないため、理解が困難になる。新たな情報を示す典型的な存在詞「ある」は、「前提」の用法のノダと相性がよいことから、動詞「ある」＋ノダが多く用いられるのだと考えられる。

ノダの前接要素について、特に使用頻度の高かった動詞「なる」と「ある」を取り上げて、ノダとの共起関係を分析した。その結果は、次のようにまとめられる。

i. 動詞「なる」＋ノダ

先行文の補足情報を述べる文段のおわりに用いられ、前方統括機能を発揮することによって、当該文段を統括する。直接、原因・理由を表す文に用いられることもあるが、先行文の情報を詳述して反復する文に用いられることもある。補足情報の文段を統括すると同時に、先行する結論的な文とともに、さらに高次元の文段の成立に関与する。

ii. 動詞「ある」＋ノダ

後続文の補足情報を述べる文に用いられ、後方被統括機能を発揮することによって、後続文に統括される。後続文の情報を理解するための「前提」となる。

上記のように、新書の文章で使用頻度の高かった動詞「なる」、「ある」を分析した結果、ノダの統括機能の「統括の方向」、および、「統括力」の両方が、真逆となる傾向が見られた。文段の成立にかかわる可能性が高いのは、前方統括機能を発揮して、先行文を統括する動詞「なる」＋ノダであり、動詞「ある」＋ノダは、話題の「前提」として用いられることが多く、文段の中心的な情報を担っている可能性が低いといえる。以上、ノダの前接要素も、ノダによる文段の統括機能を特徴づける言語形態的指標となっていることが明らかになった。

4.1.2. 新書の文章におけるノダの表現形式

ここでは、ノダがどのような表現形式で現れるのかを分析し、表現形式によるノダの統括機能に偏りがあるかどうかを、節末のノダと文末のノダに分類して検討する。

4.1.2.1. 節末のノダの表現形式

本研究の分析対象におけるノダを含む文の総数は 1117 例で、そのうち、節末に用いられ

るノダは 153 例 (13.7%) であり、文末に比べ、かなり少ないことがわかる。また、表現形式ごとの使用比率には偏りがあり、必ずしも、さまざまな表現形式が混在して用いられているとはいえない。ここでは、使用が多く、かつ、統括機能にそれぞれ特徴のある上位 3 位の表現形式「のか」「のだが」「のだから」を取り上げて、統括機能による文脈展開の方法を分析する。

【表 5】 節末のノダの表現形式の出現数

節末のノダの形式	出現数	ノダの総出現数 (1,117)に対する 割合
のだから	30	2.7%
のだが	26	2.3%
のか	16	1.4%
のであって	14	1.3%
のだと	10	0.9%
のであるから	9	0.8%
のだ	8	0.7%
のであれば	5	0.4%
のであり	3	0.3%
のであるが	3	0.3%
んだ	3	0.3%
んだと	3	0.3%
のかと	2	0.2%
のだとする	2	0.2%
のだろうか	2	0.2%
のではないかと	2	0.2%
のではないかという	2	0.2%
のかもしれないと	1	0.1%
のだったが	1	0.1%
のだろうが	1	0.1%
のだろうかという	1	0.1%
のだろうと	1	0.1%
のであると	1	0.1%
のであろうが	1	0.1%
のでなく	1	0.1%
のではなく	1	0.1%
んだから	1	0.1%
んだったら	1	0.1%
んだろう	1	0.1%
んだろうけど	1	0.1%
合計	153	13.7%

4.1.2.1.1. 節末「のか」の統括機能による文脈展開の特徴

まず、節末において、最も多く使用されているのが、間接疑問の「のか」である。これは、節としても特殊で、次の

(57)のように、格助詞を後接することも多い。その場合、文章の展開に直接言及する表現と共起することで、新たな文段の開始を表すことになる^{iv}。佐久間（1994:102）は、文末の「のか」が「課題導入」の中心文となることを指摘しているが、節末の「のか」も、同様に「課題導入」の形態的指標となっていることが指摘できる。

(57)

2391 化学的カタストロフィー—死の世界—

2392 第4章も終わりに近づいた。

2393 二一世紀初頭においてわれわれはどこまで強磁場を作り得たのかを復習しておく。

2394 非破壊の限界は約八〇テスラだが、伊達マグネットが改良されてもまあ一〇〇テスラが限度だろう。

2395 そして磁場濃縮法で破壊型なら五〇〇テスラ、これが将来改良されても一〇〇〇テスラを越えることはないだろう。

〔『極限』〕

(57)は、文 2393 で「二一世紀初頭においてわれわれはどこまで強磁場を作り得たのか」という課題が提示され、文章の展開に直接言及する「復習しておく」によって、新たな文段が開始される。佐久間（1994:102）は、〈課題導入〉は、「後続する段に〈解答説明〉がなされ、課題を統括するものが多い。」と指摘しており、〈課題導入〉を表す「のか」は、後方被統括機能を発揮するという本研究の主張を裏付けるものといえる。このように、「～のか」は、話題そのものを取りあげるが、後続文の結論を予測させるという点で「前提」の一部に含まれると考える。

「文章の展開に直接言及する表現」は、次の i.～iii.のように、動詞の意向形や、iv.～v.「話題」や「主題」といった文章の構成にかかわる語が挙げられる。

i. 「(～は略し、) ～のかをのべよう。」

ii. 「～のか、(いくつかの代表的な成果を) 見て行くことにしよう。」

iii. 「～のかを (図 5-1 で) 考えよう。」

iv. 「ここでは、～のかについての (最先端の) 話題に限る。」

v. 「～のか、それが (本章の) 主題となる。」

4.1.2.1.2. 節末「のだが」の統括機能による文脈展開の特徴

表現形式「のだが」は、「が」の用法によって、大きく2種類に分類できる。一つは、「が」が「逆接」の場合、もう一つは、「前置き」の場合である。ただし、この分類の境界はグラデーションをなしており、判別の困難なものも多い。まず、「前置き」の「のだが」を中心に分析する。ここでの「前置き」とは、日本語教育の初級で学習する(58)のような情報・行動要求の「前置き」だけではなく、新たな話題を始めるための前提 ((59)の文 1182) を含む³⁰。

(58) 来週出張するんですが、いいホテルを教えてください。

(『大地』 p.26)

(58)は、唐突に、情報要求の主節を述べるのではなく、従属節で既定の情報を「んですが」ともなって「前置き」として提示することで、コミュニケーションを円滑にしている。「前置き」によって、コミュニケーションが円滑になるのは、聞き手の主節に対する理解が向上するためである。もし、唐突に「いいホテルを教えてください。」と聞かれたら、「どうしたんですか？」といった情報の補足を求めたくなることから、「んですが」ともなった「前置き」が主節の理解のために必要な情報だということができる。ただ、「んですが」による「前置き」は、情報・行動要求の主節にのみ現れるわけではない。新たな話題の開始に必要な情報を「んですが」ともなって、「前置き」することがある。次の(59)は、「すぐれたテキスト」の重要性を述べる文段の下位文段「中学校長から聞いたエピソードを述べる文段」である。

(59)

1181 この桜井監督のケースと似たケースとして、私は東京都のある中学校長からこんな話を聞いた。

1182 その校長先生の専門教科は英語なのだが、その先生がはじめて英語を習った中学の英語の教師が変わっていた。

³⁰ 森田・松木 (1999:200-201) は、「ある事実を知らせることで話題を提供し、それを前提に話を展開させようとするもの。」としており、「既成の事実、既定の事柄を再認識して前置きの用いる「わけだ」と近く、相互に入れ替えが可能である。」と指摘している。

- 1183 元来国語の教師だったのだが、終戦直後のため英語教師が足りないのに、英語がまったくできないのに科目を担当していたというのである。
- 1184 英語ができないのに英語の授業を任されたその教師は、一体どのような教え方をしたのだろうか。
- 1185 彼がまずやったのは、進駐軍の居住地に行って、米軍関係者の夫人で大学卒の人を捜すことだった。
- 1186 そして、条件に合った夫人と交渉し、教室に来てもらい、英語で直接中学生に指導をしてもらったのである。
- 1187 英語しか話せない人が英語をまったく知らない生徒に話をするというのは、原理的には不可能なようだが、現実の効果には絶大なものがあつたという。
- 1188 クラス全体の英語に対する向学心は非常に高まり、そのクラスからは何人も英語の教師になる者が出たということであつた。
- 1189 両者を媒介した先生自身も、これをきっかけとして後に英語学の著書を著すほどの学者になつたということであつた。
- 1190 ここにも、上達への意欲を支える三者関係、〈あこがれにあこがれる関係性〉がある。
- 1191 すぐれたものを認め、素直にあこがれ、努力する指導者の姿と、すぐれたテキスト（この場合は、米軍人の夫人）との出会いが、向学心を育てたのである。
- 1192 プレイスタイルということに話を戻す。

（『「できる人」』）

文 1181 「私は東京都のある中学校長からこんな話を聞いた。」と、後方照応の指示表現を用いて、新たな話題を開始するが、文 1182 「その校長先生の専門教科は英語なのだが、」と、主節の「その先生がはじめて英語を習った中学の英語の教師が変わっていた。」には、逆接の関係どころか、関係自体を見出すことは難しく、「英語」、「教師」といった単語レベルでの関係しか見いだせない。このように、従属節と主節とが、無関係のように見えても、「その校長先生の専門教科は英語なのだが、」は、「のだが」によって、主節の理解を何らかの形で促す「前置き」として、それがあたかも規定であるかのように情報が与えられている。文 1183 の「元来国語の教師だったのだが、」の「のだが」も、逆接としても捉えられるが、やはり、「のだが」によって、主節の「終戦直後のため英語教師が足り

ないので、英語がまったくできないのに科目を担当していたというのである。」を理解するための規定情報の前置きとして機能しているといえる。文 1182 も文 1183 も「その校長先生の専門教科は英語だが、」や「元来国語の教師だったが、」のようにノダがなくても、前置きとしては成立するが、ノダを伴うことで、主節や後続文への後方被統括機能が発揮され、より前置きの機能が強調される。

また、文 1183 の主節の「のである」は、先行文 1182 の「変わっていた。」に対しては、なぜ「変わっていた」かの理由を表す「原因・理由」のノダとなるが、後続文 1184 の「英語ができないのに英語の授業を任されたその教師は、一体どのような教え方をしたのだろうか。」に対しては、「前提」のノダとなっている。このように、ノダは、先行文にも後続文にも統括機能を発揮するため、いわば糊のような用いられ方をする。例えば、文 1183 に「原因・理由」を表すカラダを用いると、文 1183 と文 1184 の関係がとらえにくくなってしまう。これは、カラダは、前方被統括機能のみで、後方の統括機能がないためだと考えられる。

文 1184 の〈課題提示〉は、「のだろうか」によって、後方被統括機能を発揮する。それに対する〈解答説明〉は、文 1186 であり、「のである」によって、前方統括機能を発揮し、「文段」1181～1186 を成立させる。ここでは、「のだが」を中心に分析するため、詳細は後の文末のノダの項で述べるが、最終的には、文 1191 の「のである」が前方統括機能を発揮することによって、文段 1181～1191 が成立する。

先ほどの主節との関係がそれほど感じられない文 1182 「その校長先生の専門教科は英語なのだが、」は、不必要な情報ではなく、文 1188 「クラス全体の英語に対する向学心は非常に高まり、そのクラスからは何人も英語の教師になる者が出たということであった。」の理解を深めるために必要な前置きの情報であるといえる。そのため、主節とのかかわりだけではなく、「文段」単位での理解のために必要な前置きを「のだが」で行っているといえる。

次に、逆接の「のだが」を分析する。逆接の「のだが」によって表される従属節の情報は、主節の理解に直接必要なものではなく、誤解を避けるための注釈的なものとなる。次の例(60)の文 500 の従属節「加圧下で液体にもなるのだが、」は、「大気圧下では液体状態は存在せず、よく知られているようなドライアイスとなる。」という従属節＋主節の理解を補足する注釈的な情報となっている。

(60)

- 498 一八三五年、フランスのテロリエルは炭酸ガスを相手にその液化を試みた。
- 499 ファラデーのように加圧、冷却、気化をくり返してマイナス七八・五度C、ここでドライアイスを作るのに成功した。
- 500 炭酸ガスは加圧下で液体にもなるのだが、大気圧下では液体状態は存在せず、よく知られているようなドライアイスとなる。
- 501 要するに炭酸ガスの氷だ。
- 502 これをあたためると固体から直接気体となるのでぬれることもなく取り扱いが楽であり、これを寒剤として使うにも便利である。
- 503 清潔でもあり、今日でも食品などの冷却用として広く用いられている。

(『極限』)

文 500 の「のだが」をともなう従属節は、「加圧下で液体にもなる」という情報を補足しているが、これは、「大気圧下では液体状態は存在せず、よく知られているようなドライアイスとなる。」という情報の「大気圧下では液体状態は存在せず」部に対する「では、どのような条件で液化状態となるのか」という想定疑問に答えるものである。文 501 以降でも、「加圧下で液体にもなる」という情報が文章理解に直接必要になることはなく、仮に、(61)のように「のだが」節を取り除いたとしても、文脈が損なわれることがないことから、注釈的な情報だといえる。

(61)

- 498 一八三五年、フランスのテロリエルは炭酸ガスを相手にその液化を試みた。
- 499 ファラデーのように加圧、冷却、気化をくり返してマイナス七八・五度C、ここでドライアイスを作るのに成功した。
- 500 炭酸ガスは、大気圧下では液体状態は存在せず、よく知られているようなドライアイスとなる。
- 501 要するに炭酸ガスの氷だ。
- 502 これをあたためると固体から直接気体となるのでぬれることもなく取り扱いが楽であり、これを寒剤として使うにも便利である。
- 503 清潔でもあり、今日でも食品などの冷却用として広く用いられている。

(『極限』)

(61)は、文 500 の「のだが」節を取り除いたものであるが、情報の不全感を覚えることはないと思われる。このように、文章の展開に直接関わることなく、また、後続文の理解にも直接必要な情報ではないが、誤解を避けたり、注釈的な情報を付加するために「のだが」が使用されることがある。

また、(62)の文 2207 の「のだが」のように、主節に、文章の展開に直接かかわる表現（主に「略する。」や「ここでは述べない。」といった否定的な表現）が用いられることがあり、この場合、文全体が注釈的な表現となる。（Hc とは、ゼーマン分裂により、エネルギーの最低準位 E1 をエネルギー準位上位の E2 が下回る際の臨界点を示す。c は、critical の略である。）

(62)

2202 Hc 以下ではこの物資に磁気はない。

2203 ところが Hc を越えると突然磁気が鉄イオン上に現れる。

2204 しかし Hc ではその磁気を全部外に出す準備ができていない。

2205 色々な不都合があって一気にそれを出せないのである。

2206 その原因はスピンのフラストレーションによるのだが、その説明は略する。

2207 いずれにしても一気に磁気を出せないで、これが小出しになる。

(『極限』)

文 2206 の従属節は、「のだが³¹」によって、既定の情報として、「その原因はスピンのフラストレーションによる」ことが提示されているが、主節で「その説明は略する。」と文章の展開に直接言及する表現によって、その後、従属節の情報が展開されないことが述べられる。先行文 2205 「色々な不都合があって一気にそれを出せないのである。」に対して、従属節の情報無しに、「その説明は略する。」としてしまうと、唐突な印象となり、読み手は「どうして」などの疑問を持つ可能性がある。主節の理解が向上するという点では、(58)の「のだが」と共通するところがあるといえる。

³¹ 文 2206 の「のだが」は、先行文に対しては、前方被統括機能を発揮し、「原因・理由」のノダの用法となっている。

さらに、文章の展開方法に目を向けると、文 2206 自体が、(61)の「のだが」節のような注釈的な情報となっている。文 2207 の「いずれにしても」という転換型の接続表現、文 2205 「一気にそれを出せないのである」の反復表現「一気に磁気を出せない」が用いられていることから、文 2206 の情報は、文 2207 以降の文章の展開に直接かかわらないことがわかる。

4.1.2.1.3. 節末「のだから」の統括機能による文脈展開の特徴

節末の「のだから」について、田野村 (1990:102-103) は、次のように指摘しており、本研究も、基本的にこの記述に従う。

結論を先に述べるならば、「P のだから Q」という表現は、前件 P をすでに疑念の余地なく定まったことがらとして提示し、それを十分な根拠として後件 Q を発言するものだと言ってよさそうである。「P のだから Q」は、「P である以上、当然、Q」「P であるからには、当然、Q」といった意味を表すと言ってよい。

また、日本語学習者の「のだから」の誤用について、「のだから、～」という節が、「のだ。だから、～」という文に比べて用法の範囲が限られていることを理解していないからだと述べている。

(63) お出かけですか?—はい。?風邪を引いたんですから、病院に行くんです。

(64) 風邪を引いたんです。ですから、病院に行くんです。

(田野村 1990:103 の用例)

(64)は、風邪を引いたことを告げたうえで、病院へ行くことを述べるともとれるが、(63)は、風邪を引いたことを十分な根拠として、病院へ行くことを述べることしか表せないため、「?」となるという。

また、前件の性格として、「聞き手がすでに知っていることがらであることが多い。」(p.104)と指摘するが、一方で、「もっとも、「P のだから、Q」の P が、聞き手にとって、未知のことがらであり得ないわけではない。」(p.105)という用例に触れており、「こうした話し方は、話し手の優越を感じされる効果にもなり得る。」(p.105)として、その使用に

は否定的である。これは、「話し手」、「聞き手」という語を用いていることから、談話を対象にしているとも思われるかもしれないが、田野村（1990）は、文章と談話とを区別することなく用例を使用していることから、この記述は、文章と談話に共通するものだと考えられる。

新書の文章は、書き手の情報量が多く、読み手に新たな情報を伝えるという性格があるため、「話し手の優越を感じられる効果にもなり得る。」という「のだから」のニュアンスは当たらない。新書の文章では、(65)のように「のだから」をともなった従属節の情報が読者に未知だと思われる場合（専門的な知識に関しては、先行文で言及がないことを判断基準とする）、既定の事実として節の情報を付加することで、主節との間に論理の飛躍を含んだ因果関係を結ぶために用いられる。

(65)

1330 第3章 圧力の世界

1331 真空の発見

1332 普段、我々は意識しないが、大気圧が一気圧、およそ一バール（一〇〇〇ヘクトパスカル）の世界に生きている。

1333 これを重んじて本書では圧力の単位を気圧（バール）で書くことにする。

1334 地球を覆う大気は窒素と酸素が主成分で、共に沸点が一〇〇K以下だから約三〇〇Kの室温付近では理想気体に近く、安定している。

1335 そして気圧の安定さを地球の重力が保証しているのだから天候の変化で生ずる圧力の乱れもほぼ一〇パーセント以内である。

1336 真冬のシベリア高気圧でも一・一バールを越えたことがなく、台風の中心気圧が〇・九バールを切ることはめったにない、と言えおわかりだろう。

（『極限』）

文 1335 は、主節「天候の変化で生ずる圧力の乱れもほぼ一〇パーセント以内である。」が重要な情報であるが、それが「当然」であることを読み手に伝えるために「のだから」節の情報が付加されていると考えられる。ただ、純粹に因果関係のみを考えると、「のだから」節の「気圧の安定さを地球の重力が保証している」ことと「天候の変化で生ずる圧力の乱れもほぼ一〇パーセント以内である」ことには、論理の飛躍がある。たとえば、「ど

のように気圧の安定さを地球の重力が保障しているのか」や「なぜ、5%や20%以内ではなく、ほぼ10%以内となるのか」については、説明がなされていないのである。しかし、「のだから」の「既定」「当然」のニュアンスによって、なかば強引に主節と因果関係を結んでいる。このように「のだから」によって「既定」「当然」の因果関係があることを明示することは、後続文が、「どのように保障しているか」や「なぜ、5%や20%以内ではなく、ほぼ10%以内となるのか」などに展開するのを避けることにつながっていると考えられる。このように、「のだから」は、「のか」や「のだが」のように、文を超えた被統括機能による文段の成立にかかわることはなく、その被統括機能の範囲は、後続する主節に限られる。

以上、節末のノダについて上位3位の表現形式「のか」「のだが」「のだから」について、その統括機能による文章の展開方法を考察した。すべての表現形式に共通しているのは、「後方被統括機能」を有しているということであり、被統括機能の機能領域の広さは、「のか」「のだが」「のだから」の順であり、「のか」は、〈解答説明〉の中心文に統括されることで、文段の成立に積極的にかかわるが、「のだから」は、主節に統括されるのみであることが明らかになった。

4.1.2.2. 文末のノダの表現形式

次の【表6】は、新書における文末のノダの表現形式を使用数の順に表したものである。さまざまな表現形式が見られるが、その使用数には偏りがみられる。特に、「のである。」が701例で、全体のノダの使用数の62.8%を占め、他の表現形式を圧倒している。第2位は、「のだ。」であるが、その使用数は70例と、「のである。」の約10分の1に過ぎない。第3位は、「のだらうか。」で、64例と、ほぼ、第2位の「のだ。」と同数である。以降、「のか」「のだらう。」「のであった。」「んだ。」「のだった。」が1%以上2%以下となり、それ以外の表現形式は全体のノダの使用数の1%にも満たない。ここでは、特に、「のである。」「のだ。」「のだらうか。」を中心に分析する。

【表6】文末のノダの表現形式の出現数

文末のノダの形式	出現数	ノダの総出現数 (1,117)に対する 割合
のである	701	62.8%
のだ	70	6.3%
のだろうか	64	5.7%
のか	22	2.0%
のだろう	17	1.5%
のであった	15	1.3%
んだ	14	1.3%
のだった	13	1.2%
のであろうか	10	0.9%
んだよね	6	0.5%
んだから	4	0.4%
んだよ	5	0.4%
のだと	3	0.3%
のであろう	2	0.2%
のではない	2	0.2%
のではないか	2	0.2%
んだけど	2	0.2%
んだけどね	2	0.2%
のであるから	1	0.1%
のです	1	0.1%
のではないだろうか	1	0.1%
のでもない	1	0.1%
んだからさ	1	0.1%
んだな	1	0.1%
んだろうな	1	0.1%
んです	1	0.1%
んですな	1	0.1%
んですよ	1	0.1%
合計	964	86.3%

4.1.2.2.1. 「のである。」と「のだ。」の統括機能の相違

「のである。」「のだ。」は、その出現位置、他の言語形態的指標と共に共起することで、さまざまな統括機能を発揮する。次の(66)は、前方統括機能を発揮し、文段を成立させるが、(67)は、後方被統括機能を発揮するのみで、文段を成立させることはない。

(66)

555 重元素の起源

556 星々が、二つの種族に分類されることについては既にふれた³²。

³²文 173 に「このように星々の持つ物理的性質が異なっていることから、星の種族によって分類する方法

- 557 種族Ⅱに分類される星々は、球状星団を形成しており、その質量は太陽に比べて小さいことから、太陽よりもはるかに老齢であることがわかる（第2章現象Ⅱ参照）。
- 558 実際、球状星団を形成する星々は、この宇宙が誕生して一〇億年ほど経った頃に形成されたものが多い。
- 559 中には、年齢が約一三〇億年にも達する球状星団がある。
- 560 一方、散開星団を作る星々には、A型に分類される大質量のものが多いことから、この星団の星々は相対的に若いと考えられている。
- 561 その上、これらの星々を作っているガス物質は、超新星爆発によって星間空間に放出されたものから成るので、相対的に重い元素に富んでいる。
- 562 このようなわけで、球状星団の星々と散開星団の星々は、元素の組成や質量において根本的に異なっているのである。

（『宇宙』）

文 556 は、すでに述べられた文 177 の情報を反復することで話題として取り上げる。文 557～559 は、「球状星団」について、一つの文段が成立しており、文 560～561 では、「一方」という対比型の接続表現によって、対比的に「散開星団」についての文段が成立する。文 562 の「のである。」は、指示表現「このようなわけで」と、それぞれの文段の提題表現「球状星団」「散開星団」の反復と共起することで、前方統括機能を発揮し、文段 556～562 を成立させる。ここでは「のである。」は、文段の終わりに現れ、「帰結」の用法となっている。

(67)

1915 磁気飽和

- 1916 ユーイングは、はじめて一テスラを大きく越える磁場を作ったことで注目されるのだが、実はもう一つ重要な発見をしたのである。
- 1917 それは強磁性体には磁気飽和という現象があり、ある所まで磁気は伸びるが、それ以上は出ない、という事である。

が提案されており、散開星団に属する星々を種族Ⅰ、球状星団の星々を種族Ⅱと分類している。」と述べられている。

1918 そもそもコイルに鉄心を入れて強い磁気を作る、との方法は、コイルに流れる電流が少なく、鉄の磁気がまだ飽和していない間の話である。

(『極限』)

文 1916 は、すでに述べられた情報を「のだが」節で既定の事実として反復し、主節は、「実はもう一つ重要な発見をしたのである。」と、先行文で言及のない新たな情報を「実は」という言語形態的指標をとともに「のである。」で提示する。小見出しに続く文であることから、新たな文段の開始に現れていると考えてよいだろう。文 1916 は、後続文 1917 「それは強磁性体には磁気飽和という現象があり、ある所まで磁気は伸びるが、それ以上は出ない、という事である。」という情報の「前置き」となっている。ここでの「のである。」は、文段の開始に用いられ、後方被統括機能を発揮する「前提」の用法となっている。

上記の(66)(67)のように、表現形式としては同一の「のである。」といえども、文段での出現位置や、共起する言語形態的指標によって、さまざまな統括機能を発揮することがわかる。そのため、表現形式による特徴を見出すことは困難だといえる。これは、表現形式「のだ。」についても同様である。したがって、先の分析のように、文段の出現位置や共起する他の言語形態的指標と併せて分析することが必要になる。「のだ。」「のである。」と共起する他の言語形態的指標については、後で詳しく取り上げることにし、ここでは、「のである。」と「のだ。」との統括機能の比較を行うことにする。

「のだ。」「のである。」は、その使用数に約 10 倍の差がみられたが、以下の【表 7】の①③④⑥のように、ひとつの新書の中で混在した形で使用されている。

【表 7】新書の文章に使用される「のだ。」「のである。」

資料 \ ノダの形式	のだ。		のである。	
①「極限」	28	40.0%	149	21.3%
②「宇宙」	0	0.0%	54	7.7%
③「分かち」	3	4.3%	176	25.1%
④「西洋」	23	32.9%	159	22.7%
⑤「わかる」	0	0.0%	104	14.8%
⑥「できる」	16	22.9%	59	8.4%
合計	70	100.0%	701	100.0%

ここでは、新書の文章における「のだ。」「のである。」それぞれの統括機能の特徴を分析する。次の【表 8】は、資料別に「のだ。」「のである。」の用法を分析したものである。【表 7】に比べて、用法の数が増えるのは、前方にも後方にもノダの統括機能が発揮されることによる用法の重複があるためである。

【表 8】 資料別「のだ。」「のである。」の用法

資料	ノダの用法	I. 前方統括機能			II. 後方統括機能	III. 前方被統括機能		IV. 後方被統括機能		合計
		1. 換言	2. 見解	3. 帰結	4. 概略	5. 補注	6. 原因・理由	7. 前提	8. 前提(課題)	
①「極限」	のだ。	9(25.7%)	7(20.0%)	11(31.4%)	1(2.9%)	0(0.0%)	1(2.9%)	6(17.1%)	0(0.0%)	35(100%)
	のである。	52(29.1%)	14(7.8%)	61(34.1%)	4(2.2%)	0(0.0%)	17(9.5%)	31(17.3%)	0(0.0%)	179(100%)
②「宇宙」	のだ。	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
	のである。	15(26.3%)	1(1.8%)	33(57.9%)	0(0.0%)	0(0.0%)	5(8.8%)	3(5.3%)	0(0.0%)	57(100%)
③「分かち」	のだ。	1(33.3%)	2(66.7%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	3(100%)
	のである。	68(36.2%)	29(15.4%)	59(31.4%)	4(2.1%)	0(0.0%)	14(7.4%)	14(7.4%)	0(0.0%)	188(100%)
④「西洋」	のだ。	15(62.5%)	0(0.0%)	5(20.8%)	1(4.2%)	0(0.0%)	2(8.3%)	1(4.2%)	0(0.0%)	24(100%)
	のである。	87(53.4%)	0(0.0%)	61(37.4%)	1(0.6%)	0(0.0%)	7(4.3%)	6(3.7%)	1(0.6%)	163(100%)
⑤「わかる」	のだ。	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
	のである。	27(23.9%)	21(18.6%)	38(33.6%)	7(6.2%)	0(0.0%)	17(15%)	3(2.7%)	0(0.0%)	113(100%)
⑥「できる」	のだ。	10(55.6%)	1(5.6%)	1(5.6%)	2(11.1%)	0(0.0%)	2(11.1%)	2(11.1%)	0(0.0%)	18(100%)
	のである。	26(41.3%)	2(3.2%)	20(31.7%)	4(6.3%)	0(0.0%)	9(14.3%)	2(3.2%)	0(0.0%)	63(100%)
合計	のだ。	33(42.3%)	10(12.8%)	17(21.8%)	4(5.1%)	0(0.0%)	5(6.4%)	9(11.5%)	0(0.0%)	78(100%)
	のである。	274(36.6%)	63(8.4%)	264(35.2%)	20(2.7%)	0(0.0%)	69(9.2%)	58(7.7%)	1(0.1%)	749(100%)

注 () 内の%は、それぞれの資料の合計に対する割合を示す。

いずれの資料においても、「のだ。」「のである。」ともに、「補注」の用法はみられず、「換言」「帰結」の使用が目立つ。次に、「前提」の用法が多い。「見解」「概略」「原因・理由」は、いずれも10%に満たない。

また、合計欄の「のだ。」と「のである。」の用法を比較すると、「のだ。」は「換言」が42.3%と最も多く、次いで「帰結」が21.8%となる。それに対して、「のである。」は、「換言」が36.6%、「帰結」が35.2%と、順位は「のだ。」と変わらないが、「のだ。」は、約20%の差があるのに対し、「のである。」は、約1%の差しかない。これは、「のだ。」の用法が「換言」を中心としていることを示している。

(68)

940 我々は極限に来たのか？

941 低温の極限を追求して世紀を越えた展開を眺めてきたこの小旅行もここで終わりである。

- 942 あらためてふり返ると、この分野における二〇世紀の貢献は決定的である。
- 943 それはヘリウムの液化成功に始まり、原子気体のボース凝縮で終わっている。
- 944 絵に画いたような極限科学の展開である。
- 945 第1章で、認識量と到達量という概念が出てきたのをご記憶だろうか？これを低温の世界で言えば、アインシュタインの低温度認識量はボースガスのボース凝縮温度であった。
- 946 大まかに言えばそれは数十ナノK、0Kである。
- 947 それより低い温度における自然現象を何も予想できないのが現代の認識である。
- 948 驚くべきことに二〇世紀の人類は一気にそこまで到達したのである。
- 949 つまり0Kは認識量の限界であると同時に到達量でもあるのだ。
- 950 これは科学の世界では異例の事である。
- 951 極端なのは宇宙である。
- 952 ロケットの到達距離はたかが太陽系内なのに、宇宙のはては到達量よりもn倍以上遠い。
- 953 認識量はそこにまで伸びている。
- 954 まあ宇宙程極端ではなくても、認識量は普通桁ちがいに大きいのが常である。
- 955 低温科学でこの二量が一致するということは疑いもなく一つの終焉を意味する。
- 956 考え得る極限に来たのだ。

(『極限』)

文940の小見出しは、「我々は極限に来たのか？」と「のか」を用いた「課題導入」となっている。文941～944は、この節の概要を再提示しているが、これは、全体として「前置き」となっている。文945から、「認識量と到達量」の話題が再提示され、文947まで、低温度について、先行文の情報が要約的に反復される。文948「驚くべきことに二〇世紀の人類は一気にそこまで到達したのである。」は、「見解」の「のである。」によって、先行文945～948を統括する。これ自体が、文940の「話題提示」に対する「解答説明」となっているとみなすこともできるが、続く文949「つまり0Kは認識量の限界であると同時に到達量でもあるのだ。」と、同列型の接続表現「つまり」と、「換言」の「のだ。」によって、わかりやすく換言することで、文945～949を統括し、文段を成立させる。文950

～954 は、文 949 の内容が、いかに異例のことであるか、宇宙を例として補足する文段となり、文 949 に統括されることで、文段 945～954 が成立する。

続く文 955 で、文 949 の内容に、「疑いもなく一つの終焉を意味する。」という情報が付加されるが、これ自体では、まとまりに欠けるため、文 956「考え得る極限に来たのだ。」と、「換言」のノダを用いて、文 955 を換言するが、同時に、文 940 の「課題導入」に対して、直接「解答説明」することで、文 940～956 全体を統括し、「文段」が成立している。ここに、「のだ。」の統括の多重性が見て取れる。

「換言」の「のだ。」は、文 949、956 のように、比較的、統括力の強い先行文に対して、「つまり」などの同列型の接続表現をともなって言い換えることがあり、その場合、統括の機能領域は、広範囲である傾向が認められる。

4.1.2.2.2. 「のだろうか」の統括機能による文脈展開の特徴

「のだろうか。」は、「前提」の用法で用いられることで、ほぼ、「課題導入」の文となる。そのため、(69)のように、転換型の接続表現「では」「それでは」と共起し、文段の開始に用いられることが多い。

(69)

1187 **「存在するとは知覚されていることである」**

1188 物質は存在しない。

1189 すくなくとも、観念に与えられるものとしては存在しない。

1190 もしも観念こそが存在への避けがたい通路であって、観念として与えられるもののほかは存在しえないとするならば、物質、物体としての実体、事物それ自体はおよそ存在しない。

1191 それでは、「存在する」とはどういう意味なのだろうか。

1192 パークリーの答えはよく知られている。

1193 存在するとは、知覚されていることなのである。

(『西洋』)

文 1191 は、転換型の接続表現「それでは」と「前提」の「のだろうか。」によって、新たな文段が「課題導入」のかたちで開始する。その後、文 1192 で前置きをし、文 1193「存

在するとは、知覚されていることなのである。」の「帰結」の「のである。」をともなった「解答説明」の文に統括され、文段が成立する。この「のである。」は、それ自体では、情報に不全感があるため、後続文に補足内容を求める「概略」の用法も有している。また、小見出し 1187「存在するとは知覚されていることである」を反復しているという点からも、文 1193 の統括力が強いことがうかがわれる。

これに対して、(70)のように、「のだろうか。」が、小見出しの終わりに現れることがある。

(70)

2523 ただし、図 5-2 のように押し込まれた物質がそのまま原子の形で凝集しているという意味ではない。

2524 この図は圧縮率をわかりやすく感覚的に示しただけであって、白色矮星物質の構造はまた別である。

2525 大体においてこんなに小さな原子では、原子内電子軌道がきちんとした量子準位を取れない。

2526 ではどのような電子状態が安定なのだろうか。

2527 **白色矮星は超高密度金属**

2528 読者はすでにすべての物質は高圧下で金属になる、ということを知っている。

2529 白色矮星もズバリ金属なのである。

2530 ただしその密度がべらぼうなだけである。

2531 金属の電子構造を思い出してみよう。

(『極限』)

文 2526 は、小見出しの終わりに現れているが、(69)と同様に、転換の接続表現「では」が、前提の「のだろうか。」をともない、新たな話題を「課題導入」のかたちで開始していると考えられる。これは、小見出し（書き手の段落）と文段との乖離ととらえることができるだろう。

文 2526 の「課題」は、それ自体で、文段が終了するわけではなく、続く文 2527 の小見出し以降の文 2529 で、「解答説明」が「のである。」によって示されることになる。このように、小見出しの終了に現れる「のだろうか。」は、後続する小見出しを含んで統括機

能を発揮するという点で、「見出し」間の統括関係に関与するものとなる。

以上、文末のノダの表現形式ごとの文脈展開の特徴を明らかにした。次に、ノダと共起することでさまざまな統括機能を発揮する言語形態的指標である「接続表現」の分析を行う。

4.2. ノダと接続表現の共起関係から見た文脈展開の特徴

4.2.1. ノダと共起する接続表現

4.2.1.1. 先行文との関係を表す接続表現

次の【表 9】は、縦軸をそれぞれの資料とノダの有無、横軸をノダと共起する接続表現とし、分析を行ったものである。[] は、文中の使用数を示し、() は、総文数に対する割合を示す。なお、一文中に複数の接続表現が使用された場合、重複して数えるため、接続表現の合計数と接続表現が使用される総文数とは一致しない。

【表 10】 は、接続類型を基準に、ノダの使用率を高い順に並べたものである。

【表 10】 接続類型ごとのノダの使用率

接続類型	出現数	出現率
同列	112[23]	10.03%
逆接	81[5]	7.25%
順接	79[13]	7.07%
添加	73[30]	6.54%
対比	32[18]	2.86%
補足	24[5]	2.15%
転換	23[6]	2.06%

【表 10】 の接続表現の類型別にノダの出現数をみると、「同列型」が 112 例 (10.03%) と最も高く、「逆接型」81 例 (7.25%)、「順接型」79 例 (7.07%)、「添加型」73 例 (6.54%) と続き、これら 4 種の接続類型が、ノダ側から見て、相対的に共起しやすいグループとみてよいだろう。それに対して、「対比型」「補足型」「転換型」の使用率は、いずれも 3% に満たず、これら 3 種の接続類型は、ノダ側から見て、相対的に共起しにくいグループとみることができるだろう。

ノダと共起する接続表現の使用の傾向は、**エラー！参照元が見つかりません。**の使用率から大まかにとらえることができるが、接続類型、個別の接続表現側から見ると、必ずしも、ノダの使用率が高いことが、ノダと接続表現の共起のしやすさにつながるわけではない。特定の接続表現の使用に偏りがあった場合、共起のしやすさに関係なく、ノダの使用率もそれに合わせて偏るためである。したがって、より、厳密にノダと接続表現との共起のしやすさを分析するためには、それぞれの接続表現を対象に、ノダと共起する場合と、ノダと共起しない場合の使用率を比較し、有意差があるかどうかを明らかにする必要がある。

本研究では、有意差を明らかにする方法として、「 χ 二乗検定」を用いる。**【表 11】**のように、縦軸にノダの有無を、横軸に接続表現の有無をとったクロス集計表を用い、エクセル関数 CHITEST を用いて、 χ 二乗検定を行うことで、ノダの有無と接続表現の有無との関連を分析する。

【表 11】 χ 二乗検定に用いるクロス集計表

		当該接続表現の使用		合計
		有	無	
ノダの使用	有	ノダ有 接続表現有	ノダ有 接続表現無	ノダ有 接続表現有＋無
	無	ノダ無 接続表現有	ノダ無 接続表現無	ノダ無 接続表現有＋無
合計		ノダ有＋無 接続表現有	ノダ有＋無 接続表現無	ノダ有＋無 接続表現有＋無

また、期待値は、**【表 12】**の計算式で求める。

【表 12】 期待値の計算方法

		当該接続表現の使用		合計
		有	無	
ノダの使用	有	$g*c/n$	$c*h/n$	c
	無	$g*f/n$	$h*f/n$	f
合計		g	h	n

【表 11】と【表 12】により、実測値と期待値が求められる。ここで、関数 CHITEST を用いて、 χ 二乗検定を行う。

(式)

=CHITEST(実測値のクロス集計表の範囲,期待値のクロス集計表の範囲)

次の【表 13】は、接続類型ごとに、ノダの有無と接続表現の有無の関連を分析したものである。この結果からは、「対比型」の接続類型以外のすべての接続類型において、有意差があることがわかる。

【表 13】 接続類型とノダとの共起関係

接続類型	P値	有意差
順接	0	○
逆接	0.00035	○
添加	0.00293	○
対比	0.03961	
転換	0	○
同列	0	○
補足	0.0003	○

(P 値は、小数第五位まで計算)

本章で扱う接続表現は、ノダとの共起数が 0 の接続表現が含まれていないので、【表 13】では傾向を見るにとどめ、個別の接続表現の共起関係を分析する。

次の【表 14】は、個別の接続表現ごとにノダとの共起関係を分析したものである。

ここでは、**エラー！参照元が見つかりません。** 使用率に関連させて、【表 14】の結果を分析する。まず、**エラー！参照元が見つかりません。** において、使用率が最も高かった

「同列型」の接続表現は、「つまり」「ようするに」「いわば」「いずれにしても」の4種類に有意差が認められ、全体的に有意差が認められる。使用率第2位の「逆接型」は、「が」「でも」「でもね」「それなのに」の4種類の接続表現に有意差が見られた。第3位の「順接型」は、「だから」「だからこそ」「そのためにも」「そうだとすると」「このようにして」「その結果」「その結果として」と7種の接続表現に有意差が見られ、まんべんなくノダとの共起関係が認められるという結果となった。使用率第4位の「添加型」は「そして」のみに有意差が認められた。使用率が低い第5位の「対比型」は「その反面」のみに、第6位の「補足型」は「だって」「実は」に、第7位の「転換型」は「では」「それでは」に、有意差が認められた。

【表 14】ノダの有無による接続表現の使用の有意差

	接続表現	P値	有意差
順接	1 だから	0.00028	○
	2 だからこそ	0	○
	3 それだからこそ	0.0288	
	4 そのため	0.10471	
	5 そのためにも	0.00199	○
	6 そうだとすると	0.00071	○
	7 したがって	0.48807	
	8 すると	0.54146	
	9 そうなると	0.96803	
	10 そこで	0.83604	
	11 それゆえ	0.32795	
	12 このように	0.60143	
	13 このようにして	0	○
	14 こうして	0.04436	
	15 かくて	0.38503	
	16 その結果	0.00466	○
	17 その結果として	0.00002	○
	18 で	0.21106	
逆接	19 しかし	0.35365	
	20 が	0	○
	21 けれども	0.996	
	22 だが	0.43631	
	23 でも	0	○
	24 でもね	0	○
	25 それなのに	0.00071	○
	26 とはいえ	0.06602	
	27 にもかかわらず	0.04522	
	28 ところが	0.19989	
添加	29 そして	0.00109	○
	30 さらに	0.90947	
	31 しかも	0.05205	
	32 また	0.86784	
対比	33 これに対し	0.10641	
	34 これに対して	0.75635	
	35 その反面	0.00071	○
	36 逆に	0.01532	
	37 むしろ	0.41329	
	38 あるいは	0.8269	
	39 一方で	0.32795	
	40 それとも	0.10641	
転換	41 ところで	0.81754	
	42 さて	0.74413	
	43 では	0	○
	44 それでは	0	○
同列	45 すなわち	0.21314	
	46 つまり	0	○
	47 ようするに	0.00018	○
	48 いわば	0.00053	○
	49 たとえば	0.17487	
	50 いずれにしても	0.00845	○
	51 ともかく	0.21441	
補足	52 だって	0.00071	○
	53 なぜなら	0.32385	
	54 ただ	0.3554	
	55 もっとも	0.59916	
	56 なお	0.48672	
	57 実は	0	○

(P 値は、小数第五位まで計算)

以上、【表 10】 【表 13】 【表 14】 を総合的に分析すると、ノダと共起する接続表現の特徴を以下の 3 点にまとめることができる。

①「同列型」「逆接型」「順接型」の接続類型は、ノダの使用率も高く、個別の接続表現をみても、有意差が認められるものが多く、接続類型全体とノダとに共起関係があるといえる。

②「添加型」の接続類型は、ノダの使用率は高いが、特定の接続表現にのみ有意差が認められるため、接続類型全体とノダとの共起関係があるとは言い難い。

③「対比型」「補足型」「転換型」の接続類型は、ノダの使用率が低く、特定の接続表現にのみ有意差が認められるため、接続類型全体とノダとの共起関係があるとは言い難い。

それぞれの接続表現とノダが共起することで（または、しないことで）、どのような文脈展開となるかといった詳細な分析は、4.2.2以降で扱うこととし、ここでは、接続類型および、接続表現とノダとの共起関係の傾向をとらえるにとどめる。

「同列型」の接続表現「つまり」は、全体の使用例が多く（348例）、ノダの有無による有意差も認められた（P値0%：小数第五位まで）ことから、接続表現「つまり」が用いられた場合、文末（節末）にノダが用いられやすいということがわかる。また、用例数は「つまり」に比べ少ないが、「順接型」の接続表現「だから」（64例）も同様のことがいえる。この二つの接続表現を含む「つまり、～のである。」「だから、～のである」は、すでに、グループ・ジャマシイ編著（1998）『日本語文型辞典』にも、ノダと共起した文型として立項されており³³、本研究は、新書の文章においても、その記述が妥当であることを確認したことになる。

しかし、今回分析対象とした新書の文章では、「順接型」の接続表現「だから」（64例）よりも、「添加型」の接続表現「そして」（232例）の使用数が多く、ノダの有無による有意差も認められる結果となった。したがって、「だから、～ノダ。」を立項するのであれば、「そして、～ノダ。」も、文型として立項できることになるだろう。しかし、「そして、～ノダ。」という文型を特立して扱ったものは、管見の限り見当たらない。ここでは、「そして、～ノダ」を一つの論理的な文脈展開のパターンを担う文型として認めうる可能性を示唆するに留め、詳しくは、4.2.4で扱うことにする。

また、文型として特徴的なのは、「転換型」の接続表現「では」「それでは」と共起するノダである。4.1.2.2.2ですでに述べたが、「では」「それでは」と共起するノダは、1例を除いて、すべて「～ノカ」（疑問）のかたちとなり、「（それ）では、～ノカ。」は、「課題導入」の文脈展開方法を担う文型であるといえることができる。

³³ 山口（1975）などにも、ノダと共起する接続表現についての言及がある。

この分析結果は、特定の接続表現が使用された場合に、ノダと共起しやすいかどうかを示したものであり、ノダの有無により、文脈展開の方法に相違があるかを述べることはできない。例えば、ノダの使用数が多い「逆接型」の接続表現「しかし」(41例)などは、ノダの有無による有意差は認められないが、ノダの有無により、文脈展開の方法が異なる可能性がある。そのため、用例数の多い接続表現については、有意差が認められなかったものも4.2.2以降で扱う。

4.2.1.2. 後続文との関係を表す接続表現

次に、ノダ文と後続文(群)との接続関係を表す接続表現を分析する。

【表 15】 ノダ後続文と共起する接続類型

接続類型	出現数	出現率
順接	41[7]	3.66
逆接	54[5]	4.83
添加	56[21]	5
対比	25[13]	2.23
転換	13[4]	1.16
同列	54[29]	4.83
補足	24[4]	2.14

(出現率の数値は%)

ノダ文と共起する接続類型との異同は、4.2.1.3で扱うこととし、ここでは、ノダの後続文と共起する接続類型および接続表現を分析する。

出現率が最も高いのは、「添加型」の接続類型の5%で、続いて、「逆接型」「同列型」がともに4.83%となる。突出して出現率の高い接続類型は見られないが、この3つの接続類型が、相対的に出現率が高いといえる。次に、「順接型」の接続類型の出現率が3.66%と続き、「対比型」2.33%、「補足型」2.14%、そして、「転換型」1.16%というように、漸次的に減少している。出現率が突出して高い接続類型は見られず、全体的に、接続表現との共起が少ないのが特徴だといえる。

【表 16】 ノダの後続文と共起する接続表現

【表 17】 接続類型とノダ後続文との共起関係

接続類型	P値	有意差
順接	0.27838	
逆接	0.57279	
添加	0.42352	
対比	0.63961	
転換	0.18397	
同列	0.5151	
補足	0.0065	○

(P 値は、小数第五位まで計算)

接続類型において、ノダ後続文か否かによって有意差が認められたのは、「補足型」のみである。ノダの後続文からみた場合、「補足型」の接続類型における出現率は、2.14%とそれほど高いものではないが、「補足型」の接続類型から見た場合、ノダの後続文が現れやすいということがいえるだろう。

次に、個別の接続表現とノダの後続文との共起関係の有無を分析する。

今回の調査で、有意差が認められたのは、「順接型」の「このように」、「添加型」の「そうして」、「同列型」の「いずれにしても」、「補足型」の「だって」「もっとも」の5種類の接続表現であった。ただし、「そうして」「いずれにしても」「だって」は、出現数が5例以下と用例数が少ないため、有意差が信頼できるのは、「このように」と「もっとも」ということになる。ここでは、先行するノダ文をさらに統括することが予想される「このように」と、先行するノダ文に統括されることが予想される「もっとも」という、文脈展開方法が逆の接続表現に有意差が見られるという点に注目したい。

【表 18】 ノダの後続文か否かによる接続表現の使用の有意差

接続表現		P値	有意差		
順接	順当	1 だから	0.05624		
		2 それだからこそ	0.029		
		3 そのため	0.11975		
		4 で	0.52405		
		5 それで	0.48536		
		6 したがって	0.53678		
	きっかけ	7 とすれば	0.21188		
		8 こうして	0.04486		
	結果	9 かくて	0.28967		
		10 かくして	0.8191		
	まとめ	11 このように	0.00002	○	
		12 このようにして	0.65651		
逆接	反対・単純な逆接	13 しかし	0.61571		
		14 しかしながら	0.21188		
		15 だが	0.17703		
		16 でも	0.96375		
		17 けれども	0.29306		
		18 とはいえ	0.23219		
	背反・くいちがい	20 それでも	0.86203		
		21 にもかかわらず	0.54281		
	意外・へだたり	22 ところが	0.09815		
		23 そして	0.87601		
添加	累加・単純な添加	24 そうして	0.00201	○	
		25 それから	0.73414		
	追加	26 さらに	0.1618		
		27 しかも	0.77299		
		28 次いで	0.43657		
		29 次に	0.27112		
	並列	30 また	0.09726		
	継起	31 そこで	0.39878		
	対比	比較	32 むしろ	0.39376	
			33 これに対して	0.75941	
34 逆に			0.9071		
35 一方			0.16268		
選択		36 それとも	0.10693		
		37 または	0.27112		
		38 あるいは	0.93013		
転換	転移 課題	39 ところで	0.8191		
		40 さて	0.74628		
		41 そもそも	0.9949		
	区分	42 では	0.53392		
		43 それでは	0.07973		
同列	反復	44 すなわち	0.78811		
		45 つまり	0.99378		
		46 要するに	0.21552		
		47 いわば	0.20818		
	限定	48 たとえば	0.39966		
		49 例えば	0.36305		
		50 いずれにしても	0.00854	○	
補足	根拠づけ 制約	19 だって	0.00072	○	
		51 ただ	0.41626		
	52 ただし	0.14253			
	53 もっとも	0.00678	○		
	補充	54 なお	0.76621		
		55 ちなみに	0.54281		
		56 実は	0.34296		

(P 値は、小数第五位まで計算)

(71)

- 340 もっとも、恐慌は市場社会がしらじらと明ける頃から始まった。
- 341 市場社会の夜明けとともに生じた恐慌は、一六三四年から一六三七年までのチューリップ球根恐慌が名高い。
- 342 オランダでは当時、オスマントルコから輸入されたチューリップ球根に人気が集まり、その価格が高騰したけれど、バブルとしてはじけてしまう。
- 343 投機が過熱し、バブルが生じると、突然の如くに恐慌が襲い、人々は恐怖に震える。
- 344 チューリップ球根恐慌に象徴される恐慌による恐怖の物語は、市場社会の幕明けとともに語り始められるけれども、それは市場社会には恐慌という悲劇のドラマが必ずまわりついていることをも意味している。
- 345 自動調節的市場経済が軌道に乗り始めた一九世紀のイギリスでは、ほぼ一〇年周期で恐慌が生じている。
- 346 つまり、一八二五年、一八三六年、一八四七年、一八五七年、一八六六年とほぼ一〇年周期で恐慌が発生した。
- 347 好況から恐慌が突然発生して、不況に陥るという景気循環が繰り返されたのである。
- 348 このように市場社会では好況、恐慌、不況という景気循環を繰り返しながら、スパイラルに経済が動いていく。
- 349 こうした景気循環には三つの波動が、これまで指摘されてきた。
- 350 第一は、在庫投資循環といわれる短期の波動である。

〔分かち〕

(71)は、文 347 に、前方統括機能を発揮する「換言」のノダによって、直接的には文 345～346 を統括していると考えられるが、このイギリスの例は、文 344 「それは市場社会には恐慌という悲劇のドラマが必ずまわりついていることをも意味している。」ことを具体的に説明するために用いられており、ノダは、「恐慌」と市場社会とのかかわりの話題が開始する文 340 まで、間接的に統括すると考えられる。

文 348 の「このように」は、ノダによって統括された文段 340～347 を再提示するが、これは、先行文群を統括することが目的ではなく、「景気循環」をもとに、新たな話題「景

気循環の三つの波動」を開始するために用いられているとみてよい。統括の多重性からみると、文 348 のノダは、先行文（群）をまとめることで、後続文との間に一定の区切りをつけていると考えられる。

(72)

1144 **再分配のパラドックス**

1145 社会政策学者コルピの指摘する「再分配のパラドックス」は、サービス給付による「分かち合い」の重要性を実証している。

1146 「再分配のパラドックス」とは、貧困者に限定した現金給付を手厚くすればするほど、その社会は格差が激しくなり、貧困が溢れ出るという命題である。

1147 表 4-1 には日本が悪平等ほど平等な社会だと宣伝された一九九〇年代をとって、「再分配のパラドックス」の様相を示している。

1148 この表で最も左欄にある社会的扶助支出とは、生活保護のように、貧困者に限定して現金を給付する現金給付であるといつてよい。

1149 こうした貧困者に限定した現金給付の支出ウェイトの高い国は、アメリカ、イギリスというアングロ・サクソン諸国である。

1150 これに対して貧困者に限定した現金給付である社会的扶助支出のウェイトの少ない国は、スウェーデン、デンマークというスカンジナビア諸国である。

1151 このアングロ・サクソン諸国とスカンジナビア諸国との中間に、社会的扶助支出のウェイトが中程度のドイツ、フランスというヨーロッパ大陸諸国が位置している。

1152 ところが、格差の指標であるジニ係数をみると、社会的扶助支出の高いアングロ・サクソン諸国でジニ係数が著しく高くなっている。

1153 つまり、格差の激しい国となっている。

1154 これとは対照的に社会的扶助支出の低いスカンジナビア諸国のジニ係数は著しく低くなっている。

1155 つまり、格差の少ない国になっている。

1156 社会的扶助支出が中位であるヨーロッパ大陸諸国は、格差も中位に位置している。

1157 貧困率をみても、格差と同様のことが指摘できる。

- 1158 つまり、社会的扶助支出の高いアングロ・サクソン諸国は貧困率も高く、社会的扶助支出の低いスカンジナビア諸国は貧困率も低く、社会的扶助支出の中位のヨーロッパ諸国は貧困率も中位となっている。
- 1159 これがコルピの指摘する「再分配のパラドックス」である。
- 1160 社会的扶助支出のような貧困者に限定した現金給付が高ければ高いほど、格差も貧困も激しくなってしまうのである。
- 1161 もつとも、日本は例外である。
- 1162 日本の社会的扶助支出のウェイトは低いけれども、「再分配のパラドックス」の示唆するように、貧困も少なく、所得分配も平等だというわけではない。
- 1163 日本のジニ係数も相対的貧困率も、高いからである。
- 1164 日本は国際比較の対象として、アメリカやイギリスしか念頭にないといってもいいすぎではない。
- 1165 そのため、アメリカやイギリスなどのアングロ・サクソン諸国よりも低かったというだけで、「悪平等」といえるほど平等な国家だとかまびすしく喧伝されたのである。
- 1166 もちろん、ヨーロッパ経済と比較すれば、「悪平等」などというのは偽り言である。
- 1167 相対的貧困率にいたってはイギリスよりも悪化していたのである。
- 1168 **垂直的再分配と水平的再分配**
- 1169 「再分配のパラドックス」が働く秘密は、「分かち合い」にある。

(『「分かち」』)

(72)は、文 1160 にノダが用いられている。文 1144 の見出し「再分配のパラドックス」によって、新たな話題が開始され、文 1145～1146 で、辞書的な説明がなされる。文 1147 から、表 4-1 の具体的な説明を始めている。文 1156 までが「格差」について、文 1157～1158 までが「貧困率」についての説明で、もう一度、文 1159～1160 で、「再分配のパラドックス」をまとめるという文脈展開である。

文 1161 の「もつとも」は、文 1160 に対する補足であることを示すが、「日本は例外である」という情報は、唐突であるため、文 1162～1167 で、なぜ、「日本は例外である」とい

えるのかを解説することになる。直接的な理由は、文 1163「日本のジニ係数も相対的貧困率も、高いからである。」だといえるが、文 1164～1165 で、新たに、「「悪平等」といえるほど平等な国家だとかまびすしく喧伝された」背景が述べられ、文 1166 で、「「悪平等」などというのは偽り言である」ことが、文 1167 の理由のノダをともなった文を根拠に述べられる。このように、補足型「もっとも」をともなった文 1161 は、その根拠となる文 1162～1163 と、「日本は例外ではない」という仮説（≒世間一般の理解）を否定する 1164～1167 を論拠としており、文 1160 に対する「注釈」を挿入するのではなく、「補足」自体が多重構造を有した文段となっている。

このように「補足」の文段が複雑な多重構造を有した文段であるとしても、文 1144～1167「再分配のパラドックス」の中心文は、ノダをともなった文 1160 である。仮に、文 1161～1167 を取り去っても、文 1168 以降への文脈展開に支障をきたすことはない。このように、ノダの後続文に補足の接続表現「もっとも」が共起しやすいのは、ノダをともなった文が「結論表明」の中心文として、先行文群を統括し、まとまりをつけているためである。

このように、ノダ文の後続文に「このように」「もっとも」が共起しやすいのは、先行する文のノダによって、ある種のまとまりがつけられていることに起因していると考えられる。ノダによって、先行文群をまとめることで区切りを付け、そのまとまりに対して、接続表現を用いて、新たな文脈を生み出すという展開方法が見られる。

また、小見出しごとのまとまり全 556 例中 120 例 (21.6%) に、ノダが用いられている。これは、ノダがある種のまとまりを表すために用いられているという先行研究の裏付けともいえるだろう。ただし、小見出しのまとまり同士にもさまざまな関係が認められることから、単純に、ノダが小見出しの終了部に用いられ、前方統括機能を発揮することで、小見出し全体をまとめるという文脈展開のみとはいえない。ここでは、小見出しの終了部に現れるノダの文脈展開の方法を、接続表現との共起関係から分析する。次の

【表 19】 は、小見出しの終了部にノダが用いられる例を、共起する接続表現とともに示したものである。

小見出しの終了部に現れるノダと最も共起する率が高いのは、同列型の接続表現「つまり」(9例、7.50%)であり、添加型の接続表現「そして」(5例、4.17%)、「しかも」(4例、3.33%)と続く。「つまり」との共起は、先行研究での記述、および、後述の4.2.2の分析によって、予想の範囲内であるが、添加型「そして」「しかも」が、多く現れるのは、なぜか。まず、「つまり」の例を確認し、次いで、「そして」「しかも」の例を考察する。

次の(73)は、小見出しの終了部に「つまり、～ノダ」が用いられる例である。

(73)

681 **「企業は大きく、労働者は小さく」の結末**

682 新自由主義は「小さな政府」を唱える。

683 確かに、福祉国家は一九世紀中葉の自由主義国家の「小さな政府」ではなく、「大きな政府」である。

684 しかし、福祉国家の時代は「大きな政府」だけではなく、三つの「大きな」要素から形成されていたことを忘れてはならない。

685 つまり、福祉国家の時代とは「大きな政府」、「大きな企業」、「大きな労働者」から形成される「大きな」時代だったのである。

686 一九世紀の自由主義国家の時代が軽工業を基軸にしていたのに対し、福祉国家の時代は重化学工業を基盤としていた。

687 つまり、地域に密着した小企業が担った軽工業とは相違して、大企業を形成して重化学工業を基盤とした「大きな企業」の時代だったのである。

688 「大きな企業」には大量の労働者が一斉に雇用される。

689 その意味で福祉国家の時代とは、「大きな労働者」の時代である。

690 しかし、ここでいう「大きな労働者」という意味は、大量雇用の労働者という意味にとどまらない。

691 「大きな企業」に大量雇用される労働者が、労働組合として組織され、大きな発言力を獲得していたという意味でも、「大きな労働者」なのである。

692 もちろん、大きな発言力とは組織された労働者が、労働市場において賃金や労働条件の決定に強い発言力を行使したというだけにとどまらない。

693 大衆デモクラシーを开花させて、政治的発言力を強め、労働市場への規制や社会

保障制度を充実させる「大きな政府」を実現させたのである。

- 694 もちろん、一九世紀の自由主義国家の時代は、「小さな」時代である。
- 695 「小さな政府」に軽工業を担う「小さな企業」、さらに労働者には選挙権すらない「小さな労働者」の時代だったのである。
- 696 新自由主義は古き「小さな」時代へと復古を目指す。
- 697 サッチャーに語らせれば、「ビクトリアの美徳に戻れ」である。
- 698 しかし、新自由主義は単なる復古主義ではない。
- 699 新自由主義は「大きな政府」を「小さな政府」に改めることを宣伝する。
- 700 さらに、「大きな労働者」の発言力を弱め、「小さな労働者」にすることに情熱を傾ける。
- 701 ところが、新自由主義は「大きな企業」を「小さな企業」へとは口が裂けてもいわない。
- 702 つまり、労働者の発言力を弱め、労働者が獲得してきた労働市場での権利や社会保障による生活保障の権限を奪い、「大きな企業」の権限をより大きくすることを目指したのである。
- 703 **日本は「大きな政府」だったのか**
- 704 新自由主義は「小さな」時代を唱えながら「小さな政府」と「小さな労働者」を主張し、「大きな企業」を実現させた。

(『分かち』)

文 681 「「企業は大きく、労働者は小さく」の結末」は、ノダの使用が比較的多い小見出しであるが、その中で「つまり、～ノダ」は、文 685・687・702 に用いられている。文 685 は、先行文 684 を詳しく「換言」しており、文 687 は、まず、先行文 686 を換言するが、それだけでなく、さらなる先行文群 682～685 の情報をも含み統括する前方統括機能を発揮する。また、「大きな企業」については、先行文で触れられているが、その詳細については述べられておらず、旧情報とは言い難い。そのため、後続文で、「大きな企業」の情報が補足されるという後方統括機能をも発揮する。文 702 の「つまり、～ノダ」で提示された情報は、この小見出し全体の文 681～701 ですでに述べられた情報を「換言」したものである。ノダは、前方統括機能を発揮し、小見出し全体を統括すると考えられる。後続の小見出し

は、新たに「日本は「大きな政府」だったのか」と、日本の話題へと展開しているため、文段として、一つの区切りが与えられると考えられる。このように、「つまり、～ノダ」は、小見出しの終了部に現れ、当該の小見出し全体を統括するという文脈展開があることがわかる。次に、ノダが添加型の接続表現「そして」「しかも」と共起する例を考察する。

1000 **カピッツァ登場**

1001 ここでロシアの巨星、カピッツァ（図 2-14）が登場する。

1002 この人物は本書が扱う三大極限、低温、高圧、強磁場の内、低温と強磁場の二分野においてパイオニアであるという、スケールの大きな人物である。

1003 激動する運命にもてあそばれながらも二〇世紀の物理学を拓いた巨人である。

1004 やや脱線するが、カピッツァについての伝記をごく大まかにのべる。

1005 ピョートル・レオニードビツ・カピッツァは、一八九四年、ロシアで生まれたがロシア革命後のソ連を出て英国のケンブリッジで原子核研究のメッカ、キャベンディッシュ研究所に入り、前人未到のパルス強磁場を作ってアルファ線（ヘリウム原子核）の質量を決めるという大成果をあげ、一九三三年モンド研究所の所長となった。

1006 ところがソ連の奸計によって一九三四年ソ連に引き戻された。

1007 思い直して立ち直り、物理問題研究所長となり、極低温研究を始める。

1008 そして一九三八年、液体ヘリウムの研究で超流動核心部の現象を発見したのである。

1009 **超流動の発見**

1010 カピッツァは液体ヘリウムを細管中を流すという手法でその粘性を調べた。

（『極限』）

文 1000 の小見出しから、新たにカピッツァの話題が開始される。文 1004 で、「伝記」について触れられることが予告され、文 1005 からは、伝記の情報が述べられる。文 1008 も、その情報の一部であるが、「そして、～ノダ」のかたちで新情報を提示することで、先行文群である伝記部を統括するだけでなく、後続文への「前置き」として、後方被統括機能を発揮する。そのため、後続文では、文 1008 の情報の一部が話題として取り上げられること

になる。実際に、文 1009 の新たな小見出しは、文 1008 の情報の一部「超流動の発見」についてである。このように、「そして、～ノダ」は、先行文群を統括しながら、後続する話題の「前提」になるという文脈展開となる。

「そして」と同様、添加型の接続関係である「しかも」は、今回分析した限りでは、すべて、次の(74)のように先行文の結論の累加という文脈展開となる。

(74)

595 バブルは産業構造を転換する必要のある時代に、新しい産業の創設へと投資が向わない時に生じる。

596 新しい産業へ投資をすべき時に、先述したようにチューリップの球根を熱に浮かされたように購入すれば、バブルが発生してしまう。

597 一七二〇年代に生じた「南海会社泡沫恐慌」も、海の水を水銀に変えるというようなプロジェクトに投資した結果の文字どおりの「泡沫 (bubble) 」だったのである。

598 技術革新に果敢にチャレンジすることもなく、無慈悲に人間を切り捨てる企業は、新しい産業を創造する投資を担うはずもない。

599 しかも、技術革新に果敢にチャレンジをしたとしても、これまでのような労働手段としての機械設備に対する技術革新への投資では、産業構造を転換するような新規産業の創設は不可能なのである。

601 **必要なのは知識社会へ向けた技術革新**

602 経済とは、人間が自然に働きかけて、人間にとっての有用物に自然を変えていく営みだといってよい。

(『「分かち合い」』)

文 595 から、「バブル」がなぜ発生するのかのまとめが述べられる。文 597 は、前方統括機能を発揮し、先行文群を統括する。文 598 は、これまでの結論が述べられ、文 599 は、その結論に、「さらに、～ノダ」の形で、結論を累加するという文脈展開となっている。これは、「換言」のノダとして、前方統括機能を発揮し、先行文 598 を統括しているといえる。文 595～599 は、小見出し「「無慈悲な企業」の限界」の一部であり、この小見出しを統括するという意味では、文 598～599 の情報「不可能である」ことが示せば十分であるが、

この小見出し自体が、「では、どのような技術革新が必要なのか」という問いを生じさせるため、後続文にその解答を求めるといふ展開となる。実際に、文 601 からは、「知識社会に向けた技術革新」と、解答の小見出しとなっている。

以上、ノダ文の後続文と共起する接続表現の特徴は、以下の 4 点にまとめられる。

- ① 後続文に接続表現が現れる確率は、添加型の 5% が最大で、相対的に接続表現との共起が少ない。
- ② 個別の接続表現では、順接型「このように」、補足型「もつとも」に信頼できる有意差が見られた。この原因は、先行するノダ文が、先行文を統括し、ある種の区切りが生じるためであると考えられる。
- ③ 小見出しの終了部にノダが現れる例が、全小見出し 556 例中 120 例 (21.6%) と多く、同列型の接続表現「つまり」と共起する例が 9 例 (7.5%) と最も多く、次いで、添加型の接続表現「そして」(5 例、4.17%)、「しかも」(4 例、3.33%) となる。それぞれの文脈展開の方法は異なるが、このことは、②と同様に、ノダがある種の統括力を発揮し、文段の成立につながると考えられる。

次に、有意差の見られた接続表現が、ノダとの共起によってどのように文脈が展開していくのかを考察する。

4.2.2. 「同列型」の接続表現「つまり」と共起するノダの文脈展開の特徴

ここでは、「同列型」の接続表現において、最も使用率が高く、ノダの有無による有意差が見られた「つまり」の文脈展開の特徴を考察する。

接続表現「つまり」と共起するノダは、すべて「前方統括機能」を発揮し、先行文を統括する。その範囲は、(75)のように、先行文 1 文のみを統括することもあれば、(76)のように、文を超える連文を統括することもある。

(75)

471 私が大学で行っているのは、〈瞬間多読術〉というトレーニングだ。

472 まず、十人程度のメンバーが円形になり、中央に積み上げられた新書系の本の中からそれぞれ自分が関心があるもの（ただし読んだことのないもの）を選び取る。

473 そして、三分間でその本に目を通し、各人がその本の要約を言う、というトレーニン

グである。

-
- 474 三分で一冊の本を要約できるように読むというのは、無理な注文ではある。
- 475 しかし、大学でこれを行うと、三分間の間に本の主旨を的確につかまえることのできる学生も出てくる。
- 476 つまり、決して不可能な技術ではないのである。
- 477 たしかにキツイが、「やってやれないことはない」技術である。
-
- 478 トレーニング効果も明確で、何度か繰り返すうちにコツがつかめてくる。

（『「できる人」』）

文 471 で、「〈瞬間多読術〉」の話題を導入し、文 472～473 で、具体的に何をやるトレーニングなのかを述べる。ここで、一つの文段が成立し、文 474 からは、具体的なトレーニングに対する補足の文段が開始する。「～のは、～ではある。」と譲歩の文型を用いて、補足を開始し、文 475 の「逆接型」の接続表現「しかし」を伴って、想定される事態と逆の現状を述べることで、トレーニングの妥当性を強調する。文 476 は、文 475 で述べられる「大学でこれを行うと、三分間の間に本の主旨を的確につかまえることのできる学生も出てくる」という「事実」に対して、筆者がノダを伴って、見解を述べることで、文 475 を統括する。このノダは、「見解」の用法となる。続く、文 477 は、「補足型」の接続表現「たしかに」を伴って、文 476 の情報を反復している。接続表現の接続類型の統括機能を用いると、文 477 は、文 476 に統括されることになる。そのため、この補足の文段 474～477 は、文 476 「つまり、～のである。」に統括されることになる。この文段は、補足の文段のため、さらに、文 471～473 に統括されることになる。文 478 からは、新たな文段が開始されるが、これは、文段 471～473 と同レベルの文段である。これは、補足の文段 474～477 を省略しても、文脈が損なわれることがないことから確かめられる。

(75a)

- 471 私が大学で行っているのは、〈瞬間多読術〉というトレーニングだ。
- 472 まず、十人程度のメンバーが円形になり、中央に積み上げられた新書系の本の中からそれぞれ自分が関心があるもの（ただし読んだことのないもの）を選び取る。
- 473 そして、三分間でその本に目を通し、各人がその本の要約を言う、というトレーニング
-

グである。

478 トレーニング効果も明確で、何度か繰り返すうちにコツがつかめてくる。

(『「できる人」』)

文 478 も、「〈瞬間多読術〉」の話題が継続し、「事実」を述べることが基調となっていることがわかる。つまり、文段 474～477 は、「事実」の文段に挿入（補足）された「見解」の文段だと考えることができる。

文段 474～477 は、文 476 によって、統括されるが、「つまり、～ノダ」は、文段すべての文に統括機能を発揮しているとは言い難い。山口（2011:21-23 初出 1975）は、ノダの文を「××トイウコトハ、〇〇トイウコトダ。」に還元できることを、指摘している³⁴。これに従うと、文 476 のノダに対応する「××」部分は、文 475 「大学でこれを行うと、三分間の間に本の主旨を的確につかまえることのできる学生も出てくる」となり、「〇〇」部分は、文 476 「決して不可能な技術ではない」となる。「〇〇」部分の「決して不可能な技術ではない」は、それ以前の文 474 「三分で一冊の本を要約できるように読むというのは、無理な注文ではある」までを換言しているとは言い難い。そのため、「つまり、～のである。」が有する統括の機能領域は、文 475 までということになる。

文 474 が文 476 に統括されるまでには、段階がある。まず、文型自体が「譲歩」を表すことで、後続文に統括されようとする被統括機能が発揮されると考えられるが、さらに、「逆接型」の接続表現により、後方被統括機能が発揮されることが大きな要因となり、文 475 に統括される。そうして、文 474～475 のまとまり（小文段）が成立し、その一部（統括力の強い文 475）が、文 476 に統括されることで、結果的に、474 も統括されるという文脈展開となる。これは、後続文への後方統括機能にも通じるものであるが、詳細は、のちに譲る。

次の(76)は、先行文が直前の文ではなく、複数の文が「××トイウコトハ」部分となっている例である。

(76)

1333 「小さな政府」のドグマと、「均衡財政」のドグマを説教する新自由主義による

³⁴ 詳細は、2.1.1 「関連付け」説を参照。

と、社会的支出を削減し、「小さな政府」を実現して、「均衡財政」を達成すれば、経済成長という恵みを手に入れることになっている。

1334 確かに、アメリカをみれば、二〇〇一年から二〇〇六年にかけて、三・〇%という高い経済成長を実現している。

1335 逆に社会的支出の大きなドイツの経済成長率は低くなってしまっている。

1336 ところが、社会的支出の「大きな政府」であるスウェーデンでは、アメリカと肩を並べるように高い経済成長を誇っている。

1337 それとは対照的に、アメリカの強要する新自由主義を従順に崇めている日本は、ドイツと同様に低い経済成長率に喘いでいる。

1338 つまり、社会的支出が大きいか小さいかは、経済成長率とは無関係なのである。

(『「分かち合い」』)

文 1333 は、「～なっている。」という文型によって、主張が既定であることが示される。続く、文 1334 は、「確かに、」という表現によって、「譲歩」の文として、文 1333 の既定の主張を支持する事実を補足している。文 1335 も「逆に」と対比的な事実を述べているが、文 1334 と同様、文 1333 の主張を支持する事実を述べている。こうして、文 1334～1335 は、文 1333 に統括されることになる。文 1336 は、「ところが、」と「逆接型」の接続表現によって、「譲歩」の情報から、逆接的に、文段 1333～1335 の反証の事実を述べ、文 1337 も、文 1336 と同様に、反証の事実を述べている。接続類型の統括関係から、後続文 1337～1338 が、文 1333～1335 の譲歩の文段を統括し、さらに高次元の文段 1333～1337 を成立させる。文 1338 の「つまり、～のである。」の統括の機能領域は、「××トイウコトハ、〇〇トイウコトダ。」の「××トイウコトハ」部分の文 1336～1337「反証の事実」となる。先ほどの(75)と異なるのは、「××トイウコトハ」部分が文を超えた情報(文 1336～1337) だということである。

また、ノダは、直接的には、文 1336～1337 を統括するが、文段 1333～1337 がすでに成立しており、その一部(統括力の強い文 1336～1337) が統括されているため、全体として文段 1333～1338 を文 1338 が統括するということになる。このように、「つまり、～のである。」が、先行する文段の一部(統括力の強い文)を統括することで、文段全体を統括するという文脈展開の方法は、(75)と類似していると言えるだろう。

次の(77) は、「××トイウコトハ、〇〇トイウコトダ」の、「〇〇トイウコトダ」部分

が文を超える例である。

(77)

1396 ところが、新自由主義は古典派のように、比例的所得税を推奨はしない。

1397 推奨する租税はあくまでも、逆進的負担をもたらす消費税つまり消費型付加価値税なのである。

1398 しかも、レッセ・フェールの自由主義国家の時代は、政府機能が軍事や警察などに限定された夜警国家だったといっても、家族やコミュニティなどによる社会システムの「分かち合い」が機能を発揮していたことを忘れてはならない。

1399 つまり、一九世紀中葉には自助努力で生活をしていたといっても、それは文字どおりの自助努力ではない。

1400 それは家族やコミュニティの拡大した共同体的人間関係という「分かち合い」に抱かれていたのである。

(『「分かち合い」』)

文 1396 「逆接型」の接続表現「ところが」によって、先行文に対して逆接的に新たな文段が開始し、「新自由主義は古典派のように、比例的所得税を推奨はしない」と否定的な情報を述べる。文 1397 は、先行文の否定的な情報「新自由主義は～推奨しない」に対して、「推奨する租税はあくまでも、逆進的負担をもたらす消費税つまり消費型付加価値税」だと代替情報として換言することで、文 1396 を統括する。「つまり」などの接続表現は見られないが、接続関係としては、「同列型」だといえよう。

文 1398 は「添加型」の接続表現「しかも」によって、先行文段 1397 に対して累加するかたちで新たに文段が開始する。文末は、「～ない」であるが、文 1396 の文末とは異なり、「～ていたことを忘れてはならない。」と、間接的に相手への働きかけを表している。文 1399 は、「同列型」の接続表現「つまり」で、先行文を換言するが、文 1396 は、「～ない」であり、否定的な情報を与えるのみで、まとまりに欠ける。文 1400 は、先行文とのあいだに接続表現を想定することができない「連鎖型」であり、「それは、」という指示表現の提題表現が、文 1399 と文 1400 とを直接的に関連付けているといえる。先行文「それは文字どおりの自助努力ではない」に対して、「家族やコミュニティの拡大した共同体的人間関係という「分かち合い」に抱かれていた」という解説を付加することで、先行文を

統括し、文段 1399～1400 を成立させていると考えられる。文 1399 の文頭の接続表現「つまり」は、文 1398 と文 1399 の間の関係を表すというよりも、文 1398 と文段 1399～1400 との間の関係を表していると考えられる。

「××トイウコトハ、○○トイウコトダ」の「○○トイウコトダ」部分が、文を超え、文段となっている例を確認した。「連鎖型」という二文間の緊密度が高い接続関係であることが、このような「～。つまり、～。(それは)～のである。」という文脈展開方法を許容すると考えられる。

次の(78)は、「○○トイウコトダ」部分が、「同列型」の接続表現「たとえば」でつながれた二文となって、文を超えている例である。今回の調査によると、「つまり、～のだ。」が文を超える際、「○○」の連文の接続関係は、「同列型」「補足型」「連鎖型」のみであり、市川(1978:93)の「拡充的合成関係—一つの事柄に関して拡充して述べる関係」という特徴が見られた。

このように、「××トイウコトハ、○○トイウコトダ」の「○○トイウコトダ」部分が、文を超え、文段となっている例を確認した。「連鎖型」という二文間の緊密度が高い接続関係であることが、このような「～。つまり、～。(それは)～のである。」という文脈展開方法を許容すると考えられる。

次の(78)は、「○○トイウコトダ」部分が、「同列型」の接続表現「たとえば」でつながれた二文となっている例である。

(78)

294 物理学のような外界世界を対象とする場合でも、そのように見なされる規則が多い。

295 たとえば地球は太陽のまわりをまわるが、それはケプラーの法則にしたがっている、といった場合である。

296 すなわちケプラーの法則が真理として存在していて、地球はこの法則にしたがって動いていると考えるのである。

297 この法則は先験的なものと見なされるから、実際の場面を超越しており、法則を実証することは原理的に不可能であるとするのである。

298 つまり、これは経験による反証をまぬがれていると考える。

299 たとえば「すべてのAはBである」という先験的法則があったとき、Aであるとす

るものがBでないという事実を発見したとしても、それは法則がまちがっていたのではなく、それをAであるとしたところに誤りがあったという立場をとるのである。

300 三角形の内角の和を実測によって求め、それが一八〇度になっていなければ、定理がまちがっていたと考えるのではなく、測定のように誤差があったと考えるのである。

301 しかし、ここで疑問が生じる。

(『「わかる」』)

文 294 は、「物理学のような外界世界を対象とする場合でも」と新たな話題を開始し、比較的抽象的な「事実」を述べる。文 295 は、「同列型」の接続表現「たとえば」をともなって、具体的な情報を補足する。文の接続関係からみると、文 294 が文 295 を統括するという関係である。文 296 の「すなわち、～のである。」は、「××トイウコトハ」部分にあたる文 295 を統括していると考えられる。

文 294 にまで、統括力が及ばないのは、文 295 が被統括文だからである。(76)(77)の「つまり、～のである。」は、先行文を統括する文をさらに統括するという多重性によって、高次元の文段が成立したが、(78)の「すなわち、～のである。」が統括するのは、先行文に統括される被統括文である。そのため、さらに先行する文 294 までは、統括力が及ばないと考えられる。

文 297 にも「のである」が用いられているが、文 296 をさらにわかりやすく換言して統括しており、文段 295～297 を成立させる。このように、読者の理解を促進するために、「のである。」によって「換言」を重ねるといふ文脈展開も見られる。

文 298 は「同列型」の接続表現「つまり」をともない、「これは経験による反証をまめがれていると考える」と、文段 294～297 に対して「見解」を述べる形で換言している。「これは」の指示表現の統括の機能領域は、文段 295～297 であるため、文 298 は、文段 295～297 を統括するといえるが、情報が抽象的であること、文末が「～と考える」という統括力の弱い表現であることから、後続文に、補足の文段が続くことが期待される。実際に文 299 は、「同列型」の接続表現「たとえば」によって、具体例を述べることで、文 298 を補足するが、文末が「のである」となっており、前方統括機能を発揮していると考えられる。ここで、一つの文段が成立するが、後続する文 300 にも「のである」が用いられており、文 299 と同様に、文 298 を具体的に換言するという並列的な関係である。ノダによつ

で換言を重ねることで読者の理解を促そうとする文脈展開方法は、文 296～297 と類似しているが、換言のし方が、階層的（文段の次元が異なる）か、並列的（文段の次元が同一）かという点で異なる。

文段 298～300 は、「のである」によって統括されるわけではなく、あくまで、文 298 と文 299, 300 との「同列型」の接続関係が優先され、文 298 が統括する文段となる。文 299, 300 の「のである。」は、「原因・理由」のノダであり、前方被統括機能を発揮することにより、文段の成立に関与しているといえる。このように、「たとえば」と共起するノダは、「先行文に対する具体例による根拠」を表すことになる³⁵。

文段 298～300 の「つまり、～のである」の機能領域は、文段 295～297 に及び、「（文段 294～297）トイウコトハ、（文段 298～300）トイウコトデアル」という統括関係になると考えられる。「〇〇トイウコトデアル」部分は、「つまり、～。たとえば、～のである。～のである。」と複数の文で成立しているが、全体として「つまり～のである。」という文段が成立していると考えられる。ノダを中心とし、接続関係を含め、総合的に文段の多重構造を分析すると、文段 294～300 全体を統括するのは、文 298 ということになり、接続関係の統括機能が、「のである」の統括機能に優越することが確認できる。次の(79)は、「××トイウコトハ、〇〇トイウコトダ」の「××」と「〇〇」に当たるそれぞれの文段の中心文のみを提示したものである。具体例が省略されたため、理解のしやすさは少々劣るが、文脈が損なわれることはないことがわかる。

(79)

294 物理学のような外界世界を対象とする場合でも、そのように見なされる規則が多い。

298 つまり、（これは）経験による反証をまぬがれていると考える（のである）。

301 しかし、ここで疑問が生じる。

（『「わかる」』一部改変）

「××トイウコトハ」部分の文段 294～297 を統括する文は、「同列型」の接続表現「たとえば」の統括機能により、文 294 となり、「〇〇トイウコトダ」部分の文段 298～300 を統括する文は、「同列型」の接続表現「たとえば」の統括機能と、「原因・理由」のノ

³⁵ これは、市川（1978）の接続類型の分類によると、「同列型」と「補足型」が混在することになり、接続類型が範列的な分類ではないことを示唆するものである。

ダによる前方被統括機能により、文 298 となる。(79)のように、文 294 と文 298 のみであっても、「情報の骨組み」は示されており、「のである」によって統括される文段は、肉付けともいえる補足的な情報だといえる³⁶。

また、見出しとの関連でも述べたが、「つまり、～ノダ」は、後続文が新たな小見出しになっている、すなわち、小見出しごとのまとまりの終了部に現れる特徴があることから、相対的に高次元の文段をまとめる中心文として機能する傾向がみられる。

(80)

1035 **5文章は危うさをもつ**

1036 前章では、文章を書いたり読んだりする場合の基本的なことから、すなわち、単語の意味や文のもつあいまい性、文を理解するためには知識が必要であることなどについて述べた。

1037 とくに科学技術に関する文章においては、専門用語がどのような内容を持ち、ほかの類似の語とどのように区別されて使われるかを知ることが大切であることを述べた。

1038 本章では、これをさらにすすめて、文章全体、論文や本を読むときに、注意すべきことについて述べる。

1039 つまり、前章にくらべてさらに暗示的なこと、何が全体として含意されているかといったことについて考察する。

1040 そこには、文章読解のおもしろさとともに、文章のもつ危うさということも出てくるだろう。

1041 文章を理解するということは、書かれている内容を読者が自分のなかに再構築することである。

1042 これは、再構築したものを他人に説明するといった形で外部に出すことによって、もっともよくおこなわれる。

1043 その過程で、理解できていなかった部分が明らかになり、再度もとの文章を読みなおしたり、質問したりすることが必要となる。

1044 つまり、対話という過程が大切となるのである。

³⁶ 情報の性質として「骨組み」「肉付け」という表現を使用した。これらの表現は、どちらの情報も重要かを表すわけではない。

1045 **1 メタファー的説明はわかりやすい。だが・・・**

1047 メタファーとはかんたんにいえば見立てであって、ある対象を何か別のものに見立てて表現することである。

(『わかる』)

文 1035 から、新たな章が開始され、文 1036～1037 で、前章のまとめをし、それを前提とすることで、文 1038 から、「本章で述べること」を大まかに提示する。そして、文 1039 「つまり」によって、換言することで、詳述がはじまり、文 1041 で「文章を理解するということとは」と、具体的な話題が開始され、文 1043 まで、その説明が続く。文 1044 「つまり、～ノダ」は、文 1041～1043 の具体的な話題を統括するが、それだけではなく、文 1038 の解答にもなっている。そのため、前提を含む文段 1036～1044 は、文 1044 によって、統括されるといえる。後続文 1045 は、新たな小見出し「1 メタファー的説明はわかりやすい。だが・・・」が開始されるが、文 1044 との直接的な関係は認められず³⁷、ここに、文段の大きな区切れ目を認めることができる。

以上、同列型の接続表現「つまり」と共起するノダについて、文脈展開方法を分析した。結果は、次のようにまとめられる。

1. 「つまり、～ノダ」は、「換言」の用法となり、前方統括機能を発揮することにより、先行文をわかりやすく言いかえることで統括する。
2. 統括される先行文に相当する情報は、一文に限らず、二文以上文段が先行文となることもある。また、換言される先行文が他の文段を統括する統括文であれば、その文段全体が「つまり、～ノダ」の統括の機能領域となる。
3. 統括する文「つまり、～ノダ」の「～」部分は、一文に限らず、二文以上（文段）となることもある。その際、「～」部分の文の接続関係は、「拡充的合成関係」に分類される「同列型」「補足型」「連鎖型」である。また、「～のである。～のである。」と、ノダを階層的、あるいは並列的に重ねて文段を成立させることもある。
4. 「つまり、～ノダ」は、統括力が強く、後続文との間に、文脈の区切れを生じさせる傾向がある。

³⁷文 1044 は、第 5 章の全体的な話題であるため、文 1045 と無関係とは言えないが、文 1044 と 1045 の間に大きな区切れがあることは認められるだろう。

4.2.3. 「順接型」の接続表現「だから」と共起するノダの文脈展開の特徴

順接の接続表現「だから」と共起するノダは「だから、～ノダ」は、先行文にすでに示された情報を再提示（反復）することで、先行文群を統括する。先行文を理解するための情報が不足している際に、後続文群で情報を補足し、情報が十分となった時点で、ノダをともなって再提示（反復）するという文脈展開が特徴である。

次の(81)は、文 2756 で述べられた情報が、文 2772 で再提示されている例である。

(81)

2751 中性子は第Ⅱ種超流動体

2752 物性物理学の知識が中性子星の理解に役立つ面白い例がある。

2753 それが中性子星回転周期の突然変化、グリッチと呼ばれる現象である。

2754 超高速回転をしている中性子星はきわめて安定した運動をしているが、それでも長い年月の間にごくわずかずつおそくなっている。

2755 つまり回転周期が長くなっている。

2756 ところが数年に一度程度の頻度でヒョイと周期が速くなる。

2757 これをグリッチと呼んでいる。

2758 この現象は物性物理学の世界的指導者でノーベル賞を受けているアンダーソンと、宇宙物理学者、伊藤直紀氏の共同研究で明らかにされた。

2759 その核心部は、中性子流体は第Ⅱ種超流動、ということからくるのである。

2760 超伝導と磁場、超流動と回転を対比させる。

2761 超伝導体に磁場をかけると第Ⅱ種超伝導体では量子化された渦ができることを読者は思い出されるだろう。

2762 中性子流体は電荷がないから磁場には反応しないが、対応する物理量は回転で、超流体を回転させると中に量子化された渦が発生する。

2763 これは液体ヘリウムでも起きることである。

2764 第2章の「量子渦」を参照のこと。

2765 回転数が増せば渦の密度も濃くなって行く。

2766 中性子星ではその高速回転に見合った渦密度がすでに星の中で中性子液体中に

存在する。

- 2767 しかし回転が遅くなると、渦密度を下げねばならない。
- 2768 これらの渦は普通は共存する原子核がピン止め役をしていて固定されている。
- 2769 これは超伝導体での不純物や格子欠陥によるピン止めに対応する。
- 2770 しかし渦密度を下げよとの環境が進行すると、あるところでピン止めをはなれ、渦は表面（外殻）に移動してそこで消滅する。
- 2771 そのとき、渦が持っていた角運動量を放出し、中性子星本体の回転運動に還元されるが、これは星の回転を増加させる方向に働く。
- 2772 だからその瞬間、星はピクンと回転速度を上げるのである。
-
- 2773 この研究は、はるか彼方の謎の星、中性子星の状態が物性物理学の法則に従っていることを示した好例である。
- 2774 中性子星をちょっとでも身近に感じていただけたらどうか。
- 2775 **そしてブラックホール**

（『極限』）

文 2756 で、「数年に一度程度の頻度でヒョイと周期が速くなる」現象（グリッチ）の情報が提示され、なぜ、そのような現象が起こるのかを文 2758 以降で説明している。この説明の文段は、はじめの文 2758～2759 で、大まかな結論を提示する。文 2759 のノダは、後方統括機能を発揮する「概略」の機能を発揮している。文 2760 以降、さらに詳しく説明がなされ、十分に説明がなされた文 2771 の後、もう一度、文 2756 の情報を「だから、～ノダ」のかたちで再提示することで、先行文 2758～2772 を統括し、「理由」の文段を成立させていると考えられる。

先行文との単純な因果関係を表すだけならば、接続表現「だから」のみで十分である。

次の

(82)は、先行文との因果関係を表すだけで、「だから」をともなった文 460（「～とよい」まで）の情報は、これまで述べられていないため、ノダと共起しないと考えられる。

(82)

- 457 ただ、ここで注意しなければならないことは、より詳細な世界に入っていけば

いくほど、その基本的な規則A↓Bはその世界固有のものとなってしまうたり、またそれが成立する場の条件がきびしく限定される可能性も出てくる。

458 その場合、そのような条件が忘れられたり、正しく認識されずに他の条件の場に対しても適用されてしまうと、誤った結論を導きだす危険性も出てくるのである。

459 たとえば、「ある物質Aはコレステロールを分解する。

460 だから物質Aを多く含んでいる食品Bを食べるとよい」といった話がよくある。

(『「わかる」』)

文 459～460 は、文 458「そのような条件が忘れられたり、正しく認識されずに他の条件の場に対しても適用されてしまうと、誤った結論を導きだす危険性も出てくるのである」を具体的に説明している。ここでは、「 」(鍵括弧内)の具体例を分析する。

文 459「ある物質Aはコレステロールを分解する。」という情報は、新たに与えられた新情報である。それに対して、「だから物質Aを多く含んでいる食品Bを食べるとよい」と因果関係を表す「だから」を用いて、結論を述べる。この結論部も、新情報であるため、ノダを用いることがないと考えられる。逆に、(83)のようにノダを用いて、「つまり、～ノダ」の形で新情報を提示すると、すでに述べられていたという印象や、押し付けがましさが生じる。

(83)

459 たとえば、「ある物質Aはコレステロールを分解する。

460 だから物質Aを多く含んでいる食品Bを食べるとよいのである」といった話がよくある。

(『「わかる」』一部改変)

「だから、～ノダ」をともなった文 460 の情報「物質Aを多く含んでいる食品Bを食べるとよい」が、すでに述べられたかのような印象を受けるか、もしくは、押し付けがましさを感ずる。これは、田野村(1990)の指摘する「既定性」にかかわるが、「の」により、名詞化することで、すでに定まったことであるという印象を与えるのだろう。これは、話し言葉で、相手の失敗をなじるときに「だから、言ったんだ。」と言うときに通じる。

この「だから、～ノダ」は、読者に、先行文で述べたことの再提示であることを示すと

いうことは、2.2.2 で検討した「知識・状況の共有」がノダの使用にかかわるといふ議論の反例となる。話し言葉に関しては、「知識・状況の共有」がノダの使用を左右することが多いことが予想されるが、新書の文章に関しては、その限りではないことは、明確にしておく必要があるだろう。

4.2.4. 「添加型」の接続表現「そして」と共起するノダの文脈展開の特徴

管見の限り、これまでの研究で、接続表現「そして」とノダとの共起を論じたものは見当たらない。しかし、論理的に展開する新書の文章において、接続表現「そして」とノダとは、共起しやすいことが明らかになった。新書の文章における「そして、～ノダ」は、後方統括機能を発揮し、後続の話題を「概略」するために用いられる。次の(84)は、新書の文章の開始部で、文章の構成について言及している。

(84)

33 極限科学には次のような特徴がある。

34 それは主たる三分野がそれぞれ独立しているわけではなく、きわめて密接に相関を持っていることである。

35 圧力と温度の相関はボイル・シャルルの法則以来の伝統があり、自然界最大の圧力と磁場を具現している中性子星では、この二つが完全にかみ合っていることを最終章で御覧いただけるだろう。

36 そして極限科学は宇宙科学とも接点をもつ、宇宙物質学としての側面を持っているのである。

37 極限科学の背景

38 極限科学には歴史的、思想的な背景がある。

〈13 文省略〉

51 宇宙科学は見る事に中心があり、極限科学は創る事に主眼がある。

52 そして最終章ではこの二つが互いに相補的な関係にあることが示される。

(『極限』)

文 33 から、「極限科学の特徴」について、話題が開始し、文 34 でその特徴に言及し、文 35 で、それを詳述している。文 36 は、「そして、～ノダ」をともない、文段 34～35 に添

加される形で、新情報を提示する。一度、ノダの前方統括機能によって、先行文にまとまりがつくが、「宇宙物質学」という情報は、先行文では全く触れられていないことから、やや唐突な印象を受け、さらに、ノダの後方統括機能が発揮される。そして、後続する小見出し「極限の背景」の文段 37～52 へと、文脈が展開していく。同様の文脈展開を示す「そして、～ノダ」の例を(85)に示す。

(85)

343 朝、東の空が明るくなってきても鳴かないニワトリもいるだろうし、朝でなくてもニワトリは鳴くから、因果関係をはっきりさせることはかんたんではない。

344 このような、知識といわれているものの成立の根拠を問うことは、認識論と呼ばれている哲学に入る。

345 知識の根拠、あるいは前提となるものは、やはりまた知識であると考えられるが、これをさかのぼっていくと、どこかで絶対的に疑うことのできない知識が存在すると考えざるをえなくなる。

346 これを真理と呼んでいる。

347 そしてすべての知識はこの真理から導きだされるものであるのである。

348 ユークリッド幾何学の場合は五つの公理があつて、これは疑いをはさまない真理であると考え、そこからすべての定理が導かれるわけである。

(『わかる』)

文 344 から、認識論の話題が開始し、文 345～346 で「真理」について述べられる。文 347 は、「そして、～ノダ」という形で新情報を添加する。文 347 は、文 344～346 をいったん統括しながら、さらに、後方統括機能を発揮し、文 348 に補足情報を統括する。このように、「そして、～ノダ」が新情報を提示する場合、先行文を統括するだけでなく、後続文への統括機能も発揮することになる。

次の(86)は、「そして、～ノダ」をともなって提示する情報がすでに先行文で述べられた旧情報の例である。

(86)

2478 **白色矮星の生い立ち**

2479 その発見は劇的だったが、白色矮星は例外的な星ではない。

2480 質量が太陽前後の星が老化した姿なのだ。

2481 当然、我が太陽もたどるべき未来の星である。

2482 今日の天文学が告げるそのシナリオを追ってみよう。

2483 スターダストをかき集めて約九〇億年前に誕生した我が太陽は今その一生のなかばにいる。

2484 安定に燃えつづけているそのエネルギー源は水素の核融合だ。

2485 それがあと五〇億年もすると燃えつきて中心部には燃えかすのヘリウムがたまり、これは燃えにくいので熱源はその外殻の領域に移る。

2486 中心部は冷えて重力収縮して高密度化するが、外側は逆に膨脹し、半径が極端に大きくなる。

2487 赤色巨星と呼ばれるもので、オリオン座の一等星ベテルギウスが今その状態にあるという。

2488 この巨星の半径は木星の公転軌道程度もあるというから、地球などは丸呑みされてしまう事になる。

2489 といっても五〇億年も先の事だ。

2490 当分は何の心配もない。

2491 赤色巨星といっても外側は密度が薄く、次第に中心からの引力をはなれて物質をまわりにまき散らす。

2492 一方中心部は重力収縮がつづき、核反応はヘリウムが炭素、そして酸素を作り出す。

2493 そしてその高温プラズマ中で電子はニュートリノを作り出し、それが容易に系外に逃げ出すのでエネルギーが持ち去られ、冷却が進む。

2494 そして最後に外殻をはぎ取られた白色矮星となるのである。

2495 その質量は〇・六 M_{\odot} くらい、ここで M_{\odot} とは現在の太陽の質量を表す記号である。

2496 **重力が作る超高圧**

(『宇宙』)

文 2478 で「白色矮星の生い立ち」の文段が開始することが予告され、文 2480 で、「質量

が太陽前後の星が老化した姿」であることが明らかにされる。このノダは、「～ではない。～ノダ」の形で、前方統括機能を発揮しているが、それだけではない。ノダで提示された情報を理解するための情報の不足が感じられることから、後続文に補足情報を求める後方統括機能をも発揮している。文 2482 で、「今日の天文学が告げるそのシナリオを追ってみよう。」と、新たな話題の展開が予告され、文 2483 から、実際のシナリオが述べられる。このシナリオは、途中、解説をはさみながら、文 2494 まで続く。文 2495 は、補足型の連関係が想定されるので、文 2494 に統括されると考えてよい。

「一方、」ではじまる文 2492 から、文 2494 までは、「そして」をもちいて、時系列で話題が展開しているが、ノダが用いられるのは、その話題の締めくくりの文 2494 であり、この文 2494 は、先行文 2480 で述べられたことの反復となっている。

これは、あることに対して、補足を行い、その補足の文段が終了するときに「ノダ」が用いられるという点で、4.2.3「だから」と共通している。「だから、～ノダ」は、因果関係の、「そして、～ノダ」は、時間関係の文脈展開にかかわる形式だといえよう。「そして、～ノダ」の文脈展開方法は、以下の2点にまとめられる。

1. 「そして、～ノダ」をともなう文の情報が、先行文で述べられていない場合、先行文の話題に区切りを付けつつ、後続文で補足情報が提示されるという文脈展開となる。
2. 「そして、～ノダ」をともなう文の情報が、先行文で述べられている場合、先行文を含む補足情報の文段を統括する。

4.2.5. 「逆接型」の接続表現「しかし」と共起するノダの文脈展開の特徴

新書の文章における接続表現「しかし」は、 χ^2 乗検定において有意差は見られず、ノダと共起しやすいとはいえない結果であったが、使用頻度が高く、ノダとの共起の例も多く見られたことは事実である。ここでは、接続表現「しかし」がノダと共起する場合としない場合とで、文脈展開の方法にどのような異同が認められるかを分析する。次の(87)は、逆接の接続表現「しかし」によって、それまでの展開から外れる論の概略を提示し、ノダの後方統括機能によって、後続文で情報が補足されるという文脈展開となっている。

(87)

1018 文を解釈し理解しようとするれば、知識が必要となる。

1019 たとえば、五〇ヤードなので柔らかさが重要であったという文は、これだけ読んで

はほとんど理解できないだろう。

- 1020 文の構造は明確であり、使われている単語もけっしてむずかしいものではない。
- 1021 しかし、これがどのような場面について述べているかについての情報が与えられるか、容易に推定できないと、この文は理解できないのである。
- 1022 この文は、ゴルフのスイングについて述べたものである、という場面情報が与えられれば、ああそうですか、といちおうわかったような気になるだろう。
- 1023 しかし、文が伝えようとしている内容については、ゴルフをした経験があり、ゴルフの知識を十分もっている人でないと、じつはわからないのである。
- 1024 これは、グリーン（ゴルフボールを入れる穴のある、きれいに刈った芝生の部分）まで五〇ヤードであること、ピッチング（これもゴルフをする人しか知らない用語）などで打つときのスイングを柔らかくすることが大切であること、を述べているのである。
- 1025 この説明は理解できたとしても、依然として、なぜスイングを柔らかくしなければならないのか、柔らかくとはいったいどのようなことなのかが、いっこうにわからないという人も多いだろう。
- 1026 これを理解するためには、自分がゴルフをし、何度も五〇ヤードの距離を打ってみるという体験をしなければならない。
- 1027 このようにして納得しなければ、ほんとうにわかったことにはならないのである。
- 1028 身体で理解するという場合である。
- 1029 この例からも、「わかる」ということには、いくつものレベルがあることが想像できるだろう。

(『「わかる」』)

文 1018 で、「文を解釈し理解するためには知識が必要」であることが述べられ、文 1019 から、接続表現「たとえば」をともない、具体例を提示し、説明している。文 1020 で、具体例について、「文の構造は明確であり、使われている単語もけっしてむずかしいものではない」と説明をくわえ、理解・解釈が容易であることを予想させておき、続く、文 1021 で「しかし」、をともない、予想に反する情報「これがどのような場面について述べているかについての情報が与えられるか、容易に推定できないと、この文は理解できない」が述べられる。この時、「どのような場面について述べているか」が明らかにされていない。そ

のため、文 1021 のノダは、後方統括機能を発揮し、後続文に補足情報を求めるという文脈展開となる。文 1022 では、「ゴルフのスイングについて述べたものである」と文 1021 を補足する情報が述べられ、さらに、「いちおうわかったような気になるだろう」と述べられる。文 1023 では、「しかし」をともない、「文が伝えようとしている内容については、ゴルフをした経験があり、ゴルフの知識を十分もっている人でないと、じつはわからない」と逆接で論を展開しているが、ここでも、「文が伝えようとしている内容」は不明であるため、ノダは後方統括機能を発揮し、後続文に情報の補足を求めることになる。文 1024 「これは、グリーン（ゴルフボールを入れる穴のある、きれいに刈った芝生の部分）まで五〇ヤードであること、ピッチング（これもゴルフをする人しか知らない用語）などで打つときのスイングを柔らかくすることが大切であること、を述べている」と、情報を補足している。文 1024 のノダは、「これは、～ノダ」という先行文の換言のノダであり、先行文群を統括する。このように、「しかし、～ノダ」の文脈展開を反復することで、細かな文段の多重性をつくりだしていると考えられる。

文 1025 は、新たに「この説明は理解できたとしても、依然として、なぜスイングを柔らかくしなければならないのか、柔らかくとはいったいどのようなことなのか、いっこうにわからないという人も多いだろう」と「ノカ」を用いて疑問を提示し、新たな話題を開始する。文 1026 では、「これを理解するためには、自分がゴルフをし、何度も五〇ヤードの距離を打ってみるという体験をしなければならない」と、疑問に対する解答が示される。本来、この文にノダが現れても不自然ではないが、続く文 1027 が、「このようにして」によって、先行文群を統括し、「納得しなければ、ほんとうにわかったことにはならない」と全体を換言する情報にノダが用いられているため、ここでノダが用いられないと考えられる。このように、「しかし、～ノダ」は、逆接で新たな話題の概略を示し、後続文でそれを補足するという文脈展開となっていることわかる。

「しかし、～ノダ」は、後続文に補足情報を求める後方統括機能を発揮するが、その範囲は、(87)のような一文だけではなく、文段にまで及ぶことがある。次の(88)は、「つまり、～ノダ」が、ある小見出しののまつまり終了部に現れ、後続の小見出しののまつまり群を統括する例である。

(88)

842 新自由主義は対人社会サービスを提供するどころか、これまでの現金給付の削減を求める。

843 しかし、知識社会への歴史の転換期には対人社会サービスを提供しないと、貧困と格差が溢れて出てしまうのである。

844 **日本の社会保障をどうみるか**

845 日本の社会保障あるいは社会福祉の特色を、国際比較という視点からみると、図3-1のようになる。

〈57文省略〉

902 **貧困な教育サービス**

〈13文省略〉

915 **格差・貧困を克服できない現状**

（『「分かち合い」』）

文842は、「新自由主義は対人社会サービスを提供するどころか、これまでの現金給付の削減を求める」と、新自由主義の主張をまとめ、文843で、「しかし、～ノダ」によって、逆接で概略的な論「知識社会への歴史の転換期には対人社会サービスを提供しないと、貧困と格差が溢れて出てしまう」を提示する。先行文では、なぜ「知識社会への歴史の転換期には対人社会サービスを提供しないと、貧困と格差が溢れて出てしまう」のかについては触れられていないため、後続文で、それを補足するという文脈展開となる。ただし、その補足情報は、文を超え、後続する小見出し「貧困な教育サービス」「格差・貧困を克服できない現状」にまで及ぶ。このように、新たに話題を開始する「しかし、～ノダ」は、文段の終了部に現れることで、後続の文段を統括することがわかる。

上記の文脈展開の特徴が、接続表現「しかし」のみによるものではなく、「しかし、～ノダ」の特徴であることを確認するため、次に、接続表現「しかし」が、ノダと共起しない例を検討する。次の(89)は、形式論理学における「逆」が成り立たないことを示す例である。

(89)

521 鳥は飛ぶというのは事実であるし、私たち素人は、空を飛ぶ脊椎動物を鳥と名づ

けていると思っている。

522 しかし、トビウオのように魚で空を飛ぶものもある。

523 ペンギンは鳥なのに飛ばない。

524 飛ばないから鳥ではない、という誤った結論を出さないようにしなければならない。

(『「わかる」』)

文 521 に対して、文 522 は、「しかし」によって、逆接の文脈展開となっている。ここでは、単なる事実を提示しているのみである。そのため、ノダは不要であり、文 522 を理解するために、後続文に補足情報を求める必要もない。また、文 524 は、順接の接続関係が想定できるため、文 521～523 は、文 524 によって統括されると考えられる。

以上、「しかし、～ノダ」の文脈展開の特徴は、以下の 2 点にまとめられる。

1. 新たな話題の概略を逆接の文脈展開によって提示する際、「しかし、～ノダ」が用いられる。後続文は、その補足情報を提示するという文脈展開となる。
2. 「しかし、～ノダ」で提示された新たな話題の概略が、後続文を越えて、文段を多重に統括することがある。

4.3. ノダと置換可能な文末表現形式ワケダとの文脈展開方法の比較

本節では、先行研究において、置換可能であることが指摘されている文末表現形式である「～ワケダ」との文脈展開方法の異同について分析する。

4.3.1. 新書の文章におけるノダとワケダの使用実態

次の【表 20】は、資料ごとの総文数に対するノダ文とワケダ文の割合を示したものである。節末に現れるものも含めて、用例数を示したものである。

【表 20】ノダ・ワケダの出現数

資料 \ 文末	ノダ		ワケダ		合計	
合計	1101	(7.9%)	209	(1.5%)	13931	(100.0%)
①「極限」	288	(10.1%)	97	(3.4%)	2852	(100.0%)
②「宇宙」	82	(7.3%)	8	(0.7%)	1118	(100.0%)
③「分かち」	187	(9.3%)	23	(1.1%)	2011	(100.0%)
④「西洋」	256	(7%)	10	(0.3%)	3638	(100.0%)
⑤「わかる」	134	(8.4%)	52	(3.3%)	1593	(100.0%)
⑥「できる」	154	(5.7%)	19	(0.7%)	2719	(100.0%)

合計欄を見ると、総文数に対して、ノダの使用率は約8%であるのに対し、ワケダの使用率は1.5%と、5倍以上の差がみられた。例えば、①や⑤のように、ノダの使用もワケダの使用も多い新書や、③のように、ノダは多く使用されているのに、ワケダの使用が少ないものもある。今回は、新書の文章ごとの比較を行うわけではないため、これ以上、深くは触れないが、少なくとも、いずれの資料においても、ワケダの使用数がノダの使用数を上回ることはできないという点では、共通しているといえる。

4.3.2. ノダ・ワケダの表現形式と共起する接続表現

次の【表 21】

【表 22】は、それぞれノダとワケダの表現形式と接続表現との共起関係を示したものである。接続表現と共起したノダは、427例(38.8%)、ワケダは、82例(39.2%)と、ほぼ同じ割合である。

次に、表現形式と接続表現との共起関係から、それぞれの文脈展開の特徴を明らかにする。まず、表現形式において、使用率が最も高いのは、ノダ・ワケダともに、「のである。」(62.1%)、「わけである。」(46.3%)のデアル形である。他の表現形式と比べても、非常に高い使用率となっている。第2位は、「のだろうか。」(4.9%)、「わけではない。」(29.3%)と、ノダは、疑問形、ワケダは否定形となっている。この相違が、接続表現との共起において、文脈展開の特徴につながっている。第3位は、ノダ・ワケダともに、「のだ。」(4.0%)、「わけだ。」(7.3%)のダ形となっている。ノダ・ワケダともに、言い切りの形であるデアル・ダの表現形式が基調となっており、ノダは、疑問形、ワケダは否定形で現れることが多いという特徴がみられる。

実際に、表現形式の中から疑問形と否定形を抽出すると、以下の【表 23】【表 24】のよ

うにまとめられる。

【表 21】ノダの表現形式と接続表現との共起関係

品詞	ノダの表現形式		接続表現
	表現形式	品詞	
名詞	名詞	名詞	名詞
	名詞	名詞	
	名詞	名詞	
	名詞	名詞	
	名詞	名詞	
	名詞	名詞	
	名詞	名詞	
	名詞	名詞	
	名詞	名詞	
	名詞	名詞	
動詞	動詞	動詞	動詞
	動詞	動詞	
	動詞	動詞	
	動詞	動詞	
	動詞	動詞	
	動詞	動詞	
	動詞	動詞	
	動詞	動詞	
	動詞	動詞	
	動詞	動詞	
形容詞	形容詞	形容詞	形容詞
	形容詞	形容詞	
	形容詞	形容詞	
	形容詞	形容詞	
	形容詞	形容詞	
	形容詞	形容詞	
	形容詞	形容詞	
	形容詞	形容詞	
	形容詞	形容詞	
	形容詞	形容詞	
副詞	副詞	副詞	副詞
	副詞	副詞	
	副詞	副詞	
	副詞	副詞	
	副詞	副詞	
	副詞	副詞	
	副詞	副詞	
	副詞	副詞	
	副詞	副詞	
	副詞	副詞	
助詞	助詞	助詞	助詞
	助詞	助詞	
	助詞	助詞	
	助詞	助詞	
	助詞	助詞	
	助詞	助詞	
	助詞	助詞	
	助詞	助詞	
	助詞	助詞	
	助詞	助詞	
助動詞	助動詞	助動詞	助動詞
	助動詞	助動詞	
	助動詞	助動詞	
	助動詞	助動詞	
	助動詞	助動詞	
	助動詞	助動詞	
	助動詞	助動詞	
	助動詞	助動詞	
	助動詞	助動詞	
	助動詞	助動詞	
感動詞	感動詞	感動詞	感動詞
	感動詞	感動詞	
	感動詞	感動詞	
	感動詞	感動詞	
	感動詞	感動詞	
	感動詞	感動詞	
	感動詞	感動詞	
	感動詞	感動詞	
	感動詞	感動詞	
	感動詞	感動詞	
接尾語	接尾語	接尾語	接尾語
	接尾語	接尾語	
	接尾語	接尾語	
	接尾語	接尾語	
	接尾語	接尾語	
	接尾語	接尾語	
	接尾語	接尾語	
	接尾語	接尾語	
	接尾語	接尾語	
	接尾語	接尾語	
その他	その他	その他	その他
	その他	その他	
	その他	その他	
	その他	その他	
	その他	その他	
	その他	その他	
	その他	その他	
	その他	その他	
	その他	その他	
	その他	その他	

【表 22】ワケダの表現形式と接続表現の共起関係

る。まず、表現形式において、使用率が最も高いのは、ノダ・ワケダともに、「のである。」(62.1%)、「わけである。」(46.3%)のデアル形である。他の表現形式と比べても、非常に高い使用率となっている。第2位は、「のだろうか。」(4.9%)、「わけではない。」(29.3%)と、ノダは、疑問形、ワケダは否定形となっている。この相違が、接続表現との共起において、文脈展開の特徴につながっている。第3位は、ノダ・ワケダともに、「のだ。」(4.0%)、「わけだ。」(7.3%)のダ形となっている。ノダ・ワケダともに、言い切りの形であるデアル・ダの表現形式が基調となっており、ノダは、疑問形、ワケダは否定形で現れることが多いという特徴がみられる。

実際に、表現形式の中から疑問形と否定形を抽出すると、以下の【表 23】【表 24】のようにまとめられる。

【表 23】ノダとワケダの疑問形の使用率

ノダの疑問形			ワケダの疑問形		
2. のだろうか。	21[4]	4.9%	なし		
4. のか	12[4]	2.8%			
12. のであろうか	5[0]	1.2%			
14. のかと	4[1]	0.9%			
19. のか。	3[1]	0.7%			
22. のであろうか。	2[0]	0.5%			
34. のではないかと	1[0]	0.2%			
合計	48[10]	11.2%	合計	0	0.0%

【表 24】ノダとワケダの否定形の使用率

ノダの否定形			ワケダの否定形		
20. のでなく	3[1]	0.7%	2. わけではない。	24[0]	29.27%
26. のではなく	2[0]	0.5%	7. わけではなく、	2[2]	2.44%
27. のではない。	1[0]	0.2%	9. わけにはいかない。	1[0]	1.22%
			10. わけでもない。	1[0]	1.22%
			11. わけではないが、	1[1]	1.22%
			12. わけではぜんぜんなくて	1[1]	1.22%
合計	6[1]	1.4%	合計	30[4]	36.6%

疑問形に関しては、ノダが、48例(11.2%)であるのに対して、ワケダには1例も見られなかった。それに対して、否定形に関しては、ノダが6例(1.4%)であるのに対して、ワケダは、30例(36.6%)となっており、対照的である。これらの否定形、疑問形がどのような文脈展開を担っているのかを接続表現との共起から分析する。

ノダ・ワケダと共起する接続表現の中で、ノダ・ワケダともに、共起する例が最も多いのは、同列型の接続表現「つまり」である（ノダ 75 例 17.6%、ワケダ 14 例 17.1%）。表現形式は、いずれもデアル形で現れることが多く（ノダ 63 例、ワケダ 10 例）、「つまり」と共起して、先行文群を統括するという文脈展開となっている。続いて使用例が多いのは、ノダ・ワケダともに、逆接の接続表現「しかし」である（ノダ 41 例 9.6%、ワケダ 12 例 14.6%）。ただし、「しかし」と共起する表現形式には、相違がみられ、ノダは、「のである。」が 23 例と最も多いのに対し、ワケダは、否定形「わけではない。」の 7 例が最も多く、「わけである。」の 4 例を上回っている³⁸。ワケダの特徴の一つである「しかし、～わけではない。」の文脈展開の方法を次の(90)で確認する。

(90)

609 そのため工業で技術革新といえば、人間が自然に働きかける「手段」である機械に焦点が絞られることになる。

610 労働手段における絶えざる技術革新は、石油を初めとする自然資源の大量動員を要求する。

611 それとともに人間の労働、それも単純労働を大量に必要とするようになる。

612 しかし、労働手段としての機械の技術革新が進むと、単純労働だけが増大していく（わけではない／？ノデハナイ）。

613 機械設備が高度化し、有機的に関連づけられていくようになれば、人間の組織としての企業組織も巨大化して、管理労働が増加する。

614 つまり、巨大化した機械設備と人間の組織に対する管理労働も増大していく。

（『「分かち合い」』）

文 609～611 で、技術革新が、「人間の労働、それも単純労働を大量に必要とするようになる」と述べ、文 612 で「しかし」と逆接の論理で展開するが、「労働手段としての機械の技術革新が進むと、単純労働だけが増大していくわけではない」と、否定的な事実を述べるのみで、「どうなるのか」については、触れられない。そのため、後続文に、その解答を求めるといふ文脈展開となる。後続する文 613 で一応の解答を述べるが、さらに、文 614

³⁸ 逆接の接続表現「しかし」と共起するノダの否定形は、「のではなく」の 1 例のみである。

「つまり」をともなって、文 613 を換言することで、文 612 の解答が完了する。このように、後続文への被統括機能は、否定の「ない」によるところが大きいのが、論理的な展開を否定するという意味で「わけではない。」という形式が必要になる。この「わけではない。」を、「のではない。」に置き換えると、論理的展開を否定するというニュアンスが失われてしまう。「わけではない。」全 24 例中、「しかし」を含む逆接の接続関係と共起するのは、12 例であり、共起しやすいということがわかる。「しかし」と共起するノダについては、4.2.5 に記したため、詳しくは繰り返さないが、「しかし、～のである。」で、提示される情報は、後続文を「概略」する統括文である。それに対して、「しかし、～わけではない。」は、否定的な情報を示し、後続文に解答を求める被統括文であるという点に、文脈展開の方法の相違がみられる。

次に、疑問形について、分析する。新書の文章では、ワケダが疑問形で用いられることはなかった。それに対して、ノダは、48 例 (11.2%) 用いられており、共起する接続関係も、「転換」型の接続関係、特に「では」「それでは」に偏る (計 18 例)。このことから、「(それ) では、～のだろうか。」が共起しやすいことがわかる。詳細は、4.1.2.2.2 に記述があるため、繰り返さないが、ここでは、次の(91)のような例は、ワケダに置き換えることが困難であることを確認しておく。

(91)

1545 思考それ自身にとって、人間が制定する恣意的な記号を使用することは避けがたい。

1546 それでは、恣意的な記号の体系である人間の言語はどのようにして成立した (の
だろうか/?ワケダロウカ)。

1547 ひとりの人間を、その存在の最初の瞬間において考えてみよう。

(『西洋』)

ワケダについては、野田 (2002:237) は、「「の」は実質的な意味を持たないのに対し、「わけだ」の「わけ」には、「理由」「道理」といった意味があり、「わけだ」にもその性質が残っている。」ことを指摘しており、ここで、ワケダが用いられないのは、先行する情報がな

く、〈論理的必然性〉が見いだせないためだと考えられる³⁹。

以上、相違点に注目して分析してきたため、ノダとワケダの文脈展開の方法が全く異なるという印象となるかもしれないが、そうではない。先に指摘した通り、新書の文章におけるノダ・ワケダは、基本的には、「つまり、～（のである。／わけである。）」という形式で、先行文群を統括するという点で共通している^v。ただ、ノダにはノダの特徴、ワケダにはワケダの特徴があり、すべてが置換可能なわけではないということである。

4.4. 新書の文章に現れるノダの文脈展開の特徴のまとめ

本章では、新書の文章に現れるノダを、表現形式、および、接続表現との共起関係から分析した。その結果、ノダは、「のである。」の形で現れることが圧倒的に多く（265例：62.1%）、「のではないか。」（21例：4.9%）が続く。特に、「のではないか。」に代表される疑問形は、転換型の接続表現「では」「それでは」と共起することで、「課題導入」の形で、新たな話題を開始するという文脈展開となる。第3位は、「のだ。」（17例：4.0%）であり、第1位の「のである。」と合わせて、言い切りの形が基調となっていることがわかる。

次に、接続表現との共起関係をみると、使用数の第1位は「つまり」（75例：17.6%）である。ノダと共起しない例と χ^2 乗検定を行い、有意差が見られたため、統計的にも、共起しやすいことが裏付けられた。ノダは、「つまり、～ノダ」の形で、先行文群を統括する前方統括機能を発揮することが多いことがわかる。これは、山口（2011:21-23初出1975）が、ノダの文を「××トイウコトハ、○○トイウコトダ。」に還元できると指摘したものが合致する。実際の用例を分析することで、××部分が複数の文に及ぶことだけでなく、○○部分も、複数の文に及ぶことが明らかになった。その際、「つまり、～。～ノダ。」と、「つまり」と「ノダ」の間の接続関係は、市川（1978:93）の「拡充的合成関係——一つの事柄に関して拡充して述べる関係」という特徴がみられた。

続いて、第2位は、「しかし」（41例：9.6%）であるが、これは、 χ^2 乗検定の結果、有意差が認められなかったため、ノダと共起しやすいというわけではなく、新書の文章に「しかし」が用いられやすいことを示しているといえる。ただし、ノダの有無によって、

³⁹ 野田（2002:256）は、「「わけだ」を用いた質問文は、非難や詰問になりやすい。これは、〈論理的必然性〉を表すという「わけだ」の性質によるもので、そういった性質を持たない「のだ」が質問文で多用されるのと対照的である。」と指摘している。本研究で扱ったものは、聞き手の解答を求める「質問文」ではないが、共通点があると考えられる。

その文脈展開の方法は異なる。「しかし、～ノダ」で提示される情報は、逆接の接続関係で展開した新たな話題の「概略」である。そのため、後続文にその補足情報を求めるという文脈展開となる。それに対し、ノダが用いられない場合は、事実を提示するのみである。これは、ノダにより後方統括機能が発揮されているためだと考えられる。これまで、ノダが後続文の展開に関与するという指摘はほとんど見られなかったが、ノダの機能を、統括機能を中心に分析することで上記のように後続文への文脈展開方法の記述が可能になる。

第3位は、「そして」（32例：7.5%）であり、 χ^2 二乗検定においても有意差が見られ、ノダと共起しやすいという結果となった。「そして、～ノダ」は、当該文の情報が「新」情報であれば、先行文の話題に区切りを付け、新たな話題の概略を提示し、後続文に補足の情報を求めるという文脈展開となり、当該文が先行文ですでに述べられた「旧」情報であれば、時間的な文脈展開によって、先行文群を統括することになる。これは、順接型の接続表現「だから」と共起する「だから、～ノダ」にも通じており、当該の情報が、旧情報であれば、因果的な文脈展開によって、先行文群を統括する。旧情報を提示する「そして、～ノダ」「だから、～ノダ」は、「時間的な文脈展開」か「因果的な文脈展開」かが異なると考えられる。

また、ノダが付された文と後続文との間に共起する接続表現は、特定のものに偏っている。 χ^2 二乗検定で有意差が認められ、かつ、用例数が比較的多いのは、順接型「このように」と補足型「もともと」の2種の接続表現のみである。これらは、展開のし方は異なるものの、ノダで提出された情報が、統括力を持つという点で共通している。「～ノダ。このように～」のノダは、先行文群を統括する前方統括機能を発揮し、「～ノダ。もともと、～」のノダは、補足する後続文群を統括する後方統括機能を発揮する。また、小見出しの終了部に現れる文末表現を見ても、ノダが用いられる例が、120例（21.6%）と多く、同列型の接続表現「つまり」9例（7.5%）と共起する例が最多であった。このことも、新書の文章に用いられるノダは、先行文を統括することが多いということの裏付けとなるだろう。

第5章 ノダの「統括機能」による講義の談話の「話段」の展開的構造

新書の文章に用いられるノダは、主に、「のである。」のかたちで、接続表現「つまり」と共起する、本研究でいう前方統括機能を発揮するノダであった。これは、すでに述べられた情報を「換言」という用法であり、菊池（2000:29）のような、「一方だけが知っている付加的な情報を他方に提示するときの言い方」では説明できないものである。結論を先取りすると、この記述は、特に、話し言葉の場合に適用される条件であると考えられる。

本章は、複雑な情報を効率よく伝達することを目的とした説明的な「講義」の談話に現れるノダが、どのような文脈展開の方法をとるのか、ノダ自体の表現形式、および、接続表現との共起関係から分析するものである。

5.1. 講義の談話に現れるノダの表現形式と統括機能の関係

講義の談話のノダは、「のだ」「のである」のかたちで現れることはほとんどなく、「んです。」の形で現れる。野田（1997:27）は、「のだ。」「んです。」の違いを、「基本的に同じ機能を持っており、」「話し言葉と書き言葉の差」としているが、果たして、単なるバリエーションをしてとらえてよいのか、疑問が残る。また、新書の文章でみた表現形式のほかに、話し言葉特有の終助詞「ね」「よね」との共起など、さまざまな表現形式が見られる。まず、ノダの前接要素を分析し、次に、ノダの表現形式との相関関係を分析することで、最終的に、ノダの表現形式と統括機能の関連を明らかにすることを目指す。

5.1.1. 講義の談話におけるノダの前接要素

5.1.1.1. ノダの前接要素の全数調査結果

次の【表 25】は、ノダの前接要素を「名詞」「動詞」「形容詞」に分類したものである。

第4章にも記したが、ここでも、「名詞」には、「形容動詞」と「形式名詞」が含まれている。これらは、いずれも、すでに「ダ」があるにもかかわらず、ノダを用いた「ナノダ」の形で現れるという点で共通している。講義 A、B は 60 分、講義 C1、E1 は、90 分講義で

【表 25】 資料別のノダの前接要素

前接要素 資料	名詞	動詞	形容詞	合計
講義A	20[19.4]	75[72.8]	7[7.8]	103[100.0]
講義B	43[20.9]	146[70.9]	17[8.3]	206[100.0]
講義C1	86[33.0]	152[58.2]	23[8.8]	261[100.0]
講義E1	55[36.2]	86[56.6]	11[7.2]	152[100.0]
合計	204[28.3]	459[63.6]	59[8.2]	722[100.0]

あるが、講義 B が 206 例であるのに対し、講義 E1 は 148 例と、ノダの出現数は、個人差が認められる。また、講義 C1、E1 は、講義 A、B に比べ、「名詞+ノダ」の出現率が 10% 強上回っており、逆に、「動詞+ノダ」の出現率が、10% 強下回っている。「名詞+ノダ」の出現率が高い講義 C1、E1 であるが、それぞれ、異なる特徴がみられる。講義 C1 は、(92) のように話題として取り上げられる名詞に対して、ノダが用いられることが多いのに対し、講義 E1 は、(94) のように先行する話題をとりまとめる情報につく「ということ」という形式名詞に対して、ノダが用いられることが多い。

(92)

- 61 えー、で、今日は、あー、短編小説を例に取りながら、えー、小説を読むというのはどのような行為かということについての、概説をするということです。
- 62 えー、スライド資料の、えー、表のほう、1 ページは、前回のイントロダクションの内容です。
- 63 えー、で、今日は 2 ページ、裏のところからです。
- 64 それから、テキストの資料は、1 ページというところは、前回のお話の内容が主流になっています。
- 65 今日は、あの、1 ページの終わりのところから、大体 2 ページのところからということになります。
- 66 で、村上春樹の短編の基盤になっているのは、まー、ある種の出来事なんですね。
- 67 でー、スライド資料の 2 ページの、一番上の、えー、行のですね、一番右側、15 ページというところ、ちょっと小さくて見えないかと思いますが。

68 村上小説の基本構造というのは、ま一、出来事というのがあります、それは、たとえば、象が消えたとかですね、毎日嘔吐してしまうとか、あるいはもっと端的に言うと、幽霊が出たとか、そのようなものであるわけです。

70 毎日嘔吐が襲うというのは、あの、「嘔吐 1979」という小説です。

(講義 C1)

文 61～65 は、講義の進行について、スライド資料と使用するテキストのページ数を示しながら説明している。文 66 の「転換型」の接続表現「で」によって、実際の講義内容へと話題が展開するが、その際、「村上春樹の短編の基盤になっているのは、ま一、ある種の出来事」だという情報が、ノダをともなって提示される。この情報は、先行文では述べられていない新情報であるため、ノダをともなって「概略」的に提示することで、後続文で補足内容を求めるという展開となっている。文 67 で、資料のページ数を指示し、文 68 からは、同列型の接続表現「たとえば」によって、具体例「象が消えたとかですね、毎日嘔吐してしまうとか、あるいはもっと端的に言うと、幽霊が出た」を挙げている。文 70 からは、「毎日嘔吐が襲うというのは、あの、「嘔吐 1979」という小説です」と、さらに具体例の詳細に話題が展開する。このように、ある話題の開始に「名詞＋ノダ」が用いられるのが講義 C1 の特徴である。次の(93)も、同様の例である。

(93)

342 何か小説とかね、物語っていうと、「こうなったらああなる」っていうふうなパターンてのがありますよね。

343 そういうのを定型というわけですね。

344 物語の定型というのはどうしてもある。

345 で、近代小説というのは、もともと、えー、近代小説っていうのは、それ以前の小説と比べてどういう特徴があるかっていうと、簡単に言うと、隠された私生活の暴露なんです。

346 秘められた私生活の暴露というものをのぞき見するというのが、近代小説の、物語としてのテーマの代表なわけなんです。

347 で、これはあの、またいずれどっかで、またいずれどっかでって言っていると、あの、いつまでもしゃべらないかもしれないんで、それだけちょっと話してみますと、あ

の、えーと、近代においてですね、あの、近代小説というのが発祥したのはイギリスなわけなんですけれども、イギリスで最初に現れた近代小説の形態というのは書簡体小説だったんですね。

348 手紙の形だったわけです。

349 えー、で、手紙ってというのは、今も昔も、あの一、宛名人以外の者が読んではいけないと。

(講義 C1)

文 342～344 で、一般的な「小説・物語の定型」について述べられ、文 345 から、転換の接続表現「で」によって、話題が「近代小説の特徴」へ展開し、その特徴について、「簡単に言うと、」「隠された私生活の暴露」であることがノダをともなって提示される。「簡単に言うと」というメタ的な表現からも、文 345 の主文の情報が「概略」を示していることがわかるだろう。文 346 では、「秘められた私生活の暴露というものをのぞき見するというのが、近代小説の、物語としてのテーマの代表なわけ」だと、ノダをともなって、「換言」することで、理解を深めようとしているが、同語反復の域を出ておらず、新たな情報が補足されたとは言えない。また、文 346 のノダは、先行文に対して「換言」であるとともに、後続文に対する「概略」となっている点も見逃してはならない。文 347 では、「近代小説というのが発祥したのはイギリスなわけ」だとノダをともない、「既定」の情報をして提示することで、「前提」となり、「イギリスで最初に現れた近代小説の形態というのは書簡体小説だった」ことも、これ自体は、新情報であるが、ノダで示された情報は結論を概略的に述べているのではなく、新たな話題の「前提」として「既定」の情報として提示していると考えられる。文 348 以降で、「手紙」と「秘められた私生活の暴露」とのつながりが述べられていく。

文 345、346 のノダは、「概略」として、後続文に補足情報を求めるという展開であり、後方統括機能を発揮するが、347 の 2 例のノダは、いずれも、後続文の理解に必要な情報を「既定」として提示する「前提」となるという展開で、後方被統括機能を発揮しているが、後続文に対してノダが機能しているという点で共通している。

次の(94)は、講義 E1 の「名詞＋ノダ」の用例であるが、(92)(93)とは対照的に、先行文に対してノダが機能している。

(94)

- 410 つまり、えー、目下で親しい関係にある場合、目下で親しい関係にある場合には、あー、「おまえ」とか、「きさま」とかっていうふうな言い方ができるわけです。
- 411 ここは対等ラインですから、対等ラインでも使えます。(2)
- 412 わかりますね。
- 413 2人称代名詞が使えるっていうのは、今言ったような相手に対する待遇でいうとですね、待遇でいうと、自分と対等か、それ以下の人にしか使えないことになっているってことなんです。
- 414 さっき3人称で、そういう説明をちょっとしましたけれども、2人称代名詞は典型的にそうなるってことなんです。

(講義 E1)

これは、2人称代名詞がどのような場合に使用できるか、また、使用できないかを述べている部分のまとめの箇所である。文410「つまり」によって、まとめへと文脈が展開し、ワケダによって、先行文全体を統括する情報が提示される。文411～412で、受講者に対して理解の確認を行い、文413では、さらに、全体を統括する情報が「トイウコト」+ノダによって提示される。このノダは、「換言」のノダと考えてよい。また、文414で指示表現「そう」をともなって「トイウコト」+ノダが反復されることで、より、先行文全体を統括することが強調されている。このように、「名詞」といっても、「トイウコト」のような形式名詞に用いられるノダは、前方統括機能を発揮することがわかる。上記の(92)～(94)のように「名詞+ノダ」の文脈展開方法は、講義 C1、E1 だけでなく、すべての講義に現れるが、その頻度が異なる。

「形容詞+ノダ」の出現率が、いずれの資料においても10%弱と低いのは、「形容詞+ノダ」説明的な情報を扱っているためだと考えられる。実際の用例では、次の(95)のように、「多い」「低い」「無い」等、データや一般論に言及する際に用いられることが多い。

(95)

- 128 だから、「つまり」の言い換えというのは、イコールではなくて、矢印で示されるようなものですね↑。

- 129 最初の言葉があつて、そして、それを、話し手が、少し解釈して、その帰着点が、そのあとのBになる。
- 130 「A、つまりB」のBは、その、矢印の先の、帰着点として考えられます。
で、あの一、あくまでも、その、でも、「つまり」というのは、言い換えという、意味を保っていますから、多少解釈がくわ、加わるにせよ、その一、「すなわち」と、次に説明する、「要するに」の、中間的な存在になりますし、また、あの一、表を見てもらっても、『毎日新聞』の実際のデーター、見てもらってもわかりませんが、その、『毎日新聞』のデーターの、えーっと、1年分のもを見ますと、「すなわち」が、えーっと、254例。
- 131
- 132 それに対して、「つまり」が1,365例。
- 133 圧倒的に多いんですね↑。

(講義A)

「書き言葉」の言い換えの接続詞の中でも「つまり」を取り上げて解説する話段であるが、文128～130で、その結論が「だから」をともなって述べられる。文131からは、他の言い換えの接続詞「すなわち」「要するに」との関係が述べられており、毎日新聞のデータから、「すなわち」が、254例であることが示され、それに対して、文132では、「つまり」が1,365例であることが示される。文133は、文131と文132の数字を比較し、「圧倒的に多い」とノダをともなって「換言」している。このように、データの解釈として、形容詞「多い」を用いている点で、講義者の主観的判断というニュアンスは薄まっているといえる。

このように、講義ごとの特徴、また、講義の談話の特徴を挙げたが、いずれにせよ、すべての資料において、出現率が「動詞」「名詞」「形容詞」の順になっていることは共通している。次に、前接要素の中でも、使用数の多い「ある」「思う」「ということ」「てほしい」を取り上げ、その文脈展開の特徴を分析する。

5.1.1.2. 前接要素「ある」と共起するノダの統括機能

動詞「ある」とノダが共起する例は、62例あり、大きく、2つの文脈展開に関与するものに分類できる。一つは、話段の開始部に現れ、新たな話題を提示するもの、もう一つは、話段の展開部に現れ、後続文理解の前提となるものである。まず、新たな話題を提示する

ものは、次の(96)のような例である。

(96)

- 57 ま、そういうふうには、典型的には、難しい表現と易しい表現，詳しい表現と簡潔な表現，それから，象徴的な表現と具体的な表現，まあ，これくらいにまとめられると思
うんですけども↑，その二つの事柄の側面を見せようとしているということです。
- 58 じゃ，わざわざ難しい言葉なんか表現しなくて，易しい言葉だけにすればいいかとい
うと，それができない時ってのがあるんですね↑。
- 59 たとえば，専門用語を説明しようとする時。
- 60 これは，易しい言葉だけ説明していたら，専門用語が説明できません。
- 61 だから，難しい表現も，あえて入れるということをしてします。

(講義 A)

文 57 まで、「言い換え」について、「二つの側面」を見せることであるということが述べられ、文 58 で、「転換型」の接続表現「じゃ」によって、新たに、「わざわざ難しい言葉なんか表現しなくて，易しい言葉だけにすればいいか」というと，それができない時ってのが「ある」という新たな話題がノダをともなって開始される。文 59 からは、「同列型」の接続表現「たとえば」によって、具体例が示されるという展開方法となる。この文 58 のノダは、話題を提示するのみの後方被統括機能を発揮し、後続文理解のための「前提」を提示していると考えられる。次の(97)は、文 201 のノダは、後方統括機能を発揮し、「概略」となり、文 202 のノダは、後方被統括機能を発揮し、「前提」となっている。

(97)

- 199 (8)で，えっと，さて，今度は，話し言葉における言い換えというのを考えてみたい
と思います。
- 200 で，話し言葉における言い換えというのは，まあ，典型的には，さっき言った，「つ
ていうか」，もう少し，その，フォーマルな形で言えば，「というか」というもの
がよく使われます。
- 201 (8)で，話し言葉における言い換えというのは，基本的に，言い換えというよりも，
「言い直し」，と思われることのほうが多いんですね↑。

- 202 で、あの一、言い換えにも二通りあると思うんですね↑。
- 203 一つは、二通りの表現を、もうすでに準備していて、一つの事柄に対する二通りの表現がすでに、頭の中に存在していて、それを並べる。
- 204 つまり、準備された言い換えと、それから、もう一つは、一つの言葉を口に出してみ、で、口に出すと、相手の反応も見えますし、また、自分の耳でも聞きますよね↑。
- 205 で、耳による印象っていうのもありますよね↑。
- 206 「あつ、それで、あつ、この言葉、相手の表情が曇ったから、まずい、言い換えよう。」とか、「ちょっと今の言葉、心なかったから、言い換えなきゃいけないな。」とか一、まあ、それとか、「今の表現も一、まあ悪くはないけれども、もっといい表現を、今、思いついたんだ一。」とか、ありますよね↑。
- 207 その時に、まあ、上書きというか、上に重ねるようにして、言い換える、というのが、話し言葉の言い換えの特徴。
- 208 つまり、まあ、話し言葉における言い換えというのは、言い直しである。
- 209 即興的な言い換えである、というふうに言えます。

(講義 A)

文 199 から、「転換型」の接続表現「で」「さて」によって、新たに「話し言葉における言い換え」についての話段が開始する。文 200 では、話し言葉の言い換えの具体的な表現が述べられ、文 201 で「話し言葉における言い換えというのは、基本的に、言い換えというよりも、「言い直し」、と思われることのほうが多い」という新情報がノダをともなつて提示される。そのため、後続文に補足情報を求める文脈展開となり、文 208～209 の「同列型」の接続表現「つまり」によって提示される「話し言葉における言い換えというのは、言い直しである」という部分が反復となる。すでに概略的に提示された情報が、後続文によって、補完されるという展開を支えているのが、ノダの後方統括機能であると考えられる。

それに対して、文 202 のノダとともに提示される「言い換えにも二通りあると思う」という情報は、話段の中心的内容の「概略」というよりも、話題のみを取り上げている。つまり、トピックのみで、アサーションが欠如していると考えられる。「言い換えに二通りある」ということが重要なのではなく、文 203～204「準備された言い換え」と、文 204「も

う一つは、」から文 209 に示される「二通り」の中身が重要なのである。このことから、文 202 のノダは、後続文を統括するのではなく、後続文に統括される後方被統括機能を發揮すると考えられる。以上、後方被統括機能を發揮し、話題の開始となる「ある＋ノダ」を考察した。次に、後続文理解の前提となるものを分析する。

次の(98)は、後続文の理解のために「ある＋ノダ」によって、情報が「既定」として提示されている例である。

(98)

147 で、これからずっと説明していきますが、豊富であって、それが使い分けられるっていう時のポイントになるものを、(5)位相と呼んでいます。

148 つまり、言葉を使う人がどういう人なのか、どういう人のグループに属すのかということによって、特定の、まー、言葉、言い方がある、これを位相と言っています。

149 今ので言えば、「おれ」って言葉は、男で、まー、だいたい小5ぐらいからデビューして、「ぼく」よりもぞんざいで、男らしく見せたい時に用いる言葉っていうことになるわけですよ。

150 で、強気な女性がたまに使うっていうことがある。

151 実はね、方言では、男女年齢関係なく用いる所もあるんですよ。

152 だから、これはあくまでも共通語における位相上の違いってことになる。

(講義 E1)

文 147 から、1 人称代名詞の位相について、話題が開始し、文 148 で、「位相」についての説明が述べられる。文 149 からは、「おれ」の位相について説明が始まり、文 150 では「添加型」の接続表現「で」によって、追加の情報が提示される。さらに、文 151 では、「方言では、男女年齢関係なく用いる所もある」ということを、ノダをともなって提示するが、このノダは、後続文 152 の「これはあくまでも共通語における位相上の違いってことになる」ということを理解するための「前提」となっており、後方被統括機能を發揮している。このような「前提」のノダは、任意となるが、それは、他の言語形態的指標、意味内容によって文脈の展開が補完されうるためだと考えられる。次のように、後続の統括文を取り除くと、「だから、何なんだ」という不完全な印象を与えることになる。

(99)

- 147 で、これからずっと説明していきますが、豊富であって、それが使い分けられるっ
ていう時のポイントになるものを、(5)位相と呼んでいます。
- 148 つまり、言葉を使う人がどういう人なのか、どういう人のグループに属すのかとい
うことによって、特定の、まー、言葉、言い方がある、これを位相と言っています。
- 149 今で言えば、「おれ」って言葉は、男で、まー、だいたい小5ぐらいからデビュ
ーして、「ぼく」よりもぞんざいで、男らしく見せたい時に用いる言葉っていうこ
とになるわけですよ。
- 150 で、強気な女性がたまに使うっていうことがある。
- 151 実はね、方言では、男女年齢関係なく用いる所もあるんですよ。

(講義 E1 一部改変)

後続文を取り除くと、文 151 がノダによって、「それを前提として何が言いたいのか」を
後続文に求める後方被統括機能を発揮していることが強く意識されることから、文 151 の
ノダは、後続文に統括文を求める被統括機能を有していると考えられる。また、次の(100)
のように先行文をまとめながら、後続文の前提となる用例も見られる。

(100)

- 512 えー、で、どうでしょうか。
- 513 で、解答は無いんですよ、もちろん。
- 514 正解というのは無いんですよ。
- 515 えーと、小説研究、文学研究には、正解というのは無いんですよ。
無いんですよけれども、こういう解釈が出されてるんですが、えー、スライド、最後
- 516 から2枚目のとこ見て下さい。
- 517 女友達の彼氏の恋人から、納屋を焼くのが趣味だと聞く。
- 518 で、あとで聞いたらば、納屋を焼いたと、完璧に焼いたと。
- 519 その後彼女との連絡は途絶え、アパートからも姿を消す。
- 520 つまり、いわば二つのエピソードがあるんですよ。
- 521 で、その間の関係は不明なんだけど、関係づけようとする、と、どういう解答が出て
くるのか。

え一、一番最後のところに、か、加藤典洋っていう、さっき出てきた名前が書いてあ
522 りますけど、この加藤典洋氏は、『小説の未来』っていう本の中で、ある中学生の
女の子が出した解釈として引用してるんですけど、次のような説を出しています。
523 納屋を焼くというのは、女を殺すという意味であると。

(講義 C1)

これは、村上春樹の短編小説『納屋を焼く』の文学的解釈が述べられる話段であるが、
文 512～516「無いんですけども」まで、「小説研究、文学研究には、正解というのは無
い」ことが「前提」のノダをともなって反復され、そのうえで、「こういう解釈が出されて
る」ということを「前提」のノダとともに提示している。文 517～519 までは、具体的なあ
らすじが述べられ、文 520 では、「同列型」の接続表現「つまり+ノダ」の「換言」によ
って、「いわば二つのエピソードがある」という情報に統括される。このノダは先行文に
対しては、前方統括機能を発揮し、先行文を統括するが、それだけではなく、後続文の「そ
の間の関係は不明」だという情報を理解するための「前提」となっており、後方被統括機
能を発揮しているといえる。このように、言語形態的指標が複合的に使用されることで、
統括の多重性が成立する。以上、話段の開始に用いられるか話段の内部に用いられるか
という違いはあるが、いずれの「ある+ノダ」も、後続文の「前提」となる後方被統括機能
を有するといえる。

5.1.1.3. 前接要素「思う」と共起するノダの統括機能

「思う+ノダ」は、大きく、2つの文脈展開のタイプに分類できる。一つは、結論として
「～だ」と言い切ってもよい情報に対して、婉曲的に述べるために用いられるもの、もう
一つは、講義者自身が述べた情報、講義の場（受講者を含む）の状況に言及するものであ
る。まず、結論を婉曲的に述べるものから検討する。次の(101)は、小説の価値について結
論を「と思う+ノダ」によって提示している例である。

(101)

131 っで、まー、皆さんも大体、あの、想像できると思いますが、同じ事柄でも、語り口
によって全然違うアピールの仕方があるわけなんですね。

132 前回、あの一、ガイダンスのときにお話ししたように、言葉に付加価値を付けるっ

ていうのは、同じことを言うのでも、言い方によって全然違ってくるといことな
んですね。

133 小説ってのは、つまり、言葉の付加価値の固まりなわけです。

134 極端に言うと、ある出来事というものを、どれだけ面白くどれだけ、ゆ、豊かに見
せるのかってところで、小説の価値が決まるんだと、こう言っていていいだろうと
思うんです。

135 で、中でも村上春樹という人は、卓越した物語作家、ストーリーテラーであったと、
あるとすることができると思います。

(講義 C1)

(101)は、「ナラトロジー」の「物語言説」についての説明の話段の終了部である。文 131
から、「同じ事柄でも、語り口によって全然違うアピールの仕方があるわけ」だということ
をノダをともなって提示している。「これは、まー、皆さんも大体、あの、想像できると
思います」 という注釈が示す通り、受講者にも容易に理解可能な外部情報ということに
あり、純粋な新情報とは言えない。この文 131 は、ワケダが挿入されているが、基本的
には「ある+ノダ」と考えてよく、「前提」のノダとして、後方被統括機能を発揮する。文
132 は、文 131 の「前提」の情報を同語反復的に換言しているのみで、先行文に対する「換
言」ではあるが、同時に、後続文に対する「前提」を再提示しているという文脈展開とな
っている。続く文 133 は、「小説ってのは、つまり、言葉の付加価値の固まりなわけです」
と「同列型」の接続表現「つまり」とワケダによって、先行文の前提に対して、結論が述
べられる。つづく、文 134 は、さらに、「同列型」の接続表現相当の「極端に言うと、」
を用いて、「ある出来事というものを、どれだけ面白くどれだけ、ゆ、豊かに見せるのか
ってところで、小説の価値が決まる」ことをノダをともなって提示することで、先行
文 131~133 の情報を統括する。さらに、この情報を思考内容のかたちにし、「こう言っ
ていいだろう」という情報に「と思う+ノダ」を用いることで、統括力のある思考内容を、
さらに統括するという多重の統括関係が成立する。このような「と思う+ノダ」は、文末
のみならず、節末にも現れる。次の(102)は、「要するに」の結論を「つまり」との対立の中
で述べるものである。

(102)

- 155 で, ただ, まあ, 「つまり」と「要するに」っていうのは, 似たふるまいをすることがありますので, だから, まあ, 一応, 言い換えとを考えてもいいとは思うんですが, その, 「つまり」というのは, えーっと, 漢字で書くと一, (10) {黒板に歩いていき, 「詰」と板書して, 教壇に戻る} 多分この字ですよ↑。
- 156 「詰まり」。
- 157 だから, 「つまり」というのは, 「詰める」, 長いものを凝縮して示すという, のが, 「つまり」だと思っうんですけども, 「要するに」というのは, 「要は」とか言うのと同じで, 「要」[よう]というのは, 要[かなめ], 要点, ポイント, 核心ですよ↑。
- 158 だから一, その, 話の, その, 何かを, 「つまり」のように, 前の表現を凝縮して示すわけではなくて一, 話の核心を一, いきなり取り出してくる, そういう感じが, 「要するに」にはあります。
- 159 ですから, かなり, 極端な幅の言い換えであっても, 時には, 言い換えと思えないようなものであっても, 「要するに」で言い換えることが可能になるという, ことです。

(講義 A)

文 155 は、「「つまり」と「要するに」」について、「似たふるまいをすることがあることを根拠に、「順接型」の接続表現「だから」以降の「一応, 言い換えとを考えてもいい」という結論を「±と思う+ノダ」によって、提示し、以降、「「つまり」というのは」という提題表現によって、「つまり」の話題へと展開する。文 156 は、講義者が書いた文字を読み上げ、文 157 は、それを根拠に、「順接型」の接続表現「だから」をともない、「「つまり」というのは, 「詰める」, 長いものを凝縮して示す」という結論を「±と思う+ノダ」で提示している。このように、節末であっても、「±と思う+ノダ」は、先行文に対する何らかの結論を婉曲的に述べるときに用いられ、ノダは、前方統括機能を発揮しているといえる。

次に、講義者自身が述べた情報、講義の場（受講者を含む）の状況に言及する「±と思う+ノダ」を考察する。(103)は、学生のリアクションペーパーをもとに、1人称代名詞を挙げる話段の一部である。

(103)

244 後[あと]は、かわいいのは「あたり」。

245 「幼い女兒」。

246 それはそうでしょう。

247 「幼い女兒」。

248 後[あと]は、えーとですね、「われ」って言うと、「哲学者」。

249 哲学者は、今、「われ」とは言っていないと思うんだけどね。

250 で、どうしてもみんなに聞いてみたい言葉があるんですよ。

251 「わし」。

(講義 E1)

文 244 では、1 人称代名詞「あたり」が取り上げられ、文 245 で使用する位相が示される。文 246 で講義者の評価が述べられ、文 247 で、「あたり」を使用する位相が反復される。文 248 では、「われ」が取り上げられ、使用する位相が「哲学者」であることが述べられ、それに対して、文 249 は「哲学者は、今、「われ」とは言っていない」という思考内容を「と思う+ノダ」によって提示することで、文 248 に対し、講義者の感想を挿入している。先行文に対して言及していることから、広義の「換言」といえるかもしれないが、文 249 のノダは、先行文を統括するのではなく、先行文に統括される前方被統括機能を発揮している点が異なる。文 250 以降は、「転換型」の接続表現「で」をとめない、「ある+ノダ」の形で、新たな話題の「前提」が示されるという文脈展開となっている。文 249 は、講義者自身の心情を「既定」として背景化して提示するために「ノダ」を用いていると考えられる。講義の談話は、いわゆる説明的な談話の性質を帯びているため、講義者の感想は、背景化され挿話的な情報となることが多いと考えられる。次の(104)は、講義の開始部で、講義の場に言及する「と思う+ノダ」である。

(104)

17 はい、えっとー、前期の講義に出た人も多いかと思うんですけどもー、その中で、

「リダンダンシア」っていうのやったの、覚えてますかね。

18 これは、あの、ま、私自身、日本語教師、つまり、留学生に日本語を教える仕事をしているわけですが、普段。

19 その中で、一つのトレーニングとして、リ、リダンダンシアというのがあります。

(講義 A)

文 17 から、講義の「枕」であるリダンダンシアの話題が開始するが、「前期の講義に出てた人も多いかと思うんですけどもー」と、「と思う+ノダ」によって、講義の場に対して講義者の見解を、後続の「リダンダンシア」っていうのやったの、覚えてますかね」に対する「前提」として提示している。この「と思う+ノダ」も、後続する主節に統括される被統括のノダである点で、(103)と共通している。上記のように、「と思う+ノダ」には、先行文や講義の場に対して挿入的に講義者が言及するという文脈展開が認められる。以上、「と思う+ノダ」には、①先行文に対する結論を婉曲的に述べるために用いられるものと、②講義者自身が述べた情報、講義の場等に言及するものがあることが明らかになった。

5.1.1.4. 前接要素「～てほしい」「～たい」と共起するノダの統括機能

講義の談話の文脈展開方法の一つに、講義の進行について言及するものがあり、ノダを用いた表現として、「～てほしい+ノダ」(10例)、および、「～たい+ノダ」(5例)がある。中でも、「～てほしい+ノダ」の述語はすべて「見る」であり、ハンドアウトの用例や、スライドに受講者の意識を向けることで、新たな話題を取り上げる「前提」となる。次の(105)は、以下の話題「「ていうか」が不愉快に感じられる理由」を理解するための「前提」としての行動要求が「てほしい+ノダ」のかたちで示される。

(105)

241 で、じゃあ、なんで、その、「ていうか」というのが、(3)不愉快に感じられるんだらうか、ということ、えっとー、皆さんのー、まあ、用例を見ながら、えーっと、考えていきたいと思います。

242 で、あの一、表 [ひょう] の下の用例を見てほしいんですけども、1 番。

243 これは、あの一、KAさんのものを改作したんですが、こういうのは、あんまりー、腹、腹が立たないと思うんですよね↑。

244 「おいしそうだね。」

245 「おいしそうっていうか、体によさそうだよね。」

(講義 A)

文 241 は、「転換型」の接続表現「で」「じゃあ」＋ノダロウカのかたちで、新たな話題が開始され、文 242 では、「順接型」の接続表現「で」と、「表 [ひょう]」の下の用例を見てほしいんですけれども、1 番」と「見てほしい＋ノダ」にののかたちで行動要求をすることで、受講者の意識を用例へ向けることで、文脈が展開している。文 243 は、後方照応の指示表現「こういうの」（文 244～245）に対する講義者の心情を挿入し、受講者の理解を促している。文 241～243 のすべてのノダは、後方統括機能を発揮し、文 244～245 の用例を理解するための「前提」となっている。次の(106)も、同様に、受講者に対して「見てほしい＋ノダ」のかたちで用例を見るよう行動要求することで新たな話題の開始となっている例である。

(106)

100 で、その仕掛けの、おー、概要をこれからお話ししたいと思います。

101 えー、で、さかのぼってですね、その、一番左の 12 ページ、13 ページというところを見てほしいんですが、ちっちゃくてちょっと見えないんですけど、「出来事の核と語り口」というタイトルが、あー、ついているものです。

102 で、これはですね、語られる内容が、まー、出来事の核なんですね。

(講義 C1)

(106)は、「小説を構造化する仕掛け」の話段の開始部である。文 100 は「転換型」の接続表現「で」をともなって、新たな話題の開始を予告し、文 101 では、「一番左の 12 ページ、13 ページというところを見てほしいんですが」と「見てほしい＋ノダ」を用いて受講者の意識をスライドの内容「出来事の核と語り口」へ向けることで、新たな話題へと展開する「前提」となっている。続く文 102 は、「添加型」の接続表現「で」＋ノダによって、新たな話題の「概略」が示され、後続文にそれを補足する展開となっている。上記の

(105)(106)のように、「～てほしい+ノダ」によって、用例やスライドに受講者の意識を向けるだけでなく、「～たい+ノダ」によって、講義者の行動提示をすることで受講者の意識を向ける場合もある。次の(107)は、講義の段取りに言及するものである。

(107)

- 166 どうもインタビューというのが、気になる形式です。
- 167 村上春樹の作品の中では、気になるスタイルだろうと思うんですね。
- 168 でー、で、話をだんだん「土の中の彼女の小さな犬」のほうへ向けていきたいと思
うんですけど。
- 169 えー、この作品も収められた『中国行きのスロウ・ボート』というのは、これはです
すね、えーと、スライド資料の中段の真ん中のところを見て下さい。

(講義 C1)

(107)は、村上春樹の小説のスタイルについての話段の一部である。文 166 で述べられた「インタビューというのが、気になる形式」を、167 で「と思う+ノダ」をともなって反復することで、先行文を統括していると考えられる。文 168 は「転換型」の接続表現「で」によって、新たな話題に展開し、「話をだんだん「土の中の彼女の小さな犬」のほうへ向けていきたいと思うんですけど」と、「たいと思う+ノダ」によって、次に展開する話題の方向を提示している。

以上、講義の進行について言及するノダを用いた表現として、①「～てほしい+ノダ」、および、②「～たい+ノダ」があることを確認した。これらは、話段の開始部に現れ、後方被統括機能を発揮することで、後続文の理解のための「前提」となる。ここでは詳しく触れないが、ノダの表現形式にも特徴があり、すべて「～んですが」「～んですけど」⁴⁰と、いわゆる「前置き」に分類される節末表現として現れることも大きな特徴である。

5.1.2. 講義の談話におけるノダの表現形式

講義の談話では、ノダのノは、ほぼンと撥音化し、また、終助詞「よ」「ね」などとも共起するため、その表現形式は、さまざまである。ここでは、講義の談話のノダがどのような表現形式で現れるのかを分析し、表現形式によるノダの統括機能に偏りがあるかどうか

⁴⁰ 「ケド」は、「けど」「けれど」「けども」「けれども」の表現形式の総称とする。

を検討する。ここでは、大きく節末のノダと文末のノダに分類し議論を進める。

5.1.2.1. 節末のノダの表現形式

講義の談話において、ノダの出現数は、722例で、そのうち、節末に出現するノダは、319例（44.2%）であり、文末にわずかに及ばないが、大きな差は認められない。また、その表現形式は、78種に細分されるが、約3分の2が1例のみの使用であり、上位5位までの合計で約201例（約65%）に達することから、出現に偏りがあることがわかる。特に、上位4位まで、〈ノダ+接続助詞「が」「けど」〉となっており、これらの合計が182例（約57%）となっていることから、節末のノダの基調となっていることがわかる。第5位は、「のか」と間接疑問の形式となっている。また、6位の「んだらうと」は、引用、もしくは、思考内容を表しており、さらに後続要素として、「言う」「思う」などが共起する。本研究では、特に、〈ノダ+接続助詞「が」「けど」〉、〈のか〉、〈ノダ+引用助詞「と」〉の3種の表現形式を検討する。

【表 26】節末のノダの表現形式の出現数

節末のノダの表記形	出現数	ノダの総出現数 (722) に対する割合
1. んですが	59	8.2
2. んですけど	59	8.2
3. んですけれども	43	6
4. んだけれど	21	2.9
5. のか	19	2.6
6. んだろうと	9	1.2
7. んですけれど	9	1.2
8. んだという	5	0.7
9. んですけれどもー	5	0.7
10. のかと	4	0.6
11. んだと	4	0.6
12. んじゃないかって	3	0.4
13. んじゃないかなと	3	0.4
14. んですがー	3	0.4
15. んですけども	3	0.4
16. のかな↑	2	0.3
17. んだか	2	0.3
18. んだから	2	0.3
19. んだけれども	2	0.3
20. んでしょうけれども	2	0.3
21. んですから	2	0.3
22. んないんだけど	2	0.3
23. のか↑というような	1	0.1
24. のかしら	1	0.1
25. のかっという	1	0.1
26. のかな	1	0.1
27. のかなっという	1	0.1
28. のかなと	1	0.1
29. のだと	1	0.1
30. のだという	1	0.1
31. のだろうと。	1	0.1
32. のだろうというふうに	1	0.1
33. のであると	1	0.1
34. んじゃないか	1	0.1
35. んじゃないかと	1	0.1
36. んじゃないかとか	1	0.1
37. んじゃないの。」というよ	1	0.1
38. んだ	1	0.1
39. んだ、	1	0.1
40. んだ、と	1	0.1
41. んだ。」っというのが	1	0.1
42. んだ。」と	1	0.1
43. んだ。」みたいに	1	0.1
44. んだ。」	1	0.1
45. んだーとか	1	0.1
46. んだけれどー」っという	1	0.1
47. んだそう	1	0.1
48. んだったら	1	0.1
49. んだっという	1	0.1
50. んだっというのが	1	0.1
51. んだっというよう	1	0.1
52. んだっってこと	1	0.1
53. んだと、いうふうに	1	0.1
54. んだということ	1	0.1
55. んだというふう	1	0.1
56. んだというふう	1	0.1
57. んだな。」っという	1	0.1
58. んだな。」という	1	0.1
59. んだなっってこと	1	0.1
60. んだなっという	1	0.1
61. んだね	1	0.1
62. んだろうか	1	0.1
63. んだろうというふう	1	0.1
64. んであって	1	0.1
65. んでありまして	1	0.1
66. んでしようけれども	1	0.1
67. んでしようか	1	0.1
68. んでしようかね	1	0.1
69. んでしようね」っ	1	0.1
70. んですけどね↑	1	0.1
71. んですけどもね	1	0.1
72. んですけれども↑	1	0.1
73. んですけれどもー↑	1	0.1
74. んですよ	1	0.1
75. んですよ	1	0.1
76. んでね	1	0.1
77. んではないかと	1	0.1
78. んなら	1	0.1
合計	319	44.2

5.1.2.1.1. 節末〈ノダ+接続助詞「が」「ケド」〉の統括機能による文脈展開の特徴

まず、〈ノダ+接続助詞「が」〉の表現形式は、「1. んですが」「14. んですがー」のみで、合計 62 例であるのに対し、〈ノダ+接続助詞「ケド」〉の表現形式は、「2. んですけど」「3. んですけれども」「4. んだけど」「7. んですけれど」「9. んですけれどもー」「15. んですけれども」「18. んだけけれども」「19. んでしようけれども」「21. んないんだけど」「46. んだけどーっていう」「66. んでしようけれども」「70. んですけどね↑」「71. んですけどもね」「72. んですけれども↑」「73. んですけれどもー↑」の合計 152 例と、バラエティに富んでおり、「1. んですが」「2. んですけど」の出現数がともに 59 例となっているが、実際には、〈ノダ+接続助詞「ケド」〉のほうが、2 倍強となっていることがわかる。

次の【表 27】は、〈ノダ+接続助詞「が」〉および、〈ノダ+接続助詞「ケド」〉の使用に個人差があるかを分析したものである。

【表 27】 講義者ごとの〈ノダ+接続助詞「が」, 「ケド」〉の使用数

前接要素 資料	ノダ+接続助詞「が」	ノダ+接続助詞「ケド」	合計
講義A	17[37.8]	28[62.2]	45[100.0]
講義B	7[11.1]	56[88.9]	63[100.0]
講義C1	30[37.0]	51[63.0]	81[100.0]
講義E1	8[32.0]	17[68.0]	25[100.0]
合計	62[29.0]	152[71.0]	214[100.0]

講義 B を除き、〈ノダ+接続助詞「が」〉が、30%台、〈ノダ+接続助詞「ケド」〉 60%台と、それほど大きな差は見られないとあってよい。講義 B の使用が、〈ノダ+接続助詞「ケド」〉に偏るのは、講義者 B が女性であることが要因として考えられる。また、他の表現においてもくだけた言い方を用いており、そのため、より話し言葉的な接続表現「ケド」を多用するのだと考えられる。講義 B は、使用の割合に差が見られるが、全体として、〈ノダ+接続助詞「が」〉の使用率が、〈ノダ+接続助詞「ケド」〉の使用率を上回ることがないことは共通しているといえる。

また、本調査では、ノダに後接する接続助詞が「が」であるか「ケド」であるかに大きな差は認められなかった。次の(108)は、講義に映し出すスライドの枚数が限られていることから、配布した資料よりも、スクリーンに映すスライドの数が少ないことをことわる簡

所である。

(108)

26 えー、ですから、今回の場合は、タイトルですね、あの、授業の題目とか、それから、えーと、今日は第2章になるんですけど、あ、第2節ですか、序論の第2節になるんですが、その節のタイトルであるとかは省いてあります。

(講義 C1)

まず、「今日は第2章になるんですけど」と〈ノダ+「ケド」〉のかたちで「前提」として提示するが、それが間違いであることに気づき、「序論の第2節になるんですが」と、〈ノダ+「が」〉のかたちで言い直している。このように、同一内容を提示する際にも、2種の表現形式が混在していることから、明確な使い分けが行われているとは認められない。

また、接続助詞「が」「ケド」は、多義的で、「前置き」「逆接」「話題」に大別される。次の【表 28】は、ノダに後接する接続助詞別の用法の出現数をまとめたものである。

【表 28】ノダに後接する接続助詞の用法

後接要素 用法	が	ケド
前置き	56 (90.3)	123 (80.9)
逆接	5 (8.1)	27 (17.8)
話題	1 (1.6)	2 (1.3)
合計	62 (100)	152 (100)

「が」と「ケド」に差が見られるのは、「前置き」と「逆接」の用法で、それぞれ、10%の差が見られる。しかし、全体的には、「前置き」は約80~90%、「逆接」が約10~20%、「話題」が約1%となっており、大きな差があるとは言えない。ここでは、「が」と「ケド」を同一に扱い、それぞれ、典型的な用例を挙げ、その特徴を検討する。次の(109)は、〈ノダ+「前置き」の用法の「が」〉が用いられた例である。

(109)

590 えーと、またあの、繰り返し、あの、お話ししていきますけど、ドキュメント形式、

さっき出てきましたが、漱石の『こころ』という小説は、ドキュメント形式の傑作です。

591 上中下に分かれてるんですが、上と中は手記です。

592 下は遺書、手紙です。

(講義 C1)

(109)は、村上春樹の『ノルウェーの森』が夏目漱石の『こころ』と似ているということを紹介する文段の一部である。文 590 は、今後の講義内容について「繰り返し、あの、お話ししていきますけど」と前置きし、さらに、「ドキュメント形式、さっき出てきましたか」と、講義の流れに言及する前置きがあり、「漱石の『こころ』という小説は、ドキュメント形式の傑作です。」と、情報を提示する。文 591 で「上中下に分かれてるんですが」と、主節「上と中は手記です」を理解するための前提情報⁴¹を〈ノダ+「が」〉によって、提示している。ここで、文 590 のノダをともなわない「前提」と文 591 のノダをともなう「前提」の違いがあるのだろうかという疑問が生じる。結論から述べると、「前接要素の偏り」という点に相違がみられる。具体的には、形容詞は、〈ノダ+「が」〉で現れることが多く、意思の「たい」、願望の「てほしい」は、すべて〈ノダ+「が」〉で現れることが挙げられる。〈形容詞+ですが〉は7例のみで、うち4例が否定形「ない」のかたちで現れる。(110)は、村上春樹の小説に、ロングバージョンとショートバージョンがあるという話段の一部である。

(110)

191 えーと、「めくら柳と眠る女」などというのはですね、ロングバージョンとショートバージョンがあるんですね。

192 ほかにもいくつかあります。

193 長編には、さすがにそういうのはないですけど、短編小説はロングバージョンとショートバージョンがある。

(講義 C1)

文 193 は、「長編には、さすがにそういうのはないですけど」と、ノダをともなうこと

⁴¹ ひいては、後続文 592 「下は遺書、手紙です。」の理解の前提ともなっている。

なく、「前置き」をしている。「ケド」自体すでに「前置き」を表すため、ノダがなくても問題がないと考えられる。当然、ノダをとまっても文脈が損なわれることはなく、むしろ、名詞化されることで「既定」であることが明示されるため、より、情報が背景化するといえるだろう。しかし、すべての〈形容詞＋「が」／「ケド」〉が認められるわけではない。次の(111)は、〈形容詞＋ノダ＋「が」〉によって、「前提」となっている例である。

(111)

- 435 (5) えー、あのね、この、このたび、お札になった樋口一葉さんを主演にしたお芝居書
いてるんですけど、今でもよく上演されてるんですけどね↑、タイトルが『頭痛肩
こり樋口一葉』っていうんですよ。
- 436 で、『頭痛肩こり樋口一葉』って、語呂もすごくいいんですけど、えーと、三、四、
三、四みたいな感じで、七、七[しち、しち]みたいになるので。
- 437 でー、この「頭痛肩こり」って、彼女が生涯悩まされた、あの、まー持病っていうの
かな、ものなんですけど。
- 438 で、そこにね、樋口一葉がきても、別におかしくないんですが、併せてね↑、あのー、
お芝居のポスター見てもらうと、薬のポスターみたいに作ってあるのがわかるんです
よね↑。

(講義 B)

文 436 の「『頭痛肩こり樋口一葉』って、語呂もすごくいいんですけど、」や、「そこ
にね、樋口一葉がきても、別におかしくないんですが、」のノダがなければ、「すごい
い」や「おかしくない」という評価を、発話時に、講義者が下したことになるため、違和
感が生じる。しかし、ノダをとまうことで、その評価がすでに「既定」であることが示
され、背景化するため、受講者は、その評価を「前提」として受け入れることになる。こ
のように、〈形容詞＋ノダ＋「が」／「ケド」〉は、その評価を「前提」として提示する
ことになる。

次に〈「てほしい」／「たい」＋ノダ＋「が」／「ケド」〉であるが、5.1.1.4 でも述べ
たが、「てほしい」「たい」に後接するノダの表現形式は、すべて〈ノダ＋「が」／「ケ
ド」〉である。次の(112)は、読み上げる用例へ受講者の意識を向けようとする〈てほしい

+んですが) の例である。

(112)

110 (6) {遅刻者が入室してきたのを見る} で、そういう、その「すなわち」の特徴を、うまく、使ったものとして、7番のような例があります。

111 ちょっと見てほしいんですが、「サンリオに代表されるキャラクター商品といえば、女 [おんな] 子供向け商品の代名詞のような存在である。

(講義 A)

文 111 は、「ちょっと見てほしいんですが」と「てほしい+んですが」によって、「既定」として背景化することで、受講者への行動要求を当然のものとして提示している。ノダをとまなわない「ちょっと見てほしいんですが」は、講義者が発話時点で受講者に対して直接的に行動要求をすることになり、「前提」となりにくいことから、1例も見られなかったのだと考えられる。以上の前接要素の偏りは、ノダによって、既定として情報が背景化することに起因すると考えられる。

次に「逆接」の例を分析する。(113)は、「パロディ」の例として、井上やすしの芝居のタイトルを挙げる話段の一部である。

(113)

453 それから、上は、{笑い}あの一、やっぱり類音↑、似た意味の類似の「類 [るい]」に「音 [おと]」ですけど、それを利用して、『国語事件殺人辞典』。

454 普通、「国語辞典殺人事件」ですよ。

455 「辞典」と「事件」、ひっくり{笑い}返すと、なんだか、わけわかんないんだけど、不思議なものになるでしょ↑。

456 で、こういう、全部お芝居のタイトルです。

(講義 B)

文 453 の「添加型」の接続表現「それから」によって、類音の例『国語事件殺人辞典』が提示される。文 454 で元の例が「国語辞典殺人事件」であることが提示され、文 455 で「わけわかんないんだけど、」と〈ノダ+ケド〉をとまなうことで、すでに既定の評価と

して背景化されることで、主節の「不思議なものになるでしょ↑」の「前提」となっている。〈ノダ+ケド〉で提示される情報と主節の情報の関係は、「逆接」であるが、背景化するという意味では、前述の「前置き」に通じるものがある。ノダをとまなわなければ、「わけわかんない」という評価を、講義者が発話時点で直接的に下したということになるだろう。

最後に「話題」の用法であるが、これは、叙述部分ではなく、提題部分に〈ノダ+「が」／「ケド」〉が接続したものである。用例数は3例と少ないが、「節」の成立にかかわらないという点で、「前置き」とも「逆接」とも異なるため、以下にとり上げる。次の(114)は、講義で使用するスライド資料を話題として取り上げ、説明を加える話段である。

(114)

- 22 で、スライド資料は1ページの最後のところ、「アエラムック」と書かれたところ
す。
- 23 で、このスライド資料なんですが、えーと、パワーポイントのスライド資料っていうのは、あの一、1ページにスライド1枚から9枚っていうふうな、あー、割り付け
できるんですけど、えーと、それ以外の設定ができない。
- 24 つまり、これ以上のスライドの枚数は入れられないんですね。

(講義 C1)

文23から、「転換型」の接続表現「で」によって、スライド資料について話題が開始する。「このスライド資料なんですが」と、新たな話題を〈ノダ+「が」〉によって、とり上げているが、さらに、「パワーポイントのスライド資料っていうのは」と、提題表現を反復している。仮に提題の反復がなかったとしても、〈ノダ+「が」〉によって話題がとり上げられているため、文脈が損なわれることはない。ここで、提題表現の反復が行われているのは、〈ノダ+「が」〉には、提題として話題をとり上げる力が弱いためであると考えられる。「前提」「逆接」の用法でも見たように、〈ノダ+「が」〉は、情報を背景化するという特徴が関係しているのだろう。次の(115)も、〈ノダ+「ケド」〉でとり上げられた話題が、直後に別の形式で反復されている。

(115)

122 で、一方、その、「つまり」なんですけれども、「つまり」というのは、全体的にどこにでも出てくる傾向がありますね。

(講義 A)

(115)は、書き言葉の言い換えの表現「つまり」を新たな話題としてとり上げ、説明を加えている。文 122 は、「転換型」の接続表現「で」と「対比型」の接続表現「一方」によって、対比的に新たな話題が「「つまり」なんですけれども」と〈ノダ+ケド〉でとり上げられるが、直後に「「つまり」というのは」と、別の提題形式によって反復されている。(114)のように、反復された提題表現がなくても、文脈が損なわれることはないが、あえて、提題(いずれも「トイウコトハ」)を反復しているということから、話題をとりあげる〈ノダ+「が」/「ケド」〉は、その力が弱いと考えられる。むしろ、新たな話題をとり上げるための「前提」となっているといえるかもしれない。⁴²

以上、〈ノダ+「が」/「ケド」〉について、接続助詞部を「前置き」「逆接」「話題」に大別して分析したが、それぞれに共通した特徴は、〈ノダ+「が」/「ケド」〉をともなう情報が「既定」として背景化することで、主節の「前提」となるということである。

5.1.2.1.2. 節末「のか」の統括機能による文脈展開の特徴

講義の談話において、「ノカ」を含む表現形式は、「5. のか」「10. のかと」「23. のか」というような「25. のかっていうと」の4種で、合計は25例である。この「ノカ」は、大きく、「①話段の課題設定に言及するもの」と、「②講義者の疑問点を挿入するもの」に分類できるが、明確な線を引くことはできず、中間的なものも見られる。まず、「①話段の課題設定に言及するもの」の例から検討する。ここでの「話段」とは、大小さまざまな次元の話段を指す。

次の(116)は、講義の開始部で、この日の講義全体の課題設定に言及している例である。

(116)

34 えーと、それですね、えーと、今日は、小説を読んでいくというのは、どういう行

⁴² 「話題」の用法は、もう1例見られたが、「(3)で、73番なんですけれど、えーとね、これより隣がわかりやすいのかな。」(講義 B: 文 317)と提題と叙述がねじれているため、分析対象から除外した。

為なのかということ、ま一、簡単にお話ししていくということで、え一、村上春樹の初期の短編を例に挙げながら進めていきます。

(講義 C1)

文 34 は、「今日は」という提題表現と、「簡単にお話ししていく」という叙述表現によって、この日の講義の進行に言及しおり、「ノカ」をともない「小説を読んでいくというのは、どういう行為なのかということ」と課題提示をすることで、講義の内容を受講者に明示している。

また、講義の終了部にこの日の講義の課題を再確認する場合もある。次の(117)は、講義内容である「人称代名詞」について、言及している例である。

(117)

549 え一、人称代名詞、今日は、え一、日本語の、ま一、特徴ということを中心に、そもそもどんなものを指すか、そして、日本語としてはどういうのか、それから、それから派生する問題いくつかについて取り上げてみました。

(講義 E1)

文 549 は、提題表現「今日は」と叙述表現「取り上げてみました」によって、講義内容のまとめをし、「か」「のか」をともない「日本語の、ま一、特徴ということを中心に、そもそもどんなものを指すか、そして、日本語としてはどういうのか、それから、それから派生する問題いくつかについて」という課題を再提示することで、講義内容をまとめている。ここでは、「か」と「のか」の差はほとんど感じられないが、これは、間接疑問の「か」自体がすでに既定を表すことになるためであろう。名詞のように、「か」に格助詞が接続できることも、その証左の一つといえる。

また、(118)のように、講義者の疑問が次回の講義の課題提示となっている例も見られる。これは、「①話段の課題設定に言及するもの」と、「②講義者の疑問点を挿入するもの」の中間的なものと考えられる。(118)は、「彼」「彼女」が3人称代名詞ではないと説明した後の文である。

(118)

335 で、じゃあ「彼」や「彼女」っていうのは、そもそもどういうことなのかかっていうことになると、これは次回の「こそあど」に関係します。

(講義 E1)

先行する情報に対して、「じゃあ「彼」や「彼女」っていうのは、そもそもどういうことなのか」という講義者の疑問を「のか」をともない提示するが、この疑問は、次回の講義で扱うことを述べており、結果的に、次回の講義の課題提示となっている。このように、講義の談話は、シラバス全体が一つの談話であることを表しているといえる

次に「②講義者の疑問点を挿入するもの」であるが、(118)のように、講義の進行にかかわるものと、単に講義者の所感が挿入されたものがある。次の(119)は、2人称代名詞の代わりに、「親族名・役職名」が用いられること具体例を挙げる話段の一部である。先行する情報に講義者の所感が挿入されているが、これが講義の展開と直接かかわることはない。

(119)

495 それから、えーと、「だんな」とかね、「奥様」なんていうふうな、あー、のがありますよね。

496 これは、「あなた」の代わりに使っているわけです。

497 えー、君たちの家の周りに八百屋さんとか魚屋さんがあつてね、「ちょっとちょっと奥さん」なんて言われると、むっとして「まだ結婚してません」とか言う。

498 「お姉さん」だったらいいのかというのがある。

(講義 E1)

文 495 は「添加型」の接続表現「それから」によって、新たな具体例「だんな」「奥様」が示され、文 496 で、2人称代名詞の代わりに使っていることが提示される。文 497 は、実際の使用例で、問題になる場面を提示し、それに対して、文 498 は、講義者の所感を「のか」をともない提示している。この「のか」は、前方被統括機能を発揮していることから、先行文に付随するのみで、講義の進行にかかわる情報ではないため、「挿入」されているとあってよい。また、次の(120)のように、主節に対する講義者の所感を先取りして挿入する

場合もある。(120)は、1人称代名詞の例を学生のリアクションペーパーをもとに列挙する話段の一部である。文 200 までは、「朕」が話題としてとり上げられている。

(120)

200 天皇のみが使える 1 人称代名詞。

201 で、これで悪のりしたのか、さらに「まる」。

202 貴族だよ。

203 それから、「拙者」なんていうのを挙げている人が。

(講義 E1)

文 201 からは「まる」がとり上げられるが、学生が「まる」という 1 人称代名詞をリアクションペーパーに書いたことに対して、講義者の所感「これで悪のりしたのか」が、「のか」をともない先取りして挿入されている。このような講義者の所感を挿入する「のか」は、次の(121)のような講義者の情報の蓋然性を明示する「のかな」に近づいていく。⁴³(121)は、「多重」の用例として『坊ちゃん』を用いる話段で、簡単な解説を加えているところである。

(121)

230 えーと、『坊っちゃん』です。

231 で、松山に赴任したでしょ↑。

232 で、松山は今でも俳諧のイベントをやりますよね↑。

233 なにしろ正岡子規の出たところだし、もともと、なんか、盛んなんですよね、俳句自体ね。

234 結構、風光明媚なのかな↑、なんか、わりとみんな、昔から詠む人が多かった。

235 で、下宿屋の親父も詠むし、あと、職員室でも{笑い}詠んでるし、骨董屋の、下宿屋の親父さんが骨董かなんかやってんのかな↑、で、骨董趣味だし、俳諧趣味だしね↑。

(講義 B)

⁴³ 今回の分析対象のなかでは、講義 B のみに見られた (5 例) 表現形式である。講義 B のみ女性であることを考えると、性差による使用の偏りが見られる可能性がある。

文 234「結構、風光明媚なのかな↑」は、文 235「下宿屋の親父さんが骨董かなんかやってんのかな↑」は、「のかな↑」によって、講義者自身の発話内容の蓋然性が高くないことを明示している。この「のかな↑」は、被統括機能を発揮しており、情報が挿入されるのみで、講義の進行にかかわることはない。

以上、「のか」には、ノダによる統括機能の観点から、「①話段の課題設定に言及するもの」と、「②講義者の疑問点を挿入するもの」に分類可能であることが確認された。また、情報を挿入する「②講義者の疑問点を挿入するもの」は、「講義者の情報の蓋然性を明示する」「のかな↑」に類似することを示した。

以上、講義の談話における節末のノダの表現形式を分析したが、従属節に現れるノダということで、主節に統括される被統括機能を発揮するノダが多いことを確認した。従属節にノダを用いることで、当該の情報を「既定」のものとし、「背景化」することができると考えられる。

5.1.2.2. 文末のノダの表現形式

文末のノダは、403例で、全体の55.8%をしめており、73の表現形式が見られたが、その出現率には、偏りがみられる。上位5位をみると、出現率第1位は、「1. んですね。」97例(13.4%)と、終助詞「ね」との共起、第2位は「2. んです。」64例(8.9%)と言い切りの形、第3位は、「3. んですね↑。」47例(6.5%)と、「ね」の上昇イントネーションとの共起、第4位は「4. んですよ。」31例(4.3%)と終助詞「よ」との共起、第5位は「んですよ。」17例(2.4%)と、終助詞「よね」との共起となっている。このように、「んです。」という言い切りの形は、第2位にとどまり、他の4種のノダは、終助詞「よ」「ね」「よね」(上昇イントネーションを含む)と共起していることがわかる。終助詞との共起の代表を出現数第1位の「んですね。」として、この節では、特に「んですね。」と言い切りのかたち「んです。」の異同を分析することにする。

5.1.2.2.1. 「んですね。」の統括機能

終助詞「ね」は、基本的に「確認要求」を表すことから、聞き手側に十分な知識があることが使用条件となる。次の(122)は、ハンドアウトを見ながら、受講者が想定した接続表現の合計を確認する場面である。

【表 29】文末のノダの表現形式と出現数

文末のノダの表記形	出現数	ノダの総出現数 (722) に対する割合
1. んですね。	97	13.4
2. んです。	64	8.9
3. んですね↑。	47	6.5
4. んですよ。	31	4.3
5. んですよね。	17	2.4
6. んですけど。	13	1.8
7. んですよね↑。	11	1.5
8. んですが。	10	1.4
9. のか。	9	1.2
10. んですけど。	7	1
11. んだろう。	5	0.7
12. んでしょうかね。	5	0.7
13. んだと。	4	0.6
14. んでしょうかね。	4	0.6
15. の。	3	0.4
16. んじゃないでしょうか。	3	0.4
17. んでしょうか。	3	0.4
18. んですけどね。	3	0.4
19. んですけども。	3	0.4
20. んです↑。	3	0.4
21. のかな。	2	0.3
22. のかな↑。	2	0.3
23. のだ。	2	0.3
24. んだけど。	2	0.3
25. んだということです。	2	0.3
26. んだろうか。	2	0.3
27. んでしょう。	2	0.3
28. んですよ↑。	2	0.3
29. の。	1	0.1
30. のかということです。	1	0.1
31. のかなー。	1	0.1
32. のかなと。	1	0.1
33. のかもしれないですけど。	1	0.1
34. のかもしれません。	1	0.1
35. のであります。	1	0.1
36. のでしょうか。	1	0.1
37. のです。	1	0.1
38. のね↑。	1	0.1
39. のよ。	1	0.1
40. んけれど。	1	0.1
41. んじゃない↑。	1	0.1
42. んじゃないかと。	1	0.1
43. んだ、ということです。	1	0.1
44. んだー。	1	0.1
45. んだから。	1	0.1
46. んだからね。	1	0.1
47. んですけどもね。	1	0.1
48. んだそうです。	1	0.1
49. んだそうですね。	1	0.1
50. んだそうですね↑。	1	0.1
51. んだそうですよ。	1	0.1
52. んだよね。	1	0.1
53. んだよね↑。	1	0.1
54. んだろう↑。	1	0.1
55. んだろうけど。	1	0.1
56. んだろうと。	1	0.1
57. んだろうなーと。	1	0.1
58. んであると。	1	0.1
59. んでしょう↑。	1	0.1
60. んでしょうかね。	1	0.1
61. んでしょうかね↑。	1	0.1
62. んでしょうけど。	1	0.1
63. んでしょうね↑。	1	0.1
64. んですが。	1	0.1
65. んですか。	1	0.1
66. んですがー。	1	0.1
67. んですけど↑。	1	0.1
68. んですけどー。	1	0.1
69. んですけどね↑。	1	0.1
70. んですけどー。	1	0.1
71. んですけどもね。	1	0.1
72. んですよ。	1	0.1
73. んのかな↑。	1	0.1
合計	403	55.8

(122)

169 (8)で一、えーつと一、「すなわち」と「つまり」が、えーつと一、二つ、拮抗している例が5番の例になるんですけれども、(2){息を吸う}これは、「母、すなわち娘」と答えた人が、31。

170 つ、「母、つまり娘」と答えた人が23 ですね↑。

(講義 A)

文 169 から新たにハンドアウトに記載されている「5番の例」が話題としてとり上げられ、「すなわち」を想定した人が31人であることが提示される。文 170 では、「つまり」を想定した人が23人であることを「ですね↑。」によって、受講者に「確認要求」している。ハンドアウトに数字が記載されているため、受講者は、十分に知識を有しているといえる。

しかし、ノダの「中核的な機能」が、石黒(2003)が示すように、「話し手、聞き手いずれか一方の、既存の不十分な認識が発話時に充足されることを示す」^{vi}ということであれば、聞き手の知識が十分である「確認要求」の「ね」と共起するのは矛盾していると考えられる。しかも、文末のノダの表現形式としては、最も出現率が高いのである。このことは、「んですね。」が、単なる〈ノダ+終助詞「ね」〉ではなく、文法化が進み、新たな意味を獲得していることを予想させる。次の(123)は、「んですね。」によって、新たな話題が開始される例である。

(123)

243 あの一、「朝顔」と「釣瓶とられて」っていうのがあれば、さっきの「野茨」よりは、わかる人多いでしょ↑。

244 これ知ってる人、どんぐらいいる↑。

245 聞いたことあるよっていう人は。

246 (2)あれ↑。

247 でも、こんなかな。

248 あの一、加賀千代女っていう人がいるんですね。

(講義 B)

文 243 から、新たな「多重」の例を挙げ、元ネタを知っている受講者がどのくらいいるのかを文 244～247 で聞き、その数が少ないことを確認している。聞き手である受講者の知識が足りないことは明らかであるため、ノダを用いて話題を導入しているが、「ね」と共起する理由は見当たらない。例えば、次の(124)のように、「ね」のみでは、受講者への「確認要求」となるため、聞き手の知識が不足していることを確認した状況で用いるのは不自然である。

(124)

247 でも、こんなかな。

*248 あの一、加賀千代女っていう人がいますね。

(講義 B 一部改変)

このように、「ね。」だけでは表せないことが「んですね。」で表すことができるということとは、「ね」の「確認要求」の意味が薄れてきており、「んですね。」で新たな意味を表すと考えることができるだろう。文末の「んですね。」は、「んですね。」をともなう情報を既定のものとして、聞き手に理解を押し付ける機能があるといえる。講義の談話において、ノダが「前提」となることが多いのは、節末のノダが多いこととともに、この(123)のような「前提」の「んですね。」の多さによるといえる。

ただし、「んですね。」は、「前提」のみを表すわけではない。次の(125)は、「んですね。」によって、「概略」的に講義の本題が開始されている例である。

(125)

58 えー、で、今日は、あー、短編小説を例に取りながら、えー、小説を読むというのはどのような行為かということについての、概説をするということです。

59 えー、スライド資料の、えー、表のほう、1 ページは、前回のイントロダクションの内容です。

60 えー、で、今日は2 ページ、裏のところからです。

61 それから、テキストの資料は、1 ページというところは、前回のお話の内容が主流になっています。

62 今日は、あの、1ページの終わりのところから、大体2ページのところからということになります。

63 で、村上春樹の短編の基盤になっているのは、まー、ある種の出来事なんですね。

(講義 C1)

文 58 で、この日の講義の大まかな流れが提示され、文 59～62 まで、資料の説明がなされる。文 63 は、「転換型」の接続表現「で」で、実際の講義の本題に入っていくが、先行文に述べられていない新たな情報が、「なんです。」をとめない、「既定」として述べられる。この「村上春樹の短編の基盤になっているのは、まー、ある種の出来事」という情報は、これから始まる話段の「概略」となっており、後続文では、「ある種の出来事」とはどのようなものかについて語られることになる。十分な理解が困難な情報であっても、「なんです。」によって、すでに定まったものとして聞き手に提示することができるようになるため、このような文脈の展開が可能になる。この場合「なんです。」は、後方統括機能を発揮することで、後続文を統括することになる。（「なんです。」が話段の開始に用いられるのは、25 例見られる。）

また、先行文をまとめる「換言」にも、「なんです。」が使用されることがある。次の(126)は、村上春樹の短編小説「納屋を焼く」の引用箇所解説を加える話段である。ここでは、10 文の中に 9 例ノダが使用されており、そのうち、5 例が「なんです。」であるが、それぞれ、統括機能が異なることから、異なる文脈展開の方法をとっている。

(126)

465 7のところの引用を見ていただきたいんですが。

466 で、「納屋を焼く」という短編はですね、あの、やはり「ぼく」という語り手兼主人公が出てくるんですが、「ぼく」が、まー、あの、ある、何ですか、カップルと知り合いになってるんですね。

467 男性と女性なわけです。

468 で、その女の子のほうが、まー、先に「ぼく」の友達だったんだけど、彼氏ができたっていうので、紹介されるわけなんですね。

469 で、その彼氏はですね、納屋を焼くのが趣味だっていうんですね。

470 納屋を焼くのが趣味だ。

- 471 そのへんからやっぱり、これは何かあるなと思うんですね、やっぱり。
- 472 えー、出来事の核なんです。
- 473 ところが、納屋を焼いたかどうか、どこの納屋を焼いたかってのは、よくわからないまま終わってしまいます。
- 474 つまり、出来事の核は隠ぺいされているんですね。

(講義 C1)

文 465 「見ていただきたいんですが。」によって、新たな話題の開始が予告される。文 466、468、469 の「んですね。」で提示された情報は、新たな情報であるが、この情報自体は、後続文理解のための「前提」となっている。文 471 の「んですね。」は、講義者の見解が挿入されている。文 472 のノダは、「んです。」のかたちで現れ、先行文 466～471 を「換言」するかたちでまとめている。文 473 は、逆接型の接続表現「ところが」で、意外な結末を示し、文 474 は、「同列型」の接続表現「つまり」をともない、「んですね。」によって、先行文 465～473 全体を「換言」するかたちで統括している。(「んですね。」が話段の終了部に用いられるのは、24 例見られる。) このように、「んですね。」と一口にいても、話段のどの位置に現れるか、また、どのような情報に付加されているのか、どのような接続表現と共起するのかによって、その統括機能に異同があることがわかる。

「んですね。」は、さまざまな統括機能を有するが、新たな話題の導入、先行文の統括に用いられることを基調としながらも、その文脈環境によって、さまざまな統括機能を発揮することが確認された。特に、「ね。」と「んですね。」の異同は、受講者の知識が十分であるかどうか、また、どのように講義者がとらえているかによることが明らかになった。

5.1.2.2.2. 「んです。」の統括機能

「んですね。」は、話段の開始に 25 例、話段の終了に 24 例出現しており、その差はほとんど見られず、ノダの表現形式による偏りは見られなかった。それに対し、「んです。」は、話段の開始に 4 例、話段の終了に 10 例出現しており、話段の終了に現れやすいことが指摘できる。次の(127)は、3 人称代名詞として「彼」「彼女」が使える相手が限定されていることを述べた後の話段である。

(127)

- 329 で、えー、それを押し進めていくと何が出来るかっていうとですね、もともと近代日本語において、「彼」「彼女」っていう言葉は、まさに、え、「he」とか「she」の翻訳語として、翻訳語として当てられたものなんですよ。
- 330 だから、さかのぼれば、それ以前の「彼」「彼女」というのは、3人称代名詞として使われていたわけではありません。
- 331 ありません。
- 332 明治に入って、「he」や「she」などの、えー、欧米語の3人称代名詞に対応させるものとして当てられたということなんです。
- 333 ですから、その3人称代名詞の使い方にそもそもなじんでいなければ、「彼」も「彼女」もそれとして使うことはできない。
- 334 それが今でも尾を引いてるんじゃないかってことなんです。
-
- 335 で、じゃあ「彼」や「彼女」っていうのは、そもそもどうということなのかっていうことになる、これは次回の「こそあど」に関係します。

(講義 E1)

文 329 は、「転換型」の接続表現「で」によって新たな話題が開始し、「もともと近代日本語において、「彼」「彼女」っていう言葉は、まさに、え、「he」とか「she」の翻訳語として、翻訳語として当てられたものなんですよ。」と、「んですよ。」をともなって「概略」的な情報を提示し、文 330 で、「順接型」の接続表現「だから」で、「さかのぼれば、それ以前の「彼」「彼女」というのは、3人称代名詞として使われていたわけではありません。」と否定のかたちで結論を述べ、文 331 で反復する。文 332 は、文 329 の情報を同語反復的に「再提示」し、文 333 で「順接型」の接続表現「ですから」によって、文 333～334「その3人称代名詞の使い方にそもそもなじんでいなければ、「彼」も「彼女」もそれとして使うことはできない。それが今でも尾を引いてるんじゃないかってことなんです。」と、「3人称代名詞として「彼」「彼女」が使える相手が限定されているのはなぜか」という問いの結論を「んです。」をともなって提示している。文 335 からは、新たな問いが提示されるので、新たな話題の開始と考えてよい。このように、「んです。」は、話段の終了部に現れ、先行文を統括するという文脈展開の方法がみられる。また、話段の開始に現

れる「んです。」4例のうち3例は、次の(128)のように、「概略」となっている⁴⁴。

(128)

342 何か小説とかね、物語っていうと、「こうなったらああなる」っていうふうなパターンてのがありますよね。

343 そういうのを定型というわけですね。

344 物語の定型というのはどうしてもある。

345 で、近代小説というのは、もともと、えー、近代小説っていうのは、それ以前の小説と比べてどういう特徴があるかっていうと、簡単に言うと、隠された私生活の暴露なんです。

(講義 C1)

文 344 までは、文章の定型 (パターン) について述べられ、文 345 からは、「転換型」の接続表現「で」によって、新たに「近代小説の特徴」の話題が提示され、「隠された私生活の暴露なんです。」と、「んです。」をとめない、話段の中心的内容が概略的に述べられている。このように、「んです。」は、話段の開始部・終了部といった出現位置によって、前方・後方いずれかの統括機能を発揮し、話段を統括するという文脈展開の特徴があることがわかった。

5.2. ノダと接続表現の共起関係から見た文脈展開の特徴

5.2.1. ノダと共起する接続表現

5.2.1.1. 先行文との関係を表す接続表現

次の【表 30】は、縦軸をノダと共起する接続表現、横軸をノダの有無として、共起関係の分析を行ったものである。[] は、文中の使用数を示し、それぞれ出現率を示した。さらに、接続表現の有無とノダの有無とに共起関係が認められるかを確認するために χ 二乗検定を行い、有意水準 1% 水準のものに“○”を付した。(検定の方法は 4.2.1 参照) なお、1 文中に複数の接続表現が使用された場合、重複して数えるため、接続表現の合計数と接

⁴⁴ 1例は、「(3)でー、その、实例に当たるものがね、裏にちょっと引いてあるんです。」(講義 B 文 342) と広く存在(「ある」「いる」)にかかわる述語に「んです。」が接続しているもので、これは、話題提示の「前提」となっている。

続表現が使用される総文数とは一致しない。

【表 30】 接続表現とノダとの共起関係

接続表現		出現数		ノダ有		ノダ無		合計		P値		ノダ有		ノダ無		合計		P値	
順接	順当	それで	12[8]	1.94	17[12]	1.15	29[20]	1.38	0.1564	50[20]	8.1	70[15]	4.74	120[35]	5.73	0.0025	○		
		で	22[5]	3.57	30[11]	2.03	52[16]	2.48	0.0387										
	内から	0[0]	0	0[0]	0	0[0]	0	0.3804											
	ですから	10[3]	1.62	18[2]	1.22	28[5]	1.34	0.4652											
きっかけ	そうすると	3[1]	0.49	5[0]	0.34	8[1]	0.38	0.6175											
	そうするとね	1[1]	0.16	0[0]	0	1[1]	0.05	0.1217											
	そこでね	2[2]	0.32	0[0]	0	2[2]	0.1	0.0286											
逆接	反対・単純な反復	でも	15[5]	2.43	32[8]	2.17	47[13]	2.24	0.7094	27[12]	4.38	55[15]	3.72	82[27]	3.92	0.483			
		しかし	5[5]	0.81	12[5]	0.81	17[10]	0.91	0.9961										
	けれども	1[0]	0.16	1[0]	0.07	2[0]	0.1	0.5239											
	意外・へだたり	5[2]	0.81	10[2]	0.68	15[4]	0.72	0.7415											
添加	累加・単純な添加	そして	15[8]	2.43	33[16]	2.23	48[24]	2.29	0.7838	150[55]	24.31	325[118]	22	475[173]	22.68	0.2504			
		で	77[0]	12.48	123[0]	8.33	200[0]	9.55	0.0032										
	序列	8[8]	1.3	17[14]	1.15	25[22]	1.19	0.7797											
	追加	それから	20[11]	3.24	84[30]	5.89	104[41]	4.97	0.0189										
並列	しかも	1[1]	0.16	3[3]	0.2	4[4]	0.19	0.8446											
	あと	14[13]	2.27	33[29]	2.23	47[42]	2.24	0.9609											
	また	13[12]	2.11	27[23]	1.83	40[35]	1.91	0.6708											
もう一つは	2[2]	0.32	5[3]	0.34	7[5]	0.33	0.9586												
対比	対立	それに対して	3[2]	0.49	12[3]	0.81	15[5]	0.72	0.4197	11[10]	1.78	29[14]	1.96	40[24]	1.91	0.7831			
		あるいは	8[8]	1.3	17[11]	1.15	25[19]	1.19	0.7797										
転換	課題	じゃあ	6[4]	0.97	6[3]	0.41	12[7]	0.57	0.1176	106[11]	17.18	126[18]	8.53	232[29]	11.08	9E-09	○		
		で	96[5]	15.56	105[10]	7.11	201[15]	9.6	2E-09										
	では	0[0]	0	8[1]	0.54	8[1]	0.38	0.067											
放任	それでは	2[1]	0.32	7[4]	0.47	9[5]	0.43	0.6329											
	それにしてもですね	2[1]	0.32	0[0]	0	2[1]	0.1	0.0286											
同列	反復	つまり	31[9]	5.02	73[28]	4.94	104[37]	4.97	0.9373	56[29]	9.08	119[66]	8.06	175[95]	8.36	0.4423			
		要するに	6[6]	0.97	5[5]	0.34	11[11]	0.53	0.0673										
		いわば	1[1]	0.16	1[1]	0.07	2[2]	0.1	0.5239										
	簡単に言うと	1[1]	0.16	0[0]	0	1[1]	0.05	0.1217											
	簡単に言うと	1[0]	0.16	0[0]	0	1[0]	0.05	0.1217											
	厳密に言えば	1[1]	0.16	0[0]	0	1[1]	0.05	0.1217											
限定	いずれにしても	2[1]	0.32	3[3]	0.2	5[4]	0.24	0.6049											
	たとえは	13[10]	2.11	37[29]	2.51	50[39]	2.39	0.5864											
補足	根拠付け	というのは	2[0]	0.32	2[0]	0.14	4[0]	0.19	0.3672	21[8]	3.4	16[3]	1.08	37[11]	1.77	0.0002	○		
		なぜならば	1[1]	0.16	0[0]	0	1[1]	0.05	0.1217										
制約	ただ	18[7]	2.92	14[3]	0.95	32[10]	1.53	0.0008											

(P 値は小数第 5 位を四捨五入した。)

ノダの共起する数をもっとも多い接続類型は、「添加型」の 150 例 (24.31%) であり、第 2 位は、「転換型」106 例 (17.18%) である。第 3 位は、「同列型」の 56 例 (9.08%) と、第 2 位の半数となっている。第 4 位は「順接型」の 50 例 (8.1%)、第 5 位は「逆接型」の 27 例 (4.38%)、第 6 位は「補足型」の 21 例 (3.4%)、第 7 位は「対比型」11 例 (1.78%) となっている。しかし、ノダと共起する数が多いからといって、特定の接続タイプの接続表現がノダと共起しやすいということとはできない。ノダが用いられない場合にも、共起する数が多ければ、それは、特定の接続タイプの接続表現がノダと共起しやすいとは言えないためである。本研究では、 χ^2 乗検定によって、ノダの有無と接続表現の有無に独立性があるかを分析した。その結果、有意水準 1% では、「順接型」「転換型」「補足型」の接続タイプの接続表現がノダと共起しやすいという結果が得られた。「順接型」に関しては、有意差の認められる個別の接続表現は見られないので、ここでは、これ以上立ち入らない。

次に、個別の接続表現ごとに、ノダとの共起しやすさを検討する。「転換型」「補足型」

の接続表現を分析する前に、まず、5%水準で有意差が見られた「添加型」の接続表現「18.それから」を分析する。

「添加型」の接続表現「18.それから」にみられる有意差は、ノダが無い場合に接続表現が用いられやすいということを示すものである。そのため、ノダと共起しやすいとは言えず、むしろ、ノダと共起しにくいというべきである。また、文末にノダが現れるのは、9例で、残り11例は、すべて、節末のノダと共起している。節末のノダは、挿入的であることから、接続表現との共起関係が薄いことがある。次の(129)は、2人称代名詞が限定的に用いられること、代わりに親族名、身分名が用いられることが述べられた後、「んですが」を用いて、講義者の講義の進行に言及している例である。

(129)

515 それから、さっきちょっと言い忘れたんですが、「きみ」っていう言葉、使いますか↑。(2)

(講義 E1)

文515は、「添加型」の接続表現「それから」をもちいて、新たに話題を添加しているが、「さっきちょっと言い忘れたんですが、」と、節末のノダによって、「前提」を表している。「んですが」をともなった情報がなくても、新たな話題が添加されたことがわかることから、この情報は、挿入的であるといえる。また、接続助詞「が」自体に「前置き」の機能があるため、ノダを用いる必然性はない⁴⁵。例えば、(129)を「さっきちょっと言い忘れましたが、」とノダをともなわなないかたちで提示したとしても、文脈が損なわれることはない。実際の用例でも、(130)のように、「前置き」にノダが用いられない例がみられる。

(130)

445 (2)か、二つ目は言うまでもないですよ。

446 『吾輩は漱石である』。

447 「猫」だろうという、あの部分だけが、そのまんま引っ張られてきてます。

448 それから、1個飛ばして、これは、ことわざのパクリですけれど、『花よりタンゴ』。

⁴⁵ 「んですが」をともなう情報が「既定」として背景化されるという違いがあるが、文脈展開上、必然となる場合は多くない。(5.1.2.1「節末のノダの表現形式」参照。)

449 本当は「花より団子」ですよね↑。

450 で、これは同音異義語に近いもの。

(講義 B)

(130)は、井上ひさしのパロディの例を挙げる話段の一部であるが、文 448 から、添加型の接続表現「それから」によって、新たな話題『花よりタンゴ』が付加されるが、「これは、ことわざのパクリですけれど、」という「前置き」が、接続助詞「けれど」をともない、挿入されている。このように、ノダを用いることなく、「前置き」が成立する例があることが、「添加型」の接続表現「それから」とノダが共起しにくい原因の一つだと考えられる。

また、「それから」は、単語同士をつなぐことができるが、その延長として、名詞文をつなぐ場合もある。

(131)

208 で、一、なお、長編小説も、あとでまた触れますけれども、『風の歌を聴け』、えー、『風の歌を聴け』『1973年のピンボール』『羊をめぐる冒険』『ダンス・ダンス・ダンス』、これが4部作といわれるんですが、全て1人称の「ぼく」の語りです。

209 それから、あの一、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、えーと、それから『ノルウェーの森』も1人称です。

(講義 C1)

文 208 で、村上春樹の1人称小説を列挙し、文 209 で「添加型」の接続表現「それから」を用いて、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、『ノルウェーの森』を付加している。単に、作品を列挙するだけなので、ノダを用いると、後続文に結論を求めることになるため、不自然である。

以上、ノダと共起しやすい接続類型は「順接型」「転換型」「補足型」であり、「添加型」の接続表現「それから」とは共起しにくいことが明らかになった。

5.2.1.2. 後続文との関係を表す接続表現

次に、ノダ文の後続文の接続表現との共起関係を分析する。次の【表 31】は、接続表現

とノダの後続文との共起関係を示したものである。

【表 31】 接続表現とノダの後続文との共起関係

接続表現		出現数		ノダ有		ノダ無		合計		P値		ノダ有		ノダ無		合計		P値			
順接	順当	それで	7[5]	1.13	22[14]	1.49	29[20]	1.38	0.8847	32[10]	5.19	88[25]	5.96	120[35]	5.73	0.1882					
		で	0[0]	0	2[1]	0.14	2[2]	0.1	0.518												
	それから	15[3]	2.43	37[3]	2.51	52[6]	2.48	0.565													
	ですから	0[0]	0	0[0]	0	0[0]	0	-													
きっかけ	そうすると	7[1]	1.13	21[1]	1.42	28[5]	1.34	0.8077													
	そうするとね	2[0]	0.32	6[1]	0.41	8[1]	0.38	0.7814													
逆接	反対・単純な反復	でも	8[1]	0.97	41[11]	2.78	47[13]	2.24	0.0354	16[5]	2.59	68[23]	4.6	84[28]	4.01	0.7602					
		しかし	4[3]	0.65	13[6]	0.88	17[10]	0.91	0.8941												
	けれども	1[0]	0.16	1[0]	0.07	2[0]	0.1	0.5239													
	背反・くいちがいがい	0[0]	0	1[0]	0.07	1[0]	0.05	0.518													
累加・単純な添加	意外・べだたり	5[1]	0.81	10[3]	0.68	15[4]	0.72	0.4754													
	ところが	5[1]	0.81	10[3]	0.68	15[4]	0.72	0.4754													
添加	追加	そして	8[5]	1.3	40[14]	2.71	48[24]	2.29	0.1145	99[30]	16.05	376[143]	25.5	475[173]	22.68	0.5703					
		で	57[0]	9.24	143[0]	9.68	200[0]	9.55	0.6013												
	まず	6[5]	0.97	19[16]	1.29	25[22]	1.19	0.6294													
	それから	13[5]	2.11	91[33]	6.16	104[41]	4.97	0.0002													
並列	しかも	0[0]	0	4[4]	0.27	4[4]	0.19	0.1957													
	あと	6[6]	0.97	41[30]	2.78	47[42]	2.24	0.0427													
対比	対立	また	8[8]	1.3	32[25]	2.17	40[35]	1.91	0.251												
		もう一つは	1[1]	0.16	8[4]	0.41	7[5]	0.33	0.3775												
転換	課題	それに対して	3[1]	0.49	12[4]	0.81	15[5]	0.72	0.4197	6[4]	0.97	34[20]	2.3	40[24]	1.91	0.0937					
		あるいは	3[3]	0.49	22[15]	1.49	25[19]	1.19	0.0667												
	じゃあ	4[4]	0.65	8[2]	0.54	12[7]	0.57	0.6148													
	で	45[3]	7.29	156[9]	10.6	201[15]	9.6	0.1082													
放任	では	1[1]	0.16	7[0]	0.47	8[1]	0.38	0.3775													
	それでは	1[0]	0.16	8[4]	0.54	9[5]	0.43	0.2916													
同列	回復	それにしては	0[0]	0	2[1]	0.14	2[1]	0.1	0.518	31[15]	5.02	144[80]	9.75	175[95]	8.36	0.1901					
		つまり	21[8]	3.4	83[28]	5.62	104[37]	4.97	0.0838												
	要するに	1[1]	0.16	10[8]	0.68	11[11]	0.53	0.2261													
	いわば	1[1]	0.16	1[1]	0.07	2[2]	0.1	0.5239													
限定	簡単に言うと	0[0]	0	1[1]	0.07	1[1]	0.05	0.518													
	簡単に言うと	0[0]	0	1[0]	0.07	1[0]	0.05	0.518													
補足	根拠付け	厳密に言えば	0[0]	0	1[1]	0.07	1[1]	0.05	0.518												
		いずれにしても	1[1]	0.16	4[2]	0.27	5[4]	0.24	0.8446												
補足	制約	たとえば	7[4]	1.13	43[33]	2.91	50[39]	2.39	0.0267												
		というのは	1[0]	0.16	3[0]	0.2	4[0]	0.19	0.8446												
補足	制約	なぜならば	1[1]	0.16	0[0]	0	1[1]	0.05	0.1217												
		ただ	3[1]	0.49	29[7]	1.96	32[10]	1.53	0.0284												

(P値は小数第5位を四捨五入した。)

ノダの後続文と共起する数をもっとも多い接続類型は、「添加型」の99例(16.05%)であり、第2位は「転換型」51例(8.27%)と、第1位の約半数となっている。第3位は、「順接型」の32例(5.19%)、第4位は、「同列型」の31例(5.02%)、第5位は、「逆接型」の16例(2.59%)、第6位は「補足型」の10例(1.62%)、第7位は、「対比型」の6例(0.97%)となっている。ノダ文との共起関係と比較すると、全体的に共起する数が減少しているが、その傾向はほぼ一致している。順位が異なるのは、第5位の「逆接型」と、第6位の「補足型」が逆転している点である。「補足型」の接続類型がノダと共起しやすいことを考えると、順位が下がったことは理にかなっているといえる。

次に、ノダの後続文と共起しやすい接続類型であるが、どの接続類型も有意差は見られなかった。個別の接続表現に関しては、「添加型」の接続表現「18.それから」が、ノダの後続文と共起しにくいということが明らかになった。また、有意水準5%では、「逆接型」の接続表現「10.でも」がノダと共起しにくく、「順接型」の接続表現「5.ですから」、「逆接型」

の接続表現「10.でも」がノダの後続文と共起しやすいといえる。

ここでは、ノダの後続文と共起しにくい接続表現を検討する。まず、「逆接型」の接続表現「10.でも」であるが、接続表現の統括機能の先行研究から、逆接の場合、後件の統括力が強いことが指摘されており、相対的に統括力の強い叙述表現であるノダが前件に来ることが少ないことが原因であると考えられる。実際の用例においても、文末のノダの後続文の文頭に「でも」が共起する例は1例も見られなかった。

次に、「添加型」の接続表現「18.それから」がノダの後続文と共起しない理由は、5.2.1.1でも述べたが、事実の列挙に、「それから」が用いられることが多いためだと考えられる。前述の(131)のように、事実の叙述が列挙される際に、「それから」が用いられる傾向があるため、ノダの後続文とも共起しにくいと考えられる。

以上、ノダの後続文と共起しやすい接続表現を分析したが、有意水準1%では、いずれの接続表現とも共起関係が見られず、有意水準5%で、「順接型」の接続表現「5.ですから」が共起しやすいことが明らかになった。

これまで、ノダを挟んだ前後の接続表現との共起関係を分析した。次に、個別の接続表現がどのような文脈展開となるのかを分析する。

5.2.2. 接続表現「で」と共起するノダの文脈展開の特徴

接続表現「で」は、「順接型」「添加型」「転換型」の接続類型となるが、「順接型」を除いて、ノダと共起しやすいことが明らかになった。ただ、「順接型」の「で」も、5%水準では有意差が認められるので、比較的ノダと共起しやすいといえる。その意味で、「で、ノダ」という形は、講義の談話のノダの基調となっているといえる。

「(転換型) で+ノダ」は、話段の開始部に現れ、「話題提示」「課題提示」となり、後続文に統括されることを予測させる「後方被統括機能」を発揮する。また、話段の開始部には当該の話段の理解のために必要な「前提」情報が必要なことが多く、その場合、「(添加型) で+ノダ」で、背景化した情報を提示することで、後続文の理解を促すことがある。次の

(132)は、「(転換型) で+ノダ+カ」によって、「課題提示」し、話段を開始し当該話段の理解のために必要な情報を「(添加型) で+ノダ」によって「前提」として提示している。

(132)

- 241 で、じゃあ、なんで、その、「ていうか」というのが、(3)不愉快に感じられるんだろうか、、ということ、えっとー、皆さんのー、まあ、用例を見ながら、えーっと、考えていきたいと思います。
- 242 で、あのー、表 [ひょう] の下の用例を見てほしいんですけども、1 番。
- 243 これは、あのー、KA さんのものを改作したんですが、こういうのは、あんまりー、腹、腹が立たないと思うんですね↑。
- 244 「おいしそうだね。」
- 245 「おいそうっていうか、体によさそうだよね。」
- 246 で、あのー、「おいしそうっていうか、」っていうのは、あの、実は、このー、まあ、最初のを A さん、あとのを B さんの発話と考えると、B さんっていうのは、おいしそうとは思ってないようなんですね↑。
- 247 でも、「おいそうじゃないよ。」ってはつきり言うんじゃないくて、「おいそうっていうか、体によさそうだよね。」って、軽く言い換えて、その、相手の言葉を否定しないようにしてますね↑。

(講義 A)

文 241 から新たな話段が「転換型」の接続表現「で」と「じゃあ」の二重使用によって開始し、「なんで、その、『ていうか』というのが、(3)不愉快に感じられるんだろうか」と、節末の「んだろうか」と共起することで、「課題提示」となっている。文 242 は、「添加型」の接続表現「で」と「んですけども」と共起することで、当該話段の理解に必要な情報を「前提」として提示している。ノダを用いることで、「見てください」に通じる受講者への行動要求表現となっている。文 243 は、文 242 と連鎖型の接続関係で「んですが」によって、文 242 を統括しながら、主節「こういうのは、あんまりー、腹、腹が立たないと思うんですね↑。」に統括されるという文脈展開となっている。主節の「んですね↑。」は、後方照応の指示表現「こういうのは」とともに、「概略」的に、後続文 243 以降を統括する「後方統括機能」を発揮する。文 244～245 でプリントを読み上げ、文 246 で「添加型」の接続表現「で」と「んですね↑。」が共起し、「既定」として提示することで、後続文 247 の理解に必要な「前提」となっている。文 247 は逆接の接続表現「でも」と「ん

じゃなくて」によって、「既定」として、主節の理解に必要な「前提」情報を提示している。

このように、講義の談話には、話段の開始部に「(転換型) で+ノダ (んだろうか・のか等) で「課題導入」し、当該話段の理解に必要な「前提」情報を「添加型で+ノダ (んですが・んですね等)」によって、「既定」として提示していくという文脈展開の特徴がみられる。

5.2.3. 「補足型」の接続表現「ただ」と共起するノダの文脈展開の特徴

「補足型」の接続類型で、ノダと共起しやすい接続表現は、「36. ただ」である。補足型は、先行文に対して、情報を補足するという関係であるが、「ただ、～ノダ」においては、先行文との関係だけでなく、後続文を理解するために必要な情報を挿入するという関係となっている。次の(133)は、村上春樹の短編小説「象の消滅」のあらすじを述べる話段である。

(133)

- 71 「象の消滅」という短編は、これはあの一、えーと、町で、えー、町はずれに、ぞ、象舎があつてですね、そこで象を飼ってたわけですが、その象が、飼育人と一緒に、ある日、突然消えてしまったという話なんですね。
- 72 でー、それがすごく話題になるけれども、しばらくすると、みんな忘れてしまう。
- 73 ただ、その象が消滅するところを目撃していたのが「ぼく」なんですね。
- 74 で、「ぼく」が見ていると、えー、はっきりとそれとわかるわけじゃないが、どうも、象がだんだん縮んでいったようであると。
- 75 つまり、小さくなって行って消滅してしまったようであるっていうことを、「ぼく」が彼女と語り合うという話です。

(講義 C1)

文 71 のノダは、後続文の内容を「概略」的に先取りして述べており、後方統括機能を發揮する。文 72 は「添加型」の接続表現「でー」をともない、情報を付加し、文 73 は「補足型」の接続表現「ただ」によって、ノダ（「んですね」）をともない「その象が消滅するところを目撃していたのが「ぼく」」だという情報が補足される。文 74 は「添加型」の接

続表現「で」で、情報が付加されるが、これは、文 73 を前提として提示された情報である。このように、「ただ、～んですね。」は、先行文の情報を補いながら、後続文の前提となるという文脈展開となる。次の (138) は、接続表現「つまり」と「要するに」の相違について明する話段の一部であるが、(134)と同様、「ただ、～んですね。」によって、先行文を補足しながら、後続文の前提となっている例である。

(135)

- 180 で、基本的にですけれども、基本的に、その、「つまり」も「要するに」も、「つまり」っていうのは、さっき言いましたように、もともとが「詰まる」という言葉ですので、短くするという、い、意味がありますし、また、「要するに」は、要点だけ取り出してくるという意味で、短くするという意味が両方あります。
- 181 ただ、実際に、用例を見ていくと、「要するに」というのは、ほとんど必ずといっていいほど、短くする用例ばかりで、「つまり」のほうは、比較的長くても、言い換えられるんですね↑。
- 182 ですから、9番のほうは、「つまり」のほうが圧倒的に多く出てくるだろうと、私は予測していましたが、ところが、それほど、もちろん、「つまり」のほうが多いわけですが、それほど変わりなかったということですね。

(講義 A)

文 181 は、「補足型」の接続表現「ただ」で、「実際に、用例を見ていくと、「要するに」というのは、ほとんど必ずといっていいほど、短くする用例ばかりで、「つまり」のほうは、比較的長くても、言い換えられる」という情報を「んですね↑。」をともなって補足している。この「んですね↑。」は、「前提」となり、文 182 は、文 181 を根拠に、順接の接続表現「ですから」で、「9番のほうは、「つまり」のほうが圧倒的に多く出てくるだろうと、私は予測していましたが」と、論理的に予測している。ノダの後続文に「順接型」の接続表現「ですから」が共起しやすいことを述べたが、このように、ノダをともなった文が、後続文の「前提」となっていることによる。詳しくは、5.2.5 に述べる。

以上、「ただ、～んですね。」は、先行文に対する補足情報というだけでなく、後続文の理解に必要な「前提」となるという文脈展開の特徴があることが明らかになった。

5.2.4. 「転換型」の接続表現と共起するノダの文脈展開の特徴

また、5%水準で有意差の見られる共起関係に、「転換型」の接続関係の「25.それにしてもですね」がある。用例数は2例と少ないが、すべて、先行文に関連する補足情報を挿入する際に用いられる。次の(139)は、講義者が受講者から集めたリアクションペーパーを読み上げている話段の一部である。

(136)

- 24 それから、「秋学期も、目からうろこな面白いお話、期待しています。」という。
- 25 「目からうろこ」ですか。
- 26 前期中に、えー、うろこが何枚もはげた人が果たしていたんでしょうか、わかりません。
- 27 それにしてもですね、関係ないんですが、「目からうろこ」って、もともと聖書の中の文句なんですよね。
- 28 大体日本で、目にうろこがついてるなんていう発想をする人は、誰もいないでしょう。
- 29 にもかかわらず、何でこんなによく使われるんでしょうね。
- 30 目からごそっとうろこが落ちたなんて、もう、ほとんど見えない状態じゃなかったのかと思うんですけど。
- 31 まー、こんなふうなのもありました。

(講義 E1)

文24～26は、受講生のリアクションペーパーを読み上げ、それに講義者のコメントを加えており、文27で、「転換型」の接続表現「それにしてもですね」によって、新たな話題がノダをともなって開始する。「関係ないんですが、」という前置きに示される通り、この話題は、本筋から逸れた、挿話である。「目からうろこ」って、もともと聖書の中の文句」だという情報が「既定」であることを、ノダによって示すことで、後続文の「前提」となっている。

次の(137)は、日本語に1人称代名詞が豊富であるが、位相による区別があることを述べた後の話段である。

(137)

- 278 あー、それにしてもですね、男子学生に文章を書かせると、1人称代名詞は「自分」なんですよね。
- 279 あらたまった時に、「自分」なんですよ。
- 280 えー、君たちも使ってる↑、「自分は」、「自分は」って。(2)
- 281 どうもぼくは気になるんですけども、まー、それだって、選択した結果、「おれ」じゃちょっと乱暴だし、「ぼく」じゃ何かひ弱っぽいし、「私」って言うにはそれほど違和感はないかって気がするんです。

(講義 E1)

文 278 は「転換型」の接続表現「それにしてもですね」によって、新たな話題が開始するが、(136)と同様、「男子学生に文章を書かせると、1人称代名詞は「自分」」だという情報を、ノダをともなって「前提」として提示している。いずれのノダの表現形式も「んですよね。」である点が特徴といえるだろう。

以上、「それにしてもですね、〈前提情報〉んですよね。」というかたちで、先行話段に関連する話段を挿入するという文脈展開の方法を確認した。

5.2.5. 「順接型」の接続表現「ですから」と共起するノダの後続文の文脈展開の特徴

有意水準 5%では、ノダの後続文と「順接型」の接続表現「ですから」との共起関係が認められた。「ですから」の前件は、ノダによって先行文群が統括された話段レベルの大規模なものであり、後件で、その帰結を表すことになる。次の(138)は、大きく、文 229～249 まで、「出来事から物語へ」というテーマで、スライドを用いて、その過程を説明する話段である。

(138)

- 229 さて、えーと、スライド資料の 16 というところを見て下さい。
- 230 中段の左側です。
- 231 「出来事から物語へ」と。
- 232 えー、あ、これ、これね、パソコン直ってくんないかね、
- 233 叩いたって駄目だね。

- 234 あの、次回までにどうにかしてきますけど。
- 235 このスライド資料はですね、あの、一番最後の状態でプリントされてるんですね。
- 236 実は、その、真ん中に「物語」とありますね、
- 237 これは、一番最後に物語になるんであって、最初はそこに「出来事」という言葉が入っていたんです。
- 238 まー、あの、鉛筆でそこにちょっと書いて下さい。
- 239 「出来事」から矢印を延ばして、「物語」っていうふうにして下さい。
- 240 最初は出来事であったものが、最終的に物語になるってことなんですね。
- 241 最初は、あー、出来事であったものが、最終的に物語になる。
-
- 242 どうすれば物語になっていくのかっていうと、まず、あの、出来事は、それ自体で一つの話なわけなんで、話になるわけなんですね。
- 243 で、その出来事というものは、しかし、話になって、物語になるためには、一種、ひ、一つの語り口を得なければなりません。
- 244 出来事が、ある種の語り口というのを、えー、獲得して物語になっていくわけですが、その場合の物語は、あー、必ずしも、一つの話だけで完結するわけではありませぬ。
- 245 えー、いくつもの挿話がそこに付け加えられていきます。
- 246 挿話1、挿話2、挿話3、挿話4というふうにですね。
- 247 で、これは非常に単純化した図式なんですけれども、要するに、単なる出来事は、加工されて、えー、創造されて、えー、構造化されて、物語になっていくんだと。
- 248 それが小説の物語を形成するのだということなんです。
- 249 えー、ものすごく単純化して考えると、こういうことになるだろうと思うんですね。
-
- 250 作家の創作の現場で、こういうふうなプロセスが、必ずしも行われるとはいえないかもしれません。
- 251 ある作家は、いきなり書き始めるかもしれません。
- 252 しかし、他の作家は、綿密にプランを立てて、えー、いろいろなエピソードというものをどのように組み合わせ、どのような語り口で語るかっていうふうなことを、あの、よく考えた上で書くかもしれません。
- 253 で、そういうふうに、創造のタイプは違うってことはあるかもしれませんが、あー、
-

しかし、どこかに含んだ作品、連作なんですね。

-
- 254 で、私たちもですね、小説だけじゃないんですよ、あの、私たちがレポートを書いたり、論文を書いたり、あるいはスピーチをしたりですね、する場合にも、何かメッセージの中核となるものがあるんですね。
- 255 メッセージの核というものがあるはず。
- 256 そのメッセージの核をそのまま出せばいいかっていうと、そうじゃないんですよ、やっぱり。
- 257 で、まー、あの、「太陽の下に新しいものは何も無い」っていうことわざもあるぐらいで、みんな似たような人間なんですね、ある意味では。
- 258 ある意味では、みんな違ってるんだけど、何かこう語らせるとか、発言させると、なかなかその、人と違った意見ってのは出てこないことが多いわけですよ。
- 259 で、その中で、他人と違って、えー、自分の発言を際立たせて、みえ、見せるという場合には、その、メッセージの内容を加工していかなきゃならないんですよ。
- 260 まー、あの一、素朴な会話であるとか、まー、素朴なスピーチっていうのもいいんですけども、しかし、自己主張をしなければならないようなときには、単にそれだけでは足りないのだと考えなければならないと。
- 261 そういう文体や語り口というのを考えていかなきゃならない。
-
- 262 だから、小説だけの問題ではないんですが、小説というのは、そういう付加価値の固まりなわけなんですね。
-
- 263 ですから、皆さんは小説を読んで、まー、ま、小説の読み方ってそれだけじゃないんですけど、小説を読んで、是非、自分の文章や語り口などについても、いろいろな示唆を受けていただきたいなというふうに思います。

(講義 C1)

文 254～262 は、小説を離れ、受講者の実生活でも「文体や語り口を考えなければいけない」という話段が挿入される。文 263 の順接型の接続表現「だから」は、「小説だけの問題ではないんですが、」の部分は、文 254～262 の話段に対する帰結、そして、「小説というのは、そういう付加価値の固まりなわけなんですね。」の部分は、文 229～249 の話段に対する「帰結」を、ノダをともなって提示している。文 264 の「順接型」の接続表現「ですから」は、文段 229～263 の帰結として、「皆さんは小説を読んで、まー、ま、小説の読

み方ってそれだけじゃないんですけど、小説を読んで、是非、自分の文章や語り口などについても、いろいろな示唆を受けていただきたいなというふうに思います。」と、述べることで話段を統括している。このように、「～ノダ。ですから、～。」の「～ノダ」部は、挿入された関連する話段（話段 254～263）を含めた連話段（話段 229～262）を統括しており、「ですから」は、この連話段に対する帰結となるという文脈展開の特徴が認められる。

次の(139)は、村上春樹の「土の中の彼女の小さな犬」のあらすじを説明している話段の一部であるが、(138)と同様に、「～ノダ。ですから、～。」の「～ノダ部」が、挿入された関連する話段を含めた連話段を統括している例である。

(139)

330 で、ただ、村上春樹の、特に初期の短編は、そう、皆、大体そうなんですけども、いい雰囲気になりそうだなと思ったら、まず、そうなるってことはないんですね。

331 そのところが特徴的だろうと思うんですけど。

332 ここでも、この若い女と「ぼく」との間には、会話以上の関係というのは生じません。

333 すごくそういうところは、あっさりしてるというかですね。

334 で、まー、村上春樹の作風もだんだん変わっていきますけれども、それから、長編と、たん、短編とでは違うところもあるんですが、こういうふうに本質的な関係を、まー、何が本質的かってのは、あの、問題もありますけれども、えー、深い関係というものに、なかなかない。

335 どこか、人と人との間に距離がある。

336 まー、距離があるといっても、冷たく突き放しているとは限らないわけなんですけれども、この場合もそうではないと思うんですが、完全に一体化、融合していかないと。

337 何か小説とかね、物語っていうと、「こうなったらああなる」っていうふうなパターンてのがありますよね。

338 そういうのを定型というわけですね。

- 339 物語の定型というのはどうしてもある。
-
- 340 で、近代小説というのは、もともと、えー、近代小説っていうのは、それ以前の小説と比べてどういう特徴があるかっていうと、簡単に言うと、隠された私生活の暴露なんです。
- 341 秘められた私生活の暴露というものをのぞき見するというのが、近代小説の、物語としてのテーマの代表なわけなんですね。
- 342 で、これはあの、またいずれどっかで、またいずれどっかでって言っていると、あの、いつまでもしゃべらないかもしれないんで、それだけちょっと話してみますと、あの、えーと、近代においてですね、あの、近代小説というのが発祥したのはイギリスなわけなんですけれども、イギリスで最初に現れた近代小説の形態というのは書簡体小説だったんですね。
- 343 手紙の形だったわけです。
- 344 えー、で、手紙っていうのは、今も昔も、あのー、宛名人以外の者が読んではいけないと。
- 345 親書、かい親書の秘密というのがあるわけで、えー、そこには他人に明かすことのできない秘密が書かれてる。
- 346 で、そういう秘密なものを、小説の形で、えー、まー、虚構とわかかっていても読むということに、まー、楽しみを感じるっていうのが、近代小説の最初のパターンだったんですね。
- 347 まー、あの、サムエル・リチャードソンっていうイギリスの小説家が、この近代小説の祖といわれるんですけれども、で、その代表作は、「パミラ」とか、「クラリッサ」という作品で、パミラもクラリッサも、これ、若い女性の名前なんですね。
- 348 で、特にクラリッサというのは、あの、ひ、ひどくてというか、まー、大傑作といわれているんですけど、内容はものすごく悲惨なものであって、クラリッサという良家の令嬢が、悪い男にだまされて、えー、誘拐されて、薬を飲まされてレイプされて、最後は自殺すると。
- 349 で、まー、その悪いことしたほうの男も、まー、報復を受けるんですけれども、そんな話なんですよね、結局。
- 350 で、もちろん、んー、あの、さっき言ったように、あらすじにしてみると、身もふたもないんですけれども、その回りにいろんな要素があるんですが、本当に骨格

のところでは、あの、近代小説っていうのは、隠された私生活の暴露ということ、まー、これをいわば餌として読者をおびき寄せて、そこに、まー、何らかのメッセージや芸術性というものを盛り込んでいくっていう、まー、そういうパターンとして始まったわけなんですね。

351 まー、あの一、近代小説っていういろいろありますから、そんなものだけじゃないことはおわかりと思いますけれども、まー、それが定型なわけですよ。

352 パターンなんですね。

353 ですから、こういう雨で閉ざされたホテルに男と女が出会うと、あとで何が起こるかとか、そういうことっていうのは、何となく皆さんも期待するでしょ。

(講義 C1)

文 330～336 まで、「村上春樹の小説における人間関係の特徴」について説明し、文 337 から、「物語の定型 (パターン)」についての話段が開始する。このとき、「土の中の彼女の小さな犬」とは、関係のない話題へと展開している。さらに、文 340 から、「近代小説の定型 (パターン)」へと話題が限定され、文 352 「パターンなんですね。」のノダによって、先行文 337～351 を統括している。文 352 の「ですから」は、ノダで統括された文 337～351 を根拠としているが、話題は、文 330～336 の「土の中の彼女の小さな犬」に戻っている。そのため、文 337～352 の話段は、根拠として挿入された話段であると考えられる。

「～ノダ。ですから、～。」のノダ部は、根拠の話段を統括したうえで、その情報を根拠とし、「ですから」によって、帰結を述べるという文脈展開となっている。

5.3. 講義の談話に現れるノダの文脈展開の特徴のまとめ

講義の談話に現れるノダは、総文数 2092 文中、722 例 (34.5%) であり、節末に現れる例が 319 例 (44.2%)、文末に現れる例が 403 例 (55.8%) であり、節末にも、ノダが用いられることが特徴である。

節末のノダの表現形式は、ノダに接続助詞「が」「ケド」が下接した「んですが」「んですケド」が 214 例と最も多く、「前置き」として機能することが多い。特に、「転換型」の接続表現「で」と、「たい」「てほしい」と共起した〈で、(～たい／てほしい) なんです (が／ケド)〉は、講義者の行動予告、または、受講者への行動要求のかたちで、講義の進行に言及することで、新たな話段を開始する文脈展開となる。

また、節末の「のか」は、ノダによる統括機能の観点から、「①話段の課題設定に言及するもの」と、「②講義者の疑問点を挿入するもの」に分類でき、情報を挿入する「②講義者の疑問点を挿入するもの」は、「講義者の情報の蓋然性を明示する」「のかな↑」に類似する。節末のノダは、基本的に主節に統括されることから、後方被統括機能を発揮する「前提」となることが多いことが確認された。

次に、文末のノダの表現形式は、出現率第1位が、「1. んですね。」97例(13.4%)、第2位は「2. んです。」64例(8.9%)、第3位は、「3. んですね↑。」47例(6.5%)となっており、「の です。」という言い切りのかたちよりも、「ノダ+終助詞ね」のほうが出現数が多い。「んですね。」は、話段の開始に25例、話段の終了に24例出現しており、ノダの表現形式による統括機能の差は、ほとんど見られない。それに対し、「んです。」は、話段の開始に4例、話段の終了に10例出現しており、話段の終了に現れ、前方統括機能を発揮し、話段を統括するという文脈展開を担う割合が高いという特徴がある。

次に、ノダ文と接続表現との共起関係であるが、 χ^2 二乗検定により、有意差が認められたのは、「順接型」「転換型」「補足型」の接続類型であり、個別の接続表現では「転換型」が「で」、「補足型」の接続表現が「ただ」がある。「で、～ノカ」は、話段の開始に現れ「課題提示」し、後続文に「解答」を求めるといった文脈展開となり、「ただ、～んですね。」は、先行文に対する補足情報というだけでなく、後続文の理解に必要な「前提」となるという文脈展開となる。

また、ノダの後続文と共起しやすい接続表現は、「順接型」の「ですから」である。「～ノダ。ですから、～。」のノダ部は、根拠の話段を統括したうえで、その情報を根拠とし、「ですから」によって、帰結を述べるという文脈展開となっている。

ノダが「転換型」「補足型」と共起しやすいということは、新たな話段の開始に用いられやすいことを示している。ノダの統括機能の観点からみると、話段の開始で用いられるノダは、後続文に、補足情報を求めたり（「後方統括機能」）、帰結を求めたりする（「後方被統括機能」）という機能が認められる。その点で、単純に、ノダが付された当該文のみの実情を表すということではないと考えられる。

第6章 文章と談話における接続表現とノダによる展開的構造の比較

本研究は、複雑な情報を効率良く伝達することを目的としているという点で共通している「新書の文章」と「講義の談話」を分析対象として、ノダが文章・談話の成立にどのように寄与しているのかを分析するものである。それぞれの分析の詳細は、第4章、第5章に述べたが、ここでは、特に、異同を中心に論を進める。

本章では、より文章的な文体で用いられるノダと、より談話的な文体で用いられるンダとの異同を分析することで、「のダ」と「んダ」とが単に文体的なバリエーションとして存在するのではなく、「段」および、「文章・談話」の成立にかかわる統括機能に違いが見られることを明らかにする。

6.1. 新書の文章と講義の談話における「ノダ」の表現形式による異同

新書の文章に現れる「のダ」と講義の談話に現れる「んダ」は、さまざまな表現形式となる。まず、「ノダ」がどのような表現形式で現れるかを、節末と文末とに分類した上で分析する。

6.1.1. 節末の表現形式の比較

新書の文章6編におけるノダを含む文の総数は1101例で、そのうち節末に用いられるノダは151例(13.7%)であった。それに対し、講義の談話4編に用いられるノダは722例で、節末に用いられるノダは319例(44.2%)と、出現率に大きな差が見られた。また、表現形式も新書の文章では27種であったのに対し、講義の談話では78種であり、談話の表現形式の多様さがうかがえる。ただし、新書の文章においても、講義の談話においても、出現する表現形式の出現比率には偏りがあり、必ずしも、さまざまな表現形式が混在して用いられているとはいえない。

新書の文章は「のか」(30例)が最も多く、「のだが」(26例)、「のだから」(25例)と続く。特に「か」を含む表現形式は、「のか」の他に、「のかと」(2例)「のであろうか」(2例)「のだろうか」(1例)「のだろうかという」(1例)がある。これらは、(140)のように新たな文段を開始する「課題導入」(佐久間1994)の中心文の形態的指標となっていること

が指摘できる。

(140)

2391 化学的カタストロフィー—死の世界—

2392 第4章も終わりに近づいた。

2393 二一世紀初頭においてわれわれはどこまで強磁場を作り得たのかを復習しておく。

2394 非破壊の限界は約八〇テスラだが、伊達マグネットが改良されてもまあ一〇〇テスラが限度だろう。

2395 そして磁場濃縮法で破壊型なら五〇〇テスラ、これが将来改良されても一〇〇〇テスラを越えることはないだろう。

〔『極限』〕

ここでは、文 2393 「二一世紀初頭においてわれわれはどこまで強磁場を作り得たのかを復習しておく」が、後続文 2394 以降の文段の「話題提示」の中心文となり、後続文に統括されることを予測させる「後方被統括機能」を発揮していることを述べるにとどめる。

「のか」のように「後方被統括機能」を発揮するのは、「のだが」「のだから」も同様であるが、これらは「情報の背景化」を主としているという点で「のか」とは異なる。これは、主節の理解に必要な「前提」情報となるだけでなく、田野村（1990:34）のいう「既定性」によって、それに関して疑問をさしはさむことができないように話題が展開する。次の(141)は、「のだが」によって、当該の節が「既定」であることが示されることで、そのことについて疑問を挟むことができなくなっている例である。

(141)

1412 対向アンビル

1413 プリッジマン型ピストン・シリンダーは、その後材料に最高の圧縮強度を持つタングステンカーバイトを利用することで四万～五万気圧まで使えるようになったが、それ以上は無理である。

1414 これに対してプリッジマンは全く新しい方法を考えた。

1415 それが図3, 2に示されている対向アンビル型と呼ばれるもので、図のような断面を持つ。

- 1416 中央部に厚さ一ミリメートル以下の薄片試料がある。
- 1417 これを上下から押すのだが、圧力が横に逃げないように、そして試料に均一な力が加わるようにガスケットと呼ばれるものでぐるりと囲む。
- 1418 ガスケットの材料、デザインが均質な力をかけるのにきわめて重要で、特殊な鉱物、葉蝨石、場合によっては白金リングなどが用いられる。
- 1419 そして上下からの押しが曲がったりしないよう、細心の注意が要る。
- 1420 押し棒の材料は前述のタングステンカーバイトで、その焼結体は割れやすいのでまわりをスチールのわくで保護する。
- 1421 加圧は油圧プレスで精密に行われる。
-
- 1422 この装置はドリッカマー等によってさらに改良発展し、今日では六〇万気圧くらいまでの実験が可能となっている。
- 1423 ピストン・シリンダー方式の約一〇倍、すばらしい進歩だ。

〔『極限』〕

文 1414 の「新しい方法」について、文 1417 「これを上下から押すのだが」と「のだが」節として提示し「既定」であることを示すことで、情報が背景化する。そのため、「どうしてこれを上下から押すのか」などといった疑問を読み手に生じさせることはない。また、この「のだが」節の情報は、後続する主節の「圧力が横に逃げないように、そして試料に均一な力が加わるようにガスケットと呼ばれるものでぐるりと囲む」だけでなく、文 1418～1421 の「新しい方法の具体的な説明」の内容を理解するための「前提」となっており、それ自体が後続文を統括することはない。これらの具体的な説明は、後続文 1423 「ピストン・シリンダー方式の約一〇倍、すばらしい進歩だ。」という評価の中心文によって統括されることで一つの文段が成立することになる。

上記の(141)のように、「のだが」節は、ノダがもつ「既定性」により、情報が背景化することで、「後方被統括機能」を発揮すると考えられる。「のだから」も、当該の節が「後方被統括機能」を発揮するという点で「のだが」と共通する。ただし、後方被統括機能の範囲は、主節に限定され、「のだが」と比較して狭い傾向があるといえる。

以上、新書の文章におけるノダの節末の表現形式による特徴は、①文末のノダに比べ、出現数が非常に少ないこと、②「のか」が最も出現率が高く、「のだが」「のだから」と続くが、その出現率に大きな差は認められないということである。

それに対して、講義の談話に見られるノダの節末の表現形式は、「んですが」「んですけど」がともに 59 例 (8.2%) と最も高い出現率となっている。「ノダ+ガ・ケド」のバリエーションを含めると 214 例 (29.6%) と非常に多く出現していることがわかる。一方、新書の文章で最も出現率の高かった「のか」は 19 例 (2.6%) にとどまり、「ノダ+カ」のバリエーションを合わせても 25 例 (3.5%) であり、その出現率に大きな差があることがわかる。

講義の談話に「ノダ+ガ・ケド」が多い理由の一つに、新たな話題の開始のために必要な「前提」が複数提示されることがある。次の(142)は、「井上ひさしによる諺の『爪の垢を煎じる』の『パロディ』」の話段の開始部の 5 文であるが、「ノダ+カ・ケド」が 4 例用いられている。

(142)

393 (1)で、それとね、おんなじような、ま、そこまで立派な格言じゃないんですけど、ちょっと表 [おもて] に 1 回戻るんですが、73 番。

394 (6)これも、えーと、井上ひさしなんですよ。

395 で、今みたいに抜き出さないで、形のまんま入れちゃったんですけど、え、「爪の先はまっ黒で、これはどうやら、物凄い黴菌の棲息地と思われ、間違っって煎じて飲んだら前代未聞の腹痛に悩まされそうに不潔この上もない。」

396 でー、まー、「きたないね。」って話をしてるんですけど、「間違っって煎じて飲んだら」って部分ですね↑。

397 で、「きたないな。」ってことだけ言うのに、「なんでこんなこと言ったのかしら。」っていうふうに、関連がなさそうでしょ↑。

(講義 B)

文 393 「で、それとね、おんなじような、ま、そこまで立派な格言じゃないんですけど、」と、転換の接続表現「で」を伴い、新たな話題の「前提」情報を「んですけど」を用いて提示し、さらに「ちょっと表 [おもて] に 1 回戻るんですが、」と、配布資料の参照を間接的に促すことで、新たな話段への展開を示唆する。文 395 「で、今みたいに抜き出さないで、形のまんま入れちゃったんですけど、」は、添加型の接続表現「で」を伴い、「パロディ」のし方を「前提」情報として「んですけど」で提示し、文 396 「でー、まー、「き

たないね。」って話をしてるんですけど、」は、順接型の接続表現「で」を伴い、文 395 の例文から導き出される帰結を「前提」情報として「んですけど」で表している。

このように、新たな話段の開始部には、「ノダ+ガ・ケド」が複数現れる傾向があるが、これは、菊池（2000）石黒（2003）の指摘する「知識：状況の共有度の差」によるものだと考えられる。直接読み手を伺うことができない新書の文章とは異なり、目の前にいる受講者の反応を見ながら談話を展開していく講義は、より情報の受容者への配慮が必要になるのであろう。また、話段の展開部に講義者が唐突に感想を差し挟む際にも「ノダ+ガ/ケド」が用いられるが、これも推敲のできない談話の特徴を反映したものといえるだろう。なお、文 396 の「んですけど」は、文 395 の帰結を表す「前方統括機能」を発揮しているが、同時に「後方被統括機能」も発揮している。前方を統括しながら、後方に統括されるという話段の多重性を見ることができる。

以上、講義の談話におけるノダの節末の表現形式による特徴は、①文末のノダと同程度の出現数であること、②「んですが」「んですけど」を筆頭に「ノダ+ガ・ケド」の出現率が高く、次に多い「のか」の出現率は、その 10 分の 1 と、その出現率に大きな差が認められるということである。

新書の文章も講義の談話も節末のノダが「後方被統括機能」を発揮するという点では一致している。また、「ノダ+ガ・ケド」「ノダ+カ」の出現率が高いという点も一致しているが、全体的に講義の談話の方が節末のノダの出現率が高く、講義の談話は、特に「ノダ+ガ・ケド」によって、新たな話段開始部で「前提」情報を提示したり、話段の展開部で講義者の見解を差し挟んだりするという特徴が認められる。これは、講義者が眼前の受講者を意識しながら講義の談話の「展開的構造」（佐久間 2010）を作り上げていくプロセスを表しているといえる。

6.1.2. 文末の表現形式の比較

新書の文章 6 編におけるノダを含む文の総数は 1101 例で、そのうち文末に用いられるノダは 949 例（86.2%）であった。それに対し、講義の談話 4 編に用いられるノダは 722 例で、文末に用いられるノダは 403 例（55.8%）と、出現率に大きな差が見られる。また、新書の文章の文末の表現形式は 27 種、講義の談話の文末のノダの表現形式は 73 種と、さまざまな表現形式が見られるが、そのうち、新書の文章 10 種、講義の談話 45 種の表現形式は 1 例しか用いられておらず、その出現は、特定の表現形式に偏る。

新書の文章は「のである。」が706例と、全体のノダの出現率の約65%を占め、他の表現形式を圧倒している。第2位は、「のだ。」であるが、その出現率は72例(6.5%)と、「のである。」の約10分の1に過ぎない。第3位は、「のだろうか。」64例(5.8%)で、ほぼ第2位の「のだ。」と同数である。このように、新書の文章は、「のである。」の表現形式を基調としていることがわかるが、その統括機能は多様であるため、他の要素(出現位置・接続表現等)と合わせて分析する必要がある。例えば、「のである。」が文段の終了部に「同列型」の接続表現「つまり」を伴って現れる場合、先行文群を「換言」するかたちで統括し文段を成立させる「前方統括機能」を発揮する。それに対し、「のである。」が文段の開始部に「実は」を伴って現れる場合、当該の文の情報が「概略」として、後続する補足情報を表す文を統括する「後方統括機能」を発揮したり、当該の文の情報が「前提」として後続の中心文に統括されることを予測させる「後方被統括機能」を発揮したりする。

このように、多様な統括機能を発揮する「のである。」であるが、約75%は「前方統括機能」を発揮するため、これを新書の文章の「のである。」の基本的な機能と認めてもよいだろう。次の(143)は、「のである。」が先行文の「帰結」として「前方統括機能」を発揮し、文段を成立させている例である。

(143)

555 重元素の起源

556 星々が、二つの種族に分類されることについては既にふれた⁴⁶。

557 種族Ⅱに分類される星々は、球状星団を形成しており、その質量は太陽に比べて小さいことから、太陽よりもはるかに老齢であることがわかる(第2章現象Ⅱ参照)。

558 実際、球状星団を形成する星々は、この宇宙が誕生して一〇億年ほど経った頃に形成されたものが多い。

559 中には、年齢が約一三〇億年にも達する球状星団がある。

560 一方、散開星団を作る星々には、A型に分類される大質量のものが多いことから、この星団の星々は相対的に若いと考えられている。

⁴⁶文173に「このように星々の持つ物理的性質が異なっていることから、星の種族によって分類する方法が提案されており、散開星団に属する星々を種族Ⅰ、球状星団の星々を種族Ⅱと分類している。」と述べられている。

- 561 その上、これらの星々を作っているガス物質は、超新星爆発によって星間空間に放出されたものから成るので、相対的に重い元素に富んでいる。
- 562 このようなわけで、球状星団の星々と散開星団の星々は、元素の組成や質量において根本的に異なっているのである。

(『宇宙』)

文 556 は、すでに述べられた文 173 の情報を反復することで話題として取り上げる。文 557～559 は、「球状星団」について、一つの文段が成立しており、文 560～561 では、「一方」という「対比型」の接続表現によって、対比的に「散開星団」についての文段が成立する。文 562 の「のである。」は、指示表現「このようなわけで」と、それぞれの文段の提題表現「球状星団」「散開星団」の反復と共起することで、「前方統括機能」を發揮し、文段 556～562 を成立させる。

次に、第3位の「のだろうか。」は、節末の「のか」とは少々異なり、文段の開始部に現れ、「課題提示」として後方に統括されることを予測させる「後方被統括機能」を發揮する。次の(144)のように、転換型の接続表現「では」「それでは」と共起し、文段の開始に用いられることが多い。

(144)

1187 **「存在するとは知覚されていることである」**

1188 物質は存在しない。

1189 すくなくとも、観念に与えられるものとしては存在しない。

1190 もしも観念こそが存在への避けがたい通路であって、観念として与えられるもののほかは存在しえないとするならば、物質、物体としての実体、事物それ自体はおよそ存在しない。

1191 それでは、「存在する」とはどういう意味なのだろうか。

1192 バークリーの答えはよく知られている。

1193 存在するとは、知覚されていることなのである。

(『西洋』)

文 1191 「それでは、「存在する」とはどういう意味なのだろうか。」と、「それでは」と

いう転換型の接続表現と「のだろうか。」によって、「課題提示」として、新たな文段を開始している。この「課題」は、「解答」を後続文に求める「後方被統括機能」を発揮する。文 1193「存在するとは、知覚されていることなのである。」で「解答」が示されることで、文段が成立するといえる。

以上のように、新書の文章の文末に現れるノダは、文段の終了部の「のである。」によって、先行文を統括する「前方統括機能」を発揮するのが基本であり、その他、文段の開始部に「のだろうか。」によって、後続文に統括されることを予測させる「後方被統括機能」を発揮するという特徴がある。

一方、講義の談話における文末のノダの上位5位をみると、出現率第1位は、「1. んです。ね。」97例(13.4%)で、第3位の上昇イントネーションの「3. んです。ね↑。」47例(6.5%)とともに、講義の談話の表現形式の基本となっている。第2位は「2. んです。」64例(8.9%)で、新書の文章の「のである。」と比較すると、その出現率が非常に低いことがわかる。

講義の談話に現れる「んです。ね。」は、次の(145)のように、他の要素(話段の出現位置、接続表現等)によって、様々な統括機能を発揮する。

(145)

465 7のところの引用を見ていただきたいんですが。

466 で、「納屋を焼く」という短編はですね、あの、やはり「ぼく」という語り手兼主人公が出てくるんですが、「ぼく」が、まー、あの、ある、何ですか、カップルと知り合いになってるんですね。

467 男性と女性なわけです。

468 で、その女の子のほうが、まー、先に「ぼく」の友達だったんだけど、彼氏が出来たというんで、紹介されるわけなんですね。

469 で、その彼氏はですね、納屋を焼くのが趣味だっていうんですね。

470 納屋を焼くのが趣味だ。

471 そのへんからやっぱり、これは何かあるなと思うんですね、やっぱり。

472 えー、出来事の核なんです。

473 ところが、納屋を焼いたかどうか、どこの納屋を焼いたかってのは、よくわからないまま終わってしまいます。

474 つまり、出来事の核は隠ぺいされているんですね。

(講義 C1)

文 465 「見ていただきたいんですが。」によって、新たな話題の開始が予告される。文 466、468、469 の「んですね。」で提示された情報は、新たな情報であるが、この情報自体は、後続文理解のための「前提」となっている。文 471 の「んですね。」は、文 469～470 の情報に対して、講義者の「見解」を挿入している。文 472 のノダは、「んです。」のかたちで現れ、先行文 466～471 を「換言」するかたちでまとめている。文 473 は、逆接型の接続表現「ところが」で、意外な結末を示し、文 474 は、「同列型」の接続表現「つまり」をとめない、「んですね。」によって、先行文 465～473 全体を「換言」するかたちで統括している。

このように、講義の談話に現れる「んですね。」は、話段の終了部で「前方統括機能」を發揮して先行文を統括するだけでなく、話段の開始部で話段の理解に必要な情報を「前提」として提示する「後方被統括機能」を發揮する。話段の開始に 25 例、話段の終了に 24 例出現しており、その差はほとんど見られない。

一方、「んです。」は、話段の開始に 4 例、話段の終了に 10 例出現しており、話段の終了に現れやすいことが指摘できる。また、話段の開始の 4 例のうち 3 例は、「前提」ではなく「概略」であり、後続文を統括して話段を成立させる「後方統括機能」を發揮する点で、「後方被統括機能」を發揮することを主とする「んですね。」とは異なる。「んです。」は、話段の出現位置によって、前方・後方いずれかの統括機能を發揮し、話段を統括する傾向がある。次の(146)は、文 290 から始まる、3 人称代名詞として「彼」「彼女」が使える相手が限定されていることを述べる話段の後の話段である。

(146)

329 で、えー、それを押し進めていくと何がいえるかっていうとですね、もともと近代日本語において、「彼」「彼女」っていう言葉は、まさに、え、「he」とか「she」の翻訳語として、翻訳語として当てられたものなんですよ。

330 だから、さかのぼれば、それ以前の「彼」「彼女」というのは、3 人称代名詞として使われていたわけではありません。

331 ありません。

332 明治に入って、「he」や「she」などの、えー、欧米語の 3 人称代名詞に対応させるものとして当てられたということなんです。

333 ですから、その 3 人称代名詞の使い方にそもそもなじんでいなければ、「彼」も「彼

女」もそれとして使うことはできない。

334 それが今でも尾を引いてるんじゃないかってことなんです。

335 で、じゃあ「彼」や「彼女」っていうのは、そもそもどういうことなのかっていうことになると、これは次回の「こそあど」に関係します。

(講義 E1)

文 329 は、「転換型」の接続表現「で」によって新たな話題が開始し、「もともと近代日本語において、「彼」「彼女」っていう言葉は、まさに、え、「he」とか「she」の翻訳語として、翻訳語として当てられたものなんですよ。」と、「んですよ。」をともなって「概略」的な情報を提示し、文 330 で、「順接型」の接続表現「だから」で、「さかのぼれば、それ以前の「彼」「彼女」というのは、3人称代名詞として使われていたわけではありません。」と否定のかたちで結論を述べ、文 331 で反復する。文 332 は、文 329 の情報を同語反復的に再提示し、文 333 で「順接型」の接続表現「ですから」によって、文 333～334 「その3人称代名詞の使い方にそもそもなじんでいなければ、「彼」も「彼女」もそれとして使うことはできない。それが今でも尾を引いてるんじゃないかってことなんです。」と、「3人称代名詞として「彼」「彼女」が使える相手が限定されているのはなぜか」という問いの結論を「んですよ。」をともなって提示することで、先行文 290 から始まる3人称代名詞の話段を統括する。

このように、「んですよ。」は、「んですよ。」と比べ、先行文もしくは後続文を統括する「統括機能」を発揮する傾向がある。そして、「んですよ。」に比べ、「んですよ。」の出現率が高いことが、「前提」として「後方被統括機能」を発揮する割合が高いという講義の談話のノダの特徴を表している。

以上、節末、文末の表現形式を中心に、新書の文章と講義の談話のノダの異同を論じた。分析結果は以下のようにまとめられる。

1. 講義の談話に比べ、新書の文章に現れるノダは、「換言・帰結」の「前方統括機能」を発揮する比率が高い。これは、新書の文章において、節末のノダの出現率が低く、文段の終了部に「換言」「帰結」になりやすい「のである。」が多用されることから指摘できる。
2. 新書の文章に比べ、講義の談話に現れるノダは、後続文に統括されることを予測させる「前提」の「後方被統括機能」を発揮する比率が高い。これは、講義の談話の節末に

「前提」の「ノダ+ガ・ケド」が現れやすいこと、話段の開始部に「前提」になりやすい「んですね。」が現れることから指摘できる。

このように、表現形式の特徴からみると、新書の文章に現れるノダは、先行文を統括する「前方統括機能」を発揮することを基調とし、講義の談話に現れるノダは、新書の文章と同様、「前方統括機能」を発揮するが、あわせて、後続文に統括されることを予測させる「後方被統括機能」を発揮することを基調としているという相違が指摘できる。

6.2. 接続表現との共起の比較

ノダの統括機能の分析は、ノダ自体を分析するだけでは不十分であるため、ノダ同様、文を越える言語形態的指標との共起関係を分析する必要がある。接続表現の中にも多様な用法を持つものもあるが、ノダと共起することで、その用法を特定することができることもあり、逆に、ノダの統括機能も接続表現との共起で特定することができるということもある。これは、「接続表現+ノダ」がある種の文を越えた表現類型としてパターン化できるということである。ここでは、接続表現と共起するノダの統括機能について、新書の文章と講義の談話との異同を考察する。

新書の文章・講義の談話ともにノダと共起する接続表現すべてを分析対象とし、ノダと共起した接続表現に関しては、ノダと共起しなかったものもすべて集計した。そして、接続表現ごとに、ノダと共起しやすい傾向があるのか、それともノダと共起しない傾向があるのかを χ^2 乗検定を用いて分析した。詳細は、第4章、第5章にあるので、ここでは、特に、新書の文章と講義の談話との異同に絞って考察する。

まず、全体的に、新書の文章の場合、ノダが特定の接続表現と共起しやすいという傾向が、講義の談話に比べはっきりしているということが挙げられる。講義の談話では、ノダと接続表現の共起に有意差が見られたのは「補足型」の「ただ」のみであった。

まず、新書の文章のノダは、「順接型」「同列型」の接続表現との共起が多く見られた。これは、6.1.2の結論と矛盾するものではない。「順接型」の接続表現の中でも帰結を表す「だから」、「同列型」の接続表現の中でも「つまり」との共起が多く、この場合、ノダは、先行文脈を統括する「前方統括機能」を発揮することになる。「接続表現」は、「だから」の場合は、因果関係による帰結として先行文を統括し、「つまり」の場合は、先行文を言い換えることによって統括するというように、統括のし方が異なることを明示していると考え

られる。

また、これらは、ノダによる「前方統括機能」と「接続表現」の論理関係から、文段の終了部に現れやすいことが挙げられる。次の(147)は、小見出しの終了部に現れ、先行文を「換言」することによって統括し、さらに、後続文との間に相対的に意味的な断絶を感じさせることで文段を成立させている。

(147)

1035 **5文章は危うさをもつ**

1036 前章では、文章を書いたり読んだりする場合の基本的なことがら、すなわち、単語の意味や文のもつあいまい性、文を理解するためには知識が必要であることなどについて述べた。

1037 とくに科学技術に関する文章においては、専門用語がどのような内容を持ち、ほかの類似の語とどのように区別されて使われるかを知ることが大切であることを述べた。

1038 本章では、これをさらにすすめて、文章全体、論文や本を読むときに、注意すべきことについて述べる。

1039 つまり、前章にくらべてさらに暗示的なこと、何が全体として含意されているかといったことについて考察する。

1040 そこには、文章読解のおもしろさとともに、文章のもつ危うさということも出てくるだろう。

1041 文章を理解するという事は、書かれている内容を読者が自分のなかに再構築することである。

1042 これは、再構築したものを他人に説明するといった形で外部に出すことによって、もっともよくおこなわれる。

1043 その過程で、理解できていなかった部分が明らかになり、再度もとの文章を読みなおしたり、質問したりすることが必要となる。

1044 つまり、対話という過程が大切となるのである。

1045 **1メタファー的説明はわかりやすい。だが・・・**

1047 メタファーとはかんたんにいえば見立てであって、ある対象を何か別のものに見立てて表現することである。

(『わかる』)

文 1035 から、新たな章が開始され、文 1036～1037 で、前章のまとめをし、それを前提とすることで、文 1038 から、「本章で述べることを大まかに提示する。そして、文 1039 「つまり」によって、換言することで、詳述がはじまり、文 1041 で「文章を理解するということとは」と、具体的な話題が開始され、文 1043 まで、その説明が続く。文 1044 「つまり、～ノダ」は、文 1041～1043 の具体的な話題を統括するが、それだけではなく、文 1038 の解答にもなっている。そのため、前提を含む文段 1036～1044 は、文 1044 によって統括されるといえる。後続文 1045 は、新たな小見出し「1 メタファー的説明はわかりやすい。だが・・・」が開始されるが、文 1044 との直接的な関係は認められず、ここに、文段の大きな区切れ目を認めることができる。

また、「だから、～ノダ」が提示する情報は、先行文にすでに述べられた情報の反復である。その意味で「帰結の再提示」として先行文を統括する。次の(148)は、文 2756 で述べられた情報が、文 2772 で再提示されている例である。

(148)

2751 **中性子は第Ⅱ種超流動体**

2752 物性物理学の知識が中性子星の理解に役立つ面白い例がある。

2753 それが中性子星回転周期の突然変化、グリッチと呼ばれる現象である。

2754 超高速回転をしている中性子星はきわめて安定した運動をしているが、それでも長い年月の間にごくわずかずつおそくなっている。

2755 つまり回転周期が長くなっている。

2756 ところが数年に一度程度の頻度でヒョイと周期が速くなる。

2757 これをグリッチと呼んでいる。

2758 この現象は物性物理学の世界的指導者でノーベル賞を受けているアンダーソンと、宇宙物理学者、伊藤直紀氏の共同研究で明らかにされた。

2759 その核心部は、中性子流体は第Ⅱ種超流動、ということからくるのである。

2760 超伝導と磁場、超流動と回転を対比させる。

2761 超伝導体に磁場をかけると第Ⅱ種超伝導体では量子化された渦ができることを読

者は思い出されるだろう。

- 2762 中性子流体は電荷がないから磁場には反応しないが、対応する物理量は回転で、超流体を回転させると中に量子化された渦が発生する。
- 2763 これは液体ヘリウムでも起きることである。
- 2764 第2章の「量子渦」を参照のこと。
- 2765 回転数が増せば渦の密度も濃くなって行く。
- 2766 中性子星ではその高速回転に見合った渦密度がすでに星の中で中性子液体中に存在する。
- 2767 しかし回転が遅くなると、渦密度を下げねばならない。
- 2768 これらの渦は普通は共存する原子核がピン止め役をしていて固定されている。
- 2769 これは超伝導体での不純物や格子欠陥によるピン止めに対応する。
- 2770 しかし渦密度を下げよとの環境が進行すると、あるところでピン止めをはなれ、渦は表面（外殻）に移動してそこで消滅する。
- 2771 そのとき、渦が持っていた角運動量を放出し、中性子星本体の回転運動に還元されるが、これは星の回転を増加させる方向に働く。
- 2772 だからその瞬間、星はピクンと回転速度を上げるのである。
-
- 2773 この研究は、はるか彼方の謎の星、中性子星の状態が物性物理学の法則に従っていることを示した好例である。
- 2774 中性子星をちょっとでも身近に感じていただけたらどうか。
- 2775 **そしてブラックホール**

（『極限』）

文 2756 で、「数年に一度程度の頻度でヒョイと周期が速くなる」現象（グリッチ）の情報が提示され、なぜ、そのような現象が起こるのかを文 2758 以降で説明している。この説明の文段は、はじめの文 2758～2759 で、大まかな結論を提示する。文 2759 のノダは、後方統括機能を発揮する「概略」の機能を発揮している。文 2760 以降、さらに詳しく説明がなされ、十分に説明がなされた文 2771 の後、もう一度、文 2756 の情報を「だから、～ノダ」のかたちで再提示することで、先行文 2758～2772 を統括し、「理由」の文段を成立させていると考えられる。

上記の(147)(148)のように、「つまり、～ノダ」と「だから、～ノダ」が提示する情報は、すでに先行文に述べられたものであり、読者にとっては既知情報である。菊池（2000）や石黒（2003）が指摘する知識・状況の共有度の差というものは、新書の文章においては、ノダの有無の条件として認められないことがわかる。

上記のように、新書の文章のノダは「だから、～ノダ」や「つまり～ノダ。」のように、先行文を統括する「前方統括機能」を基調としているが、それだけではなく、「添加型」の接続表現「そして」と共起しやすいことも明らかになった。「そして、～ノダ」は、当該文の情報が既出であれば、文段の終了部に現れ、「つまり、～ノダ」「だから、～ノダ」と同様、先行文を統括する「前方統括機能」を発揮する。当該文の情報が未出であれば、先行文を統括するとともに、後続文段の「概略」となるという「つなぎ」の文脈展開となる。次の(149)は、文章の構成について言及している文段である。

(149)

33 極限科学には次のような特徴がある。

34 それは主たる三分野がそれぞれ独立しているわけではなく、きわめて密接に相関を持っていることである。

35 圧力と温度の相関はボイル・シャルルの法則以来の伝統があり、自然界最大の圧力と磁場を具現している中性子星では、この二つが完全にかみ合っていることを最終章で御覧いただけるだろう。

36 そして極限科学は宇宙科学とも接点をもつ、宇宙物質学としての側面を持っているのである。

37 極限科学の背景

38 極限科学には歴史的、思想的な背景がある。

<13 文省略>

51 宇宙科学は見る事に中心があり、極限科学は創る事に主眼がある。

52 そして最終章ではこの二つが互いに相補的な関係にあることが示される。

（『極限』）

文 33 から、「極限科学の特徴」について、話題が開始し、文 34 でその特徴に言及し、文 35 で、それを詳述している。文 36 は、「そして、～ノダ」をともない、文段 34～35 に添

加するかたちで、新情報を提示する。一度、ノダの「前方統括機能」によって、先行文が統括される。「宇宙物質学」という情報は、先行文では全く触れられていないことから、やや唐突な印象を受けるが、これが後続文段の「概略」となり、ノダの「後方統括機能」が発揮される。そして、後続する小見出し「極限の背景」の文段 37～52 がこの「概略」的に述べられたノダ文の情報を補足していくという文脈展開となる。

以上、接続表現とノダとの共起関係から、その文脈展開方法を分析した。文段の終了部に現れる「つまり、ノダ」「だから、ノダ」「そして、ノダ」の当該の文の情報が既出であれば、ノダの「前方統括機能」によって、先行文が統括されることで、文段が成立する。

「そして、ノダ」の当該の文の情報が未出であれば、先行文を統括するとともに、後続文段を「概略」的に統括するという文脈展開となる。いずれにしても、文段の開始部、もしくは文段の終了部に現れ、当該の文段を統括する中心文となることが多い。

一方、講義の談話のノダは、接続表現との共起という観点からみると、必ずしも、先行文もしくは後続文をまとめあげる「統括機能」を積極的に発揮するとは言えない。ノダと共起しやすい接続表現は、「添加型」「転換型」の接続表現「で」、「補足型」の接続表現「ただ」である。いずれも、話段の開始部、もしくは展開部に現れ、後続文の理解に必要な「前提」情報を提示するという「後方被統括機能」を発揮するものである。

また、「ただ、ノダ」は、後続文に統括されるだけでなく、先行文に統括される「前方被統括機能」を発揮するという点で、話段と話段の「つなぎ」として機能する。次の(150)は、村上春樹の短編小説「象の消滅」のあらすじを述べる話段である。

(150)

71 「象の消滅」という短編は、これはあの一、えーと、町で、えー、町はずれに、ぞ、象舎があつてですね、そこで象を飼ってたわけですが、その象が、飼育人と一緒に、ある日、突然消えてしまったという話なんですね。

72 で一、それがすごく話題になるけれども、しばらくすると、みんな忘れてしまう。

73 ただ、その象が消滅するところを目撃していたのが「ぼく」なんですね。

74 で、「ぼく」が見ていると、えー、はっきりとそれとわかるわけじゃないが、どうも、象がだんだん縮んでいったようであると。

75 つまり、小さくなって行って消滅してしまったようであるっていうことを、「ぼく」が彼女と語り合うという話です。

文 71 のノダは、後続文の内容を「概略」的に先取りして述べており、「後方統括機能」を発揮する。文 72 は「添加型」の接続表現「で一」をとめない、情報を付加し、文 73 は「補足型」の接続表現「ただ」によって、ノダ（「んですね」）をとめない「その象が消滅するところを目撃していたのが『ぼく』」だという情報が補足される。文 74 は「添加型」の接続表現「で」で、情報が付加されるが、これは、文 73 を「前提」として提示された情報である。このように、「ただ、～んですね。」は、先行文の情報を補足しながら、後続文の前提となるという文脈展開となる。

このように、ノダと接続表現との共起からみると、新書の文章では、端的な言い換えや帰結によって先行文を統括し、文段を成立させる「統括機能」を発揮することが多く、講義の談話では、後続文の理解に必要な情報を「前提」として提示し、後続文に統括される「後方被統括機能」を発揮することが多いことが明らかになった。

6.3. 新書の文章のノダと講義の談話のノダの相違点

本章では、ノダの統括機能という観点から、ノダの表現形式と接続表現との共起関係を分析することで、新書の文章のノダと講義の談話のノダとの異同を明らかにした。新書の文章にも講義の談話にも様々な統括機能を発揮するノダが見られ、その多くが重複していることから、野田（1997:27）の「のだ。」「んです。」の違いを、「基本的に同じ機能を持っており、」「話し言葉と書き言葉の差」という指摘は間違いではない。しかし、出現比率の高い表現形式、共起しやすい接続表現には、異同が見られた。次の表は、新書の文章、講義の談話に見られた特徴的な文型である。

【表 32】新書の文章に見られるノダを用いた文型

接続表現	ノダの表記形	ノダの統括機能	文の情報	出現位置	文脈展開	
同列型	つまり	のである。	前方統括機能	既出	文段の終了部	端的に言い換えることで具体的な事例を述べた先行文をまとめる。
順接型	だから	のである。	前方統括機能	既出	文段の終了部	すでに提示された結論を再度述べることで原因・根拠となる先行文をまとめる。
添加型	そして①	のである。	前方統括機能	既出	文段の終了部	時間的経過による結末を述べることによって先行文をまとめる。
添加型	そして②	のである。	前方+後方統括機能	未出	文段の終了部・開始部	次の文段の要点を述べることで、先行文だけでなく、後続する補足的な文をまとめる。(先行文との関係は「添加型」)
逆接型	しかし	のである。	前方+後方統括機能	未出	文段の終了部・開始部	次の文段の要点を述べることで、先行文だけでなく、後続する補足的な文をまとめる。(先行文との関係は「逆接型」)
転換型	では それでは	のか のだろうか。	後方被統括機能	未出	文段の開始部	新たな文段の課題を提示し、後続する解答の文にまとめられる。

【表 33】講義の談話に見られるノダを用いた文型

接続表現	ノダの表記形	ノダの統括機能	文の情報	出現位置	文脈展開	
補足型	ただ	んですが、んですけど、 んですね。	前方+後方被統括機能	未出	話段の開始部	先行文の補足をするともに、後続文の「前提」として話段をつなぐ。
添加型	で	んですが、んですけど、 んですね。	後方被統括機能	未出	話段の開始・展開部	先行文を受けて、後続文の理解のために必要な「前提」情報を提示する。
転換型	で	んですが、んですけど、 んですね。	後方被統括機能	未出	話段の開始部	新たな話題の開始に必要な「前提」情報を提示する。
転換型	で	のか、 んだろうか。	後方被統括機能	未出	話段の開始部	新たな課題を提示し、後続する解答の文にまとめられる。

新書の文章では、「つまり、～のである。」「だから、～のである。」「そして、～のである。」の「～」部の情報は既出であることから、「反復」によって、先行文を統括するということがわかる。それに対し、講義の談話では、「ただ、～んですね。」「で、～んですね。」「で、～んだろうか」の「～」部の情報は未出であるが、ノダを用いて、あたかも「既定」であるかのように提示することで、「～」部の情報を背景化する。このことが、後続文や、主節の情報が優位であることを示すことになると考えられる。

新書の文章も講義の談話も複雑な情報をわかりやすく伝えることを目的とした言語行為であるため、構造への意識は強いと思われる。ノダは、新書の文章、講義の談話の構造化に寄与しているが、その方法が異なるという傾向を明らかにすることができたと考えられる。新書の文章では、文段の終了部に「つまり」「だから」等とともに現れ、先行文を統括することで、文段を成立させるという傾向がある。一方、講義の談話では、文段の開始部や展開部に、「で」や「ただ」等とともに現れ、後続文に統括されることで文段の成立に関わるという傾向がある⁴⁷ことが明らかになった。このことは、まとまりを意識した新書の文

⁴⁷ 講義の談話においても、新書の文章のように、先行文を統括するものもある。ただし、その比率が、新書の文章よりも低いこと、また、特定の接続表現と共起しやすいという傾向が見られなかったため、この表では取り上げなかった。

章の読解、講義の談話の聴解にも活かされるものであると考えられる。さらに、表現形式へ意識を向けることで、作文やスピーチの際にも応用できると考えられる。

第7章 接続表現とノダの統括機能に基づいた新書と講義の理解方法

7.1. 目的と課題

本研究は、大学・大学院で求められる論理的な文章・談話の効果的な理解力と表現力の向上を図ることを主な目的としている。本研究の第一の分析対象とした新書の文章とは、大学学部の教養科目の参考図書として、また、専門書を読む前の入門書として用いることができるものである。また、講義の談話は、大学学部留学生にとって大きな困難点として指摘されているものであり、その克服への支援が望まれている。学術的な分野の入門書としての新書の文章と講義の談話は、複雑な内容を効率的に伝達するという点で共通すると考えられる。

新書や講義のような複雑な文章・談話の理解には、一文ずつの逐次的な文の理解の積み重ねだけでなく、意味内容のまとまりを意識した理解が有効である。佐久間 (2003, 2010) により文章・談話の成分として規定された「段」という言語単位は、何らかの形態的指標をともなって表現される。本研究では、形態的指標の中でも、特に、接続表現とノダの共起関係から、「段」を意識した新書と講義の理解⁴⁸方法を検討する。

本研究でノダを取り上げたのは、ノダは、接続表現や提題表現、指示表現といった他の言語形態的指標と共起し、多様な統括機能を発揮することで、様々に「段」の成立と関わるためである。接続表現とノダとの共起による「文型」を学習することで、様々な角度から「段」を捉えることができるようになり、長く複雑な内容の文章・談話であっても、話題の変化や、ある話題の中心的な内容に気付くことができるようになる。

また、新書の文章と講義の談話に現れるノダの「文型」には相違がある。具体的には、新書の文章に現れるノダは、順接・逆接型の接続表現「だから」「しかし」、同列型の接続表現「つまり」と「前方統括機能」のノダとの共起が基調になっており、ある話題の終了とその文段の中心的内容を示すことが多いが、講義の談話は、転換型の接続表現「で」「さて」と「後方被統括機能」のノダとの共起が基調になっており、新たな話題が始まることを示すことが多いというように、文章・談話展開上異なる性格となるため、これらを分け

⁴⁸ 佐久間編著 (2010:19) は、「講義者の音声のみならず、教科書をはじめ、板書やOHP, VTR, パワーポイント, また、各種の参照・配布資料等の補助教材からも構成されて」いることを指摘しており、講義は、単なる聴解ではなく、総合的な理解が必要になることを指摘している。

て扱う必要がある。⁴⁹

また、学習事項の1～3に該当する第4章から第6章までの分析は、いずれも、「表現の分析」に留まったものである。日本語学習者の学習内容として考えた場合、「表現の分析」だけでなく、ノダを用いた「段」の把握に必要な文型がどのように理解されたかという「理解の分析」が必要である。例えば、理解の分析結果が、表現の分析結果を反映していないことがある。この場合、表現に用いられたノダが正しく理解されていない可能性があるため、より重点的な指導が必要になるだろう。

さらに、「段」を「文型」とともに捉えるということは、理解のみならず、表現の際にも直接応用が可能なものである。「段」の成立に関わる「文型」を用いて、自身が長く複雑な独話を行う際にも有効だと考えられる。

本章では、7.2で、先行研究の理解データ（要約文）を用いて、文章と談話それぞれのノダの統括機能が「段」を意識した理解の手がかりになることを示し、7.3で、段の成立に関わる「文型」（接続表現＋ノダ）を用いた講義理解の方法を提案する。また、理解した講義を表現する（特に、口頭での説明）際にも、その「文型」を用いることで、まとまりのある談話展開が可能になることを示す。

7.2. ノダの統括機能と文章・談話の理解の関係

7.2.1. 文章のノダの統括機能と理解の関係

7.2.1.1. 佐久間編著（1997）の要約文を用いた理解研究

佐久間編著（1997）は、佐久間編著（1989,1991,1994）の一連の要約文研究の成果を踏まえ、日本語母語話者（以下「J」と称する）と日本語学習者の学生（以下「F」と称する）の2種類のテキスト（原文⁵⁰Aと原文I）に対する要約文の評価方法を扱ったものである。本研究で取り上げる原文Aについては、首都圏私立大学の日本人大学生61名と、国立大学予備教育機関1校及び首都圏の私立大学文科系学部2校の計3校に在籍する外国人留学生66名を対象とし、要約文の比較研究を行っている。具体的には、要約文を10類24種の「原

⁴⁹例えば、野田（1997:27）は、「話しことばと書きことばの差」として、「んです」と「のです」とを区別しているが、「基本的には同じ機能をもって」いるとし、その異同を特に論じることはない。⁴⁹（角田（2004:70-71）にも、同様の記述がある。）しかし、新書の文章と講義の談話には、ノダの統括機能の出現傾向に異同がある。

⁵⁰ 佐久間（1997:1）に、「要約文の書き手（以下、「要約者」と称す）が読解した文章（「原文」とする）」と定義がある。

文残存認定単位」に分類し、それぞれの単位ごとに、誤用の有無とその分類（9類14種）を分析した結果と、15+α（自由記述）の評価基準にしたがって行われた評価判定の結果の関連を分析している。ここでは、要約文の原文残存認定単位の残存傾向の分析結果を用いて、ノダの統括関係を理解することが「文章の理解」に有効であることを示す。

7.2.1.2. 文段の理解とノダの統括機能

本節では、原文と佐久間編著（1997）による構造図を引用し、ノダの統括機能と「文章理解」の関係を考察する。まず、原文Aと構造図を巻末【資料3-1】【3-3】に記載した。

原話Aは、結尾部が中心段となる「尾括型」の文章構造を有する。そして、主題文⑨のノダは、永野（1986:326）等で述べられているような、「文章の最後尾におかれることでその文章全体を統括する」ノダに準じるものである。ただし、論説文Aは、結尾部の文段を構成する文⑨～⑪の3文すべてにノダが現れており、それぞれが異なる統括機能を発揮することで中心段が成立している点で複雑な「中心段」となっている。また、文④のノダも、先行する文段①～③と後続する⑤～⑧をつなぐために前方と後方のいずれにも統括機能を発揮している。原文Aの構造図から、ノダが使用される文④と文⑨⑩⑪が文章の展開的構造を捉える際に重要な箇所に現れていることがわかる。

次に、日本語母語話者の大学生（以下、「母語話者」と称す）の要約文AJと日本語学習者の大学生（予備教育含む。以下、「学習者」と称す）の要約文AFの残存認定結果から、上記のノダがどのように理解されているかを考察する。次に掲げる【表34】は、要約文AJとAFそれぞれに、どの程度原文の情報が残存しているのかを分析したものである。佐久間（1989）以来、要約文の残存傾向は、原文の重要な情報を反映していることが指摘されており、この表の結果からAJとAFの集団が、原文のどの情報を重視していたのかを把握することができる。

【表34】 要約文A「日本人はそんなに駄目か」の原文残存率の差の検定

Z単位	原文	日本人		留学生		差	統計量	1%	5%	確率	判定
		実数	(%)	実数	(%)						
09-01	いつも、不思議に思うことだが、	9	14.75%	14	21.21%	-6.46%	-0.9442	-2.33	-1.64	0.17245	[]
09-2-1	日本人は	62	101.64%	38	57.58%	44.06%	6.0637	2.33	1.64	0.00000	【**】
09-2-2	そんなにダメ人間揃いなのだろうか。	59	96.72%	36	54.55%	42.17%	5.4698	2.33	1.64	0.00000	【**】
10-01	しかし	21	34.43%	20	30.30%	4.13%	0.4965	2.33	1.64	0.30977	[]
10-2-1	日本経済や社会が	64	104.92%	56	84.85%	20.07%	4.9515	2.33	1.64	0.00000	【**】
10-2-2	安定に動いているのである。	49	80.33%	42	63.64%	16.69%	2.0853	2.33	1.64	0.01852	【*】
11-01	おそらく	21	34.43%	11	16.67%	17.76%	2.3032	2.33	1.64	0.01063	【*】
11-2-1	お互い同士が	58	95.08%	37	56.06%	39.02%	5.0606	2.33	1.64	0.00000	【**】
11-2-2	叱正し合うという	62	101.64%	40	60.61%	41.03%	5.8104	2.33	1.64	0.00000	【**】
11-3-1	独得の仕組みが	45	73.77%	31	46.97%	26.80%	3.0782	2.33	1.64	0.00104	【**】
11-3-2	安定化に一つの貢献をしているのかもしれない。	55	90.16%	46	69.70%	20.46%	2.8559	2.33	1.64	0.00215	【**】

(佐久間 1997 資 29 一部改変【資料3-2】参照)

文④のノダは、直接的には、文③に対する「見解①」となっており、「前方統括機能」を發揮することで、文段を統括する。さらに、文④「どうも、私のことを言っているように思うのだ。」は、「何故？」という疑問を生じさせる「概略」のノダとして、後方統括機能を發揮することで、文⑤～⑧の「理由」を統括する。つまり、前方にも後方にも統括機能を發揮しており、文段の成立に重要な役割を果たしている。

では、この文④は、母語話者と学習者にはどのように理解されているのだろうか。04-02「私のことを言っているように」の残存率はAJが75.41%であるのに対し、AFが28.79%、04-03「思うのだ。」は、AJが31.15%で、AFが7.58%となっており、いずれも残存率の差の検定において、危険率1%で有意差が認められる。このことは、母語話者が文④の情報を重要だと捉えているのに対し、学習者はそうではないということを表している。これは、文④が、段落の内部にあり、見かけ上、目立たないことと関係があるかもしれない。また、ノダの統括機能が把握できていないために、この文④の情報を重要だと捉えられなかった可能性もある。逆を言えば、ノダの統括機能を把握できていれば、文④が文章の展開上重要な情報であることが理解できると考えられる。

また、いずれの文にもノダが現れる中心段の文⑨～⑪であるが、文⑨は、文①～⑧に対して、逆接の関係で話題を展開し、「日本人はそんなにダメ人間揃いなのだろうか。(いや、そうではない。)」と「のだろうか」という形式の反語によって結論を述べている。

続く文⑩は、「しかし、～のである。」と、逆接的に結論を述べる文型に見えるが、「日本経済や社会が安定に動いているのである。」というの、文⑨に対する接続関係を考えると「補足型」となる。また、文⑩のノダは、文⑨の省略された結論に対する「原因・理由」となっており、前方被統括機能を發揮することで、文⑨に統括されることを積極的に示している⁵¹。文⑩の「しかし」は、文⑨「日本人はそんなにダメ人間揃いなのだろうか。(みなさんはそう思うかもしれないが)」といった含みに対して機能すると考えられる。

そして、文⑪は、文⑩に対する筆者の見解として「のかもしれない」によって、文⑩を統括している。文⑩との文⑪の接続関係は「連鎖型」であるため、まず、文⑩と⑪がまとまり、全体として、文⑨の主題文に対する「原因・理由」として統括されるという多重の展開的構造が捉えられる。このように、ノダの統括機能が理解できていれば、複雑な文章の構造も、適格に捉えることができる。

次に、文⑨～⑪の残存傾向から、母語話者と学習者の理解の特徴を考察する。主題文で

⁵¹ このノダは、松岡 1987:16 の [P, (Q)] に相当する。

ある文⑨09-2-1「日本人は」09-2-1「そんなにダメ人間揃いなのだろうか。」について、AJの残存率が、101.64%、96.72%と高残存率であるのに対し、AFの残存率は、57.58%、54.55%とそれほど高い残存率ではない。また、残存率の差の検定でも、危険率1%で有意差が認められる。同様に文⑩⑪においても、母語話者の残存率が学習者の残存率よりも高いことが示される。このことは、学習者が文章の中心的な内容を把握できていない傾向があることを表している。

また、【表 34】の学習者の残存傾向を参照すると、文⑩の残存率が他の⑨や⑪よりも高いことが示されているが、その理由は、二点考えられる。一点目は、明示されていない文⑨の反語的な結論を捉えきれていない可能性があること、二点目は、文⑩の「しかし、～のである。」という文型を逆接的な結論として捉えてしまった可能性があることである。

以上、母語話者と学習者の理解の反映である残存認定結果から、ノダの統括機能が捉えられていないことが、文章の展開的構造の理解に影響があることが明らかになった。言い換えると、ノダの統括機能を学習することで、文段を意識したより適格な文章理解が可能になるといえよう。

7.2.2. 講義の談話のノダの統括機能と理解の関係

7.2.2.1. 佐久間編著（2014）の要約文を用いた理解研究

7.2.1では、佐久間（1989,1991,1994,1997）の要約文の残存認定結果から、日本語学習者が文章の展開的構造を十全に捉えきれていないことを確認し、その一因として、ノダの統括機能が理解できていない可能性があることを示した。本節では、講義の談話においても、日本語学習者が、ノダによる話段の展開的構造を捉えきれていない可能性があることを論じ、ノダの統括機能を学習する必要性を示す。

第6章では、新書の文章の「のダ」は、文段の終了部に現れる傾向があること、一方、講義の談話の「んダ」は、文段の開始部・展開部に現れる傾向があることを示し、その相違がノダの異なる統括機能に拠ることを明らかにした。本節では、講義の談話に現れるノダが適切に受講者の理解の手がかりとして捉えられているかを、佐久間（2014）の研究成果である日本語母語話者の大学生と中国・韓国語母語話者の留学生の理解データを参照しながら考察する。

佐久間（2014）は、講義A, G, Hについて、受講ノート、受講後の要約文、口頭インタビューの3種の理解データを用いて分析を行っている。特に、要約文は、佐久間編著

(1989) 以来、原文の重要な情報を反映していることが指摘されており、佐久間編著 (2010:240) においては、講義の談話の原話の分析にも有効であることが示されていることから、本研究でも、講義 A の要約文「AYJ (日本語母語話者の要約文)」および、「AYF (日本語学習者の要約文)」の分析結果をもとに考察を進める。

7.2.2.2. ノダの統括機能と講義理解の関係

7.2.2.2.1. 「後方被統括機能」のノダと講義理解の関係

講義 A の話段の開始部に現れるノダは、「前提」のノダが主であるが、話段の課題を提示する(151)の下線部 a や、講義の進行を予め提示する下線部 b、後続の内容の前提情報を提示する下線部 c のようなものに付されるのが典型的である。

(151) 話段 5.2.2.

241 で、じゃあ、なんで、その、「ていうか」というのが、(3)不愉快に感じられる aん
だろうかと、いうことを、えっとー、皆さんのー、まあ、用例を見ながら、えー
っと、考えていきたいと思います。

242 で、あのー、表 [ひょう] の下の用例を見てほしい bんですけども、1 番。

243 これは、あのー、KA さんのものを改作した cんですが、こういうのは、あんまり
ー、腹、腹が立たないと思うんですよ⁵²。

244 「おいしそうだね。」

245 「おいしそうっていうか、体によさそうだよね。」

特に、下線部 b、c のようなノダは、「前提」となる情報自体が、受講者の行動を要求するものであったり、後続の文の理解の前提となる情報であったりと、講義の全体構造からみると、それほど重要なものではないといえる。また、下線部 a のノダが付される「課題提示」の中心文も、これから述べられる話段の展開方法を方向づける点では重要なものであるが、情報内容としては、後に述べられる「解答」のほうが重要であるため、下線部 b、

⁵² 「腹が立たないと思うんですよ[↑]。」のノダは、「これ」「こういうのは」という現場指示と文脈指示の両面を持ち合わせた指示表現の後方照応が示すように、例文に対する先取りの「見解」となっている。しかし、課題提示の中心文で示された「不愉快に感じられる理由」とは逆の見解が述べられていることから、さらに、後続文に対する「前提」としても機能することがわかる。

c、との差はあるが、下線部 a のノダも際立って重要な情報だとはいえない。その裏付けとして、当該箇所の要約文の残存率を(152)に示す。(残存率については、【資料 4-1】を参照。

(152)

CU番号	X単位	要約文 (AY)									
		日本人 33名 (AYJ)					留学生 36名 (AYF)				
		残存数	残存率	X ²	1%	5%	残存数	残存率	X ²	1%	5%
合計	合計	6.63	3.84		合計	合計	6.63	3.84			
241-01	四	0	0.0%				0	0.0%			
241-02	じゃあ、	0	0.0%				0	0.0%			
241-03	なんで、	0	0.0%				3	8.3%	0.01		
241-04	その、	0	0.0%				1	2.8%	1.62		
241-05	「ていうか」というのが、	5	15.2%	0.13			4	11.1%	0.24		
241-06	(3)不愉快に	5	15.2%	0.13			4	11.1%	0.24		
241-07	感じられるんだろうか、ということを、	4	12.1%	0.02			4	11.1%	0.24		
241-08	えっと、	0	0.0%				0	0.0%			
241-09	皆さんの、	0	0.0%				0	0.0%			
241-10	まあ、	0	0.0%				0	0.0%			
241-11	用例を	0	0.0%				1	2.8%	1.62		
241-12	見ながら	0	0.0%				1	2.8%	1.62		
241-13	えーっと、	0	0.0%				0	0.0%			
241-14	考えていきたいと	0	0.0%				1	2.8%	1.62		
241-15	思います。」	0	0.0%				0	0.0%			
242-01	四	0	0.0%				0	0.0%			
242-02	あの、	0	0.0%				0	0.0%			
242-03	表[ひょう]の下の	0	0.0%				1	2.8%	1.62		
242-04	用例を	0	0.0%				1	2.8%	1.62		
242-05	見てほしいんですけども、	0	0.0%				1	2.8%	1.62		
242-06	1番。」	0	0.0%				0	0.0%			
243-01	これは、	0	0.0%				0	0.0%			
243-02	あの、	0	0.0%				0	0.0%			
243-03	KAさんのものを	0	0.0%				0	0.0%			
243-04	改作したんですが、	0	0.0%				0	0.0%			
243-05	こういうのは、	0	0.0%				0	0.0%			
243-06	あんまり、	0	0.0%				0	0.0%			
243-07	腹、	0	0.0%				0	0.0%			
243-08	腹が立たないと	2	6.1%	1.42			0	0.0%			
243-09	思うんですけどね。」	0	0.0%				0	0.0%			

「課題提示」の中心文である文 243-05～07 は、AYJ も AYF も残存率が 10%強であるが、いずれも有意に残存しやすいということはない。さらに、下線部 b のノダの情報内容である 242-03～242-05 が AYF のみ残存数 1 で、下線部 c のノダの情報内容である 243-03～243-04 がいずれも残存数 0 であることから、下線部 a～c の「前提」のノダが付される情報内容は、多少の差はあれど、講義の談話の全体構造からみると、特に重要な情報内容ではないといえる。

このことは、「前提」のノダが「後方被統括機能」を発揮することとつながる。「前提」のノダは、統括力が弱く、より統括力の強い後続文に統括されることを示す。そのため、ノダが付された当該の情報内容は、背景情報となり、情報の重要度が低下すると考えられ

る。講義の談話のノダが「前提」を基調としていることと合わせて考えると、ノダが付される情報内容自体は、それほど重要ではないという傾向が指摘できる。

ノダの付される情報内容の重要度が相対的に低下するという傾向が、談話一般に言えることかどうかは即断できないが、初級の学習項目として、行動・情報要求の「前置き」の「～んですが」が挙げられていることからみれば、少なくとも談話のノダの用いられ方として基本的なものだと考えてよいだろう。初級で学ぶ「～んですが、」も、講義の談話に用いられる「前提」のノダも、後続する文に統括されることを明示する「後方被統括機能」を発揮するという点では一致していると考えてよい。⁵³

学習者は、すでにこのような「前置き」のノダを学習しているため、講義の談話でも「前提」のノダの機能を適切に捉えられていたのではないかと考えられる。⁵⁴

7.2.2.2.2. 「後方統括機能」のノダと講義理解の関係

しかし、話段の開始部に現れるノダは、「前提」だけではない。次の(153)の下線部 a、b のように、話段の「概略要約」の中心文にノダが付される「概略」のノダがある。

(153) 話段 5

199 (8)で、えっと、さて、今度は、話し言葉における言い換えというのを考えてみたいと思います。

200 で、話し言葉における言い換えというのは、まあ、典型的には、さっき言った「つていうか」、もう少し、その、フォーマルな形で言えば、「というか」というものがよく使われます。

201 (8)で、話し言葉における言い換えというのは、基本的に、言い換えというよりも、「言い直し」と思われることのほうが多いaんですね↑。

202 で、あの一、言い換えにも二通りあると思うbんですね↑。

⁵³特に、初級で学ぶ「前置き」のノダは、後続する文が行動・情報要求に限定されているが、いずれも叙述表現の統括機能からみると、統括力の強い文である。「前提」のノダを、後続する文の機能によって、限定しているという点で、初級の項目として妥当であると思われる。

⁵⁴ AYJ、AYF とともに、低い残存率であることから、「前提」のノダが付された文をそれほど重要な情報内容ではないと理解しているという点が共通しているといえる。

文 201 は、添加型の接続表現「で」で、話題を展開し、先行文と同一の提題表現を改めて「話し言葉における言い換えというのは、」と明示し、叙述表現で、「言い換えというよりも、『言い直し』と思われることのほうが多い」と、半ば唐突に概略的に話段の結論を述べる「概略要約」の中心文である。ノダが付されることで、後続文に結論に必要な情報が補足されることが予測されることから、ノダが「概略」として、「後方統括機能」を発揮しているといえる。⁵⁵

次に、要約文の残存率をみると、以下の(154)のようになっている。

(154)

CU番号	X単位	要約文 (AY)									
		日本人 33名 (AYJ)					留学生 36名 (AYF)				
		残存数	残存率	X ²	1%	5%	残存数	残存率	X ²	1%	5%
合計	合計		6.63	3.84	合計	合計		6.63	3.84		
199-01	㊦で	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
199-02	えっと	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
199-03	さて	1	3.0%	2.92			1	2.8%	1.62		
199-04	今度は	10	30.3%	8.67	多	多	4	11.1%	0.24		
199-05	話し言葉における	14	42.4%	25.1	多	多	10	27.8%	16.2	多	多
199-06	言い換えというのを	12	36.4%	15.8	多	多	6	16.7%	2.8		
199-07	考えてみたいと	6	18.2%	0.77			0	0.0%	3.46		
199-08	思います。」	2	6.1%	1.42			0	0.0%	3.46		
200-01	㊦	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
200-02	話し言葉における	8	24.2%	3.65			16	44.4%	57.2	多	多
200-03	言い換えというのは	7	21.2%	1.94			7	19.4%	5.11		
200-04	まあ	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
200-05	典型的には	0	0.0%				2	5.6%	0.47		
200-06	さつき	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
200-07	言った	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
200-08	「っていうか」	10	30.3%	8.67	多	多	28	77.8%	214	多	多
200-09	もう少し	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
200-10	その	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
200-11	フォーマルな	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
200-12	形で	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
200-13	言えば	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
200-14	「というか」というものが	3	9.1%	0.45			3	8.3%	0.01		
200-15	よく	6	18.2%	0.77			8	22.2%	8.12	多	多
200-16	使われます。」	6	18.2%	0.77			10	27.8%	16.2	多	多
201-01	㊦で	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
201-02	話し言葉における	14	42.4%	25.1	多	多	7	19.4%	5.11		多
201-03	言い換えというのは	14	42.4%	25.1	多	多	4	11.1%	0.24		
201-04	基本的に	1	3.0%	2.92			0	0.0%	3.46		
201-05	言い換えというよりも	4	12.1%	0.02			6	16.7%	2.8		
201-06	「言い直し」と	14	42.4%	25.1	多	多	7	19.4%	5.11		多
201-07	と思われることのほうが	9	27.3%	5.89	多	多	7	19.4%	5.11		多
201-08	多いんですね↑。」	3	9.1%	0.45			2	5.6%	0.47		
202-01	㊦	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
202-02	あのー	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
202-03	言い換えにも	2	6.1%	1.42			0	0.0%	3.46		
202-04	二通り	1	3.0%	2.92			0	0.0%	3.46		
202-05	あると	1	3.0%	2.92			0	0.0%	3.46		
202-06	思うんですね↑。」	0	0.0%				0	0.0%	3.46		

佐久間研究代表者 (2014:177 一部抜粋)

⁵⁵ 田野村 (1990) のノダの「既定性」によって、ノダが付された情報自体を強制的に受け入れることを求められるが、論理的な談話であれば、後に必要な情報が補足されることが期待される。

文 201-02,03,06 の残存率について、AYJ は 42.4% と高く、危険率 1% で有意に残存することから、この情報は、受講者にとって重要な情報だと認識されたといえる。このことは、7.3.1.1 で扱った「前提」のノダの残存率が低いことと対照的であり、話段の開始部にノダが現れたとしても、その統括機能によって、話段の展開的構造の理解のし方が異なることを表している。

また、文 201-2,3,6 について、AYF は、残存率が 19.4% で、危険率 5% 水準で有意に残存することから、学習者にとっても重要な情報であると理解されていると考えられるが、AYJ の残存率と比較すると、その理解が十分とはいえない。

また、(153)、(154)と同様、話段の開始部に「概略」のノダが現れている例が、以下の(155)であるが、ここでも、AYJ と AYF の残存率に差が見られる。

(155) 話段 5.2.3

331 それから一、「ていうか」が、あの一、不愉快に感じられる理由の二つ目ですけれども一、(3)「ていうか」が、理由を、あの、言い直しを表す言葉なのに、言い直す言葉がない時にも用いられるということである、ということです。

332 で、あの一、たとえば、それは、8番とか9番ですね↑。

333 話題の導入に使うんですね↑。

334 「っていうか一、今日だるくない↑。」

335 「っていうか、今日すごく寒いよね↑。」

336 「何が『っていうか』なんだ一。」

337 言い換えられる言葉がないのに、なんで、いきなり「ていうか」が出てくるか。

338 この気持ち悪さ。

339 これが、「ていうか」が、あの一、不愉快に感じられる二つ目の要因です。

340 でも、こうした用法は、別に、その、「ていうか」固有のものではなくて一、たとえば、「しかし」にもありますよね↑。

文 331 の添加型の接続表現「それから一、」と『「ていうか」が、あの一、不愉快に感じられる理由の二つ目ですけれども一、』という提題表現で話題を開始し、『「ていうか」が、理由を、あの、言い直しを表す言葉なのに、言い直す言葉がない時にも用いられるという

ことである、ということです。」と「概略」的な叙述表現があり、「概略要約」の中心文となっており、文 332 の同列型の接続表現「たとえば」から、補足的な情報が述べられる。文 333 の「話題の導入に使うんですね↑。」のノダは、文 331 の「換言」として機能しているが、「話題の導入に使う」が唐突な情報のため、さらに後続文に補足情報を求める「概略」の機能も有することになる。文 334 からは「話題の導入」の具体例が示され、情報が補足されるという展開となっている。文 333 のノダは、先行文 331 をより具体的に換言すると同時に、後続文 334 以降に補足情報を求めるものであるが「後方統括機能」を有するという点で(154)と共通する。また、文 333 は、提題表現「『っていうか』というのは、」が省略されているということから、形式面でも、(154)の文 201 と対応している。

残存率は、以下の(156)のようにになっている。話段 5.2.3 という低次元の話段であること⁵⁶、333-01,02 は、話段 5.2.3 の「概略要約」の中心文 331 を具体的に「換言」しているということから、残存率は(155)のノダよりも低い、AYJ と AYP の差が認められる。

⁵⁶話段 5.2.3 の中心文である文 331 の 14~16 の残存率は、危険率 1% で有意差が認められるが、残存率は 30.3% とそれほど高くない。これは、5.2.3 の中心文ではあるが、話段の次元が相対的に低いことから、要約文に選択されにくいということがあると考えられる。

(156)

CU番号	X単位	要約文 (AY)									
		日本人 33名 (AYJ)					留学生 36名 (AYF)				
		残存数	残存率	X ²	1%	5%	残存数	残存率	X ²	1%	5%
		合計	合計		6.63	3.84	合計	合計		6.63	3.84
331-01	隠れから一	0	0.0%				2	5.6%	0.47		
331-02	「ていうか」が	0	0.0%				1	2.8%	1.62		
331-03	あのー	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
331-04	不愉快に	4	12.1%	0.02			0	0.0%	3.46		
331-05	感じられる	3	9.1%	0.45			0	0.0%	3.46		
331-06	理由の	6	18.2%	0.77			5	13.9%	1.17		
331-07	二つ目ですけれども一	9	27.3%	5.89		多	6	16.7%	2.8		
331-08	(3)「ていうか」が	2	6.1%	1.42			3	8.3%	0.01		
331-09	理由を	1	3.0%	2.92			0	0.0%	3.46		
331-10	あのー	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
331-11	言い直しを	1	3.0%	2.92			1	2.8%	1.62		
331-12	表す	1	3.0%	2.92			1	2.8%	1.62		
331-13	言葉なのに	1	3.0%	2.92			1	2.8%	1.62		
331-14	言い直す	10	30.3%	8.67	多	多	7	19.4%	5.11		多
331-15	言葉が	10	30.3%	8.67	多	多	5	13.9%	1.17		
331-16	ない時にも	10	30.3%	8.67	多	多	7	19.4%	5.11		多
331-17	用いられるということである、ということです。」	3	9.1%	0.45			6	16.7%	2.8		
332-01	四	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
332-02	あのー	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
332-03	たとえば	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
332-04	それは	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
332-05	8番とか9番ですね。」	0	0.0%				1	2.8%	1.62		
333-01	課題の導入に	9	27.3%	5.89		多	4	11.1%	0.24		
333-02	使うんですね。」	7	21.2%	1.94			2	5.6%	0.47		
334-01	「ていうかー	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
334-02	今日	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
334-03	だるくない。」	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
335-01	「ていうか	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
335-02	今日	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
335-03	すごく	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
335-04	寒いよね。」	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
336-01	「何が	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
336-02	「ていうか」なんだ。」	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
337-01	言い換えられる	8	24.2%	3.65			5	13.9%	1.17		
337-02	言葉が	8	24.2%	3.65			5	13.9%	1.17		
337-03	ないのに	5	15.2%	0.13			4	11.1%	0.24		
337-04	なんで	0	0.0%				1	2.8%	1.62		
337-05	いきなり	5	15.2%	0.13			2	5.6%	0.47		
337-06	「ていうか」が	2	6.1%	1.42			2	5.6%	0.47		
337-07	出てくるか。」	3	9.1%	0.45			4	11.1%	0.24		
338-01	口の	1	3.0%	2.92			0	0.0%	3.46		
338-02	気持ち悪さ。」	2	6.1%	1.42			0	0.0%	3.46		
339-01	口れが	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
339-02	「ていうか」が	1	3.0%	2.92			0	0.0%	3.46		
339-03	あのー	1	3.0%	2.92			0	0.0%	3.46		
339-04	不愉快に	5	15.2%	0.13			1	2.8%	1.62		
339-05	感じられる	4	12.1%	0.02			2	5.6%	0.47		
339-06	二つ目の要因です。」	8	24.2%	3.65			1	2.8%	1.62		
340-01	四も	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
340-02	こうした	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
340-03	用法は	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
340-04	別に	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
340-05	その	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
340-06	「ていうか」固有のものではなくて一	0	0.0%				1	2.8%	1.62		
340-07	たとえば	0	0.0%				0	0.0%	3.46		
340-08	「しかし」にも	0	0.0%				1	2.8%	1.62		
340-09	ありますよね。」	0	0.0%				1	2.8%	1.62		

331 - 01,02 の残存率は、AYJ が 27.3%、21.2%であり、331-01 は危険率 5%で有意に残存することが示される。それに対して、AYF の残存率は、11.1%、5.6%で、いずれも有

意に残存するとはいえないことから、学習者には、この「概略」のノダが十分に理解されていない可能性が示唆される。

また、ノダを伴っているわけではないが、ノダに類似するトイウコトダを伴う文 331 の「概略要約」の中心文についても、AYJ と AYP の残存率に差が見られる。文 331 - 13~15 の残存率は、AYJ がいずれも 30.3% で、危険率 1 % で有意に残存しているが、AYP は 19.4%、13.9%、19.4% で、331 - 13、15 が危険率 5% で有意に残存している。このことは、ノダとの関わりとは別に、学習者の「概略要約」の中心文に対する理解が十分ではない可能性が指摘できる。

以上、講義の談話のノダについて、特に話段の開始部には、「前提」と「概略」という統括機能の異なるノダが現れることを確認し、ノダが付される情報がどのように理解されているのかを要約文の残存傾向から分析した。その結果、日本語母語話者は、「前提」と「概略」のノダが理解されているが、日本語学習者は、「前提」のノダは理解されているが、「概略」のノダの理解が十分ではないことがわかった。

その原因は、「前提」のノダの一部である依頼の「前置き」のノダを初級段階で学習していること、講義の談話のノダが「前提」を基調としていることで、話段の開始部に現れるノダは「背景情報」であると理解してしまっているためではないかと考えられる。しかし、用例数は少ないとはいえ、「概略」のノダは、話段の開始部に現れ、「後方統括機能」を發揮し、後続文を統括する「概略要約」の中心文となることから、談話の展開的構造を捉える上で重要な情報となる。そのため、学習者にとっては、「概略」のノダの理解が必要だと考えられる。

7.3. 講義 G を用いたノダの統括機能の学習方法

7.3.1. 講義 G の特徴

講義 G は、2001 年度以降、筆者も所属する早稲田大学の「文章・談話研究会 (WTDK)」の共同研究において収集した全 12 種の講義 A~F の談話資料から、科学研究費補助金基盤研究 (B)「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」(課題番号 23320110, 研究代表者: 佐久間まゆみ) を受け、2011 年に新たに加えられたものである。

講義 A と同じ 40 代男性教員による「社会言語学」の約 96 分間の授業で、「日本語の人称表現」を全 616 文・7437CU で解説するもので、講義 A より時間が長く、講義内容の情報

や話段の数と種類も多いが、「Ⅱ.展開部」の話段に列举が多いため、さほど、複雑な展開ではない。(佐久間編著 2014:15)

講義 G を取り上げた理由は、上記の「①話題が身近であり、複雑な展開ではない」ことに加え、「②多様な統括機能のノダが話段の成立に関わっている」こと、「③同一者による、ほぼ同一内容の新書の文章がある」こと、さらに、「④要約文、受講ノート、受講後のインタビューと 3 種の理解データがある」ことが挙げられる。

講義 G の談話資料は、佐久間研究代表者 (2014:264-280)、話段は、講義者 G 自身が認定したもの (同 : 40-43) を使用する。

講義 G の文字化資料、話段情報掲載

7.3.2. 講義 G の話段とノダの統括機能の関係

講義 G は、全 616 文からなり、5 次元までの話段の認定によると、1 次元の話段が 3、2 次元の話段が 10、3 次元が 44、4 次元が 88、5 次元が 46 となっている (佐久間編著 2014:40-43)。本節では、それぞれの次元の話段の成立に対して、ノダの統括機能がどのように関与しているのかを分析する。次の【表 35】は、講義 G の話段の開始文・終了文に、どのような統括機能のノダが現れるのかを表したものである。

まず、縦軸は、いずれかの話段の開始・終了に該当する文が昇順になっている。話段番号の後ろにある「s」は開始を、「e」は終了をそれぞれ表し、「se」は、1 文で成立している話段で、開始と終了を含むことを表す。ノダの出現数の集計は、各話段ごとに独立して行っている。これは、ノダの統括機能が、どのレベルの話段の成立に関与しやすいのかを分析するためである。

次に、横軸は、左側から、話段、話段の開始と終了に対応する文番号、その文に現れるノダの統括機能の順に並んでいる。話段は、左側から 1 次元～5 次元まで独立して示している。ノダの統括機能は、4 種の大分類をもとに、講義の談話に対応する 8 種の小分類に分類しており、それぞれの統括機能を有するノダが現れた文に「○」を付している。1 文に複数の機能が付される場合があるが、これには、2 通りの可能性がある。

一つは、次の(157)のように、1 文中に複数のノダが現れる場合、もう一つは、(158)のように、ノダが複数の統括機能を有する場合である。

(157) 話段 3.1.3

G-150 が、その、えっとー、人称表現な a んですけれども、これについては皆さん、えっとー、それぞれ、えっとー、こだわりがある b んじゃないかなっていうふうに思います。

(講義 G)

話段 3.1.3 は、文 150 のみの一文一段の話段であるが、下線 a の「人称表現なんですけれども」という「話題」を取り上げるノダと、下線 b の「こだわりがあるんじゃないかなっていうふうに思います。」という「見解」を述べるノダが現れているため、それぞれの機能に「○」を付している。

(158)

学生 3 :

G-189 えー、何だろうなあ、(2)え、そこに自分の個性を出せるというふうに思います。

G-190 えー、たとえば、えー、何だろうなあ、「私」っていうのは、たとえば、うー、敬語っぽい、そういう公式な場での 1 人称ですし、たとえば「ぼく」でしたら、えー、友達と話す時は「おれ」っていうような人称を使いますし、先生と話す時は、敬語であっても、もう少しこう、親しみを出したい時、あるいはもう少しビジネスチックな場合であれば、「ぼく」といったような形で意識的にもう少し一歩距離を進めてみますし、あるいはそうですよね、漫画やドラマになれば、たとえば「おら」とか「わし」とか、いろいろな 1 人称があってそれによってその人の性格だったり年齢だったりっていうのが出るのが、面白いなあと思ってます。

講義者 G :

G-191 はい、ありがとうございます。

話段 3.2.6

G-192 なんか、もう、あの、今日の講義の内容を先取りしてくれたような感じですけども、
うん、その通りな a んですね。

G-193 とても、あの、いい指摘だと思います。

G-194 個性が出るということな b んですね。

(講義 G)

文 192 の下線 a のノダは、学生 3 の発言に対する「見解①」のノダであるが、同時に、後続文に対する「前提」としても機能しており、後続文 194 の下線 b「換言」のノダによって、統括されるという関係になっている。本研究は、ノダの機能数を基準として割合を出しているため、文 192 の下線 a のノダのように、一つのノダに複数の機能が認められる場合も、それぞれの機能を別個に集計することにする。そのため、ノダの出現数と機能数は、必ずしも一致しない。

また、ノダの機能別の集計は、話段の開始、あるいは終了に関わる文を基準に行っており、ある機能のノダが複数の話段の開始・終了文に現れていたとしても、1として扱う。これは、どのような機能のノダが、話段の開始・終了文に現れやすいのかということ进行分析するためである。それぞれのノダの機能総数に対して、話段の開始・終了文に現れる割合を分析することで、どのような統括機能が、話段の開始や終了に現れ、話段の成立に関与するかの傾向を捉えられる。

【表 35】講義 G の話段の開始・終了とノダの統括機能の対応関係

話段					文番号	ノダの機能												
1次元	2次元	3次元	4次元	5次元		前置き	話題	課題	観略	換言	見解①	見解②	原因					
1s	1s	1.1se				001												
		1.2s				002												
		1.2e				005												
		1.3s	1.3s	1.3.1s				006										
				1.3.1e				007										
				1.3.2s				008	○									
				1.3.2e				014										
				1.3.3s				015										
				1.3.3e				018										
				1.3.4s				019	○									
				1.3.4e				023										
				1.3.5s				024										
				1.3.5e				039										
				1.3.6s				040										
				1.3.6e				042	○									
				1.4s	1.4s	1.4.1s				043								
						1.4.1e				044								
						1.4.2s				045								
		1.4.2e						048										
		1.4.3s						049										
		1.4.3e						058	○									
		1.4.4s						059										
		1.4.4e				063		○										
		1.5s					064											
		1.5e					065											
		2s	2s	2.1s	2.1.1s			066										
					2.1.1e			070										
					2.1.2s			071										
				2.1e	2.1.2e			072										
					2.2s			073										
				2.2e			075											
				2.3s			076											
				2.3e			078											
2.4s	2.4s			2.4.1s	2.4.1.1s			079										
					2.4.1.1e			082	○									
					2.4.1.2s			083										
					2.4.1.2e			085										
					2.4.1.3s			086										
					2.4.1.3e			087										
				2.4.1e	2.4.1.4s			088	○		○							
		2.4.1.4e				089												
		2.4.2s				090		○										
		2.4.2e	2.4.2.1se			091												
			2.4.2.2s			106												
			2.4.2.2e			107												
2.4.2.3s				111						○								
2.4.2.3e				112														
2.4.2.4s				117														
2.4.2e	2.4.2.4e			118														
	2.4.3s			119														
	2.4.3.1se			121														
2.4.3e	2.4.3.2s			122														
	2.4.3.2e			123														
	2.4.3.3s			124														
	2.4.3.3e			125														
	2.4.3.4s			126														
	2.4.3.4e			127														
2.4.4s	2.4.4.1se			137														
	2.4.4.2s			138														
	2.4.4.2e			147														
	2.4.4.3s			148														
3s	3s	3.1s	3.1.1se			149					○							
			3.1.2se			150					○							
			3.1.3se			151												
		3.1e	3.1.4s			152												
			3.1.4e			153												
		3.2s	3.2s	3.2.1s			155	○		○								
				3.2.1e			156	○										
				3.2.2s			168											
				3.2.2e			169	○										
				3.2.3s			178											
				3.2.3e			179	○										
				3.2.4s			185											
				3.2.4e			186											
				3.2.5s			191											
				3.2.5e			192											
3e	3e	3.2.6s			204													
		3.2.6e			205													
		3.2.7s			213													
		3.2.7e			214													
		3.2.8s			218													
		3.2.8e			219													
		4s	4s	4.1se			220											
				4.2s			223											
4.2e					224													
4.3s					225													
4.3e					226													
4.4se					227													
4.5se					228													
4e	4e	4.6s			230													
		4.6e			230													

語段					文番号	ノマの機能										
1次元	2次元	3次元	4次元	5次元		後方接続機能		前方接続機能		前方接続機能		原因				
					前置き	話題	課題	概略	換言	見解①	見解②					
11s	5s	5.1s			231											
		5.1e			233											
		5.2s			234											
		5.2e			235											
		5.3s	5.3.1s	5.3.1s		236										
				5.3.1e		238										
				5.3.2s		239										
				5.3.2e		242										
				5.3.3s		243										
				5.3.3e		247										
				5.3.4s		248			○	○						
				5.3.4e		251										
				5.3.5s		252										
				5.3.5e		255										
		5.3e		5.3.6se		256										
		5.4s	5.4.1se	5.4.1se		257										
				5.4.2s		258						○				
				5.4.2e		262										
				5.4.3s		263										
				5.4.3e		267										
				5.4.4s		268										
				5.4.4e		269										
				5.4.5s		270										
				5.4.5e		277										
				5.4.6s		278										
		5.4.6e		284												
		5.4e	5.4.7s		285		○									
			5.4.7e		286							○				
		5.5s	5.5.1s	5.5.1s		287			○							
				5.5.1e		289										
				5.5.2s		290										
				5.5.2e		293										
				5.5.3se		294										
				5.5.4s		295										
				5.5.4e		298										
				5.5.5se		299										
				5.5e		5.5.6se		300								
				5.6s	5.6.1s	5.6.1.1s		301								
		5.6.1.1e				304										
		5.6.1.2s				305		○	○							
		5.6.1.2e				306						○				
		5.6.1.3s				307										
		5.6.1.3e				311										
		5.6.1.4s				312										
		5.6.1.4e				318										
		5.6.1.5s				319										
		5.6.1.5e				325										
		5.6.1.6s		326												
		5.6.1.6e		328												
		5.6.1e		5.6.1.7se		329										
		5.6.2s	5.6.2.1s	5.6.2.1s		330	○									
				5.6.2.1e		335										
				5.6.2.2se		336										
				5.6.2.3s		337		○		○						
				5.6.2.3e		356							○			
		5.6.3s		357			○	○	○	○						
		5.6e		5.6.3e		371										
		6s	6.1s	6.1s		372	○	○								
				6.1e		380										
				6.2s		381										
				6.2e		383							○			
				6.3s		384										
				6.3e		385						○				
				6.4s	6.4.1s	6.4.1s		386								
						6.4.1e		387								
						6.4.2s		388								
						6.4.2e		389								
		6.5s	6.5.1s	6.5.1s		390										
				6.5.1e		405	○									
				6.5.2s		406		○								
		6.5e		6.5.2e		416	○									
		6.6s	6.6.1s	6.6.1s		417	○									
				6.6.1e		418										
				6.6.2s		419		○								
				6.6.2e		420		○								
				6.6.3s		421										
				6.6.3e		427										
				6.6.4s		428		○								
				6.6.4e		432						○				
				6.6.5s		433										
				6.6.5e		438							○			
		6.6e	6.6.6s		439											
			6.6.6e		441											
		6.7se		6.6.6e		442										
		6.8s	6.8.1s	6.8.1.1e		443						○				
				6.8.1.2se		444	○									
				6.8.1.3s		445										
				6.8.1.3e		448										
				6.8.1.4s		449										
				6.8.1.4e		450										
				6.8.1.5s		451		○								
				6.8.1.5e		457										
				6.8.2s		458										
				6.8.2e		465							○			
		6e	6.8e	6.8.2e		465										

話段					文番号	ノダの機能								
1次元	2次元	3次元	4次元	5次元		後方統括機能		前方統括機能		前方統括機能				
						前置き	話題	課題	概略	換言	見解①	見解②	原因	
	7s	7.1s	7.1.1s		466									
			7.1.1e		467									
			7.1.2se		468				○	○				
			7.1.3s		469	○								
			7.1.3e		472									
			7.1.4s		473									
			7.1.4e		474									
			7.1.5s		475									
			7.1.5e		479						○			
			7.1.6s		480	○					○			
			7.1.6e		482						○			
			7.1.7s		483					○				
		7.1e	7.1.7e		484									
		7.2s			485	○		○						
		7.2e			504						○			
		7.3s	7.3.1e		505	○			○		○			
			7.3.2e		506						○			
			7.3.2e		509						○			
			7.3.3s		510									
			7.3.3e		522	○								
			7.3.4s		523			○						
			7.3.4e		526									
	7e	7.3e												
	8s	8.1s			527			○						
		8.1e			528									
		8.2s	8.2.1s	8.2.1.1s	529	○					○			
				8.2.1.1e	531						○			
				8.2.1.2se	532	○					○			
				8.2.1.3s	533									
				8.2.1.3e	534					○				
				8.2.1.4s	535	○								
				8.2.1.4e	537									
				8.2.1.5s	538									
				8.2.1.5e	539	○								
				8.2.1.6s	540									
			8.2.1e	8.2.1.6e	547									
			8.2.2s	8.2.2.1s	548									
				8.2.2.1e	549	○				○				
				8.2.2.2s	550									
				8.2.2.2e	552									
				8.2.2.3s	553									
				8.2.2.3e	558									
		8.2e	8.2.2e											
		8.3s	8.3.1se		559			○						
			8.3.2s		560									
			8.3.2e		562									
			8.3.3se		563	○					○			
			8.3.4se		564	○					○			
			8.3.5s		565	○	○							
			8.3.5e		568						○			
			8.3.6se		569						○			
		8.3e	8.3.7se		570									
		8.4s			571				○					
		8.4e			580									
		8.5s	8.5.1e		581									
			8.5.2se		582									
			8.5.3s		583									
			8.5.3e		584									
			8.5.4s		585				○					
			8.5.4e		586						○			
		8.5e	8.5.4e											
		8.6s	8.6.1s	8.6.1.1e	587									
				8.6.1.2s	588									
				8.6.1.2e	594									
				8.6.1.3s	595									
				8.6.1.3e	597									
			8.6.2s	8.6.2.1s	598									
				8.6.2.1e	599	○	○		○					
				8.6.2.2s	600	○								
				8.6.2.2e	601									
				8.6.2.3se	602									
				8.6.2.4se	603						○			
lle	8e	8.6e	8.6.2e											
llls	9s	9.1se			604									
		9.2s			605									
		9.2e			606	○								
		9.3s			607									
		9.3e			608									
		9.4s			609									
		9.4e			611			○						
		9.5s			612									
		9.5e			613									
llle	9e				614									
	10s				616									
	10e													
話段総数	3 [100.0%]	10 [100.0%]	44 [100.0%]	88 [100.0%]	46 [100.0%]	機能総数	97 [100.0%]	18 [100.0%]	14 [100.0%]	14 [100.0%]	20 [100.0%]	39 [100.0%]	5 [100.0%]	1 [100.0%]
話段開始	ノダ有 0 [0.0%]	2 [20.0%]	10 [22.7%]	38 [43.2%]	13 [28.3%]	話段開始	29 [29.9%]	16 [88.9%]	5 [35.7%]	6 [42.9%]	4 [20.0%]	7 [17.9%]	0 [0.0%]	0 [0.0%]
話段終了	ノダ有 0 [0.0%]	1 [10.0%]	9 [20.5%]	23 [26.1%]	15 [32.6%]	話段終了	17 [17.5%]	4 [22.2%]	2 [14.3%]	2 [14.3%]	7 [35.0%]	20 [51.3%]	0 [0.0%]	0 [0.0%]
	ノダ無 3 [100.0%]	8 [80.0%]	34 [77.3%]	50 [56.8%]	33 [71.7%]									
	ノダ有 3 [100.0%]	9 [90.0%]	35 [79.5%]	65 [73.9%]	31 [67.4%]									
	ノダ無 0 [0.0%]	1 [10.0%]	9 [20.5%]	23 [26.1%]	15 [32.6%]									

まず、各話段とノダの統括機能の関係から見ていく。話段の開始文にノダが用いられる割合が最も高いのは、4次元の話段であり、88の話段中38(43.2%)の話段の開始文にノダが現れている。続いて、5次元の28.3%、3次元の22.7%、2次元の20.0%となり、1次元の話段の開始には、ノダが現れることはない。表現形式としては、ノダ以外を選択する

ことが可能であることを考えると、4次元の43.2%は、非常に高い割合であり、2,3,5次元の話段の20%代も、決して低い割合ではない。おおまかに見ると、低次元の話段に行くほど、話段の開始文にノダが用いられる傾向を読み取ることができる。

この傾向は、話段の終了文に現れるノダにおいてより顕著である。最も高い割合の5次元の32.6%から、4次元の26.1%、3次元の20.5%、2次元の10.0%、1次元の0.0%と、高次元の話段に行くに従って、話段の終了文に現れるノダの割合が減少している。

新書の文章は、文段の終了部にノダが現れ、高次元の文段を統括する傾向が見られたが、講義の談話に関しては、ノダは、低次元の話段の統括に関与する傾向があるという第6章の分析と一致する。また、ノダが現れる話段の開始文と終了文を比較しても、5次元を除いて、話段の開始文にノダが現れる割合が高い。これも、第5章、第6章の分析結果と一致している。

ここで、「傾向がある」と表現したのは、ノダが話段の開始・終了文に現れるからとて、必ずしも、話段の成立に直接的に関与していない可能性があるためである。詳しくは、次のノダの機能別の分析で述べることにするが、ここでは、話段の開始・終了文に現れるノダの全てが話段の成立に直接的に関与するわけではないが、そのような例は少数であり、全体的な傾向は変わらないということを述べるに留める。

次に、ノダの機能別に、話段の開始・終了文に現れる割合を分析する。まず、話段の開始文に現れるのは、後方被統括機能を有する「話題」の88.9%を筆頭に、「課題」の35.7%、「前提」の29.9%、後方統括機能を有する「概略」の42.9%が高く、いずれも、話段の終了文に現れる割合を上回っている。一方、話段の終了文に現れるノダの割合は、前方統括機能を有する「見解①」の51.3%、「換言」の35.0%が高く、いずれも、話段の開始文に現れる割合を上回っている。つまり、ノダの統括機能の方向によって、話段の開始文、あるいは、話段の終了文に現れる傾向が決まっているのである。このことは、統括機能ごとにノダが話段の成立に関与する傾向に違いがあることを示している。

7.3.3. 講義の話段を捉えるのに有効な「文型」

それでは、具体的に、講義Gの「段」の把握に有効な接続表現とノダによる「文型」を確認していく。講義Gにおいて、「文型」として最も機能が安定しているのは、「話題」である。16例のうち全てが何らかの話段の開始文に現れるが、特に、比較的高次の話段である2次元の話段の開始に現れる2例のノダは、すべてこの「話題」のノダである。文型は

「[転換/添加]型の接続表現+んです [が/ケレドモ]」で表される。

(159)

話段 2.4.3 2.4.3.1の開始

G-118 それから、えっと、二つ目ですけれども、言葉は選択である。

話段 2.4.3 2.4.3.2の開始

G-119 種類があるということと、選択である、選ぶということとは実は密接な関係があります。

G-120 何種類もあるから、その中から一つ選ぶことになるんですよね。

G-121 人間は同時に二つのことが言えませんから、どれにしようかなと思って、あっ、これで行こう、いやー、朝食を摂るじゃなくて硬いから、ま、ご飯を食べるで行こうと、パパッと考えてですね、選ぶということがあります。

話段 2.4.3 2.4.3.3の開始

G-122 先ほども話と重なりますけれども、えっと、話し手はですね、話し手自身の属性、まあ、属性というのはたとえば、性別、あの一、男か女かであるとか、あるいは、年代であるとか、どこの出身であるとか、まあ、あの経済的に裕福であるとか、そうではないとか、あるいは自分の性格が、まあ、明るいとか、あの、そうではないとか、(と) いったようなことが関わる。

G-123 そういう自分のその、えっと、置かれたその環境、あるいは、何でしょう、そういうキャラクターみたいなものがあって、それに応じて、その人の選ぶ言葉が決まるということが一つあります。

話段 2.4.3 2.4.3.4の開始

G-124 それから、えっと一、聞き手との関係という、先ほども言いましたけれども、あの一、たとえば、このように私がですね、えっと一、1人、あの、壇上に立って、あの、ま、40名から50名の方を前にして話をする時と、それからこのあとですね、どなたかが質問にいらして、一対一で話す時とでは、当然話し方が変わります。

G-125 そして、また、私が、たとえばこのあとですね、あの、親しい友達に会って話をしたりとか、あるいは、家[うち]へ帰ってですね、家族と会話をしたりする時、その時もまた、あの、言葉が変わるだろうと思うわけです。

話段 2.4.4 2.4.4.1の開始

G-126 で, 三つ目なんですけれども, あの, たい, 大切なことは, 言葉は変化するという
ことです。

G-127 で, もちろん, その, 自分自身としてはですね, あの, 個々人, 自由に言葉を選んで
いるつもりかもしれませんがけれども, たとえば, その, 自分は男だから, あのー, 「あ
たし」といわ, 言わないで「ぼく」と言うということがありますよね。

(159)は、「添加型」の接続表現「それから」によって、文 118 から新たな 4 次元の話段「2.4.3」
が開始し、「二つ目ですけれども」と、二つ目の話題に展開したことがわかる。そして、文
126、添加型の接続表現「で」と、「三つ目なんですけれども」によって、話題が三つ目に
展開することが示される。文 118 のように、ノダがなくても、新たな話段の開始を表すこ
とができるが、その違いは、ノダによる「後方被統括機能」によってに捉えることができ
る。文 126 のようなノダを「強調」とするものもあるが、そうすると、「三つ目」を強調す
るということになる。しかし、実際は、そうではなく、ノダが「強調」をするとすれば、
それは、後続の情報であろう。「(転換/添加)型の接続表現+んですケレドモ」のノダは、
「後方被統括機能」、つまり、後続文により統括力の強い文が現れる事を示すため、「三つ
目なんですけれども」と聞くと、「それはなんだろう？」その後ろの情報を求めることにな
る⁵⁷。そのため、後続の情報が「強調」されるということにつながる。このことは、後続す
る内容が、その話段の中心的内容(中心文)となることとも関連すると考えられる。

同様に、後方被統括機能を発揮し、話段の開始を表す「文型」としては、「課題」がある。
14 例中 5 例 (35.7%) が話段の開始に現れており、その話段において、「解答」が続くこと
が予測できるため、「話題」よりも、より話段の手がかりとしての情報が多い。文型は「転
換型の接続表現+ [なぜ/どうして]+ノカ (+思考動詞)」である。

次の(160)の文 337 は、「日本語には「彼女」というのがなかった」ということを、「前提」
のノダによって、前提知識として提示し、その上で、「なぜ「彼女」というものができたの
かなということも考えてみようと思って」と、「なぜ、～のかな」+思考動詞によって、新
たな「課題」を提示している。

⁵⁷石黒 (2003) の「充足機能」を参照。

(160)話段 5.6.2.3

G-337 で, あの, もともと, あの, 日本語の中ではですね, 「彼女」というのがなかったんですけれども, なぜ, 「彼女」というものができてきたのかな, というのもちよつと考えてみようと思つて, 「彼女」成立の謎, ということ挙げました。

(講義 G)

文 337 の「課題」の「文型」によって、新たに展開される話段 5.6.2.3 が、「どうして、日本語に「彼女」ができたのか」に解答する話段だということが予測できる。また、「課題」のノダは、思考動詞を伴うものばかりではないが、話段の開始に現れる「課題」の「文型」は、全て思考動詞、もしくはそれに準じる形式を伴っている。次の(161)の文 505 「～つていうと」は、「～と考えると」とパラフレーズできることから、(160)と同様、「課題」の「文型」だといえる。

(161) 話段 7.3 7.3.1

G-505 で, えつと, 先ほどですね, あのー, えつと, 中国の方からですね, あの, 先生に対して, まあ, 「あなた, というふうに, あの, 呼びかけて, る, 呼びかけるのは, 日本語の場合, 失礼だ。」ということがあつて, 全くその通りなんですけれども, でも, 「あなた」というのがそもそも失礼なのかどうかつていうと, 実はそうでもないかもしれないんですね。

(講義 G)

文 505 は、転換型の接続表現「で」によって、新たな話段が開始するが、この「で」が「あなた」というのがそもそも失礼なのかどうかつていうとの「のつていうと」部と共起し「課題」の「文型」を成立させていると考えられる。直線の逆接型の接続表現「でも」は、あくまでも、文内部の「節」との関係を表すものであり、話段の開始と直接関わるわけではないので、ここでは、「文型」から除外した。この文 505 は、「課題」に対して、直後の節でノダの「見解①」による解答を行っている。しかし、このノダは、直接的な解答とはなっておらず、後続に情報を求める「前提」のノダとしても機能している。そのため、話段 7.3 は、「あなた」というのがそもそも失礼なのかどうかの解答の話段となっている。この例でも、「課題」の「文型」によって、話段の内容が予測できる。

話段の開始文に現れてその話段の中心的内容を表す「後方統括機能」を発揮する「文型」には「概略」がある。次の(162)の文 357 は、様々なノダが現れ、話段の開始を表すが、特に、「概略」のノダによって、その話段の中心的内容をおおまかに捉えることができる。文型は、「[添加／転換] 型の接続表現+ (実は) +ノダ。[同列／補足] 型の接続表現」である。

(162) 話段 5.6.3

G-357 そして、えっとー、実はなんですけれども、先ほどから、えっと、人称表現は種類が多い、というふうに、日本語の場合ということですが、言 [ゆ] ってきたんですけれども、でも、実は、本当 [ほんと] に多いのかなって考えてみると、そんなに多くはないんですね。

G-358 というのは、なぜかという、あの一、個人が使う、1人が使う人称表現の種類ってというのは、少ない。

G-359 まあ、多い方でも、おそらく三つ程度。

G-360 さっきの方は、三つ、あの、「私」「ぼく」「おれ」を使い分けると言いましたけども、おそらく、「おら」とか「わし」は、冗談じゃない限り、あまり使わない、ですよ。

G-361 ですから、おそらく、多い人でも3種類、もっと使う人でもせいぜい4種類。

G-362 私自身は、実は、1種類しか使いません、「私」しか使わない。

G-363 それは、もうそう決めて、そうしているんですけれども、そういう人も中にはいると思います。

G-364 ので、ま、せいぜい、ま、数種類と考えておいたほうがいいと思うんですね。

G-365 一方、その、たとえば、ここに、えっとー、「わたくし、車はベンツ以外には乗らないことにしておりますの。」

G-366 これは、なんとなく、その、何でしょう、山の手に住んでいるお金持ちの婦人というようなイメージがあるわけですがけれども、でも、実際に、その、そういうような、その、高級住宅街に住んでいるようなご婦人がですね、こんな話し方をするかという、そういう話し方をする人はまずいないだろう、現実的には、と思います。

G-367 そして、下のほうは「わしは、若い時分から人前で話すのが苦手でのう。」という。

G-368 これは、まあ、読んだ感じからすると、あ、お年寄り、という印象があるわけですがけれども、自分のおじいちゃん、おばあちゃんのことを考えてみると、「わしは、じゃ

のう。」みたいなこと、しゃべり方をしていないですよ。

G-369 ということを考えてみると、実は、あの、たくさんあるんですけども、あの一、実際はそんなに使ってない。

G-370 そして、多い、多くのものですね、ここに、「わたくし」「わし」「おいら」「あたくし」「あたい」「われ」「我が輩」「小生」「拙者」というふうに挙げてありますけれども、こうしたものは、あの一、「役割語」と、ま、これは大阪大学の金水敏 [きんすいさとし] という、あの、言語学者がつけた名前ですけども、として考えられていて、つまり、その何か、創作↑、物語とか、小説とか、ドラマとか、あるいはアニメとか、コミックとか、そういったようなものの中で、あるキャラクターはこういうような属性を持っていますよ、という色づけのために使われるもので、でも、実際には、あの、現実には、誰も使っていないような形が日本語には存在する、そういうタイプのものなんだということです。

G-371 ですから、一見、に、日本語の人称表現は、あの、数が多いように思うわけですけども、実際のところはさほどでもないということは、最後に触れておきたいと思います。

(講義 G)

文 357 は、添加型の接続表現「そして」で、新たな話段が開始し、「実はなんですけれども」と「話題」の「文型」を用いて、話段の開始を表す。「先ほどから、えっと、人称表現は種類が多い、というふうに、日本語の場合ということですが、言 [ゆ] ってきたんですけども」と、「前提」の「文型」で後続文に必要な情報を前置的に提示し、「本当 [ほんと] に多いのかなって考えてみると」と「課題」の「文型」で当該の話段の課題を設定し、続く主節で「そんなに多くはないんですね」と解答を表している。しかし、この解答は、これまでに提示されてきた情報では理解が十分にできないことから、唐突な印象を受ける。相手が知らない情報を提示する「実は」が共起している点も、その裏付けとなるだろう。そのため、後続文に補足の情報を求めることになる。文 358 は、補足型の接続表現「とういうのは」によって、文 357 の「概略」の理解に必要な情報を補う展開となることがわかる。

また、話段 5.6.3 の中心文である文 371 の二重下線部「一見、に、日本語の人称表現は、あの、数が多いように思うわけですけども、実際のところはさほどでもない」とほぼ同

一の情報であることも、文 357 の「概略」の「文型」が、話段の内容を大まかに表していることを裏付けている。このように「概略」の文型の学習は、新たな話段の開始とともに、その話段の大まかな内容をとらえることができるという点で、講義の理解に有効だと考えられる。

次に、話段の終了文に現れ、前方統括機能を発揮し、話段を統括する文型を扱う。まず、「見解①」の「文型」であるが、39 例中 20 例 (51.3%) が、話段の終了文に現れ、先行文(群)に対する見解を述べることで、話段を統括している。文型は「[順接/同列] 型の接続表現+ノダ+思考動詞」である。

次の(163)は、文 485 から「課題」の「文型」で始まる新たな話段の内容に対して、「順接」の接続「ですから」と「んだろうと思います」の共起をともなって、結論的に「見解①」を述べて、話段を終了させている。

(163)

G-485 で, えっとー, その, 実はこれまで, あまり, その, 触れて来なかったことなんですから, はたして, 日本語には英語の「I」や「you」, あの一, まあ, 中国語でいえば「我 [ウォー]」とか「你 [ニー]」にあたるものですけども, そういうような, えっとー, 決まったね↑, 人称詞というものをですね, 人称表現というものを日本語は持っていない aのかということがあって。

G-486 実はこれ, ある bんですね。

G-487 気がつかれにくい cんです。

G-488 なぜ, 気がつかれにくいかという, 形がないから。

G-489 つまり, 日本語というのは, 省略される, というか, そもそもないのが普通の言語 d なんです。

G-490 で, 特別に, あの一, 自分のこととか, 相手のこととかを言う必要がある時だけ, 「私」とか「あなた」とか言う, そういう言語な e んですね。

G-491 だから, そ, そうではなくて, 「私」とか「あなた」とかを義務的に出さなければいけない, 主語が省略できないような言語からするとですね, この日本語の感覚っていうのは大きな違和感があるだろうと思います。

G-492 で, これは, 結局, 日本語というものが, その場の状況とか, あるいは, 文末表現の多様性などで, これは, その, 古典を読む時に皆さんよく気がつくことだと思う f ん

ですけれども、その、主語が省略されていても、だれ、誰の誰に対する敬語かということが判るようにできているので、なんとなく、その、人間関係が類推できるということがあるのと同じように、現代語でも状況とその文末表現などを手掛かりにですね、自然と、その、何でしょう、「私」とか「あなた」とかいうのを表現しなくても、復元して聞いているということなhんです。

G-493 たとえば、えっとー、AとBの会話ですけれども、「ペン持ってる↑。

G-494 持ってたら貸して。」

G-495 「いいよ、貸したげる。」

G-496 うん、普通ですよ。

G-497 ところが、全部復元すると、大変なことになるわけですね。

G-498 「あなたはペンを持ってる↑。

G-499 あなたが持ってたら、あなたは私に貸して↑。」

G-500 「いいよ、あなたは、あ、私はあなたに貸してあげる。」

G-501 どう考えても、変ですよ。

G-502 つまり、非常に、そういう意味で、ま、日本語っていうのは本来そういう言語、そういう言語っていうのは、つまり、あの、お互いにとってわかることはできるだけ言葉にしないで済まそうとする傾向の強い言語なhんですね↑。

G-503 で、ですから、この一、代名詞のような「私」とか「あなた」のように目の前にお互いいるわけですから、その、文の構造によって復元できる限りは、基本的に言わない。

G-504 ある、その、とく、特殊なニュアンスをこめたい時とか、それがないと文の構造がわかりにくい時だけ表出する、表現するというのが日本語という言語の、えーと、特徴なhんだらうと思います。(3) {スライド切り替え}

(講義 G)

ノダは、文 504 に現れるが、それに対応する接続表現は、先行文 503 の「ですから」であり、ノダの「文型」は、文をまたいで成立している。文 503～504 の「見解①」の「文型」は、一義的には、文 502 に対しての「見解①」であるが文 502 が、後述の「つまり、～ノダ」という「換言」の文型で、先行文(群)文 485～501 を統括しているため、結果的に、文 485～504 全体に対する結論を講義者の「見解①」として述べることになっている。

次に、「換言」の「文型」であるが、これは、「見解①」と連続して捉えられるものであ

り、19 例中 7 例 (36.8%) が、話段の終了文に現れており、基本的には、パラフレーズとして認められる範囲で、先行文 (群) を短くまとめた内容を述べることで話段を終える。文型は「同列型の接続表現+ノダ」である。次の(164)は、文 378~379 の学生 4 の発言を講義者 G が補足しながら文 381~383 で説明し、それを文 385 で「換言」の「文型」ともなって短くまとめている。

(164) 話段 6 6.1

G-372 で、えっとー、そうですね、次なんですけれども、これはちょっと、あの、日本人の方に聞いてみたいところなんです、えーっとですね、うーん、男性のほうがいいな。

G-373 えっと、すみません。

G-374 じゃあ、えっとー、前から 3 番目のですね、えっとー、真ん中の方に聞いてもいいですか。

G-375 あの、その、自分が、まあ、生まれた時の記憶はないと思いますけれども、あの一、何でしょ、幼稚園か保育園かに入る前、そして、まあ、幼稚園か保育園に入って、小学生、中学生、高校、大学、というふうに、あの、成長して来たと思うんですけれども、そうした中で、あの、自分を指す、あの、1 人称はずっと同じですか。

G-376 それとも、変わって来ましたか。

G-377 もし、変わって来たとするれば、どんなふうに変わって来ましたか。

学生 4 :

G-378 そうですね、えっとー、やっぱり幼稚園とか小学校の低学年ぐらいのころはわりと、「ぼく」とかが多かったと思うんですよね。

G-379 ただ、ま、今もそうなんですけど、だんだんと、まあ、使い分けもしている場面もあるんですけど、やっぱり「おれ」とかも増えて来ましたし、もちろん、さっき、あの一、前に言ってたようにフォーマルな場では、「私」というのも使うようになりました。

講義者 G :

G-380 はい、ありがとうございます、そういうふうな感じですね。

話段 6.2

G-381 まず、今のお話の中では、まず、「ぼく」というものを最初に使っていた。

G-382 ところが、もちろん「ぼく」というのは今でも使うことはあると思うんですけれど

も、でも、あの、時には、「おれ」というのを織り交ぜるようになってきたし、さらには、まあ、ま、大学生になってからでしょうか、その、自分を大人として意識するようになってからは、「私」というのもフォーマルな場では使うようになってきた。

G-383 そういうような、まあ、流れがあるんだろうと思います。(2) {スライド切り替え}

話段 6.3

G-384 もちろん、これには、まあ、相当の個人差があるだろうと思います。

G-385 す、自分自身を、まあ、こういうふうに見られたい、というのが、まあ、1人称のあり方なんですね。

(講義 G)

文 385 は、話段 6.3 を統括するだけでなく、話段 6.1 の学生 4 の発言、話段 6.2 の講義者 G の補足説明について、端的に「自分自身を、まあ、こういうふうに見られたい、というのが、まあ、1人称のあり方なんですね」と「換言」の「文型」で話段 6.1~6.3 をまとめている。同列型の接続表現は現れないが、接続関係を捉えることで、「つまり」等を補うことが可能である。

以上、話段の開始と終了文に現れる「文型」と、その「文型」が話段のどのような情報を表しているのかをまとめた。上述の「文型」は、接続表現の種類とノダの形式が比較的安定しているが、最も用例の多い「前提」の「文型」は、特定の接続表現との共起が認められず、話段の様々な位置に現れる傾向がある。⁵⁸これは、談話の展開的構造めあてではなく、対人めあてで現れるためだと考えられる。

(165) 話段 5.4.6

G-278 それから、えっとー、役割系の 2 人称ですけれども、あの一、便利な言葉として、まあ、「先生」という呼びかけの言葉があります。

G-279 で、まあ、相手の名前がわからなくても、とりあえず「先生」って言ったら、皆さん質問しやすくなりますよね。

G-280 こんな、こんな場で先生というような呼びかけもできますし、その、アルバイトに、してる人であれば、相手のことを「店長」というふうに、その役職名で呼ぶことは

⁵⁸ ただし、新たな話段を開始する際に背景情報が必要となるという事情があるため、話段の開始文に 99 例中 29 例 (29.3%) と現れる傾向が認められる。

ありますよね。

G-281 会社に入れば、「部長」とかね、よ、呼ぶこともあるかもしれません。

G-282 あるいは、あの一、相手のことをですね、たとえば、「名人」としましたけれども、これは、あの一、きのうですね、えっと一、私は囲碁が好きな a 人ですけども、あの一、名人戦というのがありまして、山下敬吾（けいご）という北海道出身の、えっと一、棋士が、あの一、井山裕太（いやまゆうた）という大阪出身の棋士にですね、えっと一、4対2 ですね、あの一、勝って「名人」を取ったというのが、ニュースとして流れていた b 人ですけども、そうするとですね、えっと一、山下さんに対して、あの、話しかける時は、「名人」とか「新名人」。

G-283 そして、また、山下さんという人は、「本因坊」というタイトルを持っていますので、「名人本因坊」というふうにして、相手に呼びかけられるケースが出てくるということになります。

G-284 そういう、ま、肩書きとしての名人を指しているわけですけどもね、そんなような言い方があります。

G-285 あの一、先ほどのその、1 人称の場合ですと、まあ、代名詞系 1 人称が極端に多いという感じがしたんですけども、えっと一、この、えっと、2 人称の場合でいうと、指示詞系はそんなに多くない、あの、ですけども、それ以外のものはどれも多いという、そういう印象があります。

G-286 ま、つまり、それだけ、人というのは、聞き手、相手に対して話しかける時、気を使って、そのぶんだけ、その、言葉のバリエーションが豊富であるということを、ま、裏付けている c のかなあというふうに思います。(2) {スライド切り替え}

(講義 G)

文 282 の下線 a, b は「前提」の「文型」であるが、特定の接続表現との共起傾向は認められない。また、「前提」の「文型」は、後続文の理解に必要な情報を背景的なものとして提示することから、ノダが付される内容自体、例えば、文 282 の下線 a の「私は囲碁が好き」だということ、下線 b の「ニュースとして流れていた」こと自体が話段の重要な情報とはなりえず、後続する「名人」「新名人」「名人本因坊」といった肩書きとしての 2 人称表現を説明するために機能していると考えられる。その点で、文 286 の下線 c のような話段の終わりに「つまり+ノダ」という文型で現れて話段を統括する「見解①」などとは異なる

るものといえる。

以上、様々な「接続表現+ノダ」の「文型」を理解することで、講義 G の話段の開始や終了、さらに、その話段の中心的な内容を捉えることができるようになることを示した。

7.3.4. 講義 G と新書 G のノダの統括機能の異同

講義者 G は、講義とほぼ同じ内容の新書を執筆していることから、講義の談話 G の理解に、新書の文章 G を利用することができる。また、講義の談話のノダと新書の文章のノダの「段」の統括に関わる傾向に違いがあることを確認するためにも、新書 G を用いることは有効である。

新書 G の該当箇所は、「第七章 日本語の人称表現」という章全体で、「問い」「まとめ」を含め、11 個の小見出し、102 個の形式段落、306 個の文で成り立っている。第 4 章で扱った「だ・である体」の文章よりも話し言葉的な、「です・ます体」ではあるが、講義の談話とは異なり、ノダは、「んです」ではなく、「のです」の形式で現れる。統括機能ごとのノダの出現傾向は、第 4 章の新書の文章のノダと第 5 章の講義の談話のノダの中間的なものとなっている。

次の【表 36】は、新書 G の文段の開始文と終了文に現れる統括機能別のノダの総数を示したものである。文段は 3 次元設け、文段の 1 次元は、講義 G の話段の 2 次元に相当する。1 次元が 11 文段、2 次元が 38 文段、3 次元が 23 文段となる。

まず、ノダの出現数が少ないことが挙げられる。講義 G は、総文数 616 文に対して、ノダの機能数の合計が 207 であるが、新書 G は、総文数 306 文に対して、ノダの機能数は、26 にとどまっている。

また、新書 G のノダは、全体的に文段の開始よりも終了に現れる傾向があり、1 次元の 11 文段中 3 文段 (27.3%) の終了文にノダが現れている。高次元の文段の終了文にノダが現れる傾向があるという点が、低次元の話段の開始文にノダが現れる傾向のある講義 G と対照的である。これは、第 6 章で行った新書の文章と講義の談話のノダの出現傾向の異同と一致している。

また、新書 G は、1 次元 0.0%、2 次元 5.3%、3 次元 21.7% と、次元が下るほど、話段の開始文に現れるノダの割合が増加している。この点は、講義の話段と一致しており、話し言葉的な文体が影響していると考えられる。

【表 36】新書 G の文段の開始・終了とノダの統括機能の対応関係

文段			文番号	ノダの機能							
1次元	2次元	3次元		後方接続機能		前方接続機能		ノダの機能		前方接続機能	
			前置き	話題	課題	根拠	換言	結論	見解①	見解②	原因
1s	1.1s		3								
	1.1e		4								
	1.2s	1.2.1s	7								
		1.2.1e	8								
		1.2.2s	9								
		1.2.2e	12								
		1.2.3s	18								
		1.2.3e	21								
		1.2.4se	22								
1e	1.2e	1.2.5e	23								
2s	2.1s		24								
	2.1e		27								
	2.2s	2.2.1s	28								
		2.2.1e	32								
		2.2.2s	33								
2e	2.2e	2.2.2e	41								
3s	3.1s		42								
	3.1e		52								
	3.2s		53								
	3.2e		62								
	3.3s	3.3.1s	63								
		3.3.1e	70								
		3.3.2s	71								
		3.3.2e	79								
		3.3.3s	80								
		3.3.3e	87								
		3.3.4s	88								
3e	3.3e	3.3.4e	91								
4s	4.1s		92								
	4.1e		97								
	4.2s		98								
4e	4.2e		105								
5s	5.1s		106								
	5.1e		110								
	5.2s	5.2.1s	111								
		5.2.1e	118								
		5.2.2s	119								
	5.2e	5.2.2e	121								
	5.3s		122								
	5.3e		126								
	5.4s	5.4.1s	127								
		5.4.1e	135								
		5.4.2s	136								
	5.4e	5.4.2e	143								
	5.5s		144								
5e	5.5e		145								
6s	6.1s		146								
	6.1e		151								
	6.2s		152								
	6.2e		156								
	6.3s		157								
6e	6.3e		175								
7s	7.1s		176								
	7.1e		178								
	7.2s		179								
	7.2e		182								
	7.3s		183								
	7.3e		185								
	7.4s		186								
	7.4e		187								
	7.5s		188								
7e	7.5e		190								
8s	8.1s		191								
	8.1e		195								
	8.2s		196								
	8.2e		198								
	8.3s		199								
	8.3e		210								
	8.4s	8.4.1s	211								
		8.4.2s	212								
		8.4.2e	220								
		8.4.3s	221								
8e	8.4e	8.4.3e	228								
9s	9.1s		229								
	9.1e		231								
	9.2s		232								
	9.2e		238								
	9.3s		239								
	9.3e		253								
	9.4s		254								
	9.4e		260								
	9.5s		261								
	9.5e		265								
	9.6s		266								
9e	9.6e		270								
10s	10.1s		271								
	10.1e		278								
	10.2s	10.2.1s	279								
		10.2.1e	282								
		10.2.2s	283								
		10.2.2e	284								
		10.2.3s	285								
		10.2.3e	288								
		10.2.4s	289								
		10.2.4e	291								
		10.2.5s	292								
10e	10.2e	10.2.5e	295								
11s	11.1s		296								
	11.1e		298								
	11.2s		299								
	11.2e		301								
	11.3s		302								
	11.3e		303								
	11.4s		304								
11e	11.4e		305								

文段総数	11 [100.0%]	38 [100.0%]	23 [100.0%]	機能総数	8 [100.0%]	0 [100.0%]	6 [100.0%]	1 [100.0%]	2 [100.0%]	2 [100.0%]	5 [100.0%]	2 [100.0%]	0 [100.0%]
文段開始	0 [0.0%]	2 [5.3%]	5 [21.7%]	文段開始	1 [12.5%]	0 [-%]	3 [50.0%]	1 [100.0%]	0 [-%]	0 [-%]	0 [-%]	0 [-%]	0 [-%]
ノダ有	11 [100.0%]	36 [94.7%]	18 [78.3%]	文段終了	1 [12.5%]	0 [-%]	2 [33.3%]	0 [-%]	1 [50.0%]	4 [80.0%]	1 [50.0%]	0 [-%]	0 [-%]
ノダ無	0 [0.0%]	2 [5.3%]	5 [21.7%]										
文段終了	3 [27.3%]	5 [13.2%]	5 [21.7%]										
ノダ有	8 [72.7%]	33 [86.8%]	18 [78.3%]										
ノダ無	0 [0.0%]	2 [5.3%]	5 [21.7%]										

また、機能別のノダの出現傾向をみると、「前提」が8例で最も多く現れ、「課題」の6

例、「見解①」の5例と続き、「換言」「結論」「見解②」が共に2例、「概略」が1例、「話題」と「原因・理由」は1例も見られなかった。特に、講義Gでは16例見られ、その全てが話段の開始文に現れていた「話題」が、新書Gでまったく見られなかったのは、文章は、小見出しや改行等で「段」の展開を視覚的に表すことができるのに対し、談話の場合は、そのような方法が採れず、段の展開を明示する言語形態的指標が必要になるためだと考えられる。

文段の開始文と終了文に現れる割合から考察すると、「見解①」が、全5例中4例(80.0%)であり、何らかの文段の終了文に現れている割合が最も高い。続いて、「課題」は、文段の開始文に現れる割合が6例中3例(50.0%)と高い。他の例は、1~2例と用例数が少ないため、その傾向を捉えることは難しいが、前方統括機能の「結論」「換言」が2例中1例(50.0%)と文段の終了文に現れているように、統括機能と文段の開始・終了文に現れる割合に矛盾は見られない。また、講義Gと同様、「前提」は、用例数が多いが、文段の開始文と終了文ともに8例中1例(12.5%)となっており、話段の開始文、あるいは終了文に現れるといった傾向は見出すことができない。

次の例(166)は、新書Gの文段8.4であるが、様々な「文型」によって、文段の開始・終了が示されている。講義Gの話段7.2~7.3の内容とほぼ一致している。

(166) 文段 8.4 8.4.1

212 では、なぜ「あなた」は失礼とされる aのでしょうか。

文段 8.4.2

213 じつは、これまで触れてこなかったのですが、日本語もまた、英語の"I"や"you"のような決まった人称表現を持っている bのです。

214 それは省略です。

215 たとえば、[216~218]という会話を [219~221] などとはまず言わないでしょう。

216 「ペン持ってる？」

217 持ってたら貸して？」

218 「いいよ、貸してあげる。」

219 「あなたはペン持ってる？」

220 あなたが持ってたらあなたはわたしに貸して？」

221 「いいよ、わたしはあなたに貸してあげる。」

- 222 日本語はゼロ代名詞言語 (pro-drop/pronoun-dropping language) と呼ばれることがあります。
- 223 その意味は、代名詞がないのがふつうで、特別なニュアンスを込めたいときだけ人称表現を表出する e のです。
- 224 ですから、英語の人称代名詞にくらべて、日本語の人称表現を表現すると、聞き手に強いメッセージとして伝わる d のです。

文段 8.4.3

- 225 「あなた」「きみ」「おまえ」は、身近な人と、あるいは目下の人とのコミュニケーションではさほど失礼にはなりません。
- 226 「わたし」—「あなた」、「ぼく」—「きみ」、「おれ」—「おまえ」で呼びあえる親しい関係であることを示しているからです。
- 227 また、広告などで、不特定多数に呼びかける場合も失礼にはなりにくいものです。
- 228 「わたし」—「あなた」という一対一で向きあう関係が想定しにくいからです。
- 229 しかし、面と向かって、目上の人に、あるいはさほど親しくない人に「あなた」と呼びかけることは、「わたし」—「あなた」関係を強要することにつながり、聞き手の私的な領域、すなわち第四章のポライトネス理論で見た **negative face** を侵すことになり、聞き手にとって失礼に感じられてしまう e のです。

(新書 G)

文 212 は「課題」の文型「では+なぜ+ノカ」によって、これから始まる文段 8.4 が、「あなた」が失礼となる理由を述べる文段となるのがわかる。続く文 213 で「概略」の文型「じつは+ノダ」によって、新たな文段の開始が示され、その補足内容を後続文に求めることがわかる。文 221 までがその補足情報となるが、文 222 は、その補足情報を受け、「ゼロ代名詞言語」に話題が展開する。文 223 は、「換言」の文型「その意味は+ノダ」で言い換え、文 224 の「結論」の文型「ですから+ノダ」によって、文段 8.4.2 を統括している。文 213 の「概略」の文型も統括力が強いが、文 224 の「結論」の文型のほうが、より強い統括力を発揮するため、文段 8.4.2 全体としては 224 が中心文となる。ここにも、相対的統括の関係が認められる。

続く文段 8.4.3 は、8.4.1 の「課題」に対する「解答」の文段となっている。文 225～228 で 2 つの理由を示し、文 229 の「結論」の文型「しかし+のだ」によって、逆接的に結論

を述べることで、文段 8.4.3、さらには文段 8.4 を統括している。このように、文段の終了文に前方統括機能の強い「文型」が現れることで、先行文（群）を統括するというのが、新書 G の特徴であるが、これは、第 4 章で扱った 6 種の新書の文章全般にもいえる。

以上、新書 G と講義 G との統括機能別のノダの出現傾向の違いについて考察した。新書の文章と講義の談話のノダの出現傾向の違いを学習することで、文章の「文段」、談話の「話段」をより適格に理解することができるようになると考えられる。

7.3.5. 「文型」を用いた「段」の理解から表現へ

以上、講義 G と新書 G の話段と文段の構造とノダの文型との関連を明らかにした上で、上級の日本語学習者約 15 名を対象とする、全 6 回の講義の理解方法の授業計画を提示した。

第 1 回目の授業では、6 種の文章・談話型を学習することを目的に、佐久間編著 (1989) による原文 A 「日本人はそんなにダメか」の要約文作成を約 30 分で行う。その後、6 種の文章型を提示し、「日本人はそんなにダメか」が逆接の尾括型の文章型であることを確認し、「ノダの文型」が、主題文をはじめ、大文段の成立に関わっていることを学習し、各自の要約文 A が原文 A の構造を捉えられていたかどうかを自己確認する。

第 2 回目は、講義の談話にも「談話型」があることを確認し、話段を意識しつつ、ノートを取り、DVD による講義 A を視聴し、要約文 A を作成する。

第 3 回目は、講義 A が「尾括型」の談話型であることを談話構造図で確認し、前回各自の作成した講義 A の要約文が主題文を正しく把握できているかを確認する。大話段のレベルでは、ノダが II. 展開部の開始文に「4. 概略」の文型が、II. 展開部の中心文に「2. 見解」と「7. 前提」の文型が用いられていることを確認する。

第 4 回目は、「談話型」を意識し、ノートを取りながら DVD による講義 G を視聴して、要約文作成を宿題として課す。

第 5 回目は、講義 G が「両括型」の「談話型」であることを確認し、要約文が講義 G の展開的構造を捉えられているかを確認する。さらに、講義 G の内容理解を深めるために、ほぼ同一内容の新書 G を読解する。その際、講義 G と新書 G それぞれの「段」構造図を用いて、ノダの統括機能別の出現傾向に相違があることを確認する。

第 6 回目は、ノダの文型による話段を把握しながら、話段の展開が分かる程度に編集された講義 G の DVD を再び視聴し、約 5 分程度で講義 G の主な内容をまとめるようにする。

本研究で考察してきた統括機能による「段」を捉えるための「文型」は、そのまま、「まとまり」のある表現に応用が可能なものである。講義は、単に理解すればよいというわけではなく、テストやレポート等、その理解を表現しなければならないことがある。

ここでは、講義 G の理解データのうち、受講後のインタビュー (GI) を用いて、日本語母語話者のインタビュー (GIJ) と日本語学習者のインタビュー (GIF) を用いて、複雑な内容にまとまりをつけながら表現する際にも、ノダの「文型」が有効であることを明らかにする。

次の例(167)は、母語話者の受講後インタビューであるが、a~g の 7 つのノダが現れており、様々な統括機能を発揮し、話段の統括している。まず、文 25 は下線 a の転換型の接続表現「そうですね」+「んですが」という「話題」の文型で「日本語の人称表現」を取り上げ、新たな話段を開始している。また、文 33 の下線 b は、「換言」の文型で先行文を統括すると同時に、「話題」となり、新たな話題となっていることを示す。下線 c も、同様に「前提」のノダとして機能しているが、直接的に話段の開始に関わっているとはいえない。そして、続く文 34 は下線 d の「なぜ+のか」という「課題」の文型で、新たな話段を開始する。下線 e は、前後が入れ替わっているが、「役割語」を理解するために必要な情報の「前提」として挿入されている。そのため、「えー、ま、これはキャラクターづけー、を目的とした言葉なんですが」が挿入されたようになっている。下線 e の「前提」は、文 43 の下線 f の「前提」と同様、新たな話段の開始を表すわけではないが、「前提」としてより大きな話段に統括されることを予測させる点で、重要である。最後の文 44 は、「えー、まとめとしましては、」とまとめの話段の開始を示し、下線 g の「前提」の文型で、「えー、ま、先ほども述べたんですが、」と、講義の展開に言及することで、先行文で述べたことを繰り返して話段を統括することを予告する。

(167) GIJ011

- 24 えーと、そうですね、今回の、えーと、講義は、日本語の人称表現について、えー、社会言語学的な立場から、えー、講義が、ありました。
- 25 で、えーと、そうですね、日本語の、えーと、人称表現、な a んですが、えー、特徴として四つあります。
- 26 えー、一つには、人称表現、日本語の人称表現は、非常に種類が多いということです。

- 27 えー、そして、2番目に、話し手のアイデンティティーを、え、に根ざした表現であるということ。
- 28 で、3番目に、聞き手や状況を考慮した表現であること。
- 29 えーと、4番目に、えー、時代とともに変化する表現であるということです。
- 30 えーと、一つ一つ、えーと、詳しくお話をしますが、えーと、人称表現が種類が多いという点ですが、えーと、日本語の人称表現は、えーと、一般に言われるように、かなり種類が多いです。
- 31 たとえば、えーと、英語の I [アイ] に当たる、えー、一人称の表現であっても、「私」や「僕」や「おれ」や、「おいら」や「我が輩」といったように、えー、非常に多様な表現があります。
- 32 で、その中でも、えーと、そうですね、代名詞系一人称であるとか、指示詞系一人称であるとか、それぞれ、あの、特徴を持ったカテゴリーに分けることができ、さらに、一人称のみならず、えー、二人称、三人称であっても、えーと、「あなた」「君」「お前」えーと、あと、「先生」というふうな呼びかけであるとか、あるいは、三人称では、えー、「高橋さん」だとか、「彼」とか、えー、「あいつら」とか、そういうふうに、いろいろな、えー、表現があります。
- 33 えー、まあ、このように、一般的には、非常に種類が多いって言われている、あの、日本語の、えー、人称表現な bん ですが、えーと、ま、一見してこのように多い えん ですが、えー、実際のところ、現実で、つた、使われている人称表現の種類というのは、実は、あの、多くとも、一人に、が、使うのは3種類ぐらいで、たとえば、えーと、私が使う一人称は、「私」とか「あたし」のふ、2種類であったりとか、えーと、実は、そんなに多くはないです。
- 34 えー、なぜ、このように日本語の、に、人称表現が多い いのかというと、「わたくし」とか「わし」とか「おいら」とか「あたい」というような、役割語というものが、あるために、えー、ま、これはキャラクターづけー、を目的とした言葉 えなん ですが、えー、そうですね、ファンタジーとか空想の中で用いられる言葉、こういったものが多いために、一見して、えーと、人称表現が多いように感じられます。
- 35 で、2番目の、話し手のアイデンティティーに根ざすという点ですが、えー、私たち日本人の使う言葉は、性別や年代や地域や職業や、また、自分自身のキャラクターづけによって、変化していきます。

- 36 えー、で、たとえば、あの一、成長過程においても、たとえば、男子が父親を呼ぶ言葉が、「パパ」「お父さん」「父さん」「親父」というふうに変化するように、まあ、自分自身の成長具合によっても変化します。
- 37 で、さらに、えーと、3番目、聞き手や状況によって人称表現は変化します。
- 38 えー、たとえば、聞き手が後輩であれば、「おれ」という言葉を使ったり、えー、ゼミの場面では「僕」という言葉を使ったり、えーと、論文という媒体の上では「私」という表現を使ったり、えー、怒りの感情を抱いている時には、また「おれ」という言葉を使ったり、えー、聞き手や状況によって変化をします。
- 39 えー、で、さらにですね、えー、人称表現は時代によっても変化をしていきます。
- 40 えーと、たとえば、最近では、軍隊用語や体育会用語であると思われる「自分」という一人称が用いられることがあります。
- 41 え、これは主に若い男性が使ってるもので、えーと、相手の指示に、えー、自分という個を消して、えー、従うという意味、表明、をしているものと思われています。
- 42 え、さらに、えーと、不思議なことに、本来は関西弁の一人称である「うち」という言葉が、えー、平成生まれあたりから、関東の低年齢層の女の子たちのあいだで使われているというふうに、かなり、昔とは変わった使われ方をしている例もあります。
- 43 で、さらに、えーと、家族内の呼称も、たとえば、目上の者は目下の者に名前で呼びかけ、目下の者は目上の者には名前で呼ばず、えー、親族名称を用いるという傾向が昔はあったんですけど、今では、兄弟や親子が対等になりつつあって、えー、弟であっても兄を名前で呼んだり、えー、することもあって、え、それも、昔から、かなり、えー、異なった点であると言えます。
- 44 えー、まとめとしましては、えー、ま、先ほども述べたんですけど、今日の、日本語の人称表現は四つの、えーと、特徴があり、人称表現の種類は多い。
- 45 えー、しかし、一見多いだけであって、実際使われている、現実使われている言葉は少ないということがあります。
- 46 二つ目に、話し手のアイデンティティー、えーと、に、根ざしているということはありません。
- 47 で、3番目に、聞き手や状況を考慮するというのも特徴です。
- 48 最後に、時代とともに、表現の仕方も変わってきているということです。
- 49 以上です。

(GIJ011 : 原話に言及している箇所を抜粋)

このように、AIJ011 は、話段の開始を表す手段の一つとして、「話題」、「課題」、講義の進行に言及する「前提」といった「文型」を用いることで、インタビューの談話の展開的構造を成立させている。

また、ノダによる「文型」が適切に使えていないために、インタビューの談話の展開的構造が捉えにくくなる例がとして、「前提」の文型が、後続文の理解のためではないため、後方被統括機能が発揮できないものがある。学習者にしか見られなかった例である。

次の(168)は、文 42 の下線 a と文 44 の下線 b は、「前提」の文型として適切に用いられているが、下線 c のノダは、「んですけど」という形式から「前提」として機能することが予測されるが、後続の節は、「その次に」という添加の接続表現によって、新たな話段へと展開してしまい、不自然さが感じられる。

(168)

42 えーと、今日の講義はですね、ちょっと、タイトルが日本人の人称表現ということでして、と、テーマを四つに分けて、と、日本語は、ちょっと、社会的な言語という観点から見て、テーマを四つに分けて、それ、日本語だけじゃなくて、日本語から、に、人称表現 [にんしんひょうげん]、人称表現を重点的 [しゅうてんてき] に、はい、ちょっと、四つのテーマに分けて考えてみるという感じの講義だった a んですけど、

インタビュアー :

43 うん。

GIK011 :

44 この四つのテーマはですね、えっと、まず一つ目が、人称表現は種類が多いということで、えっと、ないし、えっと、にんし、人称表現はですね、種類が、代名詞系とか、指示詞系↑、固有名詞系↑、親族名称系↑、役割名称系という感じで、一人称、二人称、三人称で全部分けられる b んですけど、これ、このほかにもですね、用法的に、えーと、分けることもできます。

45 と、呼格的用法とか言及的用法、素材的用法ということに分けることができる c んですけど、この一、その次に、に、二つ目が話し手のアイデンティティーに、えーと、ね、根ざす↑、

インタビュアー：

46 うん。

GIK011：

47 こんざす↑、根ざすということでした、と、この人称表現によって、個人のアイデンティティーが表れるという感じの、はい、話でした、これがですね、えーと、性別とか、なんか、年代とか性格ということが、人称表現から、あー、感じ取ることができるという話でした。

(GYC008)

文 44～45 の前半「～んですけど」までで、「人称表現の四つのテーマの1つ目」という話段が成立すると考えられるが、文 45 の下線 c の「前提」のノダのせいで、後続する主節に統括力の強い文が現れることを期待してしまい、中心的内容をとらえることが困難になっていると考えられる。

以上、文章と談話の理解から、ノダの統括機能が適切に理解されているかを探り、その結果をもとに、話段の成立に関わる「文型」を用いた講義 G の理解方法を提示した。更に、講義の理解のために提案した「文型」が、理解した内容を再生する際にも、まとまりをつけながら談話を展開していくために活用できることを受講後のインタビューの分析によって明らかにした。

第8章 結論と今後の課題

本研究は、大学学部留学生のための学術的入門書としての新書の文章と人文学系の講義の談話を、「接続表現+ノダ」という言語形態的指標に基づいて、文章と談話のまとまりである「段」を把握しながら、適切に理解する方法を提案することを目的とし、新書の文章6編と講義の談話4編を対象として、ノダの統括機能が大小様々な話題のまとまりである「文段・話段」の成立にどのように関連しているのかを実証的に分析した。以下、順に概要を述べる。

8.1. 本研究の構成と各章の概要

本研究は、3部構成である。第1部は序論で第1章から第3章までである。第1章で本研究の目的を挙げ、課題を3点提示した。第2章で先行研究をまとめ、ノダの分類が新書の文章と講義の談話の大小様々な話題のまとまりを捉える上で有効であることを示した。第3章は、本研究の分析対象と分析方法を示し、大学学部留学生が触れる機会の多い新書の文章と講義の談話を分析対象とし、それらの話題のまとまりの成立にノダの統括機能がどのように関わるのかを、文章・談話論の「段」を用いて分析することを示した。第2部は本論で第3章から第7章までである。第4章で新書の文章、第5章で講義の談話を対象に、ノダの各種の統括機能を明らかにするためにノダの表現形式の分析と、共起する各種の接続表現の分析を行い、「接続表現+ノダ」の文型（以下、「ノダの文型」と称す）を明らかにした。そして、それらのノダの文型が、「段」の展開的構造を把握するために有効であることを、それぞれの分析資料の「段」の統括にどのように関わっているかを分析することで明らかにした。第6章は、新書の文章と講義の談話におけるノダの文型による統括機能の比較を行い、新書の文章と講義の談話とでは、ノダの統括機能別の出現傾向に違いがあることを明らかにした。第7章は、第4章から第6章まで分析結果を踏まえて、新書の文章と講義の談話を、「段」を把握しながら理解する方法を提案した。第3部は結論で、第8章で、各章の概要を示し、第1章に示した3点の課題に対する結論をまとめ、今後の課題を提示した。以下に、各章の概要をまとめる。

第1章 本研究の目的と課題

文章・談話を「話題のまとまり」を把握しながら理解するためには、「話題のまとまり」を形成させる「言語形態的指標」に基づいた分析が不可欠である。そこで、本研究では、文末形式ノダを主な分析対象として、ノダが文章・談話の「まとまり」の成立にどのような関与するのかを明らかにするために、以下の3点の検討課題を設定した。

課題1 「接続表現+ノダ」という言語形態的指標による「話題のまとまり」にはどのようなものがあるか。

文章・談話論において、文と文章の中間にどのような単位を設定するかに関する様々な議論がある(佐久間 1986)。大きくは、改行一字下げを基準としない市川(1978)の「文段」、改行一字下げを絶対的な基準とする永野(1986)の「段落」である。佐久間(1986,2003,2010)は、「文段」における「相対的統括」の概念を提唱して、文章の「文段」、談話の「話段」を統合した「段(文段・話段の総称)」が多重的な統括関係を成していることを指摘している。本研究における「中間的な単位」の概念を規定した上で、ノダの「話題のまとまり」に関わる機能を分析する必要がある。

課題2 「接続表現～ノダ」の文型が、新書の文章における「文段」の多重構造にどのように関わるのか。

大学学部留学生が読解する必要のある学術的専門書の入門となる新書の文章を分析対象として、機能分類別の複合辞のノダが、新書の文章の「文段」にいかに関わるのかを分析する。

課題3 「接続表現+～ノダ」の文型が、講義の談話における「話段」の多重構造にどのように関わるのか。

新書の文章とともに、大学学部留学生が理解する必要のある講義の談話を分析対象として、機能分類別のノダが講義の談話の「話題のまとまり」にいかに関わるのかを分析する。

本研究では、大学学部留学生の新書の文章と講義の談話の展開的構造を把握しながら、理解する方法を提案するために、「話題のまとまり」に関わる種々のノダの機能を「接続表現+ノダ」という形態的指標とともに明らかにした。

第2章 先行研究における本研究の位置付け

第2章では、課題に関する先行研究をまとめ、ノダの研究史における本研究の位置付けを明らかにした。大きく2.1 文法論的なノダの先行研究、2.2 文章論的なノダの先行研究、2.3 日本語教育の教科書と教師用参考書におけるノダの扱いの3つの領域を設定し、それぞれの課題を提示した上で、接続表現を手がかりとしたノダの「統括機能」による分類の必要性を論じた。

2.1 日本語教育の教科書と教師用参考書におけるノダの扱いについては、ノダは、初級の会話において導入されるが、それらは統括機能を論じるものではなく、むしろ、ノダの対人機能である相手の未知の情報を充足するという態度に偏っていること、また、その解説が実際の例文と乖離があるものがあること、中級以上の読解教科書に現れる「つまり、～ノダ」のような文章の展開に関わる表現との関連が示されることなく、ギャップがあることを指摘した。

2.2 文法論におけるノダの先行研究については、ノダがある文脈の中で一つの機能しか表さないという前提で議論が進められていること、そして、書き言葉的な「のダ」と話し言葉的な「んダ」が同一のものであるとして議論をしていることを問題点として指摘した。これらは、いずれも、統括機能を考慮せずにノダを分析しているためであることを論じた。

2.3 文章論におけるノダの先行研究については、統括機能によってノダを記述しているが、典型的なもののみを分析対象としており、文章・談話の統括論にかかわるノダを総合的に扱っていないことを問題点として指摘した。また、文章論的なノダの分析を行うための枠組みとして、「接続表現」「段落・段」「中心文」「統括機能」について、先行研究を検討し、本研究は、佐久間（1992,2003,2010）の研究成果に依拠していることを示した。

第3章 本研究の対象と方法

研究対象

本研究は、大学学部初年次の留学生を対象としており、彼らが出会う長大で論理的に複雑な文章・談話である学術的な入門書としての性格の新書6種と、人文社会科学系の教養

課程の講義4種を分析資料とし、これらの資料に現れる全ての節末、文末のノダを分析対象とした。次の【表 37】【表 38】は、新書の文章と講義の談話のそれぞれの資料と、総文数に対するノダの出現数の割合を示したものである。

【表 37】新書の文章の総文数に対するノダの割合

新書の文章	ノダ		総文数	
	出現数	割合	出現数	割合
①『極限の科学』	237 [67]	8.30%	2,854	100.00%
②『宇宙物理学入門』	71 [11]	6.40%	1,118	100.00%
③『「分かち合い」の経済学』	180 [7]	9.00%	2,010	100.00%
④『西洋哲学史 近代から現代へ』	234 [22]	6.40%	3,639	100.00%
⑤『「わかる」とは何か』	117 [17]	7.40%	1,589	100.00%
⑥『「できる人」はどこがちがうのか』	125 [29]	4.60%	2,719	100.00%
合計	964 [153]	6.90%	13,929	100.00%

([] 内の数字は、節末に現れるノダの総数を表す。)

①②は理科系、③④は人文系の専門分野の入門的な文章、⑤⑥は人文系の専門分野を一般的に解説した文章である。

【表 38】新書の文章の総文数に対するノダの割合

講義の談話	ノダ	総文数
i. 講義A	46[58] (11.00%)	418 (100.00%)
ii. 講義B	92[91] (19.45%)	473 (100.00%)
iii. 講義C 1	142[121] (23.05%)	616 (100.00%)
iv. 講義E 1	103[51] (17.55%)	587 (100.00%)
合計	383[321] (18.29%)	2094 (100.00%)

([] 内の数字は、節末に現れるノダの総数を表す。)

講義A, Bは、調査のために約60分に短縮したもの、C1, E1は、約90分の談話資料である。それぞれの講義の概要を以下にまとめる。

- i. 講義 A: 接続詞による「言い換え」の技法について、まず、「リダンダンシア」を例に定義して、次に、書き言葉の言い換えの特徴として、接続詞「すなわち」「つまり」「要するに」の用法を述べる。さらに、話し言葉の「言い換え」について、接続詞「ていうか」の用法を説明し、最後に講義内容の要点をまとめて、次回の講義の予告をする。
- ii. 講義 B: 「多重」の技法について、まず、「SUNOMO (スノモ)」を例に定義して、次に、親父ギャグや駄洒落、さらに、文学作品における「引用」の技法として、「金言使用・隠引法・暗示引用・明示引用」の例を説明し、「引用の多重」の技法をまとめる。また、井上作品の「パロディの多重」の例を説明して、技法をまとめ、最後に、次回の講義の予告をする。
- iii. 講義 C1: 村上春樹の特に短編小説について、「出来事を核」としていること解説し、ナラトロジーの手法を用いて、「土の中の彼女の小さな犬」を分析する。さらに、「納屋を焼く」を分析し、語り口が饒舌であるという村上春樹の短編小説の構造の特徴を明らかにし、最後に講義の要点をまとめ、質問を受け付け、次回の講義の予告をする。
- iv. 講義 E1: 日本語の「人称代名詞」について、学生のリアクションペーパーの訂正を通して定義し、その特徴を3点挙げ、まとめる。さらに、「人称代名詞」と、親族関係・身分関係を表す「呼称」との関連を述べる。最後に、講義の展開をまとめ、講義中予告していた問題をリアクションペーパーにまとめるよう学生に指示し、講義を終了する。

資料選定の際、書き言葉の「のダ」と話し言葉の「んダ」は、「段」の成立に関わる統括機能の出現傾向に相違があるという仮説に基づき、新書の文章は、全て、「だ・である」体の書き言葉的な性格の強いものを選択した。講義の談話4種は、筆者が所属している早稲田大学文章・談話研究会（代表者：佐久間まゆみ教授）の許可を得たものを使用している。

研究方法

ノダは、文章・談話の「段」を捉えるために有効であるが、全てのノダが一様に「段」の成立に関わるわけではない。そこで、①ノダの統括機能の分類と、その統括する範囲の分析、②新書の文章と講義の談話における統括機能別のノダの出現傾向の分析、③新書の文章と講義の談話の統括機能別のノダの出現傾向の異同の分析を行い、①②③の分析結果に基づき、④文章・談話の日本語母語話者と日本語学習者の「理解データ」を参照した上

で、「段」を意識した講義の理解方法を提示するという方法を採用した。

- ① ノダが、前後の文を統括し「段」を成立させる中心文となる統括力の強いものか、あるいは、前後にある統括力の強い文に統括されることを積極的に表す統括力の弱いものかを分析する「Ⅰ．統括力」の分析観点と、ノダが統括する、あるいは統括される方向が先行文であるか、後続文であるかを分析する「Ⅱ．統括の方向」の分析観点に従い、ノダの表現形式と各種の接続表現との共起関係からノダの「統括機能」を分析した。
- ② 新書の文章と講義の談話それぞれを対象として、統括機能によって分類された7種の「ノダの文型」が「段」の成立にどのように関わるかを明らかにするために、i.「段」内部の出現位置（開始部・終了部）と、ii.ノダが付された文が中心文として「段」の中心的内容を表すかどうかという2つの観点から、「ノダの文型」の出現傾向を分析する。
- ③ 新書の文章における書き言葉的な「のダ」と講義の談話における話し言葉的な「んダ」による「段」統括機能の異同を明らかにするため、新書の文章と講義の談話それぞれの「ノダの文型」の出現傾向を比較する。
- ④ 講義 G と同一者によるほぼ同一内容の新書 G を用いて、講義の理解方法を提示する。まず、「ノダの文型」による文章と談話の理解への影響について、佐久間研究代表者（1997,2014）の要約文による理解データを用いて、日本語母語話者と日本語学習者の相違を明らかにする。そして、①②③の研究方法に則って、講義 G と新書 G の「ノダの文型」による「段」の統括機能による分析を行い、「段」を意識した講義理解の方法を提示する。

第4章 ノダの「統括機能」による「新書」の文章の文脈展開方法

第4章では、第3章の分析方法にしたがって、新書の文章6編における「段」の成立に関わるノダの文型を明らかにした。

ノダの「文型」別の接続表現とノダの形式の共起関係を以下の【表 39】に示す。

【表 39】新書の文章における「文型」別の接続表現とノダの形式の出現傾向

統括機能	ノダの文型	接続表現(5例以上)			ノダの形式(5例以上)			
		つまり(43)	すなわち(7)	しかし(5)	のである(276)	のだ(33)	のだと(8)	のだらう(5)
Ⅰ 前方統括機能	2.見解	つまり(15)	すなわち(7)	しかし(5)	のである(62)	のだ(12)	のだと(8)	のだらう(5)
	3.帰結	しかし(19)	そして(16)	しかも(8)	のである(262)	のだ(23)	のであった(6)	
		その結果(6)	したがって(6)	だから(5)				
Ⅱ 後方統括機能	4.概略	しかし(3) ※			のである(21)			
Ⅲ 前方被統括機能	5.補注	もっとも(1) ※			のだらうが(1) ※			
	6.原因・理由	たとえば(2) ※			のである(70)	のだ(5)		
Ⅳ 後方被統括機能	7.前提	そして(10)	ところが(6)		のである(57)	のだから(29)	のだが(23)	のだ(10)
	8.前提(課題)	では(5)	それでは(5)	しかし(5)	のであるから(9)	のであって(13)	のであれば(5)	
					のだらうか(47)	のか(23)	のであろうか(4)	

()内の数字は、用例数を表す。また、接続表現には、「省略」があるため、ノダの形式の総数とは一致しない。
※は、全体の用例数が5に満たないものであるが、それぞれの「文型」の特徴を表しているため、表に示している。

まず、最も典型的な文型は「1.換言」で、「つまり、(～のである／のだ)。」で、先行文(群)の内容を言い換えることで文段を統括するというものである。これは、「2.見解」とも重なるが、「2.見解」は、「つまり」よりも解釈を含む「すなわち」、そして、逆接的に言い換える「しかし」との共起が見られる点が異なる。「3.帰結」は、多くの接続表現と共起するが、順接型の接続表現「そして」「その結果」「したがって」「だから」との共起が特徴的である。最も多く共起したのは、逆接型「しかし」であるが、逆接的に結論を述べることで先行文(群)を統括している。ノダの形式は、「のであった」という過去の形で述べられることがあり、ノダによる「帰結の再提示」を表している。「4.概略」は、「しかし、～のである。」という文型で表される。先行する文段と異なる展開をし、概略的に新たな文段の内容を提示することで、後続文(群)を統括する。「5.補注」は、用例数が極端に少ないが、「もっとも、～のだろうが」という文型で示される。文章は、基本的に推敲ができるので、このような表現が現れることが少ないのだと考えられる。「6.原因・理由」は、接続表現との共起はほぼ見られない。市川(1978:55)が特殊な文末形式として示したように、ノダ自体が「原因・理由」を表すためだと考えられる。「7.前提」は、添加型の接続表現「そして」、逆接型の接続表現「ところが」との共起が見られるが、それ以上に、ノダの形式に特徴がある。最も多いのは、文末の「のである」だが、「のだから」「のだが」「のであるから」「のであって」「のであれば」と節末のノダが多く現れており、後続文に統括されることで文段の成立に関わっている。「8.前提(課題)」は、「(では／それでは)、～の[だろう]か」によって、新たな文段の課題を提示することで、後続の解答の文に統括されることを示す。逆接型の接続表現「しかし」との共起も見られるが、先行する文段に対して、逆接的に新たな課題を提示するものである。

接続表現「しかし」は新書の文章の中で出現頻度が高いが、「1.帰結」の場合は、文段内部での「内的統括機能」(佐久間 2003)を、「4.概略」「8.前提(課題)」の場合は、文段と文段とをつなぐ「外的統括機能」(佐久間 2003)を有しているという点で区別できる。

新書の文章におけるノダの用法(文型)の出現傾向は、以下の【表 40】のようになる。

新書6編のノダは、1115例中939例(84.2%)が文末に現れており、「I.前方統括機能」の「1.換言」「3.帰結」が、「全体」ではそれぞれ319例(28.6%)、305例(27.4%)と高い出現率となっている。「2.見解」も、130例(11.7%)と比較的高い出現率となっている。

【表 40】 新書の文章におけるノダの文型の出現傾向

出現位置 統括機能(用法)	全体			文末			節末		
	I. 前方統括機能	1. 換言	319	[28.6%]	1. 換言	311	[27.9%]	1. 換言	8
	2. 見解	130	[11.7%]	2. 見解	85	[7.6%]	2. 見解	45	[4.0%]
	3. 帰結	305	[27.4%]	3. 帰結	296	[26.5%]	3. 帰結	9	[0.8%]
II. 後方統括機能	4. 概略	27	[2.4%]	4. 概略	25	[2.2%]	4. 概略	2	[0.2%]
III. 前方被統括機能	5. 補注	1	[0.1%]	5. 補注	0	[0.0%]	5. 補注	1	[0.1%]
	6. 原因・理由	75	[6.7%]	6. 原因・理由	75	[6.7%]	6. 原因・理由	0	[0.0%]
IV. 後方被統括機能	7. 前提	175	[15.7%]	7. 前提	82	[7.4%]	7. 前提	93	[8.3%]
	8. 前提(課題)	83	[7.4%]	8. 前提(課題)	65	[5.8%]	8. 前提(課題)	18	[1.6%]
総計		1115	[100.0%]	合計	939	[84.2%]	合計	176	[15.8%]

([] 内の%は、全体の総計 1115 に対する割合を表す。)

「I.前方統括機能」のノダを合わせると、754 例(67.6%)と、ほぼ7割の出現率を占めていることから、新書の文章に現れるノダは、先行文(群)を統括する傾向が強いといえる。一方、「IV.後方被統括機能」の「7.前提」は175例(15.7%)と高い出現率を示しているが、特に文末の82例中61例は、「I.前方統括機能」も有しており、一つの結論が、新たな話題の「前提」として機能している。そのため、「前提」としてのみ機能している例はさらに減少する。

第5章 ノダの「統括機能」による「講義」の談話の文脈展開方法

第5章では、第3章の分析方法にしたがって、講義の談話4編における「段」の成立に関わるノダの文型を明らかにした。

ノダの「文型」別の接続表現とノダの形式の共起関係を以下の【表 41】に示す。

【表 41】講義の談話における「文型」別の接続表現とノダの形式の出現傾向

統括機能	ノダの文型	接続表現(5例以上)			ノダの形式(5例以上)		
I 前方統括機能	1.換言	口まり(14)			んですね(27) んですが(6)	んです(18)	ですよ(7)
	2.見解	で(順接)(15)	で(添加)(8)	で-(順接)(5)	んですね(23) んですけども(6) んだという(5)	んです(11) んじゃないかって(5)	んですけど(7) んだろうと(5)
	3.帰結	で(順接)(15)	口から(11)	で(添加)(7)	んですね(14)	んです(9)	んですけど(5)
II 後方統括機能	4.概略	で(添加)(7)	で(転換)(6)		んですね(19)	ですよ(5)	んです(5)
III 前方被統括機能	5.補注	で(添加)(18)			んですが(7) んですけども(5)	んですけど(7)	んですけど(5)
	6.原因・理由	というのは-(1)※	なぜならば(1)※		んですね(1)※	んですけど(1)※	んです(1)※
IV 後方被統括機能	7.前提	で(添加)(75) で-(添加)(10) たとえば(5)	で(転換)(30) それから(5)	連鎖(18) ただ(5)	んですね(67) んですけども(39) んですよ(17) んですけども-(5)	んですけど(53) ですよ(22) んですけど(17)	んですが(48) んです(18) んですけど(8)
	8.前提(課題)	で(添加)(5)			のか(10)		
	9.前提(話題)	で(転換)(5)			んですが(8)	んですけど(7)	

()内の数字は、用例数を表す。また、接続表現には、「省略」があるため、ノダの形式の総数とは一致しない。
※は、全体の用例数が5に満たないものであるが、それぞれの「文型」の特徴を表しているため、表に示している。

まず、用例数が最も多いのは、「IV. 後方被統括機能」の「7.前提」の「で(添加/転換) + んですね」「で(添加/転換) + なんです(ガ/ケド)」であり、特に、ノダが、接続助詞ガ、ケドが接続するかたちで現れている。他の「IV. 後方被統括機能」の「8.前提(課題)」は、「で(添加) + のか」で、先行する話段を引き継ぐ形で新たな話段の課題を提示し、「9. 前提(話題)」は、「で(転換) + なんです(ガ/ケド)」で、先行する話段から切り替える形で新たな話段の話題を提示するというように、典型的な接続表現とノダの共起関係が見られる。続いて、「I. 前方統括機能」の「1.換言」であるが、「つまり + なんです(ね)」という文型が認められる。また、「つまり + んですが」と節によって、先行文(群)を統括することがある。「2.見解」は、「で(順接/添加) + なんです(ね)」、「3.帰結」は、「だから + なんです(ね)」という文型で、接続表現の接続機能とノダによる統括機能の範囲に相違が見られる。接続表現は、主に先行文に対する接続関係を、ノダは、先行文群(「見解」の対象全体)に対して統括機能を担うという多重の統括機能を有する。また、ノダに「と思う」などの思考動詞が接続することも多い。「3.帰結」は、「で(順接/添加) + なんです(ね)」「だから + なんです(ね)」という文型で、先行文(群)に対して、結論を述べる形で話段を統括する。「II.後方統括機能」の「4.概略」は、「で(添加) + なんです(ね/よね)」という文型で、先行する話段を引き継ぐ形で新たな話段の中心的内容を先取りするという展開となる。「3.前方被統括機能」の「5.補注」は、「で(添加) + なんです(ガ/ケド)」という文型で、ほぼ、話段の展開とは関わらない情報を挿入するという展開となっている。「んです(ガ/ケド)」というノダによって、挿入の終了が示され、本題に戻るという展開となる。「6.原因・理由」は、用例数が極端に少なく、「というのは + なんです(けど/ね)」「なぜならば + んで

す(けど/ね)」という「補足型」の接続表現と共起する文型が認められる。講義の展開の複雑さを軽減するためにも、「原因⇒結果」の関係が優先されているため「結果←原因」という逆の展開は避けられているのだろう。

講義の談話におけるノダの用法(文型)の出現傾向は、以下【表 42】のようになる。

【表 42】 講義の談話におけるノダの文型の出現傾向

出現位置 統括機能(用法)	全体			文末			節末		
	1.換言	2.見解	3.帰結	4.概略	5.補注	6.原因・理由	7.前提	8.前提(課題)	9.前提(話題)
I.前方統括機能	76 [10.4%]	134 [18.3%]	57 [7.8%]	62 [8.5%]	75 [10.3%]	49 [6.7%]	14 [1.9%]	59 [8.1%]	8 [1.1%]
II.後方統括機能	36 [4.9%]	69 [9.4%]	3	32 [4.4%]	29 [4.0%]	3	4 [0.5%]	40 [5.5%]	0 [0.0%]
III.前方被統括機能	322 [44.0%]	22 [3.0%]	12 [1.6%]	138 [18.9%]	4 [0.5%]	0 [0.0%]	184 [25.2%]	18 [2.5%]	12 [1.6%]
IV.後方被統括機能	731 [100.0%]	392 [53.6%]	339 [46.4%]						
総計									

([] 内の%は、全体の総計 731 に対する割合を表す。)

まず、講義の談話におけるノダは、「文末」が 392 例(53.6%)、「節末」が 339 例(46.4%)と、わずかに「文末」の出現率が高いが、大きな差は見られない。「文型」別に見ていくと、最も出現率が高いのは、「IV.後方被統括機能」の「7.前提」であり、322 例(44.0%)とほぼ半数を占め、特に、「節末」での出現率が 184 例(25.2%)と高い。次いで、「I.前方統括機能」の「2.見解」の 134 例(18.3%)、「1.換言」の 76 例(10.4%)が続き、これらを合わせると 532 例(72.8%)を占める。このように、講義の談話は、「7.前提」の文型によって、新たな話段の理解に必要な情報を提示し、「1.換言」「2.見解」によって、その話段の内容に言及することで、話段を統括するという傾向を読み取ることができる。出現数第 4 位の「5.補注」は、69 例(9.4%)と比較的高い出現率であるが、これは、講義者が話段の本筋とは関係のない情報を即興的に挿入することがあるためだと考えられる。「3.帰結」のノダは、57 例(7.8%)であり、他の「I.前方統括機能」の「文型」と比較すると出現率は低い傾向がある。続く「8.前提(課題)」の 22 例(3.0%)、「9.前提(話題)」の 12 例(1.6%)は、出現率こそ低いですが、それぞれが典型的な文型を有しており、話段の開始に関わることが多い。「6.原因・理由」は 3 例(0.4%)と非常に低い出現率であるが、講義の談話の論理展開を複雑にしないためだと考えられる。

第6章 ノダによる文章とノダによる談話の文脈展開方法の異同

第6章では、第3章の分析方法にしたがって、第4章と第5章の分析結果から、新書の文章と講義の談話におけるノダの統括機能の出現傾向の異同を明らかにした。

6.1 では、ノダの形式から、新書の文章は、文末に「のである。」の形で現れる傾向があること、逆に、講義の談話は、節末に「んです (ガノケド)」の形で現れる割合が高いことを明らかにした。

6.2 では、共起する接続表現から、新書の文章は、「同列型」「順接型」「逆接型」によって、先行文(群)を統括する「I.前方統括機能」を有するノダと共起する傾向を示し(新書の文章は1,115例中754例[67.6%]、講義の談話は731例中267例[36.5%])、講義の談話は、「添加」「転換型」によって、新たな話題を展開する際、「IV.後方被統括機能」を有するノダと共起する傾向を示す(新書の文章は1,115例中257例[23.1%]、講義の談話は731例中356例[48.7%])ことを明らかにした。さらに、新書の文章は、統括力の強い「I.前方統括機能」「II.後方統括機能」のノダが1,115例中781例(70.0%)であるのに対して、講義の談話は、731例中303例(41.5%)となっており、講義の談話のノダが、話段の中心的内容を表すというよりも、むしろ、話段の中心的内容を理解するための背景的な情報を提示することが多いことを明らかにした。

6.3 では、6.1と6.2の分析結果から、ノダは、新書の文章、講義の談話の構造化に寄与しているが、新書の文章は、文段の終了部に「つまり」「だから」等とともに現れ、先行文を統括することで、文段を成立させるという傾向があり、一方、講義の談話は、文段の開始部や展開部に、「で」や「ただ」等とともに現れ、後続文に統括されることで文段の成立に関わるという傾向があることを明らかにした。

第7章 接続表現とノダの統括機能に基づいた新書と講義の理解方法

第7章では、講義Gと新書Gを用いて大学学部留学生を対象に講義の談話の理解方法を提示した。

7.1 では、ノダの文型を理解することで、講義の談話とほぼ同一内容の新書の文章に対して、「段」を意識した理解方法を身に付けることができる可能性を示した。

7.2 では、ノダの文型の理解が文章・談話の理解に有効であることを確認するために、佐久間研究代表者(1997)と佐久間研究代表者(2014)の日本語母語話者と日本語学習者の

理解調査の結果である要約文の残存率を用いて、特に、日本語学習者によるノダの統括機能に関わる文章と談話の展開的構造の理解が不十分な点を指摘した。文章については、先行文（群）を「見解」によって統括し、さらに後続文に対して「概略」として統括機能を有するノダの機能が十分に理解されていない可能性があること、反語の「のではないか」をはじめとするノダの統括力の強弱が十分に理解されていない可能性があることを指摘した。また、講義の談話に関しては、話段の開始に現れるノダが「後方被統括機能」を有する「前提」として機能することが基調となっていることから、同様に話段の開始に現れる「後方統括機能」を有する「概略」のノダの統括力の強さが十分に理解されていない可能性があることを指摘した。

7.3 では、講義 G を用いた講義の理解方法の提示のために、まず、佐久間研究代表者（2014:40-43）の講義 G の談話構造図を元に、ノダの文型が話段の成立にどのように関わっているかを分析した。その結果、ノダは、比較的低次元の話段の統括に関わる傾向があることを分析したが、比較的高次の話段の開始に「8.前提（話題）」の「で（転換）、～んですが、」という文型が用いられることが明らかになった。低次元の話段においては、開始文に「8.前提（課題）」「4.概略」の文型が用いられる傾向があること、また話段の終了文に「1.換言」「2.見解」の文型が用いられることが明らかになった。また、講義 G とほぼ同一内容の新書 G においては、ノダの用例数が講義に比べて少なく、文段の開始文に「8.前提（課題）」の文型が現れ、文段の終了文に「2.見解」のノダが現れる傾向があることが明らかになった。講義 G、新書 G の「段」の構造とノダの文型との関連を明らかにした上で、上級の日本語学習者 15 名程度を対象に、全 6 時限の講義の理解方法の授業計画を提示した。

1 時限目の授業では、6 種の文章・談話型を学習することを目的に、原話 A「日本人はそんなに駄目か」の要約文の作成を 20 分程度で行う。要約文作成後、6 種の文章型を学習し、「日本人はそんなに駄目か」が逆接の尾括型の文章型であることを確認した上で、「ノダの文型」が、主題文をはじめ、大文段の成立に関わっていることを学習し、各自の要約文 A が原文 A の構造を捉えられていたかどうかを自己確認する。

2 時限目は、講義の談話にも「談話型」があることを確認し、「談話型」を意識し、ノートを取りながら DVD による講義 A を視聴し、要約文を作成する。

3 時限目は、まず、講義 A が「尾括型」の談話型であることを構造図によって確認し、前回各自の作成した講義 A の要約文が主題文を正しく把握できているかを検討する。大話段のレベルでは、ノダが、II.展開部の開始文に「4.概略」の文型が、II.展開部の中心文に

「2.見解」と「7.前提」の文型が用いられていることを確認する。

4 時限目は、「談話型」を意識し、ノートを取りながら DVD による講義 G を視聴して、要約文作成を宿題として課す。

5 時限目は、講義 G が「両括型」であることを確認し、要約文が講義 G の構造を捉えられているかを確認する。さらに、講義 G の内容理解を深めるために、ほぼ同一内容の新書 G を読解する。その際、講義 G と新書 G それぞれの「段」構造図を用い、ノダの統括機能別の出現傾向に相違があることを確認する。

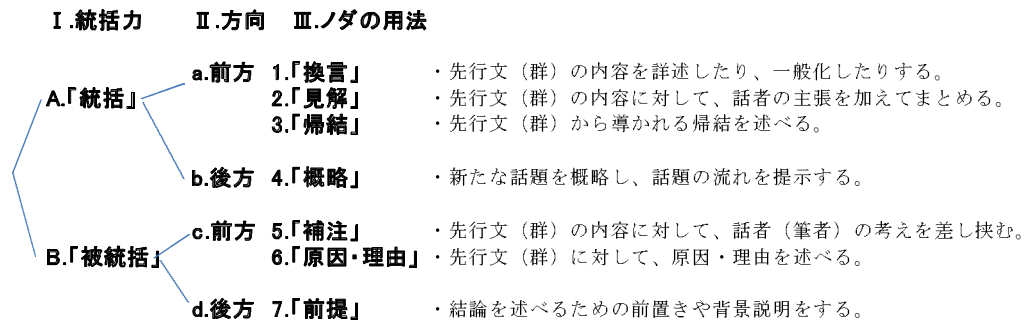
6 時限目は、ノダの文型による話段を把握しながら、話段の展開が分かる程度に編集された講義 G の DVD を視聴し、3 人 1 組のグループに分かれ、3 分程度で内容をまとめられるように話し合う。最後に、グループごとの代表者が、話し合った結果をもとに、3 分間で講義 G の内容を口頭発表するという方法である。

ノダの「文型」を学習することは、言語形態的指標によって「段」のまとまりを意識した理解方法を身に付けることにもつながり、さらに、学習者自身がまとまりをつけながら話をするスピーチ等の独話の際にも活用可能なものであると考えられる。

8.2. 本研究の結論

本研究では、「段」のまとまりを把握しながら、新書の文章と講義の談話を理解する方法を提案することを目的として、接続表現とノダの共起による「ノダの文型」の「段」の統括機能を実証的に分析した結果、以下の 3 点の結論が得られた。

結論 1 ノダの「統括機能」を、「Ⅰ. 統括力」と「Ⅱ. 統括の方向」を基準に、「a. 前方統括機能」「b. 後方統括機能」「c. 前方被統括機能」「d. 後方被統括機能」の 4 類に大別し、さらに、ノダの形式と、共起する「接続表現」を手がかりに、実際の文章・談話の展開的構造の理解に即した以下の 7 種の「用法（文型）」に分類した。



※ 「7.前提」は、ノダの形式により「8.前提（課題）」と「9.前提（話題）」に細分される。

【図 2】 統括機能によるノダの用法の分類（7種）

ノダは、「段」の中心的内容を端的に表し、「段」を統括する際に用いられることがある一方で、「7.前提」のように、「段」の中心文に統括されることを示すために用いられることもある。これは、文章と談話の大小さまざまな話題のまとめりである「段」を統括する中心文を表すノダと、そうではないノダがあるということを表し、文章・談話論において、重要な分析観点となると考えられる。そのため、「I. 統括力」を分類の観点として最も重視した。例えば、先行文（群）に対して、見解を述べるという意味では「2.見解」と「5.補注」は、同じだとみなすことができる。しかし、「2. 見解」の例(169)の文の文 83 は、「つまり、～んだらうなーと思います。」と、文 77～82 を統括する中心文となり、例(170)の「5. 補注」のノダである、文 140 の「～んでしょあかな。」は先行文 139 に対して、文 142 の「～んでしょあかね。」は先行文 141 に対して、挿入された見解であり、話段の中心的内容を担うとは考えられない統括力の弱いノダだと言える。実際の話段の中心文は、文 143 となる。

(169)

77 ええとー、同じような例としては9番ですね↑。

78 「今度の行革は、カレーライスがライスカレーになったようなもの。

79 (4)1府 [いちぶ] 12、12省庁となったけれど、言葉だけの置き換えというか、省庁の数合わせに終わっており、変わったように見えながら、実際は、実際には何も変わっていない。」

80 この、「カレーライスがライスカレーになったようなもの。」、すごく印象的で、記憶に残りやすい表現ですよえ↑。

- 81 でも、一方、これ、これでは、その、事柄の内容というのを正確に伝えることができません。
- 82 で、長々と説明してある、その、「1府 [いちぶ] 12省庁」以下「何も変わっていない」まで、これだけだと確かにその、内容ってのはわかりやすいですけども、わかりやすいからといってインパクトがあって記憶に残りやすいかということ、多分、読んで、すぐ理解して、すぐ忘れてしまうんじゃないかなーと思います。[2.見解]
- 83 つまり、言い換えることによって、記憶につなぎ止める役目っていうのも、きっとあるんだらうなーと思います。[2.見解]

(講義A)

(170)

- 133 どんな1人称代名詞があるか。
- 134 たくさん出たんですが、「おれ」という1人称代名詞、いいですよ、とはどういうのか。[7.前提] [8.前提(課題)]
- 135 「小5ぐらいからデビューする。」(2)
- 136 んー、思い当たりますか↑。
- 137 それから、「自己尊敬に近い言葉だ。」
- 138 はー、まー、男が使うというのは当然(だとしてよ)、自己尊敬、はー、「おれ」。
- 139 それから、「『僕』よりぞんざいで、『僕』より強く、男らしい。」{笑い}
- 140 男らしくしたければ、「おれ」って言えばいいんでしょうかな。[5.補注]
- 141 それから、わざわざのコメントで、「強気な女性もたまに用いる。」{笑い}
- 142 強気な女性って、一体どこにいるんでしょうかね。[5.補注]
- 143 で、もしこういう違いがあるとすると、「おれ」っていうのは、まず性に関わってるわけですね。

(講義E1)

「2.見解」と「5.補注」のノダは、表現形式の違いから論じることが可能であるが、文章・談話を、「話題のまとまり」を把握しながら理解するためには、2文間の関係(先行文に対する見解を述べる)だけでは不十分で、「段」レベルでのノダの統括機能を分析したことで、これらの違いを明らかにすることができた。

また、「II.統括の方向」を分析観点とすることで、例(170)の文134の「7.前提」「～のか。」

が、後続文を機能領域とすることを、例(169)の文 83 の「2.見解」「つまり、～んだろうな一と思います。」が、先行文を機能領域とすることを分析することができ、話段の開始や終了を把握する際に有効であり、また、ノダが前方にも後方にも統括の機能領域を有する例の分析も可能となった。いずれも、ノダを文章・談話の「段」の展開的構造を捉えるために有効な分類基準であると考えられる。

結論 2 新書の文章における「ノダの文型」は、事例や出来事などを述べた先行文（群）に対して、端的に言い換えてまとめたり、筆者の見解を述べたりすることで先行文全体を統括し、「文段」を成立させる「I.前方統括機能」を有する傾向があることが明らかになった。「つまり、～のである。」に代表される「1.換言」、「すなわち、～のである。」に代表される「2.見解」、「しかし、～のである。」「そして、～のである。」「しかも、～のである。」「（したがって／だから）、～のである。」に代表される「3.帰結」が、全体の1,117例中754例（67.6%）と約7割を占める。このことから、先行文（群）を統括することで「文段」を成立させる尾括型の「段型」となる傾向があることが明らかになった。

結論 3 講義の談話に現れる「ノダの文型」が、新たな話段の開始文に、その話段に必要な前提情報を提示する「IV.後方被統括機能」を有する傾向があることが明らかになった。「で（添加／転換）+んですね」「で（添加／転換）+んです（ガ／ケド）」に代表される「7.前提」、「で（添加）+のか」の「8.前提（課題）」、「で（転換）+んです（ガ／ケド）」の「9.前提（話題）」が、全体の731例中356例（48.7%）を占めており、特に「8.前提（課題）」「9.前提（話題）」は、先行文と一定の間隔を空け、新たな話段を開始する際に用いられる傾向があることが明らかになった。

また、用例数の多い「7.前提」「5.補注」は、いずれも「被統括機能」を有しており、話段の様々な位置に現れて、その話段に関わる情報を差し挟むという展開となるため、ノダだけでなく、接続表現との共起による「ノダの文型」として捉えることの必要性を示した。

新書の文章は、読み返すことができるため、前方統括機能のノダの文型を受けて、遡って文段のまとまりを確認できる一方、講義の談話は、これから新たに開始する話段の内容をノダの文型によって予測することができるという点で、いずれも「段」の展開的構造を捉える手がかりとしてノダの文型を用いることが可能であることを指摘した。

上記の3点の結論から、大学学部留学生15名程度を対象に、全6時限の講義の理解方法の授業計画を提案した。先行研究である「日本人はそんなに駄目か」と「講義A」の要約文作成から、文章と談話には「段」の多重構造があり、それらは、意味内容だけでなく、各種の接続表現やノダなどの言語形態的指標を伴っていることを学習する。それから、講義Gと新書Gという同一者によるほぼ同一内容の文章を扱う。講義の談話G、その理解を補うための新書G、それぞれの要約文作成を通して、「接続表現+ノダ」に注意しながら、談話の展開的構造を捉えるという講義の談話の理解方法を計画した。

講義の談話と新書の文章のノダの「段」の統括機能に基づいた、以上の講義の理解方法の学習は、実質的な情報内容をほとんど持たないノダが、接続表現との共起関係に注目することで、話段をまとめながら進行するという講義の談話の展開的構造を捉える際の手がかりとなる。また、具体的な「文型」を示したことで、「理解」だけでなく、レポートや論文や、スピーチ等の「表現」にも応用可能なものであると考えられる。

8.3. 本研究の意義と今後の課題

8.3.1. 本研究の意義

本研究の意義は、主として、以下の2点にある。第1点は、論理的な文章・談話に現れるノダを接続表現との共起関係を手がかりに、「統括機能」（「Ⅰ.統括力」と「Ⅱ.統括の方向」）を基準に分類することで、新書の文章と講義の談話の「段」の展開的構造を捉える形態的指標として提示したことである。ノダは、膨大な先行研究があるが、接続表現との共起関係を手がかりに、ノダの統括機能を網羅的に扱ったものは、管見の限り見当たらない。例えば、ノダという文末形式が、「補注」のように、当該の「段」の内容に対して、さして重要ではない補足的な情報を即興的に差し挟むという展開を示すものもあれば、「見解」のように、先行文（群）に対する見解を述べることで、中心文として先行文（群）を「統括」し、「段」を成立させるという展開を示すものもある。「補注」と「見解」のいずれも、ある事柄に対する筆者の「考え」を述べるという点では共通しているが、「段」の展開的構造を捉える上では、対照的なものとなる。本研究は、文章論の分析方法に基づいた分析を行うことで、論理的に展開する新書の文章と講義の談話という限定的な資料についてはあるが、統括機能に基づくノダの一貫した分類を行うことができた。

第2点は、文法論の研究において、文体差のみで、相違がないとされていた書き言葉的な「のダ」と話し言葉的な「んダ」について、文章・談話論的な分析観点である「段」の統括機能によって分析することで、異なる出現傾向を示すことを明らかにしたことである。共起する接続表現とノダの表現形式の分析から、新書の文章の展開的構造を捉えるためのノダ（「のダ」を基調とした）の「文型」と、講義の談話の展開的構造を捉えるためのノダ（「んダ」を基調とした）の「文型」を提示することができた。以上、文法研究と文章・談話研究の成果を総合的に分析することで、講義と新書の理解方法を提示した点に意義があると考える。

8.3.2. 今後の課題

本研究は、「各種の接続表現＋ノダ」という言語形態的指標に基づいた新書の文章と講義の談話の展開的構造を分析したが、実際の文章と談話の理解には、これだけでは不十分であり、同一の統括機能を有する他の形態的指標との比較が必要である。講義の談話においては、「換言」は、ノダのみで行われているわけではなく、ノダよりも統括力が強い傾向のあるトイウコトダとの比較などを行う必要がある。ノダとトイウコトダの統括力に強弱の差が認められるのであれば、本研究では部分的な記述に留まった「段」の多重構造をより詳細に記述することができるようになると考えられる。文章と談話の理解の「段」を把握しながら、理解するための言語形態的指標の記述を充実させていくことが必要である。

また、本研究では、数文単位での比較的低次元の「段」の成立に関わる記述が主で、文章構造を直接表す「大段」までの記述は及ばなかった⁵⁹。今後は、文章と談話の全体構造から、ノダがどのように機能しているのかを分析していく必要がある。

⁵⁹書きことばの「のだね。」は、次のように、ある前提をもとに事実を確認するような場合にしか用いることができない。

⁵⁹本研究における「ノダの文型」の統括機能は、佐久間編著(2003:99-104)の「内的統括」機能の記述に相当すると考えられる。

ⁱⁱ石黒（2003:22）は、以下のように、前方に対する機能（充填機能）と後方に対する機能（前提機能）が同時に機能することに言及している。

「のだ」のテキスト的機能に関して、少し述べておきたい。すでに述べたように、完結感が感じられるものについては前提機能を持たず、完結感が感じられないものにかぎって前提機能が働くこと述べたが、実際には見方によっては完結感が感じられ、見方によっては前提機能が働くというような例が、まれにはあるが、観察される。

このようなノダの機能を「まれ」であるとして、この1例のみを特別に扱っているが、実際の用例の中では、前方に対する機能（充填機能）と後方に対する機能（前提機能）が同時に機能する例は、決して少ないとは言えず、また、その組み合わせも多様である。詳しくは第4章で扱う。

- iii (a) 全体を統括する（大）段落をもつもの（統括型）。
（ア）冒頭で統括するもの（頭括式）。－全体は二段に分かれる。
（イ）結尾で統括するもの（結尾式）。－全体は二段に分かれる。
（ウ）冒頭と結尾で統括するもの（双括式）－全体は三段に分かれる。
（エ）中ほどで統括するもの（中括式）。－全体は三段に分かれる。
(b) 全体を統括する（大）段落をもたないもの（非統括型）。
冒頭・結尾があっても、それが統括機能をもたないもの。－全体は、二段・三段・多段（四段以上）、などに分かれる。（市川 1978:156－157）

iv 「のか」が必ずしも、〈課題導入〉となるわけではない。特に節末に「のか」が用いられた場合は、文章の展開に直接言及する表現が必要になる。

75 ここに天体分光学とよばれる学問が誕生したのである。

76 しかし、この時点では太陽表面に存在するいろいろな元素が、どのような割合で存在しているのかまではわからなかった。

77 また木星や土星などの惑星の大気中に、炭酸ガス、メタン、アンモニア、水などの分子が存在することはわかったものの、これらの存在比率についても当時は明らかにできなかった。

78 さて、星からの光の中に特定の波長のところで明るく輝くパターンが生じたり、吸収されて暗くなるパターンが生じることは、一八一〇年代にドイツのヨーゼフ・フラウンホーフアーにより、太陽光の観測から示されていた。

（宇宙）

上記の文 76 のように、節末に「のか」が用いられていても、文末述部が「わからなかった。」という文章の展開に直接言及する表現ではないため、これが、〈課題提示〉となることはない。文 77 では、接続表現「また」によって、並列の情報が付加され、文 78 では、転換の接続表現「さて」によって、新たな話題が展開されていることから、「のか」を含む文 78 が〈課題提示〉とはなっていないことがわかる。

▽ 角田 (2004) は、「おおまかに言って、ワケダとノダを比べると、ワケダはスコープが広く、ノダは狭い。」(p.130) としており、ワケダは「ノダを包み込む大きなサイクルであると考えられる。基本的には、ノダがいくつか出て、それをワケダで締める。」(p.152) という説明をしている。ただし、ワケダの思考プロセスは一回限り、ノダはサイクルの連鎖があるため、「見かけ上はワケダがノダのサイクルに入り込んでいるように見えることがある。ワケナノダという形がある。」(p.153) としているが、この説明には疑問が残る。例えば、ノダよりもワケダのスコープが広い根拠として、トイウワケダという形式はあるが、トイウノダという形式はないことを挙げている。ところが、次の例のように、トイウコトナノダという形式が、直前のワケダを統括する例が見られる。ワケダとノダは、そもそもパラダイグマティックな関係ではなく、シンタグマティックな関係なので、同一に扱うことはできないだろう。角田 (2004) の議論に則れば、トイウノダが認められないのであれば、ワケよりも実質的意味の薄いコトを付加し、トイウコトナノダの形式を、トイウワケダと比較してもよいということになる。

(エラー! メイン文書しかありません。)

404 2 人称の、2 人称の代名詞として、こういうのを挙げましたでしょ。

405 で、これが、これが使えるのは、これが使えるのは、少なくともですね、こちらのほうである。

406 つまり、目上で、えー、親しくない相手に対して 2 人称代名詞を、まー、使うということは、普通しないし、できないってことなんです。

407 で、こちらのほうでも、こちらのほうでも、やっぱりケース・バイ・ケース。

408 で、ここは使える。

409 ここは使える。

410 つまり、えー、目下で親しい関係にある場合、目下で親しい関係にある場合には、あー、「おまえ」とか、「きさま」とかっていうふうな言い方ができるわけです。

411 ここは対等ラインですから、対等ラインでも使えます。(2)

412 わかりますね。

-
- 413 2人称代名詞が使えるっていうのは、今言ったような相手に対する待遇でいうとですね、待遇で
いうと、自分と対等か、それ以下の人には使えないことになっているってことなんです。
- 414 さっき3人称で、そういう説明をちょっとしましたけれども、2人称代名詞は典型的にそうなっ
てるってことなんです。
- 415 で、なぜだと思います↑。
- 416 なぜ、2人称代名詞を、自分よりも目上の人には使えないのか。
- 417 なぜだと思います↑。(2)
- 418 後[あと]でリアクションペーパーに書いてもらいますから、考えといて下さい。
- 419 使えないです。
- 420 で、(2)一つ補っとくと、あな、今のは「あなた」ですよ。
- 421 かつては、これ、次の時間取り上げる「こそあど」なんです。
- 422 向こうのほうって意味なんです。
- 423 向こうのほうという意味なんです。
- 424 わかりますか↑、向こうのほう。
- 425 向こうのほうということはですね、相手を遠くにいる人としてみなすってことなわけです。
- 426 これが、えん曲に相手のことを指し示すってことなんです。
- 427 つまり、直接その人というふうに言わないんです。
- 428 向こうのほうにいる方ということになるわけです。
- 429 「おまえ」も知ってますよね。
- 430 これは、もともと「御前である」という、(6)というのはわかりますよね。
- 431 「御前」というのは、誰か自分よりも目上の人に、がいて、その前にいますというふうな意味な
わけですよ。
- 432 ですから、あー、言いたいのはですね、「きさま」っていうのも、これは漢字で当てはめれば、
こうなるってわかるでしょ。
- 433 それから、「君」っていうのも、これは「我が君」みたいにして、もともとは主君、主君の意味
だったわけです。
- 434 えー、何が言いたいか。
- 435 いずれにしても、古くはですね、古くは、相手を敬った言葉だったんです。
- 436 相手を敬った言葉だったんです。

-
- 437 それが時代とともにどんどん価値が下落してくるっていうふうに言ってますが、えー、価値が、
あー、下がって行って、もう対等以上には使えなくなってしまった。
- 438 こういう歴史的な経緯があります。
- 439 歴史的な経緯があります。
- 440 だから、最初作った時には、敬うつもりで言った言葉ですから、その限りでは、いいですか、その限りでは、2人称の代名詞ではなかったんです。
- 441 意味わかります↑。
- 442 つまり、遠いところにいる方とか、あー、私の目の前にいらっしゃる方とか、尊い方だとか、ご主人様、そういう意味で使っていたわけです。
- 443 それが2人称代名詞として、2人称代名詞というのはさっき説明しましたよね、こういう使われ
方をするようになるにつれて、だんだん価値が下がってきたっていうことになるわけです。
- 444 で、対等以上には、あー、使えなくなってしまったということなんです。(2)
- 445 で、これと近いものとして、1人称代名詞が2人称代名詞に変わったものっていうの、思いつきますか↑。(3)

(講義 E1)

vi 田野村 (1990) の「披瀝性」、菊池 (2000) 「①話手と聞手とが、ある知識・状況を共有して、②それに関する事で、話手・聞手のうち一方だけが知っている付加的な情報があるという場合に、その一方だけが知っている付加的な情報を他方に提示するときの言い方が「のだ(んです)」(その提示を求めるときの言い方が「のか」(んですか))」である。」の記述も参照。

【参考文献】

- 青木惣一（1993）「『のだ』文の基本的意味をめぐる諸説の検討と今後の課題『のだ』文に対する語用論的分析試案その1」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』16,アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター,1-27頁.
- 青木惣一（1996）「『確信度』を用いた『のか』の語用論的分析」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』19,アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター,1-27頁.
- 庵功雄（2000）「教育文法に関する覚え書き」『一橋大学留学生センター紀要』3,一橋大学留学生センター,33-41頁.
- 庵功雄（2001）『新しい日本語学入門ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク.
- 庵功雄（2007）『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）松岡弘監修『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 石井容子（2002）「日本語学習者による『のだ』文の理解」『別府大学紀要』42,別府大学会,183-192頁.
- 石黒圭（2000）「『のだ』に関する一試論」『一橋大学留学生センター紀要』3,一橋大学留学生センター,43-58頁.
- 石黒圭（2003）「『のだ』の中核的機能と派生的機能」『一橋大学留学生センター紀要』6,一橋大学留学生センター,3-26頁.
- 石黒圭（2008）『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房.
- 井島正博（1998）「形式名詞述語文の多層的研究」『成蹊大学一般研究報告』30,1-93頁.
- 市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版.
- 岩崎卓（1996）「ノダカラの統語的特徴について」上田功他編『小泉保博士古稀記念論文集 言語探究の領域』大学書林,69-77頁.

-
- 内田聖二 (1998) 「『(の)だ』—関連性理論からの視点—」小西友七先生傘寿記念論文集
編集委員会編『小西友七先生傘寿記念論文集 現代英語の語法と文法』大修館書店,
243-251 頁.
- 大曾美恵子 (1986) 「誤用分析 2『先生アイスクリームが食べたいんですか。』」『日本語学』5-10,明治書院,91-94 頁.
- 岡部寛 (1994) 「説明のモダリティー『わけだ』と『のだ』の用法とその意味の違いの比較の観点から—」『大阪大学日本学報』13,大阪大学文学部日本学研究室,15-29 頁.
- 奥田靖雄 (1990) 「説明 (その 1) —のだ,のである,のです—」言語学研究会編『ことばの科学』4,むぎ書房,173-216 頁.
- 奥田靖雄 (1992) 「説明 (その 2) —わけだ—」言語学研究会編『ことばの科学』5,むぎ書房,187-219 頁.
- 奥津敬一郎 (1964) 「『の』のいろいろ」『口語文法講座 3 ゆれている文法』明治書院.
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 1』くろしお出版.
- 菊地康人 (2000) 「『のだ (んです)』の本質」『東京大学留学生センター紀要』10,東京大学留学生センター,25-51 頁.
- 工藤真由美 (1997) 「否定文とディスコース—『～ノデハナイ』と『～ワケデハナイ』—」『ことばの科学』8,むぎ書房,66-102 頁.
- 国広哲弥 (1984) 「『のだ』の意義素覚え書」『東京大学言語学論集』84,東京大学文学部言語学研究室,5-9 頁.
- 国広哲弥 (1992) 「『のだ』から『のに』・『ので』へ—『の』の共通性」カッケンブッシュ寛子他編『日本語研究と日本語教育』,名古屋大学出版会,17-34 頁.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- 久野暲 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店.
- グループ・ジャマシイ編著 (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版.
- 甲田直美 (2001) 『談話・テキストの展開のメカニズム—接続表現と談話標識の認知的考察—』風間書房.
- 小金丸春美 (1990) 「ムードの『のだ』とスコープの『のだ』」『日本語学』9-3,明治書院,72-82 頁.

-
- 小金丸春美 (1991) 「『のではなく』の機能」『阪大日本語研究』3,大阪大学文学部日本学科(言語系),45-58頁.
- 国立国語研究所(1951)『国立国語研究報告3 現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版.
- 小林ミナ(1993)「疑問文と質問に関する語用論的考察—特にそのスコープと焦点について—」『言語研究』104,日本言語学会,128-156頁.
- 近藤安月子(2002)「会話に現れる『ノダ』—「談話連結語」の視点から」上田博人編『シリーズ言語科学5 日本語学と言語教育』,東京大学出版会,225—249頁.
- 近藤安月子(2003)「ノダを伴う発話—談話連結形式として」『松田徳一朗教授追悼論文集』,研究社.
- 近藤安月子(2006)「『のだ』が指標する話し手の主観性(特集「いま」と「ここ」の言語学—ことばの〈主観性〉をめぐって)」『言語』35-5,大修館書店,68-73頁.
- 西條美紀(2007)『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』(平成16-18年度科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(C) 研究代表者:西條美紀)
- 佐久間まゆみ(1986)「文章構造論の構想—連文から文段へ—」永野賢(編)『文章論と国語教育』,朝倉書店,49-67頁.
- 佐久間まゆみ(1987)「文段認定の一基準(I)—提題表現の統括—」『文藝言語研究言語篇』11,筑波大学文芸・言語学系,89-135頁.
- 佐久間まゆみ編(1989)『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版.
- 佐久間まゆみ(1990)「文段認定の一基準(II)—接続表現の統括—」『文藝言語研究言語篇』17,筑波大学文芸・言語学系,35-66頁.
- 佐久間まゆみ(1991)『日本語教育のための文章理解と要約文の研究—韓国人学習者を対象として—』(昭和63・平成2年度科学研究費補助金研究成果報告書 一般研究C 研究代表者:佐久間まゆみ)
- 佐久間まゆみ(1992)「文章と文一段の文脈の統括—」『日本語学』11-4,明治書院,41-48頁.
- 佐久間まゆみ(編)(1994)「要約文の表現類型—国語教育と日本語教育のために—」ひつじ書房.

-
- 佐久間まゆみ (1995) 「中心文の『段』統括機能」『日本女子大学紀要 文学部』44,93-109 頁.
- 佐久間まゆみ (1997) 『要約文の表現類型と評価方法—外国人学習者と日本人大学生の比較—』(平成 6-8 年度科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(C)(2) 研究代表者: 佐久間まゆみ)
- 佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編 (1997) 『文章・談話のしくみ』おうふう.
- 佐久間まゆみ (2000) 『日本語の文章・談話における「段」の構造と機能』(平成 9-11 年度科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(C)(2) 研究代表者: 佐久間まゆみ)
- 佐久間まゆみ (2002) 「接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則『日本語の文法 4 複文と談話』,岩波書店,117-189 頁.
- 佐久間まゆみ (2003) 「文章・談話における『段』の統括機能」佐久間まゆみ(編)『朝倉日本語講座 7 文章・談話』,朝倉書店,91-119 頁.
- 佐久間まゆみ (2009) 「表現の展開・構造」糸井通浩・半澤幹一(編)『表現学を学ぶ人のために』,世界思想社,101-116 頁.
- 佐久間まゆみ(編著) (2010) 『講義の談話の表現と理解』くろしお出版.
- 佐久間まゆみ (2014) 『大学学部留学生のための講義の談話に関する研究』(平成 23-25 年度科学研究費補助金基盤研究(B) (一般) 研究代表者: 佐久間まゆみ)
- 佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』ひつじ書房.
- 佐治圭三 (1998) 「『～のだ』の中心的性質」『京都外国語大学研究論叢』50,京都外国語大学機関誌編集委員会,208-217 頁.
- 佐治圭三 (1999) 「『～のだ』補説」『無差』6,京都外国語大学日本語学科,13-25 頁.
- 清水佳子 (1997) 「主題連鎖と『のだ』との関連」『現代日本語研究』4,大阪大学現代日本語学講座,47-61 頁.
- 霜崎實 (1981) 「『ノデアル』考—テキストにおける結束性の考察—」『Sophia Linguistica』7,上智大学,116-124 頁.
- 立川和美 (1997) 「説明的文章における『のだ』文の機能に関する試論」『言語情報科学研究』2,東京大学言語情報科学研究会,15-31 頁.
- 田中章夫 (1971) 「『なのだ』『なのです』『のだ』『のです』」松村明編『日本文法大辞典』明治書院.

-
- 田中章夫 (1984) 「接続詞の諸問題—その成立と機能—」 鈴木一彦・林巨樹 (編) 『研究資料日本文法第4巻 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』 明治書院, 81-123 頁.
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』 和泉書院.
- 田野村忠温 (1993) 「『のだ』の機能」 『日本語学』 12-10, 明治書院, 34-41 頁.
- 趙萍 (2008) 「中国人日本語学習者における『のだ』『のか』の習得—使用条件と非使用条件をめぐって—」 『日本語教育』 137, 日本語教育学会, 11-22 頁.
- 塚原鉄雄 (1966) 「論理的段落と修辭的段落」 『表現研究』 4, 表現学会, 1-9 頁.
- 塚原真紀 (1998) 「日本語学習者の会話文における『ノダ/ンデス』の使用実態に関する一考察」 『筑波応用言語学研究』 5, 71-84 頁.
- 角田三枝 (2001) 「日本語のネクサスとモダリティー」 『国語学会 2001 年度秋季大会要旨集』 国語学会, 24-31 頁.
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』 くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1980) 「ムードの形式と意味 (2) —事態説明の表現—」 『文藝言語研究言語篇』 5, 筑波大学文芸・言語学系, 103-119 頁.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版.
- 時枝誠記 (1960) 『文章研究序説』 山田書院.
- 長田久男 (1984) 『国語連文論』 和泉書院.
- 長田久男 (1995) 『国語文章論』 和泉書院.
- 長田久男 (1998) 『文章を読む行為の研究』 溪水社.
- 永野賢 (1986) 『文章論総説』 朝倉書店.
- 名嶋義直 (2000a) 「ノナラ・ナラに関する一考察」 『言葉と文化』 創刊号, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻, 143-162 頁.
- 名嶋義直 (2000b) 「ノダの分析に向けて—諸説の検討とその問題点」 『ことばの科学』 13, 名古屋大学言語文化部言語文化研究会, 117-139 頁.
- 名嶋義直 (2001a) 「ノダの持つ『手続き的意味』に関する一考察」 『言葉と文化』 2, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻, 143-160 頁.
- 名嶋義直 (2001b) 「『発見のノダ』再考」, 『語用論研究』 3, 日本語用論学会, 1-15 頁.

-
- 名嶋義直 (2002a) 「『既定性』を中心としたノダ文分析の限界」『言葉と文化』3,名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻,91-109 頁.
- 名嶋義直 (2002b) 「『説明のノダ』再考—因果関係を中心に—」『日本語文法』2-1,日本語文法学会,66-88 頁.
- 名嶋義直 (2002c) 「『文末のノ』に関する試案」『ことばの科学』15,名古屋大学言語文化部言語文化研究会,65-87 頁.
- 名嶋義直 (2003a) 「いわゆる『論述文』におけるノダの使用条件—学習者の作文を中心に—」『日本語教育』118,日本語教育学会,37-46 頁.
- 名嶋義直 (2003b) 「ノダカラの意味・機能—語用論的観点からの考察—」『語用論研究』5,日本語用論学会,17-30 頁.
- 名嶋義直 (2005) 「学習者の考える『ノダの意味・機能』に関する覚え書き—母国で受けた教授内容との関係から—」『日本語教育論集』14,姫路獨協大学大学院言語教育研究科日本語教育コース,17-24 頁.
- 名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—』くろしお出版.
- 野田春美 (1992) 「複文における『の(だ)』の機能—『のではなく(て)』『のでは』と『のだから』『のだが』—」『阪大日本語研究』4,大阪大学文学部日本学科(言語系),73-90 頁.
- 野田春美 (1993a) 「単純命題否定と推論命題否定—『のではない』と『わけではない』—」『梅花短大国語国文』5,梅花短期大学国語国文学会,49-63 頁.
- 野田春美 (1993b) 「『のだ』と終助詞『の』の境界をめぐって」『日本語学』12-11,明治書院,43-50 頁.
- 野田春美 (1995b) 「『のだから』の特異性」仁田義雄編『複文の研究(上)』くろしお出版,221-245 頁.
- 野田春美 (1995a) 「～ノカ?,～ノ?,～力?,～φ?—質問文の文末の形」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類意表現の文法(上)単文編』くろしお出版,210-219 頁.
- 野田春美 (1995b) 「ガとノダガ—前置きの表現—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』くろしお出版,565-572 頁.
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版.

-
- 野田春美 (2002) 「第7章 説明のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃
『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版,230-260頁.
- 野村眞木夫 (1995) 「日常会話における『のだ』発話—テキスト的な機能と対人的な機能
に関する問題提起—」『表現研究』62,表現学会, 65-72頁.
- 野村眞木夫 (2000) 『日本語のテキスト—関係・効果・様相—』ひつじ書房.
- 馬場俊臣 (1986) 「『主要語句の連鎖』と『反覆語句』との交渉」永野賢 (編) 『文章論
と国語教育』朝倉書店,68-83頁.
- 馬場俊臣 (2006) 『日本語の文連接表現—指示・接続・反復—』おうふう.
- 林大 (1964) 「ダとナノダ」時枝誠記・遠藤嘉基監修 森岡健二他編『講座日本語6 口語
文法の問題点』明治書院,282-289頁.
- 林四郎 (1960) 『基本文型の研究』明治図書出版.
- 林四郎 (1973) 『文の姿勢の研究』明治図書出版.
- 林四郎 (1990) 「文の成立事情—文章論的文論への序説—」『国語学』160,国語学会,40-50
頁.
- 林四郎 (1998) 『文章論の基礎問題』三省堂.
- 藤城浩子 (2007) 「ノダによる『強調』『やわらげ』の内実」『日本語文法』7-2,171-187
頁.
- 藤城浩子 (2011) 「文末のノダにおける『既定性』と『承前性』」『早稲田日本語研究』
20,70-81頁.
- 堀口和吉 (1985) 「『のだ』の表現性」『山邊道』29,天理大学国語国文学会,39-57頁.
- マクグローイン・H・直美 (1984) 「談話・文章における『のです』の機能」『言語』13-1,
大修館書店,254-260頁.
- 松岡弘 (1987) 「『のだ』の文・『わけだ』の文に関する一考察」『言語文化』24,一橋大
学語学研究室,3-19頁.
- 松岡弘 (1993) 「再説—『のだ』の文・『わけだ』の文」『言語文化』30,一橋大学語学研
究室,55-74頁.
- 松木正恵 (1993) 「『の』と終助詞の複合形をめぐって」『日本語学』12-11,明治書院,51 -
64頁.
- 三尾砂 (1942) 『話言葉の文法—言葉遣篇—』帝国教育会出版部.

-
- 三尾砂 (1960) 「主語・総主・題目語・対象語」『口語文法講座 2 各論研究編』明治書院.
- 三上章 (1943) 「体言の役割」『コトバ』5-9, 国語文化研究所.
- 三上章 (1972) (1953 の復刻版) 『現代語法序説—シンタクスの試み』くろしお出版.
- 南不二男 (2003) 「文章・談話の全体的構造」佐久間まゆみ (編) 『朝倉日本語講座 7 文章・談話』朝倉書店, 120-150 頁.
- 南不二男 (2005) 「言語の単位」日本語教育学会 (編) 『新版日本語教育事典』大修館書店, 537-538 頁.
- 山口佳也 (1975) 「『のだ』の文について」『国文学研究』56, 早稲田大学国文学会, 12-24 頁.
- 山口佳也 (2011) 『「のだ」の文とその仲間 文構造に即して考える』三省堂.
- 山本優子 (2003) 「日本語指導における教材提示の問題—『～んです』をめぐる—」『岐阜女子大学教養・言語センター』32, 59-66 頁.
- 吉田茂晃 (1988) 「ノダ形式の構造と表現効果」『同文論叢』15, 神戸大学文学部国語国文学会, 46-55 頁.
- 吉田茂晃 (1994) 「疑問文の諸類型とその実現形式—ノデスカ/マスカ型疑問文の用法をめぐる—」『島大国文』第 22 号, 島大国文会, 1-12 頁.
- 吉田茂晃 (2000) 「<ノダ>の表現内容と語性について—<ノダ>は『説明の助動詞』か—」『山邊道』44, 天理大学国語国文学会, 17-31 頁.
- LEE 凧子 (2001) 「言語教育のための言語理論の応用—機能主義言語学と日本語教育の例—」『立命館言語文化研究』13-2, 立命館大学国際言語文化研究所, 133-140 頁.
- 若生正和 (2010) 「韓国人日本語学習者の誤用分析」『大阪教育大学紀要第 I 部門 (人文科学)』59-1, 大阪教育大学, 109-119 頁.
- Alfonso, Anthony (1966) *Japanese Language Patterns*. Sophia University, Tokyo.
- Halliday, M.A.K. and Ruqaiya Hasan (1976) *Cohesion in English*. Addison Wesley Longman, London. (安藤貞雄他訳 (1998) 『テキストはどのように構成されるか—言語の結束性—』ひつじ書房.
- Hobbs, J. R. (1985). *On the Coherence and Structure of Discourse*. CSLI Report, No. CSLI-85-37. Stanford: CSLI.
- Yung Pui King (1993) 「『文脈関連』と『のだ』との相関 応答文における必須の『のだ』」

『言語学論叢』 12,筑波大学一般・応用言語学研究室,31-49 頁.
日本語教育学会編 (1990) 『日本語教育ハンドブック』 大修館書店.

巻末資料一覧

【資料1】新書の文章6編の分析資料	2
【資料1-1】伊達宗行(2010)『極限の科学-低温・高圧・強磁場の物理』 講談社ブルーバックス	2
【資料1-2】桜井邦朋(2007)『宇宙物理学入門-宇宙の誕生と進化の謎を解き明かす』 講談社ブルーバックス	20
【資料1-3】神野直彦(2010)『「分かち合い」の経済学』岩波新書	29
【資料1-4】熊野純彦(2006)『西洋哲学史 近代から現代へ』岩波新書	43
【資料1-5】長尾真(2001)『「わかる」とは何か』岩波新書	68
【資料1-6】斎藤孝(2001)『「できる人」はどこがちがうのか』ちくま新書	81
【資料2】講義の談話4種の分析資料	99
【資料2-1】講義A	99
【資料2-2】講義B	103
【資料2-3】講義C1	107
【資料2-4】講義E1	114
【資料3】原文Aの分析資料	119
【資料3-1】原文Aの残存認定単位区切り基準	119
【資料3-2】要約文A「日本人はそんなに駄目か」の原文残存率の差の検定	120
【資料3-3】原文A「日本人はそんなに駄目か」の文章構造	122
【資料4】講義Aの分析資料	123
【資料4-1】情報伝達単位(CU)の分類基準(16類30種)	123
【資料4-2】講義Aの3種の理解調査における大学生Jと留学生Fの「情報伝達単位(CU)」 の残存率 [χ^2 検定による「多多」と「多」のCU(延べ数)]	125
【資料5】講義Gの分析資料	131
【資料5-1】講義Gの談話分析資料	131
【資料5-2】講義Gの3種の理解調査における大学生Jと留学生Fの「情報伝達単位(CU)」 の残存率 [χ^2 検定による「多多」と「多」のCU(延べ数)]	183
【資料6】新書Gの分析資料	191
石黒圭(2013)「第7章 日本語の人称表現」『日本語は「空気」が決める 社会言語学入門』 光文社新書	191

【資料1】新書の文章6編の分析資料

題し番号	著者	文	掲載ページ	編制番号	編制原	新・文	掲載原	前記
1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	1	1	1	1	1	1	1	1
3	1	1	1	1	1	1	1	1
4	1	1	1	1	1	1	1	1
5	1	1	1	1	1	1	1	1
6	1	1	1	1	1	1	1	1
7	1	1	1	1	1	1	1	1
8	1	1	1	1	1	1	1	1
9	1	1	1	1	1	1	1	1
10	1	1	1	1	1	1	1	1
11	1	1	1	1	1	1	1	1
12	1	1	1	1	1	1	1	1
13	1	1	1	1	1	1	1	1
14	1	1	1	1	1	1	1	1
15	1	1	1	1	1	1	1	1
16	1	1	1	1	1	1	1	1
17	1	1	1	1	1	1	1	1
18	1	1	1	1	1	1	1	1
19	1	1	1	1	1	1	1	1
20	1	1	1	1	1	1	1	1
21	1	1	1	1	1	1	1	1
22	1	1	1	1	1	1	1	1
23	1	1	1	1	1	1	1	1
24	1	1	1	1	1	1	1	1
25	1	1	1	1	1	1	1	1
26	1	1	1	1	1	1	1	1
27	1	1	1	1	1	1	1	1
28	1	1	1	1	1	1	1	1
29	1	1	1	1	1	1	1	1
30	1	1	1	1	1	1	1	1
31	1	1	1	1	1	1	1	1
32	1	1	1	1	1	1	1	1
33	1	1	1	1	1	1	1	1
34	1	1	1	1	1	1	1	1
35	1	1	1	1	1	1	1	1
36	1	1	1	1	1	1	1	1
37	1	1	1	1	1	1	1	1
38	1	1	1	1	1	1	1	1
39	1	1	1	1	1	1	1	1
40	1	1	1	1	1	1	1	1
41	1	1	1	1	1	1	1	1
42	1	1	1	1	1	1	1	1
43	1	1	1	1	1	1	1	1
44	1	1	1	1	1	1	1	1
45	1	1	1	1	1	1	1	1
46	1	1	1	1	1	1	1	1
47	1	1	1	1	1	1	1	1
48	1	1	1	1	1	1	1	1
49	1	1	1	1	1	1	1	1
50	1	1	1	1	1	1	1	1
51	1	1	1	1	1	1	1	1
52	1	1	1	1	1	1	1	1
53	1	1	1	1	1	1	1	1
54	1	1	1	1	1	1	1	1
55	1	1	1	1	1	1	1	1
56	1	1	1	1	1	1	1	1
57	1	1	1	1	1	1	1	1
58	1	1	1	1	1	1	1	1
59	1	1	1	1	1	1	1	1
60	1	1	1	1	1	1	1	1
61	1	1	1	1	1	1	1	1
62	1	1	1	1	1	1	1	1
63	1	1	1	1	1	1	1	1
64	1	1	1	1	1	1	1	1
65	1	1	1	1	1	1	1	1
66	1	1	1	1	1	1	1	1
67	1	1	1	1	1	1	1	1
68	1	1	1	1	1	1	1	1
69	1	1	1	1	1	1	1	1
70	1	1	1	1	1	1	1	1
71	1	1	1	1	1	1	1	1
72	1	1	1	1	1	1	1	1
73	1	1	1	1	1	1	1	1
74	1	1	1	1	1	1	1	1
75	1	1	1	1	1	1	1	1

題し番号	著者	文	掲載ページ	編制番号	編制原	新・文	掲載原	前記
76	1	1	1	1	1	1	1	1
77	1	1	1	1	1	1	1	1
78	1	1	1	1	1	1	1	1
79	1	1	1	1	1	1	1	1
80	1	1	1	1	1	1	1	1
81	1	1	1	1	1	1	1	1
82	1	1	1	1	1	1	1	1
83	1	1	1	1	1	1	1	1
84	1	1	1	1	1	1	1	1
85	1	1	1	1	1	1	1	1
86	1	1	1	1	1	1	1	1
87	1	1	1	1	1	1	1	1
88	1	1	1	1	1	1	1	1
89	1	1	1	1	1	1	1	1
90	1	1	1	1	1	1	1	1
91	1	1	1	1	1	1	1	1
92	1	1	1	1	1	1	1	1
93	1	1	1	1	1	1	1	1
94	1	1	1	1	1	1	1	1
95	1	1	1	1	1	1	1	1
96	1	1	1	1	1	1	1	1
97	1	1	1	1	1	1	1	1
98	1	1	1	1	1	1	1	1
99	1	1	1	1	1	1	1	1
100	1	1	1	1	1	1	1	1
101	1	1	1	1	1	1	1	1
102	1	1	1	1	1	1	1	1
103	1	1	1	1	1	1	1	1
104	1	1	1	1	1	1	1	1
105	1	1	1	1	1	1	1	1
106	1	1	1	1	1	1	1	1
107	1	1	1	1	1	1	1	1
108	1	1	1	1	1	1	1	1
109	1	1	1	1	1	1	1	1
110	1	1	1	1	1	1	1	1
111	1	1	1	1	1	1	1	1
112	1	1	1	1	1	1	1	1
113	1	1	1	1	1	1	1	1
114	1	1	1	1	1	1	1	1
115	1	1	1	1	1	1	1	1
116	1	1	1	1	1	1	1	1
117	1	1	1	1	1	1	1	1
118	1	1	1	1	1	1	1	1
119	1	1	1	1	1	1	1	1
120	1	1	1	1	1	1	1	1
121	1	1	1	1	1	1	1	1
122	1	1	1	1	1	1	1	1
123	1	1	1	1	1	1	1	1
124	1	1	1	1	1	1	1	1
125	1	1	1	1	1	1	1	1
126	1	1	1	1	1	1	1	1
127	1	1	1	1	1	1	1	1
128	1	1	1	1	1	1	1	1
129	1	1	1	1	1	1	1	1
130	1	1	1	1	1	1	1	1
131	1	1	1	1	1	1	1	1
132	1	1	1	1	1	1	1	1
133	1	1	1	1	1	1	1	1
134	1	1	1	1	1	1	1	1
135	1	1	1	1	1	1	1	1
136	1	1	1	1	1	1	1	1
137	1	1	1	1	1	1	1	1
138	1	1	1	1	1	1	1	1
139	1	1	1	1	1	1	1	1
140	1	1	1	1	1	1	1	1
141	1	1	1	1	1	1	1	1
142	1	1	1	1	1	1	1	1
143	1	1	1	1	1	1	1	1
144	1	1	1	1	1	1	1	1
145	1	1	1	1	1	1	1	1
146	1	1	1	1	1	1	1	1
147	1	1	1	1	1	1	1	1
148	1	1	1	1	1	1	1	1
149	1	1	1	1	1	1	1	1
150	1	1	1	1	1	1	1	1
151	1	1	1	1	1	1	1	1
152	1	1	1	1	1	1	1	1
153	1	1	1	1	1	1	1	1
154	1	1	1	1	1	1	1	1

書目番号	著者	文	掲載位置	の機能能力	の機能能力	著者関係	新・文	前記名称
3033	文	文						
3034	187	文						
3035	92	187	文					
3041	187	文						
3042	187	文						
3043	93	187	文					
3044	93	187	文					
3045	187	文						
3046	94	187	文					
3047	94	187	文					
3048	94	187	文					
3049	94	187	文					
3050	94	187	文					
3051	94	187	文					
3052	94	187	文					
3053	94	187	文					
3054	98	201	文					
3055	99	201	文					
3056	99	201	文					
3057	201	文						
3058	201	文						
3059	100	201	文					
3060	100	201	文					
3061	201	文						
3062	103	211	文					
3063	103	211	文					
3064	103	211	文					
3065	103	211	文					
3066	211	文						
3067	211	文						
3068	103	211	文					
3069	103	211	文					
3070	103	211	文					
3071	106	211	文					
3072	211	文						
3073	211	文						
3074	211	文						
3075	221	文						
3076	221	文						
3077	107	221	文					
3078	107	221	文					
3079	107	221	文					
3080	107	221	文					
3081	221	文						
3082	110	221	文					
3083	110	221	文					
3084	221	文						
3085	111	221	文					
3086	221	文						
3087	112	221	文					
3088	112	221	文					
3089	112	221	文					
3090	114	221	文					
3091	221	文						
3092	115	221	文					
3093	115	221	文					
3094	221	文						
3095	221	文						
3096	116	221	文					
3097	116	221	文					
3098	116	221	文					
3099	117	221	文					
3100	117	221	文					

書目番号	著者	文	掲載位置	の機能能力	の機能能力	著者関係	新・文	前記名称
2986	33	115	文					
2987	33	115	文					
2970	64	115	文					
2971	65	115	文					
2972	65	115	文					
2973	65	115	文					
2974	65	115	文					
2975	65	115	文					
2976	65	115	文					
2977	65	115	文					
2978	65	115	文					
2979	65	115	文					
2980	65	115	文					
2981	65	115	文					
2982	65	115	文					
2983	65	115	文					
2984	65	115	文					
2985	65	115	文					
2986	65	115	文					
2987	65	115	文					
2988	65	115	文					
2989	65	115	文					
2990	65	115	文					
2991	65	115	文					
2992	65	115	文					
2993	65	115	文					
2994	65	115	文					
2995	65	115	文					
2996	65	115	文					
2997	65	115	文					
2998	65	115	文					
2999	65	115	文					
3000	65	115	文					
3001	65	115	文					
3002	65	115	文					
3003	65	115	文					
3004	65	115	文					
3005	65	115	文					
3006	65	115	文					
3007	65	115	文					
3008	65	115	文					
3009	65	115	文					
3010	65	115	文					
3011	65	115	文					
3012	65	115	文					
3013	65	115	文					
3014	65	115	文					
3015	65	115	文					
3016	65	115	文					
3017	65	115	文					
3018	65	115	文					
3019	65	115	文					
3020	65	115	文					
3021	65	115	文					
3022	65	115	文					
3023	65	115	文					
3024	65	115	文					
3025	65	115	文					
3026	65	115	文					
3027	65	115	文					
3028	65	115	文					
3029	65	115	文					
3030	65	115	文					
3031	65	115	文					
3032	65	115	文					
3033	65	115	文					
3034	65	115	文					
3035	65	115	文					
3036	65	115	文					
3037	65	115	文					
3038	65	115	文					

書目番号	著者	題名	著者	訳者	刊行年	形態	備考	新・文	前記
3174	文	文							
3175	文	文							
3176	文	文							
3177	文	文							
3178	文	文							
3179	文	文							
3180	文	文							
3181	文	文							
3182	文	文							
3183	文	文							
3184	文	文							
3185	文	文							
3186	文	文							
3187	文	文							
3188	文	文							
3189	文	文							
3190	文	文							
3191	文	文							
3192	文	文							
3193	文	文							
3194	文	文							
3195	文	文							
3196	文	文							
3197	文	文							
3198	文	文							
3199	文	文							
3200	文	文							
3201	文	文							
3202	文	文							
3203	文	文							
3204	文	文							
3205	文	文							
3206	文	文							
3207	文	文							
3208	文	文							
3209	文	文							
3210	文	文							
3211	文	文							
3212	文	文							
3213	文	文							
3214	文	文							
3215	文	文							
3216	文	文							
3217	文	文							
3218	文	文							
3219	文	文							
3220	文	文							
3221	文	文							
3222	文	文							
3223	文	文							
3224	文	文							
3225	文	文							
3226	文	文							
3227	文	文							
3228	文	文							
3229	文	文							
3230	文	文							
3231	文	文							
3232	文	文							
3233	文	文							
3234	文	文							
3235	文	文							
3236	文	文							
3237	文	文							
3238	文	文							
3239	文	文							

書目番号	著者	題名	著者	訳者	刊行年	形態	備考	新・文	前記
3101	文	文							
3102	文	文							
3103	文	文							
3104	文	文							
3105	文	文							
3106	文	文							
3107	文	文							
3108	文	文							
3109	文	文							
3110	文	文							
3111	文	文							
3112	文	文							
3113	文	文							
3114	文	文							
3115	文	文							
3116	文	文							
3117	文	文							
3118	文	文							
3119	文	文							
3120	文	文							
3121	文	文							
3122	文	文							
3123	文	文							
3124	文	文							
3125	文	文							
3126	文	文							
3127	文	文							
3128	文	文							
3129	文	文							
3130	文	文							
3131	文	文							
3132	文	文							
3133	文	文							
3134	文	文							
3135	文	文							
3136	文	文							
3137	文	文							
3138	文	文							
3139	文	文							
3140	文	文							
3141	文	文							
3142	文	文							
3143	文	文							
3144	文	文							
3145	文	文							
3146	文	文							
3147	文	文							
3148	文	文							
3149	文	文							
3150	文	文							
3151	文	文							
3152	文	文							
3153	文	文							
3154	文	文							
3155	文	文							
3156	文	文							
3157	文	文							
3158	文	文							
3159	文	文							
3160	文	文							
3161	文	文							
3162	文	文							
3163	文	文							
3164	文	文							
3165	文	文							
3166	文	文							
3167	文	文							
3168	文	文							
3169	文	文							
3170	文	文							
3171	文	文							
3172	文	文							
3173	文	文							

書目番号	著者	文	掲載頁	掲載原	新・文	前記	前記	前記	前記
4729	761	761	761	761	761	761	761	761	761
4730	762	762	762	762	762	762	762	762	762
4731	763	763	763	763	763	763	763	763	763
4732	764	764	764	764	764	764	764	764	764
4733	765	765	765	765	765	765	765	765	765
4734	766	766	766	766	766	766	766	766	766
4735	767	767	767	767	767	767	767	767	767
4736	768	768	768	768	768	768	768	768	768
4737	769	769	769	769	769	769	769	769	769
4738	770	770	770	770	770	770	770	770	770
4739	771	771	771	771	771	771	771	771	771
4740	772	772	772	772	772	772	772	772	772
4741	773	773	773	773	773	773	773	773	773
4742	774	774	774	774	774	774	774	774	774
4743	775	775	775	775	775	775	775	775	775
4744	776	776	776	776	776	776	776	776	776
4745	777	777	777	777	777	777	777	777	777
4746	778	778	778	778	778	778	778	778	778
4747	779	779	779	779	779	779	779	779	779
4748	780	780	780	780	780	780	780	780	780
4749	781	781	781	781	781	781	781	781	781
4750	782	782	782	782	782	782	782	782	782
4751	783	783	783	783	783	783	783	783	783
4752	784	784	784	784	784	784	784	784	784
4753	785	785	785	785	785	785	785	785	785
4754	786	786	786	786	786	786	786	786	786
4755	787	787	787	787	787	787	787	787	787
4756	788	788	788	788	788	788	788	788	788
4757	789	789	789	789	789	789	789	789	789
4758	790	790	790	790	790	790	790	790	790
4759	791	791	791	791	791	791	791	791	791
4760	792	792	792	792	792	792	792	792	792
4761	793	793	793	793	793	793	793	793	793
4762	794	794	794	794	794	794	794	794	794
4763	795	795	795	795	795	795	795	795	795
4764	796	796	796	796	796	796	796	796	796
4765	797	797	797	797	797	797	797	797	797
4766	798	798	798	798	798	798	798	798	798
4767	799	799	799	799	799	799	799	799	799
4768	800	800	800	800	800	800	800	800	800
4769	801	801	801	801	801	801	801	801	801
4770	802	802	802	802	802	802	802	802	802
4771	803	803	803	803	803	803	803	803	803
4772	804	804	804	804	804	804	804	804	804
4773	805	805	805	805	805	805	805	805	805
4774	806	806	806	806	806	806	806	806	806
4775	807	807	807	807	807	807	807	807	807
4776	808	808	808	808	808	808	808	808	808
4777	809	809	809	809	809	809	809	809	809
4778	810	810	810	810	810	810	810	810	810
4779	811	811	811	811	811	811	811	811	811
4780	812	812	812	812	812	812	812	812	812
4781	813	813	813	813	813	813	813	813	813
4782	814	814	814	814	814	814	814	814	814
4783	815	815	815	815	815	815	815	815	815
4784	816	816	816	816	816	816	816	816	816
4785	817	817	817	817	817	817	817	817	817
4786	818	818	818	818	818	818	818	818	818
4787	819	819	819	819	819	819	819	819	819
4788	820	820	820	820	820	820	820	820	820
4789	821	821	821	821	821	821	821	821	821
4790	822	822	822	822	822	822	822	822	822
4791	823	823	823	823	823	823	823	823	823
4792	824	824	824	824	824	824	824	824	824
4793	825	825	825	825	825	825	825	825	825
4794	826	826	826	826	826	826	826	826	826
4795	827	827	827	827	827	827	827	827	827

書目番号	著者	文	掲載頁	掲載原	新・文	前記	前記	前記	前記
4796	828	828	828	828	828	828	828	828	828
4797	829	829	829	829	829	829	829	829	829
4798	830	830	830	830	830	830	830	830	830
4799	831	831	831	831	831	831	831	831	831
4800	832	832	832	832	832	832	832	832	832
4801	833	833	833	833	833	833	833	833	833
4802	834	834	834	834	834	834	834	834	834
4803	835	835	835	835	835	835	835	835	835
4804	836	836	836	836	836	836	836	836	836
4805	837	837	837	837	837	837	837	837	837
4806	838	838	838	838	838	838	838	838	838
4807	839	839	839	839	839	839	839	839	839
4808	840	840	840	840	840	840	840	840	840
4809	841	841	841	841	841	841	841	841	841
4810	842	842	842	842	842	842	842	842	842
4811	843	843	843	843	843	843	843	843	843
4812	844	844	844	844	844	844	844	844	844
4813	845	845	845	845	845	845	845	845	845
4814	846	846	846	846	846	846	846	846	846
4815	847	847	847	847	847	847	847	847	847
4816	848	848	848	848	848	848	848	848	848
4817	849	849	849	849	849	849	849	849	849
4818	850	850	850	850	850	850	850	850	850
4819	851	851	851	851	851	851	851	851	851
4820	852	852	852	852	852	852	852	852	852
4821	853	853	853	853	853	853	853	853	853
4822	854	854	854	854	854	854	854	854	854
4823	855	855	855	855	855	855	855	855	855
4824	856	856	856	856	856	856	856	856	856
4825	857	857	857	857	857	857	857	857	857
4826	858	858	858	858	858	858	858	858	858
4827	859	859	859	859	859	859	859	859	859
4828	860	860	860	860	860	860	860	860	860

書目番号	著者	題名	著者	種別	著者の機能能力	著者の機能能力	掲載位置	種別	種別	新・文	前記																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
11005	1141	1413	1414	1415	1416	1417	1418	1419	1420	1421	1422	1423	1424	1425	1426	1427	1428	1429	1430	1431	1432	1433	1434	1435	1436	1437	1438	1439	1440	1441	1442	1443	1444	1445	1446	1447	1448	1449	1450	1451	1452	1453	1454	1455	1456	1457	1458	1459	1460	1461	1462	1463	1464	1465	1466	1467	1468	1469	1470	1471	1472	1473	1474	1475	1476	1477	1478	1479	1480	1481	1482	1483	1484	1485	1486	1487	1488	1489	1490	1491	1492	1493	1494	1495	1496	1497	1498	1499	1500	1501	1502	1503	1504	1505	1506	1507	1508	1509	1510	1511	1512	1513	1514	1515	1516	1517	1518	1519	1520	1521	1522	1523	1524	1525	1526	1527	1528	1529	1530	1531	1532	1533	1534	1535	1536	1537	1538	1539	1540	1541	1542	1543	1544	1545	1546	1547	1548	1549	1550	1551	1552	1553	1554	1555	1556	1557	1558	1559	1560	1561	1562	1563	1564	1565	1566	1567	1568	1569	1570	1571	1572	1573	1574	1575	1576	1577	1578	1579	1580	1581	1582	1583	1584	1585	1586	1587	1588	1589	1590	1591	1592	1593	1594	1595	1596	1597	1598	1599	1600	1601	1602	1603	1604	1605	1606	1607	1608	1609	1610	1611	1612	1613	1614	1615	1616	1617	1618	1619	1620	1621	1622	1623	1624	1625	1626	1627	1628	1629	1630	1631	1632	1633	1634	1635	1636	1637	1638	1639	1640	1641	1642	1643	1644	1645	1646	1647	1648	1649	1650	1651	1652	1653	1654	1655	1656	1657	1658	1659	1660	1661	1662	1663	1664	1665	1666	1667	1668	1669	1670	1671	1672	1673	1674	1675	1676	1677	1678	1679	1680	1681	1682	1683	1684	1685	1686	1687	1688	1689	1690	1691	1692	1693	1694	1695	1696	1697	1698	1699	1700	1701	1702	1703	1704	1705	1706	1707	1708	1709	1710	1711	1712	1713	1714	1715	1716	1717	1718	1719	1720	1721	1722	1723	1724	1725	1726	1727	1728	1729	1730	1731	1732	1733	1734	1735	1736	1737	1738	1739	1740	1741	1742	1743	1744	1745	1746	1747	1748	1749	1750	1751	1752	1753	1754	1755	1756	1757	1758	1759	1760	1761	1762	1763	1764	1765	1766	1767	1768	1769	1770	1771	1772	1773	1774	1775	1776	1777	1778	1779	1780	1781	1782	1783	1784	1785	1786	1787	1788	1789	1790	1791	1792	1793	1794	1795	1796	1797	1798	1799	1800	1801	1802	1803	1804	1805	1806	1807	1808	1809	1810	1811	1812	1813	1814	1815	1816	1817	1818	1819	1820	1821	1822	1823	1824	1825	1826	1827	1828	1829	1830	1831	1832	1833	1834	1835	1836	1837	1838	1839	1840	1841	1842	1843	1844	1845	1846	1847	1848	1849	1850	1851	1852	1853	1854	1855	1856	1857	1858	1859	1860	1861	1862	1863	1864	1865	1866	1867	1868	1869	1870	1871	1872	1873	1874	1875	1876	1877	1878	1879	1880	1881	1882	1883	1884	1885	1886	1887	1888	1889	1890	1891	1892	1893	1894	1895	1896	1897	1898	1899	1900	1901	1902	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050	2051	2052	2053	2054	2055	2056	2057	2058	2059	2060	2061	2062	2063	2064	2065	2066	2067	2068	2069	2070	2071	2072	2073	2074	2075	2076	2077	2078	2079	2080	2081	2082	2083	2084	2085	2086	2087	2088	2089	2090	2091	2092	2093	2094	2095	2096	2097	2098	2099	2100	2101	2102	2103	2104	2105	2106	2107	2108	2109	2110	2111	2112	2113	2114	2115	2116	2117	2118	2119	2120	2121	2122	2123	2124	2125	2126	2127	2128	2129	2130	2131	2132	2133	2134	2135	2136	2137	2138	2139	2140	2141	2142	2143	2144	2145	2146	2147	2148	2149	2150	2151	2152	2153	2154	2155	2156	2157	2158	2159	2160	2161	2162	2163	2164	2165	2166	2167	2168	2169	2170	2171	2172	2173	2174	2175	2176	2177	2178	2179	2180	2181	2182	2183	2184	2185	2186	2187	2188	2189	2190	2191	2192	2193	2194	2195	2196	2197	2198	2199	2200	2201	2202	2203	2204	2205	2206	2207	2208	2209	2210	2211	2212	2213	2214	2215	2216	2217	2218	2219	2220	2221	2222	2223	2224	2225	2226	2227	2228	2229	2230	2231	2232	2233	2234	2235	2236	2237	2238	2239	2240	2241	2242	2243	2244	2245	2246	2247	2248	2249	2250	2251	2252	2253	2254	2255	2256	2257	2258	2259	2260	2261	2262	2263	2264	2265	2266	2267	2268	2269	2270	2271	2272	2273	2274	2275	2276	2277	2278	2279	2280	2281	2282	2283	2284	2285	2286	2287	2288	2289	2290	2291	2292	2293	2294	2295	2296	2297	2298	2299	2300	2301	2302	2303	2304	2305	2306	2307	2308	2309	2310	2311	2312	2313	2314	2315	2316	2317	2318	2319	2320	2321	2322	2323	2324	2325	2326	2327	2328	2329	2330	2331	2332	2333	2334	2335	2336	2337	2338	2339	2340	2341	2342	2343	2344	2345	2346	2347	2348	2349	2350	2351	2352	2353	2354	2355	2356	2357	2358	2359	2360	2361	2362	2363	2364	2365	2366	2367	2368	2369	2370	2371	2372	2373	2374	2375	2376	2377	2378	2379	2380	2381	2382	2383	2384	2385	2386	2387	2388	2389	2390	2391	2392	2393	2394	2395	2396	2397	2398	2399	2400	2401	2402	2403	2404	2405	2406	2407	2408	2409	2410	2411	2412	2413	2414	2415	2416	2417	2418	2419	2420	2421	2422	2423	2424	2425	2426	2427	2428	2429	2430	2431	2432	2433	2434	2435	2436	2437	2438	2439	2440	2441	2442	2443	2444	2445	2446	2447	2448	2449	2450	2451	2452	2453	2454	2455	2456	2457	2458	2459	2460	2461	2462	2463	2464	2465	2466	2467	2468	2469	2470	2471	2472	2473	2474	2475	2476	2477	2478	2479	2480	2481	2482	2483	2484	2485	2486	2487	2488	2489	2490	2491	2492	2493	2494	2495	2496	2497	2498	2499	2500	2501	2502	2503	2504	2505	2506	2507	2508	2509	2510	2511	2512	2513	2514	2515	2516	2517	2518	2519	2520	2521	2522	2523	2524	2525	2526	2527	2528	2529	2530	2531	2532	2533	2534	2535	2536	2537	2538	2539	2540	2541	2542	2543	2544	2545	2546	2547	2548	2549	2550	2551	2552	2553	2554	2555	2556	2557	2558	2559	2560	2561	2562	2563	2564	2565	2566	2567	2568	2569	2570	2571	2572	2573	2574	2575	2576	2577	2578	2579	2580	2581	2582	2583	2584	2585	2586	2587	2588	2589	2590	2591	2592	2593	2594	2595	2596	2597	2598	2599	2600	2601	2602	2603	2604	2605	2606	2607	2608	2609	2610	2611	2612	2613	2614	2615	2616	2617	2618	2619	2620	2621	2622	2623	2624	2625	2626	2627	2628	2629	2630	2631	2632	2633

書目番号	著者	題名	掲載形態	本の機能	本の機能	掲載形態	本の機能	本の機能	著者	題名	掲載形態	本の機能	本の機能	著者	題名	掲載形態	本の機能	本の機能
13410	2201	文							2201	文				2201	文			
13411	2202	文							2202	文				2202	文			
13412	2203	文							2203	文				2203	文			
13413	2204	文							2204	文				2204	文			
13414	2205	文							2205	文				2205	文			
13415	2206	文							2206	文				2206	文			
13416	2207	文							2207	文				2207	文			
13417	2208	文							2208	文				2208	文			
13418	2209	文							2209	文				2209	文			
13419	511	文							511	文				511	文			
13420	2211	文							2211	文				2211	文			
13421	2212	文							2212	文				2212	文			
13422	2213	文							2213	文				2213	文			
13423	512	文							512	文				512	文			
13424	2214	文							2214	文				2214	文			
13425	2215	文							2215	文				2215	文			
13426	513	文							513	文				513	文			
13427	2216	文							2216	文				2216	文			
13428	2217	文							2217	文				2217	文			
13429	2218	文							2218	文				2218	文			
13430	514	文							514	文				514	文			
13431	2219	文							2219	文				2219	文			
13432	2220	文							2220	文				2220	文			
13433	2221	文							2221	文				2221	文			
13434	2222	文							2222	文				2222	文			
13435	2223	文							2223	文				2223	文			
13436	2224	文							2224	文				2224	文			
13437	2225	文							2225	文				2225	文			
13438	2226	文							2226	文				2226	文			
13439	515	文							515	文				515	文			
13440	2227	文							2227	文				2227	文			
13441	2228	文							2228	文				2228	文			
13442	2229	文							2229	文				2229	文			
13443	2230	文							2230	文				2230	文			
13444	2231	文							2231	文				2231	文			
13445	2232	文							2232	文				2232	文			
13446	2233	文							2233	文				2233	文			
13447	2234	文							2234	文				2234	文			
13448	2235	文							2235	文				2235	文			
13449	2236	文							2236	文				2236	文			
13450	2237	文							2237	文				2237	文			
13451	2238	文							2238	文				2238	文			
13452	2239	文							2239	文				2239	文			
13453	2240	文							2240	文				2240	文			
13454	2241	文							2241	文				2241	文			
13455	2242	文							2242	文				2242	文			
13456	2243	文							2243	文				2243	文			
13457	2244	文							2244	文				2244	文			
13458	2245	文							2245	文				2245	文			
13459	2246	文							2246	文				2246	文			
13460	2247	文							2247	文				2247	文			
13461	2248	文							2248	文				2248	文			
13462	2249	文							2249	文				2249	文			
13463	2250	文							2250	文				2250	文			
13464	2251	文							2251	文				2251	文			
13465	2252	文							2252	文				2252	文			
13466	2253	文							2253	文				2253	文			
13467	2254	文							2254	文				2254	文			
13468	2255	文							2255	文				2255	文			
13469	2256	文							2256	文				2256	文			

書目番号	著者	題名	掲載形態	本の機能	本の機能	掲載形態	本の機能	本の機能	著者	題名	掲載形態	本の機能	本の機能	著者	題名	掲載形態	本の機能	本の機能
13470	2257	文							2257	文				2257	文			
13471	2258	文							2258	文				2258	文			
13472	2259	文							2259	文				2259	文			
13473	2260	文							2260	文				2260	文			
13474	2261	文							2261	文				2261	文			
13475	2262	文							2262	文				2262	文			
13476	2263	文							2263	文				2263	文			
13477	2264	文							2264	文				2264	文			
13478	2265	文							2265	文				2265	文			
13479	2266	文							2266	文				2266	文			
13480	2267	文							2267	文				2267	文			
13481	2268	文							2268	文				2268	文			
13482	2269	文							2269	文				2269	文			
13483	2270	文							2270	文				2270	文			
13484	2271	文							2271	文				2271	文			
13485	2272	文							2272	文				2272	文			
13486	2273	文							2273	文				2273	文			
13487	2274	文							2274	文				2274	文			
13488	2275	文							2275	文				2275	文			
13489	2276	文							2276	文				2276	文			
13490	2277	文							2277	文				2277	文			
13491	2278	文							2278	文				2278	文			
13492	2279	文							2279	文				2279	文			
13493	2280	文							2280	文				2280	文			
13494	2281	文							2281	文				2281	文			
13495	2282	文							2282	文				2282	文			
13496	2283	文							2283	文				2283	文			
13497	2284	文							2284	文				2284	文			
13498	2285	文							2285	文				2285	文			
13499	2286	文							2286	文				2286	文			
13500	2287	文							2287	文				2287	文			

種別	文番号	文	接続表現	ノダの統括機能 文系	ノダの統括機能 節系	前後要素
II	5.2	5.2.1	230			
II	5.2	5.2.1	231			
II	5.2	5.2.1	232			
II	5.2	5.2.1	233			
II	5.2	5.2.1	234			
II	5.2	5.2.1	235			
II	5.2	5.2.2	241			
II	5.2	5.2.2	242			
II	5.2	5.2.2	243			
II	5.2	5.2.2	244			
II	5.2	5.2.2	245			
II	5.2	5.2.2	246			
II	5.2	5.2.2	247			
II	5.2	5.2.2	248			
II	5.2	5.2.2	249			
II	5.2	5.2.2	250			
II	5.2	5.2.2	251			
II	5.2	5.2.2	252			
II	5.2	5.2.2	253			
II	5.2	5.2.2	254			
II	5.2	5.2.2	255			
II	5.2	5.2.2	256			
II	5.2	5.2.2	257			
II	5.2	5.2.2	258			
II	5.2	5.2.2	259			
II	5.2	5.2.2	260			
II	5.2	5.2.2	261			
II	5.2	5.2.2	262			
II	5.2	5.2.2	263			
II	5.2	5.2.2	264			
II	5.2	5.2.2	265			
II	5.2	5.2.2	266			
II	5.2	5.2.2	267			
II	5.2	5.2.2	268			
II	5.2	5.2.2	269			
II	5.2	5.2.2	270			
II	5.2	5.2.2	271			
II	5.2	5.2.2	272			
II	5.2	5.2.2	273			
II	5.2	5.2.2	274			
II	5.2	5.2.2	275			
II	5.2	5.2.2	276			
II	5.2	5.2.2	277			
II	5.2	5.2.2	278			
II	5.2	5.2.2	279			
II	5.2	5.2.2	280			
II	5.2	5.2.2	281			
II	5.2	5.2.2	282			
II	5.2	5.2.2	283			
II	5.2	5.2.2	284			
II	5.2	5.2.2	285			
II	5.2	5.2.2	286			
II	5.2	5.2.2	287			
II	5.2	5.2.2	288			
II	5.2	5.2.2	289			
II	5.2	5.2.2	290			
II	5.2	5.2.2	291			
II	5.2	5.2.2	292			
II	5.2	5.2.2	293			
II	5.2	5.2.2	294			
II	5.2	5.2.2	295			
II	5.2	5.2.2	296			
II	5.2	5.2.2	297			
II	5.2	5.2.2	298			
II	5.2	5.2.2	299			
II	5.2	5.2.2	300			
II	5.2	5.2.2	301			
II	5.2	5.2.2	302			
II	5.2	5.2.2	303			
II	5.2	5.2.2	304			
II	5.2	5.2.2	305			
II	5.2	5.2.2	306			
II	5.2	5.2.2	307			
II	5.2	5.2.2	308			
II	5.2	5.2.2	309			
II	5.2	5.2.2	310			
II	5.2	5.2.2	311			
II	5.2	5.2.2	312			
II	5.2	5.2.2	313			
II	5.2	5.2.2	314			
II	5.2	5.2.2	315			
II	5.2	5.2.2	316			
II	5.2	5.2.2	317			
II	5.2	5.2.2	318			
II	5.2	5.2.2	319			
II	5.2	5.2.2	320			
II	5.2	5.2.2	321			
II	5.2	5.2.2	322			
II	5.2	5.2.2	323			
II	5.2	5.2.2	324			
II	5.2	5.2.2	325			
II	5.2	5.2.2	326			
II	5.2	5.2.2	327			
II	5.2	5.2.2	328			
II	5.2	5.2.2	329			
II	5.2	5.2.2	330			
II	5.2	5.2.2	331			
II	5.2	5.2.2	332			
II	5.2	5.2.2	333			
II	5.2	5.2.2	334			
II	5.2	5.2.2	335			
II	5.2	5.2.2	336			
II	5.2	5.2.2	337			
II	5.2	5.2.2	338			
II	5.2	5.2.2	339			
II	5.2	5.2.2	340			
II	5.2	5.2.2	341			
II	5.2	5.2.2	342			
II	5.2	5.2.2	343			
II	5.2	5.2.2	344			
II	5.2	5.2.2	345			
II	5.2	5.2.2	346			
II	5.2	5.2.2	347			
II	5.2	5.2.2	348			
II	5.2	5.2.2	349			
II	5.2	5.2.2	350			
II	5.2	5.2.2	351			
II	5.2	5.2.2	352			
II	5.2	5.2.2	353			
II	5.2	5.2.2	354			
II	5.2	5.2.2	355			
II	5.2	5.2.2	356			
II	5.2	5.2.2	357			
II	5.2	5.2.2	358			
II	5.2	5.2.2	359			
II	5.2	5.2.2	360			
II	5.2	5.2.2	361			
II	5.2	5.2.2	362			
II	5.2	5.2.2	363			
II	5.2	5.2.2	364			
II	5.2	5.2.2	365			
II	5.2	5.2.2	366			
II	5.2	5.2.2	367			
II	5.2	5.2.2	368			
II	5.2	5.2.2	369			
II	5.2	5.2.2	370			
II	5.2	5.2.2	371			
II	5.2	5.2.2	372			
II	5.2	5.2.2	373			
II	5.2	5.2.2	374			
II	5.2	5.2.2	375			
II	5.2	5.2.2	376			
II	5.2	5.2.2	377			
II	5.2	5.2.2	378			
II	5.2	5.2.2	379			
II	5.2	5.2.2	380			
II	5.2	5.2.2	381			
II	5.2	5.2.2	382			
II	5.2	5.2.2	383			
II	5.2	5.2.2	384			
II	5.2	5.2.2	385			
II	5.2	5.2.2	386			
II	5.2	5.2.2	387			
II	5.2	5.2.2	388			
II	5.2	5.2.2	389			
II	5.2	5.2.2	390			
II	5.2	5.2.2	391			
II	5.2	5.2.2	392			
II	5.2	5.2.2	393			
II	5.2	5.2.2	394			
II	5.2	5.2.2	395			
II	5.2	5.2.2	396			
II	5.2	5.2.2	397			
II	5.2	5.2.2	398			
II	5.2	5.2.2	399			
II	5.2	5.2.2	400			

種別	文番号	文	接続表現	ノダの統括機能	ノダの統括機能	前接要素
	1	1				
	1	2	2			
I	2	1	3			前接
	2	2	4			動詞
	2	3	5			動詞
	2	4	6			動詞
	2	5	7			動詞
	2	6	8			動詞
	2	7	9			動詞
	2	8	10			動詞
	2	9	11			動詞
	2	10	12			動詞
	2	11	13			動詞
	2	12	14			動詞
	2	13	15			動詞
I	2	3	16			動詞
	2	3	17			動詞
I	2	3	18			動詞
II	3	3.1	19			前接
	3	3.1	20			動詞
	3	3.1	21			動詞
	3	3.1	22			動詞
	3	3.1	23			動詞
	3	3.1	24			動詞
	3	3.1	25			動詞
	3	3.1	26			動詞
	3	3.1	27			動詞
	3	3.1	28			動詞
	3	3.1	29			動詞
	3	3.1	30			動詞
	3	3.1	31			動詞
	3	3.1	32			動詞
	3	3.1	33			動詞
	3	3.1	34			動詞
	3	3.1	35			動詞
	3	3.1	36			動詞
	3	3.1	37			動詞
	3	3.1	38			動詞
	3	3.1	39			動詞
	3	3.1	40			動詞
	3	3.1	41			動詞
	3	3.1	42			動詞
	3	3.1	43			動詞
	3	3.1	44			動詞
	3	3.1	45			動詞
	3	3.1	46			動詞
	3	3.1	47			動詞
	3	3.1	48			動詞
	3	3.1	49			動詞
	3	3.1	50			動詞
	3	3.1	51			動詞
	3	3.1	52			動詞
	3	3.1	53			動詞
	3	3.1	54			動詞
	3	3.1	55			動詞
	3	3.1	56			動詞
	3	3.1	57			動詞
	3	3.1	58			動詞
	3	3.1	59			動詞
	3	3.1	60			動詞
	3	3.1	61			動詞
	3	3.1	62			動詞
	3	3.1	63			動詞
	3	3.1	64			動詞
	3	3.1	65			動詞
	3	3.1	66			動詞
	3	3.1	67			動詞
	3	3.1	68			動詞
	3	3.1	69			動詞
	3	3.1	70			動詞
	3	3.1	71			動詞
	3	3.1	72			動詞
	3	3.1	73			動詞
	3	3.1	74			動詞
	3	3.1	75			動詞
	3	3.1	76			動詞
	3	3.1	77			動詞
	3	3.1	78			動詞
	3	3.1	79			動詞
	3	3.1	80			動詞
	3	3.1	81			動詞
	3	3.1	82			動詞
	3	3.1	83			動詞
	3	3.1	84			動詞
	3	3.1	85			動詞
	3	3.1	86			動詞
	3	3.1	87			動詞
	3	3.1	88			動詞
	3	3.1	89			動詞
	3	3.1	90			動詞
	3	3.1	91			動詞
	3	3.1	92			動詞
	3	3.1	93			動詞
	3	3.1	94			動詞
	3	3.1	95			動詞
	3	3.1	96			動詞
	3	3.1	97			動詞
	3	3.1	98			動詞
	3	3.1	99			動詞
	3	3.1	100			動詞
	3	3.1	101			動詞
	3	3.1	102			動詞
	3	3.1	103			動詞
	3	3.1	104			動詞
	3	3.1	105			動詞
	3	3.1	106			動詞
	3	3.1	107			動詞
	3	3.1	108			動詞
	3	3.1	109			動詞
	3	3.1	110			動詞
	3	3.1	111			動詞
	3	3.1	112			動詞
	3	3.1	113			動詞
	3	3.1	114			動詞
	3	3.1	115			動詞
	3	3.1	116			動詞
	3	3.1	117			動詞
	3	3.1	118			動詞
	3	3.1	119			動詞
	3	3.1	120			動詞
	3	3.1	121			動詞
	3	3.1	122			動詞
	3	3.1	123			動詞
	3	3.1	124			動詞
	3	3.1	125			動詞
	3	3.1	126			動詞
	3	3.1	127			動詞
	3	3.1	128			動詞
	3	3.1	129			動詞
	3	3.1	130			動詞
	3	3.1	131			動詞
	3	3.1	132			動詞
	3	3.1	133			動詞
	3	3.1	134			動詞
	3	3.1	135			動詞
	3	3.1	136			動詞
	3	3.1	137			動詞
	3	3.1	138			動詞
	3	3.1	139			動詞
	3	3.1	140			動詞
	3	3.1	141			動詞
	3	3.1	142			動詞
	3	3.1	143			動詞
	3	3.1	144			動詞
	3	3.1	145			動詞
	3	3.1	146			動詞
	3	3.1	147			動詞
	3	3.1	148			動詞
	3	3.1	149			動詞
	3	3.1	150			動詞
	3	3.1	151			動詞
	3	3.1	152			動詞
	3	3.1	153			動詞
	3	3.1	154			動詞
	3	3.1	155			動詞
	3	3.1	156			動詞
	3	3.1	157			動詞
	3	3.1	158			動詞
	3	3.1	159			動詞
	3	3.1	160			動詞
	3	3.1	161			動詞
	3	3.1	162			動詞
	3	3.1	163			動詞
	3	3.1	164			動詞
	3	3.1	165			動詞
	3	3.1	166			動詞
	3	3.1	167			動詞
	3	3.1	168			動詞
	3	3.1	169			動詞
	3	3.1	170			動詞
	3	3.1	171			動詞
	3	3.1	172			動詞
	3	3.1	173			動詞
	3	3.1	174			動詞
	3	3.1	175			動詞
	3	3.1	176			動詞
	3	3.1	177			動詞
	3	3.1	178			動詞
	3	3.1	179			動詞
	3	3.1	180			動詞
	3	3.1	181			動詞
	3	3.1	182			動詞
	3	3.1	183			動詞
	3	3.1	184			動詞
	3	3.1	185			動詞
	3	3.1	186			動詞
	3	3.1	187			動詞
	3	3.1	188			動詞
	3	3.1	189			動詞
	3	3.1	190			動詞
	3	3.1	191			動詞
	3	3.1	192			動詞
	3	3.1	193			動詞
	3	3.1	194			動詞
	3	3.1	195			動詞
	3	3.1	196			動詞
	3	3.1	197			動詞
	3	3.1	198			動詞
	3	3.1	199			動詞
	3	3.1	200			動詞

頁	文番号	文	接続表現	ノダの 読後感 文庫	ノダの読後感 文庫	ノダの読後感 文庫	前接要素
7.2	7.15.9	7.15.9.4 26	それから僕は愛語器をとって、もう1度ゆっくりとダイヤルを回した。」				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 27	これが箱末です。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 28	さて、皆さんならどういふふうにまとめるでしょうか。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 29	何かまとめられそうな気がしますよな。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 30	何か結論、結末めいた、あー、終わりになっている。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 31	で、これが今まで述べてきたような、さまざまな、えー、エピソード群とどう関係してるのか。	で(追加)	前置(観題)	前置(観題)	動詞
7.2	7.15.9	7.15.9.4 32	これはぜひ、皆さん考えてみてください。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 33	しかし、この小説のタイトル「土の中の彼女の小さな大」、それから、この小説の中で、やはり一番大きな出来事の核といえるのは、やっぱり朝の 扉の閉りし事件じゃないですか。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 34	で、この小説がもし、それを欠いていたら、どう、どうだろうか。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 35	扉の閉りし事件というのが、無くても、この小説は成立しないわけではもちろんなかったでしょうけど、ただこの小説の、この小説としての 個性っていうのは、随分薄くなってしまったんじゃないでしょうか。	ただ	前置		動詞
7.2	7.15.9	7.15.9.4 36	この出来事の核というのは、この小説がこの小説であるためには、明らかに不可欠なものであるように思われます。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 37	「象の消滅」もね、そうですね。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 38	それから、「キントンの幽霊」もそうですね。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 39	象が消えたという出来事や、幽霊が出たということがなくても、何というんでしょうか、あ、おまんじゅう、中にあんこが入ってる。		見解②		動詞
7.2	7.15.9	7.15.9.4 40	あんこが無くてもおまんじゅうの形にはなりませんよな。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 41	で、それは、あんなの無いおまんじゅうのような状態の小説っていうのも、空想することはできます。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 42	けれど、やっぱり、そういう出来事の核というのが必要だろうと思います。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 43	しかし、逆に言うですね、あんこだけが、ちょっと丸いあんこだけがあって、「どうぞ召し上げね。」って言われても、ちょっと食べる気にならない。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 44	同じように、おまんじゅうの、やっぱり、からの部分もやっぱり必要なんですな。		前置		形容動詞
7.2	7.15.9	7.15.9.4 45	で、これが、今私がお話していることなわけです。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 46	出来事が小説になってくると、時にですね、おまんじゅうの核というのが必要なんです。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 47	おまんじゅうの核、あんなの無い必要なんです、それが出来事の核なんですな。		換音		名詞
7.2	7.15.9	7.15.9.4 48	もうこれは必要なんです。		換音		形容動詞
7.2	7.15.9	7.15.9.4 49	けれども、それだけじゃおまんじゅうではないわけで、それをいろいろな語り口や他のエピソードで構成していくことによって、一つの小説 としての完成形が作られるんじゃないかなと思います。	けれども		見解①	動詞
7.2	7.15.9	7.15.9.4 50	えー、特に語りの作風というのが重要なだろうと思います。		見解①		形容動詞
7.2	7.15.9	7.15.9.4 51	ここにこそ、村上短編最大の虚構のしくみがあるというふうに考えられます。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 52	で、えー、一番下の壁の扉の「壁への虚構」というところを見ていただきたいんですが、この小説などは、物語の軸をどこにおくか、かなり の自由度が与えられています。	で(転換)	前置		動詞
7.2	7.15.9	7.15.9.4 53	えー、で、『世界の終わりとパンチ』、『ホルダー・ランダム』とか、『ノルウェーの森』というふうな長編小説の場合においても、同じようなこと が起こります。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 54	さらに、ここに書いてませんけど、『おじさまクロニクル』などの場合は一番そうですね。				
7.2	7.15.9	7.15.9.4 55	つまり、『おじさまクロニクル』という小説は、いろいろな短編小説が合体した作品であるわけで、どこに重点をおくのか、全体をどのように統合して考 えるのかっていうのは、非常に重要なポイントなんです。				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 56	で、もう一つちょっとお話をしたいのが、この『納屋を築く』という作品です。				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 57	これはですね、出来事の核自体が薄く、語り口だけが残ったものなんです。				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 58	つまり、おまんじゅうのあんこはあんなに薄く、あんなに少ない。	つまり	換音 前置 前置		動詞 動詞
7.2	7.16.1	7.16.1.1 59	ん、あんなに少ない。				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 60	ん、あんなに少ない。				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 61	で、このタイプの小説っていうのがあります。				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 62	で、たとえば『ノルウェーの森』の語り口は、毎朝の朝の光がいろいろな虚構の場面に、同じようなものが、あー、集まっていると考えると いいですね。『ノルウェーの森』の語り口は、毎朝の朝の光がいろいろな虚構の場面に、同じようなものが、あー、集まっていると考えると いいですね。				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 63	で、まー、それはちょっと結構で、なかなか手をつけられないので、まっ、『納屋を築く』をちょっと見たいと思います。				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 64	7(なの)のこの引用を見ていただきたいんですが、				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 65	で、『納屋を築く』という物語はですね、あの、やはり『僕』という語り手兼主人公が出てくるんですが、『僕』が、まー、あ、あ、あ、何ですか、カッ と知り合いになっちゃってます。	で(転換)	前置		動詞
7.2	7.16.1	7.16.1.1 66	男性と女性なわけです。				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 67	で、その女の子のほうは、まー、先に『僕』の友達だったんだけど、彼氏ができたっていうんで、紹介されるわけなんですな。	で(追加)	前置	前置	動詞
7.2	7.16.1	7.16.1.1 68	で、その彼氏はですね、納屋を築くのが趣味だっていうんですな。	で(追加)	前置		名詞
7.2	7.16.1	7.16.1.1 69	納屋を築くのが趣味だ。				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 70	そのへんからやっぱり、これは何かあると思うんですね、やっぱり。		見解①		動詞
7.2	7.16.1	7.16.1.1 71	えー、出来事の核なんです。		換音		名詞
7.2	7.16.1	7.16.1.1 72	ところが、納屋を築いたかどうか、どこの納屋を築いたかってのは、よくわからないまま終わってしまいます。				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 73	つまり、出来事の核は隠ぺいされているんですね。	つまり	換音		動詞
7.2	7.16.1	7.16.1.1 74	おまんじゅうのあんこは見えない。				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 75	ただ、その周りの、おまんじゅうの、その、からの部分は、もう、これでもかこれでもかというふうな、非常に冗舌に語られてるんですね。	ただ	根拠		動詞
7.2	7.16.1	7.16.1.1 76	この周りの問題、周りのいろいろな語り口というのは、十分に用意されています。				
7.2	7.16.1	7.16.1.1 77	次のように進みます。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 78	『2か月に一つくらいは納屋を築きます。』と彼は言った。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 79	そしてまた指を鳴らした。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 80	『それくらいベースがいっぱいばんだ(よい)ような気がするんです。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 81	もちろん、僕にとってはいいことですが、』				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 82	僕は曖昧に背いた。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 83	ベース↑				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 84	『次に納屋を築くのはもう決まっているのかな?』				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 85	彼は目と目のあいだにしわを寄せた。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 86	それからすうという音を立てて鼻から息を吸い込んだ。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 87	『そうですね。』				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 88	決まっています。』				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 89	僕は何もいわずにビールの残りをちびちびと飲んだ。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 90	『でもまあ(よい)納屋です。』				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 91	少し寂しげに強がりのある納屋です。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 92	僕は今日も、その下階へ来たんです。』	実は			動詞
7.2	7.16.1	7.16.1.2 93	で、しばくたつてから、こういふ会話をします。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 94	『可憐で、納屋のことどうなったの?』と僕は思い切って訊ねてみた。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 95	彼は唇のはしで微笑にはほえんだ。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 96	『ああ、あのことまだ覚えていたんですね。』と彼は言った。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 97	そしてポケットからハンカチをとりだし、口もとを拭いてまたもとに戻した。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 98	『もちろん築きましたよ。』				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 99	きれいに築きました。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 100	約束したとおりね。』				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 101	『僕の妻(うち)のすぐ近くで。』				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 102	『そうですね。』				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 103	ほんとうのすぐ近くです。』				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 104	『いつ?』				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 105	『この前、おたくにかがってから10日ばかりです。』				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 106	『ところであれから彼女にお会いになりました?』と彼は訊ねた。				
7.2	7.16.1	7.16.1.2 107	『いや、会ってない、あなたは?』				

種別	文番号	文	接続表現	ノダの 接続機能 文末	ノダの接続機能 節末	前接 要素	
8.2.2	8.2.4	596 この現代小説の道といわれる舞臺という以外の作品は、回栗手紙です。					
8.2.2	8.2.4	597 回栗手紙形式。					
8.2.2	8.2.4	598 口語の森(回栗手紙形式)です。					
8.2.2	8.2.4	599 だから、太宰治の代表作の一つである『人間失格』というのは、これは手紙です。空っぽの。					
8.2.2	8.2.4	600 手紙形式なんです。				名詞	
8.2.2	8.2.4	601 ノットは書き直されて、その内容が別の必要とするという形式になっています。			換言		
8.2.2	8.2.4	602 昔、このように、ドキュメント形式、たとえばです。たとえば、ドキュメント形式というのは、断片、断片、太宰といった、あー、著名作家たちの、ゆゑ、あの、代表作の作用にも通ずる部分があるということなんです。	こういうふうに	たとえですよ	たとえは	換言	動詞
8.2.2	8.2.4	603 又、一冊を挙げれば、そういうことです。					
9	604	え、これから村上春樹の作品を少しづつ読んでいきますけれども、えー、今回の授業は村上春樹論なので、村上作品ばかりを取り上げますけれども、でも面白い作家の作品にも触れたいので、まー、皆さんが、えー、小説を中心として、読書、読書をする場合に、少しでも役に立ってほしいなことを心がけてほしいと思います。					
9.1	605	今日は、スライドが見られなくて残念だったんですが、何か、今日のところで質問ありませんか？			見直し	形変換	
9.1	606	読書は、					
9.1	607	えーですね、えーと、今日配布した表紙のところに、メールアドレス、それからホームページのURLを入れておきましたので、(資料を手に取る)質問はメールでも受け付けますので、気軽にしてください。					
9.1	608	これは大学の、あの、メールアドレスです。					
9.1	609	え、こんなでないことを願うならば、迷惑かなんてことはありませんので、どんな簡単なことでも結構ですし、授業の内容の質問や意見、要望などありましたらメールでどうぞ。					
9.1	610	必ず返信します。					
9.2	611	だから、あの、ホームページのほうには、スライド資料が、えーと、アップロードしてアップロードしますので、えー、チェックしてください。					
9.2	612	見ていないんですけど、あの、早速各自が各自にしたいと思います。				前提	
9.2	613	今回は、特にスライドを見られたら、えー、このスライドは、えー、そうだな、あとでまた復習しなくても、パソコン上でスライドは見られるので、各自のところでアップロードしたら、あの、パソコンでアクセスすると、あの、ホームページからスライドが見られます。				動詞	
9.2	614	インターネットエクスプローラーでスライドが、あー、閲覧できますので、えーぜひ、こ、こういう日の場合は、特にですけど、活用していただきたいなと思います。					
9	615	それでは、今日ここまででしめます。					
9	616	ご苦労様でした。(マイクを置く)					

行	列	文	接続表現	ノダの統括機能	ノダの統括機能	前後要素
1	1	1				
1	1	2				
1	1	3				
1	3	4				
1	3	5				
1	3	6				
1	3	7				
1	3	8				
1	3	9				
1	3	10				
1	3	11				
1	3	12				
1	3	13				
1	3	14				
1	3	15				
1	3	16				
1	3	17				
1	3	18				
1	3	19				
1	3	20				
1	3	21				
1	3	22				
1	3	23				
1	3	24				
1	3	25				
1	3	26				
1	3	27				
1	3	28				
1	3	29				
1	3	30				
1	3	31				
1	3	32				
1	3	33				
1	3	34				
1	3	35				
1	3	36				
1	3	37				
1	3	38				
1	3	39				
1	3	40				
1	3	41				
1	3	42				
1	3	43				
1	3	44				
1	3	45				
1	3	46				
1	3	47				
1	3	48				
1	3	49				
1	3	50				
1	3	51				
1	3	52				
1	3	53				
1	3	54				
1	3	55				
1	3	56				
1	3	57				
1	3	58				
1	3	59				
1	3	60				
1	3	61				
1	3	62				
1	3	63				
1	3	64				
1	3	65				
1	3	66				
1	3	67				
1	3	68				
1	3	69				
1	3	70				
1	3	71				
1	3	72				
1	3	73				
1	3	74				
1	3	75				
1	3	76				
1	3	77				
1	3	78				
1	3	79				
1	3	80				
1	3	81				
1	3	82				
1	3	83				
1	3	84				
1	3	85				
1	3	86				
1	3	87				
1	3	88				
1	3	89				
1	3	90				
1	3	91				
1	3	92				
1	3	93				
1	3	94				
1	3	95				
1	3	96				
1	3	97				
1	3	98				
1	3	99				
1	3	100				
1	3	101				
1	3	102				
1	3	103				
1	3	104				
1	3	105				
1	3	106				
1	3	107				
1	3	108				
1	3	109				
1	3	110				
1	3	111				
1	3	112				
1	3	113				
1	3	114				
1	3	115				
1	3	116				
1	3	117				
1	3	118				
1	3	119				
1	3	120				
1	3	121				
1	3	122				
1	3	123				
1	3	124				
1	3	125				
1	3	126				
1	3	127				
1	3	128				
1	3	129				
1	3	130				
1	3	131				
1	3	132				
1	3	133				
1	3	134				
1	3	135				

種別	文番号	文	接続表現	ノダの 統括機能 文末	ノダの統括機能 節末	前接 要素
問題11	11.2.3	674 「僕、どうしたの？」				
問題11	11.2.3	675 「僕、どうしたの？、(B)				
問題11	11.2.3	676 「何だい？」				
問題11	11.2.3	677 「僕」は、人物の代名詞ですよね。				
問題11	11.2.3	678 ですよね。				
問題11	11.2.3	679 じゃ、僕がどういふんですか。用い方としては、2人称なわけですか。	2人称		前接	動詞
問題11	11.2.3	680 なんで「どういふ」が用いられるんですか。	2人称			動詞
問題11	11.2.3	681 じゃ、じゃ、人物の代名詞なのにもかかわらず、今のような場面設定で、「僕、どうしたの？、僕、どういふ？」と言いますよね。				
問題11	11.2.3	682 じゃ、じゃ、僕がどういふんですか。用い方としては、2人称なわけですか。			前接(疑問)	動詞
問題11	11.2.3	683 じゃ、じゃ、僕がどういふんですか。用い方としては、2人称なわけですか。				
問題11	11.2.4	684 じゃ、じゃ、僕がどういふんですか。用い方としては、2人称なわけですか。				形動
問題11	11.2.4	685 じゃ、じゃ、僕がどういふんですか。用い方としては、2人称なわけですか。				
問題11	11.2.4	686 じゃ、じゃ、僕がどういふんですか。用い方としては、2人称なわけですか。				
問題11	11.3	687 じゃ、じゃ、僕がどういふんですか。用い方としては、2人称なわけですか。				

【資料3-1】 原文Aの残存認定単位区切り基準

番号	原文残存認定単位の例
0-1	「日本人はそんなに駄目か」
0-2	牧野昇
1-1	五〇〇字提言を依頼され、
1-2	一緒に送られてきた
1-3	見本誌を読んで、
1-4	これは大変だと
1-5	身が縮む思いになった。
2-1	日本人に対して、
2-2	何か教訓をたれるとか、
2-3	叱りつける
2-4	内容でないといけないように
2-5	思ったからだ。
3-1	日本人は声が大きいぞとか、
3-2	新幹線のなかのワゴン販売はけしからんとかの
3-3	お叱りである。
4-1	どうも、
4-2	私のことを言っているように
4-3	思うのだ。
5-1	私は
5-2	一人では静か [5-3] だが、
5-3	(当り前だ)
5-4	大勢になると
5-5	声高でしゃべる。
6-1	新幹線のなかでは、
6-2	ビールを呑んだり、
6-3	弁当はまだかなどと
6-4	生唾をのむ。
7-1	成るコラムで、
7-2	何か日本人を叱る
7-3	文章を書こうと
7-4	思い、
7-5	「日本人は
7-6	ブランド指向だ、
7-7	汽車の中でも、
7-8	ルイボトンの鞄をもった
7-9	連中が多すぎる」と
7-10	書いて
7-11	溜飲を下げたら、
7-12	その原稿を消書した
7-13	秘書が
7-14	「会長、
7-15	先日
7-16	ヨーロッパに行った時に、
7-17	ダンヒルのネクタイを十本買って来ましたね」。
8-1	ぎゃふんとした経験がある。
9-1	いつも、不思議に思うことだが、
9-2	日本人はそんなにダメ人間揃いなのだろうか。
10-1	しかし
10-2	日本経済や社会が安定に動いているのである。
11-1	おそらく、
11-2	お互い同士が叱正し合うという
11-3	魚得の仕組みが、安定化に一つの貢献をしている のかもしれない。

佐久間(1997:6 一部抜粋)

【資料3-2】要約文A「日本人はそんなに駄目か」の原文残存率の差の検定

Z単位	日本人		留学生		差	統計量	1%	5%	確率	判定
	実数	(%)	実数	(%)						
0-1-1	1	1.64%	3	4.55%	-2.91%	-0.9368	-2.33	-1.64	0.17442	
0-1-2	1	1.64%	2	3.03%	-1.39%	-0.5157	-2.33	-1.64	0.30304	
0-2	0	0.00%	4	6.06%	-6.06%	-1.9533	-2.33	-1.64	0.02539	*
01-01	52	85.25%	32	48.48%	36.76%	4.3737	2.33	1.64	0.00001	**
01-02	10	16.39%	9	13.64%	2.76%	0.4352	2.33	1.64	0.33170	
01-03	25	40.98%	23	34.85%	6.14%	0.7124	2.33	1.64	0.23811	
01-4-1	4	6.56%	5	7.58%	-1.02%	-0.2235	-2.33	-1.64	0.41159	
01-4-2	10	16.39%	17	25.76%	-9.36%	-1.2856	-2.33	-1.64	0.09577	
01-5-1	13	21.31%	16	24.24%	-2.93%	-0.3931	-2.33	-1.64	0.34711	
01-5-2	20	32.79%	25	37.88%	-5.09%	-0.5994	-2.33	-1.64	0.27446	
02-01	48	78.69%	49	74.24%	4.45%	0.5893	2.33	1.64	0.27781	
02-02	35	57.38%	29	43.94%	13.44%	1.5132	2.33	1.64	0.06511	
02-03	44	72.13%	35	53.03%	19.10%	2.2180	2.33	1.64	0.01328	*
02-04	46	75.41%	36	54.55%	20.86%	2.4560	2.33	1.64	0.00702	**
02-05	17	27.87%	22	33.33%	-5.46%	-0.6670	-2.33	-1.64	0.25239	
03-1-1	19	31.15%	25	37.88%	-6.73%	-0.7965	-2.33	-1.64	0.21288	
03-1-2	18	29.51%	28	42.42%	-12.92%	-1.5130	-2.33	-1.64	0.06514	
03-1-3	18	29.51%	28	42.42%	-12.92%	-1.5130	-2.33	-1.64	0.06514	
03-2-1	14	22.95%	25	37.88%	-14.93%	-1.8221	-2.33	-1.64	0.03422	*
03-2-2	13	21.31%	18	27.27%	-5.96%	-0.7814	-2.33	-1.64	0.21729	
03-03	13	21.31%	13	19.70%	1.61%	0.2253	2.33	1.64	0.41088	
04-01	4	6.56%	4	6.06%	0.50%	0.1151	2.33	1.64	0.45417	
04-02	46	75.41%	19	28.79%	46.62%	5.2514	2.33	1.64	0.00000	**
04-03	19	31.15%	5	7.58%	23.57%	3.3901	2.33	1.64	0.00035	**
05-01	5	8.20%	3	4.55%	3.65%	0.8462	2.33	1.64	0.19873	
05-2-1	3	4.92%	10	15.15%	-10.23%	-1.9008	-2.33	-1.64	0.02866	*
05-2-2	3	4.92%	11	16.67%	-11.75%	-2.1121	-2.33	-1.64	0.01734	*
05-03	0	0.00%	4	6.06%	-6.06%	-1.9537	-2.33	-1.64	0.02537	*
05-04	5	8.20%	18	27.27%	-19.08%	-2.7890	-2.33	-1.64	0.00264	**
05-05	8	13.11%	15	22.73%	-9.61%	-1.4054	-2.33	-1.64	0.07995	
06-01	4	6.56%	15	22.73%	-16.17%	-2.5525	-2.33	-1.64	0.00535	**
06-02	3	4.92%	13	19.70%	-14.78%	-2.5076	-2.33	-1.64	0.00608	**
06-3-1	3	4.92%	9	13.64%	-8.72%	-1.6782	-2.33	-1.64	0.04666	*
06-3-2	3	4.92%	10	15.15%	-10.23%	-1.9008	-2.33	-1.64	0.02866	*
06-04	3	4.92%	9	13.64%	-8.72%	-1.6782	-2.33	-1.64	0.04666	*
07-01	10	16.39%	16	24.24%	-7.85%	-1.0952	-2.33	-1.64	0.13671	
07-02	14	22.95%	17	25.76%	-2.81%	-0.3679	-2.33	-1.64	0.35647	
07-03	10	16.39%	14	21.21%	-4.82%	-0.6930	-2.33	-1.64	0.24415	
07-04	3	4.92%	5	7.58%	-2.66%	-0.6159	-2.33	-1.64	0.26897	
07-05	14	22.95%	36	54.55%	-31.59%	-3.6410	-2.33	-1.64	0.00014	**
07-06	20	32.79%	52	78.79%	-46.00%	-5.2271	-2.33	-1.64	0.00000	**
07-07	6	9.84%	4	6.06%	3.78%	0.7893	2.33	1.64	0.21498	
07-08	6	9.84%	6	9.09%	0.75%	0.1434	2.33	1.64	0.44297	
07-9-1	7	11.48%	5	7.58%	3.90%	0.7506	2.33	1.64	0.22644	
07-9-2	7	11.48%	5	7.58%	3.90%	0.7506	2.33	1.64	0.22644	
07-10	18	29.51%	15	22.73%	6.78%	0.8706	2.33	1.64	0.19199	
07-11	12	19.67%	5	7.58%	12.10%	2.0002	2.33	1.64	0.02274	*
07-12	1	1.64%	4	6.06%	-4.42%	-1.2800	-2.33	-1.64	0.10027	
07-13	5	8.20%	7	10.61%	-2.41%	-0.4638	-2.33	-1.64	0.32141	

Z単位	日本人		留学生		差	統計量	1%	5%	確率	判定
	実数	(%)	実数	(%)						
07-14	6	9.84%	5	7.58%	2.26%	0.4525	2.33	1.64	0.32547	
07-15	3	4.92%	4	6.06%	-1.14%	-0.2819	-2.33	-1.64	0.38901	
07-16	2	3.28%	6	9.09%	-5.81%	-1.3470	-2.33	-1.64	0.08899	
07-17	5	8.20%	8	12.12%	-3.92%	-0.7290	-2.33	-1.64	0.23302	
08-1-1	6	9.84%	9	13.64%	-3.80%	-0.6630	-2.33	-1.64	0.25367	
08-1-2	8	13.11%	9	13.64%	-0.52%	-0.0863	-2.33	-1.64	0.46563	
09-01	9	14.75%	14	21.21%	-6.46%	-0.9442	-2.33	-1.64	0.17254	
09-2-1	62	101.64%	38	57.58%	44.06%	6.0637	2.33	1.64	0.00000	**
09-2-2	59	96.72%	36	54.55%	42.18%	5.4697	2.33	1.64	0.00000	**
10-01	21	34.43%	20	30.30%	4.12%	0.4965	2.33	1.64	0.30977	
10-2-1	64	104.92%	56	84.85%	20.07%	4.9515	2.33	1.64	0.00000	**
10-2-2	49	80.33%	42	63.64%	16.69%	2.0853	2.33	1.64	0.01852	*
11-01	21	34.43%	11	16.67%	17.76%	2.3032	2.33	1.64	0.01063	*
11-2-1	58	95.08%	37	56.06%	39.02%	5.0606	2.33	1.64	0.00000	**
11-2-2	62	101.64%	40	60.61%	41.03%	5.8104	2.33	1.64	0.00000	**
11-3-1	45	73.77%	31	46.97%	26.80%	3.0782	2.33	1.64	0.00104	**
11-3-2	55	90.16%	46	69.70%	20.47%	2.8559	2.33	1.64	0.00215	**

佐久間編著 (1997:資 28-29)

【資料 4-1】情報伝達単位(CU)の分類基準(16 類 30 種)

種類	下位分類	情報伝達 単位番号	用例
1. 文末叙述表現		G-477-08	477-01 ところが, (8) 477-02 日々 (6.1/+3.1/+5.3) 477-03 付けている (3.1/+5.3) 477-04 ブログが (5.3) 477-05 あって, (2.2) 477-06 そこでは (5.4+12) 477-07 「ぼく」として (4.3) 477-08 書いてる。 (1)
		A-208-05	208-01 つまり, (8) 208-02 まあ, (11.4) 208-03 話し言葉における (6.3+3.2/+5.4) 208-04 言い換えというのには, (5.4) 208-05 言い直しである。 (1)
		G-112-03	112-01 そんなふうに, (2.1+12) 112-02 社会言語学の一つのポイントは, (5.1) 112-03 パリエーション。 (1+13)
2. 節末叙述表現	2.1. 運用中止形	A-273-12	273-07 相手の言葉を (7.3+13/+3.2/+5.4) 273-08 そのまま (7.2+12/+3.2/+5.4) 273-09 受け入れる (3.2/+5.4) 273-10 発話っていうのは, (5.4) 273-11 とでも (7.2) 273-12 大切に。 (2.1) 273-13 人間関係を (7.3+13) 273-14 間違いなく (2.1) 273-15 円滑に (2.1) 273-16 します。 (1)
		A-273-14 A-273-15	
		G-303-03	303-01 で, (8) 303-02 まあ, (11.4) 303-03 大きく (2.1) 303-04 分けて, (2.2) 303-05 3種類に (7.3) 303-06 なるんじゃないかということです。 (1)
	2.2. 接続助詞	A-036-24	036-22 伝えられる (3.1/+3.3+7.3) 036-23 言葉というのを, (3.3+7.3) 036-24 考えれば。 (2.2)
		A-036-26	036-25 選ぶことが (3.3+5.3) 036-26 できるのに。 (2.2) 036-27 でも, (8) 036-28 わざわざ (7.2+13) 036-29 二つの (3.2) 036-30 表現を通して (7.3) 036-31 示す。 (1)
	A-003-05 A-003-07	003-02 いい (3.2/+5.3) 003-03 ノートの (3.2/+5.3) 003-04 とり方が (5.3) 003-05 あつたら。 (2.2) 003-06 私も (5.2) 003-07 教えてほしいぐらいなんで。 (2.2) 003-08 それを, (7.3+12+13) 003-09 まあ, (11.4) 003-10 これから (6.1) 003-11 研究してみよう, というわけです。 (1)	
2.3. 複合形	A-391-01	391-01 直せるにもかかわらず。 (2.3) 391-02 あえて (7.1+13/+3.3+2.3) 391-03 二つの (3.2/+3.3+2.3) 391-04 表現を (7.3/+3.3+2.3) 391-05 残っていたということから。 (3.3+2.3) 391-06 戦略的な (3.2) 391-07 言い換え, (1+13) 391-08 つまり, (8) 391-09 意図的な (3.2) 391-10 言い換えなんですけどね↑。(1+12)	
	A-391-05		
3. 修飾表現	3.1. 内の関係	G-517-13 ~ G-517-18	517-10 そして, (8) 517-11 また, (8) 517-12 あのー, (11.4) 517-13 自分が (5.3/+3.1/+3.1+13) 517-14 今 (6.1/+3.1/+3.1+13) 517-15 愛している (3.1/+3.1+13) 517-16 五代君という (3.1+13) 517-17 新しい (3.1) 517-18 パートナー。 (3.1+13) 517-19 いずれに対しても, (5.4+12) 517-20 「あなた」という (3.2) 517-21 言い方を (7.3) 517-22 しています。 (1)
		A-063-03 A-063-09	063-01 でも, (8) 063-02 一方, (8) 063-03 簡潔な (3.2+12) 063-04 表現で (2.1+12) 063-05 ポイントを (7.3) 063-06 とらえて (2.2) 063-07 示してくれると, (2.2) 063-08 一目で (7.3/+3.2/+5.3) 063-09 わかるという (3.2/+5.3) 063-10 利点が (5.3) 063-11 ある。 (1)
	3.3. 形式名詞	A-141-11	141-09 「要するに」が (5.3+12/+3.3+5.1) 141-10 たくさん (7.2+12/+3.3+5.1) 141-11 使われているもの は, (3.3+5.1) 141-12 3番一ですね↑。(1+10.2)
4. 引用表現	4.1.ト	G-092-09	092-02 その (3.2+12/+3.2/+5.3) 092-03 「朝ごはん」っていう (3.2/+5.3) 092-04 言葉が (5.3) 092-05 ありますけれども, (2.2) 092-06 たとえば, (8) 092-07 あの, (11.4) 092-08 人によっては (5.4) 092-09 「朝飯」と (4.1) 092-10 言うかもしれないね。(1)
	4.2.ヨウニ	G-371-07	371-01 ですから, (8) 371-02 一見, (7.1/+4.2) 371-03 に, (5.1+13) 371-04 日本語の人称表現は, (5.1/+4.2) 371-05 あの, (11.4) 371-06 数が (5.3/+4.2) 371-07 多いように (4.2) 371-08 思うわけですが, (2.2) 371-09 実際のところは (3.3+5.1/+4.1) 371-10 さほどでもないということは, (5.4/+4.1) 371-11 最後に (6.1/+4.1) 371-12 触れておきたいと (4.1) 371-13 思います。 (1)
	4.3. 複合形	G-189-06	189-01 えー, (11.4) 189-02 何だろうなあ, (11.4) 189-03 え, (11.4) 189-04 ここに (6.3+12/+4.3) 189-05 自分の個性を (7.3/+4.3) 189-06 出せるというふう に (4.3) 189-07 思います。 (1)
	4.4. 略式	A-148-10	148-08 「要するにー, (8/+4.4+13) 148-09 私と (7.3/+4.4+13) 148-10 別れたらいいわけ↑。 (4.4+13)
5. 提題表現	5.1.ハ	A-106-02	106-01 ま, (11.4) 106-02 数字は。 (5.1) 106-03 そのことを (3.3+7.3+12) 106-04 示しています。 (1)
	5.2.モ	G-131-04	131-01 あるいは, (8) 131-02 今 (6.1/+3.2/+5.2) 131-03 申し上げたような (3.2/+5.2) 131-04 性別の属性も (5.2) 131-05 あるでしょう。 (1)
	5.3.ガ	G-220-04	220-01 一つ目はですね, (5.1+11.4) 220-02 あのー, (11.4) 220-03 人称表現は (5.1) 220-04 種類が (5.3) 220-05 多い。 (1+13)
	5.4. 複合形	A-205-3	205-1で, (8) 205-2 耳による (3.1/+5.4) 205-3 印象っていうのも (5.4) 205-4 ありますよね↑。(1)
	5.5. 無助詞	G-002-04	002-01 あのー, (11.4) 002-02 まず, (7.1) 002-03 この (3.1) 002-04 紙 (5.5) 002-05 ありますか。(1)
6. 状況表現	6.1. 時間	G-219-03	219-01 じゃ, (8) 219-02 えっと, (11.4) 219-03 今日の話 ですけれども, (6.1+5.4) 219-04 今日 は, (6.1+5.1) 219-05 えっと, (11.4) 219-06 四つのことについて, (3.3+5.4/+4.3) 219-07 えーと, (11.4) 219-08 皆さんに (7.3/+4.3) 219-09 お話をしたいというふう (4.3) 219-10 考えています。 (1)
		G-219-04	
	6.2. 空間	G-574-01	574-01 「新着に (6.2/+4.4) 574-02 買物に (7.3/+4.4) 574-03 行こうか↑。(4.4)
6.3. 場面	A-001-01	001-01 今年の授業は。 (6.3+5.1) 001-02 今日で (6.1) 001-03 終わりなんです, (2.2)	
	A-001-05	001-04 それで, (8) 001-05 来年度の授業で (6.3) 001-06 説明いたします。 (1)	

種類	下位分類	情報伝達 単位番号	用例
※7. 注釈表現	※7.1. 文副詞	G-387-01	387-01 もちろん , (7.1) 387-02 その, (11.4) 387-03 女子中学生が, (5.3/+5.1) 387-04 一時期 (6.1/+5.1) 387-05 「ぼく」というのを (3.3+7.3/3.2/+5.1) 387-06 使う (3.2/+5.1) 387-07 ケースは (5.1) 387-08 ありますけれども, (2.2) 387-09 それは (5.1+12) 387-10 いずれ (6.3) 387-11 消滅していくということになります。(1)
	※7.2. 副詞類	A-196-03	196-01 つま, (8) 196-02 もう, (7.1) 196-03 ほぼ (7.2) 196-04 30パーセント。(1+13)
	※7.3. 補語類	A-350-04	350-01 そうして (8) 350-02 考えてみると, (2.2) 350-03 いい (3.2) 350-04 言葉を (7.3) 350-05 探している。(1)
8. 接続表現		G-319-01 G-320-02 G-320-03	319-01 で , (8) 319-02 ま, (11.4) 319-03 考えてみれば, (2.2/+4.1) 319-04 すぐに (6.3/+4.1) 319-05 わかることだと (4.1) 319-06 思いますけれども, (2.2) 319-07 1人称は (5.1) 319-08 言及的用法にしか (5.4) 319-09 なりません。(1) 320-01 な, (8+13) 320-02 なぜかという , (8) 320-03 だって , (8) 320-04 私って (5.4) 320-05 絶対 (7.1) 320-06 いるわけですからね, (2.1+11.4) 320-07 その (3.2+12/+6.3+11.4+13) 320-08 場にね, (6.3+11.4+13)
9. 応対表現	9.1. 呼びかけ	A-313-01	313-01 「君たち , (9.1/+4.4) 313-02 こは, (6.2+5.1/+4.4) 313-03 こ, (2.2+13) 313-04 こうよ, (2.2+12+13) 313-05 公共の場だから, (2.2+12/+4.4) 313-06 騒ぐのは (5.4/+4.4) 313-07 止めてくれな いか。」(4.4)
	9.2. 挨拶	G-615-01	614-01 それでは, (8) 614-02 これで (6.3+12) 614-03 終わります。(1) 615-01 ありがとうございますまし た。(9.2)
10. 参照表現	10.1. 題名・著者名	G-510-05	510-02 これは, (5.1+12) 510-03 えっと, (11.4) 510-04 あの, (11.4) 510-05 『めぞん一刻』という (3.1+10.2) 510-06 マンガですけれども, (2.2) 510-07 あの, (11.4) 510-08 まあ, (11.4) 510-09 もし, (7.1) 510-10 ごめんなさい, (9.2+14) 510-11 ネタばれ (5.5) 510-12 ご容赦ということになりますが, (3.3+2.2) 510-13 あの, (11.4) 510-14 これは, (5.1+12) 510-15 えっと, (11.4) 510-16 最終巻ですね。 (1)
	10.2. 教材・資料	A-155-19 A-155-21 A-156-01	155-19 {黒板に歩いていき、「詰」と板書して、教壇に戻る} (10.2+16) 多分 (7.1) 155-20 この (3.1) 155-21 空ですよね↑ 。(1+10.2) 156-01 「詰まり」 。(1+10.2+13)
	10.3. 記号	G-008-25	008-20 まず, (7.1) 008-21 ノートの用紙というのが (3.3+5.3) 008-22 あるんですけれども, (2.2) 008- 23 えっと, (11.4) 008-24 表紙 (4.1+13) 008-25 プラス (10.3/+4.1) 008-26 10枚と (4.1) 008-27 書いて ありますけど。(2.2+13)
11. 感応表現	11.1. 感動	G-433-03	433-01 ま, (11.4) 433-02 「おやじ」, (7.3+13) 433-03 あっ , (11.1) 433-04 「おやじ」に (7.3 /+3.3+5.1) 433-05 なることは (3.3+5.1) 433-06 実は (8) 433-07 あるんです。(1)
	11.2. 応答	A-270-06	270-02 「暑いですね↑。」って (4.3+13) 270-03 学生が (5.3) 270-04 言えば, (2.2) 270-05 こちらは, (5.1) 270-06 「うん , (11.2/+4.4) 270-07 暑いですね↑。」(4.4)
	11.3. 相づち	D-380-01 D-382-01	379-01 受講生9:動物の能力というものは, (5.4) 380-01 講義者D:うん , (11.3) 381-01 受講生9:全部 (7.2+13) 381-02 そういう (3.2+12/+5.3) 381-03 効果が (5.3) 381-04 現れる。 (1) 382-01 講義者D:うん , (11.3)
	11.4. フィラー	G-232-02 G-232-05 G-232-06 G-232-07	232-01 では, (8) 232-02 えっと , (11.4) 232-03 見たいんですけども, (2.2) 232-04 見ていきたいん ですけれども, (2.2+12) 232-05 えっと , (11.4) 232-06 ここではですね , (6.3+11.4+12) 232-07 ま , (11.4) 232-08 1人称を (7.3) 232-09 挙げてあります。(1)
12. 反復表現		G-143-04 G-144-02 G-144-06	143-01 でも, (8) 143-02 いつ頃でしょうか, (6.1+1+13) 143-03 たとえば, (8) 143-04 上から目鏡 , (1+13+12) 144-01 私は, (5.1) 144-02 視線という (3.2+12/+5.4) 144-03 言葉しか (5.4) 144-04 使わ なかったんですけども, (2.2) 144-05 知らぬ間[ま]に (6.1/+3.2) 144-06 目鏡という (3.2+12/+3.1) 144-07 言葉を (7.3/+3.1) 144-08 使っている (3.1) 144-09 自分に (7.3) 144-10 気がつきます。(1)
		A-028-09 A-029-17	028-05 複数の (3.1) 028-06 言葉が (5.3) 028-07 即座に (6.3+13) 028-08 おも , (6.1+13) 028-09 思 いつく時 , (6.1+12) 028-10 そうですね, (11.4) 028-11 たとえば, (8) 028-12 誰かの服を (7.3) 028-13 見て, (2.2) 028-14 「かわいいわね↑。」っていうのと, (3.3+4.3+7.3+13) 029-15 「似合うね↑。」っていうの を, (3.3+4.3+7.3) 029-16 二つ (7.3/+6.1+5.2+12) 029-17 思いつく時も (6.1+5.2+12) 029-18 あるん ですよね↑。(1)
		G-248-05	248-01 それから, (8) 248-02 えっと, (11.4) 248-03 四つ目なんですけれども, (5.4) 248-04 親族名称 系1人称ということで, (3.3+2.1) 248-05 これは (5.1+12) 248-06 呼びかけるんじゃないかと, (2.2) 248-07 自分で (7.2) 248-08 言う。(1)
13. 省略表現		A-045-10	045-08 典型的には, (2.1+5.1) 045-09 まず (7) 045-10 わかりやすく 。(2.1+13)
		G-126-04	126-01 で, (8) 126-02 三つ目なんですけれども, (5.4) 126-03 あの, (11.4) 126-04 たい , (3.3+5.1+13) 126-05 大切なことは, (3.3+5.1+12) 126-06 言葉は (5.1+12) 126-07 変化するということ です。(3.3+1+12)
14. 挿入表現		A-067-07	067-05 「多発性神経症」というのは, (5.4) 067-06 神経一, (5.4+13+12) 067-07 ごめんなさい , (9.2+14) 067-08 「神経炎」ですね, (11.4+12) 067-09 「多発性神経炎」というのは, (5.4+12) 067-10 ま, (11.4) 067-11 難しい, (3.2) 067-12 その, (11.4) 067-13 医学的な (3.2/+3.2) 067-14 言葉の (3.2) 067-15 説明ということなんです。(1)
15. 転換表現		A-366-04	366-01 そのため, (8) 366-02 一方の (3.1+12) 366-03 会話の当事者が一, (5.3+13) 366-04 [ガチャ という音]はい , (16+11.2+15) 367-01 受講生:(?) {1文全体不明} (13+14) 368-01 講義者A:後ろ で (6.2+14) 368-02 プリントを (7.3+14) 368-03 もらって下さい。(1+14)
16. 非言語表現		A-222-03	222-01 あんまり (7.1) 222-02 使いま, (2.2+13) 222-03 [笑い] (16) 222-04 使わないかもしれませんが ど一, (2.2+12) 222-05 まあ, (11.4) 222-06 そういふふう (4.3+12) 222-07 言い換えますよね↑。(1)

【表5-1】講義Gの談話分析資料

話段					中心文				通し 番号	CU番号	X単位	発話表現		T/F		T/Fの 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④				⑤	文中	文末	文中	
										1	001-01	はい。				
										2	001-02	えーと				
										3	001-03	それでは、				
										4	001-04	あの。				
										5	001-05	あの。				
										6	001-06	授業				
										7	001-07	「始めます。」				
										8	002-01	あのー				
										9	002-02	ます。				
										10	002-03	この				
										11	002-04	紙				
										12	002-05	「ありますか。」				
										13	003-01	この				
										14	003-02	紙と				
										15	003-03	「おわっても、				
										16	003-04	開くと				
										17	003-05	「はいませうけども、				
										18	003-06	「午前の授業9時から				
										19	003-07	12時20分と				
										20	003-08	「書いてあるものです。」				
										21	004-01	あの。				
										22	004-02	「らんになつて、				
										23	004-03	出しなさい				
										24	004-04	ない				
										25	004-05	「見つからないという				
										26	004-06	人が				
										27	004-07	いたら、				
										28	004-08	「書いてください				
										29	004-09	「大丈夫ですか。」				
										30	005-01	えっとー				
										31	006-01	えっとー				
										32	006-02	「今日の、				
										33	006-03	その、				
										34	006-04	「授業は、				
										35	006-05	「ありますか。」				
										36	006-06	その、				
										37	006-07	「授業の目的が				
										38	006-08	「授業です」ということが				
										39	006-09	「には				
										40	006-10	「書いてあります。」				
										41	007-01	「書いてあります。」				
										42	007-02	えっと				
										43	007-03	「主体的行動、				
										44	007-04	「午前中の行動ですけれども、				
										45	007-05	「番号から				
										46	007-06	「わかるように				
										47	007-07	「このことが				
										48	007-08	「ありますか。」				
										49	008-01	ます。				
										50	008-02	最初、				
										51	008-03	えーと				
										52	008-04	「この、				
										53	008-05	「時間から				
										54	008-06	「10時半まで、				
										55	008-07	「えーと				
										56	008-08	「おたくが				
										57	008-09	「えーと				
										58	008-10	「授業をしますので、				
										59	008-11	「ます				
										60	008-12	「それを、				
										61	008-13	「あの、				
										62	008-14	「開きながらですな、				
										63	008-15	「まず、				
										64	008-16	「まず、				
										65	008-17	「1のところが				
										66	008-18	「読みますけれども、				
										67	008-19	「えーと				
										68	008-20	「ます				
										69	008-21	「ノートの用紙というものが				
										70	008-22	「あるかですけれども、				
										71	008-23	「えっと				
										72	008-24	「表紙、				
										73	008-25	「プラス				
										74	008-26	「10枚、と				
										75	008-27	「書いてありますけど、」				
										76	009-01	「あの、				
										77	009-02	「ノートの用紙は				
										78	009-03	「ありますか。」				
										79	009-04	「まず、」				
										80	010-01	「ます				
										81	010-02	「それを、				
										82	010-03	「出し、といってくださいね。」				
										83	011-01	「で、				
										84	011-02	「えっと				
										85	011-03	「授業を、				
										86	011-04	「開きながら、				
										87	011-05	「えーと				
										88	011-06	「授業を、				
										89	011-07	「欠席した、				
										90	011-08	「日本人の友だちに、				
										91	011-09	「授業の内容が、				
										92	011-10	「よく、				
										93	011-11	「わかるように、				
										94	011-12	「ノートを、				
										95	011-13	「書いてください、ということですが、」				
										96	012-01	「日本人の友だちに、				
										97	012-02	「あの、				
										98	012-03	「えーと				
										99	012-04	「授業の内容が、				
										100	012-05	「よく、				
										101	012-06	「わかるように、というところが、				
										102	012-07	「ポイントです。」				
										103	013-01	「それから、				
										104	013-02	「えーと				
										105	013-03	「授業のところがですね、				
										106	013-04	「表紙と				
										107	013-05	「席の番号と				
										108	013-06	「名前を、				
										109	013-07	「書いて、				
										110	013-08	「ノートを、				
										111	013-09	「必ず、				
										112	013-10	「あの、				
										113	013-11	「授業のページに、				
										114	013-12	「書くようにしてください。」				
										115	014-01	「それから、				
										116	014-02	「えーと				
										117	014-03	「あのー				
										118	014-04	「書か				
										119	014-05	「私のボールペンで、				
										120	014-06	「また、				
										121	014-07	「授業を、				
										122	014-08	「グループセッションの場合は、				
										123	014-09	「まず、				
										124	014-10	「書くようにしてください。」				
										125	015-01	「それから、				
										126	015-02	「えーと				
										127	015-03	「この、				
										128	015-04	「まず、				
										129	015-05	「授業が、				
										130	015-06	「90分、				
										131	015-07	「あって、				
										132	015-08	「終わりますので、				
										133	015-09	「10時半から、				
										134	015-10	「えーと				
										135	015-11	「11時15分まで、				
										136	015-12	「45分間ですけれども、				
										137	015-13	「授業の内容が、というものが				

話数						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	確証表現		1/2	1/3の 統括機能		
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤	⑥			文中	文末	文中	文末	
1	1	1	1	1	1							287	028-04	20番の方は				
1	1	1	1	1	1							288	028-05	E03(ろくまるさん)の				
1	1	1	1	1	1							289	028-06	教室で				
1	1	1	1	1	1							290	028-07	インタビュー多します」				
1	1	1	1	1	1							291	029-01	それから	それから			
1	1	1	1	1	1							292	029-02	それから				
1	1	1	1	1	1							293	029-03	それ以外				
1	1	1	1	1	1							294	029-04	待機の方				
1	1	1	1	1	1							295	029-05	その				
1	1	1	1	1	1							296	029-06	要するに		要するに		
1	1	1	1	1	1							297	029-07	13番とか				
1	1	1	1	1	1							298	029-08	2番				
1	1	1	1	1	1							299	029-09	要するに		要するに		
1	1	1	1	1	1							300	029-10	最初の2人の				
1	1	1	1	1	1							301	029-11	か				
1	1	1	1	1	1							302	029-12	1人の				
1	1	1	1	1	1							303	029-13	入か				
1	1	1	1	1	1							304	029-14	インタビュー多して				
1	1	1	1	1	1							305	029-15	あの番長の人か				
1	1	1	1	1	1							306	029-16	その				
1	1	1	1	1	1							307	029-17	前で				
1	1	1	1	1	1							308	029-18	待機				
1	1	1	1	1	1							309	029-19	そして	そして			
1	1	1	1	1	1							310	029-20	その				
1	1	1	1	1	1							311	029-21	残りの人たちが				
1	1	1	1	1	1							312	029-22	教室で				
1	1	1	1	1	1							313	029-23	待つという				
1	1	1	1	1	1							314	029-24	格好は				
1	1	1	1	1	1							315	029-25	なっています」				
1	1	1	1	1	1							316	030-01	その				
1	1	1	1	1	1							317	030-02	エッセー				
1	1	1	1	1	1							318	030-03	待機場所がですね				
1	1	1	1	1	1							319	030-04	目録の場合に				
1	1	1	1	1	1							320	030-05	E01(ろくまるさん)に				
1	1	1	1	1	1							321	030-06	2のます」				
1	1	1	1	1	1							322	031-01	それから	それから			
1	1	1	1	1	1							323	031-02	エッセー				
1	1	1	1	1	1							324	031-03	3番ですけれども				
1	1	1	1	1	1							325	031-04	エッセー				
1	1	1	1	1	1							326	031-05	6冊の方を				
1	1	1	1	1	1							327	031-06	インタビュー多して				
1	1	1	1	1	1							328	031-07	エッセー				
1	1	1	1	1	1							329	031-08	地下1階の				
1	1	1	1	1	1							330	031-09	エッセー				
1	1	1	1	1	1							331	031-10	104(いちまるさん)に				
1	1	1	1	1	1							332	031-11	そして	そして			
1	1	1	1	1	1							333	031-12	その				
1	1	1	1	1	1							334	031-13	目録の方はですね				
1	1	1	1	1	1							335	031-14	この				
1	1	1	1	1	1							336	031-15	地下1階の				
1	1	1	1	1	1							337	031-16	108(いちまるさん)に				
1	1	1	1	1	1							338	031-17	2のます」				
1	1	1	1	1	1							339	032-01	で	で			
1	1	1	1	1	1							340	032-02	待機場所は				
1	1	1	1	1	1							341	032-03	エッセー				
1	1	1	1	1	1							342	032-04	この				
1	1	1	1	1	1							343	032-05	教室				
1	1	1	1	1	1							344	032-06	エッセー				
1	1	1	1	1	1							345	032-07	104(いちまるさん)に				
1	1	1	1	1	1							346	032-08	2のます」				
1	1	1	1	1	1							347	033-01	そして	そして			
1	1	1	1	1	1							348	033-02	エッセー				
1	1	1	1	1	1							349	033-03	それから	それから			
1	1	1	1	1	1							350	033-04	3番ですけれども				
1	1	1	1	1	1							351	033-05	目録は				
1	1	1	1	1	1							352	033-06	ちょっと				
1	1	1	1	1	1							353	033-07	その				
1	1	1	1	1	1							354	033-08	客観的な				
1	1	1	1	1	1							355	033-09	形は				
1	1	1	1	1	1							356	033-10	2のます」				
1	1	1	1	1	1							357	034-01	で	で			
1	1	1	1	1	1							358	034-02	ます				
1	1	1	1	1	1							359	034-03	エッセー				
1	1	1	1	1	1							360	034-04	この				
1	1	1	1	1	1							361	034-05	104(いちまるさん)教室ですね				
1	1	1	1	1	1							362	034-06	アンケートは				
1	1	1	1	1	1							363	034-07	書いて				
1	1	1	1	1	1							364	034-08	提出してから				
1	1	1	1	1	1							365	034-09	順番に				
1	1	1	1	1	1							366	034-10	行き				
1	1	1	1	1	1							367	034-11	出す				
1	1	1	1	1	1							368	034-12	104(いちまるさん)に				
1	1	1	1	1	1							369	034-13	この				
1	1	1	1	1	1							370	034-14	104(いちまるさん)の前の				
1	1	1	1	1	1							371	034-15	受付に				
1	1	1	1	1	1							372	034-16	読んでみてください」				
1	1	1	1	1	1							373	035-01	そして	そして			
1	1	1	1	1	1							374	035-02	エッセー				
1	1	1	1	1	1							375	035-03	その後[あと]ですね		その後[あと]で		
1	1	1	1	1	1							376	035-04	エッセー				
1	1	1	1	1	1							377	035-05	陳の人の指示に				
1	1	1	1	1	1							378	035-06	待って				
1	1	1	1	1	1							379	035-07	それから				
1	1	1	1	1	1							380	035-08	教室で				
1	1	1	1	1	1							381	035-09	インタビュー多				
1	1	1	1	1	1							382	035-10	受けてください」				
1	1	1	1	1	1							383	036-01	で	で			
1	1	1	1	1	1							384	036-02	アンケートが				
1	1	1	1	1	1							385	036-03	終わったか				
1	1	1	1	1	1							386	036-04	出す				
1	1	1	1	1	1							387	036-05	エッセー				
1	1	1	1	1	1							388	036-06	それぞれの方				
1	1	1	1	1	1							389	036-07	エッセー				
1	1	1	1	1	1							390	036-08	陳の人は				
1	1	1	1	1	1							391	036-09	目録(アンケート)				
1	1	1	1	1	1							392	036-10	エッセー				
1	1	1	1	1	1							393	036-11	返却してください」				
1	1	1	1	1	1							394	037-01	それから	それから			
1	1	1	1	1	1							395	037-02	エッセー				
1	1	1	1	1	1							396	037-03	目録				
1	1	1	1	1	1							397	037-04	12時5分から				
1	1	1	1	1	1							398	037-05	12時1				

語彙					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	語彙表現		1/2		1/3の 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
1	2	2.1	2.1.1							719	069-02	あの					
1	2	2.1	2.1.1							720	069-03	そこで					
1	2	2.1	2.1.1							721	069-04	内容が					
1	2	2.1	2.1.1							722	069-05	かぶってはいけませんので、					
1	2	2.1	2.1.1							723	069-06	今日は					
1	2	2.1	2.1.1							724	069-07	遅延					
1	2	2.1	2.1.1							725	069-08	あの					
1	2	2.1	2.1.1							726	069-09	話さない					
1	2	2.1	2.1.1							727	069-10	話を					
1	2	2.1	2.1.1							728	069-11	したいと					
1	2	2.1	2.1.1							729	069-12	思っています」					
1	2	2.1	2.1.1							730	070-01	話					
1	2	2.1	2.1.1							731	070-02	話の存在は					
1	2	2.1	2.1.1							732	070-03	初めましてという事になると					
1	2	2.1	2.1.1							733	070-04	思っています」					
1	2	2.1	2.1.2							734	071-01	で、					
1	2	2.1	2.1.2							735	071-02	私自身の専門はですね、					
1	2	2.1	2.1.2							736	071-03	です。					
1	2	2.1	2.1.2							737	071-04	日本語です」					
1	2	2.1	2.1.2							738	072-01	現代の日本語で					
1	2	2.1	2.1.2							739	072-02	まあ、					
1	2	2.1	2.1.2							740	072-03	文章、英語といふもの多					
1	2	2.1	2.1.2							741	072-04	専門に					
1	2	2.1	2.1.2							742	072-05	ていまして」					
1	2	2.2	2.2							743	073-01	でも、					
1	2	2.2	2.2							744	073-02	今日は					
1	2	2.2	2.2							745	073-03	あえて、					
1	2	2.2	2.2							746	073-04	話の					
1	2	2.2	2.2							747	073-05	専門外の話、多					
1	2	2.2	2.2							748	073-06	したいと					
1	2	2.2	2.2							749	073-07	思っています」					
1	2	2.2	2.2							750	074-01	それが					
1	2	2.2	2.2							751	074-02	えっと、					
1	2	2.2	2.2							752	074-03	日本語の人称表現です」					
1	2	2.2	2.2							753	075-01	まあ、					
1	2	2.2	2.2							754	075-02	人称表現って					
1	2	2.2	2.2							755	075-03	言われると、					
1	2	2.2	2.2							756	075-04	えっ、					
1	2	2.2	2.2							757	075-05	何だろうと					
1	2	2.2	2.2							758	075-06	思いかも、しれませんけれど、					
1	2	2.2	2.2							759	075-07	まあ、					
1	2	2.2	2.2							760	075-08	簡単に					
1	2	2.2	2.2							761	075-09	言ってしまうと、					
1	2	2.2	2.2							762	075-10	「私、とか、					
1	2	2.2	2.2							763	075-11	「あなた、とか、					
1	2	2.2	2.2							764	075-12	あるいは					
1	2	2.2	2.2							765	075-13	「僕、					
1	2	2.2	2.2							766	075-14	「彼女、といったようなものが					
1	2	2.2	2.2							767	075-15	ま、					
1	2	2.2	2.2							768	075-16	人称表現に					
1	2	2.2	2.2							769	075-17	当たります」					
1	2	2.2	2.2							770	076-01	難しい、とは					
1	2	2.2	2.2							771	076-02	授業の中で、					
1	2	2.2	2.2							772	076-03	で、					
1	2	2.2	2.2							773	076-04	お話ししますので、					
1	2	2.2	2.2							774	076-05	また、					
1	2	2.2	2.2							775	076-06	皆さんにも					
1	2	2.2	2.2							776	076-07	関心があります、					
1	2	2.2	2.2							777	076-08	と、					
1	2	2.2	2.2							778	076-09	あるかも知れません」					
1	2	2.2	2.2							779	077-01	当てますのでね、					
1	2	2.2	2.2							780	078-01	あの					
1	2	2.2	2.2							781	078-02	今後の授業も					
1	2	2.2	2.2							782	078-03	は、ですけれども、					
1	2	2.2	2.2							783	078-04	あの					
1	2	2.2	2.2							784	078-05	皆さんに					
1	2	2.2	2.2							785	078-06	推して					
1	2	2.2	2.2							786	078-07	言って					
1	2	2.2	2.2							787	078-08	当てることがありますから、					
1	2	2.2	2.2							788	078-09	あの					
1	2	2.2	2.2							789	078-10	「おっと					
1	2	2.2	2.2							790	078-11	その時は、					
1	2	2.2	2.2							791	078-12	あの					
1	2	2.2	2.2							792	078-13	マイクを					
1	2	2.2	2.2							793	078-14	持った					
1	2	2.2	2.2							794	078-15	「おっと					
1	2	2.2	2.2							795	078-16	言っても、					
1	2	2.2	2.2							796	078-17	緊張しないで					
1	2	2.2	2.2							797	078-18	お答えくださいという事です」					
1	2	2.4	2.4.1							798	079-01	それで、					
1	2	2.4	2.4.1							799	079-02	えっと、					
1	2	2.4	2.4.1							800	079-03	「おっと					
1	2	2.4	2.4.1							801	079-04	私の専門はですね、					
1	2	2.4	2.4.1							802	079-05	えっと、					
1	2	2.4	2.4.1							803	079-06	文章、英語といふもの多					
1	2	2.4	2.4.1							804	079-07	押し上げましたけれども、					
1	2	2.4	2.4.1							805	079-08	今日の、					
1	2	2.4	2.4.1							806	079-09	えっと、					
1	2	2.4	2.4.1							807	079-10	テーマはですね					
1	2	2.4	2.4.1							808	079-11	社会言語学といふものです」					
1	2	2.4	2.4.1							809	080-01	で、					
1	2	2.4	2.4.1							810	080-02	社会言語学って					
1	2	2.4	2.4.1							811	080-03	何かあるかどうかに					
1	2	2.4	2.4.1							812	080-04	思われるかが					
1	2	2.4	2.4.1							813	080-05	多いだろうと					
1	2	2.4	2.4.1							814	080-06	思っています」					
1	2	2.4	2.4.1							815	081-01	そもそも、					
1	2	2.4	2.4.1							816	081-02	社会学って					
1	2	2.4	2.4.1							817	081-03	何かだよ					
1	2	2.4	2.4.1							818	081-04	「私自身					
1	2	2.4	2.4.1							819	081-05	ずっと					
1	2	2.4	2.4.1							820	081-06	思っていました」					
1	2	2.4	2.4.1							821	082-01	というのは、					
1	2	2.4	2.4.1							822	082-02	「私、					
1	2	2.4	2.4.1							823	082-03	「その一					
1	2	2.4	2.4.1							824	082-04	えっと、					
1	2	2.4	2.4.1							825	082-05	学部は					
1	2	2.4	2.4.1							826	082-06	「一様で、					
1	2	2.4	2.4.1							827	082-07	そして					
1	2	2.4	2.4.1							828	082-08	「社会学は					
1	2	2.4	2.4.1							829	082-09	「言語学					
1	2	2.4	2.4.1							830	082-10	で、					
1	2	2.4	2.4.1							831	082-11	「助成金は					
1	2	2.4	2.4.1							832	082-12	また、					
1	2	2.4	2.4.1							833	082-13	「一様に					
1	2	2.4	2.4.1	</													

話数					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		7/8		1/8の 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
1	2	2.4	2.4	2.4						1007	097-07	強備					
1	2	2.4	2.4	2.4						1008	097-08	女性					
1	2	2.4	2.4	2.4						1009	097-09	前(おんな)しような					
1	2	2.4	2.4	2.4						1010	097-10	薄味を					
1	2	2.4	2.4	2.4						1011	097-11	持っただけれども				○	前提
1	2	2.4	2.4	2.4						1012	097-12	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1013	097-13	つまり	つまり				
1	2	2.4	2.4	2.4						1014	097-14	あの					
1	2	2.4	2.4	2.4						1015	097-15	いくつかの					
1	2	2.4	2.4	2.4						1016	097-16	表現の					
1	2	2.4	2.4	2.4						1017	097-17	権限の					
1	2	2.4	2.4	2.4						1018	097-18	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1019	097-19	置っているわけですけれども					
1	2	2.4	2.4	2.4						1020	097-20	そういう					
1	2	2.4	2.4	2.4						1021	097-21	権限が					
1	2	2.4	2.4	2.4						1022	097-22	「存分ですよ」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1023	098-01	「おーん」	おーん				
1	2	2.4	2.4	2.4						1024	098-02	例えば	例えば				
1	2	2.4	2.4	2.4						1025	098-03	私が					
1	2	2.4	2.4	2.4						1026	098-04	このように					
1	2	2.4	2.4	2.4						1027	098-05	今日は					
1	2	2.4	2.4	2.4						1028	098-06	撮影されているような					
1	2	2.4	2.4	2.4						1029	098-07	政府ですわね					
1	2	2.4	2.4	2.4						1030	098-08	整理しているから					
1	2	2.4	2.4	2.4						1031	098-09	まず					
1	2	2.4	2.4	2.4						1032	098-10	「朝飯」は					
1	2	2.4	2.4	2.4						1033	098-11	言わないだろうよ				○	見解
1	2	2.4	2.4	2.4						1034	098-12	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1035	099-01	そういう時は					
1	2	2.4	2.4	2.4						1036	099-02	あの					
1	2	2.4	2.4	2.4						1037	099-03	「朝飯」と					
1	2	2.4	2.4	2.4						1038	099-04	ちょっと					
1	2	2.4	2.4	2.4						1039	099-05	詳しい					
1	2	2.4	2.4	2.4						1040	099-06	言葉を					
1	2	2.4	2.4	2.4						1041	099-07	使ってみたくて					
1	2	2.4	2.4	2.4						1042	100-01	で	で				
1	2	2.4	2.4	2.4						1043	100-02	「朝飯」というと					
1	2	2.4	2.4	2.4						1044	100-03	「朝飯」を					
1	2	2.4	2.4	2.4						1045	100-04	「朝飯」という					
1	2	2.4	2.4	2.4						1046	100-05	ちょっと					
1	2	2.4	2.4	2.4						1047	100-06	詳しい					
1	2	2.4	2.4	2.4						1048	100-07	朝飯をわけて					
1	2	2.4	2.4	2.4						1049	100-08	使いたくありませんわね					
1	2	2.4	2.4	2.4						1050	101-01	「朝飯」だから					
1	2	2.4	2.4	2.4						1051	101-02	使うものなんですよ				○	見解
1	2	2.4	2.4	2.4						1052	101-03	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1053	102-01	で	で				
1	2	2.4	2.4	2.4						1054	102-02	「朝飯」だから					
1	2	2.4	2.4	2.4						1055	102-03	食べますよ					
1	2	2.4	2.4	2.4						1056	103-01	じゃあ	じゃあ				
1	2	2.4	2.4	2.4						1057	103-02	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1058	103-03	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1059	103-04	その					
1	2	2.4	2.4	2.4						1060	103-05	言葉自体は					
1	2	2.4	2.4	2.4						1061	103-06	ここに					
1	2	2.4	2.4	2.4						1062	103-07	いる					
1	2	2.4	2.4	2.4						1063	103-08	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1064	103-09	「朝飯」で済ませようなんですけれども				○	前提見解
1	2	2.4	2.4	2.4						1065	103-10	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1066	103-11	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1067	103-12	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1068	103-13	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1069	103-14	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1070	103-15	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1071	103-16	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1072	103-17	「おーん」	おーん				
1	2	2.4	2.4	2.4						1073	103-18	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1074	103-19	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1075	103-20	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1076	103-21	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1077	103-22	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1078	103-23	あるわけだけれども					
1	2	2.4	2.4	2.4						1079	103-24	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1080	103-25	自分					
1	2	2.4	2.4	2.4						1081	103-26	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1082	103-27	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1083	104-01	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1084	104-02	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1085	104-03	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1086	105-01	「おーん」	おーん				
1	2	2.4	2.4	2.4						1087	105-02	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1088	105-03	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1089	105-04	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1090	105-05	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1091	105-06	「おーん」				○	前提
1	2	2.4	2.4	2.4						1092	105-07	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1093	105-08	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1094	105-09	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1095	105-10	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1096	105-11	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1097	105-12	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1098	105-13	「おーん」	おーん				
1	2	2.4	2.4	2.4						1099	105-14	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1100	105-15	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1101	105-16	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1102	105-17	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1103	105-18	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1104	105-19	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1105	105-20	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1106	105-21	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1107	106-02	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1108	106-03	「おーん」	おーん				
1	2	2.4	2.4	2.4						1109	106-04	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1110	106-05	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1111	106-06	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1112	106-07	「朝飯」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1113	106-08	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1114	106-09	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1115	107-01	「おーん」					
1	2	2.4	2.4	2.4						1116	107-02	「おーん」			</		

話数					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	確認表現		1/2		1/3の 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.3						○	1295	123-03	何でしょう				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.3						○	1296	123-10	子ちゃん				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.3						○	1297	123-11	キャラクターみたいなのが				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.3						○	1298	123-12	あって				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.3						○	1299	123-13	それに反して				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.3						○	1300	123-14	その				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.3						○	1301	123-15	人の				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.3						○	1302	123-16	選ぶ				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.3						○	1303	123-17	言葉が				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.3						○	1304	123-18	決まるというところが				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.3						○	1305	123-19	一つ				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.3						○	1306	123-20	あのまま				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1307	124-01	それから	それから			
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1308	124-02	そっと				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1309	124-03	離れ手の				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1310	124-04	関係という				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1311	124-05	ほぼど				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1312	124-06	出すまじければ				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1313	124-07	あの				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1314	124-08	たとえ	たとえ			
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1315	124-09	このように				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1316	124-10	私がですね				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1317	124-11	そっと				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1318	124-12	人				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1319	124-13	あの				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1320	124-14	壇上				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1321	124-15	立って				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1322	124-16	あの				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1323	124-17	その				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1324	124-18	自分から				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1325	124-19	50名の方を				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1326	124-20	前にして				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1327	124-21	話を				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1328	124-22	する時				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1329	124-23	それから	それから			
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1330	124-24	の(後)あとですね				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1331	124-25	どなたか				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1332	124-26	質問に				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1333	124-27	いまして				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1334	124-28	第一で				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1335	124-29	する時までは				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1336	124-30	当然				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1337	124-31	話し方が				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1338	124-32	変わります」				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1339	125-01	そして	そして			
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1340	125-02	また	また			
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1341	125-03	あの				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1342	125-04	たとえ	たとえ			
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1343	125-05	この(後)あとですね				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1344	125-06	あの				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1345	125-07	親しい				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1346	125-08	交際に				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1347	125-09	念って				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1348	125-10	話を				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1349	125-11	しかりか				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1350	125-12	あるいは	あるいは			
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1351	125-13	段「うち」へ				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1352	125-14	聞かせてですね				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1353	125-15	言葉を				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1354	125-16	言葉をしたり				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1355	125-17	する時				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1356	125-18	その時				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1357	125-19	また	また			
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1358	125-20	あの				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1359	125-21	言葉が				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1360	125-22	変わるだろう				
1	2	2.4	2.4.3	2.4.3.4						○	1361	125-23	思うわけです」				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.1						○	1362	126-01	で	で			
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.1						○	1363	126-02	三つ自分でできれば				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.1						○	1364	126-03	あの				前住(前編)
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.1						○	1365	126-04	で				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.1						○	1366	126-05	大切なことは				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.1						○	1367	126-06	言葉は				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.1						○	1368	126-07	感化するということです」				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1369	127-01	で	で			
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1370	127-02	もちろん				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1371	127-03	その				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1372	127-04	自分自身としてはですね				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1373	127-05	あの				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1374	127-06	前と人				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1375	127-07	自由に				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1376	127-08	言葉を				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1377	127-09	選んでいるつもりかしら、おまげんければ				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1378	127-10	たとえ	たとえ			
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1379	127-11	その				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1380	127-12	自分は				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1381	127-13	自分から				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1382	127-14	あの				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1383	127-15	「あたしよ				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1384	127-16	いね				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1385	127-17	言わないで				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1386	127-18	「ほくど				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1387	127-19	「どうにか」がありがとうございます				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1388	128-01	「おれど	そうすると			
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1389	128-02	男という				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1390	128-03	悪性を				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1391	128-04	持っている				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1392	128-05	入は				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1393	128-06	ほんま				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1394	128-07	「前住(前編)のように				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1395	128-08	あの				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1396	128-09	「あたしよ				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1397	128-10	「おれど				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						○	1398	128-11	「ほくど				

語彙					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	語彙表現		17		17の 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
2	2.4	2.4.4	2.4.4.2							1439	133-07	本文未だいろいろなこと					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1440	133-08	あるわけですよ。」					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1441	134-01	それとか					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1442	134-02	あの					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1443	134-03	あんまり					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1444	134-04	親しくない					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1445	134-05	人とは					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1446	134-06	言葉に					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1447	134-07	話しかければいい					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1448	134-08	あのー					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1449	134-09	え					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1450	134-10	親しい					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1451	134-11	人とはですね					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1452	134-12	本当に					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1453	134-13	フランスに					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1454	134-14	話すというふうなことがあります。」					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1455	135-01	それについて					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1456	135-02	個人生活					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1458	135-04	法則に則していることではあるんですけども				○	前提
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1459	135-05	どうした					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1460	135-06	音義というものは					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1461	135-07	社会的に					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1462	135-08	社会で使われていますね」					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1463	135-01	ですから	ですから				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1464	135-02	あのー					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1465	135-03	それがですね					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1466	135-04	日本語の性格というふうに					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1467	135-05	呼ばれるようになるのは					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1468	135-06	その					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1469	135-07	敗者というものが				たとえば	
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1470	135-08	そう					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1471	135-09	呼ばれるようになるのは					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1472	135-10	その					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1473	135-11	その					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1474	135-12	日本語を					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1475	135-13	話す					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1476	135-14	人生活がですね					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1477	135-15	そういうふうな					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1478	135-16	自己					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1479	135-17	目下とか					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1480	135-18	あるいは	あるいは				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1481	135-19	親しい					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1482	135-20	距離であるということに基づいて					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1483	135-21	目下の人に対して					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1484	135-22	あるいは	あるいは				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1485	135-23	敗者					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1486	135-24	人に対しては					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1487	135-25	言葉な					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1488	135-26	形を					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1489	135-27	目下の人に対して					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1490	135-28	あるいは	あるいは				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1491	135-29	その					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1492	135-30	近い					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1493	135-31	人に対しては					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1494	135-32	あの					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1495	135-33	カジュアルな					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1496	135-34	形を					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1497	135-35	概念」					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1498	137-01	そういうことよ					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1499	137-02	していることに基づいてですね					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1500	137-03	そつと					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1501	137-04	その					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1502	137-05	言葉というものは					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.2						1503	137-06	話をつたえてくるよ					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1504	138-01	で	で				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1505	138-02	その					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1506	138-03	そつと					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1507	138-04	音義というものは					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1508	138-05	敗者					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1509	138-06	話に					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1510	138-07	使わってきます。」					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1511	139-01	その					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1512	139-02	1人1人が					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1513	139-03	言葉					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1514	139-04	話をして行くことよ					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1515	139-05	裏は	裏は				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1516	139-06	それがですね					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1517	139-07	言葉ってのは					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1518	139-08	面白いもので					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1519	139-09	ねえんですよ。」					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1520	140-01	あのー					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1521	140-02	ある					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1522	140-03	友達の白痴が					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1523	140-04	移ったなんていう					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1524	140-05	入は					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1525	140-06	結構					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1526	140-07	それと					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1527	140-08	思いますけども					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1528	140-09	裏は	裏は				
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1529	140-10	敗者生活にですね					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1530	140-11	周りの					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1531	140-12	さー					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1532	140-13	あのー					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1533	140-14	どういうふう					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1534	140-15	構っているかというところがですね					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1535	140-16	影響されて					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1536	140-17	あの					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1537	140-18	目下とか					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1538	140-19	構ってたりになります。」					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1539	141-01	まあ					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1540	141-02	そう					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1541	141-03	あの					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1542	141-04	そつと					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1543	141-05	敗者でなければ					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1544	141-06	あのー					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3													

語彙					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	語彙表現		1/2		1/3の 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1583	145-13	「度々驚いていう					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1584	145-14	言い方					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1585	145-15	あんまり					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1586	145-16	なんか					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1587	145-17	ちょっと					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1588	145-18	その					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1589	145-19	押さない					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1590	145-20	言葉だったと					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1591	145-21	思っていますね」				○	前提
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1592	146-01	ところが、					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1593	146-02	と、					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1594	146-03	会話中では、					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1595	146-04	あの					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1596	146-05	「彼」について					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1597	146-06	使っている					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1598	146-07	入。					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1599	146-08	結構					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1600	146-09	「あなた」を「あなた」と				○	見解
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1601	146-10	思います。					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1602	147-01	「あなた」に					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1603	147-02	次第に					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1604	147-03	その					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1605	147-04	言葉というの、					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1606	147-05	使っている					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1607	147-06	使っているよ					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1608	147-07	あの。					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1609	147-08	自分でも					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1610	147-09	「何かが」になっていくということがあるので					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1611	147-10	それが、					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1612	147-11	あの。					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1613	147-12	もちろん					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1614	147-13	時限に燃える					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1615	147-14	言葉					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1616	147-15	そして、					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1617	147-16	また					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1618	147-17	「で」に					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1619	147-18	その。					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1620	147-19	指ささってしゅう					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1621	147-20	言葉					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1622	147-21	「い」が					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1623	147-22	あとと					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1624	147-23	思えますけれども					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1625	147-24	まあ、					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1626	147-25	そうですね					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1627	147-26	あの。					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1628	147-27	スット					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1629	147-28	その					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1630	147-29	面での話					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1631	147-30	生物学における					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1632	147-31	あの。					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1633	147-32	自然療法					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1634	147-33	「は」					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1635	147-34	自然療法というの、					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1636	147-35	あの					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1637	147-36	のようですね					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1638	147-37	知らぬ間に「ま」ですね					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1639	147-38	その					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1640	147-39	まあ、					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1641	147-40	「は」					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1642	147-41	ある					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1643	147-42	新しい					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1644	147-43	言葉が					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1645	147-44	で、					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1646	147-45	できてきて、					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1647	147-46	その					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1648	147-47	スー					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1649	147-48	それが					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1650	147-49	増強に					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1651	147-50	増強は					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1652	147-51	「は」					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1653	147-52	増強に					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1654	147-53	合わなければ、					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1655	147-54	あ					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1656	147-55	なくなっていくという					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1657	147-56	「あなた」					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1658	147-57	できてきて、					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1659	147-58	「は」					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1660	147-59	この					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1661	147-60	スット					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1662	147-61	「スリーション」が					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1663	147-62	あの					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1664	147-63	「増強であるという」ことが					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1665	147-64	その					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1666	147-65	社会で					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1667	147-66	広く					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1668	147-67	共有されていくよ					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1669	147-68	「社会全体の言語の操作に					
1	2	2.4	2.4.4	2.4.4.3						1670	148-01	「は」					
1	3	3.1	3.1.1							1671	148-01	で、					
1	3	3.1	3.1.1							1672	148-02	スット					
1	3	3.1	3.1.1							1673	148-03	まで、					
1	3	3.1	3.1.1							1674	148-04	それと、					
1	3	3.1	3.1.1							1675	148-05	あの					
1	3	3.1	3.1.1							1676	148-06	「人権表現が					
1	3	3.1	3.1.1							1677	148-07	どう					
1	3	3.1	3.1.1							1678	148-08	聞かぬか、					
1	3	3.1	3.1.2							1679	149-01	で、					
1	3	3.1	3.1.2							1680	149-02	まあ、					
1	3	3.1	3.1.2							1681	149-03	「ま」はですね					
1	3	3.1	3.1.2							1682	149-04	「は」の					
1	3	3.1	3.1.2							1683	149-05	「一自」の、					
1	3	3.1	3.1.2							1684	149-06	あのー					
1	3	3.1	3.1.2							1685	149-07	増強して、					
1	3	3.1	3.1.2							1686	149-08	まあ、					
1	3	3.1	3.1.2							1687	149-09	「第一」の「つ」の、					
1	3	3.1	3.1.2							1688	149-10	まあ、まあ					
1	3	3.1	3.1.2							1689	149-11	「アル」ではありますけれども、				</	

語彙						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	語彙表現		1/2	1/3の 統括機能		
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤			文中	文末	文中	文末		
1	3	1	3.1.3.1.4									1727	151-06	人称表現というのは、				
1	3	1	3.1.3.1.4									1728	151-07	ま				
1	3	1	3.1.3.1.4									1729	151-08	簡単に				
1	3	1	3.1.3.1.4									1730	151-09	言ってしまおう。				
1	3	1	3.1.3.1.4									1731	151-10	人多				
1	3	1	3.1.3.1.4									1732	151-11	話す時に				
1	3	1	3.1.3.1.4									1733	151-12	僕が				
1	3	1	3.1.3.1.4									1734	151-13	音楽であるということで、				
1	3	1	3.1.3.1.4									1735	151-14	典型的には				
1	3	1	3.1.3.1.4									1736	151-15	日本語の「私」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1737	151-16	英語の「I」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1738	151-17	「I」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1739	151-18	「I」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1740	151-19	日本語の「あなた」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1741	151-20	英語の「you」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1742	151-21	まあ				
1	3	1	3.1.3.1.4									1743	151-22	日本人で言えば、				
1	3	1	3.1.3.1.4									1744	151-23	日本語の				
1	3	1	3.1.3.1.4									1745	151-24	「僕」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1746	151-25	「彼女」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1747	151-26	英語の				
1	3	1	3.1.3.1.4									1748	151-27	「He」か				
1	3	1	3.1.3.1.4									1749	151-28	「she」のようなのですね。」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1750	152-01	「I」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1751	152-02	「I」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1752	152-03	「I」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1753	152-04	「I」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1754	152-05	「I」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1755	152-06	「I」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1756	152-07	「I」				
1	3	1	3.1.3.1.4									1757	152-08	整理されることが				
1	3	1	3.1.3.1.4									1758	152-09	多いだろうと				
1	3	1	3.1.3.1.4									1759	152-10	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1760	153-01	さて、				
1	3	1	3.2.3.2.1									1761	153-02	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1762	153-03	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1763	153-04	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1764	153-05	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1765	153-06	日本語の人称表現の種類って				
1	3	1	3.2.3.2.1									1766	153-07	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1767	153-08	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1768	154-01	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1769	154-02	たとえば、				
1	3	1	3.2.3.2.1									1770	154-03	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1771	154-04	留学生の方の場合は、				
1	3	1	3.2.3.2.1									1772	154-05	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1773	154-06	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1774	154-07	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1775	154-08	日本語の人称表現は				
1	3	1	3.2.3.2.1									1776	154-09	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1777	154-10	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1778	154-11	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1779	154-12	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1780	154-13	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1781	155-01	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1782	155-02	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1783	155-03	日本人学生の場合で言うと、				
1	3	1	3.2.3.2.1									1784	155-04	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1785	155-05	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1786	155-06	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1787	155-07	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1788	155-08	日本語の人称表現の使い方について				
1	3	1	3.2.3.2.1									1789	155-09	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1790	155-10	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1791	155-11	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1792	155-12	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1793	155-13	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1794	155-14	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1795	155-15	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1796	155-16	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1797	155-17	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1798	155-18	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1799	155-19	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1800	155-20	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1801	156-01	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1802	156-02	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1803	156-03	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1804	156-04	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1805	156-05	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1806	156-06	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1807	157-01	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1808	157-02	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1809	157-03	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1810	157-04	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1811	157-05	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1812	157-06	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1813	157-07	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1814	157-08	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1815	157-09	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1816	157-10	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1817	157-11	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1818	157-12	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1819	158-01	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1820	158-02	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1821	159-01	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1822	159-02	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1823	159-03	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1824	160-01	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1825	160-02	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1826	160-03	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1827	160-04	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1828	161-01	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1829	161-02	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1830	161-03	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1831	161-04	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1832	161-05	「I」				
1	3	1	3.2.3.2.1									1833	162-01	「I」				

語彙						中心文						通し 番号	CU番号	X単位	語彙表現		1/2		1/3の 統括機能
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	文中				文末	文中	文末		
3.7.3.2.5											2015	188-06	後ろの列の。						
3.7.3.2.5											2016	188-07	その。						
3.7.3.2.5											2017	188-08	真ん中の方ですね。						
3.7.3.2.5											2018	188-09	白い。						
3.7.3.2.5											2019	188-10	シャツタ。						
3.7.3.2.5											2020	188-11	驚かす。						
3.7.3.2.5											2021	188-12	はい(6)						
3.7.3.2.5											2022	189-01	ロー。						
3.7.3.2.5											2023	189-02	何だろうなあ。(9)						
3.7.3.2.5											2024	189-03	え。						
3.7.3.2.5											2025	189-04	ロー。						
3.7.3.2.5											2026	189-05	自分の個性を。						
3.7.3.2.5											2027	189-06	出せる状況の方に。						
3.7.3.2.5											2028	189-07	思います。」						
3.7.3.2.5											2029	190-01	ロー。						
3.7.3.2.5											2030	190-02	たとえげ。						
3.7.3.2.5											2031	190-03	ロー。						
3.7.3.2.5											2032	190-04	何だろうなあ。						
3.7.3.2.5											2033	190-05	私っていろいろは。						
3.7.3.2.5											2034	190-06	たとえげ。						
3.7.3.2.5											2035	190-07	ロー。						
3.7.3.2.5											2036	190-08	敬語っぽい。						
3.7.3.2.5											2037	190-09	ホカワ。						
3.7.3.2.5											2038	190-10	心算な。						
3.7.3.2.5											2039	190-11	場での。						
3.7.3.2.5											2040	190-12	1人旅ですし。						
3.7.3.2.5											2041	190-13	たとえげ。						
3.7.3.2.5											2042	190-14	「ほくす」なら。						
3.7.3.2.5											2043	190-15	ロー。						
3.7.3.2.5											2044	190-16	敬語と。						
3.7.3.2.5											2045	190-17	話す時は。						
3.7.3.2.5											2046	190-18	「おれっていろいろな。						
3.7.3.2.5											2047	190-19	人旅を。						
3.7.3.2.5											2048	190-20	使いますし。						
3.7.3.2.5											2049	190-21	心算と。						
3.7.3.2.5											2050	190-22	話す時は。						
3.7.3.2.5											2051	190-23	敬語であっても。						
3.7.3.2.5											2052	190-24	もう少し。						
3.7.3.2.5											2053	190-25	ロー。						
3.7.3.2.5											2054	190-26	無い/みさ。						
3.7.3.2.5											2055	190-27	出したい時。						
3.7.3.2.5											2056	190-28	あるいは。						
3.7.3.2.5											2057	190-29	ロー。						
3.7.3.2.5											2058	190-30	少し。						
3.7.3.2.5											2059	190-31	ビジネスチェックな。						
3.7.3.2.5											2060	190-32	書きであれば。						
3.7.3.2.5											2061	190-33	「ほくく」ってなまな。						
3.7.3.2.5											2062	190-34	形と。						
3.7.3.2.5											2063	190-35	意識的に。						
3.7.3.2.5											2064	190-36	もう。						
3.7.3.2.5											2065	190-37	少し。						
3.7.3.2.5											2066	190-38	ロー。						
3.7.3.2.5											2067	190-39	敬語を。						
3.7.3.2.5											2068	190-40	避けてみますし。						
3.7.3.2.5											2069	190-41	あるいは。						
3.7.3.2.5											2070	190-42	そうですね。						
3.7.3.2.5											2071	190-43	漫画や。						
3.7.3.2.5											2072	190-44	ホカワと。						
3.7.3.2.5											2073	190-45	なまなと。						
3.7.3.2.5											2074	190-46	たとえげ。						
3.7.3.2.5											2075	190-47	「おれ」が。						
3.7.3.2.5											2076	190-48	「わし」が。						
3.7.3.2.5											2077	190-49	いろいろな。						
3.7.3.2.5											2078	190-50	1人旅が。						
3.7.3.2.5											2079	190-51	「ほく」。						
3.7.3.2.5											2080	190-52	それによって。						
3.7.3.2.5											2081	190-53	その。						
3.7.3.2.5											2082	190-54	人の。						
3.7.3.2.5											2083	190-55	性格だったり。						
3.7.3.2.5											2084	190-56	性格だったりっていうのが。						
3.7.3.2.5											2085	190-57	性格の。						
3.7.3.2.5											2086	190-58	面白いなあ。						
3.7.3.2.5											2087	190-59	使っています。」						
3.7.3.2.5											2088	191-01	はい。						
3.7.3.2.5											2089	191-02	ありがとうございます。」						
3.7.3.2.5											2090	191-03	なんか。						
3.7.3.2.5											2091	191-04	ホカワ。						
3.7.3.2.5											2092	191-05	あの。						
3.7.3.2.5											2093	191-06	今日の講義の内容を。						
3.7.3.2.5											2094	191-07	忘取らなくてよろしくな。						
3.7.3.2.5											2095	191-08	感じてくださいね。」						
3.7.3.2.5											2096	191-09	なん。						
3.7.3.2.5											2097	191-10	その通りなんですわ。」						○ 熟前指
3.7.3.2.5											2098	193-01	とても。						
3.7.3.2.5											2099	193-02	あの。						
3.7.3.2.5											2100	193-03	いい。						
3.7.3.2.5											2101	193-04	敬語が。						
3.7.3.2.5											2102	193-05	「使います。」						
3.7.3.2.5											2103	194-01	個性が。						
3.7.3.2.5											2104	194-02	出るというところなんですわ。」						○ 熟前指
3.7.3.2.5											2105	195-01	あの。						
3.7.3.2.5											2106	195-02	ロー。						
3.7.3.2.5											2107	195-03	自分の場合でいうと。						
3.7.3.2.5											2108	195-04	あの。						
3.7.3.2.5											2109	195-05	自分ば。						
3.7.3.2.5											2110	195-06	3無難。						
3.7.3.2.5											2111	195-07	使うというところですわ。」						
3.7.3.2.5											2112	195-08	一つは。						
3.7.3.2.5											2113	195-09	その。						
3.7.3.2.5											2114	195-10	ロー。						
3.7.3.2.5											2115	195-11	「私」という。						
3.7.3.2.5											2116	196-05	まあ。						
3.7.3.2.5											2117	196-06	公のおおやけの場であれば。						
3.7.3.2.5											2118	196-07	「私」というのを。						
3.7.3.2.5											2119	196-08	「私」といって。						
3.7.3.2.5											2120	196-09	そして。						
3.7.3.2.5											2121	196-10	また。						
3.7.3.2.5											2122	196-11	あの。						
3.7.3.2.5											2123	196-12	併せよう。						
3.7.3.2.5																			

語彙						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	語彙表現		17 文中 文末	18 文中 文末	19 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末			
1	3	3.2	3.2.S							2303	214-10	指教的					
1	3	3.2	3.2.S							2304	214-11	いたいろ					
1	3	3.2	3.2.S							2305	214-12	あるというように					
1	3	3.2	3.2.S							2306	214-13	置かれるとありますし					
1	3	3.2	3.2.S							2307	214-14	まあ					
1	3	3.2	3.2.S							2308	214-15	各自(各自)の					
1	3	3.2	3.2.S							2309	214-16	それと					
1	3	3.2	3.2.S							2310	214-17	謙遜に					
1	3	3.2	3.2.S							2311	214-18	合わせて					
1	3	3.2	3.2.S							2312	214-19	言います					
1	3	3.2	3.2.S							2313	214-20	社会言語学的というように					
1	3	3.2	3.2.S							2314	214-21	日本人のほう					
1	3	3.2	3.2.S							2315	214-22	申しあげます					
1	3	3.2	3.2.S							2316	215-01	その					
1	3	3.2	3.2.S							2317	215-02	社会言語学					
1	3	3.2	3.2.S							2318	215-03	学的というには					
1	3	3.2	3.2.S							2319	215-04	さうか					
1	3	3.2	3.2.S							2320	215-05	その方が					
1	3	3.2	3.2.S							2321	215-06	おっしゃったように					
1	3	3.2	3.2.S							2322	215-07	そういう					
1	3	3.2	3.2.S							2323	215-08	まあ					
1	3	3.2	3.2.S							2324	215-09	権威が					
1	3	3.2	3.2.S							2325	215-10	出せる					
1	3	3.2	3.2.S							2326	215-11	つまり	つまり				
1	3	3.2	3.2.S							2327	215-12	あの一					
1	3	3.2	3.2.S							2328	215-13	いたいろ					
1	3	3.2	3.2.S							2329	215-14	ある中					
1	3	3.2	3.2.S							2330	215-15	その					
1	3	3.2	3.2.S							2331	215-16	さうか					
1	3	3.2	3.2.S							2332	215-17	マスターの申から					
1	3	3.2	3.2.S							2333	215-18	一つを					
1	3	3.2	3.2.S							2334	215-19	選(出)すわけですから					
1	3	3.2	3.2.S							2335	215-20	そこに					
1	3	3.2	3.2.S							2336	215-21	その一					
1	3	3.2	3.2.S							2337	215-22	意味の					
1	3	3.2	3.2.S							2338	215-23	出た					
1	3	3.2	3.2.S							2339	215-24	坐地が					
1	3	3.2	3.2.S							2340	215-25	あるということですね					
1	3	3.2	3.2.S							2341	217-01	そういうわけな					
1	3	3.2	3.2.S							2342	217-02	権威が					
1	3	3.2	3.2.S							2343	217-03	あの一					
1	3	3.2	3.2.S							2344	217-04	それから	それから				
1	3	3.2	3.2.S							2345	218-02	まわめて					
1	3	3.2	3.2.S							2346	218-03	その					
1	3	3.2	3.2.S							2347	218-04	日本語の人称表現は					
1	3	3.2	3.2.S							2348	218-05	社会言語学的な					
1	3	3.2	3.2.S							2349	218-06	一つであるということになります					
1	4	4.1								2350	219-01	じゃ	じゃ				
1	4	4.1								2351	219-02	さうか					
1	4	4.1								2352	219-03	今日の席ですけれども					
1	4	4.1								2353	219-04	今日は					
1	4	4.1								2354	219-05	さうか					
1	4	4.1								2355	219-06	席のほうについて					
1	4	4.1								2356	219-07	シート					
1	4	4.1								2357	219-08	皆さんに					
1	4	4.1								2358	219-09	お話をしたいというように					
1	4	4.1								2359	219-10	教えてください					
1	4	4.2								2360	220-01	一つ目ですね					
1	4	4.2								2361	220-02	あの一					
1	4	4.2								2362	220-03	人称表現は					
1	4	4.2								2363	220-04	権威が					
1	4	4.2								2364	220-05	多い					
1	4	4.2								2365	221-01	それは					
1	4	4.2								2366	221-02	どちらか					
1	4	4.2								2367	221-03	日本語のことでございます					
1	4	4.2								2368	221-04	日本語の人称表現は					
1	4	4.2								2369	221-05	権威が					
1	4	4.2								2370	221-06	多いということですよ					
1	4	4.2								2371	222-01	それは					
1	4	4.2								2372	222-02	さうか					
1	4	4.2								2373	222-03	教えてください					
1	4	4.2								2374	223-01	シート					
1	4	4.2								2375	223-02	座					
1	4	4.2								2376	223-03	おれ					
1	4	4.2								2377	223-04	私					
1	4	4.2								2378	223-05	おま					
1	4	4.2								2379	223-06	おの					
1	4	4.2								2380	223-07	多いわけですね					
1	4	4.2								2381	224-01	それから	それから				
1	4	4.2								2382	224-02	一つ目してあげられども					
1	4	4.2								2383	224-03	あの一					
1	4	4.2								2384	224-04	席のアイデンティティに					
1	4	4.2								2385	224-05	相さす					
1	4	4.2								2386	225-01	それは					
1	4	4.2								2387	225-02	さうか					
1	4	4.2								2388	225-03	あの一					
1	4	4.2								2389	225-04	おっしゃった					
1	4	4.2								2390	225-05	権威が					
1	4	4.2								2391	225-06	出すということ					
1	4	4.2								2392	225-07	軌を一いつにするものです					
1	4	4.2								2393	225-08	それから	それから				
1	4	4.2								2394	225-09	シート					
1	4	4.2								2395	225-10	3番ですけれども					
1	4	4.2								2396	225-11	それは					
1	4	4.2								2397	225-12	あの一					
1	4	4.2								2398	225-13	さうか					
1	4	4.2								2399	225-14	シート					
1	4	4.2								2400	225-15	席の中間の方が					
1	4	4.2								2401	225-16	教えてください					
1	4	4.2								2402	225-17	その					
1	4	4.2								2403	225-18	聞き手は					
1	4	4.2								2404	225-19	お聞きする					
1	4	4.2								2405	225-20	あるいは	あるいは				
1	4	4.2								2406	225-21	じゃ					
1	4	4.2								2407	225-22	席に					
1	4	4.2								2408	225-23	お話をしたいというように					
1	4	4.2								2409	225-24	そういう					
1	4	4.2								2410	225-25	権威が					
1	4	4.2								2411	225-26	あるということ					
1	4	4.2								2412	227-01	そして	そして				
1	4	4.2								2413	227-02	席の					
1	4	4.2								2414	227-03	席代と共に					
1	4	4.2								2415	227-04	深まるということがあります					
1	4	4.2								2416	228-01	その					
1	4	4.2								2417	228-02	シート					
1	4	4.2								2418	228-03	権威が					
1	4	4.2								2419	228-04	席代というほどは					
1	4	4.2								2420	228-05	シート					

話数						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2	1/4の 統括機能	
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤	⑥		文中	文末	文中	文末	
II	5	5.3	5.3.5									2735	254-09	子供扱いしているということになるわけですからね。			
II	5	5.3	5.3.5									2736	254-10	からです。」			
II	5	5.3	5.3.5									2737	255-01	それから。	それから。		
II	5	5.3	5.3.5									2738	255-02	アッロー			
II	5	5.3	5.3.5									2739	255-03	可憐書は			
II	5	5.3	5.3.5									2740	255-04	のうた			
II	5	5.3	5.3.5									2741	255-05	影ですわね。			
II	5	5.3	5.3.5									2742	255-06	ごうり			
II	5	5.3	5.3.5									2743	255-07	授けおとして			
II	5	5.3	5.3.5									2744	255-08	あのー			
II	5	5.3	5.3.5									2745	255-09	何かに			
II	5	5.3	5.3.5									2746	255-10	「探すすか」とあるからう。			
II	5	5.3	5.3.5									2747	255-11	思います。」			
II	5	5.3	5.3.5									2748	256-01	という。			
II	5	5.3	5.3.5									2749	256-02	それが			
II	5	5.3	5.3.5									2750	256-03	ます			
II	5	5.3	5.3.5									2751	256-04	「人形の			
II	5	5.3	5.3.5									2752	256-05	「アッロー			
II	5	5.3	5.3.5									2753	256-06	「あなたがすね。[スライド切り替え]			
II	5	5.4	5.4.1									2754	257-01	で。	で。		
II	5	5.4	5.4.1									2755	257-02	成。			
II	5	5.4	5.4.1									2756	257-03	「人形に			
II	5	5.4	5.4.1									2757	257-04	行きますけども。			
II	5	5.4	5.4.1									2758	257-05	「この			
II	5	5.4	5.4.1									2759	257-06	「人形表現は			
II	5	5.4	5.4.1									2760	257-07	「風船が			
II	5	5.4	5.4.1									2761	257-08	多い。」			
II	5	5.4	5.4.2									2762	258-01	で。	で。		
II	5	5.4	5.4.2									2763	258-02	「石の調子の2人形というも			
II	5	5.4	5.4.2									2764	258-03			また。	
II	5	5.4	5.4.2									2765	258-04	「人形に			
II	5	5.4	5.4.2									2766	258-05	「成す			
II	5	5.4	5.4.2									2767	258-06	「あてですわね。			
II	5	5.4	5.4.2									2768	258-07	「あなた。」			
II	5	5.4	5.4.2									2769	258-08	「あなた。」			
II	5	5.4	5.4.2									2770	258-09	「おまじ。」			
II	5	5.4	5.4.2									2771	258-10	「これは			
II	5	5.4	5.4.2									2772	258-11	「私に對する			
II	5	5.4	5.4.2									2773	258-12	「あなた。」			
II	5	5.4	5.4.2									2774	258-13	「それから。			
II	5	5.4	5.4.2									2775	258-14	「アッロー			
II	5	5.4	5.4.2									2776	258-15	「ぼくに對する			
II	5	5.4	5.4.2									2777	258-16	「きみ。」			
II	5	5.4	5.4.2									2778	258-17	「おれに對する			
II	5	5.4	5.4.2									2779	258-18	「おまじし。			
II	5	5.4	5.4.2									2780	258-19	「ごうり			
II	5	5.4	5.4.2									2781	258-20	「風船に			
II	5	5.4	5.4.2									2782	258-21	「おまじは			
II	5	5.4	5.4.2									2783	258-22	「思ひですけれども。			
II	5	5.4	5.4.2									2784	258-23	「あなたに對してですわね。			
II	5	5.4	5.4.2									2785	258-24	「アッロー			
II	5	5.4	5.4.2									2786	258-25	「きみは			
II	5	5.4	5.4.2									2787	258-26	「あなたというごも			
II	5	5.4	5.4.2									2788	258-27	「あるでしょうし。			
II	5	5.4	5.4.2									2789	258-28	「おまじに對して			
II	5	5.4	5.4.2									2790	258-29	「おまじという			
II	5	5.4	5.4.2									2791	258-30	「思ひですわね。」			
II	5	5.4	5.4.2									2792	258-31	「おまじは			
II	5	5.4	5.4.2									2793	259-01	「アッロー			
II	5	5.4	5.4.2									2794	259-02	「アッロー			
II	5	5.4	5.4.2									2795	259-03	「そのー			
II	5	5.4	5.4.2									2796	259-04	「何でしょう			
II	5	5.4	5.4.2									2797	259-05	「言葉な			
II	5	5.4	5.4.2									2798	259-06	「この言い方以外では			
II	5	5.4	5.4.2									2799	259-07	「言葉はかた			
II	5	5.4	5.4.2									2800	259-08	「ごうりもも			
II	5	5.4	5.4.2									2801	259-09	「あるでしょうし。」			
II	5	5.4	5.4.2									2802	260-01	「アッロー			
II	5	5.4	5.4.2									2803	260-02	「ほかに			
II	5	5.4	5.4.2									2804	260-03	「アッロー			
II	5	5.4	5.4.2									2805	260-04	「たとえ		たとえ	
II	5	5.4	5.4.2									2806	260-05	「私が			
II	5	5.4	5.4.2									2807	260-06	「さ			
II	5	5.4	5.4.2									2808	260-07	「思ひかたは			
II	5	5.4	5.4.2									2809	260-08	「皆さんは			
II	5	5.4	5.4.2									2810	260-09	「アッロー			
II	5	5.4	5.4.2									2811	260-10	「思ひますか。」って			
II	5	5.4	5.4.2									2812	260-11	「皆さんはかた			
II	5	5.4	5.4.2									2813	260-12	「みんなが思ひますよ。			
II	5	5.4	5.4.2									2814	260-13	「あるでしょうし。」			
II	5	5.4	5.4.2									2815	261-01	「それから。			
II	5	5.4	5.4.2									2816	261-02	「アッロー			
II	5	5.4	5.4.2									2817	261-03	「言葉はかた			
II	5	5.4	5.4.2									2818	261-04	「言葉はかた			
II	5	5.4	5.4.2									2819	261-05	「思ひ			
II	5	5.4	5.4.2									2820	261-06	「表現を			
II	5	5.4	5.4.2									2821	261-07	「表現で			
II	5	5.4	5.4.2									2822	261-08	「「アッロー」とあるかすしれません。」			
II	5	5.4	5.4.2									2823	261-09	「少し			
II	5	5.4	5.4.2									2824	261-10	「思ひ			
II	5	5.4	5.4.2									2825	261-11	「思ひ方など			
II	5	5.4	5.4.2									2826	261-12	「成しといううた			
II	5	5.4	5.4.2									2827	261-13	「思ひ方			
II	5	5.4	5.4.2									2828	261-14	「アッロー			
II	5	5.4	5.4.2									2829	261-15	「あるかすしれません。」			
II	5	5.4	5.4.2									2830	261-16	「ごうりもも			
II	5	5.4	5.4.2									2831	261-17	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2832	261-18	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2833	261-19	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2834	261-20	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2835	261-21	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2836	261-22	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2837	261-23	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2838	261-24	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2839	261-25	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2840	261-26	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2841	261-27	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2842	261-28	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2843	261-29	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2844	261-30	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2845	261-31	「あなたに			
II	5	5.4	5.4.2									2846	261-32	「あなたに			
II																	

話数					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		T		Tの 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
II	5	5.4	5.4.3							2879	266-15	戻ったり					
II	5	5.4	5.4.3							2880	266-16	することがあるだろうと					
II	5	5.4	5.4.3							2881	266-17	思います。」					
II	5	5.4	5.4.3							2882	267-01	名前が					
II	5	5.4	5.4.3							2883	267-02	わからない時に					
II	5	5.4	5.4.3							2884	267-03	懐かいです。					
II	5	5.4	5.4.3							2885	267-04	ま					
II	5	5.4	5.4.3							2886	267-05	「あなたば！」と。					
II	5	5.4	5.4.3							2887	267-06	聞けないので					
II	5	5.4	5.4.3							2888	267-07	そういう時に					
II	5	5.4	5.4.3							2889	267-08	博知な					
II	5	5.4	5.4.3							2890	268-01	言葉ですわね。」					
II	5	5.4	5.4.4							2891	268-01	また	また				
II	5	5.4	5.4.4							2892	268-02	まっとう					
II	5	5.4	5.4.4							2893	268-03	固有名称の人名ということですわね。					
II	5	5.4	5.4.4							2894	268-04	この					
II	5	5.4	5.4.4							2895	268-05	博知は					
II	5	5.4	5.4.4							2896	268-06	あー					
II	5	5.4	5.4.4							2897	268-07	自分ではないので					
II	5	5.4	5.4.4							2898	268-08	「高橋さんとかね。					
II	5	5.4	5.4.4							2899	268-09	まっとう					
II	5	5.4	5.4.4							2900	268-10	自分のことば					
II	5	5.4	5.4.4							2901	268-11	あー					
II	5	5.4	5.4.4							2902	268-12	自分の相理のことですけれども。					
II	5	5.4	5.4.4							2903	268-13	「高橋さんとかね。					
II	5	5.4	5.4.4							2904	268-14	味んたり					
II	5	5.4	5.4.4							2905	268-15	「真理子って					
II	5	5.4	5.4.4							2906	268-16	味んたり					
II	5	5.4	5.4.4							2907	268-17	「マツちゃんって					
II	5	5.4	5.4.4							2908	268-18	味んたり					
II	5	5.4	5.4.4							2909	268-19	する。」					
II	5	5.4	5.4.4							2910	269-01	「それうーとは					
II	5	5.4	5.4.4							2911	269-02	当然					
II	5	5.4	5.4.4							2912	269-03	あるだろうと					
II	5	5.4	5.4.4							2913	269-04	「思います。」					
II	5	5.4	5.4.4							2914	270-01	それから。	それから				
II	5	5.4	5.4.5							2915	270-02	まっとう					
II	5	5.4	5.4.5							2916	270-03	親族名物としての					
II	5	5.4	5.4.5							2917	270-04	人名ですけれども。					
II	5	5.4	5.4.5							2918	270-05	まっとう					
II	5	5.4	5.4.5							2919	270-06	まっとう					
II	5	5.4	5.4.5							2920	270-07	まっとう					
II	5	5.4	5.4.5							2921	270-08	お母さんに対する					
II	5	5.4	5.4.5							2922	270-09	「マツ」					
II	5	5.4	5.4.5							2923	270-10	それから。	それから				
II	5	5.4	5.4.5							2924	270-11	まっとう					
II	5	5.4	5.4.5							2925	270-12	「お父さん」に対する					
II	5	5.4	5.4.5							2926	270-13	「はい」					
II	5	5.4	5.4.5							2927	270-14	それから。	それから				
II	5	5.4	5.4.5							2928	270-15	母に対する					
II	5	5.4	5.4.5							2929	270-16	「お姉ちゃん」のいうま					
II	5	5.4	5.4.5							2930	270-17	「掛けておきます。」					
II	5	5.4	5.4.5							2931	271-01	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2932	271-02	「おは					
II	5	5.4	5.4.5							2933	271-03	自分で					
II	5	5.4	5.4.5							2934	271-04	「おはよう					
II	5	5.4	5.4.5							2935	271-05	さらに。	さらに				
II	5	5.4	5.4.5							2936	271-06	その					
II	5	5.4	5.4.5							2937	271-07	「おはよう					
II	5	5.4	5.4.5							2938	271-08	言う時は					
II	5	5.4	5.4.5							2939	271-09	「おはよう					
II	5	5.4	5.4.5							2940	271-10	は					
II	5	5.4	5.4.5							2941	271-11	「博知が					
II	5	5.4	5.4.5							2942	271-12	「ありますわね。」					
II	5	5.4	5.4.5							2943	272-01	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2944	272-02	「マツ」だけではなくて	たとえば				
II	5	5.4	5.4.5							2945	272-03	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2946	272-04	「おちんちん」のいう					
II	5	5.4	5.4.5							2947	272-05	「マツ					
II	5	5.4	5.4.5							2948	272-06	「おちんちん」のいう					
II	5	5.4	5.4.5							2949	272-07	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2950	272-08	「おちんちん」のいう					
II	5	5.4	5.4.5							2951	272-09	あの					
II	5	5.4	5.4.5							2952	272-10	「おちんちん」のいう					
II	5	5.4	5.4.5							2953	272-11	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2954	272-12	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2955	273-01	「おは					
II	5	5.4	5.4.5							2956	273-02	まあ					
II	5	5.4	5.4.5							2957	273-03	「おはよう					
II	5	5.4	5.4.5							2958	273-04	でも	でも				
II	5	5.4	5.4.5							2959	273-05	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2960	273-06	「おちんちん」のいう					
II	5	5.4	5.4.5							2961	274-01	まあ					
II	5	5.4	5.4.5							2962	274-02	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2963	274-03	「おちんちん」のいう					
II	5	5.4	5.4.5							2964	275-01	それから。	それから				
II	5	5.4	5.4.5							2965	275-02	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2966	275-03	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2967	275-04	たとえば	たとえば				
II	5	5.4	5.4.5							2968	275-05	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2969	275-06	「おちんちん」のいう					
II	5	5.4	5.4.5							2970	275-07	して					
II	5	5.4	5.4.5							2971	275-08	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2972	275-09	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2973	275-10	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2974	275-11	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2975	275-12	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2976	276-01	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2977	276-02	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2978	276-03	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2979	276-04	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2980	276-05	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2981	276-06	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2982	276-07	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2983	276-08	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2984	276-09	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2985	276-10	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2986	276-11	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2987	276-12	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2988	277-01	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2989	277-02	「おちんちん					
II	5	5.4	5.4.5							2990	277-03	「おちんちん					

話数						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	確認表現		1/2	1/3の 統括機能	
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤			文中	文末	文中	文末	
5	4	5	4	5							3023	280-07	その				
5	4	5	4	5							3024	280-08	アルバイトに				
5	4	5	4	5							3025	280-09	多して				
5	4	5	4	5							3026	280-10	人であれば				
5	4	5	4	5							3027	280-11	相手のこと				
5	4	5	4	5							3028	280-12	「店員」のほうに				
5	4	5	4	5							3029	280-13	その				
5	4	5	4	5							3030	280-14	投票まで				
5	4	5	4	5							3031	280-15	既去りは				
5	4	5	4	5							3032	280-16	ありますよね。」				
5	4	5	4	5							3033	281-01	候補に				
5	4	5	4	5							3034	281-02	入れれば				
5	4	5	4	5							3035	281-03	「部員」がかわ				
5	4	5	4	5							3036	281-04	上。				
5	4	5	4	5							3037	281-05	「試合」もあつたかもしれません。」				
5	4	5	4	5							3038	281-01	あるいは、	あるいは、			
5	4	5	4	5							3039	282-02	あの				
5	4	5	4	5							3040	282-03	相手のことをですね				
5	4	5	4	5							3041	282-04	たとえは、	たとえば、			
5	4	5	4	5							3042	282-05	「名人」				
5	4	5	4	5							3043	282-06	「名人」				
5	4	5	4	5							3044	282-07	「名人」				
5	4	5	4	5							3045	282-08	あのー				
5	4	5	4	5							3046	282-09	あのー				
5	4	5	4	5							3047	282-10	えっとー				
5	4	5	4	5							3048	282-11	私は				
5	4	5	4	5							3049	282-12	「部長」が				
5	4	5	4	5							3050	282-13	「部長」でなければ、				
5	4	5	4	5							3051	282-14	あのー				
5	4	5	4	5							3052	282-15	「名人」というのが				
5	4	5	4	5							3053	282-16	ありまして				
5	4	5	4	5							3054	282-17	「山下敬喜(けいご)」という				
5	4	5	4	5							3055	282-18	「北條道出身の」				
5	4	5	4	5							3056	282-19	「えっとー」				
5	4	5	4	5							3057	282-20	「部長」が				
5	4	5	4	5							3058	282-21	「部長」				
5	4	5	4	5							3059	282-22	「井山裕太(いやまゆた)という				
5	4	5	4	5							3060	282-23	「大阪出身の棋士」ですね				
5	4	5	4	5							3061	282-24	「えっとー」				
5	4	5	4	5							3062	282-25	「部長」がですね				
5	4	5	4	5							3063	282-26	「部長」				
5	4	5	4	5							3064	282-27	「部長」				
5	4	5	4	5							3065	282-28	「名人」を				
5	4	5	4	5							3066	282-29	「部長」が				
5	4	5	4	5							3067	282-30	「ニュース」				
5	4	5	4	5							3068	282-31	「部長」がですね				
5	4	5	4	5							3069	282-32	「えっとー」				
5	4	5	4	5							3070	282-33	「えっとー」				
5	4	5	4	5							3071	282-34	「山下」に対して、				
5	4	5	4	5							3072	282-35	あのー				
5	4	5	4	5							3073	282-36	「部長」が				
5	4	5	4	5							3074	282-37	「名人」が				
5	4	5	4	5							3075	282-38	「部長」				
5	4	5	4	5							3076	283-01	「そして、	そして、			
5	4	5	4	5							3077	283-02	また、	また、			
5	4	5	4	5							3078	283-03	「山下」				
5	4	5	4	5							3079	283-04	「入は、				
5	4	5	4	5							3080	283-05	「部長」が				
5	4	5	4	5							3081	283-06	「部長」				
5	4	5	4	5							3082	283-07	「部長」				
5	4	5	4	5							3083	283-08	「名人」が				
5	4	5	4	5							3084	283-09	「部長」				
5	4	5	4	5							3085	283-10	「部長」				
5	4	5	4	5							3086	283-11	「部長」				
5	4	5	4	5							3087	283-12	「部長」				
5	4	5	4	5							3088	284-01	「部長」				
5	4	5	4	5							3089	284-02	「部長」				
5	4	5	4	5							3090	284-03	「部長」				
5	4	5	4	5							3091	284-04	「部長」				
5	4	5	4	5							3092	284-05	「部長」				
5	4	5	4	5							3093	284-06	「部長」				
5	4	5	4	5							3094	284-07	「部長」				
5	4	5	4	5							3095	284-08	「部長」				
5	4	5	4	5							3096	285-01	「部長」				
5	4	5	4	5							3097	285-02	「部長」				
5	4	5	4	5							3098	285-03	「部長」				
5	4	5	4	5							3099	285-04	「部長」				
5	4	5	4	5							3100	285-05	「部長」				
5	4	5	4	5							3101	285-06	「部長」				
5	4	5	4	5							3102	285-07	「部長」				
5	4	5	4	5							3103	285-08	「部長」				
5	4	5	4	5							3104	285-09	「部長」				
5	4	5	4	5							3105	285-10	「部長」				
5	4	5	4	5							3106	285-11	「部長」				
5	4	5	4	5							3107	285-12	「部長」				
5	4	5	4	5							3108	285-13	「部長」				
5	4	5	4	5							3109	285-14	「部長」				
5	4	5	4	5							3110	285-15	「部長」				
5	4	5	4	5							3111	285-16	「部長」				
5	4	5	4	5							3112	285-17	「部長」				
5	4	5	4	5							3113	285-18	「部長」				
5	4	5	4	5							3114	285-19	「部長」				
5	4	5	4	5							3115	285-20	「部長」				
5	4	5	4	5							3116	285-21	「部長」				
5	4	5	4	5							3117	285-22	「部長」				
5	4	5	4	5							3118	285-23	「部長」				
5	4	5	4	5							3119	285-24	「部長」				
5	4	5	4	5							3120	285-25	「部長」				
5	4	5	4	5							3121	285-26	「部長」				
5	4	5	4	5							3122	285-27	「部長」				
5	4	5	4	5							3123	285-28	「部長」				
5	4	5	4	5							3124	285-29	「部長」				
5	4	5	4	5							3125	285-30	「部長」				
5	4	5	4	5							3126	285-31	「部長」				
5	4	5	4	5							3127	285-32	「部長」				
5	4	5	4	5							3128	285-33	「部長」				
5	4	5	4	5							3129	285-34	「部長」				
5	4	5	4	5							3130	285-35	「部長」				
5	4	5	4	5							3131	285-36	「部長」				
5	4	5	4	5							3132	285-37	「部長」				
5	4	5	4	5							3133	285-38	「部長」				
5	4	5	4	5							3134	285-39	「部長」				
5	4	5	4	5							3135	285-40	「部長」				
5	4	5	4	5							3136	285-41	「部長」				
5	4	5	4	5							3137	287-01	「部長」				
5	4	5	4	5							3138	287-02	「部長」				
5	4	5	4	5							3139	287-03	「部長」				
5																	

語彙						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2	1/3の 統括機能		
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤	⑥			文中	文末	文中	文末	
II	5	5.5.5.1										3187	289-03	1人称				
II	5	5.5.5.1										3188	289-04	2人称に比べて				
II	5	5.5.5.1										3189	289-05	3人称が				
II	5	5.5.5.1										3170	289-06	圧倒的に				
II	5	5.5.5.1										3171	289-07	のいふことがあつた。(世)				
II	5	5.5.5.2										3182	290-01	一方	一方			
II	5	5.5.5.2										3174	290-02	関係詞系の場合はですね				
II	5	5.5.5.2										3174	290-03	あの				
II	5	5.5.5.2										3175	290-04	あの				
II	5	5.5.5.2										3176	290-05	横わけてですけど				
II	5	5.5.5.2										3177	290-06	「ごま(の)あ(ですね)」				
II	5	5.5.5.2										3178	291-01	あの				
II	5	5.5.5.2										3178	291-02	たとえば	たとえば			
II	5	5.5.5.2										3180	291-03	あの				
II	5	5.5.5.2										3181	291-04	あの				
II	5	5.5.5.2										3182	291-05	人				
II	5	5.5.5.2										3183	291-06	話				
II	5	5.5.5.2										3184	291-07	なに				
II	5	5.5.5.2										3185	291-08	してゐるかな」「いっていろいろに			○	見解
II	5	5.5.5.2										3186	291-09	あのー				
II	5	5.5.5.2										3187	291-10	よ				
II	5	5.5.5.2										3188	291-11	人で				
II	5	5.5.5.2										3189	291-12	話して				
II	5	5.5.5.2										3190	291-13	女の				
II	5	5.5.5.2										3191	291-14	場に				
II	5	5.5.5.2										3192	291-15	いない				
II	5	5.5.5.2										3193	291-16	人を				
II	5	5.5.5.2										3194	291-17	話(て)みたりとか				
II	5	5.5.5.2										3195	291-18	あいつが				
II	5	5.5.5.2										3196	291-19	女				
II	5	5.5.5.2										3197	291-20	やっつてんだよ」といふように			○	見解
II	5	5.5.5.2										3198	291-21	あのー				
II	5	5.5.5.2										3199	291-22	観するに	観するに			
II	5	5.5.5.2										3200	291-23	また	また			
II	5	5.5.5.2										3201	291-24	人で				
II	5	5.5.5.2										3202	291-25	話(て)る時に				
II	5	5.5.5.2										3203	291-26	話順に				
II	5	5.5.5.2										3204	291-27	出したとか」				
II	5	5.5.5.2										3205	292-01	「あちらの				
II	5	5.5.5.2										3206	292-02	反応は				
II	5	5.5.5.2										3207	292-03	「おんな」。「いふ				
II	5	5.5.5.2										3208	292-04	たとえば	たとえば			
II	5	5.5.5.2										3209	292-05	社内会議か				
II	5	5.5.5.2										3210	292-06	話(か)で				
II	5	5.5.5.2										3211	292-07	その				
II	5	5.5.5.2										3212	292-08	お得意先のですね				
II	5	5.5.5.2										3213	292-09	女の				
II	5	5.5.5.2										3214	292-10	話順に				
II	5	5.5.5.2										3215	292-11	する時に				
II	5	5.5.5.2										3216	292-12	「あちら」いろいろ				
II	5	5.5.5.2										3217	292-13	横(か)もあるだろう				
II	5	5.5.5.2										3218	292-14	話(か)ですね」				
II	5	5.5.5.2										3219	293-01	「いろいろがなのが			○	見解
II	5	5.5.5.2										3220	293-02	まあ				
II	5	5.5.5.2										3221	293-03	比較的				
II	5	5.5.5.2										3222	293-04	揃っている」				
II	5	5.5.5.3										3223	294-01	そして	そして			
II	5	5.5.5.3										3224	294-02	まあ				
II	5	5.5.5.3										3225	294-03	両名関係3人称は				
II	5	5.5.5.3										3226	294-04	これは				
II	5	5.5.5.3										3227	294-05	2人称と				
II	5	5.5.5.3										3228	294-06	ほぼ				
II	5	5.5.5.3										3229	294-07	話(か)で				
II	5	5.5.5.3										3230	294-08	まあ				
II	5	5.5.5.3										3231	294-09	「お嬢さん」はとか				
II	5	5.5.5.3										3232	294-10	「真理子」はとか				
II	5	5.5.5.3										3233	294-11	話(か)				
II	5	5.5.5.3										3234	294-12	家人であればね				
II	5	5.5.5.3										3235	294-13	「お嬢さん」はっていうふうな				
II	5	5.5.5.3										3236	294-14	「はい」				
II	5	5.5.5.3										3237	294-15	「さうな話」				
II	5	5.5.5.3										3238	294-16	「思います」				
II	5	5.5.5.4										3239	295-01	それと	それと			
II	5	5.5.5.4										3240	295-02	もう一つ				
II	5	5.5.5.4										3241	295-03	その				
II	5	5.5.5.4										3242	295-04	「さうな話」				
II	5	5.5.5.4										3243	295-05	「非効的な」ところは				
II	5	5.5.5.4										3244	295-06	関係名詞				
II	5	5.5.5.4										3245	295-07	称名3人称は				
II	5	5.5.5.4										3246	295-08	先ほどの				
II	5	5.5.5.4										3247	295-09	その				
II	5	5.5.5.4										3248	295-10	「お嬢さん」	たとえば			
II	5	5.5.5.4										3249	295-11	「マツ子」				
II	5	5.5.5.4										3250	295-12	「お嬢さん」はとか				
II	5	5.5.5.4										3251	295-13	「お嬢さん」は				
II	5	5.5.5.4										3252	295-14	全く				
II	5	5.5.5.4										3253	295-15	話(か)				
II	5	5.5.5.4										3254	295-16	「はい」				
II	5	5.5.5.4										3255	295-17	「観(わ)けてですね」				
II	5	5.5.5.4										3256	295-01	あのー				
II	5	5.5.5.4										3257	295-02	話順に				
II	5	5.5.5.4										3258	295-03	する時は				
II	5	5.5.5.4										3259	295-04	まあ				
II	5	5.5.5.4										3260	295-05	「お嬢さん」の				
II	5	5.5.5.4										3261	295-06	非効的な				
II	5	5.5.5.4										3262	295-07	「母」は				
II	5	5.5.5.4										3263	295-08	「母親」といふように				
II	5	5.5.5.4										3264	295-09	で				
II	5	5.5.5.4										3265	295-10	話(か)				
II	5	5.5.5.4										3266	295-11	話順に				
II	5	5.5.5.4										3267	295-12	出すと				
II	5	5.5.5.4										3268	295-13	「観(わ)んですけれど」			○	前提
II	5	5.5.5.4										3269	295-14	話(か)				
II	5	5.5.5.4										3270	295-15	「さういふ				
II	5	5.5.5.4										3271	295-16	「はい」				
II	5	5.5.5.4										3272	295-17	「さうと				
II	5	5.5.5.4										3273	297-01	それから	それから			
II	5	5.5.5.4										3274	297-02	また	また			
II	5	5.5.5.4										3275	297-03	あの				
II	5	5.5.5.4										3276	297-04	「観(わ)く				
II	5	5.5.5.4																

語彙						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	語彙表現		1/2	1/3の 統括機能	
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤			文中	文末	文中	文末	
II	5	5.5	5.5	5.5								3311	300-11	あふと			
II	5	5.5	5.5	5.5								3312	300-12	嬉しいます。(5)「スライド切の書き」			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3313	301-01	で			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3314	301-02	さつ。			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3315	301-03	そこですね			そこですね
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3316	301-04	の			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3317	301-05	3人旅を			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3318	301-06	差支る時にですね			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3319	301-07	あの			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3320	301-08	知っておいておいたほうがいいよ			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3321	301-09	場所の付			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3322	301-10	入新築場の用法です。			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3323	302-01	まあ			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3324	302-02	用法っていうのは			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3325	302-03	何かという			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3326	302-04	あの			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3327	302-05	入新築増も			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3328	302-06	文法的に			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3329	302-07	文の中で			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3330	302-08	ある			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3331	302-09	位置に			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3332	302-10	で			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3333	302-11	聞かれて			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3334	302-12	それか			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3335	302-13	文法的な			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3336	302-14	役割を			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3337	302-15	作る時によって			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3338	302-16	意味は			意味
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3339	302-17	機能に			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3340	302-18	何か			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3341	302-19	変わっていろいろあるんですね。			○ 機能
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3342	303-01	で			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3343	303-02	まあ			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3344	303-03	大きく			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3345	303-04	かけて			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3346	303-05	3階階に			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3347	303-06	なるんじゃないかということです。			○ 機能
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3348	304-01	この			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3349	304-02	名前も			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3350	304-03	また			また
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3351	304-04	あの			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3352	304-05	お立ちか			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3353	304-06	その			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3354	304-07	先年毎年も			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3355	304-08	書きには			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3356	304-09	してまずけれども			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3357	304-10	機能的に			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3358	304-11	何か			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3359	304-12	判断で			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3360	304-13	つけた			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.1								3361	304-14	名前です。			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3362	305-01	で			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3363	305-02	最初の			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3364	305-03	昨席にかく)的用法というんですけれども			○ 機能(語)
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3365	305-04	これは			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3366	305-05	大体			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3367	305-06	子の			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3368	305-07	あの			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3369	305-08	次の席までですね			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3370	305-09	相手も			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3371	305-10	呼びかける時			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3372	305-11	相手に			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3373	305-12	自己会話時ですね			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3374	305-13	「おかあさん、って			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3375	305-14	書きかけて			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3376	305-15	「ご機嫌			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3377	305-16	「またあ。」とか			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3378	305-17	言う時の			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3379	305-18	「おかあさん、って。」			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3380	306-01	私は			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3381	306-02	さ			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3382	306-03	おかあさん			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3383	306-04	あなたに			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3384	306-05	向かって			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3385	306-06	あの			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3386	306-07	書きかけてるんですよ。という			○ 機能
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3387	306-08	そういう			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3388	306-09	注目も			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3389	306-10	表示させるよな			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3390	306-11	そういう			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3391	306-12	「おかあさん、を			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3392	306-13	「おあ			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3393	306-14	仮に			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3394	306-15	その			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3395	306-16	昨席的用法			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3396	306-17	「呼びかけ用法というふうに			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.2								3397	306-18	「書きで扱います。」			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3398	307-01	それから			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3399	307-02	一つ目ですね			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3400	307-03	それとは			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3401	307-04	違って			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3402	307-05	文の中で			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3403	307-06	あの			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3404	307-07	書きは			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3405	307-08	主語ですね			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3406	307-09	文法的な			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3407	307-10	役割を			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3408	307-11	「なるんということです。」			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3409	308-01	「おあ			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3410	308-02	「おかあさん、は			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3411	308-03	どう			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3412	308-04	「あ、」という			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3413	308-05	場合ですね。」			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3414	309-01	その			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3415	309-02	機能的			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3416	309-03	書きかけてるわけではなくて			
II	5	5.5	5.5	5.6.1.3								3417	309-04	ま			
II	5	5.5	5.5														

語彙					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2		1/3の 統括機能	
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末		
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4						○	3455	312-01	それから					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4						○	3456	312-02	一つ目では					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4						○	3457	312-03	素材的用法というものです」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3458	313-01	素材的っていうのは					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3459	313-02	どういふことかという					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3460	313-03	語彙に					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3461	313-04	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3462	313-05	用法					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3463	313-06	その					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3464	313-07	構に					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3465	313-08	いない					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3466	313-09	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3467	313-10	語彙に					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3468	313-11	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3469	313-12	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3470	313-13	用法ですね」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3471	314-01	直訳的用法は					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3472	314-02	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3473	314-03	構に					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3474	314-04	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3475	314-05	人に					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3476	314-06	普及する					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3477	314-07	用途がわけですけれども					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3478	314-08	素材的用法の場合は					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3479	314-09	その					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3480	314-10	構に					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3481	314-11	いない					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3482	314-12	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3483	314-13	語彙に					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3484	314-14	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3485	315-01	この					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3486	315-02	場合でいうと					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3487	315-03	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3488	315-04	構に					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3489	315-05	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3490	315-06	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3491	316-01	この					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3492	316-02	場合					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3493	316-03	構に					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3494	316-04	目の前に					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3495	316-05	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3496	317-01	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3497	317-02	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3498	317-03	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3499	317-04	目の前に					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3500	317-05	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3501	317-06	その					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3502	317-07	場合					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3503	317-08	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3504	317-09	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3505	317-10	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3506	317-11	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3507	317-12	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3508	317-13	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3509	317-14	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3510	317-15	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3511	318-01	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3512	318-02	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3513	318-03	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3514	318-04	つまり					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3515	318-05	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3516	318-06	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3517	318-07	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3518	318-08	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3519	318-09	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3520	318-10	用法で					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3521	318-11	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3522	318-12	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3523	318-13	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3524	318-14	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3525	318-15	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3526	318-16	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3527	319-01	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3528	319-02	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3529	319-03	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3530	319-04	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3531	319-05	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3532	319-06	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3533	319-07	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3534	319-08	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3535	320-01	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3536	320-02	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3537	320-03	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3538	320-04	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3539	320-05	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3540	320-06	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3541	320-07	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3542	320-08	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3543	321-01	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3544	321-02	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3545	321-03	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3546	321-04	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3547	322-01	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3548	322-02	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3549	322-03	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3550	322-04	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3551	322-05	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3552	322-06	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3553	322-07	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3554	322-08	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3555	322-09	「なる」					
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.4							3556	322-10	「なる」				</	

話数					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		T		Tの 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3599	327-01	ですから。				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3600	327-02	普通。				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3601	327-03	そんなことは				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3602	327-04	しない。				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3603	328-01	ですから。				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3604	328-02	まあ。				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3605	328-03	自動的に				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3606	328-04	相手に対して				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3607	328-05	呼びかけ				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3608	328-06	既婚の用法				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3609	328-07	あるいは。				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3610	328-08	目の前に				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3611	328-09	いる				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3612	328-10	相手に対して				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3613	328-11	書きする				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3614	328-12	言及の用法に				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.6							3615	328-13	なっています。				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3616	329-01	そして。				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3617	329-02	3人目の場合は				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3618	329-03	当然				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3619	329-04	その				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3620	329-05	場には				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3621	329-06	1つだけですから。				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3622	329-07	1つだけ				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3623	329-08	3つだけ				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3624	329-09	呼びかけることもできませんし				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3625	329-10	また。				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3626	329-11	3つだけ				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3627	329-12	その				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3628	329-13	書きする				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3629	329-14	その				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3630	329-15	場に				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3631	329-16	いる				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3632	329-17	人に対して				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3633	329-18	書きすることもないから。				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3634	329-19	あの				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3635	329-20	薬材的な				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3636	329-21	用法に				
II	5	5.5	5.6.1	5.6.1.7							3637	329-22	なるというようになります。(3)「スラッシュ切替」				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3638	330-01	で。				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3639	330-02	あの				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3640	330-03	その				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3641	330-04	薬材的な				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3642	330-05	用法としての				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3643	330-06	3人目というところで				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3644	330-07	結局。				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3645	330-08	あの				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3646	330-09	3つだけ				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3647	330-10	調剤名称の3人目が				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3648	330-11	あの				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3649	330-12	「お医者さん」が				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3650	330-13	「マカ」が				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3651	330-14	「1つ」が				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3652	330-15	ならないで。				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3653	330-16	「1冊」				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3654	330-17	「1冊」				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3655	330-18	3つ				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3656	330-19	「調剤」				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3657	330-20	「この」ということが				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3658	330-21	なんとなく				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3659	330-22	おわかりいただけます				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3660	330-23	思ってくださいね。				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3661	330-24	つまり。				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3662	330-25	その				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3663	330-26	その				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3664	330-27	人に対して				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3665	330-28	一つは				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3666	330-29	まあ。				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3667	330-30	目の前に				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3668	330-31	「1冊」が				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3669	330-32	「調剤」が				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3670	331-01	わざわざ				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3671	331-02	あの				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3672	331-03	「さん」が				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3673	331-04	「つけたり」が				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3674	331-05	「1冊」				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3675	331-06	つけたり				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3676	331-07	する				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3677	331-08	必要は				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3678	331-09	「ない」ということです。(2)				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3679	332-01	でも。				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3680	332-02	一方で				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3681	332-03	あのー				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3682	332-04	たとえは				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3683	332-05	あの				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3684	332-06	既婚に				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3685	332-07	1で				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3686	332-08	書きする				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3687	332-09	「お医者さん」という形で				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3688	332-10	「さん」が				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3689	332-11	つけたりが				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3690	332-12	「1冊」				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3691	332-13	3つだけ				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3692	332-14	「さん」が				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3693	332-15	「さん」が				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3694	332-16	「つけたり」として				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3695	332-17	書きする				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3696	332-18	それは				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3697	332-19	結局。				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3698	332-20	「調剤」				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3699	332-21	ワチと				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3700	332-22	ワチという				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3701	332-23	書きする				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3702	332-24	「お医者さん」が				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3703	332-25	「ワチ」が				
II	5	5.5	5.6.2	5.6.2.1							3704	332-26					

語彙					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2		1/4の 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
II	5	5.5	5.2	5.2						3743	335-04	一つ					
II	5	5.5	5.2	5.2						3744	335-05	その					
II	5	5.5	5.2	5.2						3745	335-06	えっとー					
II	5	5.5	5.2	5.2						3746	335-07	おぼろ					
II	5	5.5	5.2	5.2						3747	335-08	た					
II	5	5.5	5.2	5.2						3748	335-09	有名な悪人人物の登場が					
II	5	5.5	5.2	5.2						3749	335-10	少なかろう					
II	5	5.5	5.2	5.2						3750	335-11	話を					
II	5	5.5	5.2	5.2						3751	335-12	しまったけれど					
II	5	5.5	5.2	5.2						3752	335-13	これも					
II	5	5.5	5.2	5.2						3753	335-14	えっとー					
II	5	5.5	5.2	5.2						3754	335-15	まさに					
II	5	5.5	5.2	5.2						3755	335-16	要約的用法としての					
II	5	5.5	5.2	5.2						3756	335-17	3人物というのと					
II	5	5.5	5.2	5.2						3757	335-18	関わってまして					
II	5	5.5	5.2	5.2						3758	335-19	あー					
II	5	5.5	5.2	5.2						3759	335-20	当然					
II	5	5.5	5.2	5.2						3760	335-21	その					
II	5	5.5	5.2	5.2						3761	335-22	目の前に					
II	5	5.5	5.2	5.2						3762	335-23	いまいわけですから					
II	5	5.5	5.2	5.2						3763	335-24	そして					
II	5	5.5	5.2	5.2						3764	335-25	話的に					
II	5	5.5	5.2	5.2						3765	335-26	出ているだけのことですから					
II	5	5.5	5.2	5.2						3766	335-27	それは					
II	5	5.5	5.2	5.2						3767	335-28	その					
II	5	5.5	5.2	5.2						3768	335-29	印象というのが					
II	5	5.5	5.2	5.2						3769	335-30	必要					
II	5	5.5	5.2	5.2						3770	335-31	なく					
II	5	5.5	5.2	5.2						3771	335-32	なるので					
II	5	5.5	5.2	5.2						3772	335-33	その					
II	5	5.5	5.2	5.2						3773	335-34	この					
II	5	5.5	5.2	5.2						3774	335-35	人を					
II	5	5.5	5.2	5.2						3775	335-36	指していることだけを					
II	5	5.5	5.2	5.2						3776	335-37	忘れられないので					
II	5	5.5	5.2	5.2						3777	335-38	結果として					
II	5	5.5	5.2	5.2						3778	335-39	その					
II	5	5.5	5.2	5.2						3779	335-40	先ほどの					
II	5	5.5	5.2	5.2						3780	335-41	個性を					
II	5	5.5	5.2	5.2						3781	335-42	出す					
II	5	5.5	5.2	5.2						3782	335-43	必要が					
II	5	5.5	5.2	5.2						3783	335-44	なく					
II	5	5.5	5.2	5.2						3784	335-45	なってくるので					
II	5	5.5	5.2	5.2						3785	335-46	即時的に					
II	5	5.5	5.2	5.2						3786	335-47	なるということがあります。(2)					
II	5	5.5	5.2	5.2						3787	337-01	で					
II	5	5.5	5.2	5.2						3788	337-02	あの					
II	5	5.5	5.2	5.2						3789	337-03	それと					
II	5	5.5	5.2	5.2						3790	337-04	あの					
II	5	5.5	5.2	5.2						3791	337-05	日本語の中ではですね					
II	5	5.5	5.2	5.2						3792	337-06	「彼女」というのが					
II	5	5.5	5.2	5.2						3793	337-07	なかったらでなければ					前構
II	5	5.5	5.2	5.2						3794	337-08	で					
II	5	5.5	5.2	5.2						3795	337-09	「彼女」というのが					
II	5	5.5	5.2	5.2						3796	337-10	でできたのかなということも					前構(課題)
II	5	5.5	5.2	5.2						3797	337-11	ちょっと					
II	5	5.5	5.2	5.2						3798	337-12	おぼろ					
II	5	5.5	5.2	5.2						3799	337-13	親って					
II	5	5.5	5.2	5.2						3800	337-14	「彼女」(彼女)の					
II	5	5.5	5.2	5.2						3801	337-15	「彼女」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3802	337-16	達げました」					
II	5	5.5	5.2	5.2						3803	338-01	で					
II	5	5.5	5.2	5.2						3804	338-02	ま					
II	5	5.5	5.2	5.2						3805	338-03	それについて					
II	5	5.5	5.2	5.2						3806	338-04	「はさき」(あこは)					
II	5	5.5	5.2	5.2						3807	338-05	わからぬ					
II	5	5.5	5.2	5.2						3808	339-01	わかっているのかをいれませんが					前構
II	5	5.5	5.2	5.2						3809	339-02	私が					
II	5	5.5	5.2	5.2						3810	339-03	不動態で					
II	5	5.5	5.2	5.2						3811	339-04	わからぬというも					
II	5	5.5	5.2	5.2						3812	339-05	なるので					前構
II	5	5.5	5.2	5.2						3813	339-06	それと					
II	5	5.5	5.2	5.2						3814	339-07	その					
II	5	5.5	5.2	5.2						3815	339-08	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3816	339-09	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3817	339-10	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3818	339-11	「方」(方)					
II	5	5.5	5.2	5.2						3819	339-12	出てきます」					
II	5	5.5	5.2	5.2						3820	340-01	つまり					
II	5	5.5	5.2	5.2						3821	340-02	まあめで					
II	5	5.5	5.2	5.2						3822	340-03	古い					
II	5	5.5	5.2	5.2						3823	340-04	「古い」(古い)					
II	5	5.5	5.2	5.2						3824	341-01	で					
II	5	5.5	5.2	5.2						3825	341-02	一方					
II	5	5.5	5.2	5.2						3826	341-03	「彼女」というのは					
II	5	5.5	5.2	5.2						3827	341-04	それは					
II	5	5.5	5.2	5.2						3828	341-05	明らかに					
II	5	5.5	5.2	5.2						3829	341-06	「具体化」(具体化)					
II	5	5.5	5.2	5.2						3830	342-01	で					
II	5	5.5	5.2	5.2						3831	342-02	あの					
II	5	5.5	5.2	5.2						3832	342-03	「彼女」というのはですね					
II	5	5.5	5.2	5.2						3833	342-04	えっとー					
II	5	5.5	5.2	5.2						3834	342-05	どう					
II	5	5.5	5.2	5.2						3835	342-06	「彼女」(彼女)					
II	5	5.5	5.2	5.2						3836	342-07	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3837	342-08	出てきたように					
II	5	5.5	5.2	5.2						3838	342-09	その					
II	5	5.5	5.2	5.2						3839	342-10	「僕」(僕)					
II	5	5.5	5.2	5.2						3840	342-11	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3841	342-12	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3842	342-13	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3843	342-14	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3844	342-15	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3845	342-16	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3846	342-17	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3847	342-18	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3848	342-19	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3849	342-20	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3850	342-21	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3851	342-22	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3852	342-23	「僕」と					
II	5	5.5	5.2	5.2						3853	343-01	「僕」と					またー
II	5	5.5	5.2	5.2	</												

語彙					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		7/8		1/9の 統括機能	
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末		
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3887	344-05	増える					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3888	344-06	消える					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3889	344-07	その					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3890	344-08	小荷が					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3891	344-09	ありますけど					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3892	344-10	あの					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3893	344-11	山崎君って					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3894	344-12	誰なんですよ。」				○	前指
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3895	345-01	で					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3896	345-02	あのー					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3897	345-03	誰なんですよ。でも、				○	前指前指(指)
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3898	345-04	あのー					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3899	345-05	あの					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3900	345-06	小学生でしょうか。					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3901	345-07	が					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3902	345-08	そのー					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3903	345-09	なんか					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3904	345-10	教科書の教材が					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3905	345-11	なにかで					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3906	345-12	誰んていふ群にですね。					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3907	345-13	あのー					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3908	345-14	「いかれ」って					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3909	345-15	聞いてあんな					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3910	345-16	「おかしな話、って言うふうな					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3911	345-17	井伏さんのところにですね。					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3912	346-03	あのー					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3913	346-04	手紙を					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3914	346-05	「おもしろいですよ。」				○	前指
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3915	347-01	それで、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3916	347-02	その					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3917	347-03	井伏君も、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3918	347-04	「あれ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3919	347-05	どうして					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3920	347-06	そんなことが					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3921	347-07	「おもしろいかな、って					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3922	347-08	聞いて					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3923	347-09	不思議に					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3924	347-10	目で					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3925	347-11	見てみるとですね。					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3926	347-12	「それは、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3927	347-13	それか、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3928	347-14	それか、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3929	347-15	作品の中では					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3930	347-16	「彼女と					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3931	347-17	書いてあって					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3932	347-18	でも、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3933	347-19	でも、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3934	347-20	「おもしろいふうな					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3935	347-21	ルビが					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3936	347-22	「おもしろい感じが					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3937	348-01	ですから、				○	前指
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3938	348-02	それか、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3939	348-03	それを					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3940	348-04	手紙向けに					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3941	348-05	改訂した時に					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3942	348-06	ルビのほうを					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3943	348-07	とって					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3944	348-08	「おもしろいことした、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3945	348-09	「おもしろいことした、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3946	348-10	その					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3947	348-11	女の子が					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3948	348-12	違和感を					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3949	348-13	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3950	348-14	「おもしろいことです。」					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3951	349-01	ただ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3952	349-02	まあ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3953	349-03	その					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3954	349-04	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3955	349-05	その					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3956	349-06	井伏さん自身の演義によればですけど、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3957	349-07	その					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3958	349-08	その					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3959	349-09	国文学大賞のあとですね。					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3960	349-10	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3961	349-11	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3962	349-12	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3963	349-13	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3964	350-01	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3965	350-02	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3966	350-03	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3967	350-04	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3968	350-05	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3969	350-06	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3970	351-01	でも、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3971	351-02	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3972	351-03	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3973	351-04	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3974	351-05	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3975	351-06	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3976	351-07	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3977	351-08	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3978	351-09	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3979	351-10	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3980	351-11	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3981	351-12	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3982	351-13	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3983	351-14	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3984	351-15	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3985	351-16	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3986	351-17	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3987	351-18	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3988	351-19	「おもしろい					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3						3989	351-20	「おもしろい					

語彙					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2		1/4の 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4031	354-01	で					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4032	354-02	小粒の中でも、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4033	354-03	あの、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4034	354-04	もちろんだ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4035	354-05	あの、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4036	354-06	聞いて、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4037	354-07	「山田はよか、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4038	354-08	「太郎は」といように					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4039	354-09	名前が					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4040	354-10	振り返られていくのが					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4041	354-11	「日本籍して					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4042	354-12	「自然の心」が					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4043	354-13	「あつた」でなければ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4044	354-14	でも、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4045	354-15	「昔の」小粒を					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4046	354-16	見てみるよ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4047	354-17	「名刺、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4048	354-18	の、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4049	354-19	「僕が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4050	354-20	「彼女って」ことを					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4051	354-21	「僕が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4052	354-22	「ケースが、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4053	354-23	「結婚、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4054	354-24	「彼女に来てますよね、」					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4055	355-01	「まあ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4056	355-02	「さ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4057	355-03	「ともよ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4058	355-04	「誰かの影響で、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4059	355-05	「あるさあ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4060	355-06	「でもおれは」をせんげ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4061	355-07	「現代作家たちは、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4062	355-08	「せいぶん、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4063	355-09	「その、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4064	355-10	「僕、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4065	355-11	「彼女というものを、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4066	355-12	「何種類か、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4067	355-13	「抵抗なく、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4068	355-14	「使っているような気がして、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4069	355-15	「それ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4070	355-16	「彼女が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4071	355-17	「僕が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4072	355-18	「ほんとは、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4073	355-19	「その、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4074	355-20	「感傷として、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4075	355-21	「即身的な、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4076	355-22	「その、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4077	355-23	「何種類して、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4078	355-24	「「来てますよね、」					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4079	355-01	「私のような、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4080	355-02	「まあ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4081	355-03	「旧世代の人は、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4082	355-04	「ジョージ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4083	355-05	「僕が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4084	355-06	「思っ、思っ、思っ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4085	355-07	「そのへんに、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4086	355-08	「まあ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4087	355-09	「ジェネレーション・ギャップが、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4088	355-10	「彼女、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4089	355-11	「言葉、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4090	355-12	「あるんだろ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4091	355-13	「思います。(G)「スライド切り替え」					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4092	357-01	「そして、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4093	357-02	「ジョージ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4094	357-03	「彼女が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4095	357-04	「彼女が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4096	357-05	「さあ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4097	357-06	「人物表現は、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4098	357-07	「権柄が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4099	357-08	「多岐にわたって、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4100	357-09	「日本籍の調査の件です、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4101	357-10	「「聞いて」を「来て」でなければ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4102	357-11	「でも、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4103	357-12	「まあ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4104	357-13	「本当(ほん)に、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4105	357-14	「多岐にわたって、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4106	357-15	「彼女で、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4107	357-16	「彼女、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4108	357-17	「さあ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4109	357-18	「ないんですね、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4110	358-01	「いろいろ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4111	358-02	「なぜか、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4112	358-03	「僕が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4113	358-04	「個人が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4114	358-05	「僕が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4115	358-06	「1人が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4116	358-07	「僕が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4117	358-08	「人物表現の、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4118	358-09	「僕が、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4119	358-10	「少ない、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4120	359-01	「まあ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4121	359-02	「多い方でも、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4122	359-03	「おそろく、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4123	359-04	「さあ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4124	359-05	「権柄、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4125	360-01	「さあ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4126	360-02	「三つ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4127	360-03	「あの、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4128	360-04	「僕、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4129	360-05	「僕、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4130	360-06	「おれを、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4131	360-07	「僕、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4132	360-08	「僕、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4133	360-09	「おそろく、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4134	360-10	「おれ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4135	360-11	「おれ、					
II	5	5.5	5.2	5.6	2.3					4136	360-12	「おれ、					

語彙						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2	1/3の 統括機能	
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤			文中	文末	文中	文末	
II	5	5.6	5.6	3							4175	365-03	たとえば、				
II	5	5.6	5.6	3							4176	365-04	ここに、				
II	5	5.6	5.6	3							4177	365-05	えっと、				
II	5	5.6	5.6	3							4178	365-06	「わたくし、				
II	5	5.6	5.6	3							4179	365-07	「はい、				
II	5	5.6	5.6	3							4180	365-08	「ベツツ以外には				
II	5	5.6	5.6	3							4181	365-09	「興味がありません。」「				
II	5	5.6	5.6	3							4182	365-01	「これは、				
II	5	5.6	5.6	3							4183	365-02	「なんとなく、				
II	5	5.6	5.6	3							4184	365-03	「その、				
II	5	5.6	5.6	3							4185	365-04	「前でした、				
II	5	5.6	5.6	3							4186	365-05	「山の手、				
II	5	5.6	5.6	3							4187	365-06	「世帯にいる、				
II	5	5.6	5.6	3							4188	365-07	「お金持ちの婦人というふうな、				
II	5	5.6	5.6	3							4189	365-08	「イメージが、				
II	5	5.6	5.6	3							4190	365-09	「あるわけですけども、				
II	5	5.6	5.6	3							4191	365-10	「で、				
II	5	5.6	5.6	3							4192	365-11	「実際に、				
II	5	5.6	5.6	3							4193	365-12	「その、				
II	5	5.6	5.6	3							4194	365-13	「そういうふうな、				
II	5	5.6	5.6	3							4195	365-14	「その、				
II	5	5.6	5.6	3							4196	365-15	「高級住宅街に、				
II	5	5.6	5.6	3							4197	365-16	「押入で、あつた、				
II	5	5.6	5.6	3							4198	365-17	「「婦人がですね、				
II	5	5.6	5.6	3							4199	365-18	「こんな、				
II	5	5.6	5.6	3							4200	365-19	「話し方、				
II	5	5.6	5.6	3							4201	365-20	「ずるかという、				
II	5	5.6	5.6	3							4202	365-21	「それが、				
II	5	5.6	5.6	3							4203	365-22	「話し方、				
II	5	5.6	5.6	3							4204	365-23	「話す、				
II	5	5.6	5.6	3							4205	365-24	「人は、				
II	5	5.6	5.6	3							4206	365-25	「ます、				
II	5	5.6	5.6	3							4207	365-26	「いいだろう、				
II	5	5.6	5.6	3							4208	365-27	「現実に、				
II	5	5.6	5.6	3							4209	365-28	「思います、				
II	5	5.6	5.6	3							4210	367-01	「そして、				
II	5	5.6	5.6	3							4211	367-02	「下のほうは、				
II	5	5.6	5.6	3							4212	367-03	「わしは、				
II	5	5.6	5.6	3							4213	367-04	「押し時分から、				
II	5	5.6	5.6	3							4214	367-05	「人前で、				
II	5	5.6	5.6	3							4215	367-06	「その、				
II	5	5.6	5.6	3							4216	367-07	「親手でのう、と、				
II	5	5.6	5.6	3							4217	367-08	「いう、				
II	5	5.6	5.6	3							4218	368-01	「これは、				
II	5	5.6	5.6	3							4219	368-02	「まあ、				
II	5	5.6	5.6	3							4220	368-03	「あなた、				
II	5	5.6	5.6	3							4221	368-04	「「何か、				
II	5	5.6	5.6	3							4222	368-05	「あ、				
II	5	5.6	5.6	3							4223	368-06	「お年寄りという、				
II	5	5.6	5.6	3							4224	368-07	「印象が、				
II	5	5.6	5.6	3							4225	368-08	「自分の、				
II	5	5.6	5.6	3							4226	368-09	「おはあ、				
II	5	5.6	5.6	3							4227	368-10	「「お、				
II	5	5.6	5.6	3							4228	368-11	「わしは、				
II	5	5.6	5.6	3							4229	368-12	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4230	368-13	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4231	368-14	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4232	368-15	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4233	368-16	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4234	369-01	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4235	369-02	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4236	369-03	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4237	369-04	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4238	369-05	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4239	369-06	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4240	369-07	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4241	369-08	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4242	370-01	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4243	370-02	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4244	370-03	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4245	370-04	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4246	370-05	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4247	370-06	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4248	370-07	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4249	370-08	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4250	370-09	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4251	370-10	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4252	370-11	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4253	370-12	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4254	370-13	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4255	370-14	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4256	370-15	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4257	370-16	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4258	370-17	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4259	370-18	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4260	370-19	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4261	370-20	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4262	370-21	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4263	370-22	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4264	370-23	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4265	370-24	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4266	370-25	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4267	370-26	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4268	370-27	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4269	370-28	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4270	370-29	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4271	370-30	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4272	370-31	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4273	370-32	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4274	370-33	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4275	370-34	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4276	370-35	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4277	370-36	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4278	370-37	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4279	370-38	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4280	370-39	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4281	370-40	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4282	370-41	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4283	370-42	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4284	370-43	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4285	370-44	「「わ、				
II	5	5.6	5.6	3							4286	370-45	「「わ、				

語彙						中心文						通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2		1/4の 統括機能		
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤	⑥				文中	文末	文中	文末			
II	E	E.1													4319	372-11	うーん				
II	E	E.1													4320	372-12	男性の「おがしいな。」				
II	E	E.1													4321	373-01	えっと				
II	E	E.1													4322	373-02	すみません。」				
II	E	E.1													4323	374-01	じゃあ			じゃあ	
II	E	E.1													4324	374-02	えっと				
II	E	E.1													4325	374-03	前から				
II	E	E.1													4326	374-04	3番目のですね				
II	E	E.1													4327	374-05	えっと				
II	E	E.1													4328	374-06	真ん中の方に				
II	E	E.1													4329	374-07	聞いてもいいですか。」				
II	E	E.1													4330	375-01	あの				
II	E	E.1													4331	375-02	その				
II	E	E.1													4332	375-03	自分が				
II	E	E.1													4333	375-04	まあ				
II	E	E.1													4334	375-05	生まれた時の				
II	E	E.1													4335	375-06	幼稚園は				
II	E	E.1													4336	375-07	おはと				
II	E	E.1													4337	375-08	思い出しても				
II	E	E.1													4338	375-09	あのー				
II	E	E.1													4339	375-10	何でしょ				
II	E	E.1													4340	375-11	幼稚園か				
II	E	E.1													4341	375-12	保育園かに				
II	E	E.1													4342	375-13	入った前				
II	E	E.1													4343	375-14	そして			そして	
II	E	E.1													4344	375-15	まあ				
II	E	E.1													4345	375-16	幼稚園か				
II	E	E.1													4346	375-17	保育園か				
II	E	E.1													4347	375-18	入ったと				
II	E	E.1													4348	375-19	小学生				
II	E	E.1													4349	375-20	中学生				
II	E	E.1													4350	375-21	高校				
II	E	E.1													4351	375-22	大学、めいぶん				
II	E	E.1													4352	375-23	あの				
II	E	E.1													4353	375-24	覚えてきたと				
II	E	E.1													4354	375-25	思い出しても				
II	E	E.1													4355	375-26	そうした中で				○ 前接
II	E	E.1													4356	375-27	あの				
II	E	E.1													4357	375-28	自分を				
II	E	E.1													4358	375-29	指す				
II	E	E.1													4359	375-30	あの				
II	E	E.1													4360	375-31	人称は				
II	E	E.1													4361	375-32	ずっと				
II	E	E.1													4362	375-33	同じですか。」				
II	E	E.1													4363	376-01	それとも			それとも	
II	E	E.1													4364	376-02	変わってましたか。」				
II	E	E.1													4365	377-01	少しばかり				
II	E	E.1													4366	377-02	変わってきたとすれば				
II	E	E.1													4367	377-03	どんなふうに				
II	E	E.1													4368	377-04	変わってましたか。」				
II	E	E.1													4369	378-01	そうですね				
II	E	E.1													4370	378-02	えっと				
II	E	E.1													4371	378-03	幼稚園か				
II	E	E.1													4372	378-04	幼稚園か				
II	E	E.1													4373	378-05	小学校の低学年ぐらいのころは				
II	E	E.1													4374	378-06	わりと				
II	E	E.1													4375	378-07	「ほくどかか				
II	E	E.1													4376	378-08	さかんな				
II	E	E.1													4377	378-09	「おれですか。」				○ 補注
II	E	E.1													4378	379-01	ただ			ただ	
II	E	E.1													4379	379-02	ま				
II	E	E.1													4380	379-03	合も				
II	E	E.1													4381	379-04	「そうですね」				○ 前接
II	E	E.1													4382	379-05	「おれさんか」				
II	E	E.1													4383	379-06	あの				
II	E	E.1													4384	379-07	使分けも				
II	E	E.1													4385	379-08	している				
II	E	E.1													4386	379-09	場面は				
II	E	E.1													4387	379-10	「あんなですけど」				○ 前接
II	E	E.1													4388	379-11	「少しばかり				
II	E	E.1													4389	379-12	「おれとかま				
II	E	E.1													4390	379-13	増えてきましたし				
II	E	E.1													4391	379-14	もちろん				
II	E	E.1													4392	379-15	ええ				
II	E	E.1													4393	379-16	あのー				
II	E	E.1													4394	379-17	前に				
II	E	E.1													4395	379-18	「おれというに				
II	E	E.1													4396	379-19	フォーマルな				
II	E	E.1													4397	379-20	場では				
II	E	E.1													4398	379-21	「私というの				
II	E	E.1													4399	379-22	「おれというに				
II	E	E.1													4400	380-01	「おれ				
II	E	E.1													4401	380-02	「おれというに				
II	E	E.1													4402	380-03	「おれというに				
II	E	E.1													4403	380-04	「おれというに				
II	E	E.2													4404	381-01	「ま				
II	E	E.2													4405	381-02	「おのお路の中で				
II	E	E.2													4406	381-03	「ま				
II	E	E.2													4407	381-04	「ほくどかか				
II	E	E.2													4408	381-05	「おれ				
II	E	E.2													4409	381-06	「おれ				
II	E	E.2													4410	382-01	「おれ			おれが	
II	E	E.2													4411	382-02	「おれ				
II	E	E.2													4412	382-03	「おれ				
II	E	E.2													4413	382-04	「おれ				
II	E	E.2													4414	382-05	「おれ				
II	E	E.2													4415	382-06	「おれ				○ 前接補注
II	E	E.2													4416	382-07	「おれ			でも	
II	E	E.2													4417	382-08	「おれ				
II	E	E.2													4418	382-09	「おれ				
II	E	E.2													4419	382-10	「おれ				
II	E	E.2													4420	382-11	「おれ				
II	E	E.2													4421	382-12	「おれ			おれには	
II	E	E.2													4422	382-13	「おれ				
II	E	E.2													4423	382-14	「おれ				
II	E																				

話数						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2	1/3の 統括機能	
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤			文中	文末	文中	文末	
II	E	5.4	6.4.1								4483	387-01	もちろん。				
II	E	5.4	6.4.1								4484	387-02	その。				
II	E	5.4	6.4.1								4485	387-03	女子中学生が。				
II	E	5.4	6.4.1								4486	387-04	一時間。				
II	E	5.4	6.4.1								4487	387-05	「ほくほくのま。				
II	E	5.4	6.4.1								4488	387-06	俺。」				
II	E	5.4	6.4.1								4489	387-07	「アースは。				
II	E	5.4	6.4.1								4470	387-08	ありますけれど。				
II	E	5.4	6.4.1								4471	387-09	それは。				
II	E	5.4	6.4.1								4472	387-10	いずれ。				
II	E	5.4	6.4.1								4473	387-11	「消滅していくことになるよ。」				
II	E	5.4	6.4.2								4474	388-01	アース。	そして。			
II	E	5.4	6.4.2								4475	388-02	また。		また。		
II	E	5.4	6.4.2								4476	388-03	あの。				
II	E	5.4	6.4.2								4477	388-04	「女僕がですね。				
II	E	5.4	6.4.2								4478	388-05	「あたしとか。				
II	E	5.4	6.4.2								4479	388-06	「ほくほくのま。				
II	E	5.4	6.4.2								4480	388-07	「確かにもあります。」				
II	E	5.4	6.4.2								4481	389-01	で。				
II	E	5.4	6.4.2								4482	389-02	ま。				
II	E	5.4	6.4.2								4483	389-03	男は。				
II	E	5.4	6.4.2								4484	389-04	あんまり。				
II	E	5.4	6.4.2								4485	389-05	「あたしとか。				
II	E	5.4	6.4.2								4486	389-06	「ほくほくのま。				
II	E	5.4	6.4.2								4487	389-07	「僕わないだろう？」				
II	E	5.4	6.4.2								4488	389-08	「思います。」				
II	E	5.4	6.4.3								4489	390-01	「そんなふうに。」				
II	E	5.4	6.4.3								4490	390-02	まあ。				
II	E	5.4	6.4.3								4491	390-03	あの。				
II	E	5.4	6.4.3								4492	390-04	「それそれ。」				
II	E	5.4	6.4.3								4493	390-05	「性別によっても。」				
II	E	5.4	6.4.3								4494	390-06	「人物の違いっていうのが。」				
II	E	5.4	6.4.3								4495	390-07	「あるでしょうし。」				
II	E	5.5	6.5.1								4496	390-08	「まー。」			まー。	
II	E	5.5	6.5.1								4497	390-09	「アース。」				
II	E	5.5	6.5.1								4498	390-10	「何にしろでも。」				
II	E	5.5	6.5.1								4499	390-11	「変わってみたいということですね。」				
II	E	5.5	6.5.1								4500	391-01	「たとえは。」			たとえは。	
II	E	5.5	6.5.1								4501	391-02	「これは。」				
II	E	5.5	6.5.1								4502	391-03	あの。				
II	E	5.5	6.5.1								4503	391-04	「アース。」				
II	E	5.5	6.5.1								4504	391-05	「お茶室という。」				
II	E	5.5	6.5.1								4505	391-06	「人の。」				
II	E	5.5	6.5.1								4506	391-07	「組合でなければ。」				
II	E	5.5	6.5.1								4507	391-08	「ます。」				
II	E	5.5	6.5.1								4508	391-09	「最初ですね。」				
II	E	5.5	6.5.1								4509	391-10	「面白い。」				
II	E	5.5	6.5.1								4510	391-11	「おちゃんさんですね。」				前編
II	E	5.5	6.5.1								4511	392-01	「そうすると。」				
II	E	5.5	6.5.1								4512	392-02	「周りが。」				
II	E	5.5	6.5.1								4513	392-03	「みんなに。」				
II	E	5.5	6.5.1								4514	392-04	「おちゃんさん。」				
II	E	5.5	6.5.1								4515	392-05	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4516	392-06	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4517	393-01	「そうすると。」				
II	E	5.5	6.5.1								4518	393-02	「自分のことを。」				
II	E	5.5	6.5.1								4519	393-03	「みんな。」				
II	E	5.5	6.5.1								4520	393-04	「おちゃんさん。」				
II	E	5.5	6.5.1								4521	393-05	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4522	393-06	「自分だけ。」				
II	E	5.5	6.5.1								4523	393-07	「おちゃんさんだよ。」				
II	E	5.5	6.5.1								4524	393-08	「聞いて。」				
II	E	5.5	6.5.1								4525	393-09	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4526	393-10	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4527	394-01	「アース。」				
II	E	5.5	6.5.1								4528	394-02	「自分の名前を。」				
II	E	5.5	6.5.1								4529	394-03	「おちゃんさん。」				
II	E	5.5	6.5.1								4530	394-04	「付けるとは。」				
II	E	5.5	6.5.1								4531	394-05	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4532	394-06	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4533	394-07	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4534	394-08	「あー。」				
II	E	5.5	6.5.1								4535	394-09	「アース。」				
II	E	5.5	6.5.1								4536	394-10	「じゃ。」				
II	E	5.5	6.5.1								4537	394-11	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4538	394-12	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4539	394-13	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4540	394-14	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4541	394-15	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4542	395-01	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4543	395-02	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4544	395-03	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4545	395-04	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4546	395-05	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4547	395-06	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4548	395-07	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4549	395-08	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4550	395-09	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4551	395-10	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4552	395-11	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4553	395-12	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4554	396-01	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4555	397-01	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4556	397-02	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4557	397-03	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4558	397-04	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4559	397-05	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4560	397-06	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4561	397-07	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4562	397-08	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4563	397-09	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4564	397-10	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4565	397-11	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4566	397-12	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4567	397-13	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4568	397-14	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4569	397-15	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4570	397-16	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4571	397-17	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4572	397-18	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4573	397-19	「おちゃんさんって。」				
II	E	5.5	6.5.1								4574	397-20	「おちゃんさんって。」				

語彙						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	語彙表現		1/2		1/3の 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
II	E	6.5	6.5.1							4607	400-01	念					
II	E	6.5	6.5.1							4608	400-02	押し分けるって					
II	E	6.5	6.5.1							4609	400-03	おっしやってくだいしなげども、					
II	E	6.5	6.5.1							4610	400-04	おっしや					
II	E	6.5	6.5.1							4611	400-05	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4612	400-06	おんわけてすけれど、					
II	E	6.5	6.5.1							4613	400-07	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4614	400-08	まだですね、					
II	E	6.5	6.5.1							4615	400-09	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4616	400-10	反抗期が					
II	E	6.5	6.5.1							4617	400-11	通まてくるとですね、					
II	E	6.5	6.5.1							4618	400-12	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4619	400-13	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4620	400-14	大学生くらいに					
II	E	6.5	6.5.1							4621	400-15	なってるよ					
II	E	6.5	6.5.1							4622	400-16	なんか					
II	E	6.5	6.5.1							4623	400-17	おっしやって					
II	E	6.5	6.5.1							4624	400-18	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4625	400-19	おっしやって					
II	E	6.5	6.5.1							4626	400-20	自分が					
II	E	6.5	6.5.1							4627	400-21	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4628	400-22	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4629	400-23	なってるんでね、					
II	E	6.5	6.5.1							4630	401-01	アース	アースするよ、			○	前接
II	E	6.5	6.5.1							4631	401-02	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4632	401-03	「おっしやって」					
II	E	6.5	6.5.1							4633	401-04	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4634	401-05	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4635	401-06	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4636	401-07	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4637	402-01	アース	アース、				
II	E	6.5	6.5.1							4638	402-02	おっしやってアース					
II	E	6.5	6.5.1							4639	402-03	アース	アース、				
II	E	6.5	6.5.1							4640	402-04	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4641	402-05	おっしや					
II	E	6.5	6.5.1							4642	402-06	おっしや					
II	E	6.5	6.5.1							4643	402-07	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4644	402-08	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4645	402-09	「おっしや」					
II	E	6.5	6.5.1							4646	402-10	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4647	402-11	アース	アース、				
II	E	6.5	6.5.1							4648	402-12	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4649	403-01	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4650	403-02	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4651	403-03	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4652	403-04	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4653	403-05	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4654	403-06	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4655	403-07	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4656	403-08	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4657	403-09	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4658	403-10	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4659	403-11	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4660	403-12	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4661	403-13	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4662	403-14	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4663	403-15	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4664	403-16	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4665	403-17	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4666	403-18	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4667	403-19	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4668	404-01	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4669	404-02	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4670	404-03	アース	アース、				
II	E	6.5	6.5.1							4671	404-04	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4672	404-05	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4673	404-06	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4674	404-07	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4675	404-08	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4676	404-09	アース	アース、				
II	E	6.5	6.5.1							4677	404-10	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4678	404-11	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4679	404-12	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4680	404-13	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4681	404-14	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4682	404-15	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4683	404-16	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4684	405-01	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4685	405-02	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4686	405-03	アース	アース、				
II	E	6.5	6.5.1							4687	405-04	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4688	405-05	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4689	405-06	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4690	405-07	アース					
II	E	6.5	6.5.1							4691	405-08	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4692	406-01	アース	アース、				
II	E	6.5	6.5.2							4693	406-02	アース	アース、				
II	E	6.5	6.5.2							4694	406-03	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4695	406-04	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4696	406-05	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4697	406-06	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4698	406-07	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4699	406-08	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4700	406-09	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4701	406-10	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4702	407-01	アース	アース、				
II	E	6.5	6.5.2							4703	407-02	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4704	407-03	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4705	407-04	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4706	407-05	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4707	407-06	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4708	407-07	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4709	407-08	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4710	407-09	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4711	407-10	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4712	407-11	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4713	407-12	アース	アース、				
II	E	6.5	6.5.2							4714	407-13	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4715	407-14	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4716	407-15	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4717	407-16	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4718	408-01	アース	アース、				
II	E	6.5	6.5.2							4719	408-02	アース					
II	E	6.5	6.5.2							4720	408-03	アース					
II	E	6.5	6.5.2														

話数						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		T		Tの 統括機能	
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末		
II	5	5	5	2							4751	411-03	入る					
II	5	5	5	2							4752	411-04	いそし					
II	5	5	5	2							4753	411-05	「私は					
II	5	5	5	2							4754	411-06	「僕がいない。」「っていい					
II	5	5	5	2							4755	411-07	入る					
II	5	5	5	2							4756	411-08	「入るんですね。」				○	前提準備
II	5	5	5	2							4757	412-01	「開けな					
II	5	5	5	2							4758	412-02	「開いているけど					
II	5	5	5	2							4759	412-03	「目分は					
II	5	5	5	2							4760	412-04	「僕がいない。」					
II	5	5	5	2							4761	413-01	「あの一					
II	5	5	5	2							4762	413-02	「最高					
II	5	5	5	2							4763	413-03	「その一					
II	5	5	5	2							4764	413-04	「えっと、					
II	5	5	5	2							4765	413-05	「うちがいろいろは					
II	5	5	5	2							4766	413-06	「なんとなく、					
II	5	5	5	2							4767	413-07	「その一					
II	5	5	5	2							4768	413-08	「おかげ					
II	5	5	5	2							4769	413-09	「その					
II	5	5	5	2							4770	413-10	「はくし					
II	5	5	5	2							4771	413-11	「服たよな					
II	5	5	5	2							4772	413-12	「印章がある					
II	5	5	5	2							4773	413-13	「言葉なんですね。」				○	発言前提
II	5	5	5	2							4774	414-01	「てかか					
II	5	5	5	2							4775	414-02	「あの一					
II	5	5	5	2							4776	414-03	「少し					
II	5	5	5	2							4777	414-04	「その一					
II	5	5	5	2							4778	414-05	「本人は					
II	5	5	5	2							4779	414-06	「はってり					
II	5	5	5	2							4780	414-07	「既婚ですけどい					
II	5	5	5	2							4781	414-08	「彼持ちも					
II	5	5	5	2							4782	414-09	「出てくる」					
II	5	5	5	2							4783	415-01	「そして、					
II	5	5	5	2							4784	415-02	「まあ					
II	5	5	5	2							4785	415-03	「まあ					
II	5	5	5	2							4786	415-04	「無名に					
II	5	5	5	2							4787	415-05	「社会人					
II	5	5	5	2							4788	415-06	「なるよ					
II	5	5	5	2							4789	415-07	「「私」というような					
II	5	5	5	2							4790	415-08	「新しい方					
II	5	5	5	2							4791	415-09	「おむねのほうか					
II	5	5	5	2							4792	415-10	「おむねのほうか					
II	5	5	5	2							4793	415-11	「ただ、					
II	5	5	5	2							4794	416-02	「ポイントが					
II	5	5	5	2							4795	416-03	「あって、					
II	5	5	5	2							4796	416-04	「あの					
II	5	5	5	2							4797	416-05	「まあ、					
II	5	5	5	2							4798	416-06	「おむねのほうか					
II	5	5	5	2							4799	416-07	「おむねのほうか					
II	5	5	5	2							4800	417-01	「これ、					
II	5	5	5	2							4801	417-02	「僕のもの					
II	5	5	5	2							4802	417-03	「見てみるよ					
II	5	5	5	2							4803	417-04	「見てみるよ					
II	5	5	5	2							4804	417-05	「より					
II	5	5	5	2							4805	417-06	「はっさ					
II	5	5	5	2							4806	417-07	「わかるんですけど、(スライ切り音)				○	前提
II	5	5	5	2							4807	418-01	「ちょっと					
II	5	5	5	2							4808	418-02	「行ってみますね。」					
II	5	5	5	2							4809	419-01	「で、					
II	5	5	5	2							4810	419-02	「えっと					
II	5	5	5	2							4811	419-03	「あのもの					
II	5	5	5	2							4812	419-04	「見てみるよ					
II	5	5	5	2							4813	419-05	「あの一					
II	5	5	5	2							4814	419-06	「それは					
II	5	5	5	2							4815	419-07	「えっと、					
II	5	5	5	2							4816	419-08	「男子から					
II	5	5	5	2							4817	419-09	「父親に					
II	5	5	5	2							4818	419-10	「呼びかける					
II	5	5	5	2							4819	419-11	「アスさんですけど、				○	前提
II	5	5	5	2							4820	419-12	「あの					
II	5	5	5	2							4821	419-13	「それは					
II	5	5	5	2							4822	419-14	「小さい頃はですね					
II	5	5	5	2							4823	419-15	「「スライ」ってなんですかね。」				○	前提
II	5	5	5	2							4824	420-01	「そして、					
II	5	5	5	2							4825	420-02	「それなんです					
II	5	5	5	2							4826	420-03	「あの					
II	5	5	5	2							4827	420-04	「お父さんに					
II	5	5	5	2							4828	420-05	「なって、					
II	5	5	5	2							4829	420-06	「お父さんに					
II	5	5	5	2							4830	420-07	「なって、					
II	5	5	5	2							4831	420-08	「で、					
II	5	5	5	2							4832	420-09	「まあ、					
II	5	5	5	2							4833	420-10	「おや、に					
II	5	5	5	2							4834	420-11	「なって、					
II	5	5	5	2							4835	420-12	「で、					
II	5	5	5	2							4836	420-13	「まあ、					
II	5	5	5	2							4837	420-14	「そして、					
II	5	5	5	2							4838	420-15	「まあ、					
II	5	5	5	2							4839	420-16	「ま					
II	5	5	5	2							4840	420-17	「お父さんって					
II	5	5	5	2							4841	420-18	「眠ってる					
II	5	5	5	2							4842	420-19	「寝癖は					
II	5	5	5	2							4843	420-20	「おむね					
II	5	5	5	2							4844	420-21	「おむねのほうか					
II	5	5	5	2							4845	420-22	「できるだけ					
II	5	5	5	2							4846	420-23	「僕は					
II	5	5	5	2							4847	420-24	「なんとなく					
II	5	5	5	2							4848	420-25	「僕になんかいいところがあるよ」					
II	5	5	5	2							4849	420-26	「あの					
II	5	5	5	2							4850	420-27	「おむねのほうか					
II	5	5	5	2							4851	421-01	「で、					
II	5	5	5	2							4852	421-02	「あの一					
II	5	5	5	2							4853	421-03	「どうして、					
II	5	5	5	2							4854	421-04	「おむねのほうか					
II	5	5	5	2							4855	421-05	「おむねのほうか					
II	5	5	5	2							4856	421-06	「同じように					
II	5	5	5	2							4857	421-07	「その					
II	5	5	5	2							4858	421-08	「まあ、					
II	5	5	5	2							4859	421-09	「母親に対しては					
II	5	5	5	2							4860	421-10	「マッパ、					
II	5	5	5	2							4861	421-11	「おむね」					
II	5	5	5	2							4862	421-12	「おむね」					
II	5	5	5</															

語彙						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2	1/4の 統括機能	
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤			文中	文末	文中	文末	
II	5	6.9	6.6	3							4895	424-01	そうすると				
II	5	6.9	6.6	3							4896	424-02	まあ				
II	5	6.9	6.6	3							4897	424-03	「お母さん!」という				
II	5	6.9	6.6	3							4898	424-04	置い方に				
II	5	6.9	6.6	3							4899	424-05	なる!				
II	5	6.9	6.6	3							4900	425-01	でも、				
II	5	6.9	6.6	3							4901	425-02	「お母さん!」っていうのも、				
II	5	6.9	6.6	3							4902	425-03	「おま				
II	5	6.9	6.6	3							4903	425-04	付けているわけや				
II	5	6.9	6.6	3							4904	425-05	それば、				
II	5	6.9	6.6	3							4905	425-06	まあ、				
II	5	6.9	6.6	3							4906	425-07	「お母さん!」か				
II	5	6.9	6.6	3							4907	425-08	「おま!」とか				
II	5	6.9	6.6	3							4908	425-09	おんなして、				
II	5	6.9	6.6	3							4909	425-10	「おま				
II	5	6.9	6.6	3							4910	425-11	付けているのは、				
II	5	6.9	6.6	3							4911	425-12	わがま				
II	5	6.9	6.6	3							4912	425-13	お母が				
II	5	6.9	6.6	3							4913	425-14	ん、				
II	5	6.9	6.6	3							4914	425-15	すま				
II	5	6.9	6.6	3							4915	425-16	言葉				
II	5	6.9	6.6	3							4916	425-17	あるいは、				
II	5	6.9	6.6	3							4917	425-18	調ね				
II	5	6.9	6.6	3							4918	425-19	言葉に付して				
II	5	6.9	6.6	3							4919	425-20	よく				
II	5	6.9	6.6	3							4920	425-21	すま				
II	5	6.9	6.6	3							4921	425-22	ま、				
II	5	6.9	6.6	3							4922	425-23	言葉掛りでも、				
II	5	6.9	6.6	3							4923	425-24	言われるものですから、				
II	5	6.9	6.6	3							4924	425-25	「おま				
II	5	6.9	6.6	3							4925	425-26	付けてるのよ、				
II	5	6.9	6.6	3							4926	425-27	次第に				
II	5	6.9	6.6	3							4927	425-28	取すかしく				
II	5	6.9	6.6	3							4928	425-29	なつて、				
II	5	6.9	6.6	3							4929	425-30	「お母さん!」				
II	5	6.9	6.6	3							4930	425-31	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4931	426-01	でも、				
II	5	6.9	6.6	3							4932	426-02	「お母さん!」なんでも、				
II	5	6.9	6.6	3							4933	426-03	ちよつと、				
II	5	6.9	6.6	3							4934	426-04	まあ、				
II	5	6.9	6.6	3							4935	426-05	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4936	426-06	なつてくると、				
II	5	6.9	6.6	3							4937	426-07	ま、				
II	5	6.9	6.6	3							4938	426-08	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4939	426-09	まあ、				
II	5	6.9	6.6	3							4940	426-10	高学年				
II	5	6.9	6.6	3							4941	426-11	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4942	426-12	なる!」と				
II	5	6.9	6.6	3							4943	426-13	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4944	426-14	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4945	427-01	で、				
II	5	6.9	6.6	3							4946	427-02	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4947	427-03	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4948	427-04	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4949	427-05	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4950	427-06	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4951	427-07	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4952	427-08	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4953	427-09	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4954	427-10	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4955	427-11	あるいは、				
II	5	6.9	6.6	3							4956	427-12	まあ、				
II	5	6.9	6.6	3							4957	427-13	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4958	427-14	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4959	427-15	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4960	427-16	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4961	427-17	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4962	427-18	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4963	427-19	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4964	427-20	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4965	427-21	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4966	427-22	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4967	427-23	あるいは、				
II	5	6.9	6.6	3							4968	427-24	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4969	427-25	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4970	427-26	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4971	427-27	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4972	427-28	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4973	427-29	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4974	427-30	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4975	427-31	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4976	427-32	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4977	427-33	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4978	427-34	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4979	427-35	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4980	427-36	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4981	427-37	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4982	427-38	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4983	427-39	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4984	427-40	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4985	427-41	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4986	427-42	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4987	427-43	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4988	427-44	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4989	427-45	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	3							4990	427-46	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	4							4991	428-01	ところが、				
II	5	6.9	6.6	4							4992	428-02	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	4							4993	428-03	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	4							4994	428-04	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	4							4995	428-05	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	4							4996	428-06	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	4							4997	428-07	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	4							4998	428-08	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	4							4999	428-09	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	4							5000	428-10	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	4							5001	429-01	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	4							5002	429-02	「おま!」に答えておいて、				
II	5	6.9	6.6	4							5003						

話数					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		7/8	1/8の 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5183	442-31	見ています				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5184	442-32	わかってくるわけですか				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5185	443-01	で				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5186	443-02	えっと				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5187	443-03	その上のなな				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5188	443-04	アイデンティティに				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5189	443-05	で				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5190	443-06	相ますというところから「スライ切り替え」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5191	443-07	若まていくよ				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5192	443-08	その				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5193	443-09	まあ				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5194	443-10	「おついでにいろいろに				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5195	443-11	書きまじりたけれど				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5196	443-12	あのー				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5197	443-13	キャラクター作り				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5198	443-14	設定つ				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5199	443-15	つ				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5200	443-16	つまり				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5201	443-17	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5202	443-18	アイデンティティを				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5203	443-19	持っている				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5204	443-20	入は				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5205	443-21	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5206	443-22	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.1						5207	443-23	「なるんだ」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5208	444-01	たとえば				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5209	444-02	まあ				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5210	444-03	もちろん				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5211	444-04	「書きまじりた」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5212	444-05	性別で分れば				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5213	444-06	男性の場合は				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5214	444-07	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5215	444-08	「おれ」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5216	444-09	で				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5217	444-10	女性のキャラクターの場合は				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5218	444-11	「あは」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5219	444-12	「うちに」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5220	444-13	なるでしょうし				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5221	444-14	「単位でい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5222	444-15	「少」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5223	444-16	「少」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5224	444-17	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5225	444-18	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5226	444-19	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5227	444-20	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5228	444-21	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5229	444-22	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5230	444-23	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5231	444-24	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5232	444-25	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5233	444-26	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5234	444-27	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5235	444-28	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5236	444-29	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5237	444-30	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5238	444-31	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5239	444-32	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5240	444-33	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5241	444-34	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5242	444-35	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5243	444-36	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5244	444-37	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5245	444-38	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5246	444-39	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5247	444-40	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5248	444-41	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5249	444-42	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5250	444-43	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5251	444-44	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5252	444-45	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5253	444-46	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5254	444-47	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5255	444-48	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5256	444-49	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5257	444-50	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5258	444-51	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5259	444-52	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.2						5260	444-53	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5261	445-01	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5262	445-02	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5263	445-03	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5264	445-04	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5265	445-05	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5266	445-06	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5267	445-07	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5268	446-01	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5269	446-02	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5270	446-03	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5271	446-04	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5272	446-05	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5273	446-06	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5274	446-07	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5275	446-08	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5276	446-09	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5277	446-10	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5278	446-11	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5279	447-01	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5280	447-02	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5281	447-03	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5282	448-01	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5283	448-02	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5284	448-03	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.3						5285	448-04	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.4						5286	449-01	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.4						5287	449-02	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.4						5288	449-03	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.4						5289	449-04	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.4						5290	449-05	「はい」				
II	6	6.8	6.8.1	6.8.1.4						5291	450-01	「はい」				
II	6															

話数					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2		1/4の 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5327	451-20	ドラえもん「はか					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5328	451-21	話「出されたら、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5329	451-22	ちよつと					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5330	451-23	それは					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5331	451-24	それで					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5332	451-25	誰か誰か					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5333	451-26	おんなですわね。」					前掲
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5334	452-01	おっぼり					前掲
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5335	452-02	なんとなく					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5336	452-03	「ほくじやなまかいけないんですね。」					換言
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5337	452-04	で、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5338	452-05	「シャインが、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5339	452-06	「私は					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5340	453-04	「シャイン、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5341	453-05	「おき大持、」					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5342	453-06	「おい出したら、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5343	453-07	「それは					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5344	453-08	「それで、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5345	453-09	「太婆などになりますよ。」					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5346	454-01	「ですから、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5347	454-02	「おっぼり、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5348	454-03	「おれ様キャブですからね、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5349	454-04	「おれ、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5350	454-05	「シャインは					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5351	454-06	「おれ」じやなまかいけない。」と、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5352	455-01	「スネ夫は、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5353	455-02	まあ、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5354	455-03	「その、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5355	455-04	「おれ、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5356	455-05	「あの、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5357	455-06	「キャラクターでしようけれど、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5358	455-07	「あの一					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5359	455-08	「おっぼり、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5360	455-09	「その、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5361	455-10	「オット					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5362	455-11	「概念的な					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5363	455-12	「お金持ちの子供って、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5364	455-13	「なんか、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5365	455-14	「ほくじやないように					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5366	455-15	「おべえ、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5367	455-16	「おれはさあわけですね。」					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5368	456-01	で、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5369	456-02	「ま、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5370	456-03	「のび太は、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5371	456-04	「ほくじですけれども、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5372	456-05	「あはは、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5373	456-06	「オット、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5374	456-07	「おれが、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5375	456-08	「おれを、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5376	456-09	「おれをさますよね。」					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5377	457-01	「それから、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5378	457-02	「まあ、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5379	457-03	「静香あん、いさば、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5380	457-04	「あはし、いろいろ、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5381	457-05	「なるし、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5382	457-06	「いろいろ、					
II	6	8.8	6.8.1	6.8.1.5						5383	457-07	「おれをさすわけです。(B)(スライド切り替え)」					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5384	458-01	で、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5385	458-02	「さ、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5386	458-03	「一つですけれども、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5387	458-04	「スーと、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5388	458-05	「これは、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5389	458-06	「あの一					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5390	458-07	「おれなま前太郎」とい、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5391	458-08	「おれ、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5392	458-09	「アニメ、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5393	458-10	「NHKの教育テレビで、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5394	458-11	「おっている、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5395	458-12	「アニメですけれども、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5396	458-13	で、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5397	458-14	「あの一					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5398	458-15	「そこには、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5399	458-16	「その、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5400	458-17	「まあ、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5401	458-18	「おれ、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5402	458-19	「おれ、おれ、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5403	458-20	「出てくる、」					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5404	459-01	で、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5405	459-02	「まあ、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5406	459-03	「おれなま前太郎」とい、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5407	459-04	「まあ、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5408	459-05	「おれなま前太郎、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5409	459-06	「おれなま前太郎、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5410	459-07	「あの一					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5411	459-08	「一人前の					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5412	459-09	「おれな					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5413	459-10	「おれな、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5414	459-11	「おれな、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5415	459-12	「お、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5416	459-13	「おれな、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5417	459-14	「お、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5418	459-15	「おれな、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5419	459-16	「おれな、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5420	459-17	「お、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5421	459-18	「おれな、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5422	459-19	「おれな、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5423	459-20	「お、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5424	459-21	「お、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5425	459-22	「お、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5426	459-23	「お、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5427	459-24	「お、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5428	459-25	「お、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5429	459-26	「お、					
II	6	8.8	6.8.2	6.8.2.1						5430	459-27	「お、			</		

話数						中心文						通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		T		Tの 注活機能		
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤	⑥				文中	文末	文中	文末			
II	6	8.8	6.8.2									5471	462-04	甘さん焼いっ							
II	6	8.8	6.8.2									5472	462-05	ぞうしう							
II	6	8.8	6.8.2									5473	462-06	キャラクターですけれども							
II	6	8.8	6.8.2									5474	462-07	その							
II	6	8.8	6.8.2									5475	462-08	鎌倉は							
II	6	8.8	6.8.2									5476	462-09	なべがは							
II	6	8.8	6.8.2									5477	462-10	ぼくは							
II	6	8.8	6.8.2									5478	462-11	話すということになります」							
II	6	8.8	6.8.2									5479	463-01	それから							
II	6	8.8	6.8.2									5480	463-02	えっどー							
II	6	8.8	6.8.2									5481	463-03	乗り物いろいろ							
II	6	8.8	6.8.2									5482	463-04	えーと							
II	6	8.8	6.8.2									5483	463-05	これは							
II	6	8.8	6.8.2									5484	463-06	彼は							
II	6	8.8	6.8.2									5485	463-07	えーと							
II	6	8.8	6.8.2									5486	463-08	け							
II	6	8.8	6.8.2									5487	463-09	大塚が何なんですか」						○	前接
II	6	8.8	6.8.2									5488	464-01	で							
II	6	8.8	6.8.2									5489	464-02	あの							
II	6	8.8	6.8.2									5490	464-03	風呂が							
II	6	8.8	6.8.2									5491	464-04	いなくてすね							
II	6	8.8	6.8.2									5492	464-05	まあ							
II	6	8.8	6.8.2									5493	464-06	お風呂に							
II	6	8.8	6.8.2									5494	464-07	お風呂の							
II	6	8.8	6.8.2									5495	464-08	強い							
II	6	8.8	6.8.2									5496	464-09	キャラクターで							
II	6	8.8	6.8.2									5497	464-10	でも							
II	6	8.8	6.8.2									5498	464-11	まあ							
II	6	8.8	6.8.2									5499	464-12	別に							
II	6	8.8	6.8.2									5500	464-13	だから							
II	6	8.8	6.8.2									5501	464-14	押れるものは							
II	6	8.8	6.8.2									5502	464-15	お盆というので							
II	6	8.8	6.8.2									5503	464-16	お盆に対して							
II	6	8.8	6.8.2									5504	464-17	お盆がいろいろ							
II	6	8.8	6.8.2									5505	464-18	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5506	464-19	キャラクターとして							
II	6	8.8	6.8.2									5507	464-20	描かれているわけですが							
II	6	8.8	6.8.2									5508	464-21	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5509	464-22	まあ							
II	6	8.8	6.8.2									5510	464-23	お盆の強さみたいなものが							
II	6	8.8	6.8.2									5511	464-24	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5512	464-25	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5513	464-26	まあ							
II	6	8.8	6.8.2									5514	464-27	お盆はいろいろ							
II	6	8.8	6.8.2									5515	464-28	お盆はいろいろ							
II	6	8.8	6.8.2									5516	464-29	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5517	464-30	お盆はいろいろ							
II	6	8.8	6.8.2									5518	464-31	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5519	464-32	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5520	464-33	お盆はいろいろ							
II	6	8.8	6.8.2									5521	465-01	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5522	465-02	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5523	465-03	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5524	465-04	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5525	465-05	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5526	465-06	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5527	465-07	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5528	465-08	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5529	465-09	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5530	465-10	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5531	465-11	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5532	465-12	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5533	465-13	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5534	465-14	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5535	465-15	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5536	465-16	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5537	465-17	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5538	465-18	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5539	465-19	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5540	465-20	お盆は						○	前接
II	6	8.8	6.8.2									5541	465-21	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5542	465-22	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5543	465-23	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5544	465-24	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5545	465-25	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5546	465-26	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5547	465-27	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5548	465-28	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5549	465-29	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5550	465-30	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5551	465-31	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5552	465-32	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5553	465-33	お盆は							
II	6	8.8	6.8.2									5554	465-34	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5555	466-01	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5556	466-02	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5557	467-01	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5558	467-02	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5559	467-03	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5560	467-04	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5561	467-05	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5562	467-06	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5563	467-07	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5564	467-08	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5565	467-09	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5566	467-10	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5567	467-11	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5568	467-12	お盆は							
II	7	1.7	1.1									5569	467-13	お盆は		</					

話数						中心文						通し 番号	CU番号	X単位	確認表現		T/F		T/Fの 統括機能	
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤	⑥				文中	文末	文中	文末		
7.1.7.1.3												5615	469-09	あのー						
7.1.7.1.3												5616	469-10	離れ手						
7.1.7.1.3												5617	469-11	たとえば						
7.1.7.1.3												5618	469-12	離れ手によってですね						
7.1.7.1.3												5619	469-13	どう						
7.1.7.1.3												5620	469-14	あるかというところが						
7.1.7.1.3												5621	469-15	あつて						
7.1.7.1.3												5622	469-16	あのー						
7.1.7.1.3												5623	469-17	たとえば						
7.1.7.1.3												5624	469-18	あのー						
7.1.7.1.3												5625	469-19	同じ						
7.1.7.1.3												5626	469-20	その						
7.1.7.1.3												5627	469-21	あつて						
7.1.7.1.3												5628	469-22	サークルですね						
7.1.7.1.3												5629	469-23	あの						
7.1.7.1.3												5630	469-24	体育言葉か						
7.1.7.1.3												5631	469-25	なにが						
7.1.7.1.3												5632	469-26	サークルに						
7.1.7.1.3												5633	469-27	入っていたとしてですけども						
7.1.7.1.3												5634	469-28	そうすると						
7.1.7.1.3												5635	469-29	後輩に対しては						
7.1.7.1.3												5636	469-30	「おれ」というように						
7.1.7.1.3												5637	469-31	自分のとき						
7.1.7.1.3												5638	469-32	「おれ」						
7.1.7.1.3												5639	470-01	一方						
7.1.7.1.3												5640	470-02	先輩に対しては						
7.1.7.1.3												5641	470-03	「ほく」という						
7.1.7.1.3												5642	470-04	言い方						
7.1.7.1.3												5643	470-05	「する」						
7.1.7.1.3												5644	471-01	で						
7.1.7.1.3												5645	471-02	OB						
7.1.7.1.3												5646	471-03	OGに対しては						
7.1.7.1.3												5647	471-04	「私」という						
7.1.7.1.3												5648	471-05	言い方						
7.1.7.1.3												5649	471-06	「する」ということが						
7.1.7.1.3												5650	471-07	あるかというところが						
7.1.7.1.3												5651	471-08	「思います」						目解
7.1.7.1.3												5652	472-01	こんなふうな						
7.1.7.1.3												5653	472-02	えっとー						
7.1.7.1.3												5654	472-03	押してあげ						
7.1.7.1.3												5655	472-04	あるじゃないですか						
7.1.7.1.4												5656	473-01	「私」						
7.1.7.1.4												5657	473-02	その						
7.1.7.1.4												5658	473-03	場面でですけども						
7.1.7.1.4												5659	473-04	たとえば						
7.1.7.1.4												5660	473-05	サークルの時は						
7.1.7.1.4												5661	473-06	「自分」						
7.1.7.1.4												5662	473-07	「おれ」を「ア」として						
7.1.7.1.4												5663	473-08	サークル活動を						
7.1.7.1.4												5664	473-09	しているんですけども						
7.1.7.1.4												5665	473-10	ボミの中では						
7.1.7.1.4												5666	473-11	「ほく」						
7.1.7.1.4												5667	473-12	「ほく」を「ア」としてですね						
7.1.7.1.4												5668	473-13	あの						
7.1.7.1.4												5669	473-14	発言を「あり						
7.1.7.1.4												5670	473-15	発言を「あり						
7.1.7.1.4												5671	473-16	「する」と						
7.1.7.1.4												5672	474-01	で						
7.1.7.1.4												5673	474-02	発言に						
7.1.7.1.4												5674	474-03	なるよ						
7.1.7.1.4												5675	474-04	これは						
7.1.7.1.4												5676	474-05	あの						
7.1.7.1.4												5677	474-06	中身に						
7.1.7.1.4												5678	474-07	「あるか」というのが						
7.1.7.1.4												5679	474-08	「私」は						
7.1.7.1.4												5680	474-09	「なるよ」という						
7.1.7.1.5												5681	475-01	あるいは						
7.1.7.1.5												5682	475-02	「思います」						
7.1.7.1.5												5683	475-03	これは						
7.1.7.1.5												5684	475-04	あ						
7.1.7.1.5												5685	475-05	「体育言葉か						
7.1.7.1.5												5686	475-06	「体育言葉か						
7.1.7.1.5												5687	475-07	「そして						
7.1.7.1.5												5688	475-08	また						
7.1.7.1.5												5689	475-09	「どう」						
7.1.7.1.5												5690	475-10	「発言」に						
7.1.7.1.5												5691	475-11	「思いますか」ということですけども						
7.1.7.1.5												5692	475-01	これは						
7.1.7.1.5												5693	475-02	なるよ						
7.1.7.1.5												5694	475-03	たとえば						
7.1.7.1.5												5695	475-04	あのー						
7.1.7.1.5												5696	475-05	「センター」以外の発言なんです						
7.1.7.1.5												5697	475-06	「おれ」というんですね						
7.1.7.1.5												5698	475-07	書き込みを						
7.1.7.1.5												5699	475-08	「する」						
7.1.7.1.5												5700	477-01	ところが						
7.1.7.1.5												5701	477-02	「目」						
7.1.7.1.5												5702	477-03	「ついで」						
7.1.7.1.5												5703	477-04	「ブロック」						
7.1.7.1.5												5704	477-05	あつて						
7.1.7.1.5												5705	477-06	「そこで」						
7.1.7.1.5												5706	477-07	「ほく」として						
7.1.7.1.5												5707	477-08	「思っています」						
7.1.7.1.5												5708	478-01	でも						
7.1.7.1.5												5709	478-02	論文を						
7.1.7.1.5												5710	478-03	書く時は						
7.1.7.1.5												5711	478-04	「おれ」か						
7.1.7.1.5												5712	478-05	「ほく」か						
7.1.7.1.5												5713	478-06	「あるか」というのは「ほく」ではないので						
7.1.7.1.5												5714	478-07	「私」というのが						
7.1.7.1.5												5715	478-08	「思っています」						
7.1.7.1.5												5716	479-01	こんなふうな						
7.1.7.1.5												5717	479-02	「えーばり」						
7.1.7.1.5												5718	479-03	「思っています」						目解
7.1.7.1.5												5719	479-04	「思っています」						
7.																				

話数						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		T/F		T/Fの 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
II	7	7.3								5903	492-34	その					
II	7	7.3								5904	492-35	文末表現などを					
II	7	7.3								5905	492-36	手振かりにですね。					
II	7	7.3								5906	492-37	自然と。					
II	7	7.3								5907	492-38	その。					
II	7	7.3								5908	492-39	「何でか」					
II	7	7.3								5909	492-40	「私とか」					
II	7	7.3								5910	492-41	「あなたとかいろいろを」					
II	7	7.3								5911	492-42	表現しなくても。					
II	7	7.3								5912	492-43	「指示して」					
II	7	7.3								5913	492-44	「聞いていろいろことなんです。」				○	換音
II	7	7.3								5914	492-45	「あとさげ」	たとえげ。				
II	7	7.3								5915	492-46	「さつぱり」					
II	7	7.3								5916	492-47	Aと					
II	7	7.3								5917	492-48	Bの					
II	7	7.3								5918	492-49	「会話をすけれども」					
II	7	7.3								5919	492-50	「さつぱり」					
II	7	7.3								5920	492-51	「聞いてる」					
II	7	7.3								5921	492-52	「押ってたら」					
II	7	7.3								5922	492-53	「聞いて」					
II	7	7.3								5923	492-54	「いいよ」					
II	7	7.3								5924	492-55	「押しつけたげる」					
II	7	7.3								5925	492-56	「おん」					
II	7	7.3								5926	492-57	「お話をすね」					
II	7	7.3								5927	492-58	「ところが」	ところが				
II	7	7.3								5928	492-59	「主語」					
II	7	7.3								5929	492-60	「復習するよ」					
II	7	7.3								5930	492-61	「本家などに合わせてですね」					
II	7	7.3								5931	492-62	「あなたに」					
II	7	7.3								5932	492-63	「さつぱり」					
II	7	7.3								5933	492-64	「押ってたら」					
II	7	7.3								5934	492-65	「あなたに」					
II	7	7.3								5935	492-66	「押ってたら」					
II	7	7.3								5936	492-67	「あなたに」					
II	7	7.3								5937	492-68	「おん」					
II	7	7.3								5938	492-69	「聞いて」					
II	7	7.3								5939	492-70	「いいよ」					
II	7	7.3								5940	492-71	「あなたに」					
II	7	7.3								5941	492-72	「あ」					
II	7	7.3								5942	492-73	「私に」					
II	7	7.3								5943	492-74	「あなたに」					
II	7	7.3								5944	492-75	「話してあげる」					
II	7	7.3								5945	492-76	「どう」					
II	7	7.3								5946	492-77	「さつぱり」					
II	7	7.3								5947	492-78	「話してあげる」					
II	7	7.3								5948	492-79	「つまり」	つまり				
II	7	7.3								5949	492-80	「お話をすね」					
II	7	7.3								5950	492-81	「さつぱり」					
II	7	7.3								5951	492-82	「意味で」					
II	7	7.3								5952	492-83	「ま」					
II	7	7.3								5953	492-84	「日本語っていろいろ」					
II	7	7.3								5954	492-85	「言葉」					
II	7	7.3								5955	492-86	「いろいろ」					
II	7	7.3								5956	492-87	「言葉」					
II	7	7.3								5957	492-88	「いろいろ」					
II	7	7.3								5958	492-89	「日本語っていろいろ」					
II	7	7.3								5959	492-90	「つまり」	つまり				
II	7	7.3								5960	492-91	「あ」					
II	7	7.3								5961	492-92	「お話をすね」					
II	7	7.3								5962	492-93	「わかること」					
II	7	7.3								5963	492-94	「できるだけ」					
II	7	7.3								5964	492-95	「言葉に」					
II	7	7.3								5965	492-96	「知らない」					
II	7	7.3								5966	492-97	「話さないとする」					
II	7	7.3								5967	492-98	「相手の」					
II	7	7.3								5968	492-99	「強い」					
II	7	7.3								5969	493-00	「日本語なんです」				○	換音
II	7	7.3								5970	493-01	「で」	で				
II	7	7.3								5971	493-02	「ですから」	ですから				
II	7	7.3								5972	493-03	「の」					
II	7	7.3								5973	493-04	「件名書のように」					
II	7	7.3								5974	493-05	「私とか」					
II	7	7.3								5975	493-06	「あなたのように」					
II	7	7.3								5976	493-07	「目の前に」					
II	7	7.3								5977	493-08	「おん」					
II	7	7.3								5978	493-09	「話してあげる」					
II	7	7.3								5979	493-10	「の」					
II	7	7.3								5980	493-11	「文の構造によって」					
II	7	7.3								5981	493-12	「復習できる限りは」					
II	7	7.3								5982	493-13	「基本的に」					
II	7	7.3								5983	493-14	「言わない」					
II	7	7.3								5984	493-15	「おん」					
II	7	7.3								5985	493-16	「その」					
II	7	7.3								5986	493-17	「よく」					
II	7	7.3								5987	493-18	「特殊な」					
II	7	7.3								5988	493-19	「ニュアンスを」					
II	7	7.3								5989	493-20	「あーない強とか」					
II	7	7.3								5990	493-21	「それが」					
II	7	7.3								5991	493-22	「ないよ」					
II	7	7.3								5992	493-23	「文の構造が」					
II	7	7.3								5993	493-24	「わかりにくい時が」					
II	7	7.3								5994	493-25	「探知する」					
II	7	7.3								5995	493-26	「探知するというのが」					
II	7	7.3								5996	493-27	「日本語は」					
II	7	7.3								5997	493-28	「言葉の」					
II	7	7.3								5998	493-29	「スート」					
II	7	7.3								5999	493-30	「簡潔なんだろう」				○	見解
II	7	7.3								6000	493-31	「思います。(3)「スライド取り替え」」					
II	7	7.3								6001	493-32	「で」	で				
II	7	7.3								6002	493-33	「さつぱり」					
II	7	7.3								6003	493-34	「先ほどですね」					
II	7	7.3								6004	493-35	「あー」					
II	7	7.3								6005	493-36	「さつぱり」					
II	7	7.3								6006	493-37	「中目の方からですね」					
II	7	7.3								6007	493-38	「あの」					
II	7	7.3								6008	493-39	「先生に對して」					
II	7	7.3								6009	493-40	「まあ」					
II	7	7.3								6010	493-41	「あなたという風に」					
II	7	7.3								6011	493-42	「あの」					
II	7	7.3								6012	493-43	「話しかける」					
II	7	7.3								6013	493-44	「話しかけるのは」					
II	7	7.3								6014	493-45	「日本語の報告」					
II	7	7.3								6015	493-46	「おん」					
II	7	7.3								6016	493-47	「あって」					
II	7	7.3								6017	493-48	「全く」					
II	7	7.3								6018	493-49	「その通りなんですけれども」				○	前提
II	7	7.3								6019	493-50	「でも」	でも				
II	7	7.3								6020	493-51	「あなたというのが」					
II	7	7															

話数						中心文						通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2		1/4の 統括機能	
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤	⑥				文中	文末	文中	文末		
7.3.7.3.2												6047	606-22	2種商品として						
7.3.7.3.2												6048	606-23	抑られる						
7.3.7.3.2												6049	606-24	その						
7.3.7.3.2												6050	606-25	ジャンプしたか						
7.3.7.3.2												6051	606-26	ワンスの						
7.3.7.3.2												6052	606-27	「[Suba] [ワバキ]」という						
7.3.7.3.2												6053	606-28	フライングが						
7.3.7.3.2												6054	606-29	あるわけですけども、						
7.3.7.3.2												6055	606-30	その						
7.3.7.3.2												6056	606-31	「[Suba] [ワバキ]」の						
7.3.7.3.2												6057	606-32	えっと、						
7.3.7.3.2												6058	606-33	ホームページが						
7.3.7.3.2												6059	606-34	取ってまわりますが						
7.3.7.3.2												6060	606-35	「[ワバキ]ウォーターで						
7.3.7.3.2												6061	606-36	あなたも						
7.3.7.3.2												6062	606-37	ワキ						
7.3.7.3.2												6063	606-38	ワキ最新情報						
7.3.7.3.2												6064	606-39	「[ワバキ]さんか、」という						
7.3.7.3.2												6065	606-40	顔です」						
7.3.7.3.2												6066	607-01	これ						
7.3.7.3.2												6067	607-02	もし						
7.3.7.3.2												6068	607-03	「あなたというのが						
7.3.7.3.2												6069	607-04	お礼をしますよ、						
7.3.7.3.2												6070	607-05	自分のために						
7.3.7.3.2												6071	607-06	お客様は						
7.3.7.3.2												6072	607-07	申慮して						
7.3.7.3.2												6073	607-08	強め暮っているような						
7.3.7.3.2												6074	607-09	子という						
7.3.7.3.2												6075	607-10	中身の車で						
7.3.7.3.2												6076	610-01	「僕をないはずですよ、」						
7.3.7.3.2												6077	608-01	「あなたの髪が						
7.3.7.3.2												6078	608-02	魅力的に仕上がって」						
7.3.7.3.2												6079	609-01	そんなような						
7.3.7.3.2												6080	609-02	言い方が						
7.3.7.3.2												6081	609-03	できるというのほ						
7.3.7.3.2												6082	609-04	これは						
7.3.7.3.2												6083	609-05	「あなたというのが						
7.3.7.3.2												6084	609-06	別に						
7.3.7.3.2												6085	609-07	本業は						
7.3.7.3.2												6086	609-08	お礼で済まない						
7.3.7.3.2												6087	609-09	「あなた様という						
7.3.7.3.2												6088	609-10	服装が						
7.3.7.3.2												6089	609-11	できるわけですから、						
7.3.7.3.2												6090	609-12	本業は						
7.3.7.3.2												6091	609-13	お礼ではないんですか、						見解
7.3.7.3.2												6092	609-14	思っています」						
7.3.7.3.2												6093	610-01	あの	あるいは、					
7.3.7.3.2												6094	610-02	これは						
7.3.7.3.2												6095	610-03	えっと、						
7.3.7.3.2												6096	610-04	あの						
7.3.7.3.2												6097	610-05	「めぞう一羽」いう						
7.3.7.3.2												6098	610-06	ペンダですけれど、						
7.3.7.3.2												6099	610-07	あのー						
7.3.7.3.2												6100	610-08	まあ						
7.3.7.3.2												6101	610-09	もし						
7.3.7.3.2												6102	610-10	ごめんなさい						
7.3.7.3.2												6103	610-11	メダはれご容赦というようになりますが、						
7.3.7.3.2												6104	610-12	あの						
7.3.7.3.2												6105	610-13	これは						
7.3.7.3.2												6106	610-14	えっと						
7.3.7.3.2												6107	610-15	最終巻ですね、						
7.3.7.3.2												6108	611-01	「めぞう一羽」いうのは						
7.3.7.3.2												6109	611-02	「はるかかなた						
7.3.7.3.2												6110	611-03	ペンダで						
7.3.7.3.2												6111	611-04	あのー						
7.3.7.3.2												6112	611-05	「一羽」という						
7.3.7.3.2												6113	611-06	アバウトが						
7.3.7.3.2												6114	611-07	あって、						
7.3.7.3.2												6115	611-08	え、						
7.3.7.3.2												6116	611-09	はい						
7.3.7.3.2												6117	611-10	アバウトが						
7.3.7.3.2												6118	611-11	あって、						
7.3.7.3.2												6119	611-12	それに						
7.3.7.3.2												6120	611-13	その						
7.3.7.3.2												6121	611-14	まあ						
7.3.7.3.2												6122	611-15	「僕をなんという、						
7.3.7.3.2												6123	611-16	あの						
7.3.7.3.2												6124	611-17	悪い						
7.3.7.3.2												6125	611-18	かん						
7.3.7.3.2												6126	611-19	女性の管理職さんが						
7.3.7.3.2												6127	611-20	あの						
7.3.7.3.2												6128	611-21	「僕をなんという、						前撮
7.3.7.3.2												6129	612-01	それに						
7.3.7.3.2												6130	612-02	そのー						
7.3.7.3.2												6131	612-03	「五代君(ごたいくん)という						
7.3.7.3.2												6132	612-04	大学生						
7.3.7.3.2												6133	612-05	え、						
7.3.7.3.2												6134	612-06	そのあと						
7.3.7.3.2												6135	612-07	あのー						
7.3.7.3.2												6136	612-08	えっと						
7.3.7.3.2												6137	612-09	「僕がさんに						
7.3.7.3.2												6138	612-10	なるんですけども、						前撮
7.3.7.3.2												6139	612-11	あの						
7.3.7.3.2												6140	612-12	えっと						
7.3.7.3.2												6141	612-13	ー						
7.3.7.3.2												6142	612-14	五代君が						
7.3.7.3.2												6143	612-15	あの						
7.3.7.3.2												6144	612-16	それに						
7.3.7.3.2												6145	612-17	「僕がさんにまでですね、						
7.3.7.3.2												6146	613-01	それで	そして、					
7.3.7.3.2												6147	613-02	えっと、						
7.3.7.3.2												6148	613-03	お互い						
7.3.7.3.2												6149	613-04	その						
7.3.7.3.2												6150	613-05	「僕がさんにという、						
7.3.7.3.2												6151	613-06	僕という、						

話数						中心文						通し 番号	CU番号	X単位	経路表現		1/2	1/3の 統括機能
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤	⑥				文中	文末		
7	3	7	3	3								6191	515-13	まあ				
7	3	7	3	3								6192	515-20	ごさい				
7	3	7	3	3								6193	515-21	玉作君にですわね				
7	3	7	3	3								6194	515-22	ほ				
7	3	7	3	3								6195	515-23	最終的に				
7	3	7	3	3								6196	515-24	さっさと				
7	3	7	3	3								6197	515-25	驚かれて				
7	3	7	3	3								6198	515-26	お互いは				
7	3	7	3	3								6199	515-27	話ばれちゃってすげえよ				
7	3	7	3	3								6200	515-28	その				
7	3	7	3	3								6201	515-29	えーと				
7	3	7	3	3								6202	515-30	話ばれちゃってすげえ				
7	3	7	3	3								6203	515-31	その				
7	3	7	3	3								6204	515-32	まあ				
7	3	7	3	3								6205	515-33	あの				
7	3	7	3	3								6206	515-34	お墓の前での				
7	3	7	3	3								6207	515-35	お墓				
7	3	7	3	3								6208	515-36	この				
7	3	7	3	3								6209	515-37	御一筋さんのお墓の前での				
7	3	7	3	3								6210	515-38	お墓なんですわね			○	前推
7	3	7	3	3								6211	517-01	で	で			
7	3	7	3	3								6212	517-02	その				
7	3	7	3	3								6213	517-03	響子さんほ				
7	3	7	3	3								6214	517-04	その				
7	3	7	3	3								6215	517-05	自分が				
7	3	7	3	3								6216	517-06	既視していた				
7	3	7	3	3								6217	517-07	母上の先生であった				
7	3	7	3	3								6218	517-08	かつてのパートナーである				
7	3	7	3	3								6219	517-09	御一筋さん				
7	3	7	3	3								6220	517-10	おいて		そして		
7	3	7	3	3								6221	517-11	また		また		
7	3	7	3	3								6222	517-12	あのー				
7	3	7	3	3								6223	517-13	自分が				
7	3	7	3	3								6224	517-14	今				
7	3	7	3	3								6225	517-15	聞いている				
7	3	7	3	3								6226	517-16	前作書という				
7	3	7	3	3								6227	517-17	新しい				
7	3	7	3	3								6228	517-18	パートナー				
7	3	7	3	3								6229	517-19	いずれにしても				
7	3	7	3	3								6230	517-20	あなたという				
7	3	7	3	3								6231	517-21	御一筋さん				
7	3	7	3	3								6232	517-22	おいてます				
7	3	7	3	3								6233	518-01	御一筋さん				
7	3	7	3	3								6234	518-02	あなたの消息				
7	3	7	3	3								6235	518-03	これから				
7	3	7	3	3								6236	518-04	お墓文(お墓)はまに				
7	3	7	3	3								6237	518-05	お返しして参ります				
7	3	7	3	3								6238	519-01	あの				
7	3	7	3	3								6239	519-02	響子さん				
7	3	7	3	3								6240	519-03	それね				
7	3	7	3	3								6241	519-04	無理に				
7	3	7	3	3								6242	519-05	お墓めぐり				
7	3	7	3	3								6243	520-01	いいの				
7	3	7	3	3								6244	520-02	これで				
7	3	7	3	3								6245	520-03	いいの				
7	3	7	3	3								6246	521-01	あなた				
7	3	7	3	3								6247	521-02	あなたに				
7	3	7	3	3								6248	521-03	お墓で				
7	3	7	3	3								6249	521-04	お墓に				
7	3	7	3	3								6250	521-05	良かった				
7	3	7	3	3								6251	522-01	という				
7	3	7	3	3								6252	522-02	これは				
7	3	7	3	3								6253	522-03	あの				
7	3	7	3	3								6254	522-04	お墓に				
7	3	7	3	3								6255	522-05	その				
7	3	7	3	3								6256	522-06	印象的な				
7	3	7	3	3								6257	522-07	お墓めぐり				
7	3	7	3	3								6258	522-08	お墓めぐりに				
7	3	7	3	3								6259	522-09	お墓めぐりに			○	前推
7	3	7	3	3								6260	522-10	お墓めぐりに				
7	3	7	3	3								6261	522-11	あなたという				
7	3	7	3	3								6262	522-12	お墓めぐりに				
7	3	7	3	3								6263	522-13	別に				
7	3	7	3	3								6264	522-14	お墓めぐりに				
7	3	7	3	3								6265	523-01	お墓	お墓			
7	3	7	3	3								6266	523-02	お墓				
7	3	7	3	3								6267	523-03	お墓めぐりに				
7	3	7	3	3								6268	523-04	お墓に				
7	3	7	3	3								6269	523-05	お墓めぐりに			○	前推(難題)
7	3	7	3	3								6270	523-06	お墓に				
7	3	7	3	3								6271	523-07	お墓めぐりに				
7	3	7	3	3								6272	523-08	お墓に				
7	3	7	3	3								6273	523-09	お墓に				
7	3	7	3	3								6274	523-10	お墓めぐりに				
7	3	7	3	3								6275	523-11	お墓めぐりに			○	前推(難題)
7	3	7	3	3								6276	524-01	ですから	ですから			
7	3	7	3	3								6277	524-02	お墓に				
7	3	7	3	3								6278	524-03	お墓に				
7	3	7	3	3								6279	524-04	お墓で				
7	3	7	3	3								6280	524-05	でも				
7	3	7	3	3								6281	524-06	その				
7	3	7	3	3								6282	524-07	お墓に				
7	3	7	3	3								6283	524-08	お墓めぐりに				
7	3	7	3	3								6284	524-09	お墓めぐりに				
7	3	7	3	3								6285	524-10	お墓に				
7	3	7	3	3								6286	524-11	お墓に				
7	3	7	3	3								6287	524-12	お墓めぐりに				
7	3	7	3	3								6288	524-13	お墓めぐりに				
7	3	7	3	3								6289	524-14	お墓に				
7	3	7	3	3								6290	524-15	お墓めぐりに				
7	3	7	3	3								6291	524-16	お墓に				
7	3	7	3	3								6292	524-17	お墓に				
7	3	7	3	3								6293	524-18	お墓に				
7	3	7	3	3								6294	524-19	お墓めぐりに				
7	3	7	3	3								6295	524-20	お墓に				
7	3	7	3	3								6296	524-21	お墓に				
7	3	7	3	3								6297	524-22	お墓に				
7	3	7	3	3								6298	524-23	お墓に				
7	3	7	3	3								6299	524-24	お墓に				
7	3	7	3	3								6300	524-25	お墓に				
7	3	7	3	3								6301	524-26	お墓に				
7	3	7	3	3								6302	524-27	お墓に				
7	3	7	3	3								6303	524-28	お墓に				
7																		

語彙						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2	1/3の 統括機能	
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤			文中	文末	文中	文末	
7	7.3	7.3.4									6335	626-13	私に対して				
7	7.3	7.3.4									6336	626-14	「あなたに」				
7	7.3	7.3.4									6337	626-15	す。				
7	7.3	7.3.4									6338	626-16	あのー				
7	7.3	7.3.4									6339	626-17	え。				
7	7.3	7.3.4									6340	626-18	あれ				
7	7.3	7.3.4									6341	626-19	誰か				
7	7.3	7.3.4									6342	626-20	誰かのほ。				
7	7.3	7.3.4									6343	626-21	相当				
7	7.3	7.3.4									6344	626-22	心理的に				
7	7.3	7.3.4									6345	626-23	感情が				
7	7.3	7.3.4									6346	626-24	何かをさす				
7	7.3	7.3.4									6347	626-25	思っています。(的)				
8	8.1										6348	627-01	で。	で。			
8	8.1										6349	627-02	えっ。				
8	8.1										6350	627-03	ほ。				
8	8.1										6351	627-04	「誰かのさなんですけれども、(スライスの)程を」			○	前提(読解)
8	8.1										6352	627-05	何かをほかに				
8	8.1										6353	627-06	変わる				
8	8.1										6354	627-07	人称、というこで				
8	8.1										6355	627-08	一応。				
8	8.1										6356	627-09	「一つの側を」				
8	8.1										6357	627-10	「ほけてください」				
8	8.1										6358	627-11	「何かのいいものを」				
8	8.1										6359	627-12	「思っています」				
8	8.1										6360	628-01	で。	で。			
8	8.1										6361	628-02	あのー				
8	8.1										6362	628-03	ちょっと				
8	8.1										6363	628-04	瞬間が				
8	8.1										6364	628-05	「ほくなってきましたので」				
8	8.1										6365	628-06	駆け足で				
8	8.1										6366	628-07	「行きますけれども」				
8	8.1										6367	628-08	「誰さんが」				
8	8.1										6368	628-09	「じゃ、」	「じゃ、」			
8	8.1										6369	628-10	えっ。				
8	8.1										6370	628-11	ほほ。				
8	8.1										6371	628-12	「どんなふうに」				
8	8.1										6372	628-13	上。				
8	8.1										6373	628-14	「ほっているかな、(という)ことを」				
8	8.1										6374	628-15	「理解してください」				
8	8.2	8.2.1									6375	629-01	「すは				
8	8.2	8.2.1									6376	629-02	比較的				
8	8.2	8.2.1									6377	629-03	あの。				
8	8.2	8.2.1									6378	629-04	男性が				
8	8.2	8.2.1									6379	629-05	よく				
8	8.2	8.2.1									6380	629-06	「ほっている				
8	8.2	8.2.1									6381	629-07	「自分(の)いいものを」				
8	8.2	8.2.1									6382	629-08	「誰かが」				
8	8.2	8.2.1									6383	629-09	「入ります」				
8	8.2	8.2.1									6384	630-01	で。	で。			
8	8.2	8.2.1									6385	630-02	あのー				
8	8.2	8.2.1									6386	630-03	言葉				
8	8.2	8.2.1									6387	630-04	「自分の(の)ほはですね」				
8	8.2	8.2.1									6388	630-05	あの。				
8	8.2	8.2.1									6389	630-06	自分自身では				
8	8.2	8.2.1									6390	630-07	「ほっている				
8	8.2	8.2.1									6391	630-08	印象を				
8	8.2	8.2.1									6392	630-09	「ほっていない				
8	8.2	8.2.1									6393	630-10	「ほは				
8	8.2	8.2.1									6394	630-11	「どう				
8	8.2	8.2.1									6395	630-12	「ほいようです」				
8	8.2	8.2.1									6396	631-01	もちろん。	もちろん。			
8	8.2	8.2.1									6397	631-02	「その				
8	8.2	8.2.1									6398	631-03	「シート				
8	8.2	8.2.1									6399	631-04	「ほは				
8	8.2	8.2.1									6400	631-05	自分の顔を				
8	8.2	8.2.1									6401	631-06	「ほは、(という)				
8	8.2	8.2.1									6402	631-07	「場合の」				
8	8.2	8.2.1									6403	631-08	「自分(の)ほは」				
8	8.2	8.2.1									6404	631-09	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6405	631-10	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6406	631-11	「代名詞に対して				
8	8.2	8.2.1									6407	631-12	「自分(の)				
8	8.2	8.2.1									6408	631-13	「ほは」				
8	8.2	8.2.1									6409	631-14	「自分のほは」				
8	8.2	8.2.1									6410	631-15	「ほは」				
8	8.2	8.2.1									6411	631-16	「単語(名詞)とほは、(という)ことを」				
8	8.2	8.2.1									6412	631-17	「それに」				
8	8.2	8.2.1									6413	631-18	「自分(の)				
8	8.2	8.2.1									6414	631-19	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6415	631-20	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6416	631-21	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6417	631-22	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6418	631-23	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6419	631-24	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6420	631-25	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6421	631-26	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6422	631-27	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6423	631-28	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6424	631-29	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6425	631-30	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6426	631-31	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6427	631-32	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6428	632-01	「ほは、(自己)	で。			
8	8.2	8.2.1									6429	632-02	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6430	632-03	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6431	632-04	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6432	632-05	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6433	632-06	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6434	632-07	「ほは、(自己)	ほは			
8	8.2	8.2.1									6435	632-08	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6436	632-09	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6437	632-10	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6438	632-11	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6439	632-12	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6440	632-13	「ほは、(自己)	でも、			
8	8.2	8.2.1									6441	632-14	「ほは、(自己)	「ほは、(自己)			
8	8.2	8.2.1									6442	632-15	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6443	632-16	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6444	632-17	「ほは、(自己)	「ほは、(自己)			
8	8.2	8.2.1									6445	632-18	「ほは、(自己)	「ほは、(自己)			
8	8.2	8.2.1									6446	632-19	「ほは、(自己)	「ほは、(自己)			
8	8.2	8.2.1									6447	632-20	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6448	632-21	「ほは、(自己)				
8	8.2	8.2.1									6449	632-22	「ほは、(自己)				</

話数					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2		1/4の 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
II	S	8.2	S.2.1.4							6479	535-02	また					
II	S	8.2	S.2.1.4							6480	535-03	まっとう					
II	S	8.2	S.2.1.4							6481	535-04	「何なん」でしよ					
II	S	8.2	S.2.1.4							6482	535-05	現場の仕事における					
II	S	8.2	S.2.1.4							6483	535-06	「自分」					
II	S	8.2	S.2.1.4							6484	535-07	「なあ」					
II	S	8.2	S.2.1.4							6485	535-08	「おままたま					
II	S	8.2	S.2.1.4							6486	535-09	「の前の					
II	S	8.2	S.2.1.4							6487	535-10	「うちですわね					
II	S	8.2	S.2.1.4							6488	535-11	「まっとう					
II	S	8.2	S.2.1.4							6489	535-12	「その					
II	S	8.2	S.2.1.4							6490	535-13	「ケーブルテレビが					
II	S	8.2	S.2.1.4							6491	535-14	「運に笑た					
II	S	8.2	S.2.1.4							6492	535-15	「人が					
II	S	8.2	S.2.1.4							6493	535-16	「いたんですけれど				○	前掲
II	S	8.2	S.2.1.4							6494	535-17	「その					
II	S	8.2	S.2.1.4							6495	535-18	「人は					
II	S	8.2	S.2.1.4							6496	535-19	「の					
II	S	8.2	S.2.1.4							6497	535-20	「自分という					
II	S	8.2	S.2.1.4							6498	535-21	「自分方を					
II	S	8.2	S.2.1.4							6499	535-22	「していました」					
II	S	8.2	S.2.1.4							6500	536-01	「私					
II	S	8.2	S.2.1.4							6501	536-02	「投資家に対して					
II	S	8.2	S.2.1.4							6502	536-03	「自分」					
II	S	8.2	S.2.1.4							6503	536-04	「言っていましたし					
II	S	8.2	S.2.1.4							6504	536-05	「直轄で					
II	S	8.2	S.2.1.4							6505	536-06	「上司で					
II	S	8.2	S.2.1.4							6506	536-07	「話しては語					
II	S	8.2	S.2.1.4							6507	536-08	「自分という					
II	S	8.2	S.2.1.4							6508	536-09	「自分方					
II	S	8.2	S.2.1.4							6509	536-10	「していました」					
II	S	8.2	S.2.1.4							6510	537-01	「ですから					
II	S	8.2	S.2.1.4							6511	537-02	「そういうふうな					
II	S	8.2	S.2.1.4							6512	537-03	「その					
II	S	8.2	S.2.1.4							6513	537-04	「たとえば					
II	S	8.2	S.2.1.4							6514	537-05	「あの					
II	S	8.2	S.2.1.4							6515	537-06	「会社から					
II	S	8.2	S.2.1.4							6516	537-07	「この					
II	S	8.2	S.2.1.4							6517	537-08	「人の					
II	S	8.2	S.2.1.4							6518	537-09	「この					
II	S	8.2	S.2.1.4							6519	537-10	「行っていました					
II	S	8.2	S.2.1.4							6520	537-11	「言われて					
II	S	8.2	S.2.1.4							6521	537-12	「派遣されて来るような					
II	S	8.2	S.2.1.4							6522	537-13	「そういう					
II	S	8.2	S.2.1.4							6523	537-14	「話					
II	S	8.2	S.2.1.4							6524	537-15	「投資家と					
II	S	8.2	S.2.1.4							6525	537-16	「の					
II	S	8.2	S.2.1.4							6526	537-17	「おままたま					
II	S	8.2	S.2.1.4							6527	537-18	「自分という					
II	S	8.2	S.2.1.4							6528	537-19	「人に					
II	S	8.2	S.2.1.4							6529	537-20	「自分という					
II	S	8.2	S.2.1.4							6530	537-21	「私					
II	S	8.2	S.2.1.4							6531	537-22	「自分という					
II	S	8.2	S.2.1.4							6532	537-23	「と					
II	S	8.2	S.2.1.4							6533	537-24	「使っているらしい」					
II	S	8.2	S.2.1.5							6534	538-01	「そして					
II	S	8.2	S.2.1.5							6535	538-02	「私が					
II	S	8.2	S.2.1.5							6536	538-03	「その					
II	S	8.2	S.2.1.5							6537	538-04	「おま					
II	S	8.2	S.2.1.5							6538	538-05	「やっています					
II	S	8.2	S.2.1.5							6539	538-06	「ゼミの男子学生が					
II	S	8.2	S.2.1.5							6540	538-07	「自分という					
II	S	8.2	S.2.1.5							6541	538-08	「使っていました」					
II	S	8.2	S.2.1.5							6542	538-09	「これ					
II	S	8.2	S.2.1.5							6543	538-10	「なぜかと					
II	S	8.2	S.2.1.5							6544	538-11	「謝らなくては					
II	S	8.2	S.2.1.5							6545	538-12	「おは					
II	S	8.2	S.2.1.5							6546	538-13	「まあ					
II	S	8.2	S.2.1.5							6547	538-14	「一					
II	S	8.2	S.2.1.5							6548	538-15	「その					
II	S	8.2	S.2.1.5							6549	538-16	「何で」					
II	S	8.2	S.2.1.5							6550	539-01	「知識の					
II	S	8.2	S.2.1.5							6551	539-02	「ある」					
II	S	8.2	S.2.1.5							6552	539-03	「学生の前の」					
II	S	8.2	S.2.1.5							6553	539-04	「で					
II	S	8.2	S.2.1.5							6554	539-05	「まあ					
II	S	8.2	S.2.1.5							6555	539-06	「自分という					
II	S	8.2	S.2.1.5							6556	539-07	「まあ					
II	S	8.2	S.2.1.5							6557	539-08	「昔話よ					
II	S	8.2	S.2.1.5							6558	539-09	「改まった					
II	S	8.2	S.2.1.5							6559	539-10	「その					
II	S	8.2	S.2.1.5							6560	539-11	「話					
II	S	8.2	S.2.1.5							6561	539-12	「自分という					
II	S	8.2	S.2.1.5							6562	539-13	「使った					
II	S	8.2	S.2.1.5							6563	539-14	「言っていますね」					
II	S	8.2	S.2.1.5							6564	540-01	「で					
II	S	8.2	S.2.1.5							6565	540-02	「つまり					
II	S	8.2	S.2.1.5							6566	540-03	「その					
II	S	8.2	S.2.1.5							6567	540-04	「まっとう					
II	S	8.2	S.2.1.5							6568	540-05	「自分という					
II	S	8.2	S.2.1.5							6569	540-06	「使われる					
II	S	8.2	S.2.1.5							6570	540-07	「おままたま					
II	S	8.2	S.2.1.5							6571	540-08	「おままたま					
II	S	8.2	S.2.1.5							6572	540-09	「あの					
II	S	8.2	S.2.1.5							6573	540-10	「まあ					
II	S	8.2	S.2.1.5							6574	540-11	「上下関係が					
II	S	8.2	S.2.1.5							6575	540-12	「はっきり					
II	S	8.2	S.2.1.5							6576	540-13	「して					
II	S	8.2	S.2.1.5							6577	540-14	「おま					
II	S	8.2	S.2.1.5							6578	540-15	「まあ					
II	S	8.2	S.2.1.5							6579	540-16	「わりと					
II	S	8.2	S.2.1.5							6580	540-17	「確信者が					
II	S	8.2	S.2.1.5							6581	540-18	「いて					
II	S	8.2	S.2.1.5							6582	540-19	「その					
II	S	8.2	S.2.1.5							6583	540-20	「確信者の					
II	S	8.2	S.2.1.5							6584	540-21	「話					
II	S	8.2	S.2.1.5							6585	540-22	「動くように					
II	S	8.2	S.2.1.5							6586	540-23	「自分という					
II	S	8.2	S.2.1.5							6587	540-24	「使っていますね」					
II	S	8.2	S.2.1.5							6588	541-01	「つまり					
II	S	8.2	S.2.1.5							6589	541-02	「まあ					
II	S	8.2	S.2.1.5							6590	541-03	「おま					
II	S	8.2	S.2.1.5							6591	541-04	「生まれて					
II	S	8.2	S.2.1.5														

話数					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		T/F		T/Fの 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6623	544-10	親慕な					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6624	544-11	ぞろろ					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6625	544-12	印象を					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6626	544-13	母までしまりやうなこともある。」					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6627	545-01	そうすると、					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6628	545-02	「うちのものを					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6629	545-03	使っても、					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6630	545-04	この					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6631	545-05	場には					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6632	545-06	おさわしくないよ					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6633	545-07	思った時に、					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6634	545-08	「自分の家のものを					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6635	545-09	使っちゃって、					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6636	545-10	ありそうなんですわ。」					見解
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6637	546-01	ですから、					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6638	546-02	私というものを					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6639	546-03	言葉だけ、					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6640	546-04	間に					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6641	546-05	出さないように					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6642	546-06	する時の					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6643	546-07	表現というのが					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6644	546-08	「自分です。」					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6645	547-01	これは、					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6646	547-02	別には					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6647	547-03	女性か					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6648	547-04	使っている					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6649	547-05	ケースも					
II	S	8.2	S.2.1	S.2.1.6						6650	547-06	あります。(2)「スライド切り替え」					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6651	548-01	安して、					そして、
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6652	548-02	う					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6653	548-03	一つは、					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6654	548-04	まあ、					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6655	548-05	文法的な					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6656	548-06	あるまじいとしてすけれど、					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6657	548-07	あの					たとえは、
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6658	548-08	「おとこは					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6659	548-09	引用の中に					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6660	548-10	出てくると					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6661	548-11	「母親が					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6662	548-12	自然だって					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6663	548-13	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6664	548-14	「おとこは					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6665	548-15	たとえは、					たとえは、
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6666	548-16	「佐藤さんは、					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6667	548-17	「申しさつから					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6668	548-18	「うう、					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6669	548-19	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6670	548-20	「おとこは					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6671	548-21	よく					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6672	548-22	「言ってくれる。」					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6673	549-01	本当は、					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6674	549-02	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6675	549-03	「おとこは					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6676	549-04	「言ってるのもおもしろいけど、					前権
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6677	549-05	「自分がよ					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6678	549-06	なることが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.1						6679	549-07	「おんなで、					補音
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6680	550-01	それから、					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6681	550-02	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6682	551-01	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6683	551-02	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6684	551-03	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6685	551-04	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6686	551-05	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6687	551-06	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6688	551-07	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6689	551-08	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6690	551-09	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6691	551-10	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6692	552-01	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6693	552-02	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6694	552-03	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6695	552-04	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6696	552-05	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6697	552-06	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6698	552-07	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6699	552-08	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6700	552-09	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6701	552-10	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6702	553-01	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6703	553-02	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6704	553-03	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6705	553-04	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6706	553-05	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6707	553-06	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6708	553-07	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6709	553-08	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6710	553-09	「おんなが					
II	S	8.2	S.2.2	S.2.2.2						6711	553-10	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6712	559-01	それから、					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6713	559-02	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6714	559-03	「おんなが					前権(話題)
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6715	559-04	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6716	559-05	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6717	559-06	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6718	559-07	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6719	559-08	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6720	559-09	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6721	559-10	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6722	559-11	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6723	559-12	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6724	559-13	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6725	559-14	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6726	559-15	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6727	559-16	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6728	559-17	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1						6729	559-18	「おんなが					
II	S	8.3	S.3.1	S.3.1.1													

話数						中心文				通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		7/8	1/8の 統括機能			
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤			文中	文末	文中	文末			
II	R	8.3	8.3	3							6767	663-21	使われてきました。」						
II	R	8.3	8.3	4							6768	664-01	ところが、	ところが、					
II	R	8.3	8.3	4							6769	664-02	ほほ、						
II	R	8.3	8.3	4							6770	664-03	あの、						
II	R	8.3	8.3	4							6771	664-04	部活生走れくわい、						
II	R	8.3	8.3	4							6772	664-05	つまり、	つまり、					
II	R	8.3	8.3	4							6773	664-06	そこに						
II	R	8.3	8.3	4							6774	664-07	いる						
II	R	8.3	8.3	4							6775	664-08	あつは、						
II	R	8.3	8.3	4							6776	664-09	あの、						
II	R	8.3	8.3	4							6777	664-10	あつは、						
II	R	8.3	8.3	4							6778	664-11	あつは、						
II	R	8.3	8.3	4							6779	664-12	あつは、						
II	R	8.3	8.3	4							6780	664-13	思うんですけど、				○	前提見解	
II	R	8.3	8.3	4							6781	664-14	あのー						
II	R	8.3	8.3	4							6782	664-15	あのー						
II	R	8.3	8.3	4							6783	664-16	あのー						
II	R	8.3	8.3	4							6784	664-17	あのー						
II	R	8.3	8.3	4							6785	664-18	部活生走れくわい、						
II	R	8.3	8.3	4							6786	664-19	あのー						
II	R	8.3	8.3	4							6787	664-20	あつは、						
II	R	8.3	8.3	4							6788	664-21	あつは、						
II	R	8.3	8.3	4							6789	664-22	あつは、						
II	R	8.3	8.3	4							6790	664-23	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6791	665-01	当時の新聞などでも、						
II	R	8.3	8.3	5							6792	665-02	取り上げられて、						
II	R	8.3	8.3	5							6793	665-03	ま、						
II	R	8.3	8.3	5							6794	665-04	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6795	665-05	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6796	665-06	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6797	665-07	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6798	665-08	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6799	665-09	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6800	665-10	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6801	665-11	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6802	665-12	あつは、					○	前提見解
II	R	8.3	8.3	5							6803	665-13	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6804	665-14	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6805	665-15	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6806	665-16	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6807	665-17	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6808	665-18	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6809	665-19	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6810	665-20	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6811	665-21	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6812	665-22	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6813	665-23	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6814	665-24	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6815	665-25	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6816	665-26	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6817	665-27	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6818	665-28	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6819	665-29	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6820	665-30	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6821	665-31	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6822	665-32	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6823	665-33	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6824	665-34	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6825	665-35	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6826	665-36	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6827	665-37	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6828	665-38	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6829	665-39	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6830	665-40	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6831	665-41	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6832	665-42	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6833	665-43	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6834	665-44	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6835	665-45	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6836	665-46	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6837	665-47	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6838	665-48	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6839	665-49	あつは、						
II	R	8.3	8.3	5							6840	665-50	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6841	665-51	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6842	665-52	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6843	665-53	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6844	665-54	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6845	665-55	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6846	665-56	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6847	665-57	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6848	665-58	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6849	665-59	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6850	665-60	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6851	665-61	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6852	665-62	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6853	665-63	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6854	665-64	あつは、						
II	R	8.3	8.3	6							6855	665-65	あつは、						
II	R	8.4									6856	665-66	あつは、						
II	R	8.4									6857	665-67	あつは、						
II	R	8.4									6858	665-68	あつは、						
II	R	8.4									6859	665-69	あつは、						
II	R	8.4									6860	665-70	あつは、						
II	R	8.4									6861	665-71	あつは、						
II	R	8.4									6862	665-72	あつは、						
II	R	8.4									6863	665-73	あつは、						
II	R	8.4									6864	665-74	あつは、						
II	R	8.4									6865	665-75	あつは、						
II	R	8.4									6866	665-76	あつは、						
II	R	8.4									6867	665-77	あつは、						
II	R	8.4									6868	665-78	あつは、						
II	R	8.4									6869	665-79	あつは、						
II	R	8.4									6870	665-80	あつは、						
II	R	8.4									6871	665-81	あつは、						
II	R	8.4									6872	665-82	あつは、						
II	R	8.4									6873	665-83	あつは、						
II	R	8.4									6874	665-84	あつは、						

話数						中心文						通し 番号	CU番号	X単位	確率表現		1/2		1/4の 統括機能		
①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	④	⑤	⑥				文中	文末	文中	文末			
II	S	S.4											6911	575-02	こっちが						
II	S	S.4											6912	575-03	友達と						
II	S	S.4											6913	575-04	約束が						
II	S	S.4											6914	575-05	あるんだ。」				○	前提	
II	S	S.4											6915	575-07	一人で						
II	S	S.4											6916	575-09	「行って来るよ。」						
II	S	S.4											6917	577-01	「こっちがこっちのは						
II	S	S.4											6918	577-02	こっち側はどっ						
II	S	S.4											6919	577-03	意味ではなくて						
II	S	S.4											6920	577-04	「私は」の意味で						
II	S	S.4											6921	577-05	「使われているんだぞうです。」				○	前提	
II	S	S.4											6922	578-01	「すずから	ですから、					
II	S	S.4											6923	578-02	まあ						
II	S	S.4											6924	578-03	元々						
II	S	S.4											6925	578-04	「こっち」というのは						
II	S	S.4											6926	578-05	「こっち」と						
II	S	S.4											6927	578-08	「使われる						
II	S	S.4											6928	578-07	「言葉ですの						
II	S	S.4											6929	578-08	「親の世界というの						
II	S	S.4											6930	578-09	「こっちの世界」						
II	S	S.4											6931	578-10	あの、						
II	S	S.4											6932	578-11	「子供の世界は						
II	S	S.4											6933	578-12	「こっちの世界」みたいな						
II	S	S.4											6934	578-13	「使われて						
II	S	S.4											6935	578-14	「親と						
II	S	S.4											6936	578-15	「子供の						
II	S	S.4											6937	578-16	「なんか						
II	S	S.4											6938	578-17	「お母さんの						
II	S	S.4											6939	578-18	「お母さんに						
II	S	S.4											6940	578-19	「使われて						
II	S	S.4											6941	578-20	「どうして						
II	S	S.4											6942	578-21	「言葉なのかない気がします。」						
II	S	S.4											6943	579-01	「その						
II	S	S.4											6944	579-02	「正確に						
II	S	S.4											6945	579-03	「あのー						
II	S	S.4											6946	579-04	「使われて						
II	S	S.4											6947	579-05	「使われて」に対しては						
II	S	S.4											6948	579-06	「あまり						
II	S	S.4											6949	579-07	「使われて」というところから、						
II	S	S.4											6950	579-08	「なんだと						
II	S	S.4											6951	579-09	「どうして」なのかないというふうに						
II	S	S.4											6952	579-10	「そのー」で						
II	S	S.4											6953	580-01	「これは、						
II	S	S.4											6954	580-02	「新しい						
II	S	S.4											6955	580-03	「言葉と						
II	S	S.4											6956	580-04	「言葉と						
II	S	S.4											6957	580-05	「使われて」(2)(スライド切り替え)						
II	S	S.5.S.1											6958	581-01	「それから、	それから、					
II	S	S.5.S.1											6959	581-02	「使われて」						
II	S	S.5.S.1											6960	581-03	「スティー						
II	S	S.5.S.1											6961	581-04	「父と						
II	S	S.5.S.1											6962	581-05	「毎日の生活、						
II	S	S.5.S.1											6963	581-06	「使われて						
II	S	S.5.S.1											6964	581-07	「使われて」だけれども、						
II	S	S.5.S.1											6965	581-08	「3人暮らしで						
II	S	S.5.S.1											6966	581-09	「使われて」と						
II	S	S.5.S.2											6967	582-01	「ところが、	ところが、					
II	S	S.5.S.2											6968	582-02	「あのー						
II	S	S.5.S.2											6969	582-03	「使われて」						
II	S	S.5.S.2											6970	582-04	「あのー						
II	S	S.5.S.2											6971	582-05	「使われて」という						
II	S	S.5.S.2											6972	582-06	「使われて						
II	S	S.5.S.2											6973	582-07	「使われて」でなくてもいいよ、(要)				○	補注	
II	S	S.5.S.2											6974	582-08	「あまり						
II	S	S.5.S.2											6975	582-09	「そのー						
II	S	S.5.S.2											6976	582-10	「父と						
II	S	S.5.S.2											6977	582-11	「毎日の生活、						
II	S	S.5.S.2											6978	582-12	「使われて」になってきています。」						
II	S	S.5.S.3											6979	583-01	「あのー						
II	S	S.5.S.3											6980	583-02	「使われて」	そして、					
II	S	S.5.S.3											6981	583-03	「使われて	おれ、					
II	S	S.5.S.3											6982	583-04	「あのー						
II	S	S.5.S.3											6983	583-05	「テレビのバラエティ番組で						
II	S	S.5.S.3											6984	583-06	「若い						
II	S	S.5.S.3											6985	583-07	「おれさんが						
II	S	S.5.S.3											6986	583-08	「使われて」						
II	S	S.5.S.3											6987	583-09	「お父さんが						
II	S	S.5.S.3											6988	583-10	「お母さんとして						
II	S	S.5.S.3											6989	583-11	「使われて」						
II	S	S.5.S.3											6990	584-01	「使われて、	ですから、					
II	S	S.5.S.3											6991	584-02	「どうして						
II	S	S.5.S.3											6992	584-03	「おれさん						
II	S	S.5.S.3											6993	584-04	「どうして						
II	S	S.5.S.3											6994	584-05	「使われて、						
II	S	S.5.S.3											6995	584-06	「使われて、						
II	S	S.5.S.3											6996	584-07	「おれさん						
II	S	S.5.S.3											6997	584-08	「使われて、						
II	S	S.5.S.3											6998	584-09	「使われて、						
II	S	S.5.S.3											6999	584-10	「使われて」でなくていいよ、						
II	S	S.5.S.3											7000	584-11	「使われて、						
II	S	S.5.S.4											7001	585-01	「また、	また、					
II	S	S.5.S.4											7002	585-02	「使われて、	あるいは、					
II	S	S.5.S.4											7003	585-03	「使われて、						
II	S	S.5.S.4											7004	585-04	「使われて、						
II	S	S.5.S.4											7005	585-05	「使われて、						
II	S	S.5.S.4											7006	585-06	「使われて、						
II	S	S.5.S.4											7007	585-07	「使われて、						
II	S	S.5.S.4											7008	585-08	「使われて、						
II	S	S.5.S.4											7009	585-09	「使われて、						
II	S	S.5.S.4											7010	585-10	「使われて、						
II	S	S.5.S.4											7011	585-11	「使われて、					○	要約
II	S	S.5.S.4											7012	585-12	「使われて、	つまり、					
II	S	S.5.S.4											7013	585-13	「使われて、						
II	S	S.5.S.4											7014	585-14	「使われて、						
II	S	S.5.S.4											7015	585-15	「使われて、						
II	S	S.5.S.4											7016	585-16	「使われて、						

語彙					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	語彙表現		7/8		1/8の 統括機能	
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末		
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.1							7055	S87-10	そーっと					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.1							7056	S87-11	あの					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.1							7057	S87-12	百貨文化研究所というところに					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.1							7058	S87-13	いた方がすけれども、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.1							7059	S87-14	いた方がすね					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.1							7060	S87-15	ソート					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.1							7061	S87-16	「家業内の味物の原則」というのを					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.1							7062	S87-17	誰か					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.1							7063	S87-18	20年代だったかな、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.1							7064	S87-19	に					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.1							7065	S87-20	出しています、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7066	S88-01	で、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7067	S88-02	どわいものか、というよ					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7068	S88-03	あのー					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7069	S88-04	目下の者は					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7070	S88-05	目下の者に					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7071	S88-06	名前で					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7072	S88-07	呼びかけられるが、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7073	S88-08	目下の者は					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7074	S88-09	目下の者に					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7075	S88-10	名前では					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7076	S88-11	呼びかけられず、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7077	S88-12	親戚を物々					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7078	S88-13	親戚を物々					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7079	S89-01	たとえば、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7080	S89-02	私が					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7081	S89-03	そーとー					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7082	S89-04	何で、と					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7083	S89-05	顔に対しては、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7084	S89-06	顔に対しては、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7085	S89-07	その					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7086	S89-08	下の娘					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7087	S89-09	真摯(まじ)まりっていいんですけれども、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7088	S89-10	たとえば、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7089	S89-11	「普通」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7090	S89-12	「普通」ということばでできます、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7091	S89-13	けれども、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7092	S89-14	「妹」とか					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7093	S89-15	「妹」というふうに					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7094	S89-16	「呼びかけることばでまますんよね、」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7095	S90-01	反対に、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7096	S90-02	娘のほからすると					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7097	S90-03	私のことを					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7098	S90-04	「手付け」というふうに					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7099	S90-05	「手付け」というふうに					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7100	S90-06	ます					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7101	S90-07	おいですね、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7102	S91-01	あのー					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7103	S91-02	ある、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7104	S91-03	「レジョシんちゃん」の「なまこ」というのは、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7105	S91-04	あれは					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7106	S91-05	別家ですわね、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7107	S91-06	ある、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7108	S91-07	ある、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7109	S91-08	それは					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7110	S91-09	あるわけ、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7111	S91-10	あれは					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7112	S91-11	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7113	S91-12	「お母さま」でいいんですわね、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7114	S91-13	「お母さま」でいいんですわね、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7115	S91-14	「お母さま」でいいんですわね、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7116	S91-15	あの、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7117	S91-16	「お父さん」とか、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7118	S91-17	「お父さん」とか、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7119	S91-18	「お父さん」とか、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7120	S91-19	まあ、					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7121	S91-20	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7122	S91-21	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7123	S91-22	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7124	S91-23	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7125	S91-24	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7126	S91-25	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7127	S91-26	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7128	S91-27	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7129	S91-28	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7130	S91-29	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7131	S91-30	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7132	S91-31	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7133	S91-32	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7134	S91-33	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7135	S91-34	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7136	S91-35	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7137	S91-36	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7138	S91-37	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7139	S91-38	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7140	S91-39	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7141	S91-40	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7142	S91-41	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7143	S91-42	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7144	S91-43	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7145	S91-44	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7146	S91-45	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7147	S91-46	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7148	S91-47	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7149	S91-48	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7150	S91-49	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7151	S91-50	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7152	S91-51	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7153	S91-52	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7154	S91-53	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7155	S91-54	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7156	S91-55	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7157	S91-56	「お母さま」					
II	S	8.6	S.6.1	S.6.1.2							7158	S91-57	「お母さま」					

話数					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	確認表現		T/F		T/Fの 統括機能
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末	
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7199	600-01	それから。					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7200	600-02	接客態化に伴ってですね。					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7201	600-03	わりと。					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7202	600-04	「人っ子というのが。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7203	600-05	「長いんですけども。」				○	前提
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7204	600-06	「おに。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7205	600-07	「お茶。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7206	600-08	「お茶。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7207	600-09	「朝うらになつたりするんですね。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7208	600-10	「あのー。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7209	600-11	「その。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7210	600-12	「目からねー。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7211	600-13	「その。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7212	600-14	「人っ子だった。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7213	600-15	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7214	600-16	「男の子であれば。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7215	600-17	「お茶あかした。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7216	600-18	「お茶あかしたんですけど。」				○	前提
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7217	601-01	「つまり。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7218	601-02	「ベットの側から。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7219	601-03	「目で。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7220	601-04	「お茶あかした。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7221	601-05	「お茶あかしたんですけども。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7222	601-06	「お茶あかしたんですけども。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7223	601-07	「面白い。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.2						7224	601-08	「現象です。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7225	602-01	「また。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7226	602-02	「あのー。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7227	602-03	「お茶あかした。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7228	602-04	「その。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7229	602-05	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7230	602-06	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7231	602-07	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7232	602-08	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7233	602-09	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7234	602-10	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7235	602-11	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7236	602-12	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7237	602-13	「おとさげ。」				○	前提
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7238	602-14	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7239	602-15	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7240	602-16	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7241	602-17	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7242	602-18	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7243	602-19	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7244	602-20	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7245	602-21	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7246	602-22	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7247	602-23	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7248	602-24	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7249	602-25	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7250	602-26	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7251	602-27	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.3						7252	602-28	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7253	603-01	「また。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7254	603-02	「あるいは。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7255	603-03	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7256	603-04	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7257	603-05	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7258	603-06	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7259	603-07	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7260	603-08	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7261	603-09	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7262	603-10	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7263	603-11	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7264	603-12	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7265	603-13	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7266	603-14	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7267	603-15	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7268	603-16	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7269	603-17	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7270	603-18	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7271	603-19	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7272	603-20	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7273	603-21	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7274	603-22	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7275	603-23	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7276	603-24	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7277	603-25	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7278	603-26	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7279	603-27	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7280	603-28	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7281	603-29	「おとさげ。」					
II	S	8.6	S.6.2.2	S.6.2.4						7282	603-30	「おとさげ。」					
III	9	9.1								7283	604-01	「で。」					
III	9	9.1								7284	604-02	「あのー。」					
III	9	9.1								7285	604-03	「おとさげ。」					
III	9	9.1								7286	604-04	「おとさげ。」					
III	9	9.1								7287	604-05	「おとさげ。」					
III	9	9.1								7288	604-06	「おとさげ。」					
III	9	9.1								7289	604-07	「おとさげ。」					
III	9	9.1								7290	604-08	「おとさげ。」					
III	9	9.1								7291	604-09	「おとさげ。」					
III	9	9.1								7292	604-10	「おとさげ。」					
III	9	9.1								7293	604-11	「おとさげ。」					
III	9	9.1								7294	604-12	「おとさげ。」					
III	9	9.1								7295	604-13	「おとさげ。」					
III	9	9.2								7296	605-01	「おとさげ。」					
III	9	9.2								7297	605-02	「おとさげ。」					
III	9	9.2								7298	605-03	「おとさげ。」					
III	9	9.2								7299	605-04	「おとさげ。」					
III	9	9.2								7300	605-05	「おとさげ。」					
III	9	9.2								7301	605-06	「おとさげ。」					
III	9	9.2								7302	605-07	「おとさげ。」					
III	9	9.2								7303	605-08	「おとさげ。」					
III	9	9.2								7304	605-09	「おとさげ。」					
III	9	9.2															

語彙					中心文					通し 番号	CU番号	X単位	語彙表現		1/2		1/3の 統括機能	
①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤				文中	文末	文中	文末		
III	9	9.3									7343	608-23	さらに					
III	9	9.3									7344	608-24	その					
III	9	9.3									7345	608-25	そのように					
III	9	9.3									7346	608-26	アイデンティティを					
III	9	9.3									7347	608-27	期用してですね					
III	9	9.3									7348	608-28	ある					
III	9	9.3									7349	608-29	キャラクター					
III	9	9.3									7350	608-30	そういう					
III	9	9.3									7351	608-31	あのー					
III	9	9.3									7352	608-32	マンガとか					
III	9	9.3									7353	608-33	アニメとかの					
III	9	9.3									7354	608-34	登場人物に					
III	9	9.3									7355	608-35	個性が					
III	9	9.3									7356	608-36	ある					
III	9	9.3									7357	608-37	話					
III	9	9.3									7358	608-38	話を付けるというようなことを					
III	9	9.3									7359	608-39	それをいってくださいます					
III	9	9.4									7360	609-01	それから	それから				
III	9	9.4									7361	609-02	それから					
III	9	9.4									7362	609-03	二つ目ですけれども					
III	9	9.4									7363	609-04	聞き手や					
III	9	9.4									7364	609-05	状況によっても					
III	9	9.4									7365	609-06	あのー					
III	9	9.4									7366	609-07	自分の					
III	9	9.4									7367	610-01	つまり	つまり				
III	9	9.4									7368	610-02	聞き手や					
III	9	9.4									7369	610-03	状況に合わせて					
III	9	9.4									7370	610-04	話すという一歩					
III	9	9.4									7371	610-05	します					
III	9	9.4									7372	611-01	それは					
III	9	9.4									7373	611-02	あのー					
III	9	9.4									7374	611-03	そうですね					
III	9	9.4									7375	611-04	目下の入					
III	9	9.4									7376	611-05	目下の人とか					
III	9	9.4									7377	611-06	その					
III	9	9.4									7378	611-07	場面が					
III	9	9.4									7379	611-08	どれくらい					
III	9	9.4									7380	611-09	改まっているのか					
III	9	9.4									7381	611-10	あるいは	あるいは				
III	9	9.4									7382	611-11	あのー					
III	9	9.4									7383	611-12	話し言葉か					
III	9	9.4									7384	611-13	書き言葉なのかとか					○ 前提【詳細】
III	9	9.4									7385	611-14	あるいは	あるいは				
III	9	9.4									7386	611-15	その時の					
III	9	9.4									7387	611-16	感情であるとか					
III	9	9.4									7388	611-17	そのしたものか					
III	9	9.4									7389	611-18	自分の選取に					
III	9	9.4									7390	611-19	影響を					
III	9	9.4									7391	611-20	及ぼすということです					
III	9	9.5									7392	612-01	それから	それから				
III	9	9.5									7393	612-02	最後ですけれども					
III	9	9.5									7394	612-03	それは					
III	9	9.5									7395	612-04	そのような					
III	9	9.5									7396	612-05	しか					
III	9	9.5									7397	612-06	選取という話					
III	9	9.5									7398	612-07	個人的なだけではなくて					
III	9	9.5									7399	612-08	家庭内の名称であっても					
III	9	9.5									7400	612-09	外から					
III	9	9.5									7401	612-10	あのー					
III	9	9.5									7402	612-11	幼稚園とか					
III	9	9.5									7403	612-12	小学校で					
III	9	9.5									7404	612-13	学んでくると					
III	9	9.5									7405	612-14	それが					
III	9	9.5									7406	612-15	影響					
III	9	9.5									7407	612-16	影響しにくるということがあってですね					
III	9	9.5									7408	612-17	その					
III	9	9.5									7409	612-18	選取が					
III	9	9.5									7410	612-19	時代とともに					
III	9	9.5									7411	612-20	変わってきて、					
III	9	9.5									7412	613-01	多くの人が					
III	9	9.5									7413	613-02	それが					
III	9	9.5									7414	613-03	選取をするようになるよ					
III	9	9.5									7415	613-04	そして	そして				
III	9	9.5									7416	613-05	その					
III	9	9.5									7417	613-06	言葉の選取が					
III	9	9.5									7418	613-07	なるほど					
III	9	9.5									7419	613-08	語彙の獲得と					
III	9	9.5									7420	613-09	合って					
III	9	9.5									7421	613-10	必然性を					
III	9	9.5									7422	613-11	並びようになると					
III	9	9.5									7423	613-12	たとえば	たとえば				
III	9	9.5									7424	613-13	自分とか					
III	9	9.5									7425	613-14	自分とか					
III	9	9.5									7426	613-15	もしかしたら					
III	9	9.5									7427	613-16	その					
III	9	9.5									7428	613-17	こっちとか					
III	9	9.5									7429	613-18	そういうようなものも					
III	9	9.5									7430	613-19	何かあっていく					
III	9	9.5									7431	613-20	可能性が					
III	9	9.5									7432	613-21	あるいはということになります					
III	10										7433	614-01	それでは	それでは				
III	10										7434	614-02	それで					
III	10										7435	614-03	終わります					
III	10										7436	615-01	ありがとうございました					
III	10										7437	616-01	（拍手）					

通し番号	語彙	中心文	X単位	①基礎文			②ノート			③インデュー																		
				GV	GV	GV	GV	GV	GV	GV	GV	GV																
				1%	5%	1%	5%	1%	5%	1%	5%	1%	5%															
				3.63	3.64	3.63	3.64	3.63	3.64	3.63	3.64	3.63	3.64															
				χ ²	χ ²	χ ²	χ ²	χ ²	χ ²	χ ²	χ ²	χ ²	χ ²															
				誤差	誤差	誤差	誤差	誤差	誤差	誤差	誤差	誤差	誤差															
				合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計															
4128	①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤													
4129	II	5	5.61	5.63	360-04	1	17.4	0.0	0.0	4	16.0	0.0	0.0	19	82.6	22.5	5.4	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64				
4130	II	5	5.61	5.63	360-05	4	17.4	0.0	0.0	4	16.0	0.0	0.0	19	82.6	22.5	5.4	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64				
4131	II	5	5.61	5.63	360-06	2	8.7	1.2	0.0	4	16.0	0.0	0.0	19	82.6	22.5	5.4	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64				
4132	II	5	5.61	5.63	370-05	3	13.0	0.3	0.0	3	12.0	0.5	0.0	20	87.0	26.8	7.7	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64				
4133	II	5	5.61	5.63	370-06	5	21.7	0.3	0.0	5	20.0	0.1	0.0	19	82.6	22.5	5.4	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64				
4134	II	5	5.61	5.63	370-07	2	8.7	1.2	0.0	2	8.0	1.5	0.0	17	73.9	14.9	7.7	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64				
4135	II	5	5.61	5.63	370-08	1	4.4	2.6	0.0	0	0	0	0	16	69.6	11.8	10.2	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64				
4136	II	5	5.61	5.63	370-09	1	4.4	2.6	0.0	2	8.0	1.5	0.0	18	78.3	18.5	10.2	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64				
4137	II	5	5.61	5.63	370-10	1	4.4	2.6	0.0	4	16.0	0.0	0.0	15	65.2	9.0	10.2	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64				
4138	II	5	5.61	5.63	370-11	2	8.7	1.2	0.0	3	12.0	0.5	0.0	16	69.6	11.8	10.2	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64				
4139	II	5	5.61	5.63	370-12	1	4.4	2.6	0.0	4	16.0	0.0	0.0	16	69.6	11.8	10.2	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64				
4140	II	5	5.61	5.63	370-13	1	4.4	2.6	0.0	1	4.0	3.0	0.0	20	87.0	26.8	7.7	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64				
4141	II	5	5.61	5.63	370-14	14	60.9	31.0	0.0	11	44.0	12.7	0.0	9	39.1	0.1	1.1	44.0	12.7	0.0	11	44.0	12.7	0.0	11	44.0	12.7	0.0
4142	II	5	5.61	5.63	370-15	6	26.1	1.3	0.0	11	44.0	12.7	0.0	9	39.1	0.1	1.1	44.0	12.7	0.0	11	44.0	12.7	0.0	11	44.0	12.7	0.0
4143	II	5	5.61	5.63	370-16	9	39.1	7.8	0.0	11	44.0	12.7	0.0	9	39.1	0.1	1.1	44.0	12.7	0.0	11	44.0	12.7	0.0	11	44.0	12.7	0.0
4144	II	5	5.61	5.63	371-03	8	34.8	5.0	0.0	11	44.0	12.7	0.0	9	39.1	0.1	1.1	44.0	12.7	0.0	11	44.0	12.7	0.0	11	44.0	12.7	0.0
4145	II	5	5.61	5.63	371-04	3	13.0	0.3	0.0	12	48.0	16.7	0.0	16	69.6	11.8	10.2	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4146	II	6	6.4	6.41	388-06	4	17.4	0.0	0.0	6	24.0	0.1	0.0	17	73.9	14.9	7.7	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4147	II	6	6.4	6.41	388-07	4	17.4	0.0	0.0	6	24.0	0.1	0.0	17	73.9	14.9	7.7	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4148	II	6	6.4	6.41	388-08	5	21.7	0.3	0.0	8	32.0	0.3	0.0	17	73.9	14.9	7.7	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4149	II	6	6.4	6.42	388-09	1	4.4	2.6	0.0	8	32.0	0.3	0.0	17	73.9	14.9	7.7	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4150	II	6	6.4	6.42	388-10	1	4.4	2.6	0.0	8	32.0	0.3	0.0	17	73.9	14.9	7.7	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4151	II	6	6.4	6.43	390-05	15	65.2	37.4	0.0	20	80.0	69.5	0.0	23	100.0	42.0	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4152	II	6	6.4	6.43	390-06	18	78.3	60.5	0.0	23	100.0	42.0	0.0	26	104.4	47.9	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4153	II	6	6.5	6.51	390-10	21	91.3	89.1	0.0	26	104.4	47.9	0.0	31	124.4	52.9	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4154	II	6	6.5	6.51	390-11	16	69.6	44.5	0.0	15	60.0	32.3	0.0	18	72.0	20.3	20.3	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4155	II	6	6.5	6.51	391-04	1	4.4	2.6	0.0	14	60.9	6.5	0.0	4	16.0	0.0	0.0	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4156	II	6	6.5	6.51	391-05	1	4.4	2.6	0.0	1	4.0	3.0	0.0	14	60.9	6.5	0.0	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4157	II	6	6.5	6.51	393-09	2	8.7	1.2	0.0	2	8.0	1.5	0.0	15	60.0	10.2	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4158	II	6	6.5	6.51	394-13	2	8.7	1.2	0.0	2	8.0	1.5	0.0	21	91.3	31.5	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4159	II	6	6.5	6.51	394-14	0	0	0	0	0	0	0	0	21	91.3	31.5	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4160	II	6	6.5	6.51	394-15	0	0	0	0	0	0	0	0	21	91.3	31.5	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4161	II	6	6.5	6.51	395-11	0	0	0	0	3	12.0	0.5	0.0	22	95.7	36.6	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4162	II	6	6.5	6.51	395-12	0	0	0	0	3	12.0	0.5	0.0	22	95.7	36.6	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4163	II	6	6.5	6.51	398-04	0	0	0	0	2	8.0	1.5	0.0	23	100.0	42.0	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4164	II	6	6.5	6.51	398-08	0	0	0	0	18	78.3	18.5	0.0	23	100.0	42.0	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4165	II	6	6.5	6.51	398-09	0	0	0	0	19	82.6	22.5	0.0	23	100.0	42.0	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4166	II	6	6.5	6.51	398-13	0	0	0	0	21	91.3	31.5	0.0	23	100.0	42.0	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4167	II	6	6.5	6.51	401-05	0	0	0	0	22	95.7	36.6	0.0	23	100.0	42.0	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4168	II	6	6.5	6.51	401-06	0	0	0	0	21	91.3	31.5	0.0	23	100.0	42.0	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4169	II	6	6.5	6.51	403-18	2	8.7	1.2	0.0	23	100.0	42.0	0.0	24	96.0	50.5	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4170	II	6	6.5	6.51	403-19	3	12.0	0.5	0.0	21	91.3	31.5	0.0	23	100.0	42.0	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4171	II	6	6.5	6.51	404-04	0	0	0	0	21	91.3	31.5	0.0	23	100.0	42.0	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4172	II	6	6.5	6.51	404-07	0	0	0	0	21	91.3	31.5	0.0	23	100.0	42.0	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4173	II	6	6.5	6.51	404-08	0	0	0	0	21	91.3	31.5	0.0	23	100.0	42.0	44.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	6.63	3.64	5	16.7	0.6	
4174																												

通し 番号	語彙					中心文					X単位	①契約文					②ノート					③インタビュー							
	①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤		GVJ 単語数	GVJ 熟語数	GVJ 合計	1% 6.63	5% 3.94	X ²	GVJ 単語数	GVJ 熟語数	GVJ 合計	1% 6.63	5% 3.94	X ²	GVJ 単語数	GVJ 熟語数	GVJ 合計	1% 6.63	5% 3.94	X ²
4859	II	6	6.6	6.6	3	母娘に列しては	421-09	6	2.1	1.3	36.0	3	3.6	6.3	多	37	148.0	162.7	多	多	多	多	6	24.0	2.0	9	30.0	9.0	多
4860	II	6	6.6	6.6	3	ママ	421-10	1	4.4	2.6	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4861	II	6	6.6	6.6	3	お母さん	421-11	1	4.4	2.6	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4862	II	6	6.6	6.6	3	お母さん	421-12	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4863	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	421-13	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4864	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	421-14	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4865	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	421-15	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4871	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	422-06	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4877	II	6	6.6	6.6	3	お母さん	422-03	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4889	II	6	6.6	6.6	3	お母さん	422-05	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4892	II	6	6.6	6.6	3	お母さん	422-30	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4930	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	425-31	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4943	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	426-13	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4944	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	426-14	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4987	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	427-43	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4993	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	428-03	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4994	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	428-04	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
4995	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	428-04	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5016	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	430-08	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5035	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	432-05	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5036	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	432-06	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5037	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	432-07	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5057	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	434-06	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5100	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	439-13	8	34.8	5.0	20.0	0.1	0	0	多	5	20.0	0.1	多	多	多	多	5	20.0	0.1	3	10.0	0.1	多
5101	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	439-14	8	34.8	5.0	20.0	0.1	0	0	多	5	20.0	0.1	多	多	多	多	5	20.0	0.1	3	10.0	0.1	多
5107	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	439-20	5	21.7	0.3	4.0	3.0	0	0	多	10	40.0	9.2	多	多	多	多	2	8.0	0.8	1	3.3	2.2	多
5108	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	439-21	5	21.7	0.3	4.0	3.0	0	0	多	10	40.0	9.2	多	多	多	多	2	8.0	0.8	1	3.3	2.2	多
5129	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	439-42	5	21.7	0.3	4.0	3.0	0	0	多	10	40.0	9.2	多	多	多	多	2	8.0	0.8	1	3.3	2.2	多
5130	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	439-43	5	21.7	0.3	4.0	3.0	0	0	多	10	40.0	9.2	多	多	多	多	2	8.0	0.8	1	3.3	2.2	多
5136	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	439-43	7	30.4	2.9	0	0	0	0	多	25	108.7	54.1	多	多	多	多	8	32.0	6.6	3	12.0	0.1	多
5137	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	440-06	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5143	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	440-07	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5144	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	440-13	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5145	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	440-14	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5145	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	440-15	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5146	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	440-16	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5188	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	443-04	8	34.8	5.0	20.0	0.1	0	0	多	5	20.0	0.1	多	多	多	多	5	20.0	0.1	3	10.0	0.1	多
5190	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	443-06	5	21.7	0.3	4.0	3.0	0	0	多	10	40.0	9.2	多	多	多	多	2	8.0	0.8	1	3.3	2.2	多
5194	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	443-10	9	39.1	7.8	0	0	0	0	多	23	92.0	46.6	多	多	多	多	9	36.0	9.9	6	20.0	1.7	多
5197	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	443-13	10	43.5	11.2	0	0	0	0	多	28	112.0	56.0	多	多	多	多	11	44.0	2.1	4	16.0	0.7	多
5212	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	444-05	9	39.1	7.8	0	0	0	0	多	23	92.0	46.6	多	多	多	多	9	36.0	9.9	6	20.0	1.7	多
5215	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	444-08	2	8.7	1.2	1.6	0.0	0	0	多	4	16.0	0.0	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5218	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	444-11	2	8.7	1.2	1.6	0.0	0	0	多	4	16.0	0.0	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5221	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	444-14	9	39.1	7.8	0	0	0	0	多	23	92.0	46.6	多	多	多	多	9	36.0	9.9	6	20.0	1.7	多
5222	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	444-15	0	0	0	0	0	0	0	多	19	82.6	22.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5224	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	444-17	1	4.4	2.6	0	0	0	0	多	14	60.9	6.5	多	多	多	多	3	12.0	0.1	2	6.7	0.8	多
5228	II	6	6.6	6.6	3	お父さん	444-21	0	0	0	0																		

文段	段落	文	本文	接続表現		ノダの表現形式				ノダの統括機能								
				文頭	文中	文末	前方統括機能			後方統括機能			後方被統括機能					
							換言	結論	見解	概略	補注	原因	前置き	前提 (課題)	前提 (話題)			
11	11.3	101	303															
11	11.3	101	304															
11	11.4	102	305															
11	11.4	102	306															